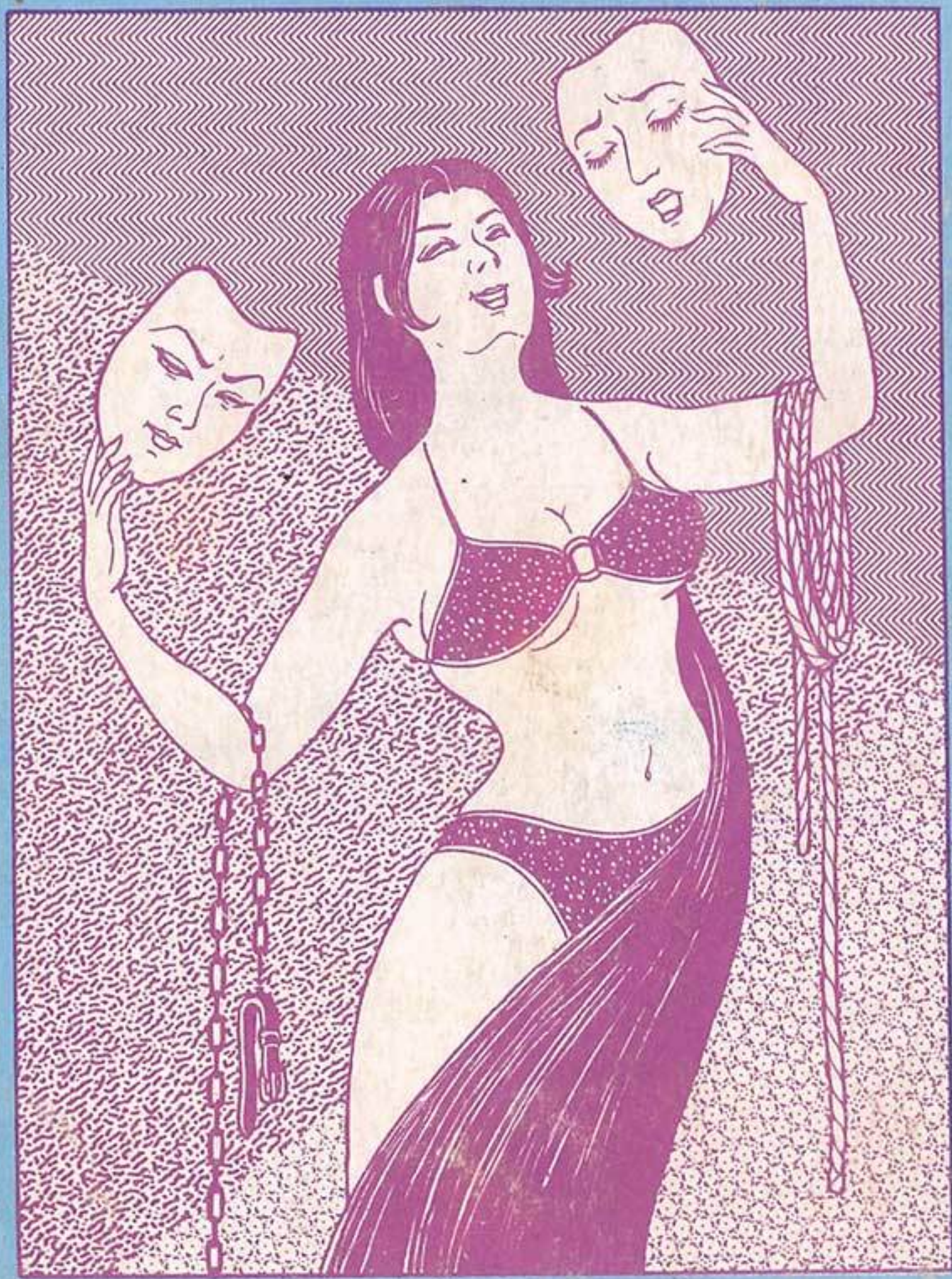


奇譚クラス

7 月号



新しい風俗文献誌

1973・7

昭和四十八年 六月二十日印刷 昭和四十八年 七月一日発行 七月号(第二十七巻第七号) 毎月一回一日発行 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十一日国鉄大島特別扱承認証第一〇号

極彩色のカラーで描く
五人のM女の美しき生態

可憐な近代の姿態の深田菊子。純情で素人っぽい笠井奈保子。お侠やんで陽気な福井桃子。妖艶な芸者福竜の松本たえ。飼育済みのMマダム江口淑子。五人の個性あるM女たちの生躍した大形のネガカラーによる、極めて鮮明にキヤッチしました。自然のまの生々しい再現しました。リントの下に再現しました。どの、肉迫的にも画面に盛り上げるほして、貴重的な資料の作成に努めて貰いました。カメラは誌上の『力メラとペン』のルポルタージュで、お馴染みの塚本鉄三氏です。白黒写真では物足りなく、是非この新しい発表を機会に貴方は、コレクショナルの一端にお加え下さい。素晴し満足されることでしょう。必ずや御ラ―に福井桃子さんの臨月腹の力て必ずや稀少価値を発揮することと思ひます。カラ―プリントの大さきはRサイズ(8cm×12cm)で大型のコダックネガカラーからプリントしましたので鮮明度も発色も断然素晴らしいものであります。五人のM女のカラーにてお楽しみ下さい。

カラ―三枚一組 一〇〇〇円
深田 菊子 略号△ある▽
る可憐で美しい女体も、縛られて
こんなあどけない表情なのです。

カラー三枚組 一〇〇〇円
 深田 菊子 略号△あり
 真白い肌をぐっとくびる斑ら紐
 の美しいコントラストは惨虐のな
 かに甘いムードを盛りあげる。

カラ一三枚一組 一〇〇〇円
福井桃子 略号△あや▽
各種の浣腸器を前にして大の字
に正面開股したマダムと後手高手
小手に縛られた。

カラ―三枚一組 一〇〇〇円
笠井奈保子 略号△あむ▽
すぐ赤面する恥かしがり屋の奈
保子が大好きな縄で縛られるとい
うナマナマしい色彩の中の羞恥。

大 手 札 三 枚 一 組 一 〇 〇 〇 円
笠 井 奈 保 子 略 号 〆 あ も 〱
原 色 的 な 配 色 の 中 心 に 全 裸 の 肌
に 腋 毛 も あ ら わ に 繰 り 展 げ ら れ る
緊 縛 と 羞 恥 の か も し だ す 饗 宴 。

笠井奈保子
カラー三枚一組
略号△あめ▽
縄にくびられた乳房の先のグミ
のような乳首もピンク色に染まり
全裸を晒して縛られた美麗な女体

笠井奈保子 略号△あみ▽
 噛まされた豆絞りの猿轡にうめ
 き思わず開股する女体の息づまる
 ような迫真的な色美しきシーン。

松本たえ 略号△あき▽
芸者福竜が全裸にひん剥かれて
三種三様の縄にて変った縛りをさ
れ、そのM性を露呈してゆく。

松本 たえ 略号／あい▽
如何なる強烈な責めにも耐える
というM女の繊細な裸身を嚴重に
縛りあげて執拗にいたぶり抜く。

便々たる太鼓腹を

もうこれ以上大きくはならない
という思いきり突きた太鼓腹

カラ―三枚一組 一〇〇〇円
福井 桃子 略号△あれ▽
丸々と極めて美しい線を見せた
妊孕腹をツンと突き出させて非情
な縄は妊婦の裸身にからみつく。

手しいの出 福カラ
小の産 井一
縛に、間 桃三
り、際 の 子枚
が更 の 一
肌、の 便 組
を、々 々
痛 目 々
め 目 々
つ 也 々
け 蛙 々
る。 腹 々
。 だ 々
後 だ 々
手 だ 々
高 だ 々

カラー二枚組 八〇〇円
江口淑子 略号△あお▽
強烈な海老責めと伸した後手を
逆に吊り上げた姿態のなかに、あ
れもないM女の秘密があった。

カラ一組 八〇〇円
江口 淑子 略号△あわ▽
厳しい縄目で裸身をさいなまれ
る苦痛も彼女にとっては何事であ
らうか。

倍野郵便局私書箱第14号天星社へ
略号記入の上、御注文下さい。送
料当方負担にて急送いたします。

本誌愛読の女性の方々へ

○本誌創刊以来二十数年、多くの女性愛読者の方々の告白の投稿やモデルの応募によって数多くの貴重な作品が誌上を賑わし、風俗文獻誌としての絢爛たる金字塔を、打ち樹てまいりました。真摯で研究熱心な本誌読者の方々の期待に、応えて写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか御遠慮なく勇気を出して御応募下さるよう、お待ちしております。

○本誌愛読の女性の方でしたら、国籍、未婚の別、年齢など一切問いませんから、遠近に拘らずお申込み願います。採用させて頂いた方には、謝礼として一回につき壹万円以上拾万円まで、即金にてお払い致します。

○応募されました方々の個人的な秘密の漏洩は、御本人の許しがない限り絶対しません。故、御安心の上、御応募下さい。尚、告白文をお書き下さった際は、別原稿料を、資料を提下さった方には、謝礼を併せて、お支払い致します。尚、お申込みの節、お好みの傾向などを出来るだけ詳しくお書き添え下されば幸甚に存じます。

○撮影いたしました写真は、誌上掲載を原則とはしておりますが、若し御都合によって発表を望まれな場合は、その旨添記下されば改めて打ち合わせしたいと思ひます。助手や介添えとしての出演、若しくは編集部資料作成について、のプレイ出演などの役に任じて頂きたいと思ひます。その際の報酬は、改めて個々に御相談に応じたいと思ひます。

○御応募に際しては、年齢、職業、身長、体重などは必ずお書き添え願ひます。写真があれば同封下されば好都合ですが、お手元に適当なものがないければ結構です。

。申込先。大阪市住吉郵便局私書箱第41号

▽賞金△

| | | | |
|--------|-----|------|-----|
| 入選作品 | 第一席 | 二十萬円 | 1篇 |
| 入選作品 | 第二席 | 十萬円 | 1篇 |
| 入選作品 | 第三席 | 五萬円 | 3篇 |
| 入選作品 | 第四席 | 三萬円 | 5篇 |
| 入選作品 | 第五席 | 二萬円 | 10篇 |
| 佳作優秀作品 | | 一萬円 | 15篇 |
| 選外佳作作品 | | 五千円 | 10篇 |

▽
内
容
△

一、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ奇譚クラブという題号のもとに発行を続け、ここに三百号の多きを数えるに至りました。その間、風俗雑誌のパイオニアとしての幾多の辛酸を具に嘗めながら、読者の皆様の温かき御支援によって、二十数年の厳しい星霜をよく耐えて今日に至りました。

一、本誌は異色ある風俗文獻誌として生長してまいりましたが、今まで読者の方々の投稿による数多くの傑作や力作が春の花のように咲き乱れ、S M 文獻誌としての本誌の真価がいやが上にも高められて参りました。この三、四百号発刊を記念して、更に一層の内容の充実と清新化を計りたく、皆様の作品に期待して、原稿募集を企画しました。

一、内容は本誌に発表するにふさわしいものであれば、どのような傾向のものでも結構です。例を挙げれば、傾向の自由なもので構いません。各種マゾヒズムに關連したもの、同性愛、切腹嗜好、各種美女、闘美、女相撲、変装、珍奇異色風俗、特異風俗、習慣、紹介、風俗、変装、珍奇異テクニクなど、古今東西を問わず異色文獻に属するものを取り上げて下さい。

▽規
定△

一、形式は小説、創作、読物などのフィクション、インクでも告白、体験、手記のようなシヨークインも結構です。見るに、実見談やレポート、写真、ルポルタージュなど大歓迎。致しませう。写真、画、参考資料などがあれば添布下さい。論説、意見、戯曲戻の求めに応じて、手紙、随筆、シンリオ、戲曲ツセイ、感想、手紙、隨筆、論説、意見、戯曲なども如何なる形式のものでも最も得意とされ、模倣とか亜流は絶対排斥して下さい。幾多のS M作家を輩出させて本作に限りません。野心的のある読者の登竜門として誌の誌面を野心のある読者の方へ試みて下さい。

一、応募作品は、すべて未発表の自作品に限
り、応募作品は、必ず二百字以上、四百字以
稿用紙を御利用願います。枚数は三十枚以上
三百枚迄に制限致します。入選と同時に規定の
一、入選作品は出来るだけ早く誌上に掲載し
入選と同時に規定の賞金を贈呈致します。尚
掲載の際、発表に支障ありと思われ、個所を
削除することありますので、予め御承願を
ます。原稿は原則として返戻は申上げません
故、原稿御入用の方は前もってコピーをと
つておいて下さるようお願い致します。
一、懸賞応募作品は一般応募原稿、読者原稿
と区別するため、第一頁に「懸賞」と書き
下さい。ペンネーム、匿名は自由ですが、
住所（又は連絡先）は必ずお書き願います。
応募者の氏名を公開したり他へ洩したりなど
は絶対に致しません故、御安心下さい。永続
性のある奇巧に作品を発表して、貴方の力量
と手腕を、どうか發揮して下さい。
一、原稿の送付先は、大阪市住吉郵便局私書
箱第四十一号、暁出版株式会社編集部宛、必
ず郵送（第一種便）して下さい。直接の訪問
並に持込みは固くお断わり致します。

奇蹟クラブ 昭和四十八年 六月二十日印刷 昭和四十八年 七月一日発行 七月号(第二十七卷第七号)毎月一回一日発行 昭和三十一年四月二十日 第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十一日 国鉄大局特別扱承認誌第一二〇号

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatukishuppan

Osaka Japan



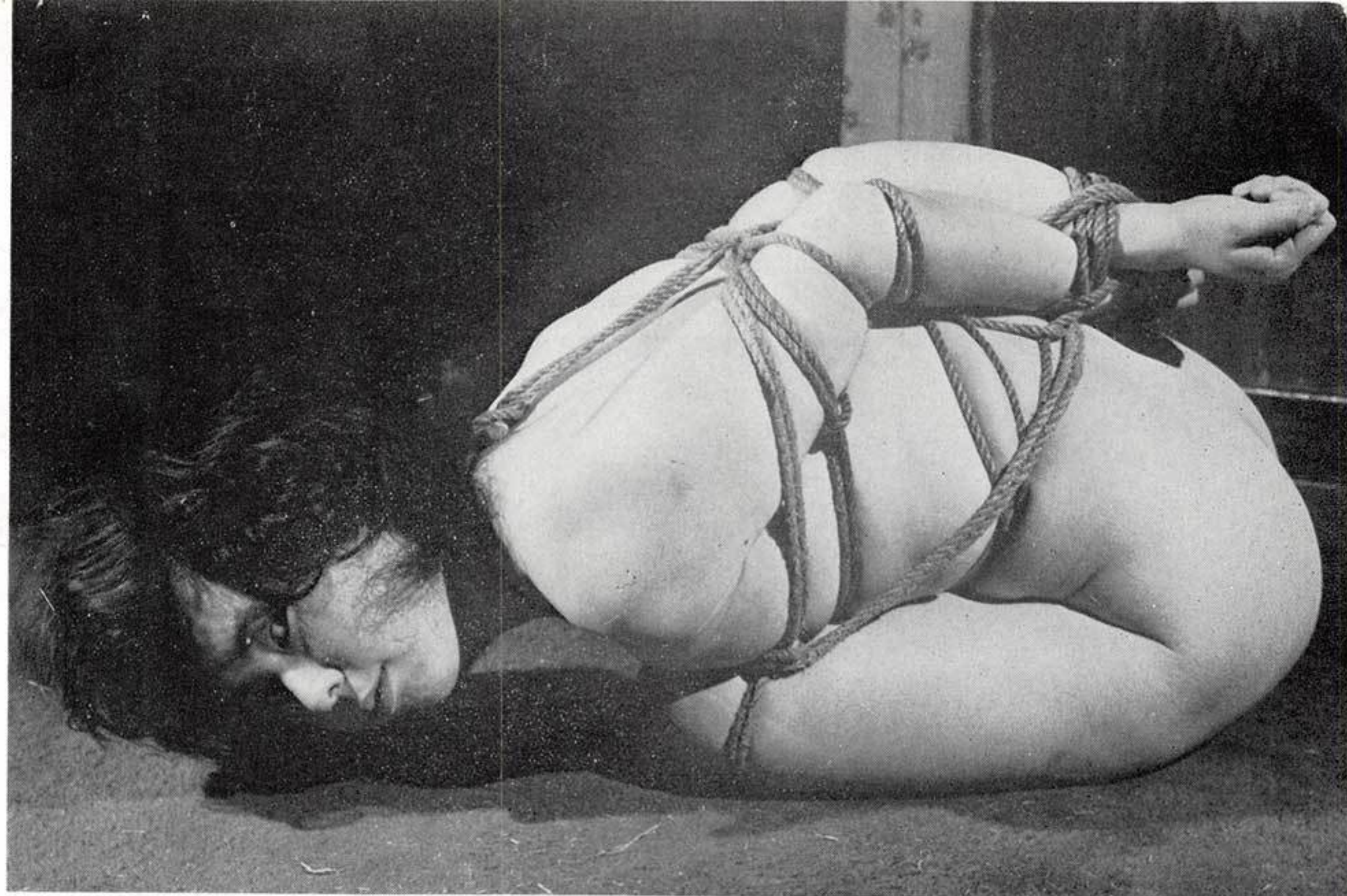
美と緊縛の祭典

〔塚本鉄三・撮影〕

柱の宙縛り

＜前田真知子＞





七月号目次

△昭和四十八年▽

△第二十七卷Ⅱ第七号Ⅱ通刊第三〇五号▽

本

文

| | | | |
|--|-----------|--------|-------|
| フォト「豊満さの魅力」 | △笠井奈保子▽ | 古谷由美男 | (21) |
| SMプレイに関する二、三の考察 | ……十 | 大介 | (22) |
| 手記『Mの性に泣く私』 | …… | 木村 洋子 | (32) |
| 自伝的SM小説「双八郎の童貞時代」 | …… | 加沢 雄作 | (42) |
| 体験記「アヌスから酒を飲まされて」 | …… | 三木 令子 | (50) |
| 連載・奴隷妻小説『命預けます』 | (9)…… | 柴 利好 | (52) |
| マゾ談義考△マゾヒストの心情分析▽ | …… | 小川 左門 | (69) |
| SM体験記「あるマンションで泣く裕子」 | 最上 | 卓也 | (72) |
| 連載・S大河小説 パロディ『花と蛇』 | (19)…… | 山光 純 | (80) |
| 告白「お百度参り」の責め | …… | 佐藤 幸子 | (89) |
| M体験小説『亜矢様をめぐる不思議な夜』 | (3) 沢井 | 和雄 | (92) |
| SMレズ体験ルポ「愛しの風船妊婦」 | …… | 高原 薫 | (112) |
| 連載小説「大噴火」 | △第五十八回▽…… | 千葉 青鬼 | (120) |
| セミ・ドキュメント 「あたしの演じたLIV・SHOW」 | …… | 長谷田真知子 | (128) |
| 「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ △前田真知子の巻▽ 『澄んだ眸の奥にあるもの』 | …… | 塚本 鉄三 | (136) |
| パロディ「花と蛇」 「人獣交婚「犬と人との性」」 | …… | 小杉 千恵 | (164) |
| 連載・時代S小説『紫蘭の門』 | (23)…… | 風流極道軒 | (168) |

橘房由氏の提言を追及する……竹迫 誠也
 フォト「妻」初縛りの記……舟橋 一郎
 拙作をお見せします……伊勢 国男
 六月号感想 愛読者のメモ……石齒 順吉
 「磔」写真「春の嵐」……中津 浩
 夫婦交換プレイを願って……早坂 信治
 菱縄の果報 やさしい拷問……早木 夢二
 サロン落穂抄(四)
 「街で拾ったSM」……塚本 鉄三
 通信 愛妻縛り初撮影の弁……浜野 恵次
 アーヌスの君への囁き……杉本 弘志
 寸評 玉木章子礼賛……金沢 十三

この詩のモデルに捧げる詩……南原 赤秋
 私はストリップパーなの……青空まゆみ
 SMの「浣腸」と「排泄」……赤沢 真彦
 わびしい夜明け……今 比徒里
 自縛のキミへのラブレター……野村 造二
 「前田真知子」雑感……田村 毅志
 通信 私のペット飼育法……甲斐千恵子
 イメージ画「セットで……」三鷹I・O
 短信往来 女奴隷の苛め方……若木 一夫
 イメージ画「連繫縛り」……黒田 縛
 猿轡通信に寄せて……青木 順一
 編集部だより……編集部

柱の宙縛り☆澄んだ眸の麗人☆
 逆エビに弄ぶ☆縄目を調べる☆……前田真知子
 抒情詩的な肢体(2葉)
 猪吊りの女体☆大の字逆さ吊り……左近麻里子
 片足吊りの序曲……中河 恵子
 快い疲れ☆華やかな饗宴☆責め
 甲斐ある女☆思わずのけぞっち……松本 たえ
 やった☆悦虐にむせぶ
 さあ、どうでもして……深田 菊子
 下半身は羞恥責め……笠井奈保子
 いたぶられる幻想☆股間縛りに……西条 紀代
 悶える☆菱縄に縛る……荒尾 慶子
 海老縛りにも耐える……高村 浩子
 初縛りの頃☆Mのサガにむせぶ……富田由美子
 妊婦のSMプレイ☆大の字に晒
 した妊婦……座間 明子
 肉体美と緊縛☆豊満の魅力……梨花悠紀子
 オシメカバーで辱かしめる……福井 桃子
 浣腸後の苦悶☆長髪裸女縛り……

| | | | |
|--|-----------------|------------|-------|
| M 派交友録 (40) | 「グラマーな猛女」…………… | 鬼山 絢策…………… | (182) |
| S 小説 残酷スター誕生 | 第三部…………… | 久留木 栄…………… | (198) |
| 告白「とき子の自縛日記」…………… | 山口とき子…………… | | (210) |
| 「耽奇房」我楽多控 (4) | | | |
| 『逆吊漫考』△その1▽…………… | 辻村 隆…………… | | (218) |
| 読者通信…………… | 編集部選…………… | | (266) |
| イメージギャラリーII「熱い悦楽」須坂旭 (27)・「番犬?」岡たかし (47)・「お呼びまでの時間」志羽利也 (57)・「迫る熱涙」須坂旭 (63)・「山峡のせせらぎ」春川ナミオ (70)・「特別個人教育」岡たかし (84)・「風前の灯」市原幸三郎 (87)・「華やかでシヨ」須坂旭 (132)・「青春の羞悦記録」志羽利也 (173)・「女囚吟味役優等生」岡たかし (177)・「新型トマリ木」春川ナミオ (186)・「靴ムレ清拭」岡たかし (190)・「新型ブランコ」春川ナミオ (194)・「こだまする悲鳴」市原幸三郎 (202)・「情緒」岡たかし (213)・「重い乳房」須坂旭 (206)・「記録へチヤレンジ」志羽利也 (217) | | | |
| 目次 フォト…………… | 前田真知子・深田菊子…………… | | |



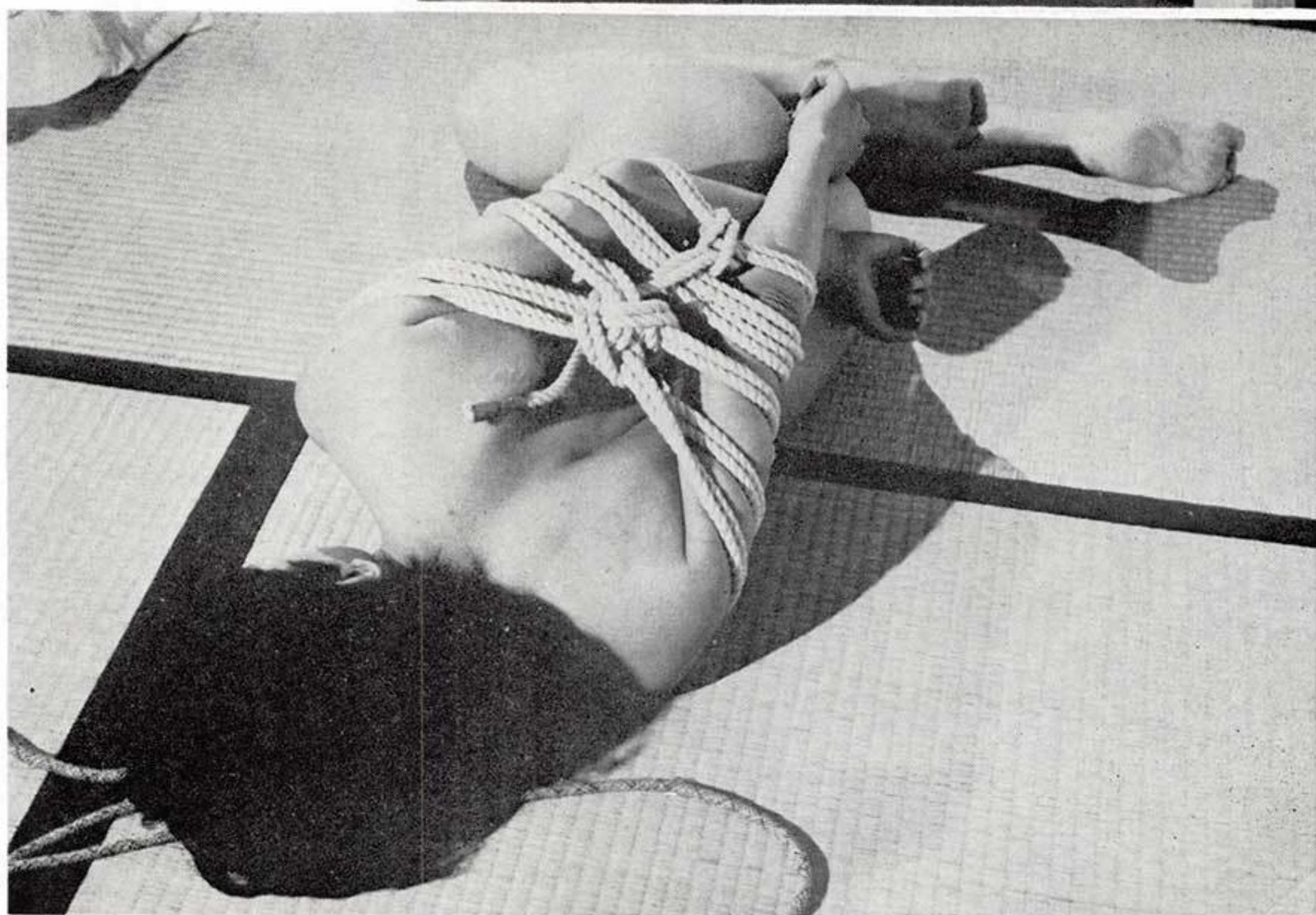


猪吊りの女体

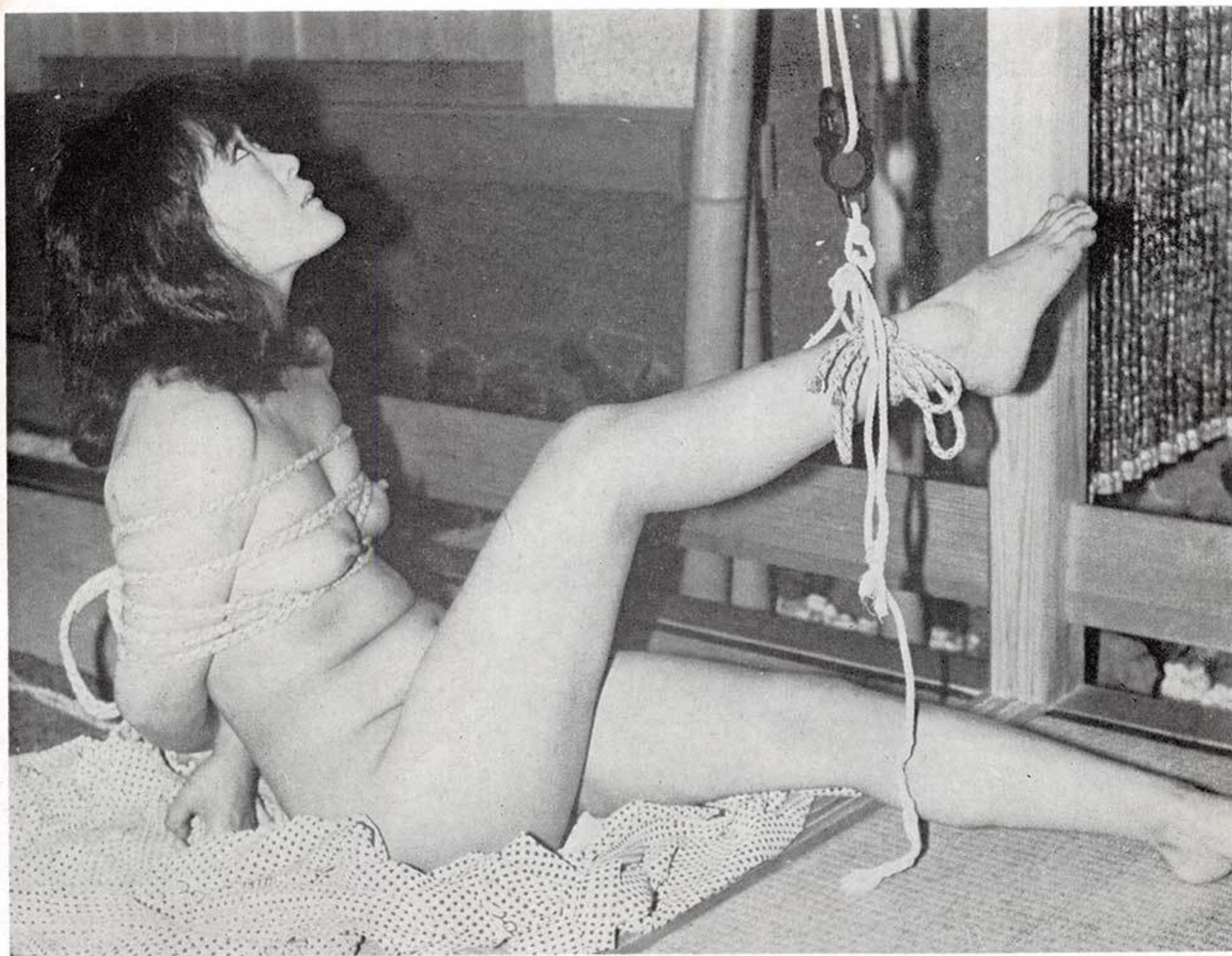
△左近麻里子▽

片足吊りの序曲

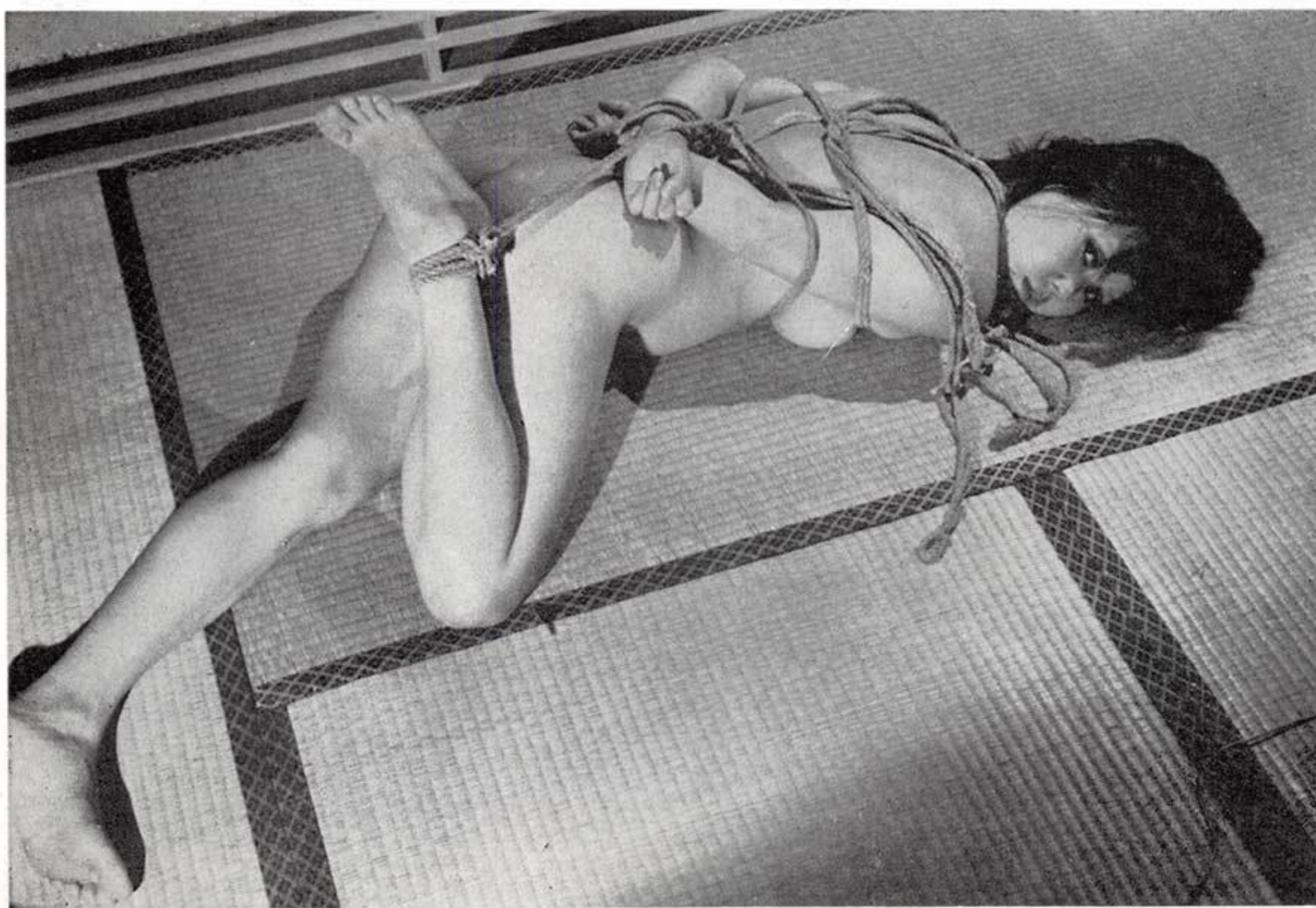
△中河恵子▽



快い疲れ……………△松本たえ▽

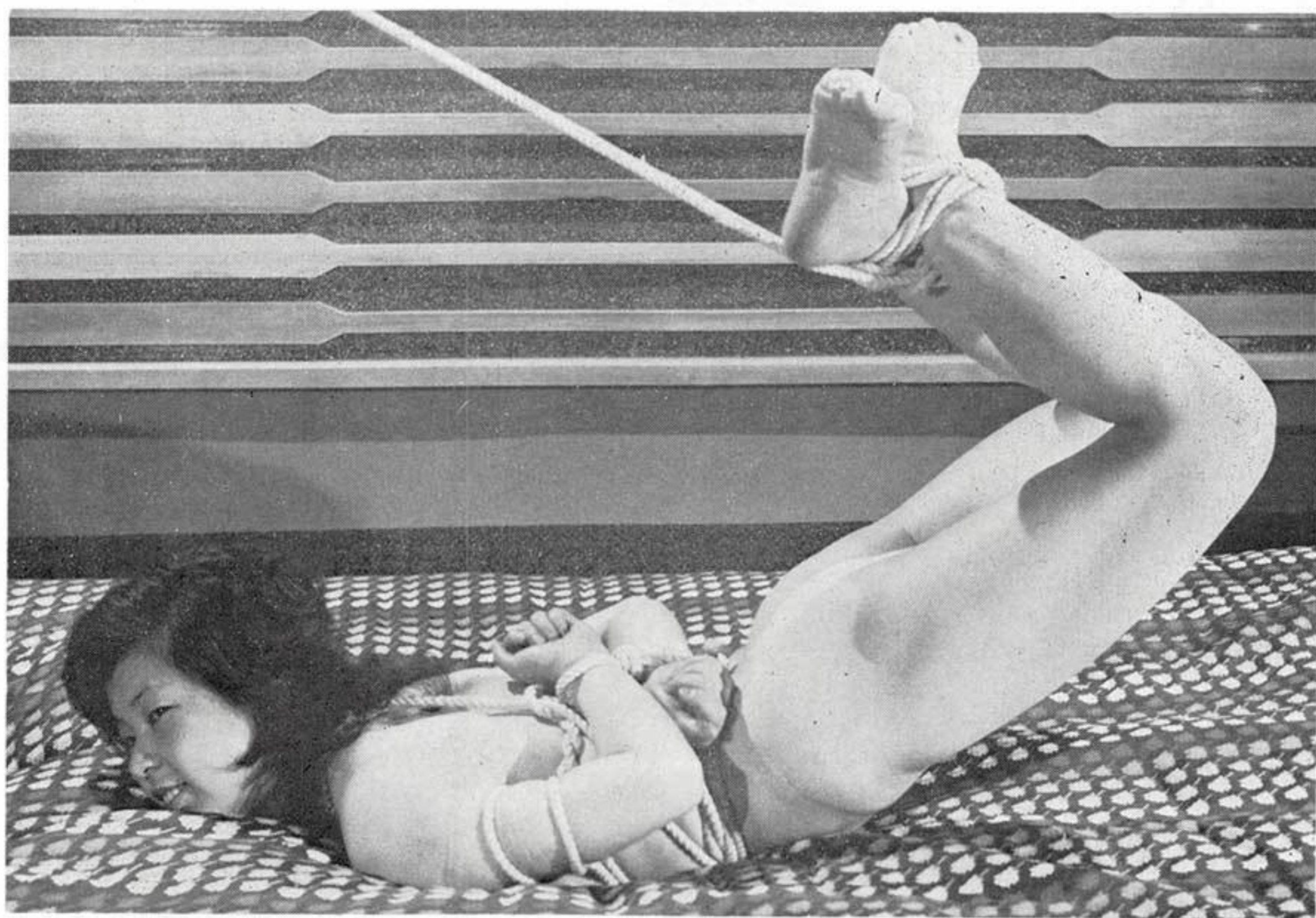


「さあ、どうでもして！」



△深田菊子▽

—— 澄んだ眸の麗人 ——



逆エビに遊ぶ

〈前田真知子〉



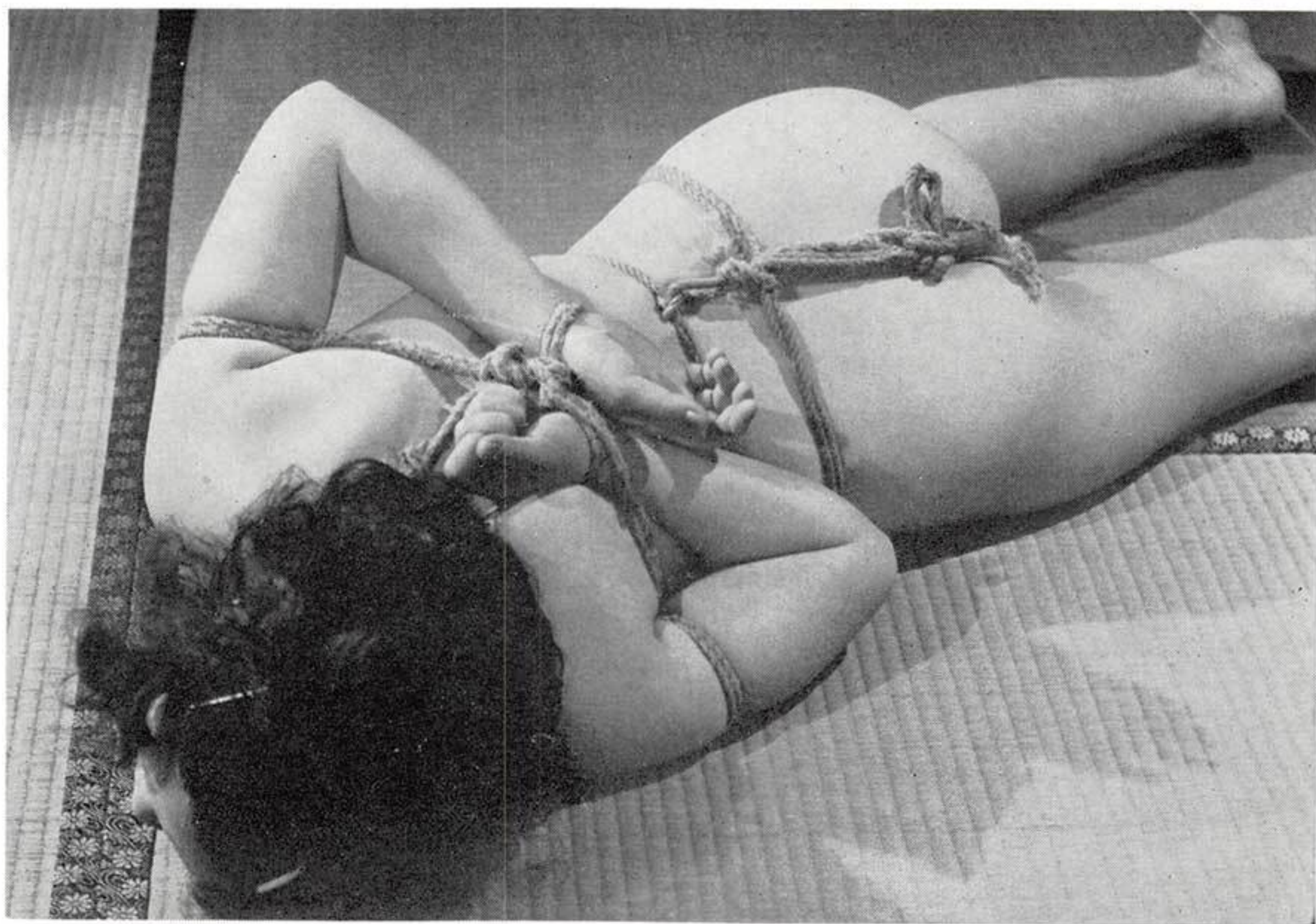
縄目を調べる

華やかな饗宴

責め甲斐のある女……………△松本たえ▽……………

△松本たえ▽



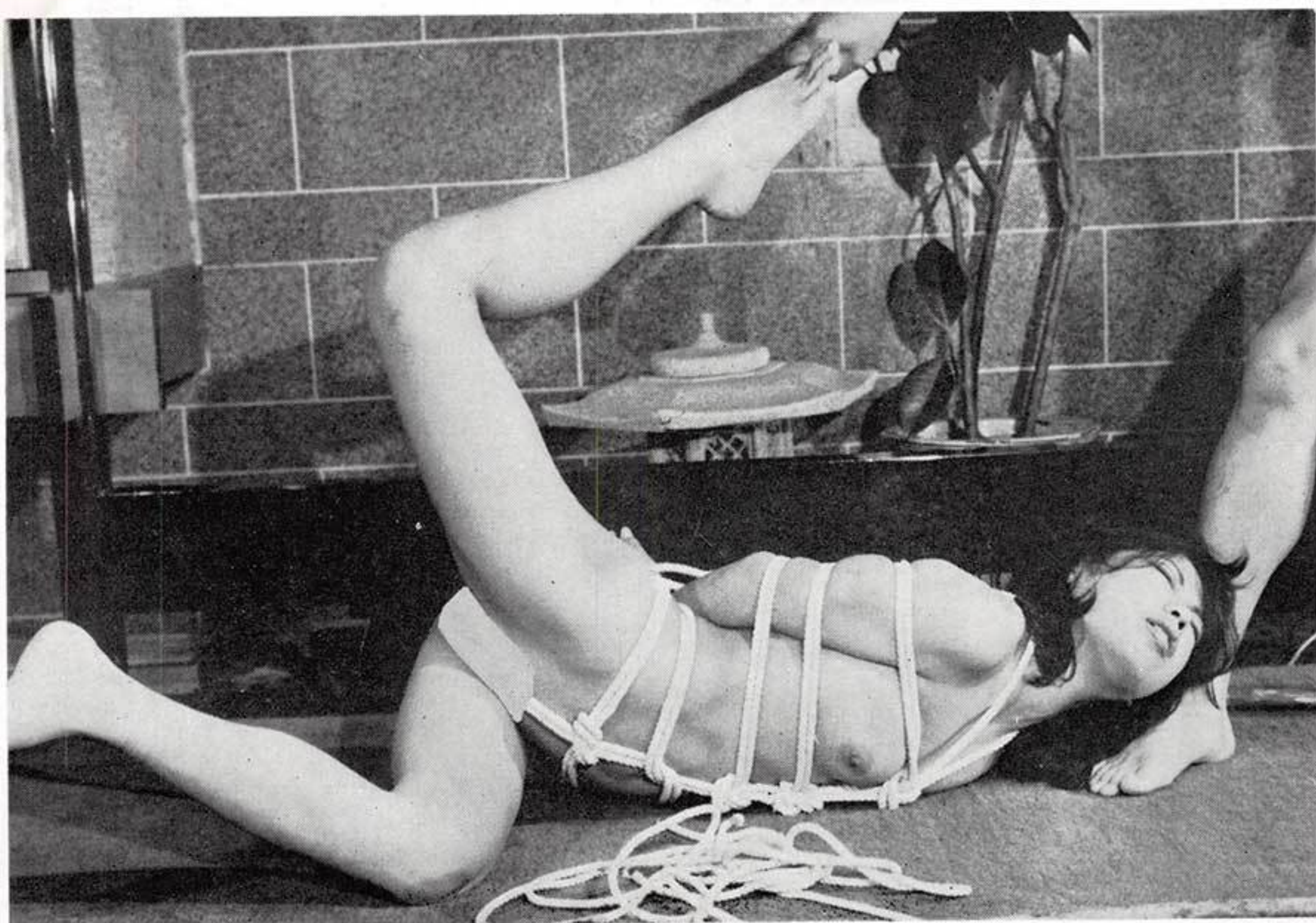


股間縛りに悶える……………＜西 条 紀 代＞



海老縛りにも耐える

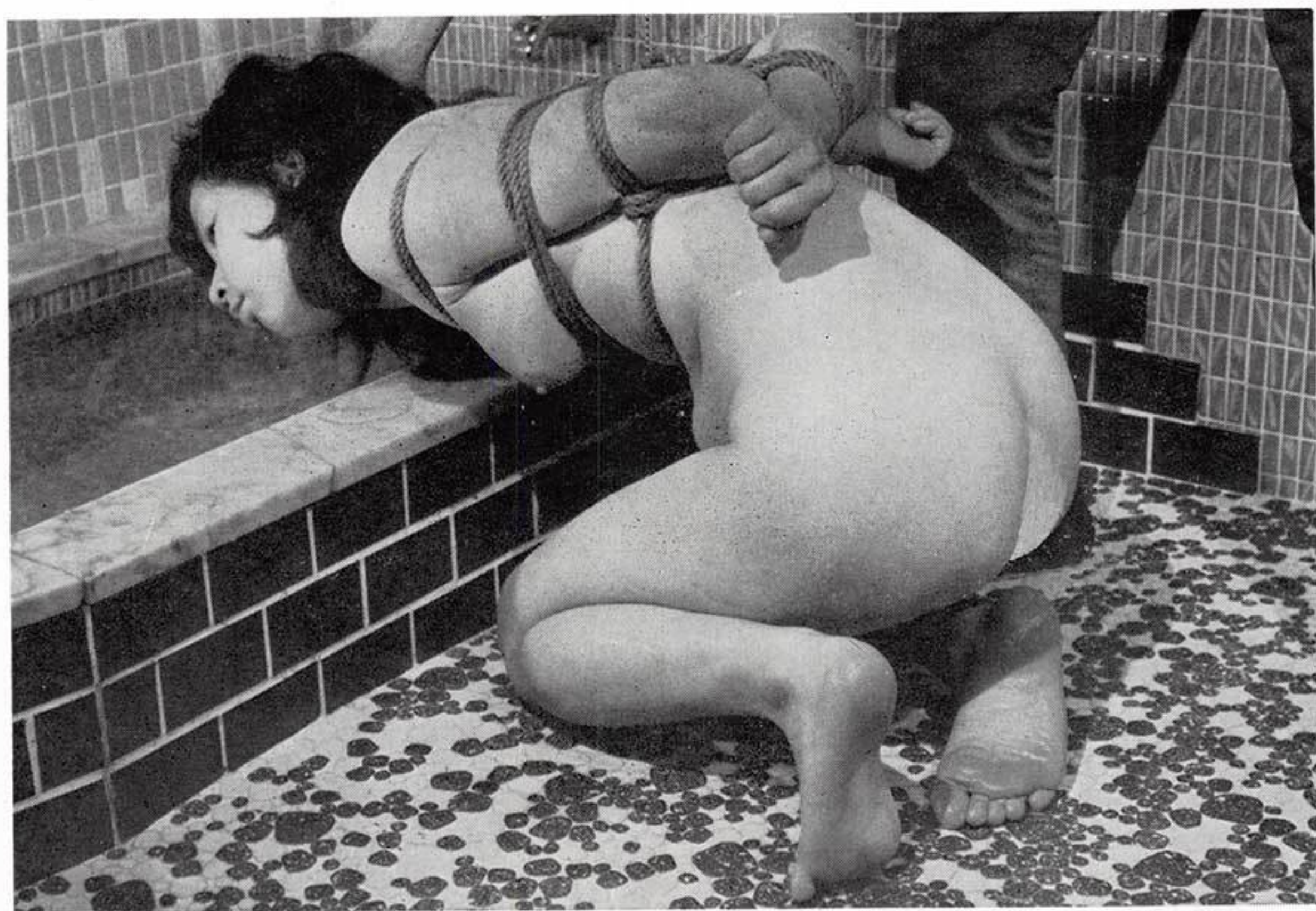
△荒 尾 慶 子▽



△鈴木千鶴子▽

柔軟な肢体開陳

排泄責めのあとで.....<前田真知子>



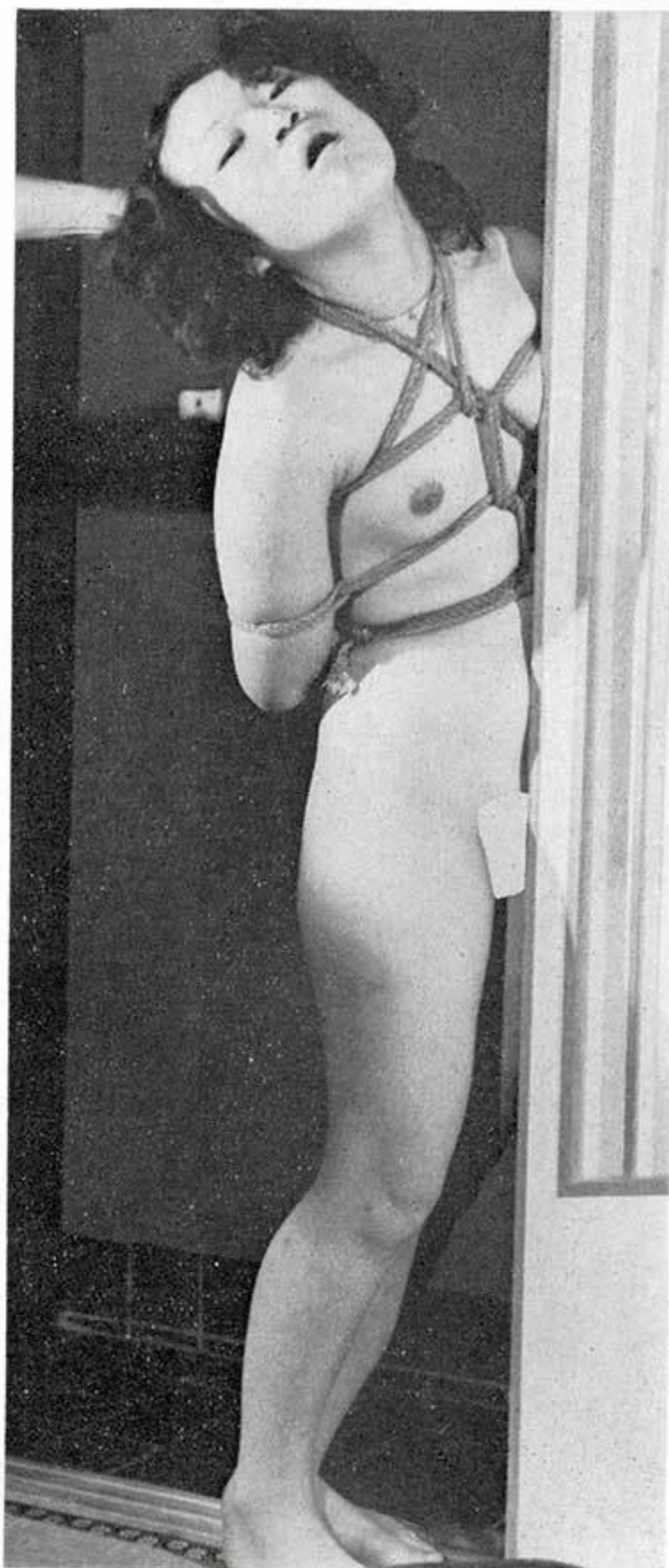


下半身は羞恥責め？

△笠井奈保子▽

いたぶられる幻想……

△西条紀代▽



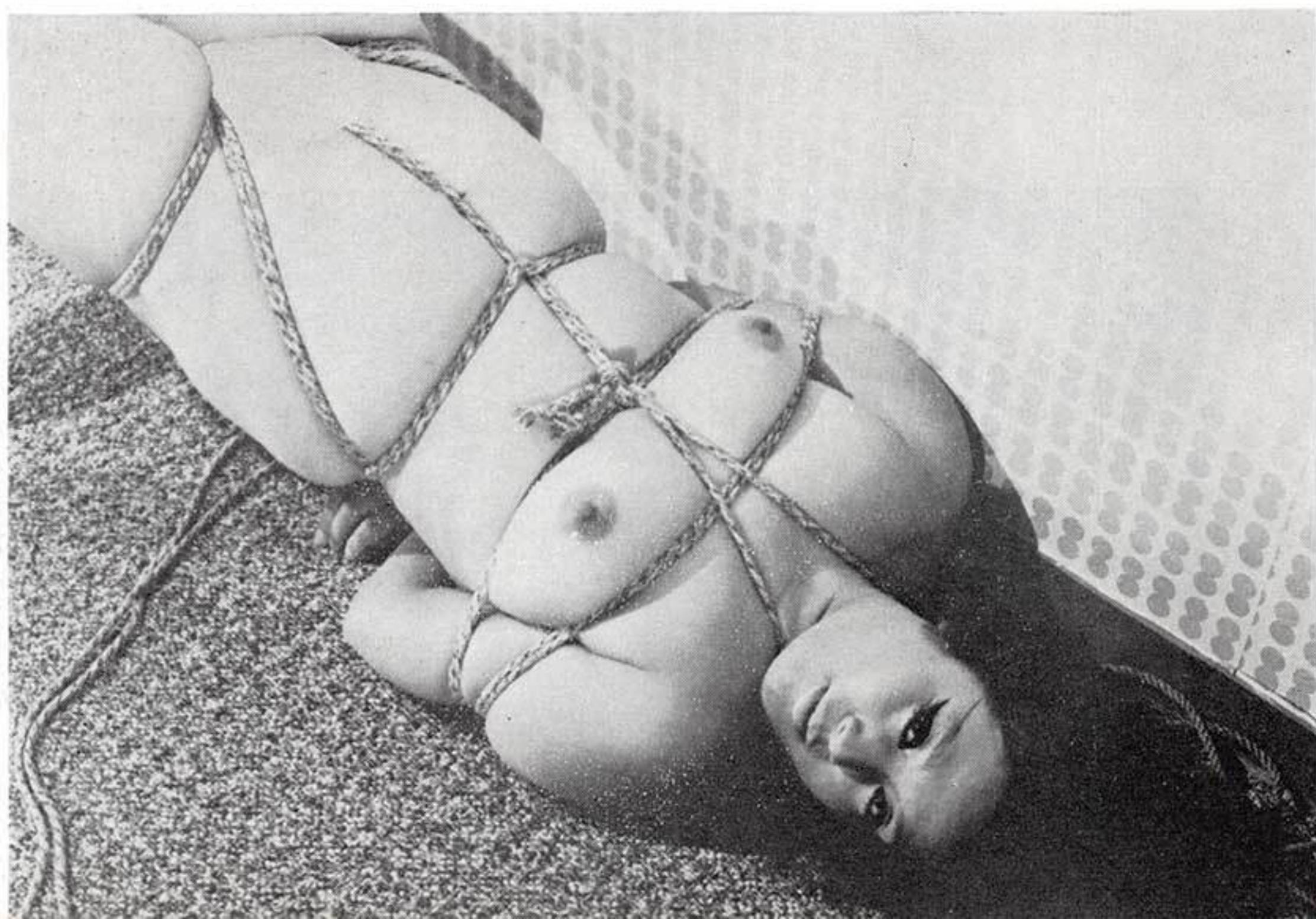


＜高 村 浩 子＞

初 縛 り の 頃

妊 婦 の S M プ レ イ

△ 富 田 由 美 子 ▽

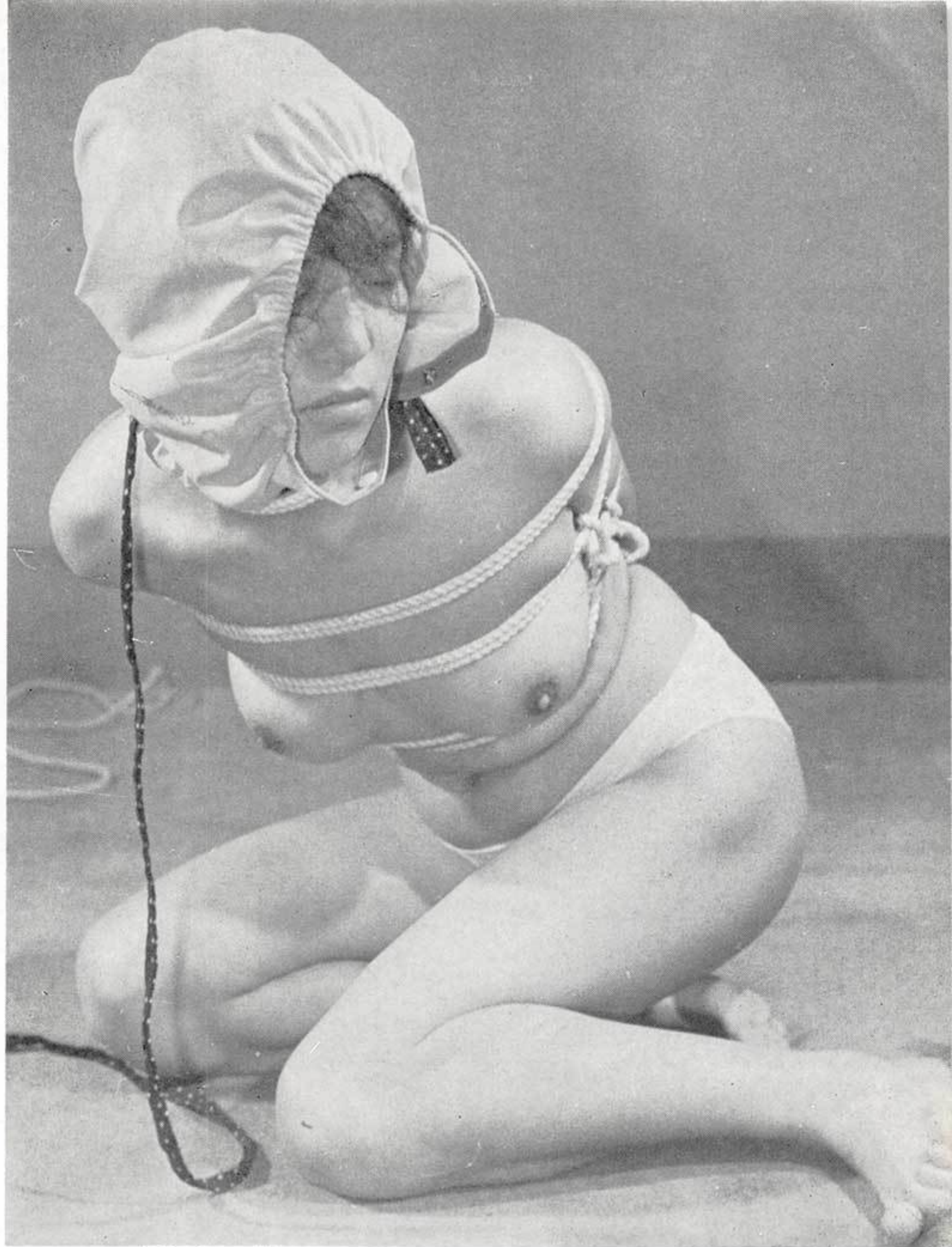


肉 体 美 と 緊 縛

△ 座 間 明 子 ▽

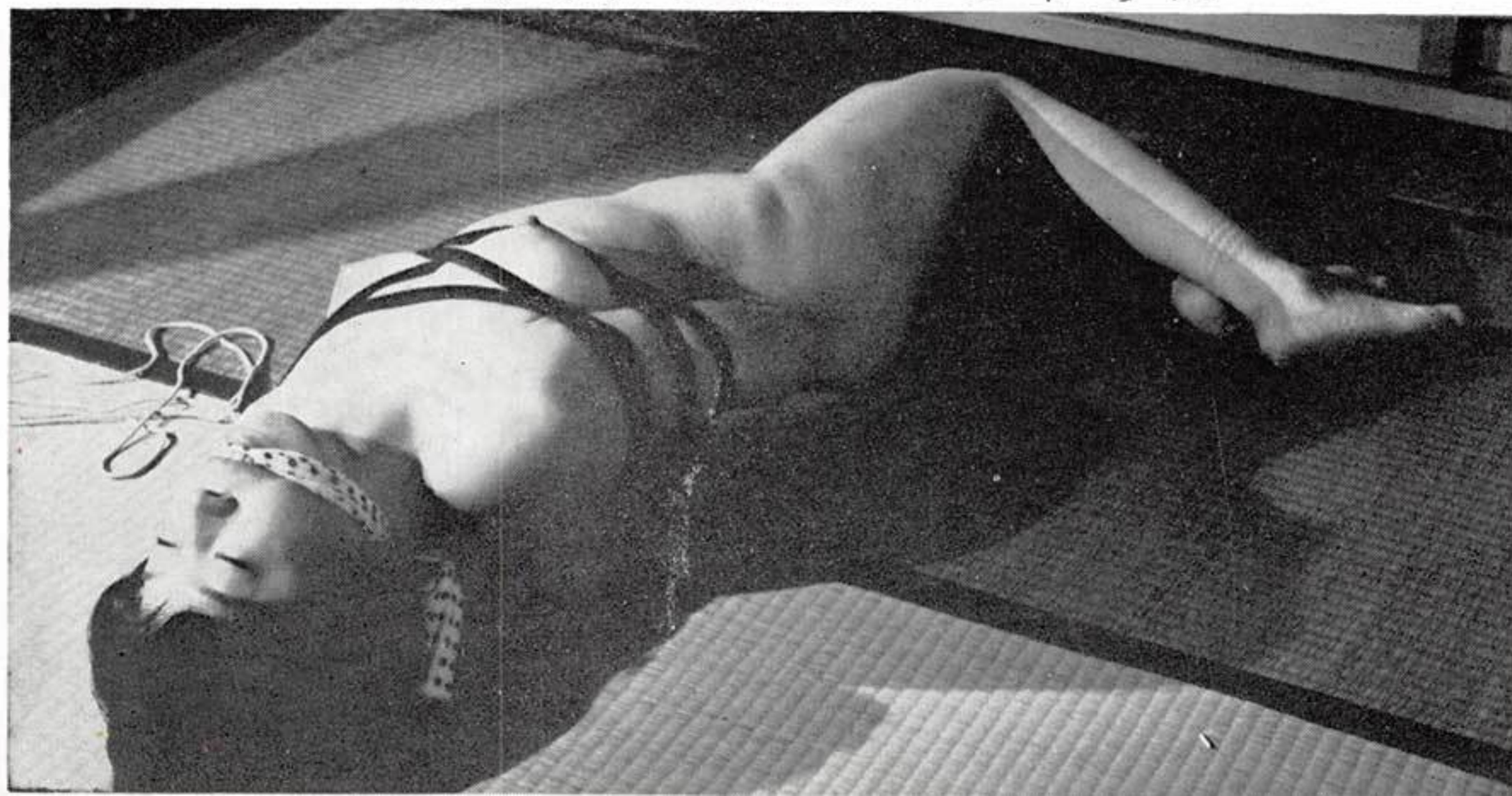
オシメカバーで辱かしめる

△梨花悠紀子▽



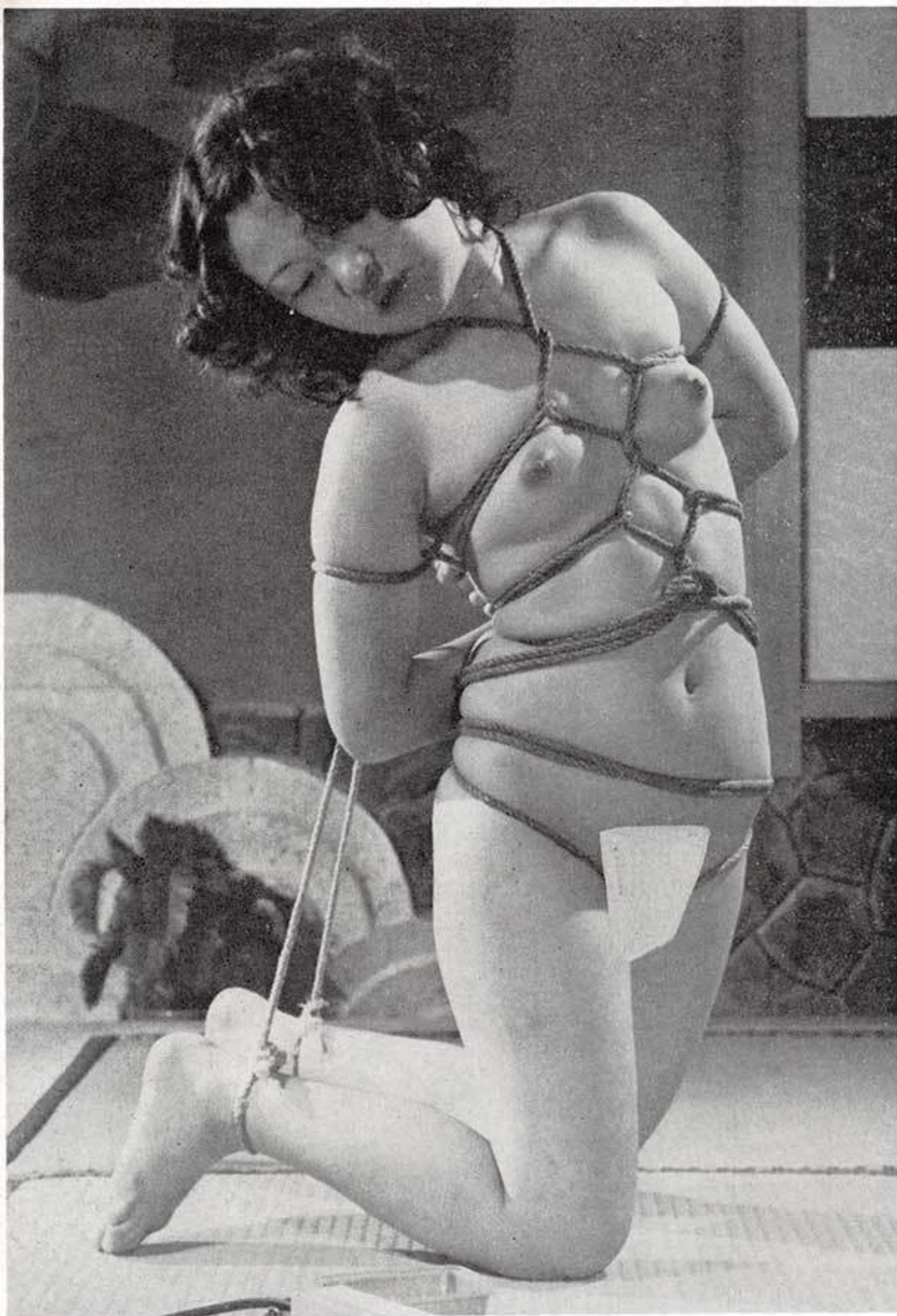
思わず、のけぞっちゃった

△松本たえ▽



菱縄に縛る

△西条紀代▽



悦虐にむせぶ

△松本たえ▽



浣腸のあとの苦悶



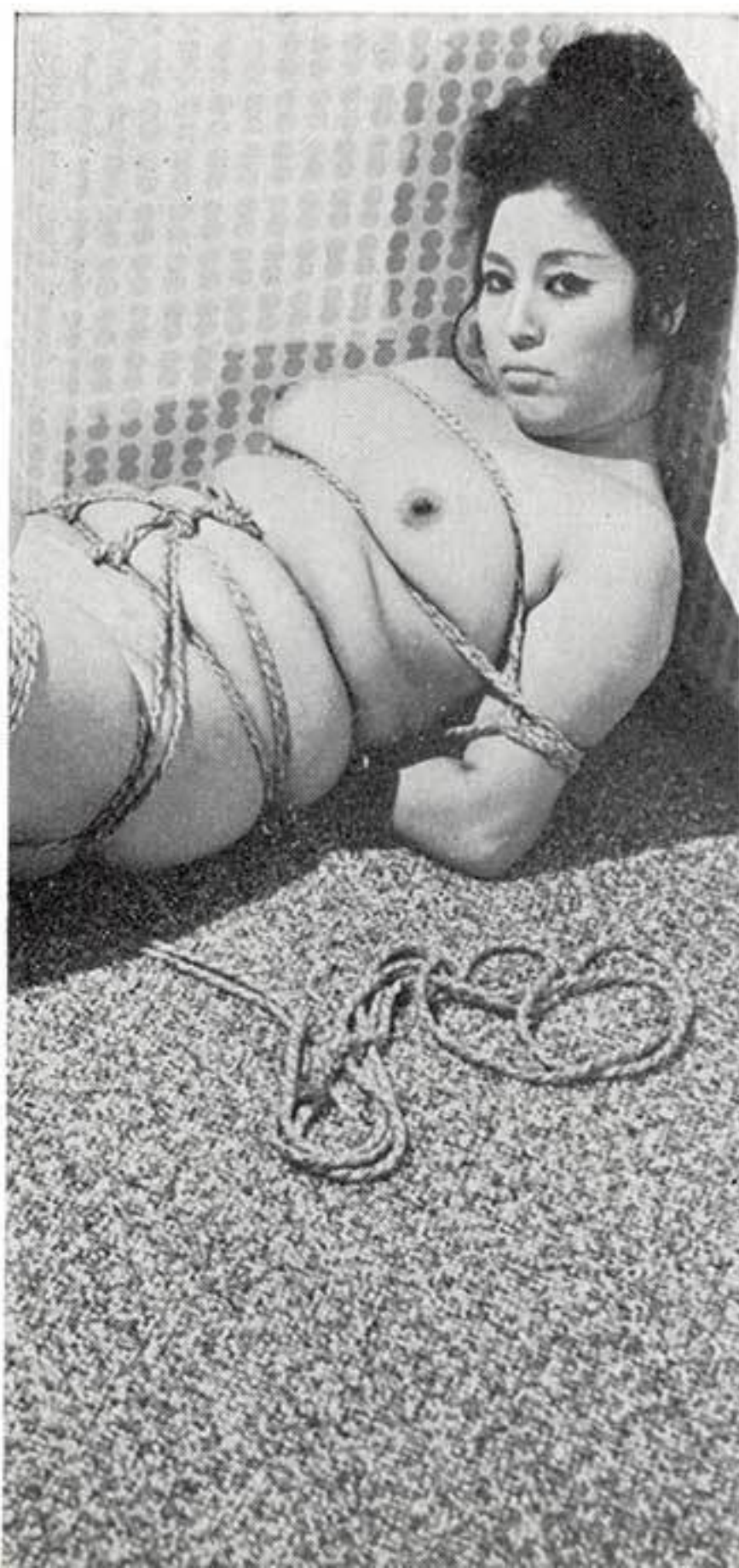
＜福井桃子＞

大の字に晒した妊婦



△富田由美子▽

…＜座間明子＞

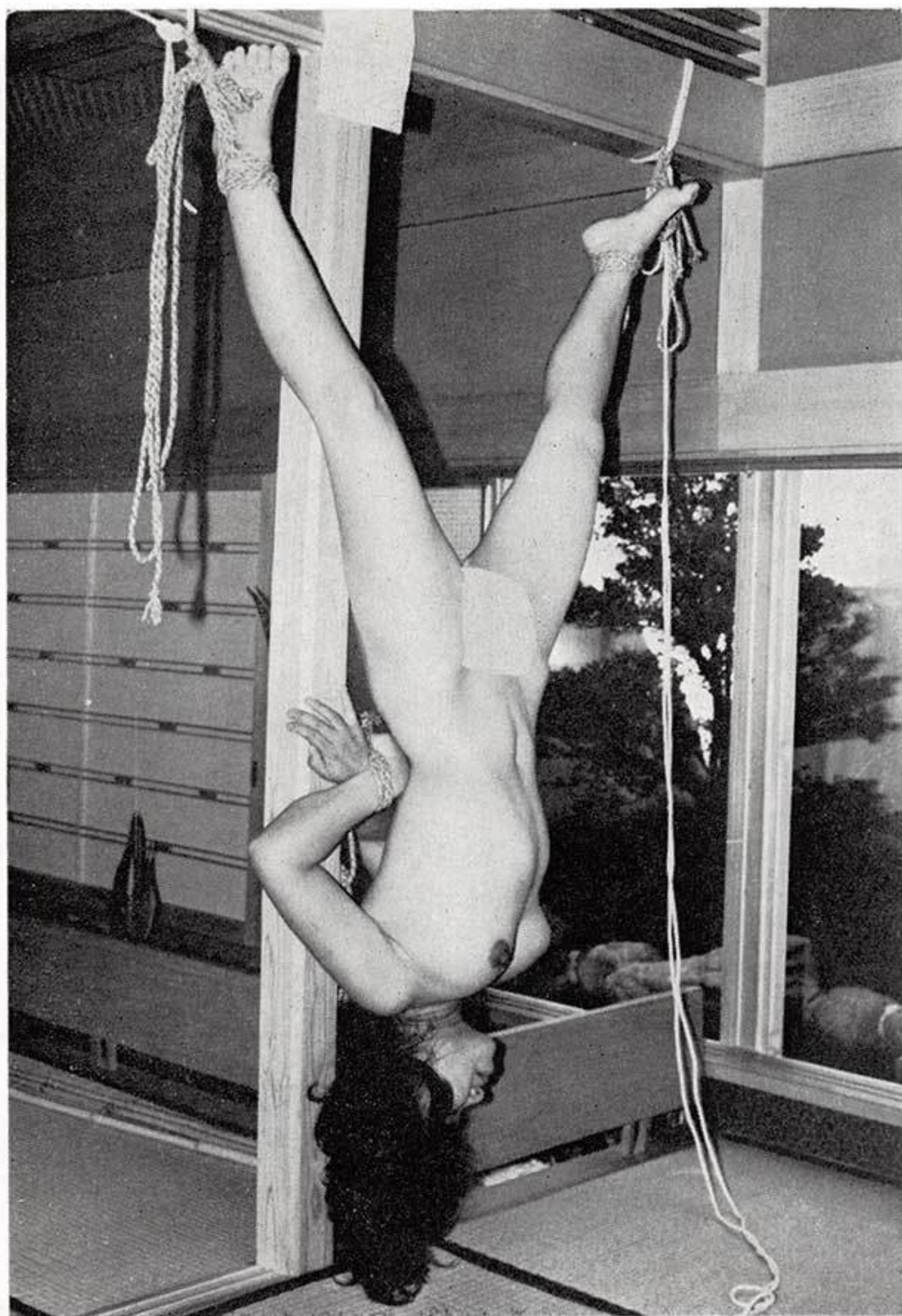




△福井桃子▽

黒髪長く裸婦縛る

大の字逆さ吊り



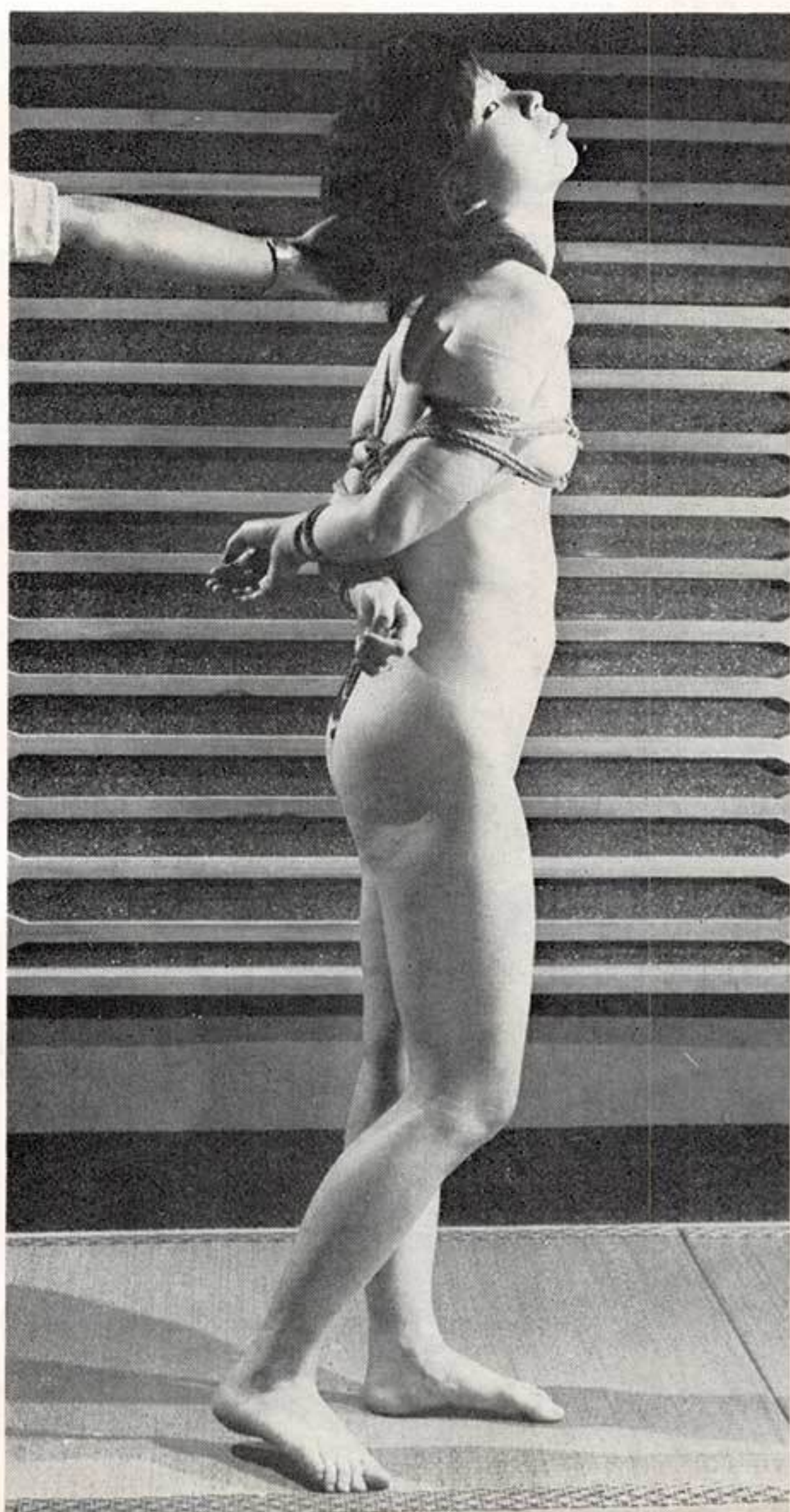
△左近麻里子▽

豊満の魅力……

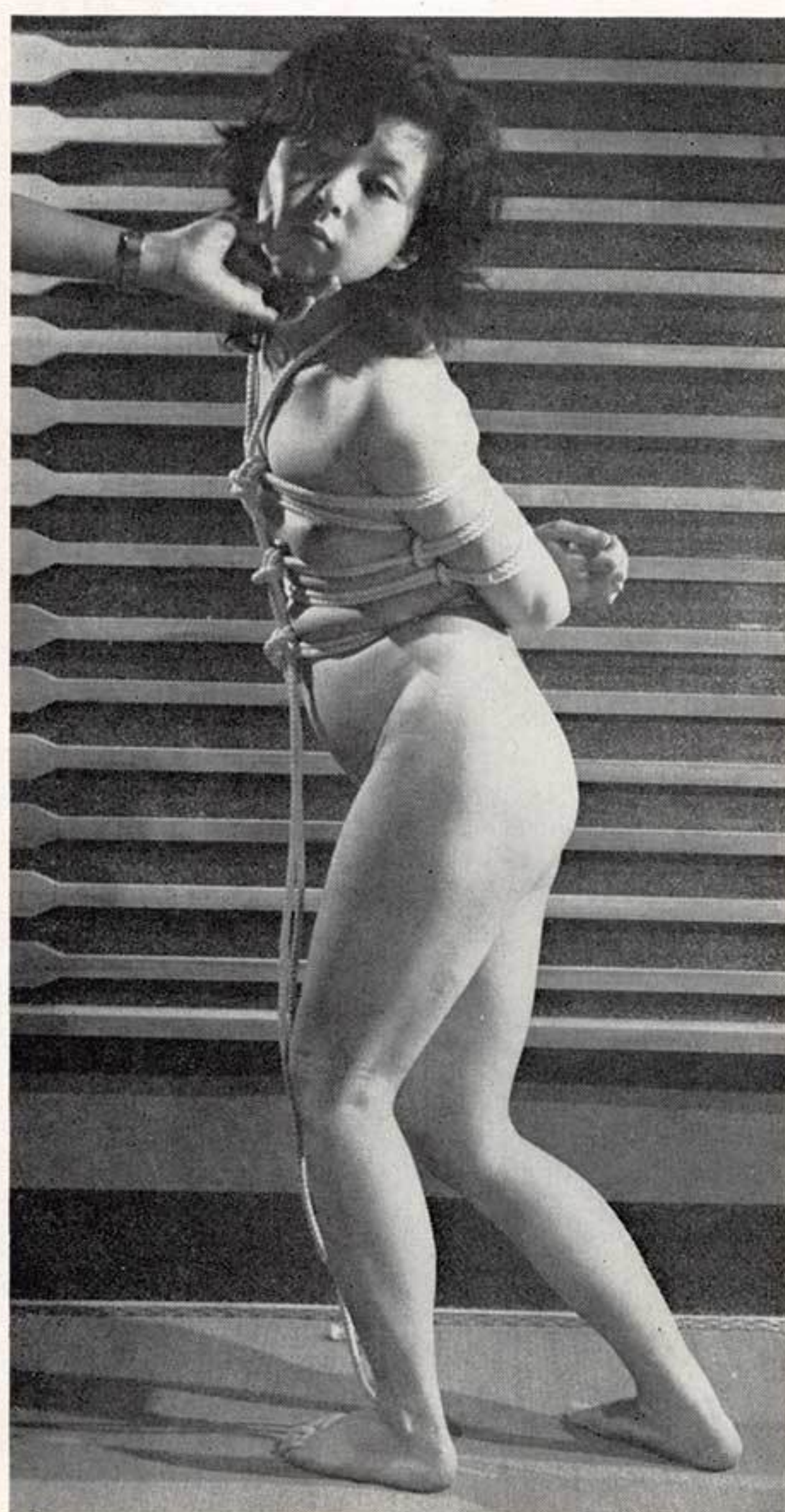




マゾのサガにむせぶ.....<高村浩子>



抒情詩的な肢体.....<前田真知子>.....



奇

譚

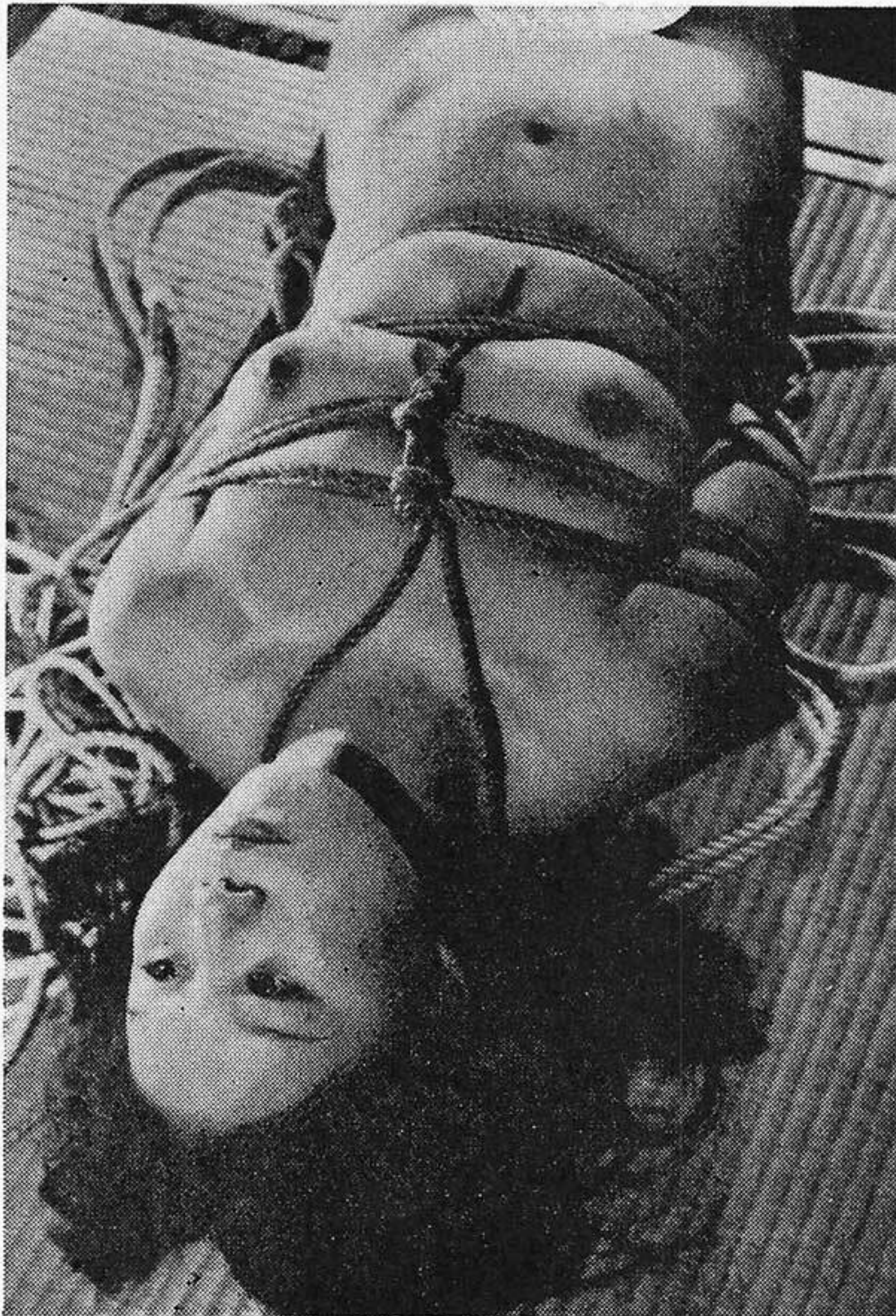
ク

ラ

ブ

昭和四十八年 七月号

第二十七卷 第七号
通刊 第三〇五号



豊満さの魅力

モデル……………笠井奈保子

若さに溢れる、はちきれそうな女体が縄で力いっぱい縛られて、白い肌がくびれているのを見るのは、私達マニアにとっては、たまらない魅力である。殊に笠井奈保子嬢は、バスト、ヒップ、ウエストなどに、若い女性の特徴である皮下脂肪が、たっぷりといっている上、それが縄という妖しい小道具によって一段と強調されて、私達の目を、こよなく楽しませてくれる。

奈保子嬢は、自分のことを太っているのでブスと思っ込んでいるようだが、なかなか、どうして、写真で拝見する限りナウな緊縛美人である。殊に、豊満な女体こそ、美の第一条件だと信じている私にとっては、近来にない好モデルだと思っている。

(古谷由美男・記)

カット・紫葉丹仁良

SMプレイに関する

二、三の考察

つなし
十だい
大すけ
介

(一) S M とは

S Mプレイという言葉が使われだして、もうかなりの年数になる。どこで、いつ、最初に使われたか、そんな考証は、おくとして、S Mプレイとは一体、何か？と考えてみなければならない。S Mプレイといっても、S Mが何か、ということが、わかっていないと論にならない。S Mとは何か——この本を読む人なら、きっと「いまさら、やばな」と、おっしゃられることであろう。「Sとはサジズムさ」、「Mとはマゾヒズムさ」と、いとも簡単に言われるに相違あるまい。確かに、その通りなのだが、ではサジズムとは何か、マゾヒズムとは何か、と突っ込んで考えてみると、定義を下すのは簡単だが、そう一口で決めつけるわけにはいかない。

今から二十五年前といえば終戦直後、今、四十代の戦前、戦中派が、やっと学問を始めた頃は、まだ、この言葉には新味があった。もちろんS Mといっても誰にも通用しなかった。だが、今はS Mといっただけでサジズムマゾヒズムをさし、それが異常性欲の代名詞的に使われ、しかも、それを楽しむS Mプレ

イという言葉すら、生まれたことを誰もが知っている。時代は変わったのだ。サジズム、マゾヒズムといわれたのがS Mになり、S Mプレイへと言葉が発展する過程だけでも、日本社会の性への関心の変遷を読みとることができる。

そこで今一度、原点に立ちかえって、S Mとは何か、ということを考えてみるのも、大切なことだと思う。

Sとは、いうまでもなくSADISM MとはMASOCHISMである。手近にある原色現代新百科辞典を、ひもといてみると、こう書いてあった。

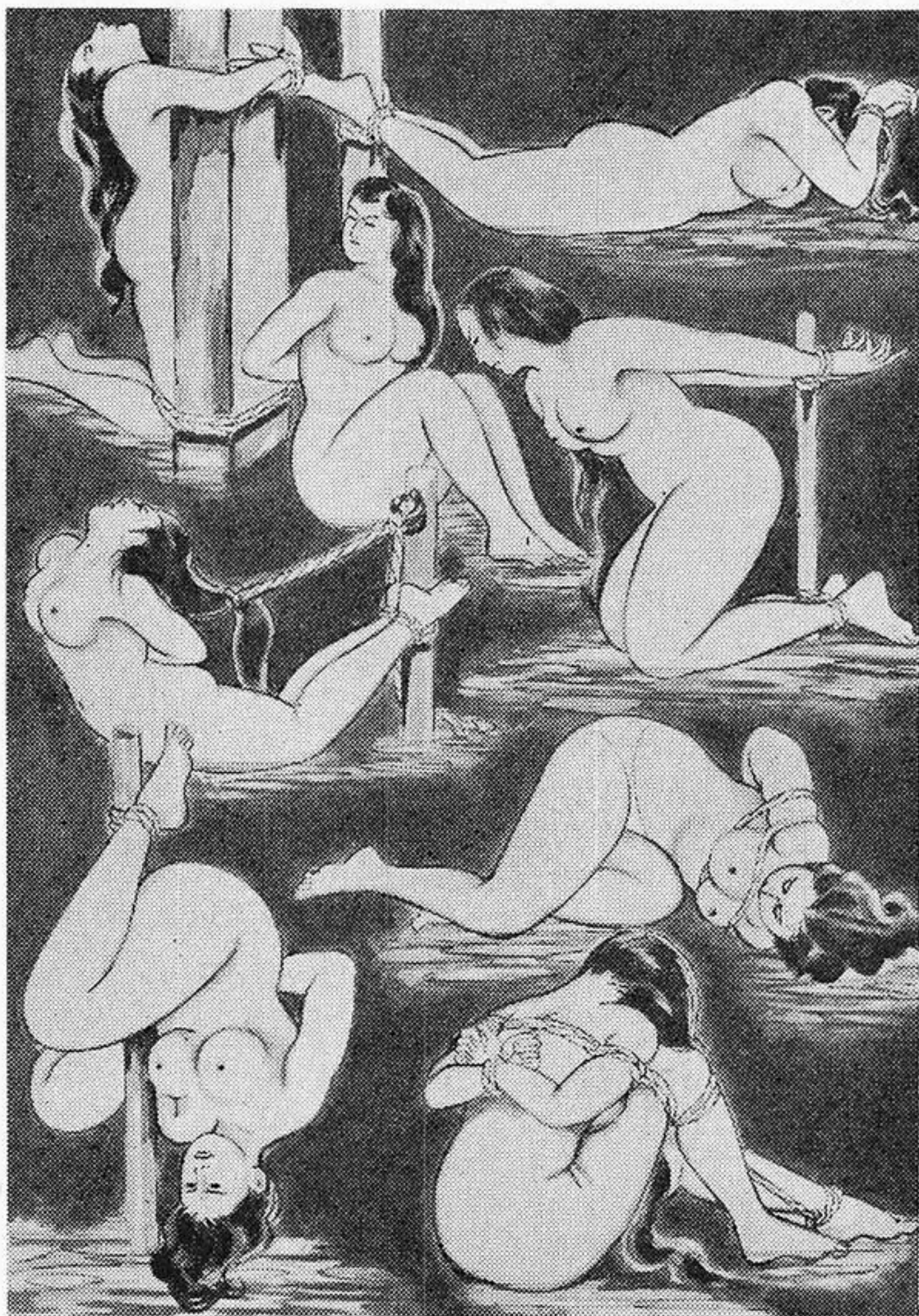
× × ×

サディズム Sadism 嗜虐性、加虐性と、よばれて、相手に苦痛を与えて性的満足をする異常性欲の一つ。マゾヒズム(被虐性)の反対。▽フランスの貴族サド侯爵の暴行や殺人行為から、この名が生まれた。女性のスカート切りや硫酸やインクを晴れ着に浴びせて快感を得るもの。異性を専門にねらう通り魔なども、これである。▽空想のうちに、異性をしばりあげて残虐行為を楽しむ空想サディズムや、動物が虐待されるのを見ると興奮する動物サディズムなど、いろいろな型があ

る。

× × ×

(島田一男)



マゾヒズム Masochism 異常性欲の一つ。相手から身体的・精神的な苦痛を受けることによって性的満足を得るもの。▽積極的な嗜虐性欲であるサディズムと対照的で受身であるが、ときには同一人物で両方を合わせも

つこともある(サドマゾヒズム)マゾヒズムはサディズムほど犯罪学的には重要でないがみずから求めた身体的虐待のため死亡する例もある。▽マゾヒズムは、自分でもこの傾向をもち、またこうした傾向の人物をえがいた作家マゾッホにちなんで名づけられた。

(島崎敏樹・宮本忠雄)

× × ×

これで、おわかりでしょうか。わかった。そういわれる方も多いことでしょう。「そんなに、むつかしくいわんでもええ。要するにイジメタリ、イジメラレタリなんだから。ほれ恋人がよくいうじゃないか。屈強な男性の肩にもたれて、いじめてえーつ、と」と、いわれる方も、いることでしょう。だが、この定義を読んでもみると、どうも、後者のような甘えを含んだプレイ的要素は、この定義からは見られそうにない。そこで両者とも共通している部分、つまり異常性欲という言葉をも、同じ辞書から、ひいてみた。

× × ×

異常性欲、性欲の発現が正常でないもの。性倒錯ともいう。▽大きく二つに分けられる△性対象倒錯インバージョン Inversion)▽は同性愛や獣姦(動物との性行為)など対象の異常の場合である。同性愛は、内分泌腺異常・性中枢異常などでも起こり、また異性と接することのできない環境でも発生する(稚児愛の場合など)△性目標倒錯(パーバージョン Perversion)▽は相手を虐待しなければ性欲を満足できないサディズム、相手に虐待されなければ満足できないマゾヒズム、公衆の

面前で性器を露出させ、他人の注意をひいて満足する露出症、異性の肌着や髪の毛などに性感を感じるフェティシズムなど行為目標の異常である。▽異常な行為も、正常な性行為の準備として、あるいは並行して現われる場合には必ずしも異常性欲とはいえない。

(島田一男)

「あ、わかった！ 要するに変態ね！」

一読、こう答える人は多いでしょう。それなら最後の一項目は、いったい、どんな意味があるのだろうか。もし本当に変態とするなら、流行になるはずはない。とすると、この一項目に何やら、みそがかくれているらしいということになる。そうなれば、この定義づけは、実は不明確で、その本質には触れず、ただ異常性欲といわれるものを分析したにすぎないということになる。

では真のSM、本当の異常性欲というのは何であろうか。だれしも、そう思う。

ところで、それを語る前に戦後の、わが国の芸術界の特色をみてみると、戦前にくらべて、ないもの、戦前にないものにアングラがある。このアングラの歴史を

語るのが本題ではないので、アングラについて知りたい方はグルッペ二十一世紀編これがアングラだ！（四十三年発行・双葉社）を読まれるがよからう。この中に、オナニー映画大繁盛！ という項目がある。

その中から一文を抜粋すると、次のように書いてある。

ハレンチ・フィルムに情熱を傾けるセックス派——高林陽一

これが見出しである。

“皮膚科”あるいは“セックス科”。代表作は「ひなの影」。

ストーリーは欲求不満にもだえる後家さんの話で、全編これウメキ声の連続。十九分間のフィルムは、要するに、唇を半開きにしてウメキもだえる後家さんの“悩み”を捉えたものののだが、この映画のPRのパンフレットにいわく。

△ひな人形と少女の交情を通じて女性の自己愛を描く異色作▽。

十九分間、一瞬も目をそらさずスクリーンを見ていても、少女と思われる登場人物は、

どこにも出てこない。

アングラ映画には、PR文句と実際の映画と、まったく関係ないと思われるものが、まああるが、これなど好例。

ずいぶん人を喰った話だが、それがまたアングラ的というものなのか。観客に分かる分らないは問題の外なのだ。ハナから観客を度外視した、プライベート・フィルムなのだから……。

ともあれ、この作品には“名作”のレッテルが貼られている。ニューヨークの近代美術館のヴァン・ダイク映画部長に認められて、同館のフィルム・ライブラリーに収められているのだ。（P 54—55）

ところで、このような大傑作？ を生んだオナニー、つまりマスターベーション、自慰というのは、異常性欲に入るのだろうか？

NO！ という人は意外と多いだろう。いやそう言い切ってしまう人も多いだろう。さきほどの辞書の定義を見ても、この結論は出てきそうにもない。せいぜい出てくるのは、たとえば男性が「縛られた美少女を強姦する場面」を想像して自慰すれば、それは空想サジズムだというくらいであろう。だが、それも

正常な性交の前技であれば、そうでないというのだから恐れ入る。

こんな考え方、定義づけでは戦後SMの流行は解明できないし、アングラーの映画、演劇部門で、いくたびもSMシーンが演ぜられ今また、SMプレイとして一種のスポーツ化してきたSM観は、判断しかねるということになるう。

そこで、こうした広範囲なものに通用する考え方を搜し出さなければならぬ。

そこで、もう一度、原点に立ちかえって、クラフト・エピングといわないまでも、この問題を真剣にとりあげて考察したフロイドの精神分析学入門を読んでみることにする。フロイドは

× × ×

私どもが、成人の生活の中で「性的倒錯」と呼ぶものは、正常のものとは、つぎの点で違っています。すなわち、第一には種の限界（人間と動物との間の深淵）を無視していること。第二には嫌悪感の限界を越えていること。第三には近親相姦の限界（血縁者に性的満足を求めてはならないという禁制）を踏み越えていること。第四には同性愛を何とも思わないこと。第五には性器の役割を他の器官

や身体部位に置きかえていることです。これらの制限は実は最初から存在するものではなく、幼児の発達と教育の過程の中で、おもむろに形成されてくるものです。

（世界の名著フロイトP 276—277）

× × ×

といい、ノイローゼ患者や幼児、夢の精神分析をした結果

× × ×

性的活動が生殖という目標を断念してしまい、それとは無関係に快感獲得を目標として追求される場合にこそ、私どもは正に、その活動を倒錯的と呼んでいるのです。

（同P 390）

× × ×

これで、おわかりのことでしょう。これまでの社会、つまり経済生活中心の社会、道徳生活中心の社会でタブーとされていた、すべてが解放されて、もし自由に性の喜びを追求するとするなら、それは性的倒錯性を共に味あわなければならぬということ。

サジズムが、いじめ、マゾヒズムが、いじめられることであり、こうした行為を含む性倒錯、つまり異常性欲というのは、生殖活動を伴わない快楽の追及ということになってく

る。そうすると、はっきり異常として認められるのと、そうでない部分、つまり顕在的なものと潜在的なものに分かれ、潜在的なものは誰にでも備わっているものであり、だからこそ、SMが流行するわけである。この定義づけから考えてみると、すべてのモラル、思想、社会に反して反体制運動を展開することによって、そこに人間の生命、生き方を見出そうとする、現代の若者たちの考え方に、正に、ぴったりくることになる。

これでアングラーが性解放、つまり快楽としての性の一面、オナニーや、自己愛、SMなどをテーマとして、とりあげ、追及したことが、わかるだろう。

定義づけの如何にかかわらず、SMの本質は変わっていないはずである。にもかかわらず、人々のその受け止め方は、時代と共に変わっており、その認識の深さも、変化している。SMが正に現代の寵児として、もてはやされ、映画にテレビに放映され、社会に受け入れはじめられたのは、生殖を伴わない快楽の追及という本質が、性解放時代の風俗に、ぴったりと来たからである。

もともと、性生活は倒錯性より生殖を目標とすることが強く本命とされていた。しかし

人は現在では一生に何十人何百人もの子供を生むわけにはいけないので、当然、生殖を目標とする行為は限られ、別の目的、つまり行為に伴う純粋な快楽の追及、つまり倒錯性が主とならないわけには、いなくなる。人が考える動物であり、人と他の動物との違いを性生活の上から求めるとなると、考えれば考えるほど、性生活は倒錯的とならざるをえない。つまり犬や猫は、さらに牛、馬はオナニ―や性倒錯には、ふけれない。従って性生活の中心を追及すればするだけ、人は性倒錯に悩むという矛盾をかかえることになる。こうしたことは、一般に倦怠期と呼ばれる性的不満の解消に、SMをはじめとする異常性愛の真似が、よい薬になると解されているのでもわかるだろう。よい薬になるのではなく、生殖目的を失った性は、そうした方向でなければ満たされないというのが人間の本質であるから、当然のことであろう。

現代のように性生活をエンジョイし、それを公開しても、はばからないような方向に社会が動いて来た場合、性生活をエンジョイする手段としてマスコミが利用され、映画、雑誌に性が登場することになる。性は商品化されるわけである。いきおい、それは生殖行為

の解説ではなく、当然の帰結として性倒錯への道を歩くことになる。性器の露出を禁止する映倫の行為も、生殖目的を排除する人間の本能から出ているとすれば、社会的な性倒錯の一面と理解することができよう。つまり映倫のやり方は変態野郎なのであり、警視庁は、それ以上に大きな変態ボス、つまり、変態社会機関ということができよう。彼らは性倒錯は見のがしても、性行為は見のがさないということになる。こうして性生活のエンジョイが倒錯性を帯びるにつれ、実行行為としてのSMも次第に普及し、さらに、そこから創造力の力を借りて、空想サジズムは拡大して行く。つまり、SMはエスカレートせざるをえなくなるのである。

こうしたエスカレートは、究極のところ、人間社会の高度成長、文化の高度進展、あるいは性の解放に与えられているわけであり、そこに大義名分を持つことになる。そのため“すべてをのみつくし、すべてに順応する”人類の強い適応性（アダプテーション）に支えられ、守られて、SMは、やがて貧しい社会にも浸透し、普及して行く。

外国並みに、我国にもSM小説が流行し、映画、性倒錯の世界が生まれ、そして、その

中の傑作が、流行しはじめる。

(二) SMプレイとは

SMが一応、理解できたので、次はSMプレイに移ることにする。

SMプレイとは、ルールを決めて行なうSM行為のことで、現在ではまだ、SMに關しての競技は行なわれていない。しかし将来は縛りコンテスト、縄抜けコンテストといったようなものが行なわれるかもしれない。

SMプレイは性解放に伴うSM普及の一手段として、人類文化高度進展の産物として生まれたことは、もうすでに前章で、おわかりのことと思う。

SMプレイとスポーツを比較することは、前回“SMとタメの哲学”でも述べたところなので再論するのは恐縮だが、プレイという限りにおいては、やむをえないと考え、ここで再び、その問題とSMプレイを考えてみたい。

古来スポーツが神聖化され、普及したのは人間の生命を支える仕事を定型化し、エンジョイするようになったからである。性が本来の目標を失って、エンジョイされるようになる

イメージギャラリー 『熱い悦楽』 須坂 旭



ってきた、つまりSMプレイ化して来たことと、実によく似ている。

スポーツは、とぶこと（ジャンプ）走ること（ラン）投げることが基本であり、どれをとってみても古代社会では重要な役割を持っ

ていた。とくに狩猟社会では、より速く走ることが獲物をとる場合でも、強敵から逃げる場合でも有効であり、とぶことも、投げることも同様であった。農耕社会では、こうした基本より、もっと大切なスケジュール、つま

り智慧や足腰を、きたえる技が定型化してきた。西欧では走ること、跳ぶことなどがセレモニーとなり、オリンピックを生み、我国では足腰を鍛える技、つまり相撲や柔道が生まれた。やがて高度化された文化の花が咲くこうした基本技から発展して、ルールの複雑な競技、野球やラグビー、サッカー、ボクシング、レスリングなどを生み、現代では、それらで生活する人「プロ」を生んだ。人は、その高度な技術、すばらしい集中力、鮮かな演技を見、一投一打に興じている。

ところでセックスは、どうか。性はスポーツのように大っぴらには解放されなかった。というのは、生殖目的と行為との同時性の問題が解消されなかったからである。性も人間が生きる手段であり、こうしたスポーツ同様に定型化する要素を持っていたことは体位論をみれば、わかるだろう。だが、昔は公開しエロジョイするものではなかったため、プレイ化するまでには、いたらなかったたのである。だが、現代のように快楽の対象となった場合つまり性解放された場合、まず、それは定型化、スポーツ化というより、レジャー化、芸術化の方向へ走りはじめた。というのは、スポーツの場合にくらべ、SMプレイではムー

ド造りが、むつかしいからである。

たとえば走るといふスポーツの基本について考えた場合、用具はランニングにスパイクだけで、すむ。だが、縛るといふSMプレイの場合、補助具としての縄だけに限定したとしても、その使用方法是ランニングのように、いけない。つまり、SMプレイは単独では、できない。そこにスポーツとの根本的な違いがあるようである。

もちろんSMの世界でも、定型化、創意工夫が行なわれてきている。西欧の狩猟社会においては手足の拘束具としては強力なもの、つまり、革や金具をつかった手錠、足錠、足カセなどが、発達したのに対し、農耕社会の日本では、織布や縄を使ったものが用いられ永い封建社会の発展過程の中で、方円流という捕縄術が生まれてきた。つまり、高手小手はSM手段としては、国技の相撲、柔道に似て、高度で、ポピュラーなものとして登場してくるのである。

舞台や劇場で、写真や映画で上映されるSMシーンが、我国の場合、縄で縛られた形のもの、高手小手が多いのも、こうした理由からであろう。ポルノ流行と共に緊縛写真というジャンルが開け、通信販売で、しきりに売

られているのも、SMプレイの一変形とみても、おかしくないようである。

× × ×

前章でも述べたが、人間の精神構造の中に性が、きわめて重要な部分を、しめていることをフロイドが発見してから、性は隠すべきものでなく、もっと正確に理解の対象として把握すべきものとされてから、その生殖目的とそれに伴う快楽とが、本来、癒着していたものから、次第に独立しはじめるにつれ、人間は自由に前者をコントロールし、後者を満喫しはじめた。もともと、性の付属物とされていた快楽の追及は、逆に性の主役の座を占めはじめてきた。

そうになると、従来は精神異状の原因とみなされ、時には犯罪とさえ見られ、常に非道德的と、けなされてきたSMにも、光があてられ、本質的な犯罪的要素と、エンジョイされる部分が区別され、人類はリラックスして、性を享受できるようになった。エンジョイ部分が独立して、SMプレイが生まれたのである。SMプレイは普通、男女二人が契約によってSMを楽しむと解することができるが、もっと広義に解釈し、SM、つまり性倒錯を楽しむ手段と解することもできる。SMは、

こうして現代の社会に地位を与えられ、定着しかけている。

プレイは約束、または合意による行動を示し、代償としての死を意味しない。過失死の場合はスポーツにもあることで論外。従ってよりよき生、VIEであり、快楽の追及、つまりレジャーである。そうになると、それは本来、学者たちが考えたSMとは姿を異にしてくる。「そんなものがSMといえるか。それはSMのマネに、すぎない！」と激しく、けなす人も出てくるだろう。だがスポーツがルールを決め、その中で励み、競うように、つまりスポーツそのものがマネゴトを出発点にしていることを考えれば、またそれが、きびしい訓練の結果、到着しうる極致を持つものであれば、SMプレイも常人には味わえない極致のあるマネゴトで、トレーニングによって達する部分を持つということが出来る。

たとえば緊縛にしても、最初から相手を本格的に縛り上げて楽しませるというわけにはいかない。高度のプレイを楽しむには、高度のスポーツを楽しむのと同様のトレーニングが必要であり、そこに美があるのも当然であり、独立したとはいえ、性との同時性が残っているだけに、スポーツ以上のデリカシーの

深さを賞味することができ、一面を持っていたので単純には行かない。プレイとして深みのある複雑な行為、含蓄のある動作が常に要求され、さらに精神的な教養、あるいは相互信頼的なムード、豊かな感情、プレイを支配するムード、ときにはパッションすら、入り込む余地が生まれ、SMプレイはスポーツの美の祭典以上に芸術的なものを要求されてくる。

純日本流な言い方をすればSM道という「道」の觀念さえ、要求されてくる。現在のうちにSMが解放され、随所でSMプレイが行なわれるとなると、そのプレイは道德的にも許される範囲内となってくる。つまり、従来の道德観を変えなければならなくなってくる。しかし、SMプレイと道德との関係は、そう単純には、いかない。道德が長い間、性について抱いてきた偏見は、未だに大きな力を持っているので、一朝一夕に改まらないとしても、早晚こうした方向に向かわざるをえないであろう。

現在の社会においては、過去のモラルが失墜してきたというより、過去のモラルでは律せられない数多くの考え方、生活慣習などが生まれてきている。モラルが失われたのでな

くモラルの発展より、文化の発展が先回ったのである。

百メートルのプリンターが、十秒を切ることに、一秒の十分の一に全生涯をかけたように、新しいSMの型を作るのに生涯をかける人も出てくるかもしれない。SM絵を描くことに生き甲斐を見出し、それに生涯をかけた故伊藤晴雨画伯の事業は、こうした面から再評価、再認識されねばならないであろう。

× × ×

以上、のべたところから分かるようにSMプレイの特色はプレイとしての定型化、つまり一般社会生活への定着化と、今一つはフロバビリディの追求（可能性の追求）と、なる。前者は全く他のスポーツと交わりないとしても、後者は他のスポーツと異なる。プレイの中に芸術的要素があると、のべたが、これが、それである。

可能性の追求は、可能性の評価から生まれる。イギリスの詩人ロバートブラウニングは難解な詩を書くことで有名な詩人だが、この人のベンエズラ先生の詩の中に、人の偉大なるはその行為にあらずその欲するところにあればなり

という意味のことを書いている。

つまり、これから考えると、人は創造力豊かでないければ、いけないということである。

SMプレイを、こうした面から掘り下げてみると、SMプレイの、ありとあらゆる可能性を追求することになる。そこにはSM心理から一万人もの首をはねることもできる空想サジズムまで、いろんなことが考えられる。こうした中からプレイとして定形化されたものを、まずのぞき、残りを空想的な所産と現実的なものに、わけたとき、後者は単純プレイの高度化としての所産、つまり肉体的トレーニングによって達せられる高度の技術、たとえばアクロバット縛りの要素となり、演劇ポルノ写真を生むし、前者は絵や文学として自由に表現された場合、芸術品として鑑賞されることになり、ともに人間生活を豊かにするものとして活用されることになる。

この空想の世界が自由に可能になるところが、SMプレイの一ジャンル、つまり精神的レジャーの面白いところと考えてよさそうである。フロイドは、こうした性倒錯の一面を知ることにより、それをノイローゼ患者の治療として使うことを考えたが、巧まずして、この効果が現代にも現われ、SMプレイを楽しむものは、それを楽しむことによって現世

の束縛から逃がれ、精神的安定をうるという妙薬を服用したことになり、平素の生活において精神の安定という特効を得ている。もちろん薬だから毒薬となることもありうるが、それは推理小説と同様で、人によってはS的なものの服用は、サジ加減のいることは論をまたない。

こう考えてくると、古い道徳に支えられた人たちが、近代生活の中で強度のノイローゼになり、恍惚の人となるのに対し、若者たちが、新しいモラルの中で伸び伸びと生きているのは好対象だが、実はこうしたストレスの解消に原因があるのである。

SMプレイは現代社会には必要なものというところがこれからおわかりのことと思う。

(三) SMにおける精神性感情論

今たとえば、あるSM行為をしたとする。

非常にシンプルな型で、一人の男が一人の女を密室で縛る。この場合、男の行為は、きわめて能動的であり、それなりに相手の自由を束縛し、自分の自由を相手に対し最大限に勝ちえたと思つて優越感に浸ることができる。

ところが、その喜びの本質は何かと考へた

場合、あなたは何と答えますか。男が一つの行為が終わる時、受けた刺激は、具体的に何だったであろうか。男は相手の自由を奪ったのだから実行動をしたことはしたのだが、女が何の抵抗もなく、すんなり縛らせたとすれば相手から受ける具体的な刺激は、目で見た姿しかない。体で感じたことといえ、相手の手を握り、縄をかけた、感じしかないのである。相手から自分の感覚、性感帯を刺激されるということはないのである。だから、最大限の自由をかちえたと思つても、それは肉体的なものより精神的なものであつて、その快楽は本質的には肉の行為ではなく精神の喜びである。

縛り上げたあとで性交をしたとなれば別だが、縛るという行動自体には、男の性感をくすぐるものはない。それにもかかわらず、性の満足と同様の、ある種の満足を男がうるのは、その行為の代償としての喜びが、生殖行為の代償的な機能を果たすからに、ほかならない。

サジズムには、こうした代償的な喜びが常につきまとい、それは意識的には空想の力であり、無意識的には性行為と同じレベルで、男に還元されてくる。

一方、この場合の行動を女の立場から分析してみれば、どうなるか。女は明らかに両手の行動を失ったのであり、それに伴う苦痛は男の自由の喜び、つまり精神的であつたものに比較すると、きわめて則物的、感覚的なものである。ところが、それでは女は単に苦しみだけで、そこに女の喜びはないのかといえば必ずしも、そうではない。

では、その女の喜びは何であろうか。それは次にとるであろう男の行為を想像することから起こる。常識的に、そのような場合、男が女を縛っただけで、満足するであろうか。一応、第二の行為として男が手で女の乳房を触つたとする。その場合、男の刺激は第一の場合と同様、殆ど、ないにくらべ、女の刺激は、それ以上に大きく、それ以上に則物的である。それは自分の抵抗が抑止されているだけに、比較にならないほど強烈であり、自由の身の時に比べ、大きく感ずるものである。

そうして、こうした第二の行為は、第三、第四の行為を予想させる。次に、どこにさわられるかわからないという不安は、逆に五体の感覚を一きわ、とぎすませ、女が男に愛を感じる場合、その期待は、はるかに大きく

豊かになるものである。女の感覚的な喜びはこうしたところから精神的なものに結びついてくる。男が、くり返しによって次第に精神的なものから感覚的なものへと理性を失わせてくるのに反し、女は逆に理知的なものに目が開かれ、次第に興奮してくる。

こうしてSM行為を通じ単なるプレイとしてではなく、愛の本質を見い出そうと、男も女も熱中するようになる。こうしてSMを経験した二人は、その終局の行為、つまり性行為があるうとなかろうと、それに似た満足を味わうことを疑うものは誰もなくなる。しかも単純な性行為より、はるかに豊かな思想と感情に支えられ、SMはプレイする人自身をうるおすのである。

これで、わかるようにSMの行為は本質的に創造力、つまり、空想的なものへの飛躍を生む要素を持っているものである。

男が夢精をするとき夢見る世界のように、男のS的行為の中には、こうした創造力を倍加させる要素がある。それが加わってSMプレイは完成し、その喜びは幾何級数的に増大する。また女のM的行為も男同様で、その感覚的刺激は、きわめて人の心を、うるおす。従って、こうした創造的要素を純粹にとり出

し、それを表現するとなると、それは当然、そのまま絵となり、SMフォトとなり、SM小説となって独立したジャンルを形成してくる。これがSMの芸術的なジャンルである。

空想の世界では、人間はすでに不滅のものとなっているため、いくらいじめても、いくら殺しても死なない。そして、その不滅の美女が、つぎつぎに現われてくる荒唐無稽の出来事は、逆に、現世の出来事以上に真実味を帯び、いきいきとして描かれ、それを見る人読む人を喜ばせてくれる。そこでは殺人も犯罪にはならないし、むしろバカなことだと失笑の対象になるにすぎない。空想の世界では一般の世界での高蹈的なことより、純粹に、真に迫っていることの方が尊いのである。

× × ×

ところでこうした空想の世界は女性の場合には、どんな受け止め方をするものだろうか。先にも述べたが、Mの世界では、きわめて即物性が強いこと、しかも感受性が鋭敏であることから、一、二度の行為では空想的になりにくい。猫の膚をなぜるような感じで、高蹈的な思想のハネを、のばすまでに行っていない。しかし、一呼吸を置いて回顧する場合、また事件を追って語る被害者の話に似て、真

実味あふれて、味わい深いものが生まれてくる。つまり、ストライキの主婦のシュプレヒコール、CO患者の苦悩、水俣病患者の家庭の苦しみなどは直接、患者の口から聞いた場合、生々しすぎて文学の対象になりにくい。それを第三者が、さも経験したように語るとなると、きわめて純度の高い文学作品になるように、M的空想は回顧的であり、延々と長続きするものである。

したがってSM小説は、すべてSをエンジョイするものでなく、ストーリーはSでもM的要素を味わうものが多い。S小説は、たいてい古い概念のSを遂行したというストーリーが多い。つまり自分が神となってSを行なっているという発想法からなっている。M小説は、すべて実感として、とらえられ、その描写は生々しい。このためSM小説の中ではSは常に滑稽であり、俗悪的であり、また悪魔的であるのにたいし、Mは常に人間的であり、常に情感に濡れている。だから小説はSだけでは成立せず、S的部分より、むしろM的要素をアピールすることに実感を盛り上げているのが常である。

記

手

M^マ
の
性^{さが}
に
泣^な
く
私^{わたし}

木^き
村^{むら}
洋^{よう}
子^こ

私はなぜ、このように奇妙な性癖に悩まなければならぬのでしょうか。

普通のセックスだったら、自分がその気に

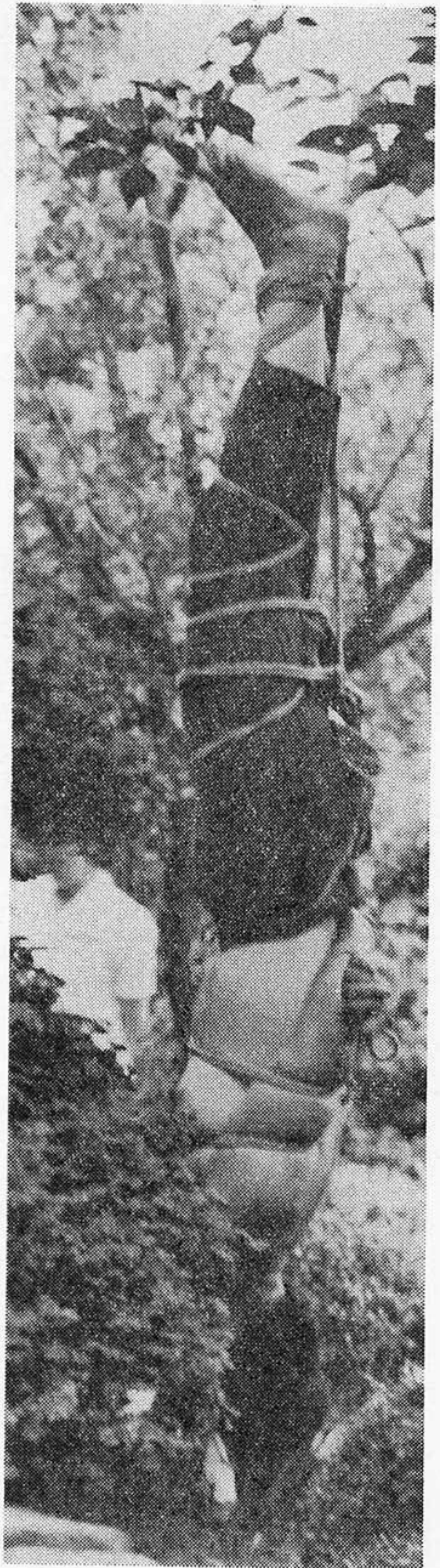
なりさえすれば、いくらでも、その機会はあるのですが、因果なことに、私は単純な、それには一向に興味が湧かないのです。不感症

というのは、こんな状態を言うのでしょうか。

人の前に身体を晒したり、無理矢理に、女としてかくしておくべきところを、さらけだされたり、身体を縄で、くびれるほど縛られ力強い力で、いじめ抜かれたり、縛られなくても、汚いことや、みじめな犬の真似なんかを強制されたりする時の、あの、全身が燃えつきてしまうような感激は、普通のセックスからは一つも起こってこないのです。

足の裏や、もっともつと汚い個所を舐めさせられたり、身体がバラバラになるほど、縛られてみたいと願う強度のマゾなのです。

私は、そんなことを考えただけでも、自分で不思議に思うくらい、凄く興奮してしまう





のです。時には、そんな空想を現実に体験してみたいと、盛り場歩きをしてしまいます。

寒い冬の間は、そういう気もあまり起こらなかったのですが、そろそろ暖かくなってまいりますと、私のマゾの虫が、もぞもぞと這いだしてきて、私をそそのかすのです。

私は以前から、大阪の場末の賑やかな盛り

場を歩くのが好きでした。盛り場といっても庶民的な、ふだん着で、ぶらつくようなところが好きでした。そして、私が家を出て、しばらくの間ですが暮っていたことのある地下鉄動物園前から旭町、飛田の附近、ジャンジャン横丁から天王寺公園へかけての街が、なんとなく自分に馴染めるのでした。

今でも私は、休みのとれた日は、距離的に相当はなれている、その盛り場へ足を踏み入れるのです。環状線の電車を利用するときは天王寺駅で降りて地下街をぶらついてから、天王寺公園の中を通過して新世界へ出ます。なんとなく、うらぶれ果てたといった空気の中に、やるせないような、それでいて活気のある街の風景が私は好きです。

ストリップ小屋の看板を見るために、私は寄り道をしてまで、この通天閣の下まで、つい来てしまうのです。そして、タコ焼き店や串カツ屋の裏通りのゴタゴタとした細い道をわけもなく歩いて、ガードの下をくぐると、小便くさい公衆便所のあるところへ出てきます。このあたりは、私が以前に、うどん屋さんに住み込みで働いていた頃、よくブラブラと遊びに来たところです。

環状線ではなしに、地下鉄でこの界限にまいります時は動物園前で降りて信号を渡って飛田大門通りの方へ歩いてゆきます。と申しましたが、いつも私の歩きますのは、賑やかな大きな店の並んでいる表通りではなくて、穴のあいたドブ板のスキ間から異臭の放っているような路地の奥の裏通りが主なのです。

何年か前、私がしばらくの間、住んでいま

した懐かしい町。やはり私は、どうしても、そこへ足が向いてしまうのです。何年か前と今と同じ風景だったら、ホッと、変わっていたりすると、なんだか、よその街へ来たような軽い失望を感じてしまいます。

阪神高速道路が延長になったので、立ちのく家があったりして、なんだか自分の古巣がこわされたような気持ちになります。昼は、物懶く眠ったような、この街も夕方近くになりますと、俄然蘇ったように息づいてきます。

私は、この街を夕方近く訪れるのが大好きです。早ければ、まだ眠っていますし、夜余り晚くなりますと、年増女の厚化粧のようにケバケバしく脂ぎってしまいます。

私の夢は、やはり被虐につながっているのは、悲しいことですが仕方ありません。

なにも、こんな街まで出向いて来なくなつて、空想力の働く人だったら、十分にマゾの夢を満足させることは出来たでしょう。でも私は、やはり、こうした喧噪な下町の雑踏の中に、この身を置かないことには、現実感が起こらないのです。

静かな家で、一人、部屋にひきこもっていますと、こんな街へ出たくて、出たくて仕方のない焦りのようなものが、私をせきたてま

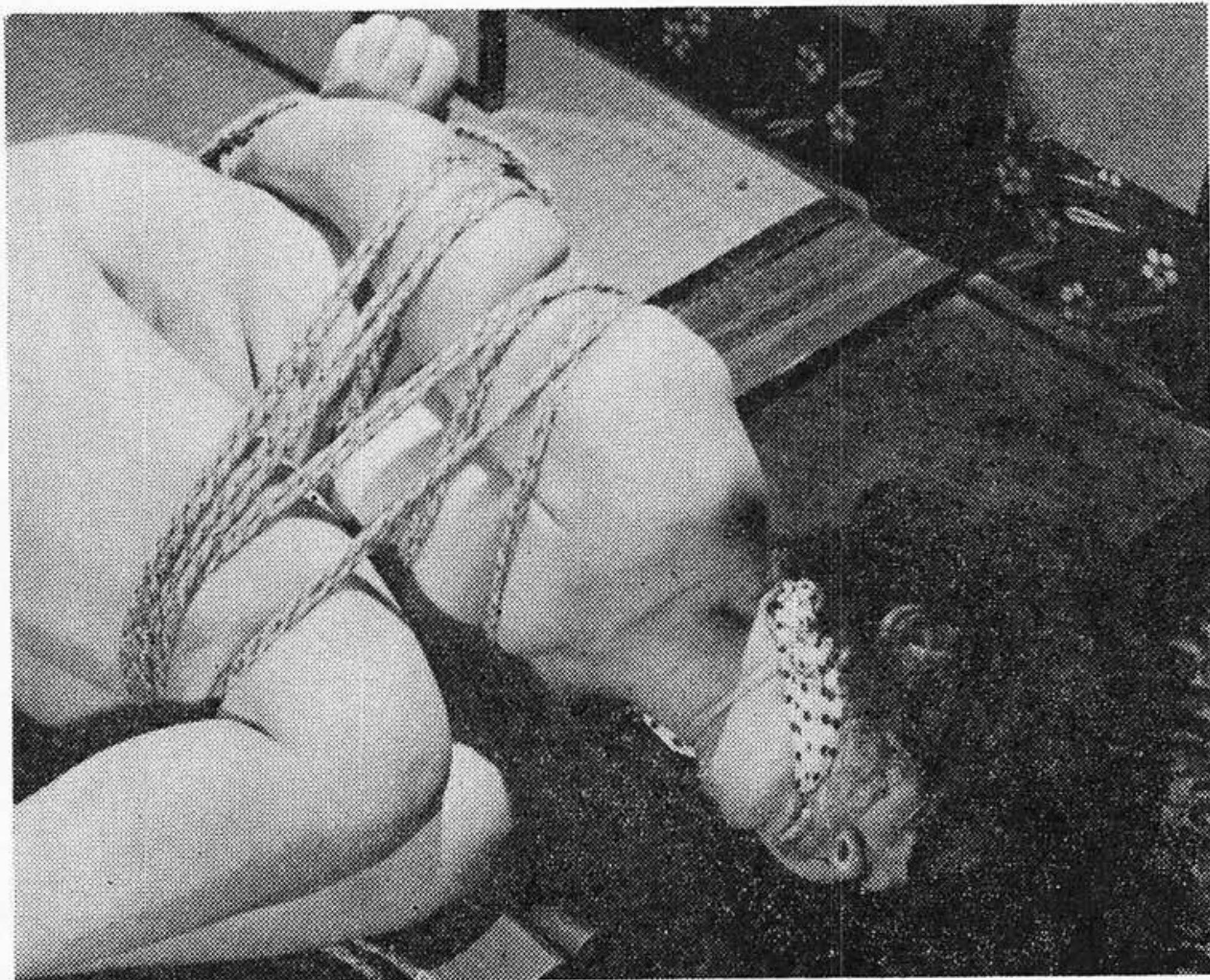


す。といっても、この街へ来たからといって特別に変わった体験をするというわけでもありません。でも、それでいて、一人で静かにしていると、来たくて仕方ないのです。仕事をしていて忙しい時は、まだいいのです。手持ち無沙汰の夕暮れ時、私は、いたたまれないようなマゾの想念に悩まされるのです。

今日は朝から雨が降っております。二日は

ど前から、ふくらんでいた桜の蕾が、急にパツと開いたかと思うと、この雨です。

それでも、私は愛用の軽自動車に乗って、お店へ行ってみましたら、今日は仕事が休みだと言うのです。私の今のお仕事は、宣伝カーに乗ってスポンサーの商品のPRをするのが役目なのです。多くの場合、その商品の名前を呼びたてるだけではなく、使用法などを



実物宣伝することが多かったのです。

ですから、雨の日は、スポンサーによって

は宣伝効果がよくないということから非常に嫌うのです。そんなわけで、その日の宣伝コースが予定されていないながら、突然中止になることも間々あります。そんな時は、日当の一部だけをもらって帰るのですが、

定まった休日のない私にとっては、よい骨休めになるのでした。でも、仕事だといって家を出てきた今日のような場合、夕方までに帰ればいいのですが、一旦、仕事中止だからといって家へ帰ってしまつと、それから中々外出の口実が見つからないのです。

パチンコで昼近くまで時間をつぶして、アベノの地下街で、お好み焼きでも食べて、旭町通りを飛田の方へ向かって、ブラブラと、歩いてゆきます。勿論、うねうねと曲

がった裏通りばかりをよって歩くのですから時間がかかりますが、私には土地勘があるところですから、道に迷うということはありません。

行き止まりのように見えても、家と家との狭い間を通り抜けて、次の辻へ出れるという抜け道も知っております。

そんな淋しい道を一人歩きしている私を、スケコマシの若い男が誘ってきます。私は何も知らない家出娘のようなフリをして、その若い男の甘言に、まんまと乗ってしまい、安宿へ連れ込まれてしまふのです。

いじめ抜かれたいというマゾの想念に、取りつかれている私は、大して興味はなくてもその男に易々として身体を与えているかもしれません。その後で起こるかもしれないマゾ劇に期待を抱きながら……。

もし私が、お座敷ショーなんかで、御開帳を強要されるとしたら、私の感激は最高調に達することでしょう。強制的に縛られたり、叩かれたりするSMプレイも、私がマゾ役になるのでしたら、まだしも満足です。

沢山のお客さんの見守る中で、私が男の人の一番きたない所を、舐めさせられるというショーも、やらせてほしいと思います。

犬のように四つん這いになって、足の指に挟んで差し出すパンを食べたり、顔の上にお小水を掛けられるといったショーでしたら、やってみたいのです。

私が、そんな場末の裏通りを歩いていても、そこまでの誘いは、まだ受けません。一度は、実演の女役がメンスで出られないからお前、やってみないかと言われたことがありました。通行人の中で、お金のありそうな人を、四人とか五人集めて、シモタヤの一室でやる実演だそうです。私は、その話を聞いた時、胸がドキドキし、コミカメから首筋が脈うつような気持ちに襲われました。

本当は、無理矢理、暴力でも脅迫されて実演を強要されるのでしたら、私にとっては最高でしたが、そのポン引きの人は、お客の人数が少ないので礼金も沢山やれないのだかと、控え目な口ぶりでした。

それも結局、お客の集まりが悪かったとかで、お流れになり、私も出演する機会がありませんでしたが、薄暗い街角で聞いた、その話は、私にとっては非常な感激でした。本当は礼など取らなくても、只でも、やりたい気持ちなのですが、いくらなんでも、自分の口から、そんなことは言えません。

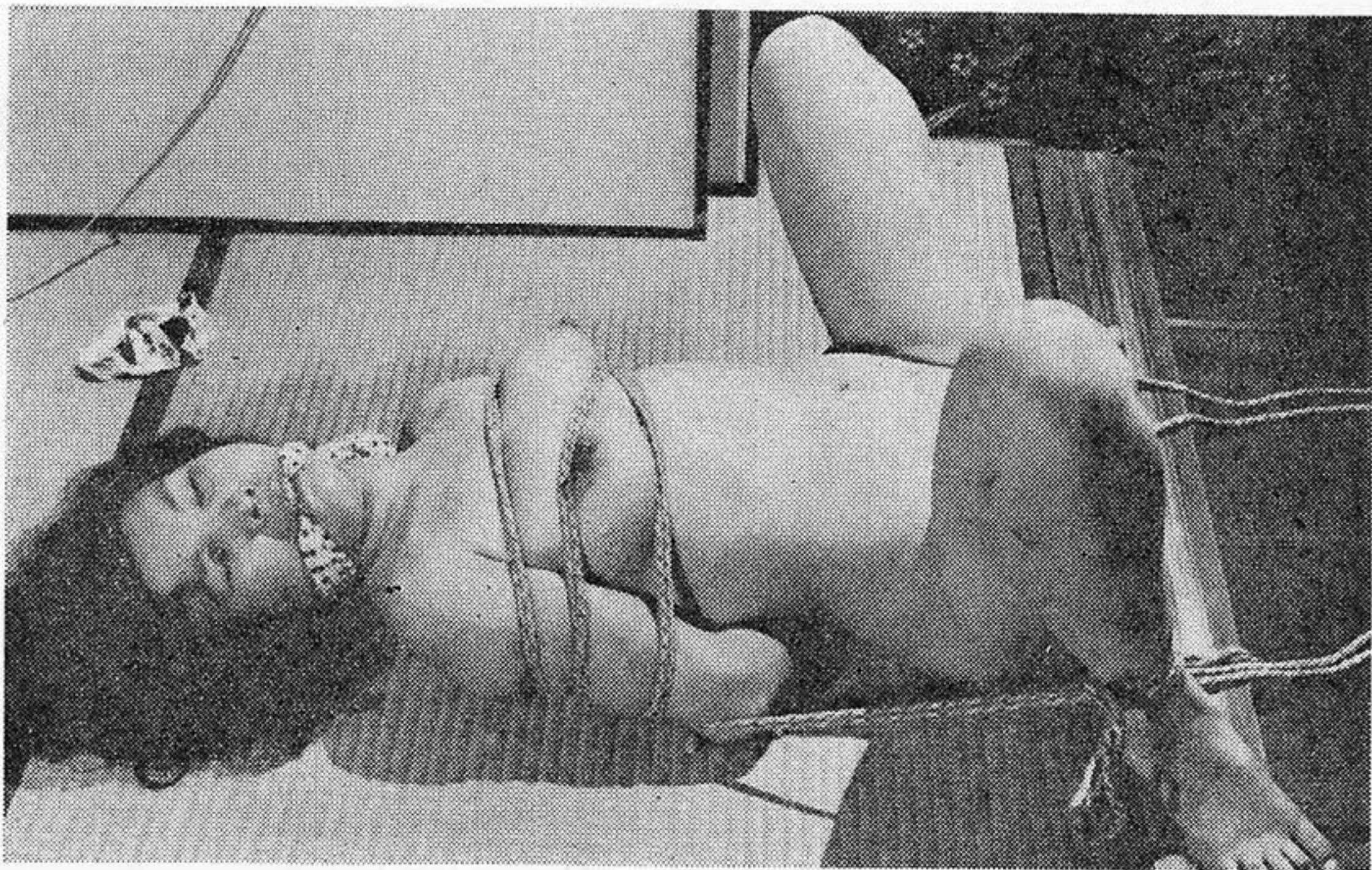
私は一つの特技を持っています。

私は虫歯一つない丈夫な歯でしたが、数年前、ある理由から歯を全部、抜いて、今は総入れ歯にしています。歯を抜いたあとが、舌でさわると細い線が感ずるだけで、歯茎は、すべすべとした坊主頭になっています。

こう申しますと、もうすでに、おわかりになったことと思いますが、私は男性の方を喜ばすために、自分のマゾの性癖に一番、適した方法を会得しているのです。

フェラチオ——という、今では、普通の夫婦の方でも、あたりまえのように、前戯の一種として行なわれている、この行為が、マゾの私にとっては、正常のセックスでは到底得られない快感を覚えるのです。

私が天王寺公園でタツさん



という女性と知り合いになった頃は、その仲間の女の人に、△尺八専門△という変わった

年輩の女性がいたことを聞かされたことがあります。その女の人がマゾであったのか、どうか、私にはわかりませ

んが、なんでも、非常に上手だという評判でしたから、ひよっとしたら、私のように強度のマゾだったのかもしれない。

それと、いつも二人連れで仲良くしている女の人で、一人はS、一人はMというコンビの人もありましたけれど、今はどうしているでしょうか。世界の映画館のうしろの座席で男を拾ったという話を、よく聞かせてくれたりしましたが、二人が同性愛の関係のように思えて、私には、なんとなく薄気味わるく感じたものでした。

私が自分のマゾの性癖を満足させることの出来る、そうした行為は、男

の自尊心を或る程度くすぐるのでしょいか、殆どの人は、「ねえ、お願い」と言えば、苦笑しながらも許してくれます。

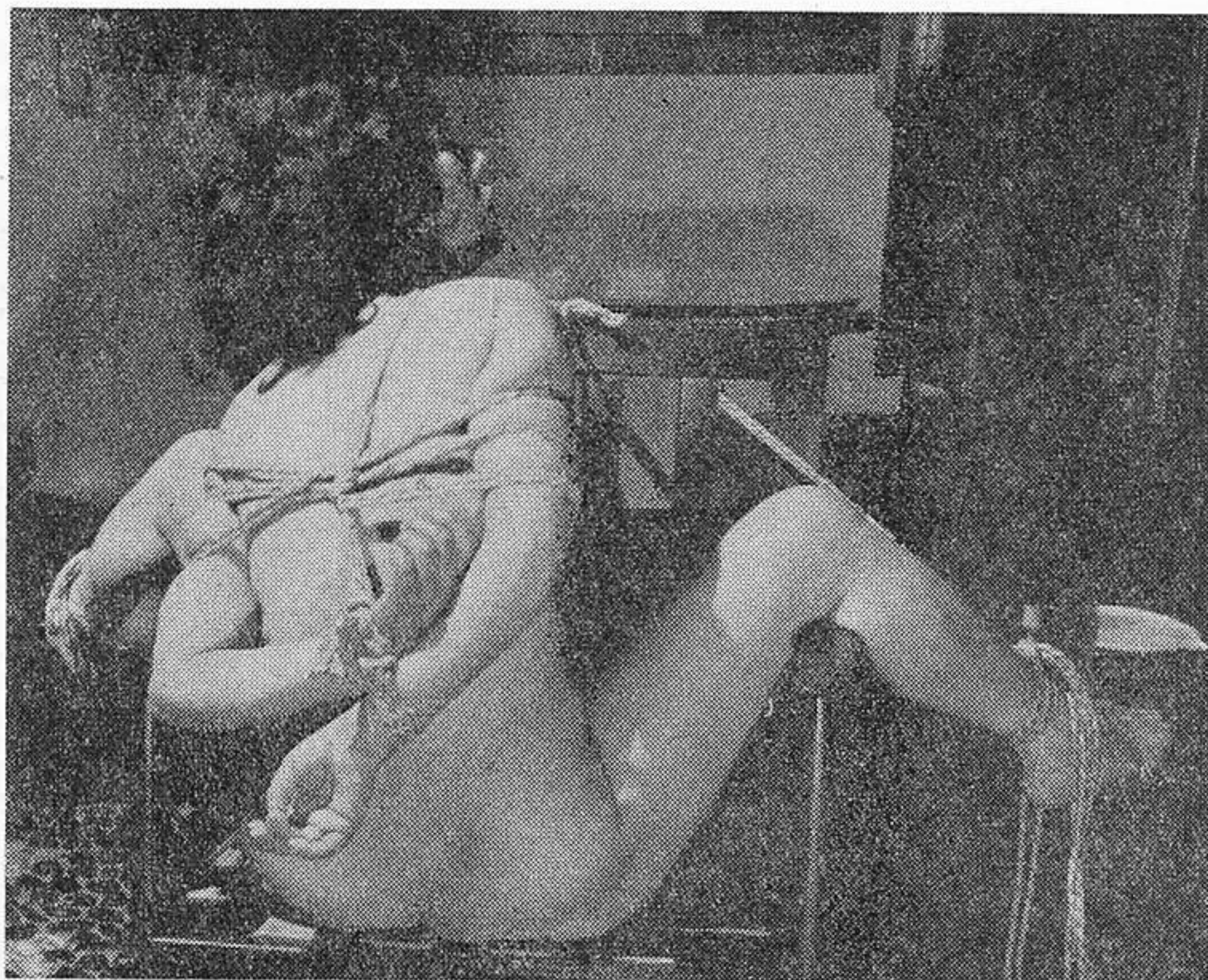
そんな時、私が顔を一寸かくして、入れ歯をはずしますと、びっくりする人が多いので大体は、うまく気づかれないように、後向きになって歯を取り出します。

歯がすっかりないということは、それだけ口が大きく使えるということですし、それに堅い歯の先で粘膜を傷つけるかもしれないという心配が少しもありませんので、それはもう、いろんな技巧を最高に使うことが出来るのです。

マゾの性癖からして、そういうことの大好きな私のことですから、殿方を最高の状態で陶酔の境地へ導いてあげることが出来ます。

もし、その男性に、少しでもサドの傾向があったとしたら、きっと私を喜ばせるような行為をしてくれるでしょうが、そうではなくても、私はセックスよりも、この行為の方がいくらましかも知れません。なんという因果な星の下に生まれてきた私でしょうか。

私は、自分のこのマゾの性癖は、どうすることも出来ないと思い知るに至った、あの日の体験を、今、ここに思い浮かべています。

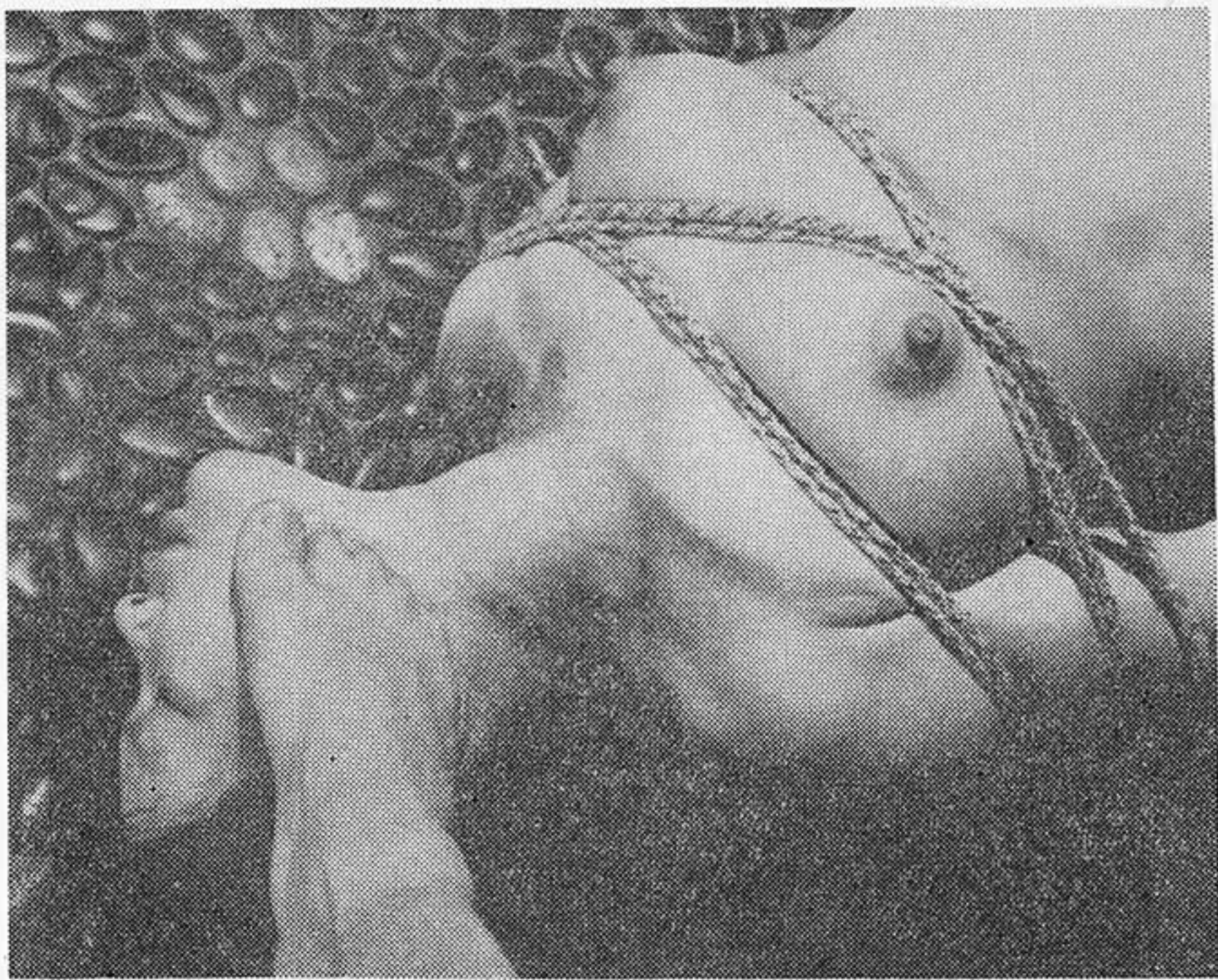


その日は、八月の、非常に暑い日でした。

私達三人の女性は、生駒山の中腹にある、その別荘まで坂道を歩いてきましたので、汗みどろになって、咽喉がからからに乾いてしまっていました。応接間へ通されてすぐ、お盆に盛って出された冷たい西瓜のおいしかったこと、未だに忘れることは出来ません。

初対面の私達三人の女性は、お互いに相手と張り合っているようで、打ちとける事もなく、言葉を交すきっかけもないまま、冷たい緊張を続けていたのですが、応接間の丸い大きなテーブルを囲んで、西瓜の舟と一緒にかぶりついていましたと自然と気持もほぐれてなんとなく世間話をするようになってきました。余りにも咽喉が乾ききってしまったので、お上品に辞退する者は一人もなく思わず皆んなして、出された西瓜に、とびついてしまったのです。

男の人達は、縁側で立ったまま、西瓜の種を庭の方へ向かって、ペッペッと吐き出しながら、声高に話し合っています。カメラを持った人以外にも、助手の人や手伝いの人が数



責められる役として同席しているのは、気に入りませんが仕方ありません。出来れば、責められる役の女性は自分一人であとは責める側の男性ばかりであって欲しかったのですが、そんな我儘は許されそうにありません。

休憩が一段落して、いよいよ、責め写真の撮影に入ったのですが、私が一番慣れているということで最初に縛られることになりました。部屋は、十帖ほどの広さのが幾つもあった、それが全部、開け放ってあって、縁側のまわりの庭園は、池をめぐって、ちょっとした公園ほどもあって、樹立に囲まれて塀も見えないくらいなのです。

素裸にされた私は、縁から庭へ下ろされました。妙なもので、只、裸のまま、歩いてゆくよりも、少しでも、後手に縛られている方が心が落ちつくのです。ですから、私は、その縁のところで、縛ってもらおうよう、後手に回して待っていました。

男性ばかりか、衣服を着た二人の女性までが、そんな私をじっと、眺めているのです。何も着けていない素裸の自分を、男性にだけ

人いるのが、私のマゾ心を快く刺戟します。自分の被虐の姿を、この男の人達に、じろじろと眺められるのだと思うと、もう、それだけで胸の高鳴りを覚えるのです。

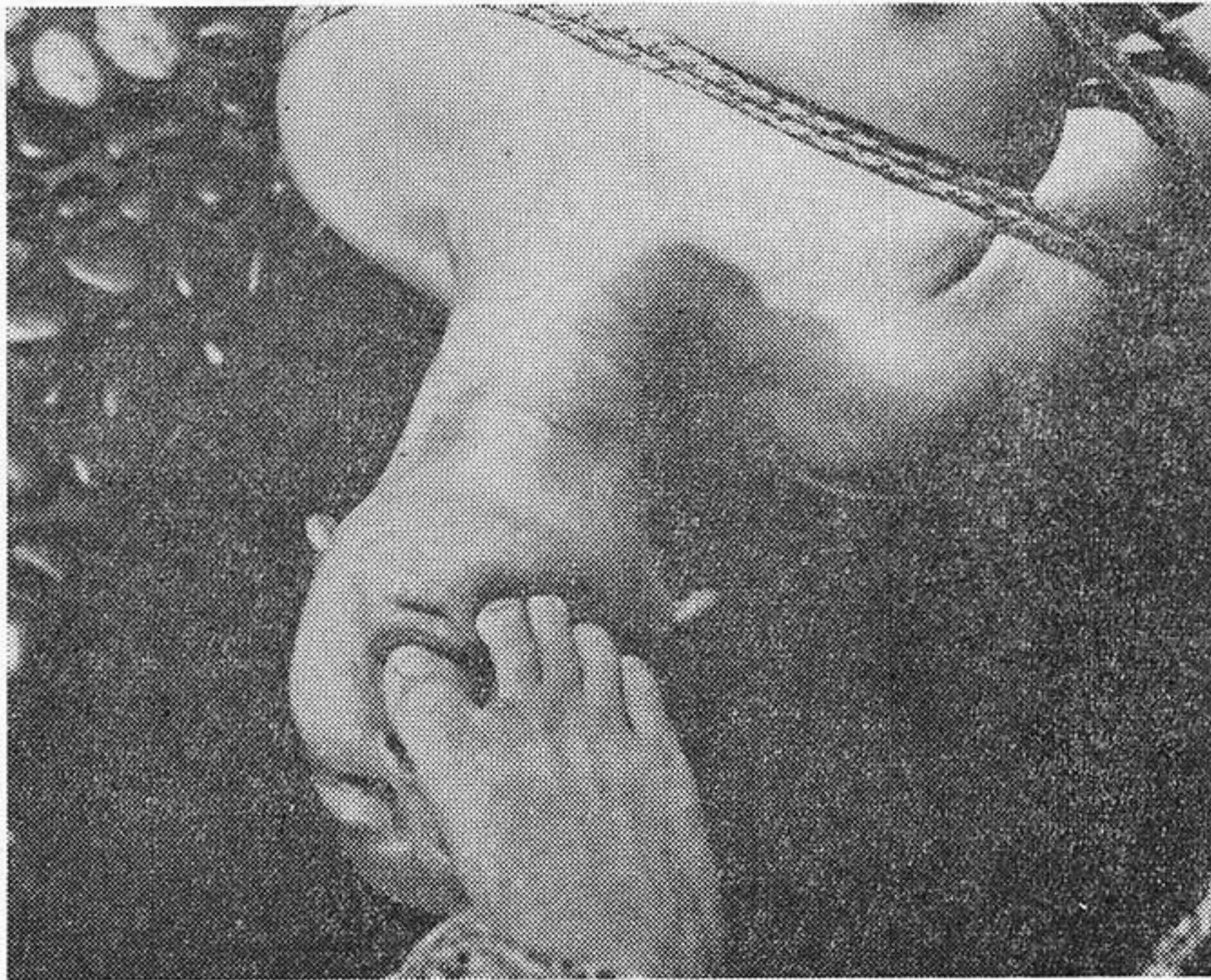
私以外に、二人の女性が、やはり縛られ、

見られるのでしたら、それは私にとっては、快感につながるものでした。しかし、そこに同性がいるということは、私にとっては複雑な心境でした。

私は折角、うしろに回した手首を縛られることもなく、ハダシのまま追い立てられて植込みの中を歩いて、庭の真中にある池の方まで連れてゆかれました。そこまでは、二人の女性も追って来ず、私はカメラを持った三人の男性と助手の二人の男性、都合五名の男達に囲まれて責められることになったのです。

露出癖が強くて、屈辱的なことを強いられることの好きな私ですが、縛られることも決して嫌いではありません。大体女性としては素裸にされるだけで、もう心中、ただごとではなく、それだけで相当の屈辱感を感じるばかりでなく、私の場合は性的な、強い快感さえ覚えるのです。ましてや、裸のまま縛られるということは、身の自由を奪われて、さてその次に？ ということを考えますと、自然と胸が高鳴ってきます。

そこがまた、男性の方とは違うところでしょうが、あくまでも受動的な女の立



場として自分の方から、「こうして下さい」とお願いするわけには参りませんから、どうしても、されるがままになってしまいます。池にかかっている石の橋の上に坐らされたり仰向けに寝かされたりして、私は全裸で縛

られたまま、いろんな角度から写真をとられました。が、まわりから数人の男性の目にさらされているのですから、掩うものとして何一つない私の身体は、見られるままにしている他なく、私は四方からカメラに狙われながら、うっとりしていました。

鉄扉の前のコンクリートの上に正座させられて、その膝の上に、一つ、二つとブロックを載せられて、石抱きの刑に処せられたりしました。強度のマゾ性を持つ私としましてはその事自体、そう大した苦痛には思えませんでしたが、五人の男性が、ああでもない、こうでもないという口々に好き放題のことを言い合いながら私を一つの物体のように無難作に取り扱っているのは好きでした。

その日の責めで、私が一番にマゾの心をかき立てられたのは、古墳の前で吊られたことと、松の木の枝から逆吊りにされた事です。

勿論、それまでには、三人の女の連縛とか他の女性のそれぞれ単独の責めもありましたが、それはそれとして、やはり責めに対して一番よく耐えることが出来るのは、私だということで、吊り責めに



されることになったのです。大の男が三人もいることですし、それに、滑車なんかの準備もあり、広い庭園には格好の責め場所にも事欠かなかったので、すぐに吊り責めにかかりました。

この辺は生駒山の麓から山寄りに登ったところで、先住民族の墓が沢山、残っているのだそうですが、この別荘のお庭の中にも相当大きな古墳（何人もの人間が中へ入れるくらいの広さ）が、ぽっかりと真黒い口を開けています。昔は石棺があったそうですが、庭石に使ったそうで今はなく、奥は物置のようにして使っているのだそうです。

私は、その古墳の前で全裸のまま後手縛りで吊られてブラリブラリと揺れていました。

足の爪先は、地上から一メートルも離れているので、私は足を土地につけることなんかは諦めてしまっ、吊った縄を中心にして、ゆっくりと身体が回るのに、まかしてしまし

た。自分の身体が回るといよりも、自分の目に見えている周囲の風景が、私を中心にして、回っているのを、じっと見つめていました。いつまでも、いつまでも……。

見物の人達は、吊られている私のまわりに集まっています。カメラのシャッターが盛んに切られています。男の人達ばかりか、二人の女性も、そんな私を見つめています。

晴れがましい気持ちさえました。全裸の私は、もう、どこも隠す、すべさもなく、ただ見られるのに、まかしておくより仕方がないので。

それでも、私は「降ろして」とは頼みません。それは、一体、どうした心境なのでしょう。そうして、私は、相当長い間、吊られたまま放置されていました。

後手吊りを解かれたあとも、私は、まだまだ元気でした。それで、引き続いて、逆さ吊りをやることになったのです。

古墳とは反対側の樹立の中の本の松の木が選ばれて、その横枝にイケニエの私が逆さ吊りにされることになったのです。

横枝にロープが結ばれて滑車がつけられ、太のロープが張られると、七十何キロもある男の人が、ぶら下がって強度を試しました。七十何キロの人が、ぶら下がっても、大丈夫ということでしたので、四十三キロの私が吊られても安全なことは間違いありません。

それでも、地上二十メートルもある横枝に逆さに吊り上げられるのですから、如何にマゾ性の強い私だとしても、気持のよいものではありません。もし、何かのはずみで、縄が切れるとか、横枝が折れるとかしたら、私は頭を下にして落ちてしまうのです。

下には、花崗岩の庭石がありますから、逆さに落ちて頭を強打したとしたら、私の命は立ちどころになくなってしまいます。

『マゾの究極の願いは死である』と言われて

おりますから、SMプレイの果て、絶命したとしたら、私としては本望かもしれませんが滑車に通したロープを、二人がかりの男の人達に引っぱられて、私の身体が、逆さに、じりじりと、上がっていった時には、実際には、よい気持ではありませんでした。

両手は後手に縛られていて、勿論のこと、自由はききませんし、ましてや、足首を空に向けて揃えて一本の棒のように、逆さに吊られてゆく身体の方は、も早や、されるがままにされてゆくより仕方ありません。

もう、どうすることも出来ないのだ、と諦めてしまえば、反って心が落着きます。力のかかっている足首の痛さや、全身を締めつける縄目の苦しさは、一定限度を通り越しますと不思議に苦痛は、やわらいでできます。

苦痛どころか、全身を強く締めつけている縄目が次第次第に快感に変わってゆくのは、やはり私の身体に巣くっているマゾの性^{さが}のた

めなのでしょか。

一本の吊り縄を中心にして、くるくると回ってゆく私の身体、まわりで人の声が、さかんにしているのが、意味はわかりませんが、私の耳に入ってきます。

天と地の逆さまになって写ってくる私の視線の中には、男の人ばかりか女の人の顔も見えます。鼻の先に何か、よい匂いがしたように思いますが、それがキナ臭い匂いだったかもしれません。

逆さに吊られて、宙に浮いている私の身体が、一本の縄に支えられて揺られながら、回っているのですから、私はまるで、お酒と船とに酔ったような気持ちになりました。

それは、あたりの風景が、一瞬、見えなくなるほどの身体の中から湧きあがってくるような、今まで経験したことのない激しい快感でした。私は、いつまでも、いつまでも、こうされていたと思います。生まれて始

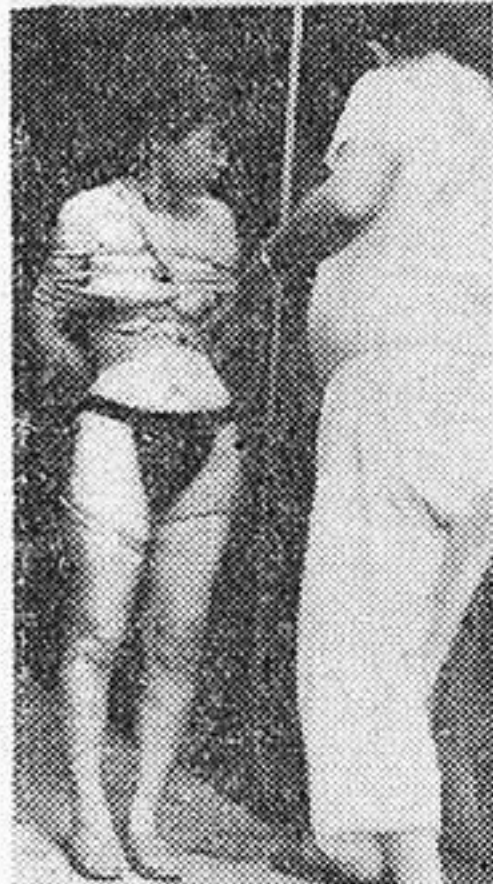
めて、マゾの開眼をしたような気持でした。

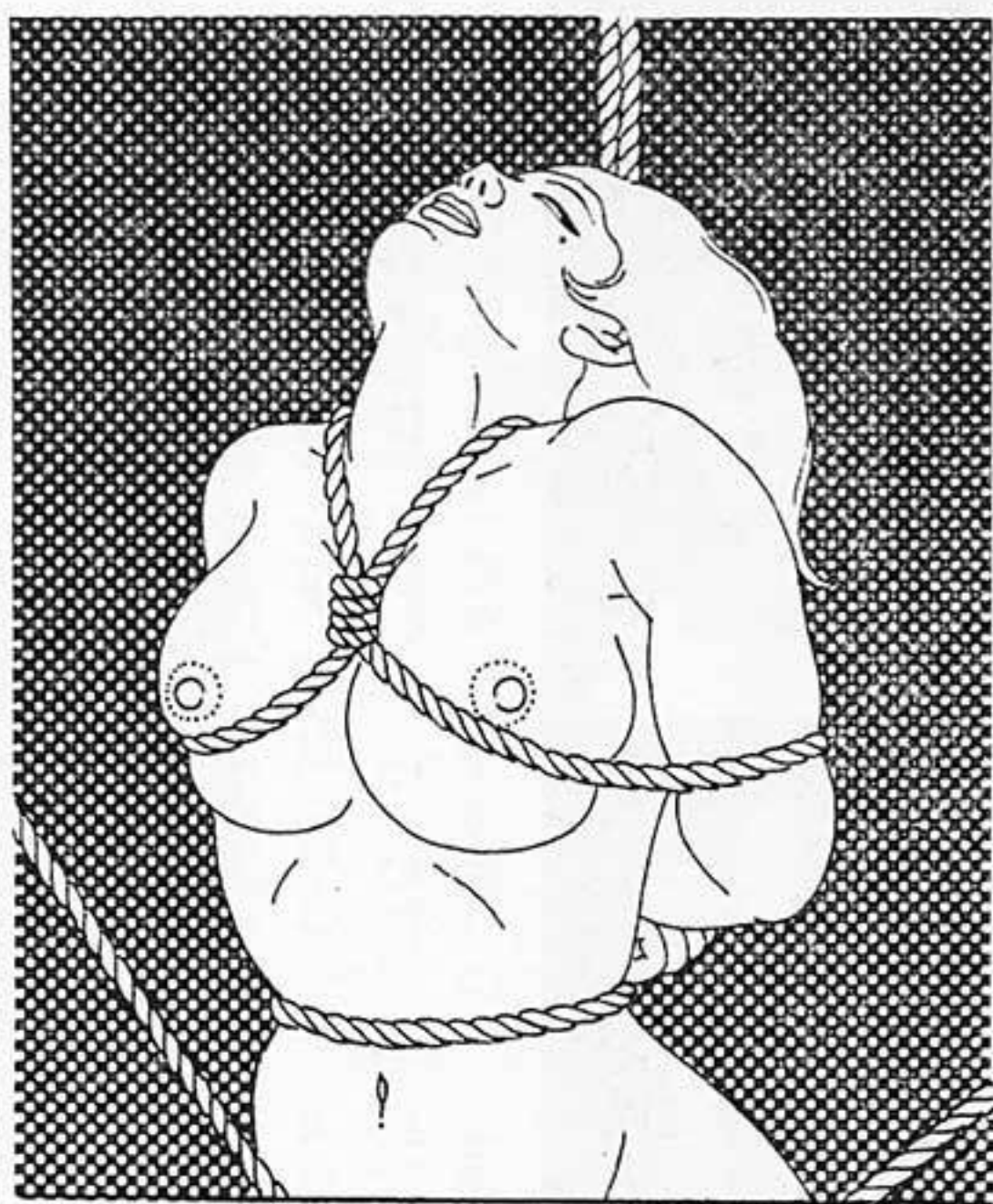
気がついたときは、すでに縄は解かれていて、庭の芝生の上に寝かされていました。

男の人達に腕を支えられて、縁側へ戻る間も、私の足はフラフラしていました。今までに、何が起こったのか、私の頭には、はっきりと残っていません。帰り支度をしている人達の間で、私一人だけが取り残されて、裸のまま、ぼんやりとしていました。今、その当時のことを思い出してみしても身ぶるいするような懐かしさが、こみあげてきます。

こんな私を、思いのままに責めて下さる方がありましたら、お気のすむようにして頂けたら、私はうれしいです。休みの日には、編集部へお電話することになっていますから。

もうこれで五回ばかり、編集部から聞きたという読者の方とプレイをしました。その時のことは、また、改めて書いてみたいと思います。





カット・マエダヒオミ

自伝的 S M 小説

そう はち ろう どう てい じ だい

双八郎の童貞時代

加 沢 雄 作

桂双八郎は19才、浪人、女遍歴なし。つまり童貞だった。高校は、県下でも秀れた受験高校であり、その環境は、彼にとって満足するものではなかったが、外へ目を向けない限り、自然なものであった。

だが、浪人になり広い目を持って世間を見た時、自分の遅れた考え方、女性への知識、忘れていた青春、忘れていた遊び、そんな言葉が漏らすようになっていた。

浪人をして、テストの点はあまり伸びなかった。しかし、ただ一つの彼の取り得は、自信過剰とも思える自信家であった。そして空想家で、また、前後の見さかいかもなく、それを実行に移す実行力であった。

彼のこの特異な性格を知って仲間となった男三名。加古淳、大沢

純二、中西修太。彼らは、なにかにつけ、バカな空想をしては、実行しようと試みていたのだった。彼らは自らをブラック団と称していた。

桂双八郎は仲間には黙っていたが、今流行になっているSM雑誌に以前から興味を持っていた。彼は欲求不満のはけ口として、いろんな種類のSM雑誌を買いあさっては、若い血をたぎらせて、読みふけていた。

もう普通のエロ本では、オナニーなんかは、できなかった。彼はSMと併行して『悪』への興味も捨てきれないでいた。

学校をさぼって、外でタバコを吸う時の爽快な気分、本を万引きする時のワクワクするような喜び、SM雑誌をかう時の後めたいようなスリル。また彼は、いつも、売春婦やバーのマダム、ホステス

ヒモつきの女などのことを思つては、そんな女達と友達になりたいなあと思つていた。

そして、今の自分を失い、心の底まで悪に走り、自分を汚したく思つていた。それは今のテストの点に一喜一憂する自分や両親たちへの反感の気持だった。

彼は今の浪人生活には何の興味を持っていなかったし、大学への希望もなかった。ただ近所への体裁だけで浪人生活をやっているようなものだった。

桂双八郎は、高校三年の時、ふとしたことから一人の女性と知り合いになった。彼女の名前は繁子と言つた。繁子は双八郎と同じ19才で、ある広告会社に勤めている。

彼らのデートは、繁子の仕事が終わってからなので、いつも五時三十分ごろになる。小さな本屋で彼がよくSM雑誌を買いに行く店で二人は待ち合わせをした。彼らの目的地である公園は歩いてすぐ近くだった。園内のおちこちにいる多くのアベックの中に、学生服姿のカップルを見るにつけ、双八郎は自分の灰色だった高校生活を思い出すのだった。

あたりは薄暗く、女の膝の上に男が頭をのせているカップル。いっしょに寝ころんで、ふざけ合っているカップル。だまって大人しく話をしているカップルETC……。

双八郎は胸が、いっばいになった。ふと繁子の方を見ると、好奇心のある目で、いたずらっぽく笑つていた。彼女の話によると、まだ男を知らないけれど、キスだけなら四人ぐらいの男としたことがあるとのことだった。

双八郎は、今まで育ってきた環境が、あまりにも平凡で、常に社

会の表面しか見てこなかった自分を悔いた。男と女の知識は、雑誌でしか知らなかったが、その内容も、たいして信じていなかった。だから、楽しそうに、ふざけているカップルを見ても、容易に、その真似などできなかった。ただ好奇の目で他のアベックを見ているばかりだった。あたりの雰囲気は気おくれしたように、一向に気分

の盛りあがりはなかった。

このようなデートを重ねたが、二人の仲は、さっぱり進展しなかった。それどころか、いつも双八郎は繁子に押されがちであった。それは、彼が浪人、繁子は社会人であるというハンディもあったが双八郎にとって、同じ年の繁子を、完全にリードできないのが不満だった。彼は、その不満をいつもSM雑誌にぶつけて、その中で繁子を責めては頂上に達していた。

十月になっても、彼らの関係はキス程度までだった。その時の様子を彼は日記に次のように書いた。

八日曜日、いつものように彼女を公園に、さそつた。あたりには誰もいない所を捜しておいたので彼女を、そこへつれこんだ。芝の上に腰をおろし肩を寄せて足をのばし、ただじっとしていた。何かを待っていた。ただ時が過ぎて、日が暮れ初めた。ぼくは、いらいらしてきた。彼女の指が、ぼくの膝をピアノをたたくように、動いている。

僕は、もう衝き上げてくる欲望を、がまんがでなくなつた。ぼくは彼女の肩に手をかけて「目を閉じて」と頼んだ。彼女は唇に手をあてて目を閉じた。

ぼくの手が、彼女の手をつかむと、顔をそむけた。ぼくは、どうしてもキスができなかった。彼女を押し倒して、彼女の胸に顔をう

ずめた。そして、そのふくらみを楽しんだ。

彼女の顔をのぞきこむと、大きな目をあけていた。ひたすら彼女の胸に顔をうずめていたが、服の上からでは、全く面白くない。でも、僕が腕をまわして彼女を抱くと、彼女の手が、ゆっくりと僕の背中に回った時、僕は初めて彼女の唇に自分の唇を合わせる事ができた。

たいした興奮も感動も湧いてこなかった。もう終わりさ。これ以上に進める勇氣は、今の僕にはない。彼女の氣持が、ふわふわしてゐるのにV

二人のデイトは、いつも双八郎が繁子に、出てくるようにと電話をして、会ってもらおうという感じだった。それは、浪人の双八郎には当然であったかもしれないが、不満なものだった。SM雑誌の中では、彼女を奴隷として、自らの汚い部分をも、舐めさせていたのだったのに。

十二月にはいり、双八郎も勉学に励まねばならなかった。しかしS好みの双八郎はSM雑誌を読む都度、現実の自分と繁子との関係は不満であった。成績の伸びない不満を彼は、夢でのSMプレーで晴らした。

最近、電話をしても、繁子はなかなか会ってくれなくなって来ていた。この関係を逆転するには、彼の論理からすれば、SMプレーをやるより以外ないと思えた。

彼は、初めは面白半分でSMプレーの準備計画を練っていたが、だんだん本気になってきた。彼はSM雑誌片手に準備にかかった。大きなローソク、長いロープ、毛筆、はけ、その他、自分のまわりを見まわして、何でもかんでも、プレーに利用できないものはない

かと考えた。

カメラのリリースで、女の急所をついてやろうと考えたり、コンパスを見ては、これで乳頭をついてやろうとか、電池を見ては、これを入れてやろうとか、いろいろ考えた。

彼は勉強時間をおしんで準備した。しかしロープは、なかなか手に入らなかった。町を回っても、みつからなかった。中ばあきらめていたが、予備校に、なんとロープが、たくさんあるのに気がついた。彼は、さっそく、みんなの気づかないうち、それを盗み出し、近くの林の中に、うめた。彼は、そのスリルで、ますます、この計画を絶対的なものにしようと頭を、しばった。

彼は童貞だったので、その方の本を買って来て研究した。双八郎は、ついに繁子に電話する決心をした。

「桂ですが、繁子さん、呼んでくれませんか」

「もし、もし、なによ」

相変わらず、ぶっきらぼうな返事だった。

「明日、ひまだったら、会ってくれない」

「べつに、用事はないけど……」

氣ののらない、渋ったような口調だったが、双八郎は強引に、場所と時間を言って電話を切った。

荷物をそろえ、バッグにつめた。しかし、困難と思われる問題が一つ、あった。それは繁子を、いかにしてホテルへつれていくかということである。あの高姿勢の繁子が、おいそれと、ついてくるわけがない。しかし好奇心の強い繁子のことだから、見学しようと言

えば、ついてくるだろうと双八郎は考えていた。彼は以前から考えていた言葉を、くり返し練習した。そして、彼女とのSMプレーの

成功を夢みて眠りについた。

待ち合わせの時刻は一時三十分、いつもの公園である。もう十二月なので、とっても寒かった。すぐ話を切り出さねば、行く所に困ると彼は思った。時間が来るまで図書館へ行って勉強することにした。物理の問題を数題、解答したが、すべて、でたらめだった。彼は化学は得意な方ではあったが、最近では半分ぐらいしか取れなかった。

彼のバッグの中には、筆、カメラのレリーズ、マジック、画用紙クリップ、ギターの弦、マッチ、セロテープ、ヘアースプレーなど詰めこめるだけ詰めて来ている。最初のプレーとしては、多すぎるほどのものを入れていた。ロープは出発の時、取りに行くことにしている。

十二時に食事をすませた。軽くラーメンを食った。人目につかずに林の中に入ってロープを掘り出した。まるで宝物でも掘り出したような気持でバッグに詰めた。彼は、このスリルにニヤリとした。胸をはって公園へ向かった。出会うアベックにも、何の嫉妬も覚えなかった。手にはバッグを提げていた。しかし彼女の前で、セリフがスムーズに飛び出すか不安であった。

一時二十五分に行くと、めずらしく繁子は先に来ていた。真赤な口紅をつけ薄く化粧をしている繁子は、みちがえるほど、美しかった。彼はうれしかった。すかさず、彼女の化粧をほめた。

「自分、化粧する女って、きらいなんかと思ったら、喜んでくれるなんて意外だったわ」

繁子は双八郎のことを、『自分』と呼ぶのであった。彼は話を切り出す時期を待った。

「ねえ、どこへ行くの。私ね、もうこのあたり、あきちゃったの。今度、違う所へ行きたいわ。人が多くいる所が好きなの」

双八郎は返す言葉がなかった。ここで彼女を怒らせては、すべてが水の泡であった。彼女の前では、いつも下手にまわらねばならなかった自分を顧み、彼は、また、いつものペースで、ふり回されそうだと思った。

「私ね、買物に行かなくっちゃいけないの」

またしても、双八郎を困らせることを言い出した。もうSMプレーどころではなくなった。彼は、いらいらしてきた。

「私、カゼひいているの。ああ寒いなあ。このままだと、明日、休まなければ、いけないわ」

「じゃあ、腕、組もうか」

「私、カゼひいているのよ。うつしたら悪いから、組まないわ」

彼らは、しらじらした気持で歩いていった。そして、やっと喫茶店に入った。

大学、通ったら、どこへ行こうか、とか、テストの事、ジュリーの公演の事など、ごたごたと話をした。もう話の種もつきたので、揃って店を出た。外へ出ると、また寒さに、ふるえた。

せめて腕でも組みたかったが、強引にする気力さえ、双八郎にはなかった。彼が「ああ、ああ」と嘆息した時、繁子は「買物に、いかなくっちゃ」と言い出した。

双八郎は、返す言葉もない気持で、ひと言もしゃべらずに、ただバッグを、にぎりしめて歩いていった。彼女を送り、彼は無言のまま電車で揺られて帰った。家に帰っても、彼を待っているものは、受験地獄だけだった。

彼は、彼なりに勉強に打ちこんだ。物理も化学も昨年よりも自信がついた。今年こそは全部、合格を期待して、2月、3月と彼は試験を受けに京都、東京、神戸と飛び回った。しかし、結果は、一通の合格通知も来なかった。彼の家は、もう真暗といってもいい様子だった。

彼の心の中では、二つの心があった。一つは、自分の実力なさへのショック、もう一つは、家を飛び出して自由に生きれるという大きな夢があった。

彼は何の未練もなく家を飛び出す決心をした。生きて行くのに必要なものは金である。

一にも二にも、金、金、金であると双八郎は悟った。彼は昔から考えていた世界に、身も心も汚し、金のためには、すべての良心を捨て去る決心をした。彼の手には、十九年間の間にためてきた十五万円の預金通帳と、あのバッグと日記帳とがあった。

彼は野心に胸をふくらませて、家出の決意をした。ブラック団の連中は、協力を惜しまないと約束してくれた。彼らは、それぞれ希望の大学に入学していたのだった。双八郎は、いよいよ夜中の一時に、一通の手紙を残して家を出た。

「この一年間のギャップは、次の一年間に自分の力で、とり返します。一年間に百万円の金を預金して帰って来た時、やさしく迎えて下さい。双八郎」

彼は、さっそく加古淳の家に忍びこんで金ための計画をたてた。加古淳なる男は、アルバイトで月に十万をかせいだことのある男でいろいろとアドバイスを受けた。

あくる朝、すがすがしい気分で加古と別れた。彼は、東京へ出る

手始めに、どうしても童貞を捨てて行きたかった。相手はもちろん魔女とも思える繁子である。繁子とて女、せっぱつまった男を見れば、同情もわくであろうと、双八郎は考えた。

未来への野心に燃える双八郎の顔には、余裕さえうかがわれた。自分ひとり、捨てるものは、なにもない。もちろん、地位、肩書もない。ほんとうに、せいせいした気持だった。

「もし、もし、おれだ。今から東京へ行くんだ。一年間、どうもありがとう。最後に、もう一度、おまえの顔が見たいんだ。会ってくれんか」

彼独特の低い声で言った。

「どういうこと？ 家出すんの」

驚いた様子だった。

「理由を言ってる時間はないんだ。いつもの所で待っている。はやく来てくれ」

電話を切った。きつと来てくれる、彼は確信していた。彼はタバコを取り出して、落ちついた大人のおもちで吸った。その煙からは、一年間の暗い思い出は去っていったように見えた。

数時間後、繁子は飛んできた。彼は繁子を見すえ、すばやく彼女の手を取るやタクシーを拾った。

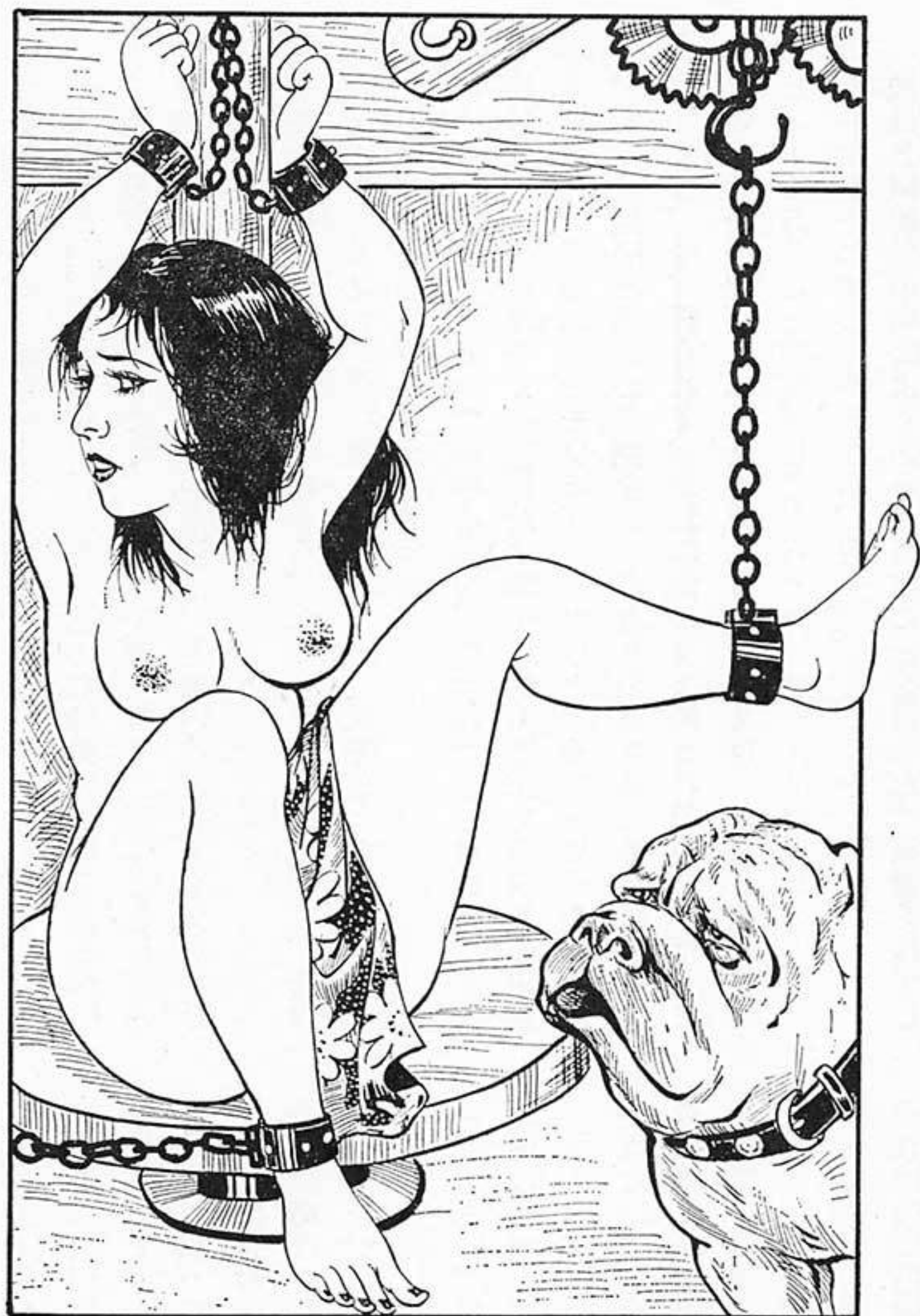
「ホテル・ローマへ、やってくれ」

繁子は、びっくりしたように双八郎の顔を見上げた。彼は、じつと彼女の顔を見つめ、心の中で「おれは、東京へ行く。一年間、自分の可能性を、ためしてくる。その前に、おまえの体が欲しい」と言っていた。

彼女は不安そうに、彼をながめていたが、その真剣な態度に、い

つもの、いやみな言葉はでなかった。
数分後、車は止まった。彼が金を払っている間に彼女は、するりと車を降り、ホテルと反対側のガードレールの方へ小走りに駆け出した。払いをすませて追いかけた双八郎が、繁子の手を力強く握ったが、彼女はそこに駐車してあった車のドアを強く掴んでいる。

「いやよ、あんなところへ行くのは……」
もみ合っていると、エンジンをかけたタクシーが、なかなか発車しようとしなくて、運転手が彼ら二人の方を見ている風なので、双八郎の心の中で繁子を必ず征服してみせると誓っていた決心が次第に、にぶってきた。



イメージギャラリー

『番犬?』岡

たかし

○

双八郎がSM雑誌から得た知識で心に描いていた夢では、ホテルの部屋へ入るなりドアにロックをして、先ず繁子の真赤な唇を奪うことだった。そして彼女に風呂に入るように命令するのだ。繁子が入っているすきに、彼女の洋服をそっと手のとどかぬ所に隠す。

彼はバッグを開け、ロープをとりだし、それを、しごいてみる。10Mぐらいのもの二本、短いもの三本、ある。青いガラスごしに女体が、ぼんやりと見えた。彼は冷蔵庫からビールを出して、気をしずめるように一口、飲んだ。

扉が開いて繁子が出てくるやいなや、ロープをからませて両手ごと縛り上げた。

「なにすんのよ。バカ、バカ、バカ」

繁子は驚きと恐怖の気持で抵抗し、叫んだ。双八郎は必死で柱にくくりつけ、鼻をつまみ上げて、すばやく浴衣の紐で猿轡をした。

繁子は、ただ何か言いたげにムムムと、うめいていた。それが彼の心をふるいたたせ、メチ

ヤクチャに泣かし責めにした気持を起こさせた。彼は最近、発売されたタバコ、ミスタースリムをとり出し、火をつけた。煙を彼女の体のあちこちに、ふきかけた。

処女の繁子が、そんな彼の行為を、どんな気持で受けているかはよくわからなかったが、ただ、ロープで縛られて、びくともしない腰を動かそうとモゾモゾしている姿は、見ている彼をゾクゾクさせる可愛さがあった。

筆をとり出した双八郎は、前から、ヒップラインにかけて、女の「泣き所」を責めた。筆の穂先を使ったり、尻を使ったり、幼な子が、じゃれて遊んでいるようであった。

時々力を入れて、ヒップの中心部を、つついたりしながら、ごく冷静に、その行為をくり返した。繁子は次第に、ある快感の現象をあらわし、動かぬ腰をモゾモゾやりだした。それを見るや双八郎は、女の優越感と虚栄心を完全に、なきものとするために叫んだ。「おまえは、今、縛られて、おれの意のままにされているんだ。こんな女のことをマゾヒストというんだ。おまえは、おれによってマゾヒストであることを証明してもらった。おまえはマゾヒストだ。今から猿轡をはずしてやるから、自分で宣言してみろ」

彼はSM雑誌の中によくあるようなことを言った。猿轡をはずしてやると、繁子は下を向いてしまった。彼は顎をもち上げて、しつこく宣言するように迫った。そして片手で乳頭をつまんで、ひねった。

「あああ、私は、マゾヒスト……」

双八郎は満足そうに、うなずいて縄を、ほどいた。力いっぱい、しめ上げていたので、ロープのアトが赤く体中についていた。

次は両手をバンザイさせたように縛った。ロープの端は鴨居に結んだ。足は、どうにか、畳につく程度であった。双八郎は、珍しうに美しいピチピチした繁子の体を、つくづく見まわした。女体の発する体臭が鼻をついた。ぴよこんと、つき出た乳首を、さんざん玩具にしてから、腋の下の毛を二、三本、抜いた。

後ろに回って、二つの大きな山に両手をかけて、ゆさゆさと、ゆすり、自分の顔を、すり寄せた。女の菊を、じっと観察し、今度、会った時は、この穴を大きくしてやろうと思った。その山に平手打ちを浴びせた。

「ああ、許して。叩くのは、やめて！」

「うるさい、おまえは苦痛を喜ぶマゾ女だ。いじめて貰えるおれに感謝しろ」

双八郎は自分の興奮が頂上に達しかけそうになると、繁子を、ひっぱたいて、その金切り声で、興奮をさました。ヒップにあきると今度は乳房に攻撃を加えた。背後から手を回して乳房をつかんだ。そして、ゆっくりと、ゆっくりと、しごいていった。

柔らかく、柔らかく、リズムをかえていった。こうした知識は、すべて本から得たものであったが、彼はスムーズに実行に移せた。それは彼に自信を植えつけた。次に固くなった乳頭を、つまんだ。今度は、前のように乱暴なことではなかった。唇を当てて吸った。その味こそ、女の味だと彼は思った。

口の自由な繁子は、「あああ」といったり「双八郎さん、許して！」とか「やめて」なんてことを言っていたが、そのすべての言葉は、双八郎には快く伝わってきた。

双八郎は、繁子の目を見た。その目は、うるんだように、濡れて

いた。

「ねえ、このロープ、ほどこいてほしいの。私、絶対に逃げたり、しないわ。これだと、じれったくて……」

「繁子、お前はマゾ女なんだぞ。奴隷がクサリなしで放っておけないように、マゾ女もロープなしではダメなんだ。お前は、これからおれが電話したら、どんな用事があっても出てきて、おれの奴隷として奉仕しなければならない。わかっているだろうな」

「ええ、わかってるわ」

「今日は、お前が処女なので少し遠慮したが、これからは、もっときびしく責め上げるからな。お前は今度、会った時は、おれに喜ん

で貰えるように、舌の使い方、尻の振り方、しゃべり方を練習しておけよ」

「ええッ？ なにか言ったの」

その時、桂双八郎は白昼夢から、さめた。

彼は繁子の片手を強く握り、彼女は他の手で駐車している車の把手を握っていた。

「いいや、何も言わないさ」

「そうお？ なにかブツブツ言ってたようよ」

彼女は車から手を放して振り返った。

「……」

彼は無言で首を横に振った。

タクシーは、すでに走り去っていた。

双八郎は握っていた手を放して繁子にキスを求めて顔を寄せた。彼女は、するりと身をかわして、歩き出しながら言った。

「新幹線で行くんでしょ。駅まで送ってゆわ。今度、いつ帰ってくるの？」

彼は、それに答えず、繁子のあとをついて歩いていった。持っていたバッグが、いやに重く感じられた。

駅のホームで繁子は、最愛の恋人と別れるかのように、別れを惜しんでくれた。

桂双八郎は野心に胸をふくらませて、童貞のまま、東京へ向かったのであった。

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

| | | |
|----|-------|-----|
| 優作 | 一篇につき | 五万円 |
| 良作 | 一篇につき | 参万円 |
| 秀作 | 一篇につき | 貳万円 |
| 佳作 | 一篇につき | 壹万円 |
| 可作 | 一篇につき | 五千元 |

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

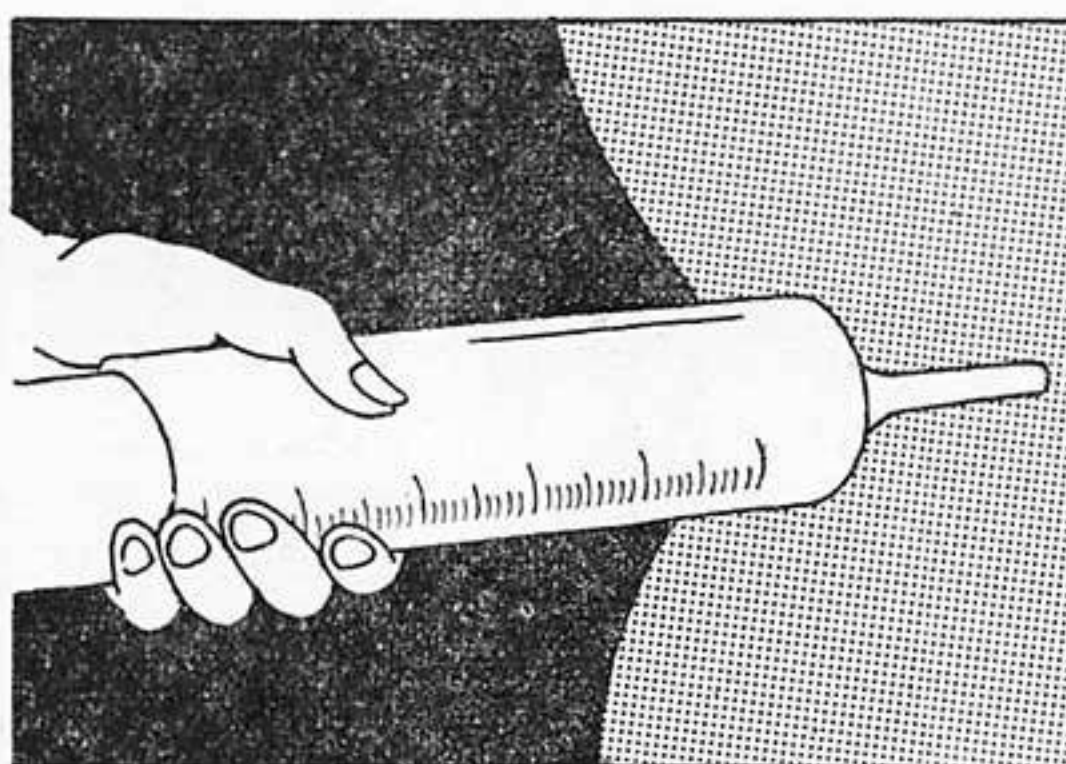
手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたものの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別すること「告白懸賞」とお書き下さい。

カット・マエダヒオミ



初めて投稿します。二十一才の主婦です。

昨年四月の結婚以来——厳密に言うとは婚約中からですが——主人に飼育され、今ではSMの世界の楽しさを知り、幸福な毎日を送っています。

SMと言っても私たちは軽い縛りの他は主として浣腸です。二、三リットルもの大量の温湯浣腸も試して見ました。それに水道浣腸、空気浣腸、一リット

＜体験記＞

アヌスから 酒を飲まされて

三木 令子

ルの水と空気との混合浣腸で大腸の内部を完全に洗うことなど一通り、やって見ました。

奇ク誌上に、いろんな方の浣腸実験報告が載っていますので、大変参考になりました。ことに大量浣腸による蛙腹実験は私たちの最も好むところです。しかし今日は皆さんが余り報告なさっていない変わった浣腸？ 法について、私たちの体験を述べて見たいと思います。

それは、お酒類を浣腸？ して全部、腸壁から吸収させ、つまりアヌスから、お酒を飲んで、酔っぱらう実験です。我慢し切れないで排出してしまうだろうと思われるかも知れませんが、そうではないのです。嘘だと思われたら一度

実験して見ていただいたら、分かります。

一 日本酒浣腸

五〇〇CC位の冷水で直腸を軽く洗っておいてから、少し時間をおいて、ガラス製浣腸器により、五〇〇CC位ずつ、時間をかけて約二〇〇CCの日本酒を、浣腸します。爛をした温かい日本酒が文字通りキューツとハラワタに浸み渡ります。やがて快い酔い心地が全身に拡がって普通にお酒を飲んだときと少しも変わりません。しばらくすると肺から吐く呼吸の中にアルコールが混じって、酔っぱらいのような息になるようです。

この方法で大事なのは、分量を

多く、し過ぎないことと、一度に急激に注入しないことです。大量に急速に、となれば、どうしてもその一部を戻してしまいます。しかし、どうしても耐えられなければ、一時、少量だけ出してしまっ、しばらく間を置き、あらためて注入すれば相当程度、酔っぱらうことが出来ます。勿論この場合、口からは一滴も飲まずアヌスからだけ飲むようにしないと、どちらで酔っぱらったのか分かりません。

私の場合、二〇〇CC（一合余り）であれば、ほぼ完全に吸収して一滴も残りません。私は酔っぱらうと眠くなるので、大抵そのまま寝てしまいます。目が覚めたら全部、吸収してしま

っているわけです。さらに、睡眠薬プロバリンを十錠位、溶かした日本酒を注入すれば、酔いが加重されて、ぐっすり眠ってしまいます。

二 ビール浣腸

次に発泡酒であるビールを浣腸して見たらどうなるでしょう。これはイルリガートルで、余り冷えていない大ビン、六三三CCのビールを、ゆっくり注入するのです。夏の熱い日など夜、入浴をすませてから、寝る前に飲むのです。やはりキューンと冷たい液体がハラワタに浸み渡ります。味覚はありませんが、ウマイという気がするから妙です。大ビン一本なら私の場合、完全に吸収します。やはり睡眠薬と併用して、そのまま眠ってしまうことが多いのですが全量注入後も、しばらくそのままにしておいて、ある程度、泡を抜きます。目が覚めたときは腸が二酸化炭素（炭酸ガス）で

ポコポコに膨らんで、蛙腹になっています。大腸の中のガスがモコモコと動いているのが、よく分かります。もう液体は一滴も残っておらず、プスッ、プスッとかガスが排出されます。このガス抜きなどのときの気持ち、とても、いいものです。

二、三本のビールを全部、浣腸したら、と思うときもありますがこの場合も、日本酒の場合と同様余り多量では、うけつけないと思います。ビール浣腸の場合は、あとで蛙腹にまで腹が膨らむのですから、なおさら、そうだと思いません。酔っぱらった感じは、日本酒の場合と余り変わりません。

アヌスからビールが飲めるなんて、そして口から飲んだときのよきに酔っぱらえるなんて、考えてもいませんでした。それにビール浣腸の場合は、あとで蛙腹の膨満感も楽しめるのです。

× × ×

ビールと日本酒以外の、もっと度の強い酒——たとえばウイスキーなど——は、刺激が強過ぎて肛

門から飲むのには適しないようです。ビールと日本酒なら、少し練習すれば、以上のように心地よい酔いを味わうことが出来ます。辻村さんや塚本さんが、すでに相当大量の浣腸を女性に実施しておられるにもかかわらず、まだお酒を浣腸して飲ませ、酔っぱらわされたということは、書かれています。

私たちの実験は、非常に、ささやかなものですけれど、今後、浣腸マニアの間に、肛門からでも十分、お酒が飲めることが理解されるようなプレイが行なわれて、一層プレイに花を添えることが出来るれば、この報告の目的は達せられるわけです。

経験の浅い私たちが、生意気にも以上のようなことを書いて、実際は以前から試みられている方もあるかも知れませんが、読者のご注意を惹けば幸いです。

ただし、ビールとか日本酒を大腸から、うまく吸収してしまうかどうかは、その時の体のコンディションによって幾分、違うよう

です。時には、うまく受け付けないうで、いくらか戻す事もありますが、何回も繰り返して見ると、だんだん、うまく行く様になります。

うまく行って、一滴も残さずに吸収されきった時の気持は、また格別です。腸の内部が、すっかり乾いて？ ガスだけしか出ないことが分かった時、言い知れぬ満足感があるのです。そこで私たちの空想ですが、何人かの浣腸マニアの女性を集めて、誰がアヌスから一番、多くのお酒を飲めるか、コンテストをして見たらどうかと思います。

飲み過ぎて、ドッと戻してしまふ人も出て来るでしょう。最高は日本酒、何合、ビール何本ぐらいになるでしょうか。肛門からお酒を飲んでグ Deng Deng に酔っぱらった女性たちのパーティなど、思うだけでも楽しくなります。誰か計画して見て下さいませんか。

——（おわり）——

連載・奴隷妻小説……………九の章 破局への軌跡



カット・志羽利也

命 預 け ま す

柴 利 好

かったからである。彼が、これから先、いつこんな騒ぎが発生するかも知れないという不安感に捕われたのは、エスカレートする春子の被虐嗜好に照らして、当然過ぎることであった。事態は、複数プレイを始めた当時の浩介の心配を、平氣の平左で受け流したあの頃に較べると、著しく深刻化していたのであった。

ある一日。新吉から、こうした彼の悩みについて相談を受けた浩介は、信頼出来る医師を特定する事を提案してみた。つまり、春子という女の異常性癖と、彼等夫婦の悦虐生活の内容とを、極く親しい主治医を定めて一切

34 S M 健康管理

春子の被虐願望への情熱が、より一層、高まるのに反して、新吉の心配は益々募るばかりであった。何故なら、先達ての春子の発病が、ただ一回の短期間のトラブルであったにも拘らず、その時の彼の心労が余りにも大き

世間には、相手の羞恥心を応用してSM生活を営み、それを夫婦和合の手段にしている事例も多々ある。春子に、この種の羞恥責めを喜ぶ倒錯嗜好が果たしてあるかないか。それは彼女の心の裡に潜む問題として、俄に判断出来ない。

例えば、羞恥責めの見本のようにいわれるアーンヌス責めについては、春子は殆ど関心を

示さなかった。もっとも、これは、責め手である新吉が、彼の潔癖性から、それに余り興味を抱かなかった事にも因る。元々春子は、若くして落ちるところまで落ちた女であったから、セックスに係わる羞恥心は、素人女とは比較にならない筈であった。

SM生活に関しては、新宿の店で毎夜、縛られて客をとったり、浅草の舞台では、公衆の面前で、裸で平然と責められもした女なのである。しかも普段の生活に於いては、自分の肌に刻み込まれた縛り目を羞かしがった。そして一杯屋に縛られて出掛けた時の、彼女の処女のような羞らしいの様子を見ると、一体そのどちらが彼女の本心なのか分からなくなる。この両面は、その折々の精神状態や環境ムードにも因る事だろうし、或は女性特有の生理にも係わる事柄なのかも知れない。

彼女の羞恥傾向が、どうであるにしても、今の場合、予測され得る難局を打開する良策としては、浩介のこの主治医特定という提案を卒直に受け容れ、直ちに実行せざるを得ないと、新吉も遂に決心したのであった。

このような経緯で、新たに彼等の主治医として依頼したのは、浩介の文筆友達で、当時既に随筆家としても或程度、名を馳せていた

門川省吾医学博士であった。

新吉の切々たる告白と懇請を聞き終わった彼は、静かにいった。

「よく分かりました。万事、私独りで飲み込みましょう。もちろん他言は一切、致しますまい。ただし、貴方のいわれる、愛すればこそ、虐め貫くという、そのお考えには賛同し兼ねますねえ。医師としての立場を離れた、私個人の意見としても、もっと人道的な、高い見地で奥さんを愛する方法をお考えになるべきだと思います。奥さんが、どんな方かも現在どういう生活をなさっているかも、実際に拝見した上でなければ軽率に判断出来ません。けれども、この点だけは判然と申し上げて置きますよ。とにかく、ご無理は、なさらないことです。よろしいですね！」

四十路を少し過ぎて、世慣れた物腰の柔らかない医師に諭されて、一も二もなくペコペコ頭を下げて引き下がって来た新吉は、帰宅するや否や、春子に医師との対話の内容を逐一話し、これからは従来のような無茶はしないで欲しいと申し渡した。これに対し春子は、分かったのか分からないのか、

「はい！」

と一言、答えたきりで、その場は別段、何

事もなく済んだ。しかし彼女の、その返事は果たして簡単に、このままで引き下がるかどうか疑われる位、頼りないものであった。

月日のうつろいは早い。そうこうする内にも早春の訪れが、身近に感じられる季節になった。春子が秘かに待ちわびていた春が、やって来たのである。

この一年で、周囲の環境も次第に変わりつつあった。さしも閑静であった、この田園地域にも、市街化の波が押し寄せ、近くを通る筈の高速道路の工事も、直ぐ駅前近くまで迫って来ていた。それでも、庭先近くまで掘られている用水池の堤のお蔭で、開かれた南方からの視野を全く遮られた、この家は、まだまだ平和に、心置きなく、戸外の悦虐プレイを続けることが出来た。

浩介が、この家を初めて訪れたのが、去年の三月初め頃だったから、彼は、すでに、まる一年も、この家に入りました事になる。しかし浩介にも、悩みがなかった訳ではない。元々好きなタイプの春子の容姿であった。それも、SMというセックスのヴェールを通して妖しい魅力に惹かれて、飽かずに通い続けた彼なのだけれども、あの晩秋のある一日の

午後、春子から聞かされた、彼女の彼に対する思慕の告白は、呑気者の彼にも、大きな衝撃を与えずには置かなかった。

正常な男女の關係に於いて、一人の女に、二人の男が同時に深い愛情を抱いた場合、しかも女の側でも、それ等二人の男を同等に愛した場合に、その思慕の赴くまま、自由奔放な生活を、いつまでも継続出来るものだろうか。いずれ、そこには、来たるべき破局の淵が、結果として待ち受けているに相違ない筈であった。彼等三人の場合は、悦虐プレイという特異な媒体を通じて結ばれた、変質的な経緯が、あるにしても、所詮、本質的には男と女の仲なのである。その關係を何時までもそのままの形で保ち続けて行くのは不可能だということ、浩介は悟らざるを得なくなっていた。

一方、春子は春の訪れと同時に、堰を切ったように、頻りに家畜妻の生活を新吉に、せがんだ。その上、奴隷妻としての戸外プレイをも要求して、やまなかった。それだからこそ新吉は、この過度とも思われる彼女の嗜虐欲求を、ようやく持て余し始め、その欲求亢進の原因が何であるかを、つかみ兼ねて、しきりと独りで不審がった。特に、さしあたって

た心配は、なんといっても彼女の健康管理の問題であり、門川医師を主治医として特定する事で、一応は不慮の事態に備える準備だけは出来た。けれども昨年の秋、新吉から浩介に宛てた長文の手紙に認めた、愛妻に対するあの不安な予感はずいぶん、新吉を悩ませ続けた。

こうした夫の苦悩を知ってか知らずにか、春子の嗜虐生活は、新吉の意向に逆行して、一路、凄まじさを加えて行き、いつてみれば新吉から知らされた主治医の特定応諾に対する返答などは、まるで忘れたかの様子であった。それほど彼女の嗜虐生活は、既に常規を逸した錯乱行為とでもいふべき段階まで進んでいたのである。しかも彼女の、このM性向の増大は、この主治医の特定という事実が、かえって裏目の結果を呼んだのではないかとさえ、思われる。すなわち「お医者様がついていて下さるんだから何があっても大丈夫」といった一種の幼稚な安心感が、彼女の心中に生まれていたのかも知れない。

とにかく、少女期から今日まで、縄目を受けない日が少ないぐらいに縛られ続けて来た春子なのだ。が、それも、この頃のように、一日の内で縛られている時間の方が、遥かに

多くなつて、平均すると、一日の中で、彼女が自由妻として家事に専念する時間が、僅々三、四時間となり、残りの二十時間前後が、奴隷時間と家畜時間とで占められる毎日となると、較べものにはならない。

この奴隷時間と家畜時間とは、明確には区分、出来ない。というのは、プレイ中は、奴隷妻として責められ、家畜妻として繋がれるなどの区別をすることはなく、彼女は常に甘んじて家畜として扱われながら、奴隷妻としての責め苦を受ける毎日の生活を繰り返していたのである。しかも、縛られる時間も、全然休憩なしで、二日も三日も連続的に縛られ通すことすら、珍しくなくなった。縄目の掛け方や、折檻の種類にも様々な変化を持たせたが、それは、彼女に対する健康管理上の配慮からというよりも、飽くまでプレイそのものを、より一層愉しむためと見受けられた。

35

狂態のパターン

ここで春子が、その当時、どのように凄絶極まりない被虐の淵に耽溺していたかを知るよすがとして、彼女が受けていた緊縛生活の典型的実例を窺って見ることにしよう。

夜のお伽が予定されない晩は、春子は宵の内から鎖下着で小屋に引かれて行って、猿ぐつわのままで檻詰めにした。やがて全身が痺れ切った頃、檻から出されるや否や、今度は責め台の上に寝かされ、これに全身を縛りつけられて、夜更けを持つ。深夜、ようやくいましめを解かれると、首輪の鎖を壁板に埋め込まれた鉄環とか、責め柱に繋がれたままその場で一夜を過ごすのである。そんな時、小屋の床板の上には、本物の藁を、薄く半畳位の広さに敷いて、それを敷布団代りにして寝なければならなかった。掛布団の代用にはそれでも一枚の古毛布が投げ掛けられた。就寝とは言っても、手足を存分に伸ばして寝られる訳ではない。鎖下着は勿論、着けたまま、両手を後ろ手に、両足は揃えて別鎖で固く縛られていた。ただ、猿ぐつわだけは許されて、外して貰えた。

翌朝、鞭打ちで叩き起こされると、手足のいましめは解かれたが、すぐさま膝頭にサポーターをつけた四つ這い姿に変わって、鎖を引かれての朝のお散歩が始まる。その途中で生理現象の始末を、させられる。続いて首輪と鎖を外されて、朝の体操になる。これは彼女が奴隷妻になってからも、必ず続けていた

アクロの基本運動を、一段と激しくしたもので、トンボ、逆トンボ、真横開脚、縦開脚、逆エビ、逆エビ四つ手歩行、車輪、その他、人体の屈曲動作の限界一杯と思われる運動が鞭打ちによって強制された。特に苦しいポーズでは、その姿勢の尽、長い間、動くことを止められるのであった。

一時間以上も続く、この日課の体操が終わると、首輪は、つけず、首根を鎖で、じかに縛られて、再び四つ這いで這って歩いて、小屋の潜りから風呂場に引き立てられ、鎖を柱に繋がれた上で、体操で土と汗に汚れた全身を清められる。体操の前に、あらかじめ首輪を外したままにして置くのは、この清浄の時の革の首輪が、濡れないための用心からであった。

清浄作業が済むと、再び首輪の鎖緊ぎを受けて小屋に戻る。そこで昼食兼朝食が与えられる。この食事は新吉が丹精込めた奴隷食で見た目には粗末なものだが、少量でも栄養価の高い、消化の良い物であったが、別鎖で後ろ手に両手首を縛られて、口だけで食べさせられるだけではなく、食事中でも、首輪の鎖は、責め柱や鉄環に繋がれていなければならなかった。

体操の成績が悪かったり、家畜動作の行儀が悪い時は、その食事も、小屋では喰べられない。庭の地べたに皿や碗を置かれて、全く飼犬そのものの待遇で喰べさせられた。勿論、両手は後ろ手縛りで、首輪の鎖も犬緊ぎの杭に固く繋がれていることは、いうまでもない。

食事後、しばらく与えられる小休止では、後ろ手の鎖だけは、許されたけれども、首輪の鎖は、依然として元のまま、繋がれ放しでいなければならなかった。この小休止の時間は一定した基準はない。要するに、その折々の家畜の状態に適合するように、配慮が持たれていた。

これが済むと「午前のレッスン」といえば聞こえは良いが、一連の折檻が、続けざま約二時間に亘って行なわれる。それが終わると首輪を繋がれたまま休憩し、「午後のレッスン」が直ぐさま、始められ、これが三時間位続く。その後に必ず行なわれるのが「生き晒し」と称する長時間の緊縛放置であった。晒し場は大概、三段平行棒か、犬緊ぎの立ち杭の処で、通例、全身を雁字搦めにされた立ち縛りが行なわれる。

日暮れになると、再び小屋に曳かれ、鎖を

繋がれた上で、夕食を口だけを使って喰べさせられる。その時、彼女の身体は、責め折檻や、戸外晒しの連続のために、全身、汗や泥に汚れてはいるが、清浄は、大抵は省略された。というのは、食後の繋がれたままでの小休止の後で「お清めの時間」という正課が行なわれるからである。

この「お清め」は、風呂場でお湯を使って行なわれる。例によって、首輪の代りに鎖で柱に繋がれ、膝のサポーターも外された彼女は、その日一日の全身の汚れを、綺麗さっぱりと、全て新吉の手によって懇ろに洗い清めてもらう。この時こそ、彼女の発達し切った豊かな全身が、生き返ったように美しく磨かれて、光り輝く時である。

「お清め」が済むと、ようやく室内に上がる事を許されて、その日の朝、座敷から小屋に連行されて以来、初めて再び、部屋に這入れる事になるのであるが、それから就寝するまでの数時間は、新吉の要求に応じて、様々な様式と姿勢で「お縄」を受け続けなければならなかった。新吉は、この時間を利用して、思うまま春子を使役して、彼女をモデルに残酷長編、漫画の制作に取り組むことが多かった。

モデル勤めが一段落すると、続いて「反省の時間」が持たれた。即ち、その日一日、彼女が虐めつけられた有様を、一つ残らず、ご主人様に申し上げ、その折檻の愉しさと苦しさを、口頭で復習確認させられた。それに引き続いて、胴鎖を除いた全ての緊縛が、全身から解き放される。そして一日中の緊縛責めで痛めつけられた身体中の「縄目吟味」があつて、最後に、縄目の跡とか縄擦れや生傷などの治療が入念に行なわれる。これで奴隷妻兼家畜妻としての春子の被虐の一日は、ようやく終わるのである。

午前のレッスン。午後のレッスン。生き晒し。「夜のお縄」などと呼び名は違つても、結局は縄と鎖を多用しての緊縛プレイに変わりはない。それ故、プレイの内容や順序などは、どうしても、よかった。

一つの折檻が実施される時刻や、それに費やされる時間も一定していた訳ではない。すべて新吉と春子との暗黙の諒解である。それは永年に亘って育まれた二人だけの心の心と心の語らいによって、なんの躊躇も蟠りもなく、尚、且、肉体的支障すらなく、継続されていたのだった。当時の新吉は、それでも絶えず、春子の健康に心を使い、その先行きを

心配し続けた。それにも拘らず不甲斐なくも彼女の被虐生活の抑制どころか、その激しい慾念を抑え切れず、共々に性慾倒錯の泥沼の深みに嵌り込んでいたのであった。

36

罪に泣く奴隷妻

駅前近くから続いた小川添いの桜並木に、愛らしい蕾が綻び始めたある日、新吉は、自由妻として家事に、いそしむ春子に話し掛けた。その時、春子は珍しく単衣に名古屋帯をキチンと締めた身なりで、セッセと針仕事をしている最中であつた。

「なあ、春子。一度、門川先生に診てもらつて置いた方が、後々、都合が良いと思うんだが」

一瞬、チラッと困惑の表情を見せた春子だったが、すぐ、いつもの、あどけない面差しに返つて、仕事の手は休めず俯向きながら、「はい。是非とおっしゃるんでしたら、私、おいいつけに従います。でも……いいえ、今更、恥かしいなんて、いえる女じゃ、ありませんけど、それより私、恐ろしいんです。こんな私の身体を先生が、ご覧になったら、なんとおっしゃるか、それが心配ですの。そり

やあ私だって、今の生活が、まともな生き方だとは思ってやしません。世間から気狂いの一種と見られるだろう位のことは覚悟しています。でも私は、それでも満足なんです。この今の幸せから、離れたくありません。先生にお診せしたら、きっと叱られて、こんな馬鹿気た事は直ぐ止めるように申し渡されるに決まっています。ですから本当をいえば、出

来る事なら私、診察して欲しくないんです」と案外、大人しく素直に、本心を答えた。聞いた新吉は、彼女の心情を哀れんで、「もっともだ。お前の言うことは、よく分かるよ。実のところ、お前の美しいその身体を縄目の跡だらけにしてしまったのは、皆この俺なんだ。済まない事をしたと、今更ながら後悔してるよ。といっても、どうにもなりや

しないけれど。お前、この俺を許してくれるかい？」

と感傷的になるのを、春子は反って窘めるように、新吉の顔を、しみじみと見ながら、「まあ、もったいないことをおっしゃって。

私こそ、私のわがままを許して下さった貴方の寛大なお心に、感謝しなければなりませんのに。許して戴きたいのは私の方ですわ。でも、考えてみれば不思議なものねえ。私達にお互いを愛し合う深い情愛がなかったら、むしろ、こんなにまで、ならなかったかも知れませんものねえ。でも私、貴方の愛のお縄を戴けるのでしたら、いつでも何処でも、どんな風にでも、私の身体の全部を貴方に、お任せします。いいえ、命だって、私の、あったけを捧げ尽して悔いはありません。それが私の幸せでなくてなんでしょう。ねえ、貴方！ 私を可愛い奴とお思召しになるなら、どうぞ、いつまでも今まで通り、私を縛り続けて下さい。この私の身体が、どんなに傍目に醜くなったとしても、それだけ私達二人の愛が、この私の肌の上に美しく花開く訳ですもの」

普段の春子らしくない、この雄弁を聞いてすっかり面喰った新吉であった。彼が医者



イメージギャラリー

『お呼びまでの時間』

志羽利也

話を持ち出したのは、これを機会に、次第に彼女の悦虐生活を抑えようがためであった。しかし、これでは、なんのことはない。思惑とは全く逆になった形である。

「一寸、待ってください！ 俺はお前の身を案じて医者と話をつけて来たんだよ。俺の心配を少しでも取り除いて欲しいんだ。俺には、これまで、お前程、恋しく思う女は一人も、いなかったし、これからも出会うこともあるまいよ。それだからこそ愛し続けて来られたんじゃないか。けども、その愛の方法が常軌を逸してしまっている事を、先生に指適されたんだ。それくらいは俺にだって分かってる事なんだけどねえ。どうだろう、今からでも遅くはない。お互いに幾らかでも自重し合いながら、行く末長く、愛し合って行こうじゃないか」

「貴方、嬉しい。貴方は私なんかには、もったいないお方です。どうすれば貴方の愛に、お応え出来るでしょうか。私には、この心と身体を捧げる外には方法が、ないんですもの！」

数年前、二人が世帯を持ちたての頃、柏木のアパートの一室で感涙に咽びながら訴えたあの時と同様の言葉が、自然に口から迸り出

ると彼女は、もう堪まらなくなって来た。さつきから話の方にばかり気が入って、手元がおろそかになっていた繕い物を顔に押し当てると、駄々っ子のような仕草で泣きべそをかき始めた。その姿は、彼女の年令に似合わない「いじらしい」という表現が最も相応しく新吉には思われた。

「まあ、そんなに泣くなよ。いつからお前はそんな、泣き虫に、なったんだい？」

幼な子を労わるような優しさで、新吉は思わず春子を抱き締めていた。端目を憚かる心配は全くなかった。相擁した二人の男女は、折柄、廊下越しに差し込む和やかな陽光を浴びながら、ひとしきり時の経つのも忘れて、睦まじい夫婦愛に、お互いの身を任せ続けたのであった。

この夜の新吉と春子とは、近頃になく激しさで燃えた。春子は、珍しく夜の家畜衣裳の一つである首輪さえ外されて、胴鎖と鎖下着のまま、久方振りに夫の腕に抱かれて寝た。彼女にとって、このような幸せは、近頃さらにはない筈であった。嗚呼、それなのに春子は、明け方近く、引き続いて三度も浩介の夢を見た。しかも、その夢の中で彼女は、熱烈に浩介を、かきくどき、何処でも良いから

一緒に暮らしたいと、とり縋っているのだった。

「なんて残酷な夢か知ら！」

新吉という、身に余る程に思う夫の愛を、一人占めにしている自分なのに、一夜の夢の中に三度までも現われたのが浩介であった事が、春子の心を切なく揺り動かした。

「私は悪い女だわ！ 表面では夫に、あんなにまで純情を捧げたように振舞いながら、夢の中では、野口様と駆け落ちしようと、企むなんて。これが私の本心なのか知ら？」

罪の意識が春子の胸を捕えて、その胸元近くに、砥ぎすまされた鋏をジリジリと突きつけられる思いであった。

「私は、なんて罪深い女でしょう。貴方に内緒で、野口様を、こんなにまで愛し続けているなんて、許されない事だわ。私は奴隷妻どころか、本当に畜生の資格しか、ない女なんだね！」

その朝、一途に思い詰めた春子は、朝餉の片付けを早々に終わった。その時、春子は昨夜から引き続いて、胴鎖と鎖下着だけを着けた裸身の上に、白い割烹着一つを纏っているに過ぎなかった。新吉の前に坐るや否や彼女は、その割烹着の紐を解くのも、もどかしく

脱ぎ棄て、低く首を垂れ、両手を背中に回して高々と組み合わせた奴隷妻の姿勢をとると「ご主人様！ 私奴を家畜妻に落として戴きとうございます」

と、目を据えるようにして夫に迫った。

妻の夢見の一件など露知らぬ新吉には、この春子の家畜妻への降下願望が、単なるいつもの悦虐嗜好の発情としか理解出来なかったのは、無理のない事で、彼には、その日の日程としては予定外の不意の要請としか受け取れなかった。が、その思い詰めたような激しさの、ただならぬ様子に圧倒されて、

「仕方ない奴だ。昨夜は、あんなに、久し振りに夫婦らしい夜を過ごしたというのに、なぜお前は、そんなに人間的生活から遠ざかるうとするんだろう。自由妻から奴隷妻。そして家畜妻への転落は、S・M生活の上では、それを進化といえるかも知れない。しかし、俺としては家畜妻になるよりは、精々奴隷妻の辺りで止まっていた欲しいと思うよ。今更なんだ、というかも知れんが、さもないと、その身体が心配で堪まらないんだ。よし、こうしよう。これから、お前の希望通り家畜妻にしてやる代りに、昨日も話した通り、近い内に先生に必ず診てもらおうと誓うかい？ そ

れで良ければ、お前の願いを聞き届けよう」と、妥協案を出した。

「ありがとうございます。必ず思召しに従いますから、どうぞ、この牝犬の首に、お鎖を戴かせて下さいませ」

春子は、そう答えると、急に喜色を溢れさせて、身じまいを正す。

先ず奴隷衣一装を、あてがわれる事になった春子は、直ちに六畳間の押入れから正装具一式を取り揃えて、炬燵部屋の新吉の元に持ち込んだ。そして、自ら慣れた手付きで、身体の要所々々に革環を嵌めて行く。頸や手足に嵌められた革環は、細い鎖で連結され、すぐさま手枷、足枷、首枷の役目を果たした。

後ろ手に繋がれた鎖尻を引かれて風呂場を通り、家畜の棲家である小屋に這入ると、春子は犬の檻に、後ろ手の身体を三つ折りに折り曲げられてビッシリと詰め込まれ、それから一時間半を過ごした。猿ぐつわは嵌められていなかったから自由に話せるのだが、彼女は固く奴隷妻の掟を守って、ただ黙って檻責めの悦びを味わっているかのように見えた。

37 生理め願望

春子が、やっと檻から解放された時には、手足といわず身体の隅々にまで、神経麻痺が行き渡って、殆ど無感覚状態に陥っていた。自力では、どうする事も出来ない身体を、床に丸くなったまま横たえながら、彼女は未だはつきりしている意識の中から、更に激しい仕置の継続を新吉に、ねだった。その仕置とは、春子が前々から秘かに実現を願って己まなかった文字通りの極刑なのであった。

「ご主人様！ 家畜妻、春子一生のお願いがございます。必ずお聞き届け下さいませ！」

と初めからの必死の形相に、新吉が、

「なんだい？ 一体全体、どうしたんだ？」

と訝るのに、春子は尚も続けて、

「私奴を、この私を、生理めにして戴きとうございます！」

と、全身を固くして、小さく叫んだ。

「なんだって？ 生理めに？ これは又、随分、乱暴な事を、いい出したもんだ。今日のお前はいつもと違って見えるように見えるよ。生き埋めって、一体、どうするつもりなんだい」

余りの事に驚く新吉の言葉には激しさがあつた。しかし、怒りの念は籠っていないことを察した春子は、一安心のふうで、比較的、

穏かな調子で、それまで胸に秘めていた構想を、少しずつ洩らし始めた。

「お縁先に埋めて戴きとうございます。いつか雪責めをして下さった処にです。生埋めが終わったら私、先生の処へでも、どこへでも参ります。家畜妻春子の最後のお願いです。

何卒、お許し下さいませ！」

という春子の、必死の懇願に対して

「最後のお願いだなんて、穏かじゃないぜ。

しかし、良さ。それが済んだら、きっと先生に診てもらうんだね？ 誓うかい？」

と新吉の方では、なんとか春子に、医師の診察を受けさせようと懸命になる。

「はい。誓います。決して、お約束には背きませんから、是非共お慈悲をお掛け下さい」

その時、ようやく幾らか自分で動けるようになった、不自由な身体を起こすと春子は、ぎこちなく坐り直し、いつもの平身低頭の姿で、新吉の許しを請うのであった。

こうなると、毎度の事ながら、話は完全に春子のペースで進んでしまう。お人好しの新吉は、この大事な瀬戸際でも、又しても春子の強引さに釣り込まれて

「縁先といってもあそこは土が固いから無理だと思ふよ。何処か適当な場所があれば良い

が……。そうだ。隣の空地に二、三日前から置いてある、土木工事用の砂なんか使ってみては、どうだろう」

「奴隷妻の身で贅沢は申せませんが、それでは、まるで、海岸のお遊びみたいですねえ」

と春子は緊張した表情を幾分、和らげる。

「それもそうだな。といっても、身体一つ、入れる穴がないじゃないか」

と、余り乗って来ない夫の様子に、

「その穴でしたら、私が掘ります。作業の間だけお縄やお鎖を許して戴ければ、いいえ、手足の自由さえあれば、たとえ鎖首輪で繋がれていても宜しうございます。その位の覚悟は、とくに出来ておりますもの」

と、ここを先途と、まくし立てる。

「そうなのか。そんならお前は、以前から生埋めにされたいと、それ程、望んでいた訳だな。それを、お医者さんのことと取り引きしようと思ふんだな？ 悪い牝奴だ」

「お叱りを受けるのは、覚悟の前です。でもそうでもしなければ、決してお許しが出ない事が、私には分かっていますもの。でも、これを取り引きだなんて、おっしゃられるのは悲しうございます。これしか私には、ご主人

様にお願ひ出来る法がなかったんですもの。悪い牝奴としてのお仕置は、幾らでもお受けします。これでもか、これでもかと、お気の済むまで、どのようにお仕置下さっても構いません。これだけは、どうぞお聞き届け下さいませ」

春子は、この時とばかり夢中になって、かき口説いた。被虐を追い求める女の執念に負かされた形の新吉は

「それも、良いだろうさ。だけど、どうしてそんな、生埋めなんてことを、考えるようになったのかねえ。しかも、余り突然に、だもの。一体、どうして、なんだい？」

と、その原因を追及したが、
「別に理由なんか、ございませんわ。生埋めは私が、ご主人様の奴隷妻になった時からの願ひでしたの。それが今まで、仲々いい出す機会がなかっただけのことですわ」

と、なんとか質問の矛先を避けようとする春子の返答は、苦し紛れの態であった。

一般的に生埋め願望は、恐らくM性向の持主にとって、殆ど最終的悦楽の一頂点であるといえる。この残酷な仕置をも、敢えてその身に受けたいと望む春子の気持は、この返答では如何にも皮相で、貧弱であった。この時

の春子の本心を、あからさまに、いえば、彼女が、夫と夫以外の男性とを同時に愛し続けている事。尚、且、その夫以外の相手に靡き掛けていくという現実に対する、激しい罪の意識が然らしめた願望に相違なかった。しかも春子には、野口との恋愛の事実を夫に打ち明けるだけの勇氣に欠けていた。勿論それは夫の愛情と恩義に背く事だからである。それ故にこそ彼女は、このような過酷な折檻を甘受する事が、夫に対する、せめてもの贖罪になると考えたからなのであった。

二人の男性の板挟みになって、自ら一命を断つた女の哀話は、余りにも多い。春子が、かつて用水池の水に漬けられ、妊婦の制裁にも似た仕置さえ甘んじて受けた時から、彼女は彼女なりに自分の死に就いて心秘かに考え思い悩んでいたのであった。いずれは破滅の時が来るであろう、この三人の関係を、積極的に、且、効果的に、彼女の手によって解決する道は、ただ一つ。それは彼女が自ら死を選ぶことが最も簡単で、確実な方法である。まで、思い詰めるようになっていたのであった。

春子が生埋め願望の理由を問い詰められた時、「最後のお願ひ」と不用意にも口走り、

新吉もそれを愛する者の本能で、すかさず聞き咎めた言葉の、やりとりは、その場では波乱なく収まりは、したものの、それは、はしなくも、彼女の口から初めて洩れた決意の現われなのであった。

その理由の如何に拘らず、とにかく、生埋めは、春子の切望通り実行されることになった。その場所は、二人して庭中を探索した結果、物干場と小屋との中間位置に決まった。

以前、そこは稍、低地だったのを、造庭に際して出た残土を此処に埋めて地ならしした場所である事を、新吉が思い出したからであった。庭の片隅なので踏みこむことは稀で、残土の黒土が自然に地形に馴染んで、目立たない程度の窪地を形成し、土質が柔らかな上に日当たりが良く、風当たりは割に、少ないという恰好の好条件を備えた場所なのである。

思い立ったその時から、早速に穴掘りの作業が始められた。新吉は普段着のシャツ姿で黙々とスコップを握り、春子は奴隷衣一装の革環を嵌めたままの姿で、掘り起こされた黒土を掻き出した。半時間足らずで、そこには人一人、楽に、這入れる位の穴が、あけられた。穴の周囲には今、掘り起こされたばかり

の黒土が、かぐわしい香気を放って、驚く程多量に山積されていた。

「生埋め」と一口にいつても、二人とも皆目予備知識がなかったもので、さてどうしたものか思案が、つき兼ねた。ただ、そのままに入られるよりは、矢張り縛られて埋められたという春子の希望に任せて、準備が始められた。

春子は、既に穴掘り作業で泥だらけになっている身体から、自分で全ての、革環を外した。そして、それ等を小屋に運びがてら、使った。そして、それ等を三束程持つて戻って来た。その時の彼女の身体には、胴鎖一本の外は何一つ、着けていなかった。新吉はそれを見て「せめて薄いものでも、肌に当てたらどうだい？」

と思ひ遣りの言葉を投げたが、春子は委細構わず、

「お仕置ですもの。何も要りませんわ」

と、固い決意の程を示したが、それには後で愛する夫から懇ろな清浄を受けられる期待もあったかも知れなかった。その時、彼女の両目は、既に妖しい光さえも帯びて、凄まじい嗜虐の陶醉が窺われていた。

続いて春子は、全裸の上から、いつもの通

りの後ろ手、高手小手縛りを受け、両足首も別縄で縛られると、直ぐさま、なんの逡巡もなく、穴の中に飛び降りた。さして深くもないその穴は、彼女が這入ると、地表が丁度、腰の辺りに来た。彼女は両膝を折って穴の中に正座の姿勢を構えると同時に、両の臉を静かに閉じた。その表情は、如何にも観念し切った罪人のように、見えはしたが、その実、彼女の胸は今にも張り裂けんばかりに、動悸が激しく打ち騒いでいるのであった。

愈々新吉の持ったスコップが振るわれ、最初の土の塊が、ドサツと春子の両膝の上に落下した時、彼女は余りの昂奮のために眩暈を起こしそうになった。やっとの思いで氣を、とり直し、頭を左右に激しく振って、危うく失神から逃がれたのであった。

「ザクザク」と、土が掬い上げられる音が響く度毎に、彼女は足から腰、腰から胸へと、次第次第に、その姿を土の中に没して行く。そうした自分の哀れな姿を、彼女は固く両目を閉じて想い描き、全身の肌で直かに感じ乍ら、その呼吸さえ乱れ勝ちになる。遂に肩先まで土で埋め尽され、僅かに首から上だけが土中から出ているという状態になった時、新吉が、春子に声を掛けた。

「さあ、出来上がりだよ。目を開けてご覧」
全身を周囲から圧迫するように押し迫って来る土の力は、春子が事前に想像していたより遙かに強烈だった。その土の冷たさも予想を超えていた。けれども、かねてから熱望していた生埋めの成功が、彼女を心から宇頂天にした。新吉にいわれるまでもなく、目を開けて見る土中からの我が家の庭は、全く今までは別世界のように思われた。そして、遙か頭上から見降ろす夫の姿が、まるで地獄の死刑執行人か何かのように迫って来るのであった。

この最初の生埋めの快い感動に、すっかり味を占めた春子は、それ以来、機会ある毎にこの酷刑の再現を新吉に、ねだった。時としては、わざと悪い子になって新吉を困らせ、その罰としての生埋めを強いるのであった。こうして二度、三度と生埋めの度数が重なるに従って、彼女の土中での滞留時間も長引くようになった。最初の時、精々二十分足らずであったものが、三十分、四十五分と延長され、縛り縄の数や、縛り方までも、漸次、地上での普通の折檻と同じ位に進んで行ったのは、こうした悦虐嗜好者の通例として、当

然の成り行きといえなのであるが、土中から掘り出された時の春子の肌は、土気色に変わって、水のように冷たく冷えきっているのが常で、唇の色さえ全く失われていた。

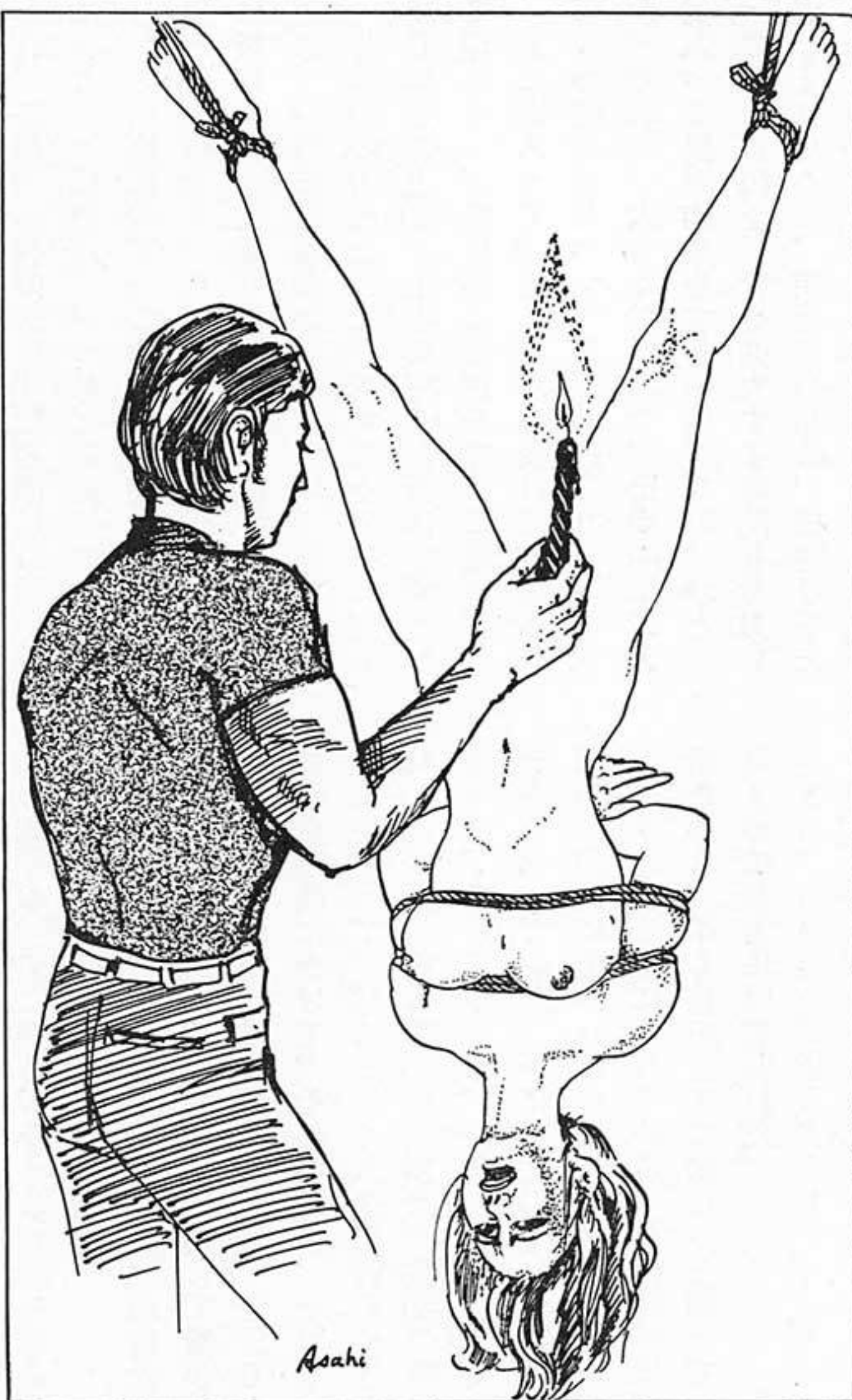
いつも責め手に回っている新吉は、普通の地上や室内の場合なら、眼前に豊かな美しい妻の肉体が見られるのだから、飽く事なく、それを觀賞しながら、存分に責め続ける事が出来た。ところが、地中に全身を埋め、僅かに地上に首だけを出した、この生埋めでは、その極刑の実施中というものは全く所在がなかった。何しろ生首が一つ、地面に放置されているのと同様なのだから、頭髮を毫たり耳や鼻を、あれこれと翹って見たところで、責めとしてはタカが知れている。思いつくままに、悪口雑言をならべたててみたり、顔に唾を吐き掛けてみたり、ユリンを浴びせたりもしてみたけれども、それ等の行為、虐待の本旨に副う仕置には相違なくとも、新吉を本当に喜ばす緊縛責めの醍醐味とは、縁遠いものであった。しかも、こうした折檻に苦しみ春子の表情は、普段の仕置で見られるような活気溢れる悦虐による昂奮状態は全くなく、文字通り悲惨そのものを感じさせるばかりであった。

それやこれやで新吉は、春子の生埋め中は現場から離れて、春子を独り土中に置き去りにしたままで一仕事することにした。そうしたほうが、実際の結果はどうであれ、良い作品が描けるように、彼には思われたからである。

春子にしても、長い時間を地中に埋められ

たまで、独りぼっちで生晒しを受けているほうが、如何にも心細い、取り縋る、すべもない切なさを感じるという意味で、そのほうを好む様子であった。

このようにして、生埋めが実行されるようになってからも、その他の、従来からの一般的仕置もまた、以前と同様に継続されていた



イメージギャラリー 『迫る熱涙』 須坂 旭

のである。従って春子の日常生活は、依然として完全な奴隷妻、家畜妻のそれに違いなかった。つまり生埋めという酷刑が、日常プレイのテーマの中の一コースとして、余分に加えられたに過ぎなかったものであった。

38 暴虐の果て

医者に身体を診せるという約束も、それきりで、ズルズルと延びて日が経ち、六月のある日、彼女にとって五回目の生埋めが行なわれることになった時、春子は新たに、柱を地中に埋めて、それに、緊縛される事を提案した。

それは、一つには過去四回に及んだ緊縛だけによる生埋めの経験が、彼女に肉体的な自信を持たせたからであった。と同時に、小説本の口絵の中で見た、人身御供にされる女達が柱に立ち縛りされて生埋めされている姿を好ましいものとして記憶していて、このような一層、苛酷な犠牲への憧れを押えられなかったからでもある。

梅雨期の変わり易い天候の、晴れ間を選んで、そのプレイは強行された。坐ったまま埋められていた穴は、立柱を埋めるために、よ

り深く掘り下げなければならなかった。その日、春子は早朝から完全な家畜妻の状態に置かれ、午前、午後のプレイなど激しい責め苦に疲れ切っていた。いつもなら此处で「お晒し」の時間になるところを、生埋めの刑に變更されたのであった。春子が、疲労した身体に鞭打って、穴掘り作業を懸命に手伝ったことは、いうまでもない。

生埋めの方法として、先ず地上で柱に立ち縛りにした上で、土中に柱ごと身体を降ろして埋めるか、あらかじめ柱を立てて置いてから穴に這入って、立ち縛りを受けて埋められるかが問題になった。現在、掘られている穴が、それ程、大きくないので、その中に二人這入って緊縛作業をする余地がない。かといって、これ以上、穴を拡大する時間も労力も惜しまれたので、結局、今回は、柱縛りを先にした上での埋め込み方法が採られる事になった。立ち柱は小屋前に立ててある杭が手頃の長さなので、それを引き抜いて使った。

愈々、春子が柱に縛られる事になり、胴鎖を除く全ての鎖下着が脱がされた時、彼女の身体は、朝から引き続いた絶え間のない緊縛のために、素肌に印された無数の縄目の跡で美しく彩られていた。覚悟も新たに、

「お縄を頂戴致します」

という春子の声の終わらぬ間に、早くも数条の細引が、肌に残る、そうした縛り目の跡を、なぞるかのように縛り始めた。

先ず後ろ手、高手小手縛りを受けた彼女は続いて、あらかじめ穴の前に傾斜して置かれた柱の上に仰向けに身を横たえる。やがて上体から下肢にかけて、その要所を、それぞれ別縄を使って、柱に緊しく入念に縛りつけられて行った。その時、柱の頂は、彼女の顎の直下に、そして下方は、足先から尚二十センチ余り余っていた。下に支えのない春子の頭部が、斜めに置かれた柱の頂点から下に、ガツクリと苦し気に垂れている。その様子は、あたかも、早く柱を立てて欲しいと願っているように新吉には思われた。

「さあ、いいかい。降ろすぞ！」

新吉の力強い一声と共に、柱がズルズルと穴の中に引きずり降ろされた。春子の身体は立柱に完全に縛り吊るされた恰好で、穴の中にスッポリと這入った。予定通り、地表には僅かに彼女の頭部と、肩先しか現われていない。新吉は、全身の力を籠めて柱を穴底に押し込み、尚、その上、柱の頂点を注意深くスコップの先で、打ち叩く。埋めた柱が、その

一打ち毎に少しずつ、地中に打ち込まれて、次第に直立の安定度を増した。一方、体重で自然と幾分、柱から、ずり下がった春子の両足が、ようやく穴底に届いたようであった。後は、いつもしている通り、土を投げ入れてしっかりと柱と身体を埋め込んでやれば、よいのである。穴埋めは、すでに熟練した新吉のスコップ捌きで順調に、はかどった。

両肩まで完全に土中に埋もれて、首だけを地表に出した無残な姿に変わり果てた春子は、いやが上にも完全を期するかのようになり、

「周囲の土を良く踏み固めて下さいな。私、平気ですから、ドンドン強く踏んで下さい。土が、とても冷たくて気持ちが良いこと。それに、久方振りに鎖下着なしの、お縄だけの、お縛りの見合が、とても素敵です」

という昂奮に上ずった春子の声に答えて新吉は、いくら希望とはいえ、足で土を踏み固めるのも憚られたので、両手で首の周りを軽く叩いたり、やや離れた処は、スコップの腹を使って地ならしを、しながら

「今のうちは、さほどでなくても、段々苦しくなってくるぞ。何せ、ロープが湿ってくるだろうし、柱に宙吊りに近い埋め方になってるんだから、きっと縄目が痛み出すに違いない

いよ。縛る時に手心は加えて置いたから、多分、相当に身体が、ずり下がって、足が穴底に届いているとは思うが、初めてのことでしいつもと大分、様子が違ってるから、お前も良く注意してくれよ。もし辛抱しきれなくなったら、いつでも呼ぶんだ。いいな、わかったな」

と、念を押す。新吉にも初めての試みなので、確信が持てないのである。

地表から生えた一輪の妖花のように、彼女の首だけが、そこに見出される光景は、毎度の事ながら、なんとも形容出来ない不気味さであるが、その首が地表から答える。

「足は予定通り穴底に届いています。しばらくすれば、もっと良く納まると思いますわ。折角、今、埋めてもらったばかりですのに……。辛抱しきれない時のことなんか私、考えられません。このまま、ずっと縛られて、長いこと、埋められていたいわ。いつまでも埋められ通して死んでも良いと……」

と、そこまで言って春子は、ふっと口をつぐんだ。

この時の最後の一言は、全く彼女の本心だったと思われる。が新吉には、又、いつものオーバーな表現位にしか受け取っていなかった。

たようだ。それでも、やはり気掛かりとみえ

「冗談も休み休みに言えよ。そんな馬鹿気たことを、仮にも口に出す奴があるか。大人しくしていないと直ぐ掘り出してしまふぞ。全

くの話、なるべく静かにしているんだぞ！
さもないと体力が、どんどん衰弱して来るだろうからな。今日は、朝から休みなしの折檻続きの上に穴掘りまで、やるんだから、一層気をつけなと、いけないよ」

と情の深い言葉を残して新吉は、その割には屈託なさそうに、いつもの通り一仕事、済ませるため、部屋に引き揚げて行ってしまった。実は、この日の彼には、出版社からの特急の依頼原稿が残っていて、いつもなら、晒しの時間を、その仕事に当てるところなのであった。

独り取り残された春子は、ややあって、最初の昂奮状態から幾らか醒めて来た。同じ立柱への緊縛でも、地上なら縄目の感触だけしか、ないのに、生埋めの楽しさは又、格別である。身体の前後からも、左右からも、黒土のズッシリした重圧が、次第に身体の奥まで浸み込んで来るかのように、ひしひしと感じられる。折しも急に気温が上がって来たせいか、黒土特有の香気がムンムンと臭覚を刺激

する。

猿ぐつわは嵌められていなかったから、必要があれば大声で助けを求められるという安心感はあった。それでも、もはや見慣れた、この裏庭の、たたずまいが、以前の生埋めの時とは別世界の風景のように見えた程、心細さが募って来た。というのは、これまでの生埋めでは、たとえ縛られていても、苦しくなれば、懸命に身体を動かせば、周囲の土が多少でも動いて、なんとか、その重圧を緩和出来るという自信が、あった。しかし、今日という今日は、土中に立てた杭柱に、固く全身を緊縛されているのだから、どうしようもないのである。

その上、その柱縛りが、自分で穴底に立つてから縛られたのではないから、殆ど宙吊りに近い状態なのだ。それ故、埋められて、しばらくしてから、いつもの生埋めでは感じたためしのない神経麻痺が、早くも全身に顕われ始めたのが、春子にも、判然と分かって来た。それに、寸秒の休みもない土圧が、四周から容赦なく彼女の肉体を責め続けているのである。

生埋めにされてから、ものの二十分程しか経っていない時でさえも、それが春子には、

一時間も、二時間も埋められているかのよう
に思われた。それ程、今日の彼女には縄目が
苦しく、堪えきれない苛責感を覚えさせた。

「ああ苦しい！ 柱に縛られずに、いつもの

通り埋められた方が良かったわ。縄数を少な
目にすれば良かったかも知れないわ。でも私
は奴隷妻なんだから、どんなにして縛られて
も仕方がないのね。お縄を受けない奴隷妻な
んて考えられないもの。柱縛りで吊るされる
のが、今の私には身分相応なのよ……。それ
にしても苦しいわ。ああ本当に苦しいこと。
こんな調子では、一体どの位、辛抱出来るか
心細いわ。いつもの吊るし責めとは全然、違
う、この苦しさは、なぜなの？ 駄目だわ。

このままでは、本当に死んでしまうかも知れ
なくてよ。ああ！ 馬鹿な事を、しでかし
てしまった……。いいえ、そうじゃないわ！
決して、そうじゃないわねえ。私には、こう
して苦しい責め苦を受けなければならぬ理
由が、あったんじゃないの？ 誰にも言
えない秘密が……。だからこそ、苦しいこと
は百も承知で、柱縛りで埋められている筈じ
ゃあなかったの？ 死ぬ程、辛い折檻を受け
なければならぬ立派な理由が、私には、あ
るんだもの……。でも苦しい！ どうしよう。

ご主人様に、お願いしようか、掘り出して下
さいって……。でも、このまま死んでしまっ
ても、私には、とくに、覚悟の前だった筈
よ。

両目を閉じ、齒を固く喰い縛って、生埋め
の苦痛に堪え続ける春子の胸に去来する、悔
恨と反省とが交り合った想念であった。

折悪しく、いつとはなしに非情の雨が音も
なく降り始めて来た。たちまちにして、土の
表面にポツリと一つ、取り残されたように晒
されている春子の髪も、頭も、顔も濡れて、
遂には、その滴が、したたり落ちるようにな
った。雨は容赦なく彼女の埋められている穴
の周囲に、絶え間なく降り注いで、黒土にジ
ットリと浸み込んで行った。

その上、運の悪いことに穴底の近くに隠れ
た水脈があつて、そこには用水池からしみ出
た水が、いつも細々ながら湧き出ていたので
あった。この日に限ってその場所を深々と掘
り下げ、杭柱を立てたのである。その水脈か
らしみ出した湧き水が、時の経過と共に埋め
た柱に伝わり、ジワジワ穴底に溜まって来た
のだから堪まらない。穴の中で除々に水嵩を
増し、春子の足元から上へ上へと、攻め上が
って来た。宙吊りに近い柱縛りと、土中の生

埋め、それに加えて、このような上と下から
の水責めという、四重の苦痛が、ただでさえ
弱り果てている、その日の哀れな春子の全身
に同時に加虐されて来たのである。

「ああ、もう駄目だわ。私、死ぬかも……。
でも、それで良いのよ。そしたら万事が解決
するもの……」

朦朧とし始めた意識の中で、僅かな諦めと
慰めの思いが、幾らか彼女の心に安らぎを与
えたようであった。そして、やがて春子は精
根をば使い果たして、そのまま失神したので
ある。彼女の、真青に血の氣を失った美しい
顔が、ガックリと前に折れた。

予定の作品を脱稿して、ホッと一息ついた
新吉が、ふと外を見て驚いた。仕事に熱中し
ていて、音もなく降り注ぐ梅雨の気配に全然
気づかず、二時間近くも過ごしてしまったの
だった。普段から用心深い彼にしては、これ
は正に一大不覚といえる失態である。

「しまった！」

新吉は思わず呟くと、はだしのままで庭に
とび降りて現場に駆けつけた。そこには、既
に処刑を終わって転がされている生首のよう
に、がっくりと垂れた春子の首があった。

新吉は、ただ、夢中だった。埋め土を取り

除く必死の作業は、じつとり水気を含んで粘着力を増した黒土のため、それを埋めた時のようには、迅速に涉らない。しかも新吉が苛立てば、それだけスコップの操作が乱れて、春子の身体を傷つける恐れもあった。

「失敗した、失敗した。大変な事になった」

彼が焦れば焦る程、掘り起こし作業は難行し、不吉な予感が、その動作を鈍らせた。日頃、冷静な新吉も、この緊急事態には不覚にも取り乱して、狼狽と焦燥とに打ち拉がれる思いだった。

それでも、全力を振り絞って、どうやら立柱を、春子の身体諸共、土中から引きずり上げる事だけは出来たが、ポツカリと開いた穴の中に、既に半ば近く地下水が浸水しているのが鈍く光って見えたのには慄然となった。

新吉は、いつナイフと断ち切鉄を取りに走ったのか自分でも覚えがない位、無我夢中であつたが、とにかく、小雨が降り続く地面に柱を背負ったまま横たえられた受刑者の全身から、縛り縄をズタズタに切り解き、まるで死骸のように、ごろりと柱から地面に落ちて転がった春子を、一先ず風呂場に運び込んで、ようやく一息ついた新吉であつた。

過去四回の、生理めプレイの成功に油断し

て、こんな時に限って、迂闊にも風呂を沸かして置かなかったのが悔まれたが、後の祭であつた。大急ぎで、全身の汚れを洗い流すと新吉は再び春子を抱えて六畳の座敷に運び、直ちに布団を敷いて寝かしたのだが、依然として春子は意識不明を続けている。

全身、血の気を失って横わる、冷え切った春子の身体を、新吉は懸命にマッサージし続けたけれども、この時ばかりは、全くなんの効果も顕れないのである。彼女の全身に刻み込まれている縄痕のくびれにさえも全く一滴の血の気さえ、認められないのであつた。

「春子！ しっかりしてくれ！ 早く息を吹き返してくれ！ どうか、死なないでくれよ。どうしよう。そうだ、一命に関わる重大事なんだ。胴鎖も外してやらなくっちゃあ。さて、鍵は何処にやったかな？」

年に一、二度、鎖の清潔を保つただけに外す時以外には、全く使ったことのなかった胴鎖の鍵のあり場所すら、新吉は仲々思い出せない程、気持が転倒していた。

「それより、門川先生を早く呼ばなくては。そのための先生じゃあないか」

新吉は、そう思いつくと、青白く横たわる春子の身体の上に急いで毛布を掛け、直ちに

医師を呼ぶ電話を掛けに、一目散に走り出した。彼が胴鎖の鍵を探して机の引き出しを開けた時、その中に先生の名刺を見つけられたのが幸いしたのである。

折良く在宅中だった門川医師は、新吉の如何にも狼狽した話し振りに危急事態を察したらしく、すぐに駆けつけてくれるとの返事だった。

新吉は、医師の到着を待つ間にも、漸く戸棚の奥から見つけ出した小さな鍵で、春子の胴鎖を外したり、湯を沸かしたり、マッサージを続けたり、出来る限りの努力を尽しながら、ひたすらに春子の蘇生を神仏に祈った。

冷たい胸に耳を当てがい、微かではあるが心臓の鼓動を聞いた時の嬉しさ！

「助かってくれ！ なんとか先生が来るまで頑張ってくれ！」

と、マッサージする両手に一段と熱意を籠めるのであつた。

それにしても、生理めの代償として春子の身体を医師に診せるべく説得しながら、今日の日まで格別の理由もなく、診察の実現を延ばさせていた自分の甘さと迂濶さが、かえすがえすも悔まれ、我ながら情なくなるのであつた。

約束にたがわず、門川医師が到着した時も春子の容態は全く変化が見られなかった。医師は春子の様子を一見した刹那、一寸、眉根を曇らしたようだったが、流石に沈着に臨機の処置を、し終わってから、落ち着いて

「大丈夫です、ご安心なさい。応急の手当は致しましたから、先ず、ご心配には及びますまい」

と、傍で色を失っている新吉をなだめて置いて、改めて春子の生埋めから失神に至るまでの概略を聞き終わると、つくづくと春子の痛々しい身体を眺めた。そして、胴鎖を外されたばかりの、彼女の小さく括れて無残に変色した細腰に手を差し延べると、その鎖の条痕を静かに、さすりながら、

「それにしても、随分、惨たらしい事を、なさっているんですね。こうまで症状が進んでいようとは思いませんでした。この前、お話を承った時、直ぐにでも伺って、診て差し上げれば良かったんですね」

と嚙然とした面持ちで言った。

しかし、その言葉には、彼等二人の生活内容に対する、非難めいたものは感じられなかった。むしろ、医師として当然、取るべき義務と手段とが、遅延したことに對する自責の

言葉とも受けとれた。

けれども、悔悟の情に責められている新吉の耳には、痛烈な響きを持つもののよう聞き取れたのは無理もなかったが、注射の特効で春子の顔色が幾分、赤味を取り戻した時の新吉の喜びようはひとかたではなかった。

やがて意識を完全に回復した春子の容態を慎重に診察した後、門川医師は患者に對する今後の処置について、事細かに新吉に指示を与え、翌日の来診を約して帰って行った。

玄関先まで見送った新吉は、遠ざかるエンジンの音を聞きながら、急にヘタヘタと上がり框に腰を落としてしまった。先刻来の疲労と心配と、そして今にして味わう安心感とが一時に彼に、のし掛かって来たからである。

翌朝、約束通りに門川医師が訪れての診察の結果、*「余病さえ起こらなければ、もう心配は全くない。ただし、当分は出来るだけ安静を保って、体力の完全な回復を図らなければならぬ」* 旨を申し渡された。

診療後、医師は全く感に堪えない面持ちで新吉に向かい、

「お話は大体、伺っていましたが、奥さんの身体が、これまで、よくまあ故障なく来られたものですねえ。本当にご丈夫なんですよ。

何は兎もあれ、健康に恵まれているということは、人生最大の幸福です。今後は決して身体を粗末になさらないように、くれぐれも自重なさることですねえ」

といい残し、他には別段、説教がましいことは何一ついわずに、帰って行った。

その日の春子は、パジャマ姿で寝ていたが医師の診療中、昨日の自分の不様さを思い起こして、その余りの恥かしさに目を開ける勇氣が出ず、閉じたまままで過ぎてしまった。それでも先生の思いやりのありがたさと、診察を拒み続けていた自分の愚かさと思つて涙を止どめる事が出来なかった。

昼近くなつて、春子は、ようやく口を開いた。彼女は両目を半ば開き、しばらくの間、眩しそうにしていたが枕元に寄り添つて一心に見守り続けてくれていた夫に向かって、
「貴方、ご免なさい！」

と、光る睫毛を伏せた。これが事故の後、初めて彼女が口にした言葉であった。続いて
「ご心配お掛けして申し訳ありません」

と、まだ弱々しいが、差し延べた彼女の手首には、無残な縄目の跡が、彫り物のように深く残っているものであった。

カット・岡たかし



マゾヒストの心情分析

マゾ談義考

小川左門

私は、御誌の二十数年の愛読者です。

マゾ性格者を以て任じている私ですが、鞭で打たれるとか、縛られるとか、蹴られるとか、いったマゾではなくて、あくまで若くて美しい女性の御神酒拝受の典型的な屈辱愛好のマゾなのです。

確かにマゾと云いまして、乗馬靴で踏みつけられるとか、乗馬鞭で叩かれるとかいった肉体的な苦痛を与えられる責めとは違っていて、私の好むマゾは、一度、女

性の体内を通ってきた排泄物を飲食させられて、最大の屈辱を味わうという、いわば最高のドレイ根性なのです。

小の方は勿論のこと、大の方も口にしたいというのですから、普通の人が聞いたら、それこそ、気狂い扱いするのも当然です。

もっとも、このアブノーマルな性癖は、今に初まったことではなく、私の青年時代（戦争前のことになります）の性研究の大家といわれた沢田順次郎氏の著書の中

にも、『異性の糞尿を飲食して性の歓喜に打ちふるえて、自らマスターベーションする事実』の記載があったのを覚えております。

当時は、現今と違って、極端なマゾヒストは一応、気狂いと混同されたとみえ、東京府下（当時）の精神病院の一室に、外部へ出る事を禁じられていた一患者が『時々訪れる若き看護婦のいわゆる御神水をねだって口にしたりしたが、この日の如し』とありましたが、このマゾ患者について次のような驚く

べき事実があったという事です。

このマゾヒストの患者は、最初のうちは、病院内に限っての行動は自由だった為、室を抜けだしては看護婦専用の便所に至り、糞壺の傍に新聞紙を敷いて、そこへ潜んで看護婦達の来るのを待ち構えていました。

看護婦達は、薄暗い糞壺の傍にそんなマゾヒストがかくれているとは露知らず、便器に跨がって滝のような排尿をします。下で待ち受けていたマゾ患者は、その放尿を直接、口に受けては無上の感激に浸っていました。

『放尿を口で受け止め、これを飲下する事度々なりしが、遂に五日の後』一人の看護婦に見つかり、院長に報告されてしまいます。

結局、一室に檻禁されて外部へ出る事を禁止されてしまいました。が、それでも、このマゾヒストは屈しなかったそうです。すなわち『遂に一室より外部に出ずる能わ

—ナミオM画廊—

『山峡のせせらぎ』 春川ナミオ



ず、唯外より食事の差入れ及び一室には、自分用の便器のみ置かれアブノーマルな性生活に悶々の日を送っていた所、看護婦の訪れる度毎に、彼女等の御神水を要求、呆れた看護婦が再び院長に報告したそうです。

その結果、さすがの院長もサジを投げて、看護婦達を集めて『もう、この上は、あの患者を満足させる為には、やむを得ないから若し、君達が便意を催した際は、便

所へ行かずに、彼の口へ放散してやるように、と、いう許可を与えた』そうです。

最初のうちは、呆れたり、恐れたりしていた看護婦達も、よく考えてみれば、どうせトイレへ行つて捨ててしまうもの故、そんなに飲みたいのなら——と、進んで、このマゾ患者の室へ行つて、仰向きに大口を開いた、この男の顔に御神水を飲ましてやったとありました。

相手がアブノーマルな入院患者ということ、面白半分に一人がやりだすと、次々と希望者が現われたのかも知れません。中には、後の方の大便も食べさせてやったわ、という看護婦も現われたそうで、今も昔も、アブノーマルな形態は、依然として、少しも変わっていないということが、よくわかりました。

只、戦前の当時と、現在とではマゾヒストに対する評価の仕方も

隔段の差があつて今の方が、いくらか恵まれているか、計り知れないものがあります。

そこで、私としては、然らば、それらのマゾヒスト達は、どうして、女性から、そんな屈辱を受けて、セックスに直接、結びつくのだろうか、と、その心理を分析してみたくまりました。

その一つには、つまり男性としては、女性は美しいもの、優しいものという理想像をイメージに描いて憧れを持っています。そんな憧れから始まって、あんな美しい異性でも、やはり男性と同じ様に汚い糞尿を排出するのか、といった疑問が、先ずその第一歩かと思うのです。

次に、女性の理想像を追うの余り、あんな美しい女性の足の裏でもキスしてみたいという欲望が頭をもたげてくるのです。美しい女性の中の汚いものへのクチヅケそれは、足の裏や足の指から出発して、もっと、もっと汚いものへ

と進行してゆきます。

当然のなりゆきとして、美しい女性の身体の中でも最も汚いもの——となれば、これは身体から出た排泄物という事になります。その女性の、小便を口にしたいと願うのは、マゾヒストとしては当然の事でしょう。

そうしたマゾヒストの心情としては、尊くて美しい女性には、とても対等の感情を持つなんて事は考えられません。常にインフォリテイ・コンプレックスを感じているのです。

ですから、マゾヒストは、常に自分を美しい女性では、卑しいドレイ的存在と考えている結果、乗馬する女性を下から仰ぎ見る時、その威圧感は、全身が打ちふるえるような歓喜に変わるので。思わず、その女性の靴を磨きたいという衝動を抑えることが出来なくなることでしよう。

一度でもSMプレイをさせられ

た女性に対しては、一生、頭が上がりず、自分の変わった性癖を知られたという事は、完全なドレイの立場から抜け出せなくしてしまします。

その相手の女性から、屈辱を与えられれば与えられる程、そのマゾヒストのセックスはクライマックスに達してしまします。

私は、どちらかといえば、肉体的苦痛を与えられる事は好まないタチです。でも、一旦そうした境地に導かれた場合には、頭を蹴とばされても、靴で踏みつけられても、最大の快感を感じるだろうと想像できます。

若いグラマーの女性を見れば、みんな自分の女王様のように錯覚を起こし、その美しい女性のむちりしたお尻の下に敷かれている自分の姿を空想して、熾烈なマゾの欲望は、ますます燃えさかるのです。

最近、戦前とは違ってセック

スの開放時代といって、性に関する情報は世の中に氾濫しておりま。各家庭内に於いて本来秘すべき内情さえも、遺憾なくその実情を雑誌に発表し、テレビ、ラジオで放送しています。また、それに対する回答さえ、微に入り細をうがって発表されています。

SMに関しても、一時期の罪悪感は大いに後退し、マゾ、サドと言っても一向に驚く様子のない時代になった事は、私達マゾヒストにとっては非常に意を強くするところ。です。

先日、ふと読んだ『主婦の友』の夫婦間の性愛関係についての質問の中にも、マゾに関するものがありました。

現在、大学教授である夫が妻に対して顔の上に跨がって呉れと懇願し、妻も最初は恥かしくて拒否していたのが度々要求されて、やむなく夫の顔の上に跨がったとのこと。です。

夫は妻の女性自身を思いきり舐めて、妻もまた『私も、きもちが良くて、かなり多量の女性ホルモンを夫の口に入れた』そうです。

更に今度は、ネクタールも飲まして呉れ、という夫の要求に『若し子供にでも見られたら』という恥かしさから質問欄に訴えたところありましたが、なんと、ほほえましいSM夫婦ではないでしょうか。

また、二年程前の、『週刊ポスト』に梶山季之氏が書いていたマゾ夫婦（勿論、妻がサドで夫がマゾ）という記事では、品川区に住み洋品店を経営する太田某なるサド女性が、毎日のように夫なる男に、その排泄物を直接与えていると書いていましたが、これを読んだ私は驚き且、呆れた次第です。

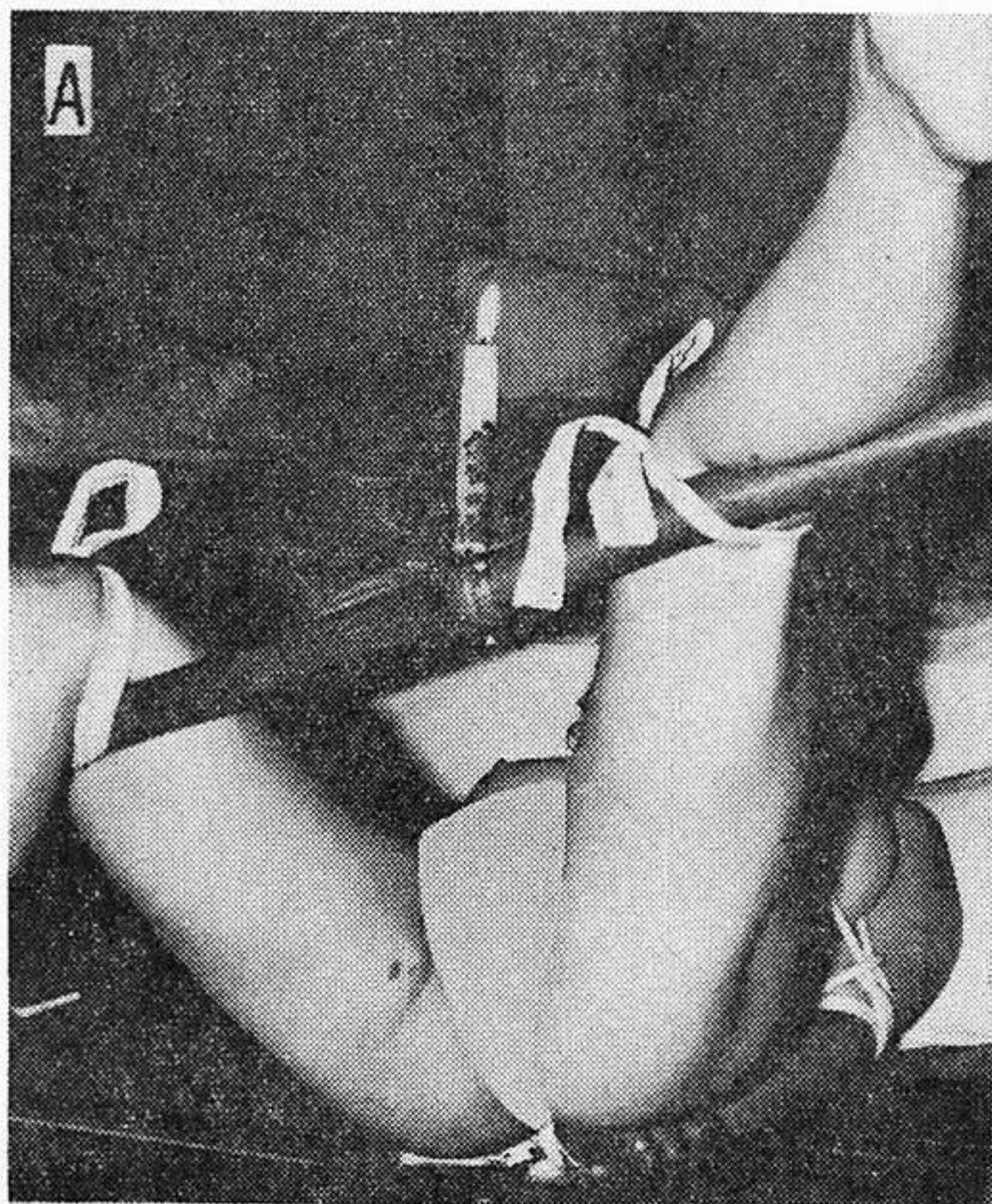
私のような傾向のマゾヒストはマゾの中でもコプロ趣味というのだそうですが、そうした同好者の方々の告白、体験を、お知らせ頂ければ幸いです。

S M 体 験 記

“あるマンション”

で泣く『裕子』

最 上 卓 也



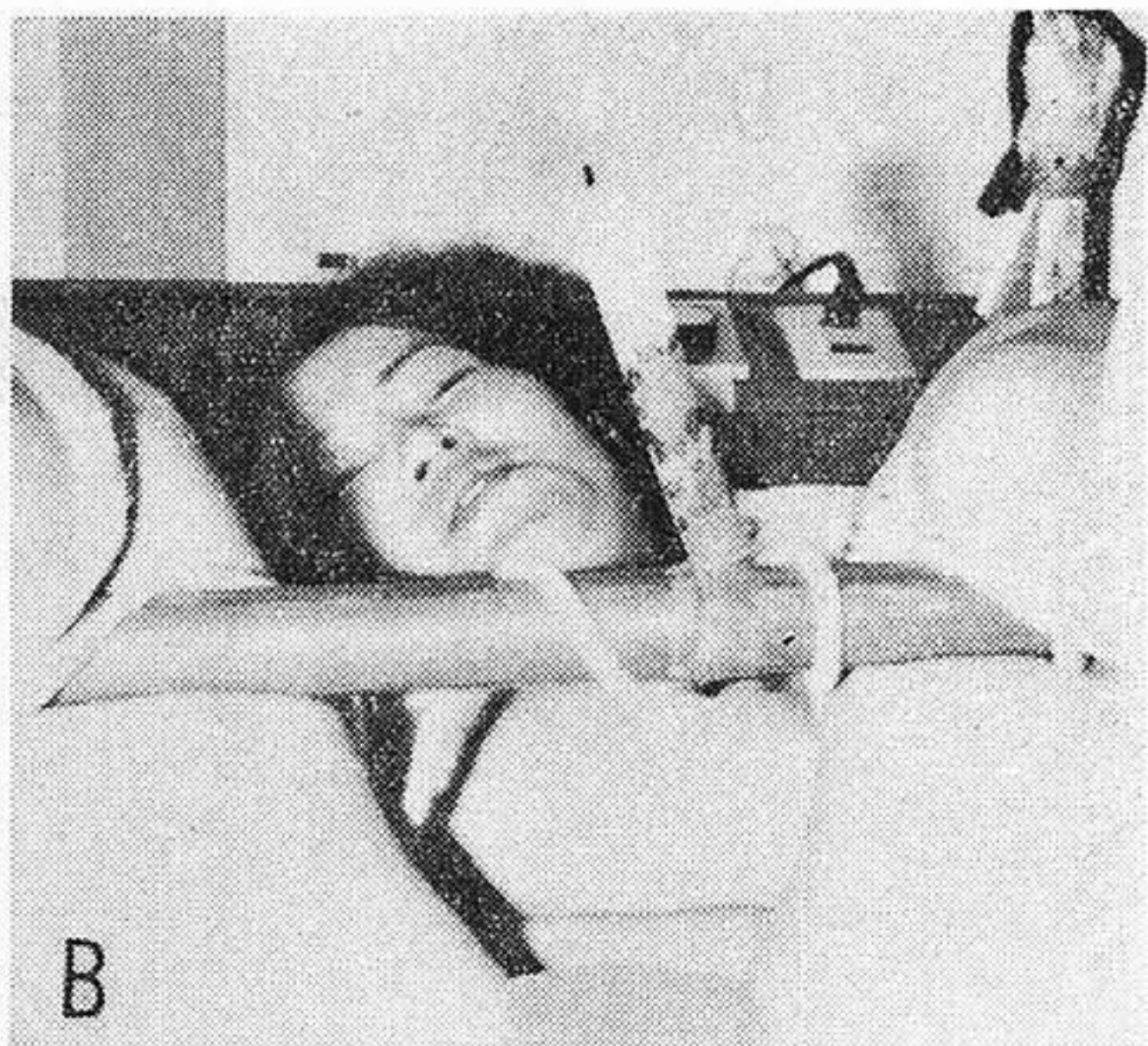
一月末、所用で大阪まで出掛けた時、車中でふと目についたのが、某スポーツ紙の三行広告だった。

このところ、裕子とのSMプレイも、二、三年前ほどの意欲は湧かず、マンネリに陥っていて、何か新鮮なものを掴もうとしていた矢先でもあったので、帰りの新幹線を最終に変更し、東京に着くと早速電話をして、指定された場所へ出向いて行った。

その指定された場所というのが、東京は代々木駅近くの喫茶店で、私が席につくなり、週刊文春を片手にした先程の電話の主が、姿を見せた。小肥りの落ち着いた感じの紳士で、奇クの大ファンであると言った。

この会には、名前を言えば、すぐわかる有名な人も、何人かがすでに入会しているのとどこだったが、この紳士の話を、一応要約すると、都内のあるマンションの一室を、四〇〇万円ほどかけて改造して会合の場所に当てているのだそうだ。会合の日は、毎週、土、日曜日の夜八時三十分から集まり、お互いにSMの同好者の語らいやSMプレイに興じることだったが、会としては、いわば場所を提供するということになるらしい。

会員の種類は、一般と特別の二つに分かれ



ていて、入会の条件としては、一般会員は、男性五万円、女性三万円を入会金として支払うと同時に、初日には、必ず会員の前で、SMプレイを披露することが必要条件というところである。

特別会員の方は、プレイの出来ない人、又は相手のいない人で、一般会員の保証を必要とするばかりではなく、会費の方も一般会員の十倍、すなわち男性五十万円、女性三十万円とハネ上がるそうである。

その他、出席当日の会費としては、男性五万円、女性三万円を支払わなければならないが、軽食や飲物などは、この中に含まれていて自由に飲食することが出来る。

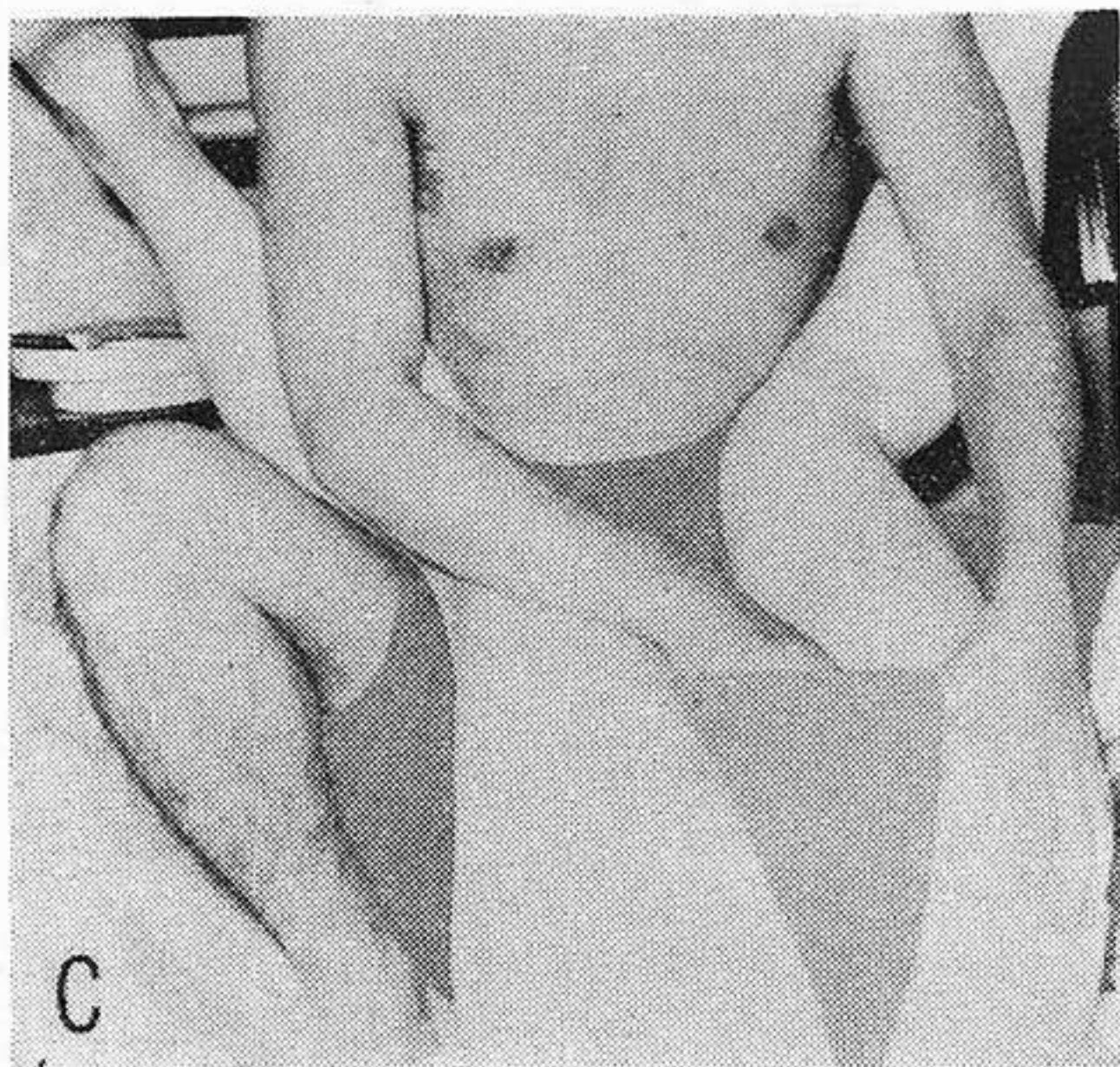
尚、入会初日以外にプレイを行なった人については、出演料として五千円から三万円までを支払うことに、なっているそうだ。

コーヒーをすすりながら、私が聞いた要点は以上の通りであった。

私は、近いうちにパートナーと一緒に上京する機会があるから、その節はよろしく、と場所、電話番号などを聞いて別れた。今日の話の空想の中に、

裕子のことを思い描きながら、雪深い山形へ向けて最終列車に乗り込んだものであった。

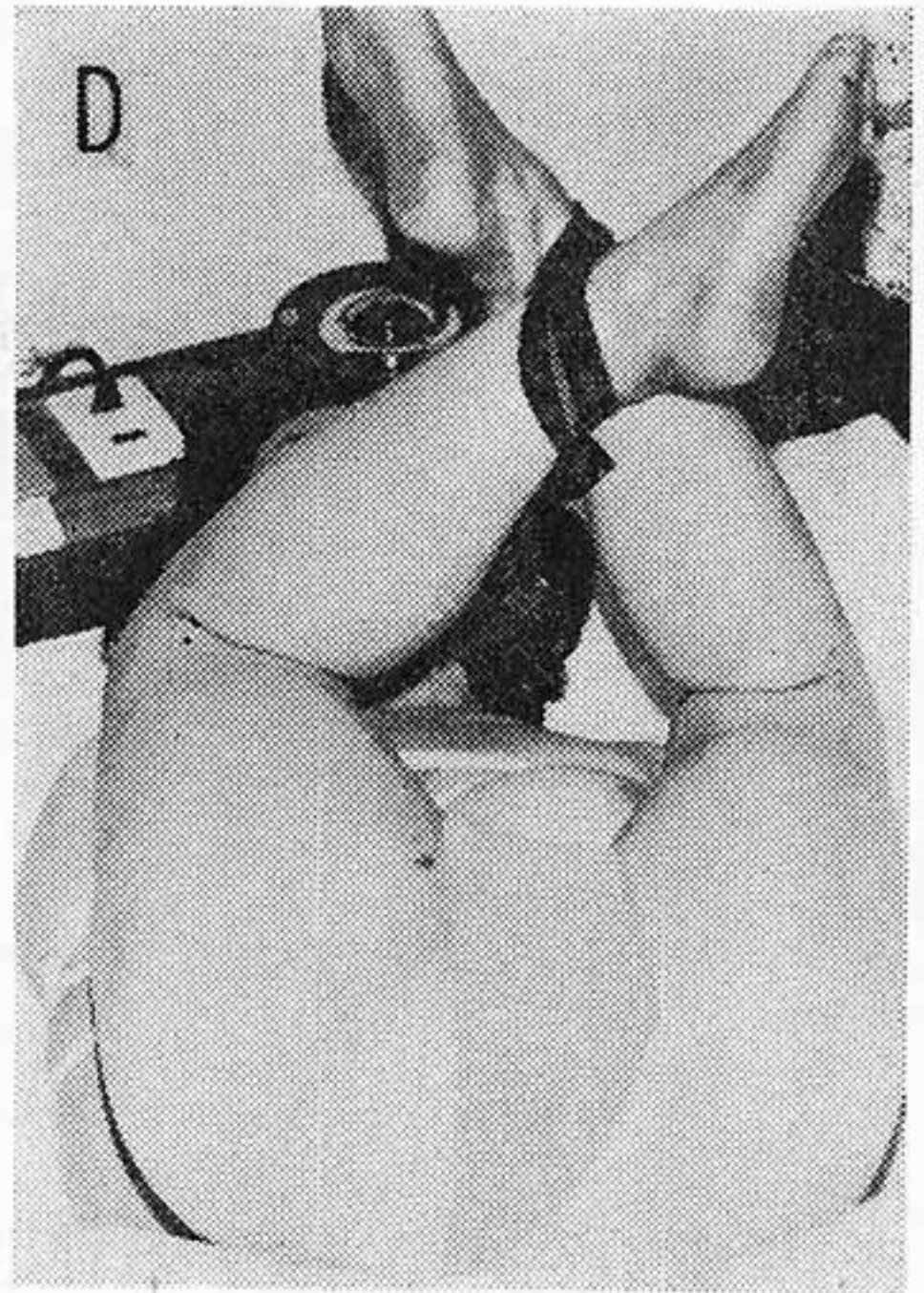
三月二十四日、春の彼岸の最後の日。花の房総半島は今が最高だ——と、裕子を誘ってつれ出した。フラワーセンターや行川アイランド、更に誕生寺から鴨川シーワールドなどを回った。途中で皇太子御夫妻に逢うことが出来たりして、久し振りの遠出に、裕子も子供のように喜んで楽しい一日



を過ごした。

地下四階の東京駅に着いたのが、夜の八時すぎであった。例のマンションの方へは、事前に一応、電話しておいたので、早速、〇〇第一マンションに乗り込んだ。

夜になってしまっていたので、暗くてよくわからなかったが、マンションは五階か六階ぐらいの高さだったと思う。指定された十八号室は三階にあり、玄関は緑の植込みのある庭先から入るようになっていた。



割り込んだ。

新入会員の中でも一般会員は、最初だけは必ずカップルが同部屋になるのだそうだが、これは勿論、お目見えのプレイを行なうためのもので本人達の希望があれば、又別だそうである。

一夜の大体のプログラムは、最初ビールや洋酒を飲みながら、SM談義や、その他アブノーマルに関する雑談でムードを盛り上げておいて、

愈々お目当ての新入会員の行なうプレイの見過物ということになる。

このプレイ見物の特徴ということになるといわゆるヌード劇場、ストリップ劇場によくある、例の『踊子の衣装や肌には、絶対に手を触れないで下さい』という禁制は一切ないので、見物人のプレイ参加は構わないということになっていることだ。

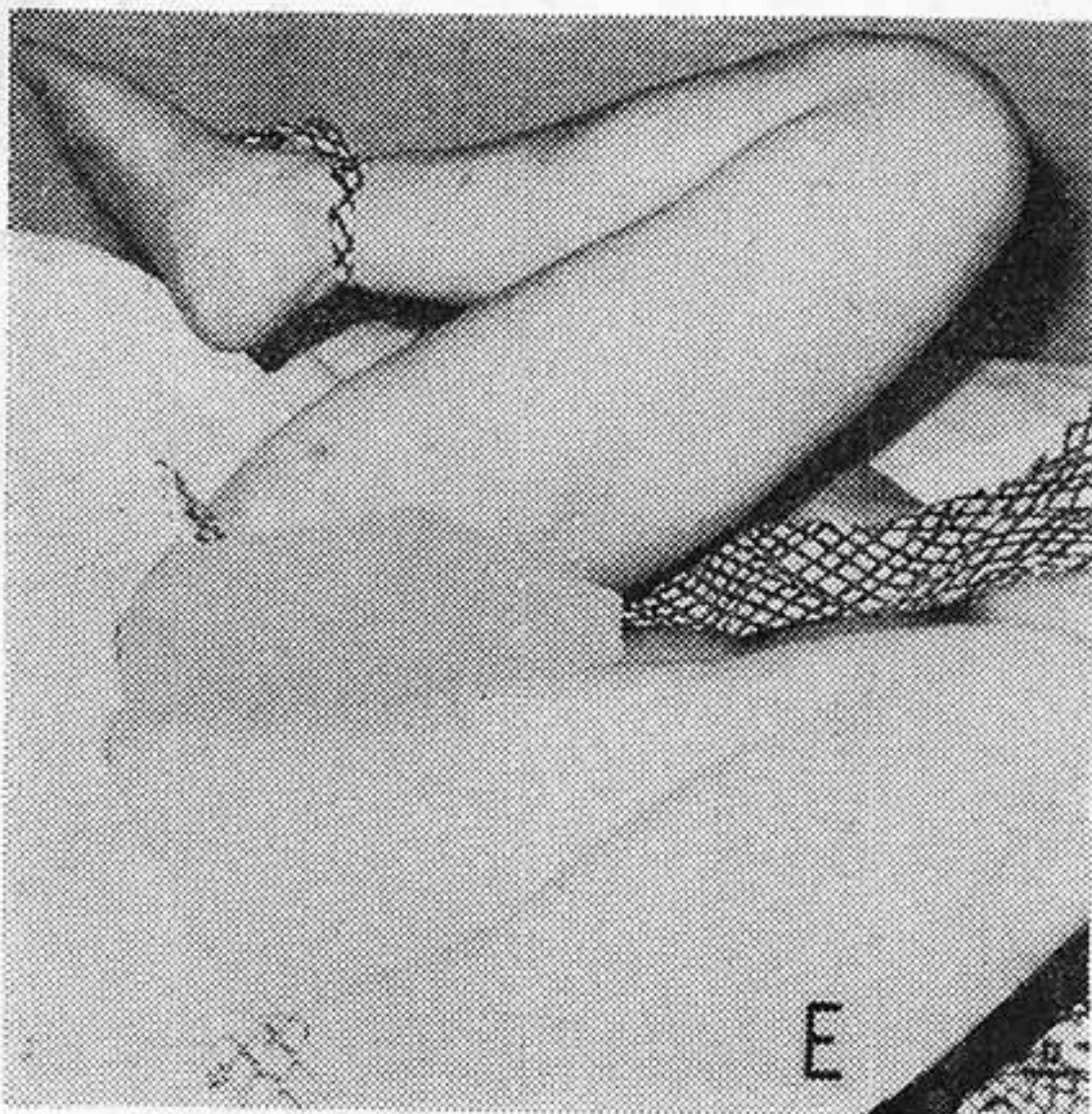
特別会員などは、このプレイ参加が楽しみで、会員になっている人が八割以上もあるそうである。従って、最後は、ほとんど乱交プレイに近いものになるらしく、エキサイトした結果、オールナイトで一夜を共にしたい人達のためには、ここがホテルに早変わりする

こともあるらしい。

私と裕子の落ち着いた日本間のグループは私達二人を含めて、男性三人、女性二人の計五名であった。すでに時間も十時近くになっており、アルコールも大分、回ってきたので、それぞれ、態度や言葉つきも怪しくなって、リラックスを通り越していった。

私は、瘦型のほっそりした女性の隣に腰を下ろし、裕子は、二人の男性の間に挟まれるように落ち着いていた。

私の隣の細身の女性は、話によると、相当なSの性格らしく、特に男性への浣腸責めを



部屋の内部は、劇場の舞台を三つに仕切りその仕切られた内部は、丁度モーターの造りで、和風あり洋風ありというところである。ただ、一番奥まった一室？ は、バス、トイレのみの部屋で、普通のモーターと違うところは、大きな鐘があったり、きらびやかな照明があったりすることであった。

三つの部屋の前には、それぞれ、脚の短いソファが二つ、三つと用意されており、テーブルの上には、SM雑誌やビールビンなどが無難作に置かれてあった。

私達は、入口でどの部屋へ行くかクジを引いた上で会費を支払い、素肌の上に浴衣をまとい、裕子と共に私は日本間のグループに

好み、例のトイレの部屋でのプレイが都合で今日は出来ないとのこと、ガッカリしている様子だった。彼女は私の傾向とは違ふし、それに顔も身体も、私の好みとは全く合いません。うにないので、適当に話をしながら、これから行なわなければならない裕子とのプレイのことなどを考えていた。

酒の好きな裕子は、かなりの急ピッチでビールをつがれるのを口にしながら、ハツ口から手を入れられて乳房を弄ばれていた。

裕子の酔いが次第に深まるにつれて、左右の紳士の行動も、かなり大胆になってきた。

裕子の両の乳房は、すでに丸出しで、相当大的なキスマークが、乳首の近くについている有様である。更に腰にしている浴衣のヒモが、襟を左右にひろげられているので、ヘソのあたりで直接、肌に触れていた。

比較的、大きなモノを丸出しにした一人の紳士は、自分の浴衣のヒモで裕子を後手に縛った上で、ふっくらと膨らんだ裕子の乳房を掴んで、こねくりまわしている。

更に、もう一人の紳士は、裕子の左足を伸ばさせて、その上に腰かけた上、右足を自分の肩にかつぎ上げて、裕子の可愛いおヘソへ、トックリから、じかに酒を注ぎ出した。

ヘソ酒というつもりらしいが、ヘソから溢れた酒は肌を伝って下へ流れてゆく。

この辺の場面展開は、数枚にわたってシャッターも切ったのであるが、絶対に公開しないではほしいということなので、編集部へ送れ

ないのが残念である。

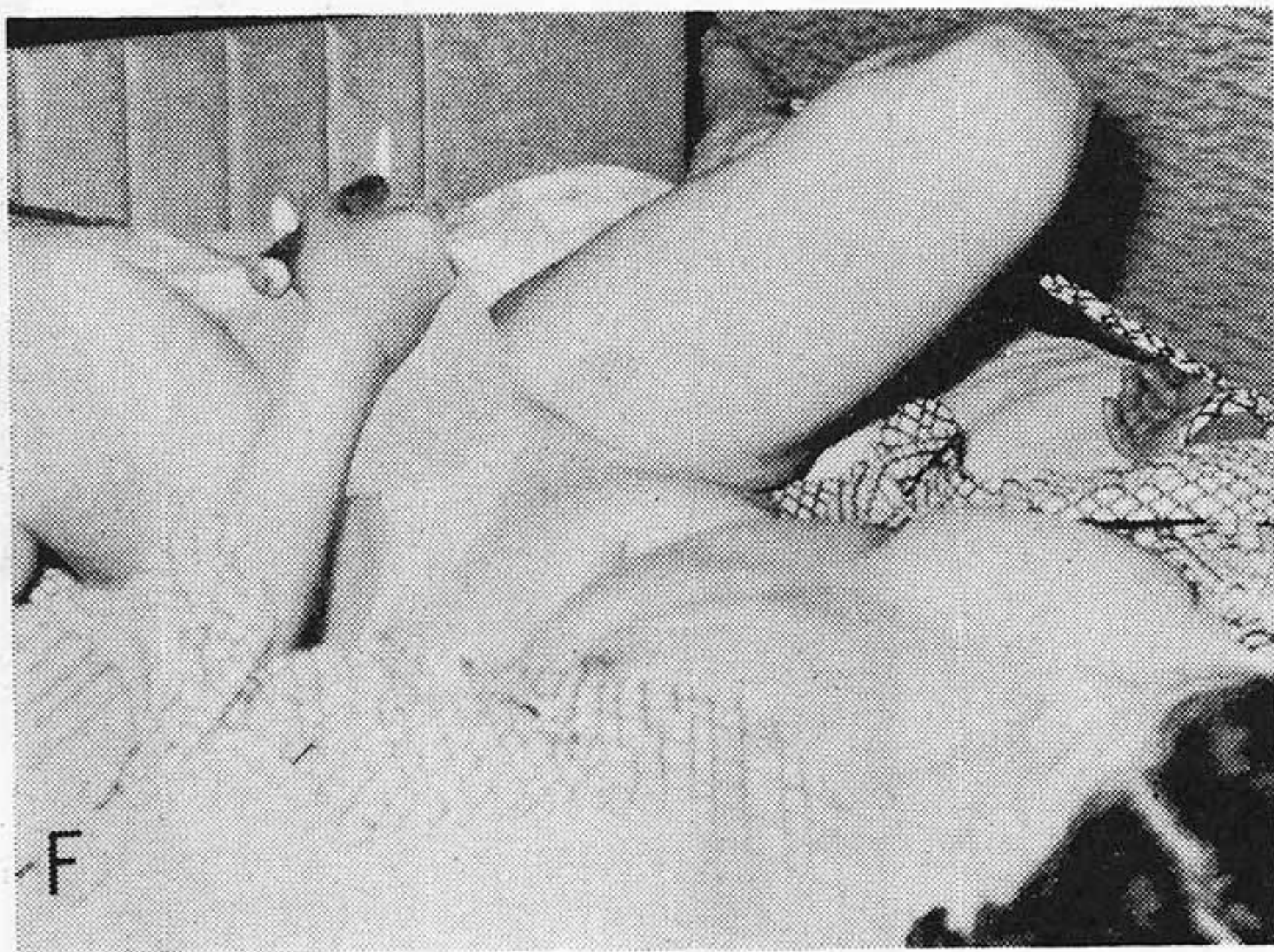
裕子は余りのことに悲鳴をあげて逃げようとするが、なにしろ、二人の紳士に左右から挟まれているので、とても逃げきれぬものではない。例の逸物の持主の紳士は、逃げまわ

る裕子と、もみ合うふりをしながら、ドサクサにまぎれて、相当きわどいところに、押し当てたりしている。

その都度、相当量の酒を口うつしで裕子に飲ませたりしているので、私もこれ以上、進展すると、裕子も酔いっぶされるかセックス攻勢で昇天させられてしまう恐れがあると見てとったので「さあ、ぼつぼつ、プレイを始めようか」と、裕子に近寄って促し、格子戸のところまで連れて行った。

そこで私は、その場の人達に向かい「私は常にローソク責めに生き甲斐を感じているので、今夜も、その得意のローソク責めを、披露することにしなす」と、前置きして、早速プレイに入って行った。

持参してきた、折りたたみ式の青竹を使用しての後手縛りのあと、開股にしてヒザの部分を青竹の両側に固定、



青竹の中心を格子の棧に吊るしローソクに点火したのが(写真のA)である。

更に、足は、そのまま、青竹を両腕のヒジまで、しぼり上げ、絵ローソクを設置したのが(写真B)である。

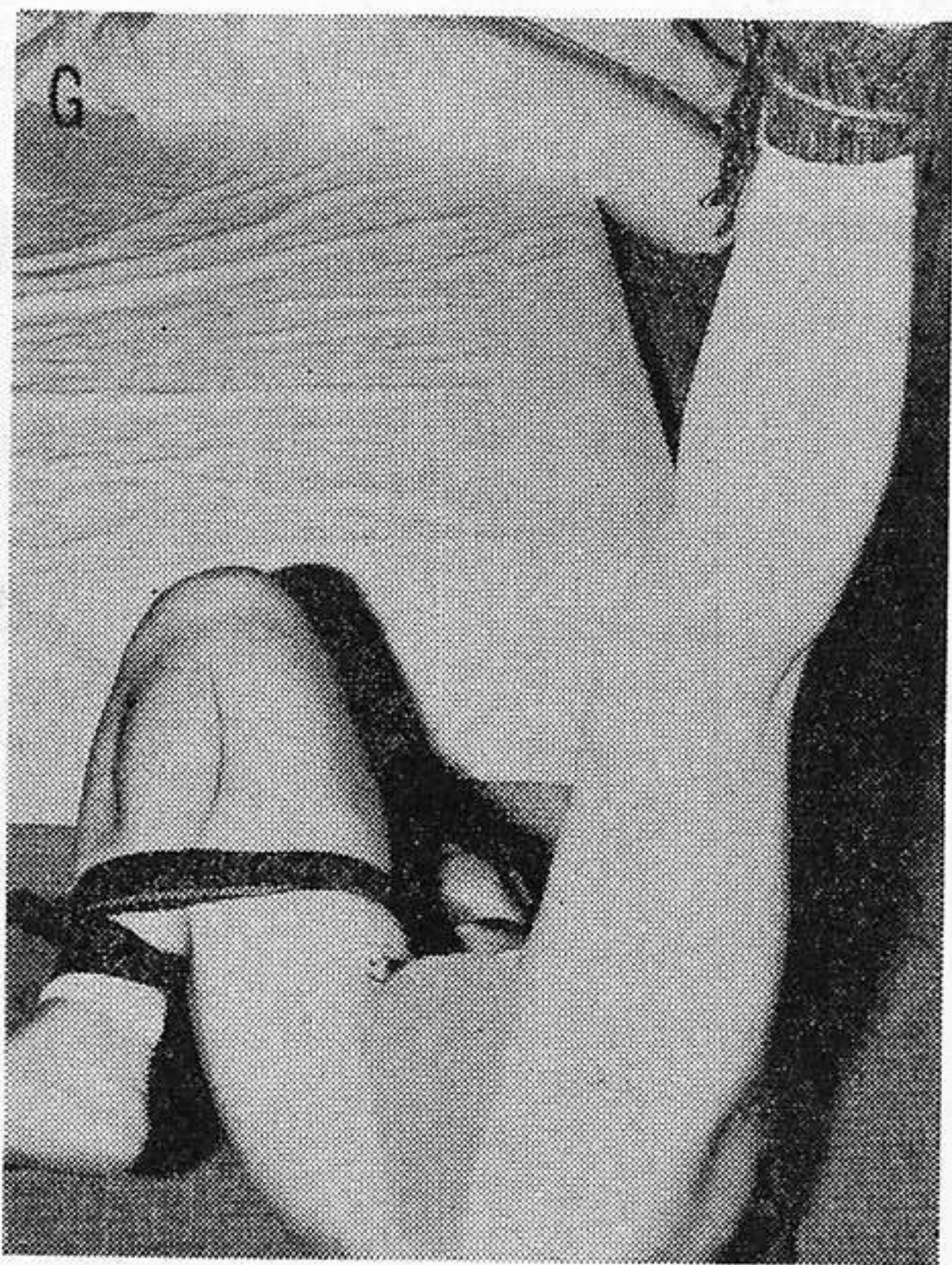
先程から大分、裕子に執心しているらしい丸出しの紳士は、語るころによると、世田谷の松陰神社のそばに住む無職の隠居暮しという結構な御身分で、アマチュアで骨董屋をやっているとのことだった。

この紳士、相当な好き者と見えて

私がイヤな顔をするのも一向に気にかけず、私の写真をうつす少しのスキを見ては、裕子に近寄って毛を引っ張ったり、パイプを差し込んだりして、悲鳴を挙げさせて悦に入っている。

この好色紳士のチョッカイで、私もやりにくいこと、おびただしい。私が邪魔物扱いにしますと、時価四、五万円はするという春画の巻物を提供するから、是非、裕子を責めさせて呉れと申し出てきた。

先程から一人、スターになっているこの紳



士を私も断わるわけにもゆかず「それじゃ」と紳士の申し出を受け入れ、私は専らカメラの方に引き下がることにした。

彼は後手に縛った裕子を、奥のベッドの方へ導いてゆくと、仰向けに寝かしつけた。そうして、しばらく考えていたが、特に適当な責めのアイデアも見つからないとみえ、裕子の豊かな乳房の附近にまたがり、腋の下に裕子の両足をかかえて、シワだらけの指を使ってパイプ責めからプレイを開始し出した。

こうした変則責めは、先ほどから相当ドキ

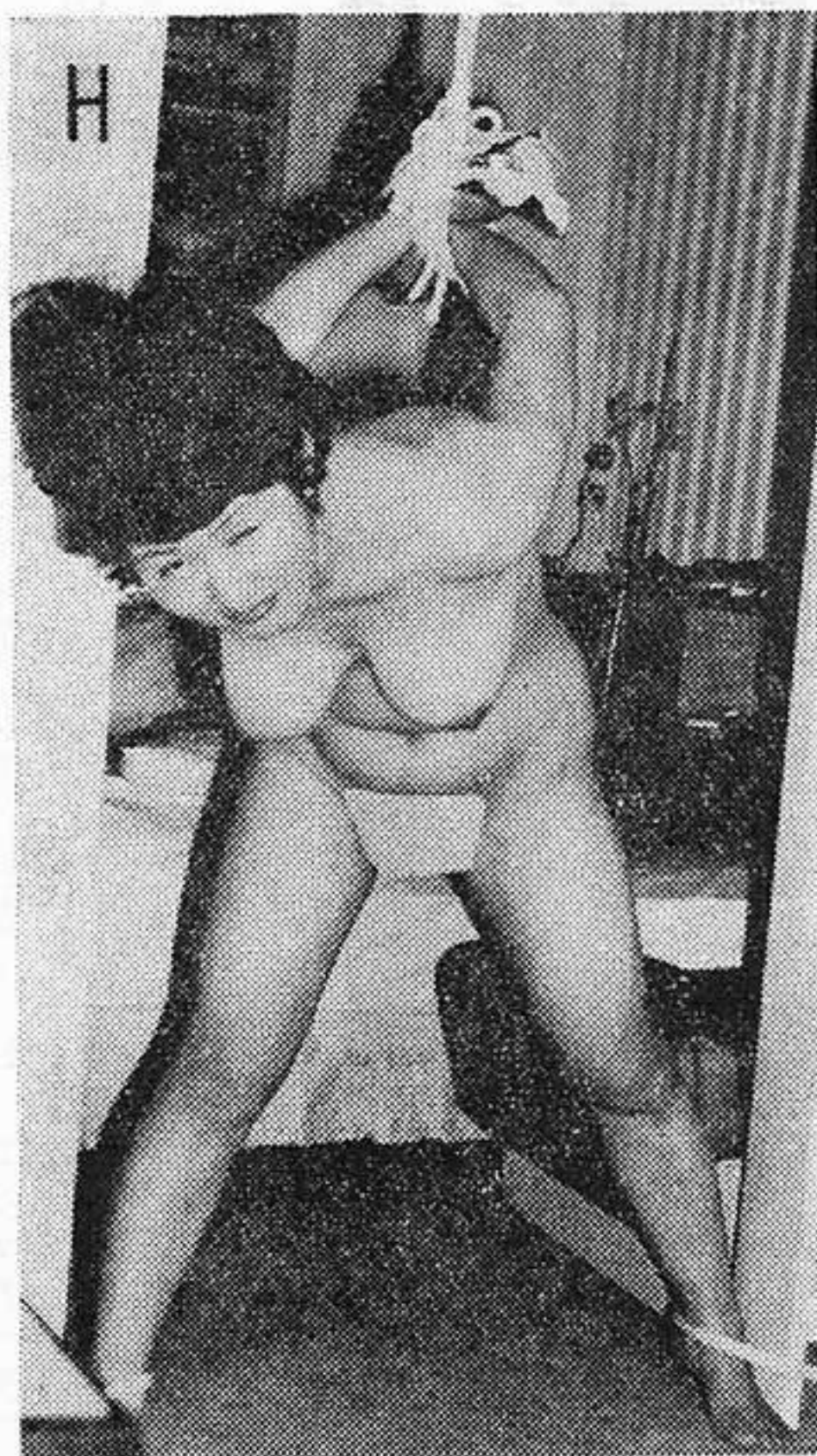
ックつづいているので、忽ち裕子の足は痙攣を起こし、パイプの作動が本格的になると、喘ぎが益々激しくなってきた。

私とのプレイでは、未だ嘗て見せたことのない、引きつったような裕子の表情にカメラを向けていると、突然「ヒューッ」と、かなり大きな悲鳴を挙げたので、驚いて後にまわって見ると、賞品用のボーリングのピンがスッポリかくれて、細い部分のみが顔をのぞかせていた。

一旦、納まってしまおうと、さほど痛くないのか、裕子の表情も少しやわらいできたが、さすがの裕子も、これだけのものは、入れたことがないだけに、一時は「ヒー、ヒー」と涙を流していた。

裕子の悲鳴が、演技ではなくて本物とわかったのは、引き出した、そのピンが一番太いところは直径が約七センチ程もあり、更に菊座の近くの一個所が裂けて、血がにじみ出ていたことである。

太さを諸者諸氏に見てもらうために、白く光るピンを、逆に入れた直後に写したものが(D)で、先ほどのパイプ責めで白いものを



流しているのが(C)である。

先ほどの強烈な責めで、裕子は、あと、この様な場所への同行は拒否するのじゃないかと、心配していたけれど、酒のせいも多分にあるとは思いますが、忽ち笑顔が戻ってきたので私もひと安心し、松陰神社の紳士に、次の責めに進むように目くばせをした。

そこで好き者紳士が、そのまま裕子をベッドに開股縛りにし、会場備えつけのクリスマス用のローソク大小五本を、私の指導で差込み、点火したのが(E)である。

さつきから退屈しだした、もう一人の女性S子が参加し、その附近にローソクをたらししているのが(F)である。あとからの裕子の

らしたあと、差し込み点火したものである。

そして、その紳士の最後の願いというのには、私もかなりの抵抗を感じたのだが、一緒に傍で聞いていた裕子が無言のまま、じっと紳士の方を眺めて、羨望の目を向けているので、しぶしぶ、承諾することにした。

紳士の最後の願いというのが、裕子を女上位にさせておいて、その最中に上位にある裕子の臀部や、菊座周辺に、いろいろ



話によると、普通の白いローソクより、今回使用した金銀のローソクの方が遥かに熱いということだが、同好の女性諸君如何かな？

写真(G)はS子と紳士が二人がかりで裕子の片足を格子の棧に吊り上げ、やたらとムチをふるい、ローをた

ろな責めを加えてくれというものだった。

勿論、紳士の狙いは、その責めによって裕子の部分が、俗に謂うキンチャク状態になることを望んでのことであろう。

早速、ゴムを使用の上、裕子を上位に二人の右手と左手、左足と右足をベッドに固定しておいて、ここで責めを得意とする、もう一人の女性S子に登場願った。

裕子の臀部に対する軽いムチ打ちのあと、S子は、ポトポトと、熱いローを尾骶骨のあたりに、こぼしていたが、それでも中々満足しない二人に次の責め手が中々見つからず、S子は私の方に助けを求めてきた。

そこで私は、私なりに、いろいろな責め方

を考えて行なったのだが、その中でも、裕子の最も敏感な柔肌へ、細い線香の火を、プチプチと軽く触れさせた△線香責め▽の悲鳴は素晴しかった。

そのたびに、裕子が「ヒィ、ヒィ」と派手に悲鳴を挙げるので、見物している人々も、思わず顔を寄せて、私の△線香責め▽の手元に熱っぽい視線を注ぐのであった。

「ヒィ、ヒィ」の悲鳴が、やがて「アッ、アッ」という呻きに変わる頃、この私の考案した独特の責め場は最高調に達した。

あとで松陰紳士の述懐によれば、そのときの筋肉の動き方も最高で、あんな思いをしたのは、これが生れて初めてのことだった。

この際の乱れに乱れた写真は、勿論、公表出来ないが、なんといっても、その場面の圧巻は、例のS好みのS子嬢が、余りのことにたまりかねて、手にしたローソクに火をつけ

て熱いローソクを、裕子の柔肌へ数分間、たらし続けたことである。

これで、私の苦心して考案した△線香の火責め▽も、おじゃんになってしまい、最後の仕上げはS子嬢の熱ロー責めになってしまった。声も哽れるような裕子の金切声。あとで写真を引き伸ばすと、松

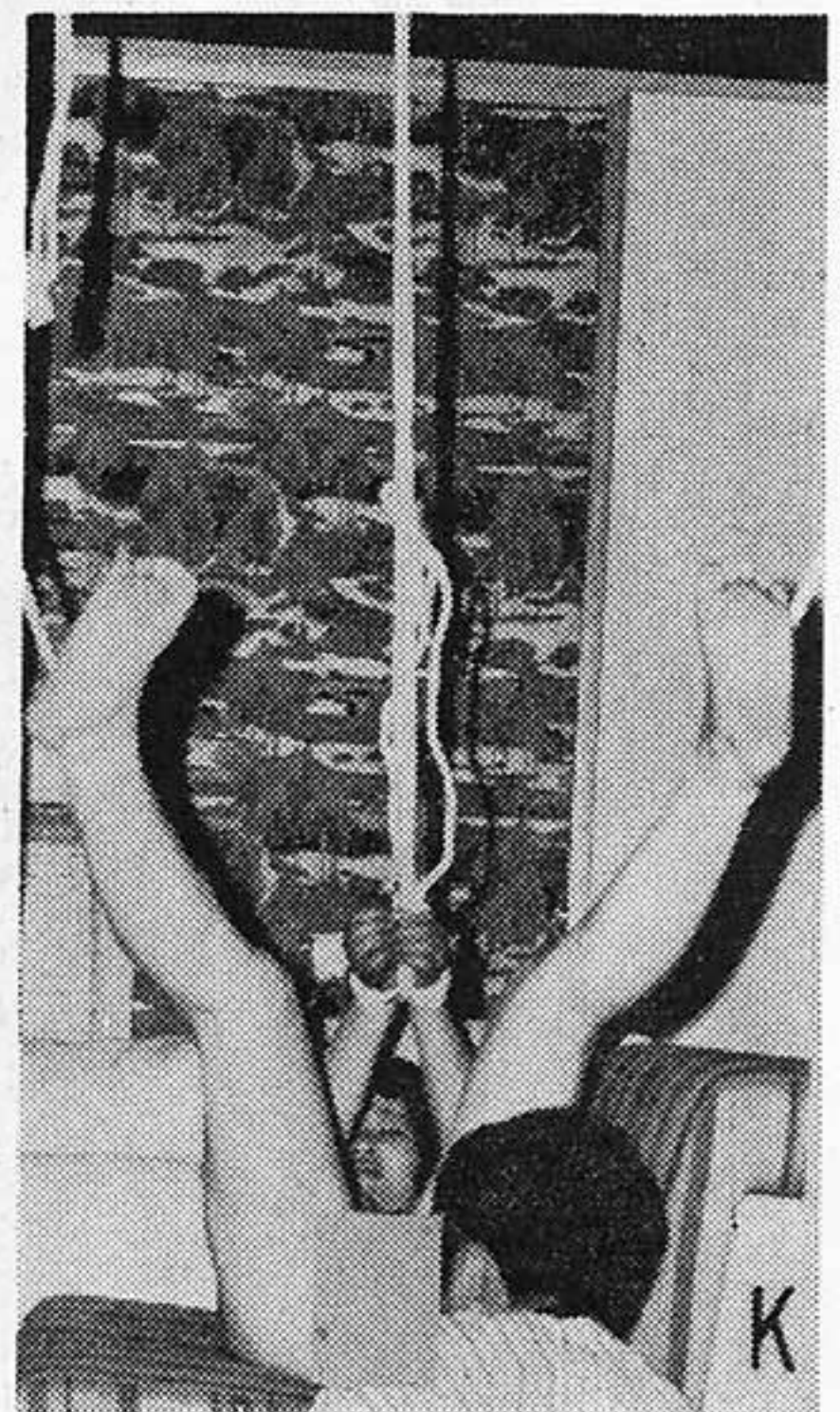
陰紳士の見事な金の袋が出来上がっていた。

酒に強いというのか、アルコールのまわりの晩い裕子は、この頃になって、足もとも危いくらいに酔いだしてきて、何を言われても只、エヘラエヘラ笑っているばかりだった。

日本間での私とのプレイが一段落すると、隣の洋間グループからの誘いに簡単にOKして、私にバイバイと手を振って、フラフラと出て行ってしまったのである。

隣の洋間グループは、男女各三人宛の計六名で、我々の日本間グループから見れば、みんな若くて二十代後半のようであった。

一見芸術家タイプの背が高く痩せた男とスケコマシ専門のチンピラ風の



肩幅の広いがっちりした男が、それぞれ若い女を膝の上に乗せて見物している前で、すでに、そのうちの一组のカップルが、ホンバンの真最中で、どうやら、完全に乱交プレイ・パーティを目標にしたグループらしかった。それでも、一応は『SM』という名のもとに参加しただけあって、酔いがまわって、フラフラと迷い込んできた裕子を簡単に後手に縛って、爪先立つほどに吊り上げた。

手のあいた男二人が、むっちり盛りが上った裕子の臀部や乳房をムチ打ちだしたが、一緒にいた女の子が「割合と薄いよね。なくてもあまり変わりないみたい。一度、剃ってみたら？」と剃毛責めをそそのかしたので、私もカメラを片手に成り行きを心配して、洋



間グループの仲間に加わった。

そんな私の気持も知らぬげに、写真(H)のように、裕子は私にウィンクして笑っている始末で、私は諦めて、なるようになれ、と彼等の行なう責めを傍観的な立場で、専らカメラのシャッターを切る側に、まわることにした。写真(I)は、同じ場面を、背後にまわって撮ったものである。

写真(J)は、女の子にけしかけられた若い男が、開股両手吊りになった裕子の剃毛をしているところである。こんなポーズでは、奥の方まで充分に良い作業が出来ないと、開股両手吊りにして、剃毛しているのが、写真(K)である。

この剃毛責めのあとで、このスタイルのままの裕子が、三人の若者から、SMプレイというよりも、もっと直接の責めを、入れかわり立ちかわり受けたことは言うまでもない。

幸か不幸か、こうした責めに対しても結構、裕子は楽しんでる様子なので、私としても救われる思いで特に責任を感じることもなく、シャッターを切ることに専念していた。

最後の写真(L)は、両足開股逆さ吊



りにした裕子に対して、このマネージャーが、その開かれた部分へ、力まかせにムチ打ちを十回ほど加えた時のものであって、プレイとは思えぬ程の激しい悲鳴に、カタズをのんで見物人が見守る中で、白い肌は忽ち、数条のミミズ脹れに彩られてしまったのには驚いた。

そこを出たのが、翌朝の十時であったが、普通の日には、ホテルとして使用しているとの

話だが、私達は無料で泊らせてもらった。いずれ又、上京の機会があったら、二人で訪ねさせて貰うと約束して別れた。

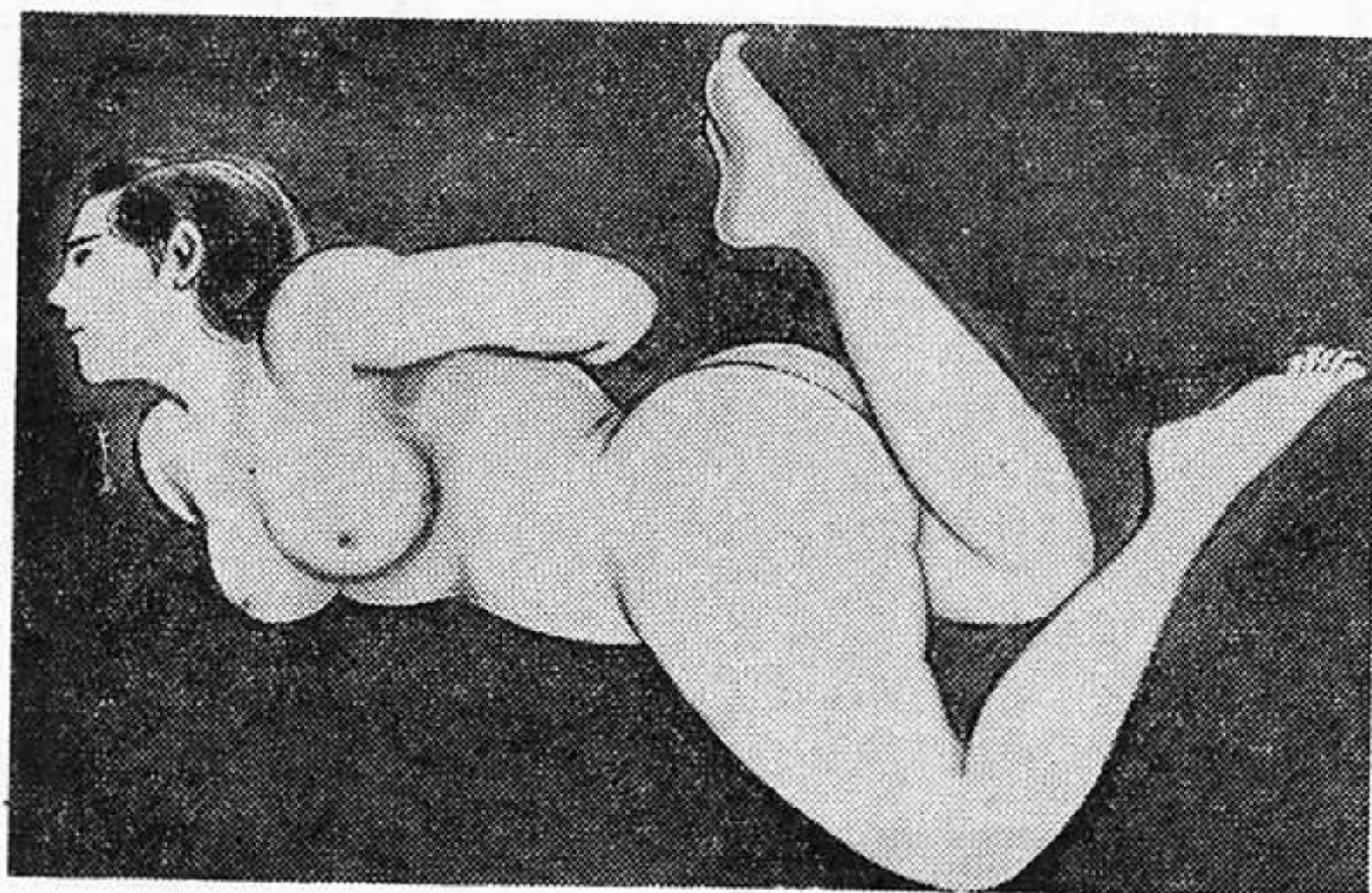
やっと昨夜の酔いのさめた裕子は、身体中が痛い、と言い出して、歩くのにも、なにかぎこちなかった。昼食後は都内を、ぶらぶら歩いて、疲れたので映画館に入って時間をつぶし、夕方五時発の八特急やまばとVに乗車して東京を離れた。

列車の中では、私はわざと昨夜のことは一言も口にしないで、ただ黙って目をつぶっていたが、裕子の方も、時々視線を合わすと、バツの悪そうな顔で殆ど口にしなかった。

次回にマンションを訪れる時は、また変わったロー責めで裕子を泣かせてみたいと思っているが、希望としては、他の女性との共演で華やかな責め絵巻を展開させたいと考えていることである。この程度の責めに耐えられる人で、私と一緒にプレイしても良いと思われる方は、御一報を、お待ちしております。

お断わりしておくが、ローソク責めに強いことが絶対の条件であることは、言うまでもない。

カット・紫葉丹仁良

デパ
イロ

花

と

蛇

(19)

山 光

純

連載・S大河小説

美 囚 の 檻

明るい日射しの高速道路は、気持よく飛ばせる。

岩崎組が桂子を受け取るべく差し回してきた車は、フル・オートの巨大なリムジンである。窓の開閉は、もとより、ドアのロックから、ハンドルの補助装置まで電動パワーになっていて、前部座席と後部シートの間もスイッチ一つでガラスで閉じてしまうこともできる。

アメリカで一時代を創ったというカポネの乗用車に習ったというわけでもなからうが、岩崎親分に忠義立てをする子分たちが、こういうものを、海の向こうから取り寄せたという。ちよつとアクセルを踏んだだけで、八〇キロは軽くでる保証つきだ。

運転している政やんは、こんな豪華な車に乗ったことがないので、ご気嫌である。

森田組に滞在していた間は、何かにつけて口喧しかった兄貴分の権田も、無事、桂子を受取った今は、気分も悪からうはずはなく、後部座席に、ふんぞり返っている。

権田の隣に、女体の貸出しのヒロイン、桂子が寄り添うように坐っている。

桂子をサンドイッチにする恰好で、森田組から、つき添ってきた朱美がいる。もちろん岩崎組も極道者揃いだが、とくに責任調教師ということ、桂子の取り扱い方を一通り教えることになっている。きりつとした挨拶だけはさせないと森田組の名折れになるとの主張で、特に朱美が、しつこく希望したのだ。

桂子は、口元がすっかりかくれる純白のマスクをつけている。勿論、滅多なことで大声を挙げられたりすれば大変であるから、マス

クと同じ位、大きいサイズの絆創膏で口封じを、してあるのだ。

パッチリと開いた明眸が星のように、きらめいており、全く久し振りで見る活々とした邸の外の世界を、喰いいるように見つめているのが哀れである。

綺麗にセットされた髪の毛もチャームリングで、耳には千代の心づくしだというイヤリングをつけている。「如何にも冷酷な仕打ちを受けていたように思われるなんてシャクだらね」と千代は大様に言っていたが、この金色にキラキラ光るイヤリングも、元々静子夫人の物だったことは、いうまでもあるまい。

桂子は、ぴっちりとしに付いた超ミニのワンピース姿である。胸元が三角に、ぐっと切れこんでいるので、まぶしい程、肌の白さが目に沁みる。こうやって、ゆったりと高級車に乗っていると、富豪の令嬢だけのことはあり、凛とした気品がある。

行き交う車も少なく、震動も勝れたショック・アブソーバーで、ほとんど吸収されてしまふ。運転席の政やんは、岩崎組の本拠も近くなっただけもあり、注意していても、ついバックミラーで桂子の様子を、のぞきこんでしまふのだ。

桂子というこの娘を、森田組から借り出させるように岩崎親分を焚きつけたのは、権田のさしがねにちがいない。権田が以前パン助を取り仕切っていたのは知っているが、女に對して、あんなにも残酷な趣味をもっているとは思わなかったのである。最近のポルノ雑誌は、女を縛り上げて差かしめる、やり方が大流行のようで、それが、SとかMとか、いうものであることくらいは、勿論、政やんにも、わかっていた。

だが、森田組の応接室に通されてみて、現実に、あんな写真やイラストにある、そっくりそのままのことが、いや、あんなものよりも何十倍もの生々しいことが平気で行なわれているのを目のあたりにして、政やんは興奮と緊張のあまり、足元がグラグラするのを覚えたのである。

森田組の連中は、まるで手慣れた様子で、桂子を素っ裸にして色々の芸当をさせたが、そのへんの小娘と違って桂子は、すすり泣きをしながらも、従順に命令にしたがっていたのが、ひどく印象的だったものだ。

朱美は上気嫌で鼻歌をうたいながら、チューインガムを、くちやくちやくやっていたが、「あら、権田さん。又なのオ」

と蓮っ葉な声をだす。

長時間のドライブで退屈し、缶ビールを空にしては窓の外へ、ほうり投げていた権田が桂子のドレスの胸元に手を差しこんだからである。

「構うものか。いずれ、組に着いたら、いいようにされちまうんだぜ。まあ、予行演習みてえなものさ」

とヌケヌケという。

「でも、そんなに、ぎゅうぎゅう引っ張ったら、せつかくのドレスが破れてしまふじゃないの。女の子の扱い方って、むづかしいのよ——それにしても桂子。あんた、これから先が思いやられるわよ。森田組のように優しい人は、岩崎組には、いないかもよ。第一、あんたの休むところだって用意できてるかどうか、分かんないもの……」

出発する前から、朱美は関西の方で桂子の受け入れ準備ができたかどうかを、くどい程心配していた。自分の愛玩畜のように飼育してきたから、人形のように可愛い桂子を飢えたケダモノ達の中に放り出さばなしにするのが、嫌だという訳である。

「お前って奴も、くどい女だな。あれ程、手紙や電話で何回も打ち合わせをしたじゃねえ

か。大丈夫ってことよ。この女に逃げられたり、サツに氣どられたりするようなヘマをする岩崎組じゃねえや」

「そんなことを言ってるんじゃないのよ。そりゃ、桂子だって一通り、皆さんにカラダでご挨拶する覚悟は、できているだろうけれどいくら珍しいからといって、寄ってたかって廻しにかけられたりすりゃ、腰を抜かしてしまふわヨ。分かってるわね、この子は商売モノの、セックス・スターなのよ」

朱美のいつている「桂子の休息所」というのは、関西への女体借出しがきまった時、ただちに、そういうものを用意しておいて貰いたいと、朱美が岩崎組宛に連絡したものである。

周知のように森田組の邸には捕われの佳人たちを休息させるために恰好の地下室の設備があったが、岩崎にそんなものがあるわけもなく、かといって桂子にお座敷がかからない時でも四六時、柱なんぞに縛りつけておく訳にもゆかず、時には四肢を充分にのばして、ゆっくり休養させてやる必要があるのは、当然のことである。

といったわけで、朱美は自分が調教師として、桂子をより恥辱に慄えさせる役目を買っ

て出たくせに、桂子のベッドルームの心配をしている矛盾に気づかないのであった。

どちらかといえば場末めいた、ごみごみした家屋が、びっしり立ち並んでいる街のたたずまいの一角で、岩崎組の建物は厳然と威丈高に、そびえたつ感じである。附近には町工場でもあるのだろうか、一日中、騒音が流れ車の往来も、あわただしい。

この建物は、当局の目を完全に、そらすために型通りの金看板もなく、普通のアパートに凝装されており、組としては、ここを極秘のアジトに使用している様子だ。

岩崎親分は住んでいず、本宅や妾宅から秘密の集会などが、ここで開かれるときに、顔を出すだけなのだが、寄り合いがあったりすると、ここに泊まることもあり、そのための宿泊設備が、二層のフロアーを占めているという。

四階以下のアパートの住人も、それぞれ組員が、その息のかかったものばかりで、いつてみれば、このビルはシンジケートの休息所であり、一たん事が起これば堅固な砦にも早がわりする機能を備えているといってよい。長いドライブの末に、やっと着いたという

のに、名だたる岩崎組にやって来たという緊張感が、朱美と桂子に、それぞれ違った意味で重くのしかかっている様子である。

「へえ、ずい分、立派なビルなのね」

と朱美は呆れたような顔付きである。普段とちがって表情は、やや硬い。

「べつに大したことはねえよ、この位。親分のご本宅は、そりゃ凄いもんだぜ」

思いきり背筋をのびしながら、やれやれといった風に大あくびをする権田は、もし桂子の輸送途中に逃げ出されたり、パトカーにつかまったりすれば大変なことになるわけで、彼なりに氣をつかっていたのである。

折から組織の拡大をめぐって幹部会が開かれているということで、岩崎大親分は、まだ顔を見せないが、それは、やや疲労気味の朱美にとって、ありがたいことであった。朱美は、桂子のお目見得を肉体のコンディションの最上のときにさせたいと、兼々から思っていたのである。

どちらかといえば余り冴えない外観からは想像もつかないほど、建物の内部は豪華な近代的な造りになっており、街のざわめきなどまったく遮断された快い安らかさがある。すぐれた防音構造のせいであろう。

いつの間にか政は姿を消し、ここに到着した時、出迎え、エレベーターを運転した男が茶や果物を運んでくる。

朱美はズベ公らしくもなく、一寸、大袈裟なくらい丁寧な、おじぎをしてみせる。

というのも、彼が映画俳優にしても少しもおかしくない程、眉目秀麗な男だったからである。

すらりと通った鼻筋。色白の額に豊かな髪が、やや垂れかかり、口元も引き緊まっっている。胸の厚いガッチリとした体付きで、スポーツ選手のように脚が長い。

朱美の挨拶に、チラッと微笑を返したきりで、さりげない視線で桂子を、とらえる。

「権田さん、着き早々でなんだか申し訳ないみたいだけれど、桂子にバスを使わせてやりたいのよ」

「そりゃ、まあそうだ。何しろ親分のお声掛かりの女だから、充分きれいにして置かなくちゃならねえ。風呂の用意はできてる筈だ」と、権田はニタニタしながら相槌をうつ。

「だが、朱美姐御は別の風呂を使った方がいいぜ」

と意味ありげに、いやらしい笑いを浮かべるのだ。

「そりゃ、まあいったいどういふことなの。

ぜび教えといて貰わないとね。桂子、何か面白いことがあるのかもわからないじゃない？」

一緒に見せて貰おうよ、そのお風呂場」

と、立ち上がりかけ、

「そうそう、すっかり忘れていてごめん。あなたのマスク、もう取ってもいいのよ」

目元までかくれるばかりのマスクの下には大きな絆創膏が貼りつけてあり、それを剥がすのには注意ぶかくやらねばならなかった。

これだけびったりと口元をふさがれてしまえば、精々喉の奥で唸り声を上げてても、余程近くにでもない限り人の注意をひくことはできなからう。

絆創膏をはずされて、素顔をみせた桂子はつましやかな吐息をついたが、美貌の男の視線が超ミニと、彼女の容貌の両方に交る交る注がれるのに、楚々とした風情をみせ、思わず面を伏せてしまう。

「おや、桂子が赫くなってる——あなたの前へ出て恥ずかしがってるのよ……ホホホ、どう。この子も美人でしょう？」

曰くありげな浴室というのは、同じ階の廊下つづきである。案内に立つ長身の男の幅広い背をみながら、朱美が権田に小声で、

「あの人は何なの？」

と尋ねている。

ドライブの肩の凝りがまだ取れないらしい不気嫌な権田だが、立ち止り朱美の耳元で先にゆく桂子に聞こえないように何かコソコソと教えてやる。

彼女は意外な顔をして、一寸表情を変えたが、やがて何事かを企むようにうなずき、喉をのけぞらせて声のない笑いをみせるのだ。

浴室は余り広くもない上、見たところ特に変哲もない。

埋めこんだホーロー浴槽には、すでに湯が溢れるように張られて心地よさそうだ。

「なんてことはない。普通の風呂じゃない」

「そうかな。じゃ、タネ明かしをするか。桂子の前では、しない方がいいかな？ じつは浴槽全部がガラスでできているんだ。向こう側が暗くなっているから、入ってる者にはよく分からない仕掛けさ」

使いようによって、面白いショーが企画できるし、好事家向けの撮影にも、もってこいというものである。

「なにさ、水泳の選手でもあるまいし、こんなものを作ったりしても……」

と朱美は強がってみせるが、興味が湧いて

きた顔付きは、かくせない。何しろこんな奇妙な代物は森田組にはなかったのである。

ガラスといっても、普通よく使われる熱湯を入れても割れない耐熱ガラスのバスタブを使ったものであるが、高級品でそこらにはザラにないが、名だたるアニマル日本のこと、こうした品物は家具、建材の名目でフランスから時々輸入されているのだ。ただし買入れ元は殆ど全部、デラックス連れ込みホテルと相場が、きまっており、岩崎組長の意向を受けた権田なりが、面白半分ここへ据えさせたものらしい。

権田に強引に片腕を取られたまま、一緒にこの屈辱のバスの説明をきく桂子は、羞かしさと怖ろしさのあまり、とうてい顔も上げられない。

「黙っているといったって、この子はオシじやないのよ。何しろ純情なんだから……」

と朱美は妙なところで胸をそらしながら、権田と押し問答を、はじめたのである。

それは、ここに到着する寸前まで心配してきた桂子の受け入れ設備のことであり、同時に、この分なら他に、どんな仕掛けが作られているのかを猛然と知りたくなって来たからでもあった。



……イメージギャラリー……『特別個人教育』岡たかし

別に言えば、境遇が変わることにより、桂子が妙な魂胆を起こす前に、ハヤっぱりあたしは性奴隷として生きつづけるほかはないのだワ／＼と思わせるように心理的に叩きのめしておく必要もあった。もはや、桂子を自分と同年輩の女の子であることを意識しなくなり

かけている朱美には、淫猥な目的のために作られている仕掛けを見せ、この美少女が、どのように懊悩し、悶えるかを観察しようという秘かな楽しみもあった。

「何を言ってるんだ。お前が散々組長を、たきつけたから、この下らないオモチャのため

に苦勞したんじゃないか。だから、もうこれだけでいいだろう。あとは組長が来てから、ゆっくり見せて貰うことだ」

しかし、朱美としては岩崎親分の前で一々驚くのは、あまり感心したことではないし、第一、見せ惜しみするようなことを聞けば、よけいに見たくなるのが人情というものである。朱美は単純な、女だった。

「じゃ、ちよいと。……その代りにさ」

などといったつ、淫らな笑みを浮かべ、権田にヒソヒソと何やら囁き始めるのである。

二人がニタニタしながら内証事をいつている間、桂子は男振りのいい案内者に見つめられ続けていた。

端々しい茎のようにすらりと伸びた両脚は超ミニのスカートでは、かくれようがない。ちよっと伸び上がった、うつ向いたただけでパンティが剥き出しになってしまいうだろう。むっくりと盛り上がった胸の辺りが、ぴたりし過ぎているワンピースのせいで、ドキリとくる程、煽情的なのだ。胸元の切れこみから、白い肌が大胆にチラチラのぞいている。

じろじろとねめまわしてくる彼の熱い視線を頬に感じる桂子は、うろたえたように、あらぬ方向に目をやるが、どういう訳か彼が横

にいるということだけで、ドキドキと鼓動が早くなってくる気配だ。

かなりの間ひそひそとやっていた二人の間で、どんな了解がついたのか、とうとう権田は、この階を一通り朱美たちに案内することにしよう、といいだした。

「そうですか、では簡単に済ませましょう。

お嬢さん方もお疲れでしょうから——そう、

小早川といいます」

よく透るバリトンの声だ。美貌の男は、もう一度、網を打つような、からみついてくる流し目を桂子に比べると、先に立って奥の方へ歩きはじめた。

桂子のぴっちりとしめつけているスカートの尻の双丘がモクモクと動き肉感的だ。

浴室を出て長い廊下を歩き、突き当たりの頑丈なドアを開けると、そこは外光を完全に遮蔽した、かなり広い部屋になっていた。そういえば、エレベーターで上がって来てからここまで、外の光は一切、室内に取り入れられていず、工夫を凝らした巧みな照明だけが使われていたようである。

もともと、この階は、何かの必要——例えば賭場のようなものを開くために使われていたらしい。そう解釈すれば、この階の総フロ

アの広さの割に部屋が、すべて壁と廊下で仕切られているのも、その用心深さを示すことになる。大体、賭け事と色事は密なるほど面白いものだ。

小早川が物慣れた手付きでスイッチを押すと、柔らかい間接照明の中に浮かび上がった部屋の中を見て、朱美も桂子も「あっ！」と声をあげたのだ。

部屋には丁度、百貨店のショーウィンドーそっくりの、三面ガラス張りの部屋が作り上げられていた。枠は金属製で、かっちり組まれている。

朱美は一目で、ここが桂子の住居であることを見抜き、ここまでのしたのは岩崎大親分の指図によるものではないにせよ、組の徹底したやり口に驚嘆の念をすら抱いた様子だ。

「まあ桂子、お前って何ていい部屋を用意して貰ったんだろう。あたいだって、ここで自分のんびり暮したくなる位よ。さあ、もっとよく見せていただこうよ」

はげしいショックのため、顔を蔽った桂子が衝動的に廊下の方へ逃げ戻ろうとするのをドンと突き返すと、権田は、

「組の息の掛かった職人にやらせたのだが、

まさかここで女を飼うのだともいえず、でたらめを言ってごまかしたが、こちらも全然、面白くなかったぜ」

身体中の力が抜け、細かく慄えながら、その場に坐りこんでしまった桂子を、うっちゃっておいて、朱美は、つくづく、この奇妙に現代的な獄舎を、妙な気持で観察するのだ。

広さは精々二畳敷くらいしかなく、床にはフカフカの、くるぶしまで埋まりそうな敷物が敷かれている他に、造作といえば片隅の愛らしいトイレだけである。

「いや、あのおトイレが、いい趣味ね。ホホ……おお、恥かしい」

それは例のなじみの形はしているのだが、ずっと小型で、おまけにプラスチックでもできているのか、これも透明で、先入感からくる不潔感が、まったくくない。まるで象形芸術品のように、つるりと上品な出来だ。

天井は高めで、エア・コン装置がついている。

ただ、如何にも美囚を冒瀆してやろうと待ちかまえているように、三面ガラス張りの隅のほうに、動物園の檻についているような格子の扉がついている。このショーケースのような飼育室に入れられる桂子に、衣服は与え

られるのだろうか。哀れな牝奴隷は、その傷ついた心を、いやが上にも、かきむしられることになるのではないだろうか。

だが、その格子戸と、素通しの壁面を無視できさえすれば、エア・コンが旨く効いて部屋は充分に居心地が、よさそうだった。考えてみれば、静子たち佳人が夜々を過ごす森田組邸の陰惨な地下牢より、はるかにましだというべきではないだろうか。

それにしても朱美は、この部屋を観察しながら、よくこんなへボ小説家の空想しそうな代物を敢て作らせたものと感心する。

だが、これを作らせるのにガラスを運び込む造作をのぞけば、大した金はかからず、設計にも難かしいところは、ありそうにない。ただ、これを実行した岩崎組の連中の並々ならない桂子への期待を考え、朱美は嫉妬に似た、いいようなない不快感を次第に、つららせていた。

多分、岩崎親分の脳裏には、桂子の新鮮な美しさが深く刻みこまれているのに、ちがいないのである。

この獄舎を目の前にして、先手を取られつづけて負い目の感じをもったらしい朱美は、「まあ、岩崎組の兄さん達ともあろう人が、

こんなおかしなものを作ったりして……」

と、軽蔑したように鼻に小皺を寄せるのだが、この檻こそ彼等が桂子を如何に遇しようとしているかを明瞭に示している訳である。

この意味では、森田組から親分の妾がやってくる位の軽々しい受け取り方をしていないことが、よく分かる。

「つまり何だな、この別嬪に素っ裸になって貰って、ここで暮して頂こうという寸法さ。

組の若い奴等も、これを聞きつけて、俺の顔を見れば、ぜひ目の保養をさせて頂きたい、とぬかしやがる始末でね。もっとも、俺だって期待してるんだ。ひひ……」

と、足元に坐りこんでしまっている桂子の可憐な顔を、ニタニタしながら、のぞきこむのだ。

救われないのは桂子である。どこでどう間違った運命に見舞われたのか、一度、人間でないような扱いを受けてしまうと、よってたかって更に惨めな仕打ちが待っている。

つまるところ、これは獄舎ではない。畜舎である。セックス・スター、性奴隷として仕込まれてきた桂子は、これからそれ以下の白い牝として、思うがままに飼育されることになるのだ。千代の君臨する邸の中では、まだ

しも人間としての人格を認められていたが、彼女を這い廻らせるのに何の容赦もしそうにない岩崎の連中の慈悲を、これからどのようなにして乞うていったらよいのであろうか。

一方、朱美は、ここへ到着するまで散々権田に質問したのに、一度もこうした準備について説明して貰えなかったために、かえって

恥をかいだ恰好になり、収まりがつかなくなったのか、

「ほんとうに桂子は幸せね。こんなにまで大げさな歓迎をして貰って。これじゃ、よほどハッスルして、お尻を振らないことには埋め合わせができないよ。でもいいわよ、あたいがついていいるから。あんたは、あたいの言う

通りに従順に振るまっていればいいんだから」と、八つ当たりし、さあ次は、どんな設備をしてあるのと、二人の男を、せつつき出すのである。

「まあ、そう慌てるなってことよ。その内に嫌でも全部を廻らなくっちゃならねえんだから——おっと、いけねえ。何のかのと言っている内に飛んでもねえ時間になっちまった。間もなく組長が来る時間だぜ」

「そうなの。でも、もう少しだけなら、いいじゃないの。さっき、一通り案内してやると言っただけのくせに」

「そりゃ、そうだが……だが、桂子には、お目見得のための用意もあるんだろう」

権田は大親分から一喝されるのが苦手らしく、腕時計をしきりにのぞきこんでは、二人の女を、せき立てるようにする。

だが朱美は異様に目を光らせる感じで、どうしても、この階を一通り案内させようとして、口高に言い募る。

挙句の果てに朱美が、

「そう。じゃ、取りあえず桂子に風呂を使わせておくことにしようじゃないの。その間に手っ取り早く一廻りだけしておくのよ」

「だが、今日のところは俺たち二人しか、こ



こに来てはならねえことになってるんだ。その間に桂子が変わった見を起したりすると、えらい騒ぎになるぜ」

「それじゃ、小早川さんに桂子を見張って貰うことにすればいいわよ。ウフフ……小早川さん、いいでしょう？」

「だって、お前。ウフ……」

意味ありげに残していった二人の笑いも耳に入らないまま、恐ろしさの余り、その場にすくんだようになっていた桂子の耳に、あの爽やかなバリトンの声が聞こえた。

「さあ、お嬢さん。朱美さんが、ああいったんだから、この間に、ゆっくりお風呂に入ったらどうですか。——いいや、大丈夫、ここには他に誰もいませんよ。あんな仕掛けがある風呂だけれど、ぼくは廊下で見張番をしているし、二人は奥の方へ行ったから、のぞいたり出来ない」

小早川と名乗った男は、桂子に余計な警戒心を起したりさせないため、少し離れた位置から丁寧に話しかけるのである。事実その声には充分な親切味があったし、はるばる関西まで借し出されてきた美しい女に対する、いたわりが含まれていた。

彼の言葉が暫く耳に入っていそうもなかった

た桂子は、やがて彼の澄んだ声に耳を傾けだした様子だ。

無理もないことである。叱られ、血も凍る行為を強要されるのに明け暮れる毎日を通じていると、例え相手が全く未知の人物であっても、やさしいいたわりと、心遣いは薄幸の乙女の心を濡らす。

「ぼくのことには心配しなくてもいい。もし組長がここへやって来て、いきなりお嬢さんの入浴するところを見たいなどいいでしたらどうするつもりですか」

と、たたみかけられるに及んで、桂子は星のしずくを一杯にたたえた明眸をあげる。

「だって、桂子、お風呂になんか入りたくありませんの……」

「権田も朱美さんもああ言ってるんですよ。

もし言いつけに従わなかったら、ひどい目に合うのは、あなたなんだ」

「え、ええ……」

と深く、うなづく桂子はピンクの唇を噛みながら尚もためらっているが、二人の視線がピタリと合うと、みるみる彼女は紅潮し、喉元まで赫く染まってしまうのだった。

「ありがとう、小早川さん……こんなに桂子に優しくおっしゃって下さるのは、あなただ

けですワ。どうかお願い、これからも私を可愛想だと思ってちょうだいネ……」

一方、桂子の畜舎のある大部屋から今度は右の方へ折れてゆく廊下を歩きながら、朱美は、間取りが全く分からないままキョロキョロ周囲を見まわしている。

「何もそんなにキョトキョトすることはねえぜ、大邸宅というわけじゃねえし」

「いいえ、あたいたの二人がどうなるのか面白くてね。つまり、思案していた訳よ」

「へらず口ばかり叩いてやがる。だが、あれは一寸、面白くなりそうだな。女の方は明らかに催している感じだったぜ」

又しても二人は顔を見合わせて、深く企むところのある、うすら笑いを交し合うのだ。

廊下の途中に妙な肘掛椅子が一つ置かれている。木製の高尚なデザインだが、クッションや布の類は使ってなく、その代り、尻を置く部分の前の方に、同じみがき上げた木の突起が斜め前に突き出ている。

「女のお仕置きをする時に使うんだとよ。やっぱり外国製だそうだ」

と権田が説明した。

—(つづく)—



— < 告 白 > —

『お百度参り』 の 責 め

佐 藤 幸 子

私はSマニヤである主人に強要され、無理矢理に奇クの読者通信に投稿させられました。が、実際に4月号の読者通信に掲載された自分の文章を見たとき、私は大勢の読者の方々から私達夫婦の閨房を覗かれているような錯覚に陥り、とてもいいようなない程、恥ずかしい思いを致しました。

しかし一方、4年間の結婚生活中に主人に飼育調教された私のM性は、その恥ずかしい文章を読んで、いっそう昂進してゆき、この次はもっと具体的に私の奴隷妻ぶりを発表し読者の方々の目の前に自分のM性を徹底的にさらけ出してみたいという衝動に、かられていくのでした。

そこで今回は、主人とのプレイのうちでも私が堪えられないほど恥ずかしい思いをした責めを、いくつか、お話してみたいと、思います。

日常生活における主人は、とても優しく、思いやりのある人で、そのせいか私とのプレイでも乱暴なことや血を流すようなプレイは余り好まず、もっぱら羞恥責め一本槍です。しかし、こと羞恥責めになると、妻である私があきれてしまうほど多くの、そして奇抜なアイデアを出してきては私を悩ませ、そして私のM性を燃え立たせ、満足させてくれるのです。

例えば、夏場に行なわれる電車の中での晒

し責めです。主人は私の腋毛に対し異常なまでに執着し、決して始末させてはくれないのです。私は冬の間はともかく、夏にはノースリーブを着るため、是非処理させて下さいと頼むのですが、主人は決して許してはくれません。

そして、腋毛を伸ばしたままの私に、ノースリーブのワンピースを着せ、朝の通勤電車に私を乗せ、無理矢理に吊り皮に私をつかまらせるのです。しかも車内では主人は知らぬ顔をして他人のように振舞うため、車内の男性の好奇の目と、通勤のOLの軽蔑のまなざしは私一人に集中してくるのです。

結婚しているとはいえ、私も、若い女性の一人です。衆人環視の中で黒々と毛を伸ばしたままの腋の下をさらすのは、堪えられないほど恥ずかしいことです。それにもまして、若い女性の前にさらすのは同性の身としては更につらいことです。なかには私の腋の下を見てあからさまに嫌悪感を示し、いかにも女性の恥さらしだという風にパイと横を向いてしまいうOLもおりますが、そのような時、それこそ私は消え入りたいような気持ちになるのです。

また、主人の自慢のプレイの中に『お百度参り』という責めがあります。



主人は私を全裸にすると後手に縛り、室の端から端にロープを張ると、私にそのロープをまたがせて、足首を20cm位の間隔を残して縛ってしまいます。そしてその次には、私の両方の乳首と、お尻をゴム紐で縛り、そのゴム紐の端を、それぞれ室に張ったロープの両端に結びつけるのです。

こうして準備が整うと主人は注射針をつけた竹の棒の先で私の乳房やお尻を突きながら、私に前進後退を命令するので、私は20cm程の間隔を許された不自由な足でヨチヨチと前進後退をしますが、前進すると、お尻の間を通過して後方に固定されたゴム紐のためにお尻が引っ張られ、反対に後退すると両方の乳首が引っ張られ、女の身としては、これ以上の恥ずかしい責めはないのです。

主人は、この前進後退を100回やれと強制するのです。しかも主人は更に意地悪く、剃毛をして、別の所をゴム紐で縛ってやろうと言っては、女の一番恥ずかし

いことを口にするのです。もっとも、これは私が泣いて頼んだので主人も許してくれましたが、そのかわりに別の恥ずかしい責めを受けなくてはならない羽目になってしまったのでした。

『お百度参り』から解放されて、やれやれと思ったのも束の間、主人は私を後手縛りのまま竹棒を使って開股縛りにすると、電気カミソリを使って剃り始めたのです。私は余り濃い方ではないので、たちまちのうちに白い肌が露出してきます。やがて、すっかり剃り終わってしまうと、主人は私の鏡台から口紅を取り出して来て、その白い肌に口紅を塗り始めたのです。

そして、すっかりお化粧が終わると、主人は私に洋服を着せ、とても恐ろしいことを命令したのです。主人は、この私に銭湯に行つて、そのお化粧をきれいに洗い落としてくるようにと言ったのです。私は、そんな恥ずかしい真似は出来ないからと懇願したのですが主人は、どうしても許してくれず、結局、車で15分位、離れた銭湯に行かされてしまいました。

まだ時間が早かったせいか、銭湯は余り混んでいなかったのが幸いでした。私は番台に背中を向けたまま急いで洋服を脱ぐと、タオルで前を隠しながら一番左端の壁際で洗い落とし始めたのでした。クレンジング・クリー

ムでもあれば、よかったのですが、主人は、そんな便利なものは許してくれず、私は石けんとタオルだけで洗い落とさなければなりませんでした。

いま考えますと、湯舟にも入らず、体の他の部分は全然、洗わず、ただ、その口紅だけを落とし終わると、ろくろく身体もふかずに、洋服を着て、番台の人と視線が合わないようにして慌てて出て来た私を、他のお客さん達は一体どのような思ったことでしょうか。しかし、その時の私は、それこそ心臓が止まってしまった程の恥ずかしさのため夢中だったので

主人の責めの特徴は、何かひとつ羞恥責めを私に強要し、私がそれを泣いて頼むと許してくれる代りに、別の同じように恥ずかしい、いや、それよりも更に恥ずかしい責めを強要してくる事です。そして今度は、私が泣いても叫んでも絶対に許してはくれず、私も前に、ひとつ許してもらったという負い目があるせいか、結局は泣く泣く主人の言いなりにされてしまいます。主人のSM友達の前での排尿責めを、されたときも、そうでした。

あの前の晩、私は座敷で全裸のまま両手を鴨居に吊られ、おまけに左足を高々



と吊り上げられた不安定な姿勢で、主人のなぶり責めに合っていたのです。

主人は私の子供の頃や高校の卒業記念アルバムを持って来ると、私の目の前に拡げながら、子供の頃の写真を指さしては「お前は、この頃からMだったのか」とか、「お前は子供の頃、普通のお嫁さんになりたかったのか。それとも今のような奴隷妻になりたかったのか」などと質問したり、高校の卒業記念アルバムを開いて、私のクラスメートの名前を一人一人、言わせてみたり、「ほおら、お前の仲良しグループが、みんなで見ているぞ。お前は、みんなの前で、そんな風に丸裸で、しかも足を高く持ち上げていて恥ずかしくはないのか」などと言っては私を、いたぶります。

そして、しまいには学校時代にもどって、みんなの写真を見ながら、高校の校歌を歌ってみろと言いだしたのです。しかし私には歌えませんでした。みんなの写真の前で全裸の体、片足を高く吊られ

恥ずかしい姿を、さらしているだけでも堪えがたいほど、みじめなのに、その上、校歌を歌ってみろだなんて。

私だって、その頃は、こんなじゃなかった私は、みんなと一緒に、おしゃべりをしたり夏休みには山にキャンプに行ったり、恋愛について大いに論じたりしていた学校時代のことを思い出すと、今、こうして全裸のまま足を高く吊られて、さらし責めに合っている自分が言いようもない程みじめに思えて来て、大声で泣き出してしまい、縛られたままの不自由な体を目茶苦茶に動かして暴れだしたのです。

主人は私の異常なまでの抵抗に驚いたのか慌てて縄を解くと、とにかく、その場は許してくれましたが、私は主人の命令に背いた罰として、その翌日、主人のSM友達の前で排尿シーンを演じてみなければならなくなってしまいました。その翌日、私は、家を訪問した主人の友人達の前に裸身を晒し、生まれて初めての経験に体中の感覚はなくなり、ガタガタと震えていました。

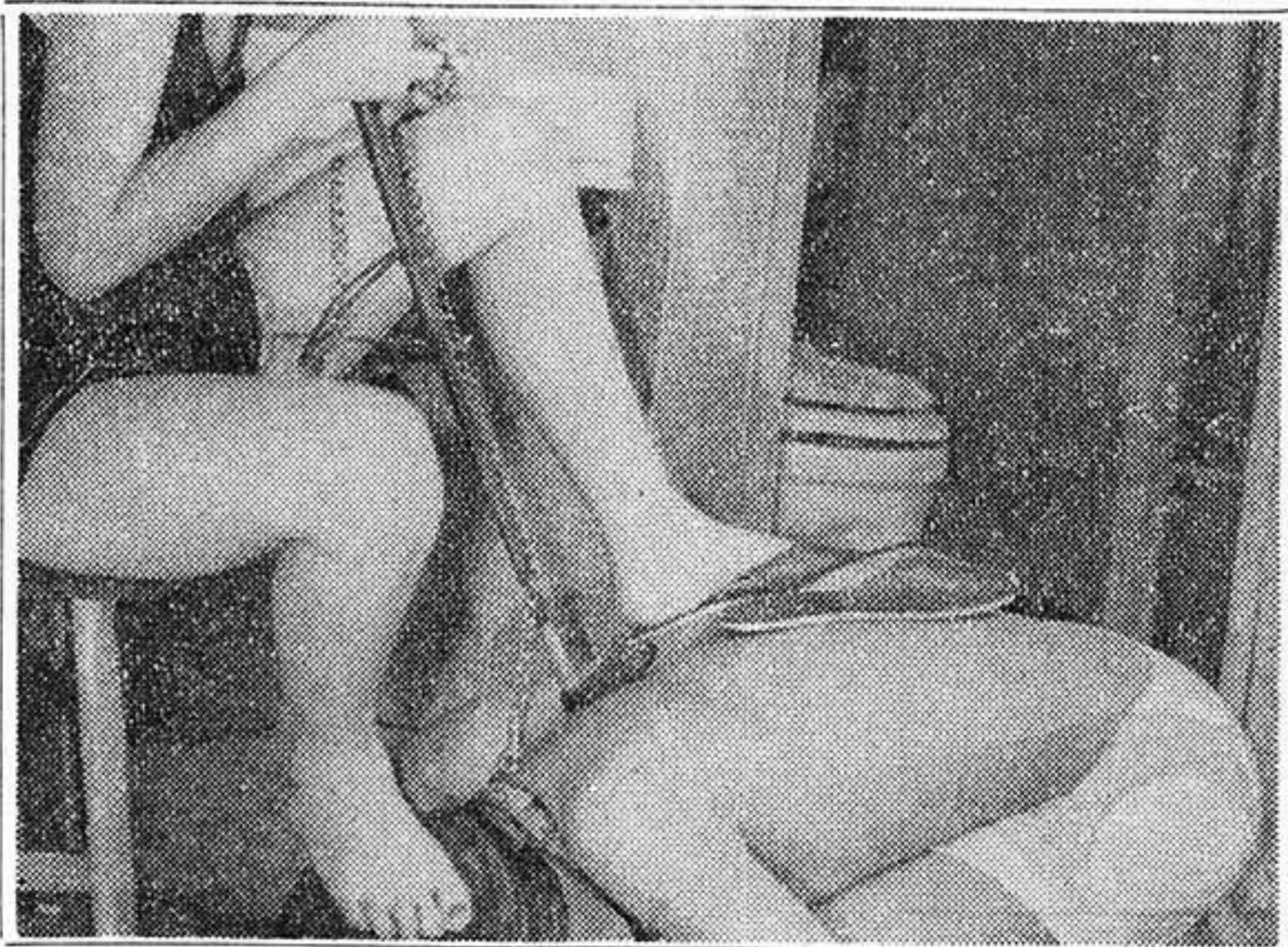
主人のお友達は全部で3人で、みなさん、綺麗だ、素晴らしいと、ほめて下さいました。そのうち主人が是非にと勧めるものですから初めのうちは遠慮なさっていた皆さんも私の身体のおちこちに手を伸ばしてくるようになりました。

私は、まるでペルシャの奴隷市場で品定めをされている女奴隷のような気分になり、私のM性は、いやが上にも昂まっていたのでした。そしてこの日、利尿剤だからといって用意された大やかん一杯の冷えたお茶を飲まされた私は、主人を含め4人の男性の方々に小便小僧の形、牝犬の形、片足上げの形、蹲踞の形、開股逆吊りの形など色々なポーズをつけていただき、2時間ほどの間に合計7回の排尿シーンを見ていただいたのでした。

以上、私がこれまでに受けた恥ずかしい責めについて、いろいろとお話してまいりましたが、3人の男性の方々の目の前で排尿して見ていただいた幸子は、この次は、もっと多くの男性の方々の前で特出しストリップを演じ、浣腸責めを受けてMの境地にひたり、恥ずかしい叫び声をあげ、喜びのうちに女の花を開かせてみたいと願っております。

どうか奇ク愛読者の皆様、いろいろな恥ずかしい責めのアイデアを発表し奇ク誌上で幸子を羞恥責めにかけて下さい。そして、もしも事情が許せば実際にプレイを行ない、幸子に羞恥責めを行なって下さい。それでは読者の方々のお便りをお待ちしております。

(イラスト・小川茂正)



(七)

荒木とは徹夜して話し合った晩から、急に仲好くなって、亜矢様のいない時でも、時々二人で会ったりするようになりました。同病相憐む気持のほか、私に妻があることに荒木は安心していましたし、私の商売で、コ

三回分載・M体験小説

亜矢様をめぐる

不思議な夜

(3)

沢井和雄

フォトは本誌撮影部のMシリーズ

ボシ話を聞くことが上手だったことと、私も荒木の心に興味を持っていたことが、急に親しくなった原因なのでしょう。

ある日、荒木は私に、急に社用でT市出張することになったから、是非プレイをしてくれる相手を世話してほしいと頼みました。

T市は私も長く住んでいたことがあり、ヌードモデルの頃から、お相手を願っていた女性、今はバーのママさんとなっていて、なかなか堂に入ったS振りなのを思い出し、この前、荒木に空き腹で亜矢様に会うのは毒だ

などといった手前、人を紹介するほど遊び人でもないのですが、Mの友情という大げさですがつい紹介状を持たせてしまいました。

『たまみ女王様、

長尾です。友人の荒木氏を紹介させて頂きます。Sの女王に失恋している可哀想な男です。是非、お力になってやって下さいませ。いずれ、ご機嫌伺いに上がろうと思いますが、当分、当地に居りそうです。

長尾三郎

と、ちょっと気取った文句を書いて、地図

や電話番号を教えてやりました。その上、私も親切な男で、荒木の出掛ける予定の夜、T市の、たまみママの処へ電話を、してやりした。ママは「はい、はい、承知しました。お委せ下さいませ」と、プレイ振りとは打って変わった優しいお愛想振りで、荒木のために、まず安心と思っていました。

ところが、荒木の出張という日に、「魔女の館」へ行ってみますと、当の荒木は、亜矢様と一緒に、カウンターの前で腰掛けていました。

「なんだ。荒木さん、行かなかったの？」

と私は、うっかり声を掛けてしまい、荒木が慌てて、しーっというふう唇に指を持って行くのを見て、しまったと思いました。が、亜矢様は、気づいたのか気づかなかったのか知らん顔を、していました。

しばらくして、亜矢様が別の席へ移ったのをチャンスに、

「どうしたの？」

と、低い声で私が訊くと、

「二、三日、延びたんですよ」と、荒木は言っ、て、「もう少し、地図を詳しく書いてくれませんか」と頼むので、この間の紹介状の裏に詳しく書きながら、たまみママの店は普通

のバーだから、いきなり無理なことを言ってもらっては困るとか、他の客のいない時を見計らって上手くやってくれとか、たまみさんには電話をして置いたことなどを話し、二人で、プレイはどこまでやってももらえるかなどと、つい夢中になって話し込んでいました。

紹介状を荒木に渡そうとすると、

「なあに、これ」

と、すっと取られてしまいました。二人の後には、いつの間にか、亜矢様が立っていたのでした。

亜矢様は私の横の席に坐ると、ゆっくり紹介状を読んでいます。私は『たまみ女王様』と書いたのを後悔しました。

「このひとは、もう何年も前に仕えた、ひとなんです。今は亜矢様だけに、お仕えするつもりなんです、本当に。ただ、荒木さんに同情して書いていただけなんです」

と私は、めんめんと訴えましたが、亜矢様は黙ったまま、丹念に読み続けていました。

読み終わってから、なんべんも頭を下げている私に、何も言っ、て下さらず、正面を向いたままでした。

その日は客も空いていて、「泥鰌どじょう」という仇名の、うすい口ひげを生やしたボーイが、

私たちの間に入り込んで、

「亜矢さんは素敵ですねえ」

と、感に耐えないような、言い方をしました。

二十そこそこのこの男は、M性格のボーイとして採用され、婦人客の前に膝をついて、注文の品を運んだりして、なかなか献身的にムードを造るので、私も時々チップをやったりして親しくなっていた男でした。

「どうい、うとこが、いいんだい？」

と、私が訊くと、泥鰌は、

「亜矢さんが店へ入って来て、すっと立っている、早く靴を脱がせろ、と言っているみたいなんですよ」

と、実感の籠った言い方をして、

「長尾さんや荒木さんが羨ましいですね」

と、二人の顔を見比べていました。

「つまらない女だよ」

と荒木は、ぶっきら棒に言い、私は

「帰りに、靴のボタンを嵌める役を君に、ゆずってやるよ」

と言いました。泥鰌は、

「ありがとうございます」

と、もう亜矢様の靴のボタンを嵌めさせてもらったかのように深々と頭を下げました。

ふっと、亜矢様がトイレにお立ちになりました。泥鰯は身体を斜にして坐っていましたので、伸ばした足が亜矢様の通行の邪魔になるので、私が、

「ほら、お通りだよ」

と声を掛けると、泥鰯は、はっとして、椅子から飛び退くと、へたへたと通路に膝をついてしまいました。

亜矢様は、私たちの話が聞こえたのか聞こえないのか、全くわからない無表情のまま、泥鰯を無視して通って行きました。

私は、いつも亜矢様用に用意している真新しい麻のハンカチを取り出して、泥鰯に渡しながら、

「これを貸してやるから、カーテンの傍で跪いていてごらん。手を拭く時に、使って下さるかも知れないよ」

と言って、泥鰯を立たせました。

荒木は、ずっと私に近づくと、

「ねえ、長尾さんもT市に行ってくださいよ。」

一緒に行って紹介して下さいな。私はもう、生かさず殺さずじゃ、たまりませんもの」

と、ささやくように言いました。

「さあね。私しや謀反の片棒までは担げませんものね」

と私が、にべなく断わると、

「そんな冷たいことを言わないで、ねえ、長尾さん」

と荒木は、なおも迫ります。

「荒木さん、ダメだよ。亜矢様に抵抗して忘れようたって、どこへ行ったって、どうせ部屋の中のプレイの範囲の人達だし、あんなひとに会ってしまったんだから、どうしようもないね。ほら、ごらんなさい」

と、私は、トイレの前のソファに坐っている亜矢様のほうを、指さしました。

泥鰯が、うずくまって、亜矢様の足台になっています。亜矢様は平然と泥鰯の肩に、ふくらはぎを当てて、悠々とセブンスターをくゆらせています。泥鰯は、自分の頭を亜矢様の足の間に平伏するように下げ、左手を上げて灰皿を捧げています。

「あんなひとは他には、いやしませんよ。日本中、探したって」

と、私が荒木に言う

「魔女ですね。次から次と新しい男たちが現われて来る。私は、もうじき去る男ですね」と荒木がため息をつきながら言いました。

「去る？ 去らしてなんかくれないでしょう。奴隷を持ってるってことは、素敵なこと

に違いないでしょうからね」

と、荒木に追討ちをかけるように言って、

「荒木さん、もう、無駄な抵抗は止めときなさいよ。毒ですよ」

と説き伏せようとしてみました。

「わからん、わからん。わかりませんね」

と荒木は、カウンターに、うつ伏せてしまいました。しかし、左の腕に額をつけた荒木の視線が、亜矢様の靴下にキスをしている泥鰯の方へ、らんらんと向かっていることは私には、よくわかりました。

亜矢様は、泥鰯に飽きたと見えて、すっと立つと、私達の席を通り越して電話の所までツカツカと行ってしまいました。

「ちえっ、また原に掛けるのか」

と、荒木が舌打ちをしました。

「荒木さん、あんたは一体、恋人になりたいの？ それとも奴隷になりたいの？」

と私が訊くと、

「どっちですかねえ、両方なのかなあ」

と言ってから、自分が一時は優位にいたところが、亜矢様の気が変わってからは、肉体的な接触を伴うプレイをさせてもらえなくなったと、未練がましく私にコボして聞かせるのでした。

「私は、亜矢ちゃんには、もう恨みの気持が多くなってますね。長尾さんも深入りするとどうしようもなくなりますよ」

荒木は、そう言いながら一層、私に近づき「ねえ、今度、Kに行きましようよ。あそこなら、何だっけてしてくれるもの」

と、声を低めて言いました。

「だめですよ、荒木さん。私は、さっき言ったように、亜矢様にだけ、お仕えすることを決めたんですから」

私は荒木の誘いに乗らない態度を示しますと、

「誰でも最初は、そうなんです。だけど、すぐ飽きられて捨てられてしまう」

と荒木は、ぼやくように言いました。

「私が捨てられる時は、亜矢様が女になってしまった時でしょうよ。好きな男のためだけに生きる女になってしまったら、亜矢様は私に、にこっと笑くぼをみせて、振いつきたくなるような、しなをつくって、先生、いかが？ ってビールを注いでくれるでしょうね。そうしたら私は、ああ、俺は捨てられたな」と紳士らしいポーズをとりながら、しみじみ思うでしょうね」

と私は、亜矢様が女になってしまった時の

シーンを、ふと思い浮かべながら、ちょっとセンチになっていましたが、荒木は私の言葉が殆ど耳に入っていないかのように、カウンタに頬杖をついて正面を、ぼんやり見つめたままでした。

電話から戻って来た亜矢様は、私の横の椅子に坐ると、

「原さんったら、土曜日には会ってくれないの。日曜だと、あたしの方が疲れちゃうんだもの、もういいわって電話、切っちゃったんだけど、こんな時、お前だったら、どうしたらいいと思う？」

と、お訊きになりました。私は、亜矢様のこの前の電話の、なよなよとした女振りを思い出して、

「どうしても会ってくれなきゃ厭っ！ とか何とか、もっと甘ったるく、おやりになったら、いいんじゃないですか」

と、すすめると、亜矢様は、

「そんな、みっともなくって」と、おっしゃったので私は、ちょっと安心することが出来ました。亜矢様は、恰好のよい睫毛をパチパチと揃えるようにして、まばたきをしながら、考え込んでいる様子でした

が、

「さあ、もう帰りましよう」と、私たちを促しました。店を出て車の傍へ行ってから、

「今日は、どうなさいますか？」

と私は、もう亜矢様ぶきの運転手の気持になっ

ていますので、そう尋ねますと、

「今夜は、くしゃくしゃするから、光夫さんのところに帰るの」

と、おっしゃいました。すると荒木が、

「それじゃ、私はこれで」

と、帰る素振りを示しました。それを見た亜矢様は、急に激しく、

「ついて来なさいよ！」

と、荒木の胸倉を押えるようにして言

いました。亜矢様の目は、荒木の心を読みとるように見据え、男を一瞬のうちに征服してしま

う力が籠っていました。

「でも、秋山さんに悪いですから」

と荒木が、別の理由で抵抗しますと、亜矢

様は強い目のまま、荒木に触れんばかりにお

顔を近づけて、荒木の顔を上気させて置いて

から、急に、ぱっと、ご自分のお顔を離すと

同時に、鮮かな早さで、荒木の両頬をピンピ

ンと鳴らして、

「ついて来いって言ったら、黙ってついて来

るの！」

と痒高い声を立てました。荒木は、まるで魔術にでもかかったように、ぼんやりとした表情のまま、私の車の後部の座席に坐らされました。

車の中では、亜矢様は、いつものように足を私の膝の上に載せて、あれこれと、時には無理なお指図をなさったり、雑談をしたりして、意外に御機嫌よく、お過ごしになっていました。

秋山のアパートの近くまで来ると、亜矢様は、

「ここで、ちょっと止めて。道端へつけて」

と、命じてから、

「二人共、降りなさい」

と、静かに、おっしゃいました。

もう、かなり時間は廻っていました。底冷えのする車外へ出ると、凍てついた道路をコツコツと靴音を立てながら亜矢様は歩き始めました。私と荒木は黙って後に従いました。

車道から、ちょっと引込んだ材料置場の傍まで来ると、亜矢様は、

「二人共、そこへ坐りなさい。膝を、ちゃんとついて！」

と、一変して激しい口調で命令しました。

私はもちろん、荒木も素直に、冷えきった硬い道路に正座しました。

「さっきの手紙のこと、二人共、わかってるわね！」

亜矢様は低い声で言うと、じっと二人を見下ろしました。初めて会った晩に、春雨の道に正座させられた、あの時と同じような、厳しい美しさに打たれて、私は黙って平伏してしまいました。

「顔を上げて！」

と言われ、恐る恐る、上げた途端、荒木と私の胸元を、ぽんと愛撫するように、亜矢様のお靴が舞うと、二人共、道路に仰向けにされてしまいました。

魂のない、木偶でくのようになった二人の胸の上を、亜矢様は土足のまま、ずかずかと踏みしだき、遠い星から来た征服者のように、すくくと立ちますと、凄いほど冴えた寒月の光が、押し黙った亜矢様の顔に一めんに注いで私も荒木も、まるで次元を超えた瞬間のように、ほかの事は何一つ感じないで、されるままになっているのでした。

「さあ、いいよ」

亜矢様に言われて二人が立ち上がると、二台のタクシーが、道路に停まって私たちの

方を見ている様子でした。

「荒木さん。恵美ちゃんに、ご飯あげて来てよ、戸棚に入ってるから。それから、鍵は洗濯器の蓋に挟んであるから、帰りに元通りにしておいて。ほかの事は何もしちゃダメよ」

秋山のアパートの前に車をつけると、亜矢様は荒木に言いつけました。荒木が、こんどは黙って、いわれた通りに亜矢様のアパートの方に向かうのを見定めてから、亜矢様は私に一言、

「ご苦労」

と、おっしゃって、階段を上って行かれました。

帰り道のついでに、荒木をマンションまで送って車を停めると、荒木はコートの胸元から何か、もぞもぞと取り出しながら、

「私、また悪いことをしちゃったんですよ」

と言って、私に見せました。切れ込みの鋭い色模様のパンティーでした。室内灯をつけると、中心部が黒ずんで見えました。

荒木は泣くような声で、

「私はね、長尾さん。こんなにしても、ちっとも汚いと思えないんですよ」

と言い、ぺろぺろと中心部を舐めて見せました。



「また共犯にされては、かなわないなあ」

と私は冗談めいてみせましたが、荒木が私の鼻先に、亜矢様の薫りを散らつかすので、とうとう私も、亜矢様のお許しがないことに罪悪感を感じながら、無情な小さな、きれの残り香を、思わず吸ってしまいました。

「ほら、共犯だ」

と、荒木は子供のように喜んでいました。二人共、朗らかに笑い合って別れました。

(八)

荒木がT市から出張を終えて帰る日は土曜日でした。その日、亜矢様から電話があり、某駅前のアムールという喫茶店に来るよう指示されました。帰りの列車から電話を掛けて来た荒木と会うので、供をするように、とのことでした。

列車の遅れた関係で、私と亜矢様がアムールで待っている恰好になりました。亜矢様は細長い包みを持っていました。

「荒木さんがね、ずい分、前から、一度でいいから何か買ってくれて言うのでね。月給日になったらとか、ボーナスが出たらとかって延ばしてただけであんまり言うから買ってやったのよ」

と、亜矢様が教えてくれました

た。荒木が恋人の真似をしてみたい心情は、いかにも哀れでした。

亜矢様は、その日は原に買ってもらったという、ラグラン袖で、ゆったりした煉瓦色のスエーターを着て、腰からヒップの線を、ぴったり浮き上がらせる感じの、紺色がかった黒のストラックスを穿いて、いかにもスポーティーな、年相応の若々しいお姿でした。

荒木は大きな包みを持って、少し遅れて喫茶店に、やって来ました。私が「やあ」と声を掛けると、一応は笑ってみせましたが、私たちのボックスに坐ろうとしないで、隣のボックスに後向きに腰掛けました。亜矢様が、「こっちに坐んなさいよ」

と、おっしゃっても、

「いいえ、私は、ここで結構です。これは、つまらないものですが」

と、大きな包みを亜矢様の隣の椅子に置くと、半身になったまま、チャージしたヴァイオレットフリーズを傾け始めました。

亜矢様がトイレに立ったすきに、私が、「荒木さん。こっちへ来て、一緒に坐りなさいな。それに、この間の話もあるし」

と言っても荒木は、

「ええ。その話は、いずれゆっくりと。今日

は、まあここで」

と、変に遠慮する調子でした。その時、私は荒木の右目の下と首すじに、鞭によると思われる傷あとがあるのに気づいていました。

亜矢様はトイレから帰ると、さっき私に教えてくれた包みを取って、椅子越しに、ぽんと荒木の方に放り投げるようにしました。

何か、ちょっと気まずい空気になったの感じて、私は、

「何も食べて来ておりませんので、お許しを頂いて、ちょっと寿司でもつまんで来ても、よろしゅうございましょうか」

と、亜矢様を怒らせずに、気を利かそうと思って伺いを立てましたが、亜矢様に

「お前は其処に、そうしていなさい」

と、ピシッと言われてしまいました。

亜矢様は、しばらく、むっとした表情で、いましたが、荒木に、

「あたしの上げた物が気に入らないんなら、表のゴミ箱にでも捨てなさいよ」

と、声を低くしながらも、激しい目つきで言われました。その時、亜矢様も、荒木の傷に気づいた様子でした。

店を出て、私の車の傍まで来ると、亜矢様は声を荒らげて、

「さあ。捨てなさいよ、そこへ！ 誰か拾ってくから、心配しないで捨てなさいよ。捨てなさいってば！」

と、荒木に迫りました。

「こんなふうじゃなく、二人きりで、お会い出来ると思ってましたので」

と荒木が、もじもじと言うと、

「言い訳は、よしなさい！」

と亜矢様は、人が通るのを意識するかのようになり、ピシッと平手打ちになさいました。

私は運転席に乗ったまま、窓を開けたり閉めたり、荒木の乗る後部のドアを開けたり閉めたり、口をさし挟む余地もないので、途惑っておりました。

しかし、結局は荒木は亜矢様の言う通り、後部の座席に乗り、亜矢様のご指示通り一緒に「魔女の館」に向かいました。私は荒木がわざと亜矢様の怒りを買う様に努力しているのではないかとも思ったりしてみました。

「魔女の館」に着くと、増本が先に来ておりました。同じボックスに坐り、荒木は増本と初対面なので、私が紹介してやりますと、二人共、亜矢様からは聞いていらっしゃるしく、お互いのことは私以上に、よく知っていました。

荒木は、亜矢様が、ちょっと立った隙に私

の方を向いて、

「さっきは済みません。長尾さんに他意はないんですが、二人だけで会えると思っていたものですから」

と詫びて来ましたので、私も、

「私の方はいいんです。亜矢様のご命令通りにしたからです。それより、荒木さん。どうせ亜矢様の言う通りになるんだから、最初から抵抗しなければよいのに」

と言うと、増本も、

「何か、あったんですか？」

と、人なつっこく話題に入って来ました。「いいえね。荒木さんが無駄な抵抗、というより蟬螂の斧みたいなことをして、亜矢様の小指の先で、ひねり潰されちゃったものから、私が意見してるのですよ」

と私が説明すると、増本は、ぽつんと「女の業ですね」

と、ひとり言のように言って、大きく、うなずいていました。荒木は、

「蟬螂の斧、ですかねえ」

と嘆くような、半ば讃美するような声で言いました。

「ねえ。みんな、亜矢さんの悪いところを探しませんか」

と私が、気を取り直すように誘うと、二人共、そうだ、そうだ、と乗って来て、「だいたい、我がままが強くなって、男を男とも思っとらん」

と増本が、おどけたポーズをとると、「そこがよくって、みんな追っかけるんだから、仕様がなないじゃないか」

と、荒木が言い返しました。私が、「真面目に、悪いところを探そうよ」

と、たしなめると、荒木が、

「鼻が、ぺちゃんこだ」

と言ひ、増本は

「今日のスニーカーは、なっちよらん」

と、うっぷんばらしの真似をして、机をたたいて見せました。

「原に、もらったやつだからなあ」

荒木は、もうため息をついてしまいます。

「ほかにはないかねえ、悪いところ」

と私がおおってみても、荒木は、もううっつとりと、するように、

「亜矢ちゃんは、ちっとも美人とは思わない。まあ十人並だ。一日に何人も、もっと美人に会う。だけど、亜矢ちゃんを見たら、ほかのどんな美人も目に入らない」

と言ってしまい、増本も、

「そうなんだ。あのひとに会ってしまうと、もうほかの女の顔は見る気にもなくなってしまうんだ」

と、しゅんとして、亜矢様のざんそ讒訴遊びは、

はかなく終わってしまいました。

私はこの際、ちょっと増本に訊いてみたくなりしました。

「増本さん、猫の世話をして上げるようだけど、好きなんですか？」

「恵美ちゃんは、そりゃ可愛いですよ。でも、あのひとが可愛がってるってことと、あのひとの傍に、いるってことで、私にとって猫はあのひとの一部なんでしょうねえ」

「あなた、他のもの、例えば亜矢さんの下着なんか、猫よりもっと亜矢さんの肌の一部とも思えるものをみてて、平気なんですか」

「初めは平気じゃなかったです。でも、あの人の許しなしに、何一つ冒したことがないので、じっと耐えました。窓一つ離れたアパートで耐えていれば、大概のことは耐えられますよ。ただ私に言えることは、あのひとが許してくれたのは、猫の面倒を見ることと、あのひとの薄団に一人で入ることだけなのです。よ。それも、涙を一ぱい溜めて、やっと許してもらったようなものですから、それだけを

じっと大事にしていたんですよ」

増本は、かなりメートルが上がっていましたが、話は真実そのものでした。私は、もう少し、訊きたくなって、

「でも、亜矢さんの下着に、キスしてみたくならなかったでしょうか」

と突っ込むと、増本は、ふうっと煙草の煙にため息を混ぜて大きく吐いてから、

「戦いでしたね。もちろん、あのひとの許しがあれば、そうしたでしょう。でも私は、あのひとの許しのないことは望まないようにして来ましたし、これから、そうして行くつもりですよ。それが私の位置なんですよ。そう決められてしまったんですねあのひとに」

と言つて、ちょっと言葉を切ってから再び「ねえ、長尾さん。この間、私に見合いの話が起ったので、あのひとに、見合いをして良いか、訊いたんですよ。そうしたら、いけないって言われたので止めました」

と、当然のように語りました。私は、それ以上、増本の心を乱すことは出来ませんでした。

荒木は、いつのまにか、さっきの細長い包みを、あけて、亜矢様にもらった新しいネクタイを締めていました。銀色の縞柄の、なか

なかシックな感じのするものでした。

三人共、何となく気だるい感じでしたが、その場に釘づけされたように、ハモンドオルガンに合わせて懐メロを歌ったり飲んだりして、亜矢様の手が空くのを待っていました。その日は、混雑したため、亜矢様は他の席の相手をしていましたが、看板になって、やっと

「さあ、帰ろう」

と、言ってくれました。とし坊も、ついて来て、五人で私の車に乗り込みました。

土曜日なので、空いたホテルが、なかなか見つからず、二、三カ所のホテル街を廻って、やっと場末で二部屋、取ることが出来て、私たちは、そこで寛くわぎました。

とし坊は、車の中でも、何となく荒れ模様で荒木に、ごねてみたり、私に女王気取りで命令したりして、私も一寸、不愉快になっていましたが、部屋へ入ると早速、

「あたしに、別の部屋を、とってよ」

とか、

「先に帰るから、送って」

とか、てこずらせることばかり言い出しました。亜矢様は、少しも怒ってくれませんか、で、私は思わず、

「勝手にしろ。君が金を払うんじゃないんだろう。帰りたければ、タクシー代を呉れてやるから帰れっ！」

と、怒鳴ってしまいました。

「よっぽど長尾さんとは合わないのかなあ」

とし坊は、しゃあしゃあ、していますので「遊びのルールに、君が入ってくれないからじゃないか」

と、私が言って、それから二人は、ちょっと言い合いになりました。黙って成り行きをみていた亜矢様が、

「二人とも、お黙り。あたしが、気を悪くするじゃないか」

と、おっしゃったのが、鶴の一声で、私もとし坊も静かになりました。

まるで、飼犬と飼猫の喧嘩みたいで、我ながら、さすがに情ないと思いました。とし坊が、のそのそと亜矢様の坐り椅子の、お臀の辺りに潜りこんで、顔を寄せるようにしているのを見ると、私は、とし坊が女であることが、妙に嫉けて仕方ありませんでした。

「荒木さん」

亜矢様は改った呼び方をして、
「あんたは、あたしを怒らすようなことをしたわね。自分で言っでごらんさい」

と言いました。荒木は、まるで待っていたように、素直にパンティーの事を白状しました。亜矢様は、こんどは私の方に、

「お前も、知っていたんだろう？」

と顔を向けました。こんな時に、言いわけをすると、すぐ怒られてしまうので、

「申し訳ありませんでした」

と私は、ただ恭順の態度を示しました。

「さあ、二人とも処刑するよ」

と言って、とし坊に寝巻の紐やバンドを集めさせました。しかし、集めたもので、二人分はなかったので、亜矢様は、

「それじゃ、お前から」

と、私の方を顎で指すようにしました。

「済みません。でも私は……」

と言いかけてから、

「いいえ。はい、お受け致します」

と、私は素直な態度を取りました。

「長尾さんは、私が誘惑しただけで、責任はないんです」

と、荒木が言ってくれましたが、亜矢様はそれには答えずに、

「お前は、自分の身分を知ってるね。人に同情したり誘惑されたりする権利は、お前にはないんだよ。あたしは、お前の奴隷ごっこ

お相手を、してやるとは言っていないんだからね。どうなの、お前。お前は有罪かい？」

と、たたみ込んで来ました。

そういう時の亜矢様は、白いお顔が、やや蒼ざめた感じに思えるぐらい、きゅっと引きしまり、目の縁には一瞬にして陰が籠り、唇

元が、やや上向きに曲がり加減になるのが、いかにも残忍にみえ、首すじの白さが、まるで段違いの身分のように受け取れてしまい、こちらの方も芝居っ気などは、さらさらなくなって、ひたすら忠実に仕える下男のような気分になり切れてしまうのが不思議なくらいです。私は両手を後ろに回して、とし坊に縛られながら、

「はい、有罪です」

と、気持をこめた答え方をさせられてしまいました。そのままで私を柱に縛りつけさせると亜矢様は、炬燵から手一つ出さなのまま、

「バンドで十回、叩き」

と顎を、しゃくるように、とし坊に言いつけました。そしてすぐに増本に、

「増本さん、テレビを大きくして」

と促しました。増本は済まなそうな顔をしてテレビに手を伸ばしました。とし坊が、

「やりにくいな。亜矢ちゃん、やってよ」

と照れたように言っても、亜矢様は、

「とし坊、おやりっ！」

と一喝したまま、私に

「お前、とし坊に打ってもらいたいよね」と、強制なさいます。どうせ答で打たれるのなら、亜矢様に直接、して頂く方が、いいに決まっていますが、亜矢様の目をみてしまうと、とてもそんなことが言えなくて、私も

「とし坊さんに、やってもらいたいです」

と、同意させられてしまいました。

「そんなら、嬉しそうな顔をして、お願いしなさいよ」

と、とし坊は図に乗って来ます。亜矢様は知らん顔をしていますので、こんな時は、とし坊にも素直になる方が、亜矢様の思召に合うのではないかと、言う気になって、

「ご面倒かけて済みません。よろしく、お願いいたします」

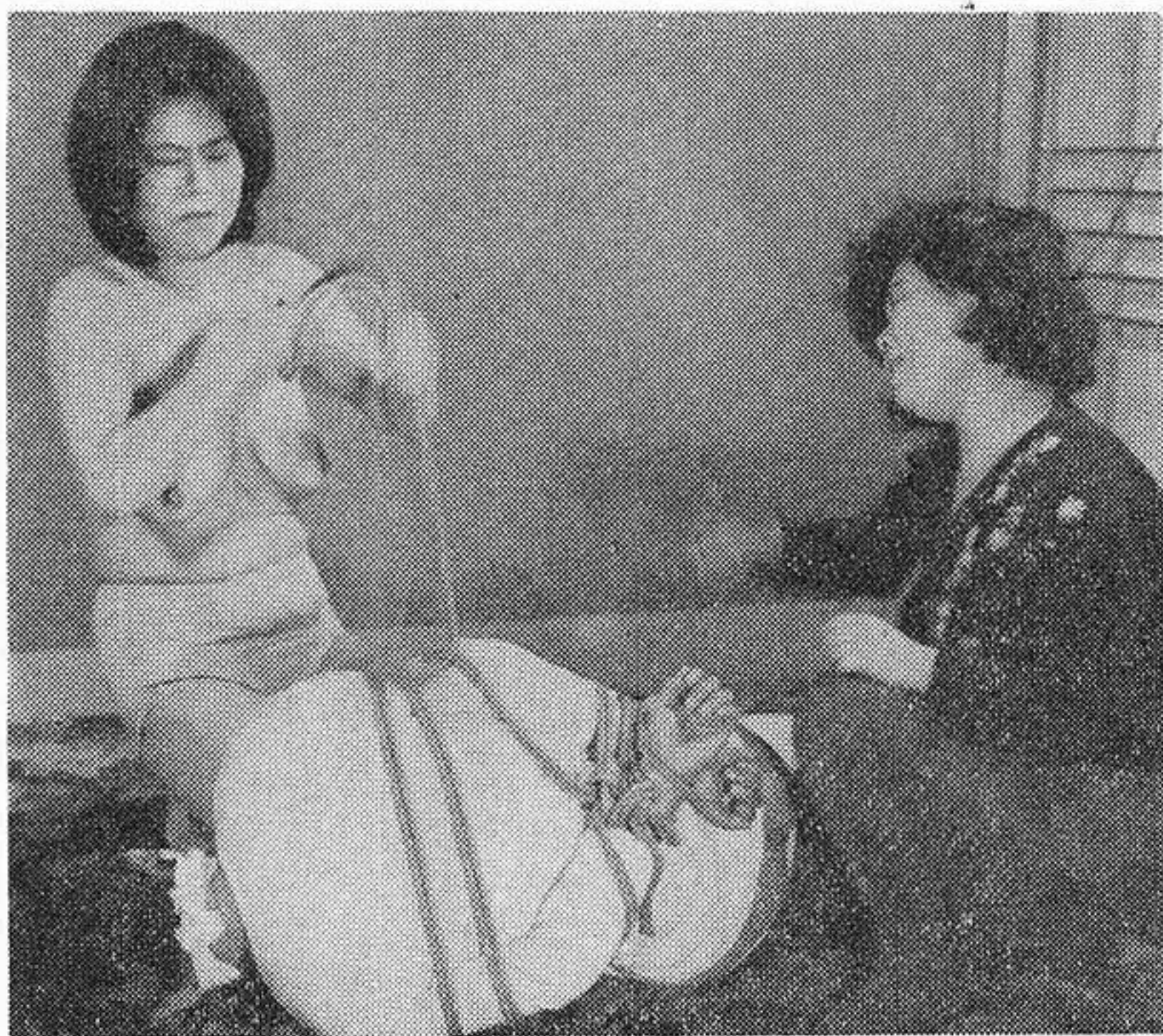
と私は言って、とし坊にも頭を下げさせられてしまいました。

「さあ、荒木さんも増本さんも、声を出して数えてっ！」

と、亜矢様に、せかされて、皆で、

「一回っ、二回っ」

と、声を掛け始めました。



とし坊は慣れた手つきで、バンドを二重に折ると、自分の体に当たらないように叩き始めましたが、案外、加減してくれました。

荒木は陽気に手拍子まで取っていましたので、亜矢様は、

「こいつ。自分の運命も知らないで」

と、女首領のように悪ずれた言い方をする
と、例の、ふふふといった、含み笑いをなさ
っていました。

とし坊に叩かれている間、一度でも亜矢様
が見て下さらしたらと期待していましたが、亜
矢様は炬燵に入ったきり、全然、私の方には
振り向いてくれませんでした。

こんどは、荒木の番になりました。二十答
と決まって、荒木は素直に受けていましたが
私の時より、打ち方も、ちょっと、きつめの
様子でした。とし坊が終わっても亜矢様は、
縛った紐を、ほどいてやろうともしません。

「荒木さんは一晩中、そうしているのよ。さ
あ、こいつを肴に、じゃんじゃん飲もうよ」
と亜矢様に促され、もう三時を廻っている
のに、皆は元気よく酒盛りを始めました。

「私にも下さいな」

荒木が情ない声を出しますと、亜矢様は、
いつものように、口に含んだビールを荒木の

口に流し込んでやりました。とし坊は、
「ちえっ。亜矢ちゃん、優しいんだから」

と、いまいまいそうに言うのと、煙草の火を
高木の髪の毛に、くっつけたりしました。

「誰が、そんな事、しろって言ったの！」

と、亜矢様は激しく、とし坊を叱りつけま
した。とし坊は肩を、すぼめる仕草をしてみ
せると、ふてくさったように、

「ばかばかしい。長尾さん、飲もうよ」

と、私を誘いましたが、私は荒木の恍惚と
した表情を見つめたまま、取り合わないでい
ました。

「もう、かんべんして下さい。今後は絶対に
しませんから」

と荒木は、もじもじ、し出して、
「ねえ、トイレに行かせて下さいよ。そのあ
と、ちゃんと縛られますから」

と頼みましたが、亜矢様は私に、風呂場の
桶を持って来るように命じただけで、許して
やりません。

「そこに、しなさいよ」

と、私に、桶を荒木の前に置かせて、亜矢
様は冷たく言います。その上、意地悪く、

「さあ、ビールを、お飲み」

と、上から口移しにビールを流すので、

「もう、いやです。ビールは、いいけど、か
んべんして下さい」

と荒木は、本当に泣き出しそうに顔を、ひ
きつらしてしまいました。

「あたしが風呂に入ってる間、増本さん、見
ててよ。許しちゃ、ダメよ」

と言いつつ、亜矢様は風呂場の方へ立ち
ました。

(九)

例によって、私が目かくしをして、お供を
します。

一通り洗わせてから、湯ぶねに気持よさそ
うに浸っている間も、亜矢様は増本にビール
や煙草を持って来させたりしました。

湯ぶねから亜矢様が、
「お前の恰好したら、ほんとに奴隷だね。自
分でも情ないと思わない？」

と、嘲るように言われました。

洗い場の隅の方で、正座して控えている私
は、亜矢様の、つやつやした裸体を想像する
本当の盲になったような気持になって、

「はい、情ないと思います。もし生まれ変わ
ることが出来たら、亜矢様のような身分にな
って、男たちを侍らしてみたいと思います。」

それだけは、いくら努力したって、どうしようもありませんので」

と、讃美するように答えますと、

「そうだね。それを楽しみに一生懸命、やるんだね」

と亜矢様に、いかにも風格のある調子で言われ、しみじみ、そんな気になって、私は再びタイルの床に額を、すりつけねばならないような気持に、させられました。

「ふふふ」と胸に、じーんと、くるような、亜矢様の例の含み笑いが聞こえて来ました。

亜矢様は湯ぶねの縁に腰かけて、タオルでもいじりながら、私の表情を、ゆっくり楽しんでいられる様子です。

こんな時は、いつも次の苛め方を考えている時なのです。そんな気配を察すると、私は思わず顔を上げて、見えない目で亜矢様の、お姿を求めると、自然に口が、もぞもぞと動いてしまいました。しかし、私の方から、おねだりすることは禁じられていますので、声にすることが出来ません。

「何が言いたいのよ、言ってごらん」

亜矢様は、わかっていくくせに、私に言わせようと、なさいます。

私は叱られるのを覚悟で、

「亜矢様、お恵みを……。ほんの少しでも、お恵みを」

あえぐように、声を上ずらせました。途端に亜矢様は、

「ダメ！ 今日、お前は共犯じゃないか。」

もっと、ほめられるようなことを、した時のご褒美よ。今日はメロディーだけ」

と、おっしゃって、すいと、おからだの動く感じがすると、せせらぎのような、さらさらとした音を、わざと私の傍で、お聞かせになりました。

私は、かあっとなって、もっと傍へ、にじり寄って、せめて、しぶきだけでも、戴きたい。ひとしずくでも戴いて、私のひからびたからだを潤したいと思うと、手足が、ひとりでに震えて来ました。しかし、お許しのないことをしたら最後、もう二度と相手に、してもらえないに違いない。と真底、思えるほど亜矢様から感じる気配は、尊く威厳に溢れていて、どうしても近寄る事が出来ません。

「せめて……。亜矢様、せめて後始末だけでも……。亜矢様」

と切なく、お願いしてみても、亜矢様は無慈悲に、ご自分のおからだに、さあっと湯をお掛けになってしまい、

「お前は、あとを舐めるに、きまつてるからあたしの見ている前で流しておしまい」

と容赦なく、私にお湯を汲ませ、何ばいも流させて、タイルに残った亜矢様の香まで、私に消させてしまうのでした。

部屋に戻ると、荒木は自由になって、手首を、さすっていました。増本が、ほどいてやったのですが、亜矢様は増本には何も言いませんでした。

「今日は、とし坊と寝るから、増本さんは向こうの部屋で、一人で寝なさい。お前たちは炬燵で二人で寝なさい」

と亜矢様は、それぞれに命令して、とし坊を連れて、さっさと奥の間に引っ込んでしまいました。何か言いつけやすいように襖は開けて置くようにとのことでした。増本が向この部屋に立ってから、

「ネクタール、もらえましたか？」

と荒木が、ささやくように訊きました。

「共犯だからダメだってさ。荒木さんのお蔭だよ」

と、私が声を落として愚痴りますと、

「生かさず殺さず、だからなあ」

と荒木が、また、ため息を、つきました。しばらくすると、亜矢様が、

「荒木さん」

と呼びました。荒木は、いそいそとして行きました。亜矢様に、

「他の女にプレイしてもらったりすると、あたしに構ってもらえないよ」

と一言、言われたきりで、身を縮めるようにして、すぐごと引き返してきました。

そのうちに奥の間で、やるせなげな、ため息や乱れた息づかいが感じられました。亜矢様のか、とし坊のかはわかりませんが、さっきから、すっかり眼が冴えているので、こっちまで息が荒くなってしまいました。

「ながーをーさぁん」

と亜矢様が、とぎれとぎれにお呼びになりました。私は、あたふたと奥の間に入ろうとしましたが、亜矢様に

「待って。目かくしをしてから入って来て」

と、止められました。その通りにして、静かに膝行するようにして入りますと、亜矢様は私の襟をつかまえて、

「お舐め」

と、押しつけるように、なさいました。舌を当てがうと、そこは、とし坊の乳の辺りだと言うことは、すぐにわかりましたが、私は亜矢様のおからだの一部のような気がして、

命ぜられたことを一生懸命、努めました。

あとになって、とし坊は私に、

「男たちが、いくら威張ったって、女には、かなわないんだからね。亜矢ちゃんを、ほんとに喜ばすのは、秋山さんのほかには、あたしだけだものね」

と、勝ち誇るように言いました。それから私と、とし坊は仲好くなりました。同時に頭も上がらなくなってしまいました。

ホテルは朝十時までなのですが、明け方になって、やっと寝ついたものですから、誰も起きて来ません。帳場から電話のベルが鳴り私は延長を頼んで置きました。亜矢様の蒲団がめくられて、惱ましい素足が太もものところまで露わになっていましたが、私は忠実に掛け蒲団を直すだけで次の間に下がりました。

亜矢様は目が覚めると、荒木を台にして朝化粧をなさいました。私は傍に膝をついて、亜矢様のバッグから、ファンデーションや、アイラインやパフや、リップクリームを次々と出す係になっていました。

亜矢様は、お化粧は実に丹念になさる方でちょっとアイラインの引き方が気に入らないと、私に枕元に置いてあった、さくら紙を持って来させ、きれいに目もとを拭い、又、ゆ

っくりと引き直し、それを気に入るまで、なんべんも、くり返すといった具合で、紙を捨てたり、次のお道具は何を出したらよいかと私は亜矢様のお化粧の済むまで、つきっきりで気を遣わされていました。

顔を、お洗になる時には、私は亜矢様の後に回って、髪の毛の束を捧げ持つようにしました。荒木も、その時は腕や膝を伸ばしきって、背中を高くして、亜矢様が楽に中腰になれるように、気を利かしていました。

増本は、ゆっくり起きて来ました。しかも気持よさそうにしています。こんな時、ダブルベッドを、ひとりで占領させられて、平然としている増本の気持が、どうも不可解なので、亜矢様が、ちょっと立った合い間に、「ひとりで、よく眠れますねえ。私たちが、あんなにされているのを見て、あなた、よく辛抱、出来ますね」

と、私が尋ねますと、増本は、「いいえ。私が直接に何も、してもらわなくても、あなた達が苛められているのを見て、不思議ですねえ」

と満足そうに笑いました。荒木も私も、「不思議ですねえ」

と、くり返しました。

とし坊は、まだ起きて来ません。朝といつても昼近くですが、みんなビールを飲み直し始めました。

「昨夜、亜矢様の悪口を、みんなで言おうってことになりましたねえ」

と私が、炬燵で向き合っている亜矢様を挑発してみたのですが、

「あんまり、出なかったねえ」

と、増本が正直に言ってしまいました。

「そう。たまには、いいでしょ」

と、亜矢様は知らん顔をしてビールを口に含みました。

荒木は図に乗って、煙草をくわえると、

「おい、亜矢。マッチ」

と威張った振りを、してみました。亜矢様は、にやっと笑うと、マッチの箱を、ぽんと荒木の方へ放り投げました。

「てなことを言ってみたいね、増本さん」

と、私も調子を合わせますと、増本は例によつて、人なつっこい目をして、ここにこ、していました。

亜矢様は、私の態度が不敬だと言って、こんどは増本に手伝わせて、柱に、私を縛りつけました。

とし坊が、や々と起きて来て、
「なあに、まだ、やってんの？」

と、寝しどけた

ように言うのと、もう飽きたと言わんばかりのあくびをして、風呂場の方へ行ってしまうした。

「長尾さん、トイレよ。ほら、あげるから、ついてらっしゃい」

と亜矢様は、炬燵から出て、私のことを、からかいました。

紫陽花あじさいの花模様の浴衣から喰み出た真っ白な、ふくらはぎが、再び、私の想いを、そそります。柱に縛りつけられた手を、ほどこうと、手首に力を入れますと、

「自分で、ほどこちゃダメ。増本さん、押えていて」

と増本に言いつけて、こんどは、わざわざ私の方に歩みよつてきて、私の胸のあたりに立ちはだかって、

「ほら、欲しくないの？」

と、両手で裾を上げます。白地にレースの縫い取りがついて、小花をあしらったパンティーが、私の目の前に眩しく拡がって来ました。私は腰に力を入れて起き直ろうとしますが、亜矢様に、かるく足蹴にされて元に戻ってしまいます。

「ほら、ほら。こうやって、かがんで」

と亜矢様は、お膝を内側に、かるく曲げて



私の口のそばに、かがむ素振りをみせます。実際、昨夜から音だけ聞かされ、それに渴ききった感じになっていましたので、空しいと知りながらも、私は体を、よじりつづけました。

「そうら、こっちへおいで。おいしいものをあげるから」

亜矢様は、いたぶるように私の方に近づいたり遠ざかったりしながら、私の咽頭を、からからにひきつらせて置いて、敷居の処で止まって、おいでおいでをして見せました。私は懸命に、にじり寄ろうと努力するのですがどうにもなりません。

「あげようって言うのに、要らないの？」

廊下の境目の柱に凭れるようにして、心持ち顔を引ながら、にんまりと笑くぼを浮かせた亜矢様は、乱れた浴衣の裾を、そのままに、白い素足や内ももの一部を、しどけなく覗かせて、今までみたこともない仇っぽい艶かしさが漲っていました。

荒木も増本も、とろけるような目つきで、亜矢様がトイレのドアを閉めるまで、じっと見送っていました。

ホテルのトイレには内鍵がついていないので、誰かが、ぐっと開けてしまえば、それま

でなのですが、私はもちろん、二人とも熱っぽく黙ったまま、亜矢様の再び現われるのをただ待ちつづけているだけでした。

トイレから、さっぱりしたというような顔で出て来ると、亜矢様は

「おなか为空いたわねえ。荒木さん、お寿司を頼んで頂戴な。ただし、一つだけよ」

と荒木に言いつけました。

「一つだけ？」

と、風呂から上がって来た、とし坊が聞き返しましたが、

「そうよ。食べるのは、あたしだけ。みんなは、あたしの前で羨ましそうに見てるのよ」

と、亜矢様に澄まして言われ、

「つまらないの」

と、口をふくらませて、化粧台の前へ坐りました。増本が、

「食いものの恨みは怖いよ」

と、まぜっ返しましたが、荒木は真面目に亜矢様の指図通り、帳場に頼みました。

「さあ、みんな、こっちへ来て」

と、寿司が届けられると、亜矢様は、炬燵の傍に、わざわざ皆を集めて、鮎を一つ、つまみ始めました。

荒木が情なそうに、

「私にも、半分でもいいから下さいよ」

と、ねだりました。亜矢様は睨むように、「ダメ。見てるだけ！」

と、叱りつけてみせましたが、それでも食べかけの卵焼きを半分、箸に持ったまま、ぶらぶらさせて、荒木にくれてやりました。荒木は亜矢様の傍で、四つ這いになって、ゆっくり味わうようにしていました。

とし坊が、亜矢様の横にピッタリ付き添うようにしていると、亜矢様は、寿司桶の隅の方に二つほど寄せてやりました。残りが三つ位になると、亜矢様に向き合っていた増本が炬燵から、すぱっと手を伸ばすと、あつという間に、一つ、何か、たね物を口に頬張ってしまいました。亜矢様は、にやっと笑っただけで、何も言いませんでした。私は何も言わずにおりましたが、最後に残った、あなごの半分を、亜矢様は噛み砕いて、寿司桶に吐き出すと、畳の上に、それを置いて下さいました。私は首を突っ込むようにして有難く頂きました。荒木が、じいーっと私の方を見つめていました。

「ああ、面白かった」

亜矢様は、荒木に注がせたお茶を飲むと、坐り椅子に凭れながら、両方の二の腕まで見

せて大きく伸びをなさいました。

— (十) —

もう、取り立てて書くほどのことは殆ど、なくなりました。あとは思いついたことを書き記すだけなので、亜矢様の素晴らしさを味わって下さる方は、ここでお止めになった方がよいかも知れません。

一番、先に妻の話で恐縮ですが、久江のことを書かせてもらいます。

始めの頃の久江は、亜矢様どころか、荒木にまで嫉妬の感情を持っていて、荒木からの電話で出掛けた私が、そのまま外泊したりした時は、

「荒木という男が、きつとヒモなのね。そうに、決まってるわ」

と、言い立てて、説明すればするほど、「こんど電話を掛けて来たら、どやしつけてやるわ」

と怒っていましたが、荒木という男に、私がMとしての友情を感じるということが、言葉ではなく、夜毎の房事のなかで、わかって来たらしく、(らしくというのは「今でも、わかってやしないわ。あたし以外に女王様をつくることなんか、認められるものですか」

と言い立てつづけているためなのですが) 実際、その後に荒木からの電話があった時も素直に取りついで、

「どうしたんだい。どやしつけなかったじゃないか」

と、私が逆に、けしかけてみても、「荒木という男が、悪いわけじゃないんですものね」

と意外に、さっぱりとしたものでした。

私の方も、妻をなだめるという気持以上にまるで二十年も感覚が若返って来た感じになって、結婚してから、ろくに着物も買ってやらなかった——というより、久江の方で逃えもしなかったのですが——ことを申し訳なく思い、せめて着飾れる間は、いい物を買えとすすめて、正月も間近なので、セツトに行かせたり、髪^{かつら}の仕立てを見に行ったり、やいやい言って、洋服やベレー帽や靴などの新調を見立ててやったりしますので、久江の方は、かえって薄気味悪がったり、「女にしてやりたいかわりに、あたしで間に合うのでしょうか」

と、余計に勘ぐったりしています。

まあ女ですから、久江も独占欲がつよく、殊にプライドを持って「一緒になってやった

んだ」と思っていたために、自分より上が出来たと思うと口惜しいらしく、

「あんたは、あたしのために生まれて来た人だと思っていた」

とか、

「あたしの本当の奴隷だと思っていた。あたしが口笛をピューと吹けば、いつでも出て来て、あたしの役に立つ男。要らない時は、あたしの前から消えていて、泣こうが喚こうがあたしに不平を聴かせない男。そんな奴隷だと思っていた」

と、涙をこぼして言った時もありますが、私が、

「現実の結婚では、久江を一番、愛しているんだ。次元の違う世界では、Mの心は、あのひとに支配されているんだ。安全に帰してもらおうようにお願いすれば、きつと帰してもらえと思うんだ」

という説明を、多少は実感を持って、容認してくれつつあるのではないかと、期待しているのですが、欲をいいますと、そのうちに久江が、ふざけ半分でもよいから、

「あなた、亜矢様から電話よ」

と、言ってくれるようにならないかと望んでいるのですが、虫のいい話でしょうか。

亜矢様は、私如きものには、めったに直接お電話をなさることはありません。たいがい荒木が使われています。それでも一遍だけ、急なお呼びを受けながら、久江に泣かれて、ご命令に背いてしまい、こちらから、

「申し訳ありません。妻に泣かれてしまい、いずれ、わからせるよう、努力致しますが、今日のところは、どうかお許し下さいますように……」

と、まず荒木を通じて、亜矢様のお立場が悪くなっていないかどうか——「絶対に来させてやる」などと、亜矢様が周りの人に言っ
てしまつて、引込みがなくなつたりしてはいないか——聞いて、荒木にも取りなし
てほしい旨を伝え、そのあとで、亜矢様が、
お出になつた時、文字通り誠心誠意、お許し
をお願いしますと、

「あたしは、女を泣かせるのは嫌いだから」とおっしゃつて、ご機嫌よく、お許し下さつたのは、ありがたい極みでした。

この電話のあとで、亜矢様にお会いした時は、丁度、増本が同席していました。

しばらく飲んで黙弁^{だべん}つたあと、気まぐれに
亜矢様が、

「ちよつと出ようか」

と私を誘つて下さいました。増本が、

「ぼくも連れてつてよ。ねえ、君」

と頼みますと、亜矢様は愉快そうな顔をなさつて、

「もっと可愛い顔をして、ていねいに頼んで
ごらんさいよ」

と、じらすように言いました。増本は、それ以上の態度を取ろうか取るまいかと、途惑つたような顔つきを、していました。

私は、つい亜矢様に、

「増本さんの分まで、私がここで土下座しますから、どうか連れて行つてあげて下さい」と、お願いしてしまい、

「お前は、また身分を忘れたの！」

と、叱られてしまいました。しかし亜矢様は結局、増本も連れて外へ出ました。

「魔女の館」の、すぐ近くにある旅館で休憩をとり、しばらくしてから、亜矢様がスラックスを穿いたままですが、私の顎から胸の辺りに跨がつて下さつた時は、手を合わせ、

「亜矢様。私が、つましやかに^{いと}営んでいま
す家庭を、あなた様の小指の先で、ひねり潰さないで下さいませ。あなた様のお気持ちに、お縋^{すが}りするよりほかはございません。家庭が平和でいられるかどうかは、あなた様のお心

だけで、手段は、あなた様だけが、お持ちなのです。私は、ただ、お願いするだけで、荒木さんみたいに、されてしまったら、ほんとうは、ぞつとするほど怖いのです」

と、実際に涙を一ぱいにして、亜矢様にお願ひ致しました。

亜矢様は、ほろりとも、なさらず、支配者のゆとりを、たぷりと示すように、

「大丈夫よ。お前に、奴隷としての愛情を、そこまで持っていないから……。でも、本当の奴隷に、したくなったら、いつでも出来るんだよ。わかつてるね」

と、おっしゃいましたが、もったいなさと恐ろしさで、我ながら身が、ふるえる思いでした。増本も真剣な顔をして、眺めていました。

別の日に、亜矢様が、原とのデートのつなぎに、私をお呼び下さつた時、ひとりにされてから、何となく亜矢様を慕つて飲んでいますと、わざわざ電話で、

「今日はもう、奥さんのところに、お帰り」と命令して下さいつた夜などは、亜矢様のお優しさを想う気持ちと、現実の久江への愛情が重なり合つて、どれが自分の感情なのか自分でもわからないまま、狂おしいほどに燃えた

ものでした。

ついでに、原のことを書いて置きます。原に対しては、増本も荒木も、さすがに快くは思えないらしいのですが、私が二人に、

「亜矢様が、原と、つき合いをなさっているのは、いろんな夜を過ごした後に、女らしく活け花や、お茶でもやってみたい気持が起るようなもので、私たちだって、濃厚な夜のあと、渋い番茶で寿司を摘^{つま}んでみたくなるじゃないませんか。それに似てますよ」

と、悟ったように言ったものですが、事実ほもっと亜矢様のペースで運んでいるらしいのです。

亜矢様は原の前では、女らしさ可憐さを強調した服装やポーズで、お会いになります。ある時、私たちと過ごす時には、お召しになったこともないような、豪華な訪問着で、お出掛けになったことがありました。

丁度、お供を命ぜられて、増本と拝見したのですが、緋色地の意匠ちりめん、金箔の

雲を、ぼかし、矢来格子と御所解文様の柄で振り袖を軽く舞うように、

あしらわれますと絹地の長襦袢の裏が、眩しいほど真っ白く、あげ羽の蝶に結^ゆい上げた帯も、豪華な緞子^{どんす}で菊の花を織^織ってありました。

亜矢様のアパートから美容院に寄って着付けを済ま

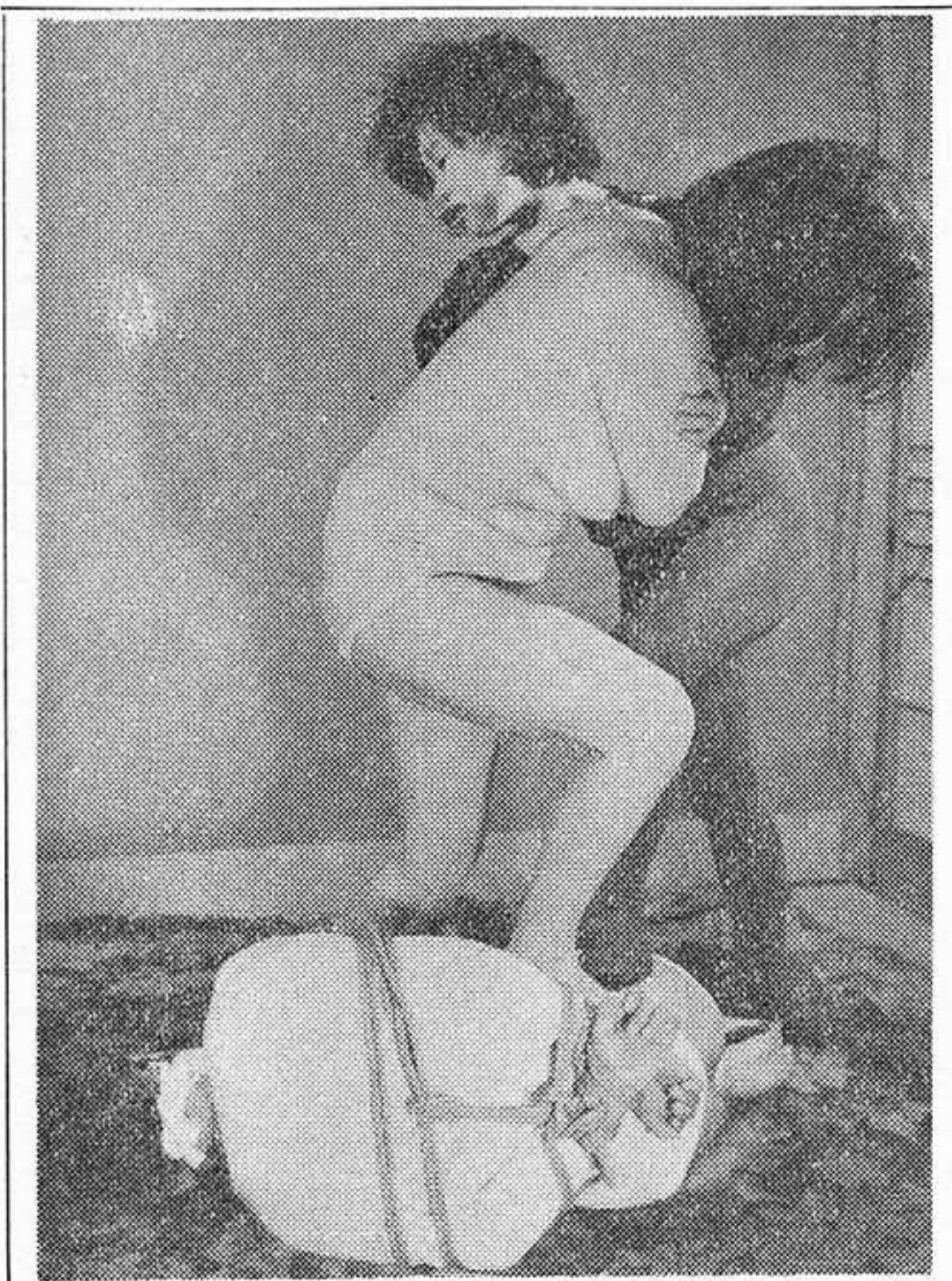
せ、原と待ち合わせの、有名な高層ビルのロビーまで、お伴する間も、車をよく洗って来たかとか、煙草は灰が散らばると、いけないから吸うとか、曲がる時は特に気をつけてドアに着物が触れないように注意しろとか、普段でも、お小言の多い方が、その日は大変なものでした。おまけに、ヘアースタイルもいつもの房々した長い髪の毛を巻き上げるように隠して、首すじのところでカールした、いかにも愛らしい洋髪を被って、お出でなので車寄せで降ろすにも二人がかりで気のつかい通しでしたが、ロビーで、お待ちになって原が現われる時間が近づくと、名残り惜しうに見惚れている私たちに、

「さあ、もうお帰り」

と追い立てるように、なさるのでした。荒木は相変わらず、

「私が捨てられるのは時間の問題ですよ」などと嘆きながら、殆ど毎日のように何とか亜矢様とお会いして、あれこれと亜矢様を怒らせる工夫をしているみたいです。

私と荒木で、亜矢様のところまでお送りしたある日、亜矢様は大変お疲れで、二人に蒲団を敷き直させると、すぐお寝みになり、そのまま荒木に買物を命じて、あれこれと品物



の名前を並べておられました。

荒木は、どうせ行くようになることは決まっているのに、

「私は、ちょっと都合がありますので、長尾さんに、お願いして頂けませんか」

と、思わせ振りの返事で、わざわざ亜矢様のお怒りを呼んで置いてから、

「どうしても言うことが諾げないのッ！」

と、すぱっと起き上がった亜矢様に、思いきり足蹴にされたあげく、跪かされて、

「お買物に行かせて頂きます」

と言い直させられ、やっと、いそいそ出掛けて行ったりするのでした。

その上、折角、ご命令通り買物を済ませて帰って来たというのに、荒木は、蒲団を被って寝んでいる亜矢様の枕元へ来て、私に

「まだ、お若いのに、お気の毒なことを致しました。先生はお出ですか。お坊さんは、まだですか？」

と、少しもユーモアにならないことを、亜矢様に聞こえよがしに言ったりして、また亜矢様に、ひどく、ぶちのめして頂くといった具合なのです。

荒木は、いつもネクタールを渴望しているのですが、亜矢様は与えるポーズさえ見せて

やらず、たまには私に与えているところを、

みせつけたりなさるので、荒木の方は、ますます亜矢様から離れられなくなってしまふのです。それを又、荒木は、みんなに、こぼして廻り、結婚したいんだと言うことを、荒木自身に言い聞かせるように強調して、ため息をついてみせる。そんな、くり返しなのですが、それが荒木のMの世界なのでしょう。

荒木という男は、私から見ると、現実に久江と結婚している私を実像とすれば、次元の違うMの世界に、長々と移している私の影のような男に見えるのです。

亜矢様は最近になって、

「まったく、荒木さんは頭に来るわ。こないだまでは荒木さんに、早く結婚しなさいよって奨めてやってたんだけど、もう勘弁出来ないわ。一生、結婚なんかさせないで、本ものの奴隷にしてやるんだ」

とか、

「こんどこそ、半殺しよ」

とか、凄まじいことを、おっしゃいます。おそろく、亜矢様のおっしゃる「奴隷としての愛情」なのでしょう。

増本は、亜矢様には、文字通り指一本触れず、最近では特に秋山とも親しくなり、時々

は秋山と亜矢様の部屋に一緒に泊まったりも

します。彼のいう「涙で得た苦しい特権」なのでしょう。私と会うと、いつも、にこっとして、お互いに心が通い合っているような感じ。荒木の場合でもそうですが、特に私が苛められている場合には、増本は、まるで彼自身が苛められている感じがすると言っています。指一本ふれない関係を必死に守っているうちに、増本の気持では、それが至極当然になってきたのでしょうか。私にするとそれは若い頃に久江を待ちわびた気持にも似て、或は、それ以上で、純情などという、ありきたりの言葉ではなく、もっと打ち込んだ気迫が感じられて、増本のことを、とても他人のように思えないのです。

「あのひとは、捨ててくれませんか」

と言いながら、増本は当分、結婚はおろか見合いも出来ないで、彼の言う「日まわり」のように、亜矢様の周りを、ぐるぐる廻っているより仕方がないと、自分でも決めているようです。

私の気持については、増本は、

「やっぱり、惚れてるんでしょうねえ」

と言うし、荒木は、

「焦ってるんじゃないかなあ。早くご寵愛を

受けたいて感じね」

と言いますが、つかみどころのない秋山にだけは無表情に、

「人間、誰でも逃げたいと思う時がありますものね」

と、ぽつんと言われて、ちょっとギクッとすることがあります。秋山の位置からは、みんなのことが見えるので、それで泰然としているのかも知れません。

亜矢様という引力の強い恒星に引き寄せられてしまった男たちは、それぞれ亜矢様の決めた位置で、この先も亜矢様を廻る惑星のように、果てしなく、廻りつづけるのでしょうか。そして、そんな惑星たちは後を断ちません。原が惑星になってしまうのも、それこそ時間の問題ではないでしょうか。

「泥鰌」という名のバーテンは、一遍で亜矢様に参ってしまい、私たちが車で出掛けようとする、私に

「ねえ長尾さん。私も連れてって下さいよ。」

トランクに乗っけてもらえば結構だから」

と、しきりに頼んだりするのですが、私は「さあ、私は奴隷だからね」

と、逃げてしまっています。

泥鰌が亜矢様に拾ってもらえるには、まだ

まだ涙の量が足りないような気がするの、私の年の、せいでしょうか。所詮、Mとは、強くなければ出来ないことですものね。

そのほか、K市から泊まりがけで来る私も、ずっと医者らしく見えるN市の男。

「亜矢様のお呼びをじっと待っているんだ」

と、言う会社の社長など、さまざまな星たちが、亜矢様に抱えられたがっています。

亜矢様は、

「もっとメロメロにならなきゃダメよ」

などと、おっしゃっています。

「ねえ、この頃こんなことを考えてんのよ」

亜矢様は、ある時、カウンターの隣でお相手をしている私に話しかけました。

「どんなことなんです？ また、すばらしいことです」

「そうよ。小高い丘があって、小さな家に住むのよ。母屋は、あたしと、光夫さんが住むの。ちょっと離れた小屋に、お前と荒木さんが住むのよ。増本さんは入りびたりに遊びに来るの……庭は生け垣にして、腰のところぐらいの高さに、して置くの。梅の木が二、三本、あって、紫陽花や、つつじが咲いているのよ」

「隅の方には日まわりもありますね。玄関から門のところまでは、白い小砂利を敷きつめて、亜矢様がデートでお出掛けの時は、増本さんがポーチに立って、熱っぽい目を向けているし、門のそばでは、私と荒木さんが両側で地べたに手をついて、お見送りして」

「あたしが帰るまで、三人とも、ぼんやりと涙ぐんでるのよ」

瞑想にふけるように話しているうちに、私は思わず知らず、目がしらが熱くなって来ました。

そんな風に、女神への信仰の日々で心静かに送れたら……そんな老後の一日でもあったら……想いは果てしなく拡がって……

とかく人を呪い、世を恨みつつ過ごした今までの生き方は、何と空しかったことか……亜矢様の夢の中に、とけ込んで行ける今の幸せ……瞑ったままの、まぶたから頬に流れて行くものを、私は感じていました。

「もう泣いているの。バカねえ。今からだって、やれば出来るじゃない」

「はい……はい。……そうですね」

× × ×

亜矢様をめぐる不思議な夜は、今でもつづいています。

(完)

SMレズ体験レポート

愛^{いと}しの風^{ふう}船^{せん}妊^{にん}婦^ぶ高^{たか}原^{はら}薫^{かおる}

(カットも)



SMプレイヤーにも色々なマニアがいるが、いわゆる妊婦マニアというのも、かなりいると思う。四カ月、五カ月と、だんだん膨れ大きく張り出してくるお腹は、はぐくまれる命の豊かさの象徴として美しく、見るだけでもいい、一寸さわるだけでもいい、というマニアが多勢いても、決して不思議ではない。

しかも妊婦を緊縛することにより、その生命^{みなもと}の源を拘束し、その小さな生命の容れ物である母体を、ある意味で「生殺与奪の権すら自らの手中に収める」となれば、マニアたるもの、ゾクゾクする程の感激であることは、私もマニアの一人として十分すぎる程、良くわかる。

しかし、どう焦ってみても九カ月間は待たねば、その大きさにはならず、しかも翌月は、もう今月の楽しみ臨月縛りは出来ない、との常識は何とも淋しい。

しかも縛られる方にとっては尚のことだ。四カ月位じゃあ、だれも喜んではくれず、かといって、最も安定してる何カ月にプレイを集中しても、何十回ものプレイは出来ないし、臨月縛りの翌月は、もう「オギャア」とくる。まこと「プレイは短し、されど苦労は長し」で、お気の毒さまだ。

恋人^{まり}毬子が、私同様に強烈な妊婦マニアと知った時は背筋がビリビリする程、嬉しかったが、お互いにどうにもならない事情があった、妊娠することが許されない身とは、天二物を与えずとか。

じゃ、イミテーションでもいい。大きくお腹を膨らし「妊娠ゴッコ」を、しようよと相談が、まとまったのは、普通の浣腸プレイも縛りのプレイも、少し上手になった頃のことだった。

始めの間は、二〇〇CC位のグリセリンでもヒーヒー言いながら満足していた彼女も、大量浣腸で、お腹を妊婦のように膨らす、となると、「大丈夫？ 大丈夫かしら？」と口では言ってるくせに、怖れと期待に、大きな目を、さらに大きくキラキラさせて、まん丸い双子鏡餅を高々と上げて、早くも息を、はずませていた。

「ネ、どれ位、膨んだ？ ネ、どれ位、入ったの？ どれ位？」とプレイの度に何度も聞かれ、計算するのが面倒なので、計量器を造ることにした。目盛りは五〇〇CCずつで、三〇〇〇CCで一回転。チューブを通して何かが毬子の体内へ入れば^{プラス}の方へ、出れば^{マイナス}の方へと赤い針が動き、『只今、何CC在中』と分かるようになってるのだが、^{マイナス}に動く時に、時々、固体でつままることもあるので、まだまだ改良しなければならぬところも多いのだが、とにかく、ちょっと便利なものだ。

縛って動けないようにして、「今、二九〇〇だ……。今、三一〇〇だ……。ホラ、もう少し、ふくらますから、がんばって！」などと言いながら、平手でピシピシお尻を引っぱたくと、荒い息はフィゴのように激しく、動けない裸身を、くねらせ、よじる彼女の白すぎる程に白い体が、湯気と、体内の温水にポツと上気してピンクになり、体中から白玉のような汗の、しずくをポタポタ落として「ハア、ハア、もう、だめ。もう、かんにんして！ アーッ……」と言う切ない声が広い風呂場に、くぐもったエコーとなり、水滴の落ちるタントン、タントンという音が、エネマのシュツ、シュツ、という音にハーモニーして、二人の心を、より高揚させ、燃えに燃えて、愛の炎に焼きつくされるまで、歓楽の夜が、熱く熱く、更け

て行く……。

大量の液体は重く、そして長時間、体内に入れたままにしにくい。その内に何とかしてやろうと待っていた偶然が、やって来たのは、外で木枯しが山の木々を、ざわめかせ、時々風花の舞う夜のことだった。

温かい風呂場での大量浣腸プレイも、いつものように彼女の喘ぎと共に終わり、充分暖房がきいてるのに更に、私好みで暖炉にマキがパチパチはぜて炎を上げている洋間の大きなベッドで彼女のお腹を撫でていた。

縛りをやるようになってからの何カ月かで、毬子のお乳は急に大きくなった。それまでは胸一杯にフワツと広がっていた感じだったのが、どうしたわけか、プックリと、丸い形になって現在九二センチ。その絹毬のようなお乳の上下に、白大理石の柱のような太股にそして細っこい手首と足首に、それぞれの赤い喜びの印の縄目の跡を残している。

小麦色の私の腕が、二つの膨らみから下へすべってくると、彼女は少し疲れたような甘い声で言う……。

「さっきは楽しかったワ。あんなに愛し合って……。お腹が膨れてたんで苦しかったけど、苦しいから、よけい燃えたのネ……。私、あなたの赤ちゃん、ほしいなあ。さっきみたいなお腹になって、あなたに迫りたいわ！ ネ、カンチヨウシテ！ ネエ、ダイテ！ って……。でも今は、かわいそうな程、こんなにペッチャンコ！ 空気のぬけた風船みたい。あなたの赤ちゃんで、このお腹、こーんなに膨らしたいわ……」

パチッとマキの、はぜる音。炎がチカチカ照らす彼女の横顔は、夢見る天使のように愛らしく見える。先程の興奮で未だピンクに輝いている小さな耳に、熱い息と共に、ささやきかける。

「赤ちゃんは無理だけど、お腹、膨らすんなら、ここでも出来るよ。それも、一晩中でもネ……」

「そう、どうやって？」

「さっき、マリが自分で言ったこと。このお腹、空気のぬけた風船みたいって……」

「空気、入れるの？ 大量空気浣腸？ 大丈夫？ 破けたりしないかしら？」

「サア？ 分からないヨ、フフフ……」

「いいわ！ 空気、入れて！ お腹、膨れすぎて、私、パンクしてもいい！ あなたに殺されるんなら、喜んで死ぬわ！」

「大げさだな、マリ。大丈夫、大丈夫！」

チャンス到来！ 私は、いつか、ぜひ、このフックラした柔らかい、お腹へ空気を入れて、ウンと膨らしておいて、風呂へ入れ、プカプカ浮かして、プレイしたいと思っていたのだ。そのため、今までは空気浣腸は殆どやらず、たまに、お腹へ空気を入れても、せいぜい六〇〇CC位で止めたのだ。この時のために、私が前以て作って置いた道具としては、後で説明するが、特製の止め栓2つと、空気の自動注入器だ。

注空器は、オモチャの肉厚風船を、これもオモチャのお医者セツトの聴診器の胸に当てるところへつなぎ、耳に当たるための2本のチューブの一方へプラスチックのステップエアポンプを、もう一方の途中に（先に説明したメーターをつけた）チューブをつなぎ、更

に途中にコックを取り付け、その先はエネマ用の黒嘴がついているといった、簡単だが確実なシロモノ。

こうして風船を三〇センチ位になるまで大きくして、コックを少し開くと風船の空気が少しずつ彼女のお腹へ入って行く。空気圧が少なくなれば、またポンプを押して風船を大きくすればいいのだ。

仰向けにねかせて、自分のお腹が、よく見えるように高枕まくらにしてやる。時々、スーウ、クルクルクル、クーウ、という音が、お腹のどこかで聞こえるようになると、少しずつ、お腹が膨らんで来る。

「お腹、膨らんで来たわ。今、この辺へ来てる。アハここへ来た。ンーン、つかえてるのかな？ 苦しいわ、あ、通った。プウーッと膨らんでくるう……。ホラ、もうこんなになって！ おへそのまわりが一番、高くなってホラ！ ウーン、苦しい。少し痛いわ。六カ月位になった？ あなたの入れてる空気で私、膨らんでるのネ！ エエ、嬉しいわ。いいわ、いいわあ！ もっと空気入れて！ もっと、もっと！」

と言う彼女を、なだめて、黒嘴を、つつと抜いて止め栓をする。この止め栓は、ピンポン玉位のプラスチック球で、中に純金の小さな鈴や球が、どんな角度になっても中心へ来るように吊ってあるのだ。ピクピクしているピンクの可愛いアヌスの周りを、よくクリームで、くるんでおいて、球でスポツと栓をする。

「アッ、何を、何を入れたの？ ネエ、何を入れ……」

「シート、静かにして！ お尻を動かしてごらん。ソラ、聞こえるだろ？ ホラ……」

聞こえるのだ。かすかに、かすかに澄んだ音が、チリ、チリ、チリリリ……と。

遠くで鳴く鈴虫の音よりも、かそけく愛らしい音が、毬子の丸々とした双丘のふもとで、かすかに、ハッキリと鳴っている。

説明を聞いて毬子が目を閉じて、その音に酔ってる間に、私は次の準備をする。

私は、プレイに新しい道具を使う時は、前以ての説明は殆ど、しない。何を、どうされるのか分からない不安が期待となって、より激しく彼女を、燃え上がらせることを知っているからだ。（あなたは、どうしてますか？）

次の空気責めは子宮さんだ。我々の赤ん坊が入ることは決してない所へ、私の愛の空気を入れて膨らしてやろうとしているのだ。

出産したことがある女性は、妊娠そのものを「楽しい事」とは感じない。最初の頃のおのムカムカするツワリの期間、そして、だんだん大きくなってくるお腹の重さと圧迫感。足が、しびれる程の重さ。試しに、あなたもやってごらんなさい。お腹の前へ、ビニール袋でも張りつけて四〇〇〇C程、水を入れて歩いてみれば大体、近い感じが分かりますから。

そして最後に、出産時の大きな不安……等のため、母となる喜びとは別に、アア、ヤダナアという気持は、いつわりのないところです。

その点、子供を生んだことのない22才の人形妻は、妊娠に対するユーウツ感覚は0に近く、ただ私のために、お腹を膨らすということだけで燃え上がっているのだ。

子宮さんへ空気を入れる場合、どの記事でも、先ずゴム風船を入れるのは、なぜだろうと気になってたが、実験してみても

かった。

どこからエア洩れがして充分、膨らまないのと、折角、入れた空気が、すぐプシュプシュと出てしまうのだ。（それとも医学的に何か人体に悪い影響でもあるのだろうか？ 経験の深い読者で、ご存知の方は教えて下さい）

何だ、かだと言ってる内に準備も出来た。一寸、細工して、先っちょに弁を取り付けたゴムのコケシに、クリームを、たっぷりつけて、コンバンワと訪問させる。毬子の夢見る瞳が、パッと現実に返る。

「サア、毬子！ ここからも空気を入れて、お腹を、もっともって膨らして上げるヨ」

ほっと深い息をついて、瞳が、けぶるように淡々とした感じになるのは、もう、その言葉だけで燃え始めたからだろう。風船を、さつきより、もっと大きくして、チューブをコケシに絡ぎ、静かにコックを開いてゆく。メーターの赤い針が、ふるえながら動いて、さつきからの空気浚腸でフックラと上の方が盛り上がっていたお腹が今度は下の方が膨らみ始め、少しずつ少しずつ、膨らみを増して行く丸みは、何物にも比べる、すべのない美しさだった。

次第々々に、お腹が妊娠独得の形になってくるにつれて、彼女の顔に時々苦痛の表情が走る。「苦悦」という言葉があるかどうか知らないが、細い眉根に苦しみの線を、きざみ、うるんだ瞳に長いマツゲがふるえ、半ば開いた、つぼみのような口は、苦しさ喜びの言葉を、息苦しく切れ切れに喘ぎつづける。少しずつ少しずつ、お腹は膨み、やがて七カ月位になったので、始めのことでもあるし、

大事を取って、ここでコックを閉じる。

空気流腸だけでも、子宮送空だけでも、こうは膨らまない。空気流腸だけで、これ位膨らすと、苦痛が先だってプレイにならないし、子宮注空では、ある程度以上になると大きく息をただけで空気がぬけてしまう。両方のバランスを、もっとうまく取れば、

これ以上に大きく膨らすことも出来るんじゃないだろうか？

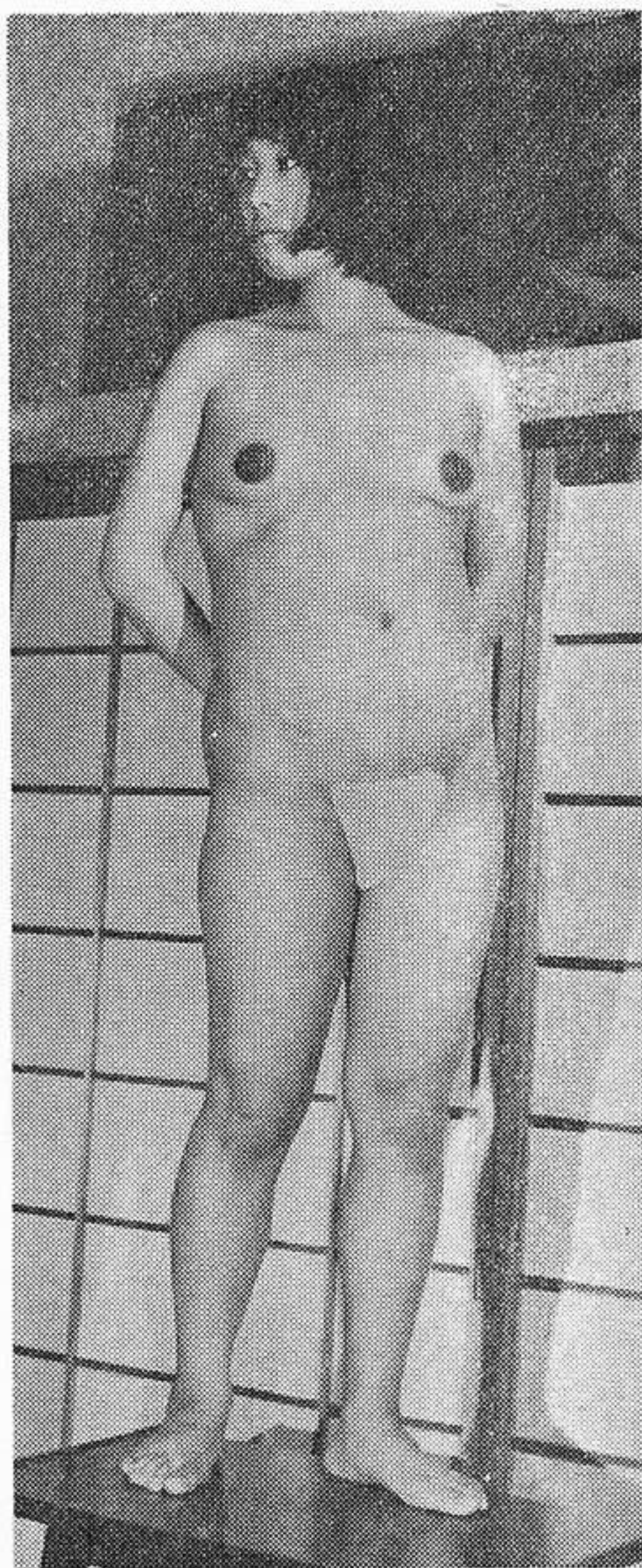
苦しさからいうと、子宮注空の方が楽なのは、女性の体の中で一番、痛感神経の少ないのがこの膈と子宮関係だからだろう。

「苦しいか？ でも空気、抜いてやらないヨ」

「少し出して欲しいわ。とても苦しいのヨ。胸が圧されて、息が、しにくい。肩で息、してるのヨ。お腹も、あちこち、痛いわ。でもいいわあ。こんなに、お腹、膨らんで。あなたの、赤ちゃんヨ。私空気妊娠したのね。すてきよ、嬉しいわ。ホラ、こーんなに大きいわ」

コケシを残したままで、そっとチューブを外し、プラスチックの筒をコケシの中へ入れる。これにも、純金の鈴と銀の鈴が吊ってあるのだ。

「さあ、立ってごらん。ゆっくりと起き上がって。そっとね、そお



—富田由美子—

っとね」

「ワァ！ 立つと、よけいに、お腹、大きくなるわ！ スゴイ、スゴイ！」

寝てるときは横にも広がってたお腹が、立つと前にボンと、せり出して、見事な膨らみのカーブを見せている。

「サ、腰を振ってみてごらん。お尻を動かすんだ。フラダンスのようにな！」

チリリ、チリリと、かすかな音が小暗い室に響き、暖炉の灯りに映える空気妊婦の楽しそうな表情に、私も彼女も、強い妊婦マニアであることを、あらためて認識した。

本当の妊婦のように両手で脇腹を、さすっては、苦しい、苦しいと言いながらも、楽しそうに室の中を、ゆっくり歩き廻る毬子の、大きく膨れたお腹に、私は限らない愛と、憎い程の愛を同時に感じ

—中 河 恵 子—



た。その内に風船妊婦の逆さ吊りをしてやろうと、秘かに心で舌なめずりして、毬子にニッコリ笑ってやった。

「息がしにくい」と言うので、少しだけ空気を抜いてやり、その夜は、お腹の大きい毬子を抱いて寝た。膨らんだ、お腹を、すりよせて甘える彼女を、この世の最も愛しい人と感じながら眠ったら、空

気を入れすぎて浮き上がり、空中をフワフワ泳いで逃げるのを追っかけるという楽しい夢を見た。チリ、チリ、リリリと鈴が鳴ってたように思うのは、夢現で彼女が、お尻を動かしていたからだろう。

この時、以来、我々にとって空気妊娠は、かかせぬプレイとなった。普通、浣腸——縛りの大量浣腸——空気妊娠。といったのがワンコースとなり、時々組み交えて、たまゆらの逢瀬を楽しむのだった。

空気の量も、始めの内は二〇〇〇CC程で、もうパンクするの、苦しいの、といていたのが、最近では、空気浣腸が二五〇〇CC、空気妊娠が六〇〇CC、計三一〇〇CCの空気が、彼女の白く柔らかなお腹を、大きなゴム風船のように膨らすようになった。大量浣腸の時は四〇〇〇CCまで温水を入れたことも度々あるが、空気なら、どうなんだろう？ パンク寸前の医学的リミットぎりぎりの限界まで膨らしてみたい。もちろん彼女には知らせずに……（どなたか、ご存知の方は、サロンか読者通信でも知らせて下さい）

変わった新しいことをしようとすると、口では、いつもイヤヤをしながら、体はケッコウ協力的な人形妻として毬子は、だんだん完成されて来た。

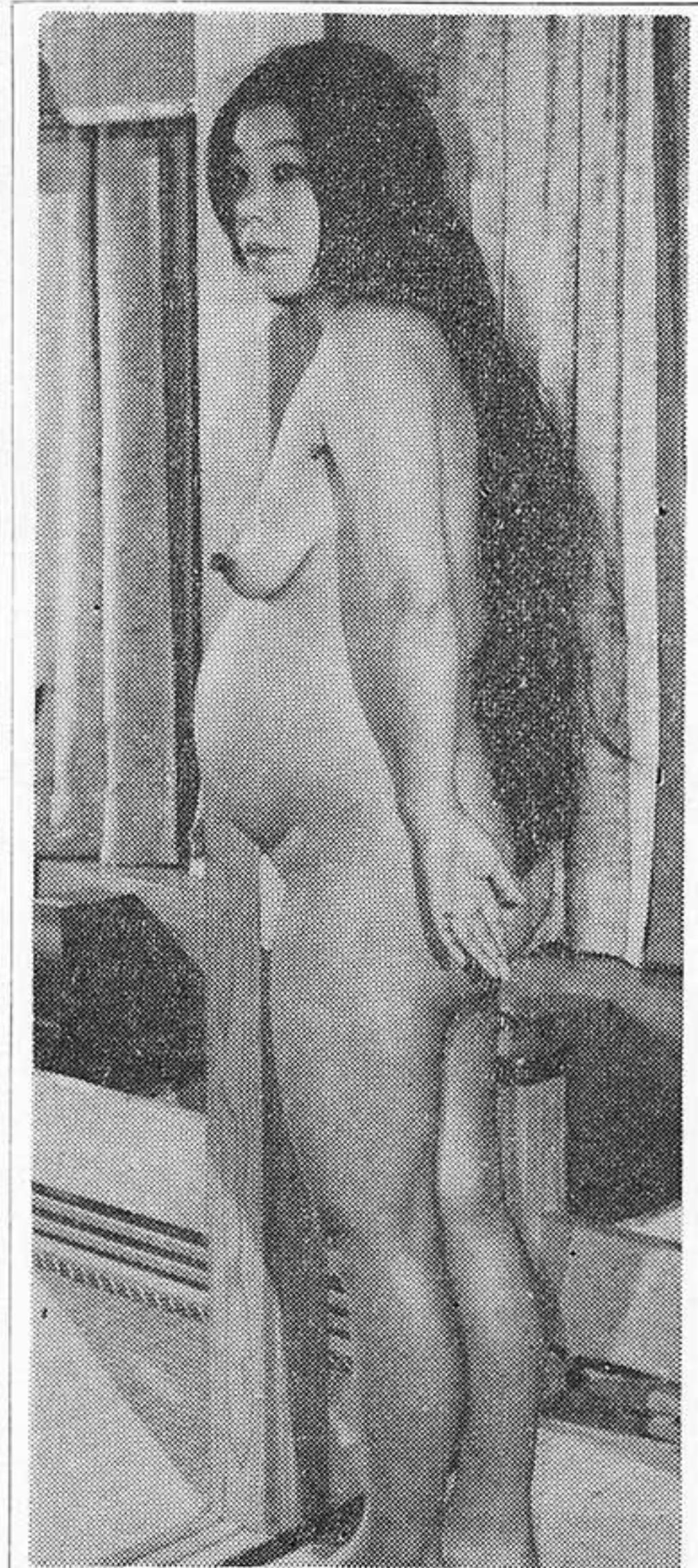
その毬子が今日、反抗した！ 空気が抜けないようにした止め栓を、私の許しもなく、はずしたのだ。彼女はクシャミをしたら飛び出した、と言い張るのだが、私には、そんなことは、どうでもいい。待っていたお仕置のチャンスなんだから！

私の許しなく、止め栓を外した上に反抗的な言葉を吐いた。と云う理由で彼女を、裸のまま庭に引っぱり出し、赤いナイロンロープで両手を高く頭の上で縛り、杉の大木の太枝にかけて、爪先立ちになるまで引き上げてやった。夕日の赤さを映すまでもなく、身体中、真赤になり「いやいや、恥かしいわ。許して、かにんして」と、か細い声で哀願するのも聞こえない顔。もちろん抜けた空気は、しっかり追加する。かなりしぼんでペツタリしていたお腹が、再び満々と膨らんで来て、空気妊娠の風船腹になってくる。

初夏の暖さのせいか、膨満の苦しさを、こらえるためか、細かい汗の玉が、ぬめぬめと光る丸いお腹が、それ自体、一つの生き物のように動き、輝き、息づく。ハアッ、ハアッと荒く短い息が、空気に押しひしがれた胸の苦しさを現わし、満々と張りつめるまで空気を入れて、しっかり止め栓をする。

「サア、お仕置だぞ」と言う、切なげな顔を、こちらに向け、うるむ瞳が、吊るして、膨らして、まだ他に？ と問いかける。

今までののは勝手に栓を抜いた罰。これからは反抗した罰。と勝手な理由をつけて、かくしもってた羽ぼうきで、お尻の辺りから脇腹へかけて、くすぐると、アアアッと激しく腰を振る。その度に、かすかなチリリ、チリリリ、と澄んだ音を発し、もだえ、喘ぎ、ゆれ



—福井桃子—

はずむ。涙を流して、カンニンシテと身体を、くねらせる彼女の風船腹の、一番、高くなってる所を指先で弾く。ポウン、ポウンという、温かく明るい音と、金属的な鋭い鈴の音が、木々のざわめきと谷の方でする、せせらぎの音に相まって、小さなシンフォニーを奏でる中に夕日は、ますます赤く、木立は次第に暗さを加え、その内にクッキリと際立って目立つ白い裸身に、「しばらく、そのままでもいいよ」と言い残して、室に向かった。

私達の場合、肉体関係と流腸関係と、どっちが先だったんだろう？ 殆ど同時に始まったように思うが、彼女の夫が官庁関係だから、というのも、私の夫が博物館の館長だったというのも、シャレにはならないナ。

私、たかはらかおる高原薫。三十七才。未亡人。インテリアデザイナー。男兄弟の中で育ったせい、男っぽさには自信あり、男性には興

—木戸悦子—



味ゼロ。気が向けば、男装で女の子をハントに行くこともあるが、見破られたことはなく、毬子も、その一人だが、その時になって他の女の子程もビックリしなかったのは、性格的なものだったろうか？ 始めの頃、彼女とホテルへ行くのに、入るときは男、出る時に、ついすっかりして女で出て、案内のオバサンをビックリさせたこともあるが、去年、六甲のオリエンタルホテルの近くの祖父の別荘が私の物になってからは、もうそんなことはしない。この別荘は、いずれ紹介したいが、小さいくせに、いろんな仕掛けがあり、床の間の下の隠し戸棚から、祖

父の筆跡の「佐渡日記」を見つけ、祖父が明治のサド男だったことを知ったとき隔世遺伝で私に伝わったんだと思うと、祖父のお墨付が許状でももらったように思えて嬉しくなり、毬子を喜びの中に失神させる程責めぬいて、彼女に、永い出張から帰ってきた夫に、もう一寸で縄目の跡を見つかりそうになり困ったと、次に逢ったときに言われ、その時は一寸、ほんの一寸だけ、悪いことをしたような気になった。

暮れ悩む初夏の日も、ようやく、かげり、音がしないのが不思議な位に燃え立つ夕焼を背景に、梢だけを苺に染めて黒々と立ち並ぶ木々の中の杉の大木の横枝に、真赤なロープで吊るされた毬子の裸身が、辺りに迫る薄暮の中で、ひときわ白く、空気妊娠の大きなお腹が、まぶしい程の美しさを見せている。

胸をつき上げるお腹の膨らみが、九十二センチの双膨を上下させ、切なく早い悦楽の吐息が、梢を渡る夕風の音に、くぐもるまで、このままに、しといてやろう。

迷い螢が一つ、ひくく木立を横切るのを見ながら、私は次のプレイのため、山形県で特注して造った、大きな変型画ローソクを何本も、何本も取り出して、机の上に、ゆっくりと並べ始めた……。

特訓俵締め

一等女囚山本百合子は、東館に来て既に何回目かの生理を経験した。すでに記した通りこの国で開発された薬品は、女性の月経に伴う症状を副作用なく最少限度にするという点で、きわめて優れた効果をあげている。だから、出血なども一日で済んでしまうし、量も少なかった。それで随分と楽なのだけれど、それにしても、人に隠すことの出来ないのは、百合子にとって羞恥の極みであったといってい

い。

昼間、和服で過ごしているときは、どうということもないが、寝る時になると容赦なく全裸に剥かれて、大の字なりに縛りつけられてしまうので、嫌も応もなく肌を、あからさまにせざるを得ない（第46回参照）。その上係の女中（お三）が正座して不寝番についているから、一晩中、その視線に曝されていなければならぬ。

だが、人間に与えられた、神の恵みである忘却と適応は、きわめて徐々ではあったけれども、少しずつ百合子を救ってくれている。

すでに、彼女は不寝番を側にして眠ることが出来たし、それに小水をとってもらうことも、大して恥かしさを感じなくなりはじめていた。手足をひろげたまま、蒲団の上に固定されている夜は、そうでもしなかったら、シートを濡らしてしまう他、なかったからでもある。

だから、柏木の後任として東館をとり仕切ることになった明石の局（伊原直子）が、突然、寝室に入ってきたときも、百合子はウトウトしはじめていたのである。



第五十八回

「もう終わったようね」

ネットリした声が耳に入って、百合子はハッと醒めた。ベッドに縛りつけられた不自由な体をひねって、無理に首をあげてみると、下半身に近々と寄せられている明石の局の顔があった。

不寝番のお三はというと、畳の上に額をすりつけるようにして平伏している。軍人の位でいえば少佐に相当するお三であっても、この東館では最下級であり、将官に当たる一品の年寄の前では、兵卒のように小さくなるしかない。その様子は、隔絶する地位を如実に表わしていた。

膝をすばめようとしても開ききった足首は

前号まで「秘密裸女王国の独裁主、有明は世界中から誘拐蒐集した数千の美女に君臨し、それに畜従隷従を強制している。彼女等は、その材質に応じて五段七階級に分類され、巧妙な統制管理を受けている。山本百合子は、その素晴らしい材質の故に一等扱いで入国したから、一般の女囚たちが受ける苦難を未だ体験していない。第一、有明は、まだ手も触れていないのである。しかし、罨は徐々に、ちぢまり、彼女の心も不思議に有明の方へ傾斜しはじめてきた。」

練絹でくくられていて、いたずらにモジモジするばかりだった。所詮は、どうにもならないのに、と思うと、目の前が暗くなるように恥かしい。全身が紅を散らしたように赤く染まった。

「ウッ……」

次の瞬間、思わず齒噛みして、つき上げて来た不快感を、こらえる。タンポンを、いきなり引き抜かれたからである。なる程、さっき入浴したあとで交換してもらったときは、まだ、うっすらと血がにじんでいたのが、今度のは真っ白だった。

「今夜から、いよいよ特別のトレーニングに入ります。いいですね」

いいですね、もないものだ。いやだといったところで、どうせやることは、やってしまいうくせに——と腹立たしく思っではみても、ネットリと、からみつく明石の声は不気味に彼女を怯えさせるばかりで、それを口に出す勇気を萎ませてしまう。

その恐怖心で、キュッとした柔らかい肌に、再び何かが、サッと襲ってきたから、たまらない。

「ア—ッ」

悲鳴が口を突いて、ほとばしった。もう恥も外聞もなく手足をばたばたさせて、なんとかして拘束から逃がれようと、もがくけれども例によって、それは、はかなく、無駄な抵抗でしかない。

そうこうしているうちに、彼女は不安と不快感をもたらしている異物が、体内で段々ふくれ出すのを感じた。

「イヤッ、イヤですッ。はやく、はやく、とって。お願い……」

必死に哀願する彼女を、困ったように見つめながら、明石がいった。

「あなたは、マスターのお気に召す、お身体になるように、もっともって磨きをかけて頂かねばなりませんのよ。それで今夜から、もう一つのカリキュラムが始まったのです」

異物が途方もなく大きくなったように百合子には感じられた。汚されたことのない乙女にとっては、その衝撃は想像を絶していたのである。動転した彼女は、疲れきった頭を必死に持ちあげて、自分に加えられている暴力の原因を見きわめようとした。

「アア……」

百合子は絶望のあまり、声を吞んで再び頭

を落としてしまった。

彼女の目に映ったのは、直径20センチばかりの真赤なゴム球であった。しかもそれが、パンパンに、ふくれ上がっていたのである。

その先が、彼女を動転させているものに連通されていることは明らかであった。

確かに、滑稽な感じを呼び起こすような光景だった。そして、滑稽であればある程、百合子の自尊心が傷つき、踏みにじられることを意味していた。

屈辱にたたきのめされたように、固く閉じ合わされた彼女の瞼の間から、大きな泪の粒が滲み出ていた。

だが、いくら目をつぶったところで、感覚を消すことはできない。それどころか、ともすると、その一点に、神経が集中しがちになる。そして、例のネットリした声が、これも蓋をすることの出来ない彼女の耳に、とび込んでくる。

「あなたの処女のしるしは、マスターによってのみ、破られるべきものです。ですから、そのときがくるまで、大切に残しておかなければなりません」

百合子は、ちぢみ上がる思いで明石の言葉に聞き入っていた。耳を掩おおいたくなる程、怖

いけれども、これから、どんなことになるのかという危惧の方が、より大きかったからである。

明石の語りが続く。

「正規の鍛練器はこんな、なまやさしいものではないのですけれど、貴女のは特に、しるしを破らないようにセプレートしてあって、細いゴム管でつながてあるんですよ。このゴム球を押すと……」

「ア、アッ」

たちまち百合子が呻いた。辛うじて堪えている衝撃が、一層、大きさを増したからである。

「サア、しっかり力をいれて、いきんでごらんなさい」

恐怖が、彼女の抵抗感を奪った。言う通りしないと、器官を突き破られてしまいはしないかという気がしたからである。

生まれてはじめて百合子は、自分の意思で防御出来るということを知った。事実、空気が移行して、赤いゴムボールが心持ち、大きな目になったのである。

ホッとして、力をゆるめる。

突然、ピーッという音が起こったので、

それこそ百合子は総毛立ってすくんだ。

押し出されていた空気が再び戻ってくる。

その時、連通部に仕込んであった笛が、けたたましい音色を立てたものである。

「しっかり。力をゆるめると笛が鳴るんですよ。もう一度、力を入れてごらんなさい。さあ、早く」

ピーッという不快音が忽ち止んだ。思いがけないその音は、彼女を途方もなく、あわてさせたのである。笛は、空気を送り出す時は鳴らず、ゴム球の空気が圧力で送り返されるときだけ、けたたましく鳴るのである。鳴らせまいとすれば、嫌でも空気と闘いつづけていなければならない。いやでも応でも、百合子は、仕組みを身体で覚えさせられてしまった。

ネットリした声が、又もや、からみついていた。

「お上手ですこと。一生懸命、おやりあそばせ。俗に俵締めという言葉があります。ゴム球の圧力に負けないようにすべてを鍛練していただきたいんです。それは、とっても大事なことですのよ。ここにタコメーターが連動しております。三カ所での圧力変化がグラ

フに残るようになっていきます」

タコメーターから出てくるテープに、奥、中、端の三カ所の圧力が赤、青、黒の三色で表示されている。

歯を喰いしぼりながら、りきみつづける百合子は声もなく、滂沱とした涙を流しつづけていた。

だが、初めての体験である。ゴム球の圧力が掛かった空気を防ぎ続けていることは到底出来ない。ふっと、力がゆるむ。たちまち、笛が鳴る。そんなことを繰り返しているうちに、遂には力尽きて笛を鳴りっ放しにしてしまった。圧力が平衡したところで笛の音が止んだ。

ホッとしたのも束の間だった。

「アッ」

汗で光る百合子の白肌が、たちまちのうちに紅に染まった。

柔らかな羽毛を両手に持った明石が、不意に百合子の乳首を、さすったからである。彼女の乳首は小さく埋れて、桃色の乳贅の中に隠れ込んでいた。

不思議な連鎖反応だった。刺激にのけぞる彼女は、再び、身のすくむような笛を鳴らす



ことになる。

「条件反射も鍛えていたただかなくっちゃね。

さあ、口を開けて……」

ギャグが口一ぱいに押し込まれた。

舌の形をした柔らかく暖かいものが百合子の舌に、からみついた。

「ウー、ウー」

ガッチリした革具が後頭部をまわって留められる。百合子の発声機能は呻き声を出す以外は停止されてしまった。

泣き、呻き、身をよじって、もがく百合子。哀れにも彼女は、娼婦のような技巧を叩き込まれようとしていた。

力尽きようとすれば、あらたな刺激が加えられ、反射的に体を収縮させた。

その間中、人工の舌がチロチロと彼女の口中を這い廻っている。

苦しみ抜きながら、百合子は、今まで経験したことの無い痺れるような感覚が突き通ってくるのを覚えはじめた。

特にそれは、明石の局が、控えのお三にまで動員命令を下して、彼女の柔肌に、いわゆる六所責めをはじめたことによってクライマックスに達した。

屈辱と羞恥で緋い合わされた綱が、次第にドロドロした桃色の情感に染まって行く。

「アッ、アッ。もう、もう、やめてえ……」と、必死で叫んでいるつもりが、ギャグの

ために声とはならぬ。のたうち廻る柔肌に、みるみるうちに大粒の汗が噴き出し、淋漓として白絹のシーツを濡らした。

押したり、ツマンだり、くすぐったり、手を変え品を変えての翻弄に、さしも清純な乙女も、乙女のままでいながら、遂に絶叫とともに、のけぞったのであった。

二 オベの娘

山本百合子に対する特訓が始まったことは彼女にとって運命の日が、いよいよ近づいていることを意味していたけれども、彼女にはそれを覚える余裕すら、なかった。寝る前の一時間が毎日、魔の時刻となった。悪夢のような、ひと時だった。

しかし、注意深く、そして根気よく続けられる特訓のカリキュラムは、彼女を踏みにじりながら、逆に彼女を女として開花させる効果を充分に発揮していた。

固い蕾は開き、木の実は熟した。

例の柏木自尽という異常な事態以来、莫然として、くすぶりつづけていた有明への服従心が、果然として思慕に転回した（第47回参照）。——わたくしにかわって、マスターに

お仕えして下さい。——と遺言して逝った柏木の局のことが、何か重い負い目を受けたように心のシコリになっていたのが、ようやく今なら欣喜雀躍して全身をマスターの足下に投げ出せると思うようになった。

この百合子の心理の転回は、人間の性の不思議さを示している。愛は観念だけで生まれるものではない。肉体が開いた今、凌辱の汚泥の中から、かえって清純な愛蓮華が芽生えたといえよう。

このような山本百合子の変化を有明は逐一報告を受けていた。特に新しい発見は空気圧との闘争を記録したテープだった。それを分析した結果によって、百合子の素晴しさが立証されたからである。今まで、あらゆるデータが、百合子の味方をしてきたけれども、彼女の材質は、これによって完璧となった。しかも、毎日毎晩、磨きをかけられている。

まさに、期して待つべきものであった。

それを、心憎いまで熟知している有明はハヤる欲望をおさえて東館を遠ざかっていた。

有明のお成りがないことが、余程、百合子の胸に、こたえたらしい。日一日と、お成りを待ちこがれることが、かえって思慕の情念

を駆りたてて行くのも、計算された通りだった。

今や、一切を、かなぐり棄てて、百合子是有明の世界に、急角度でノメリ込んで行く。有明の内命によって、東館を訪れたエミー司令こと、星恵美子に対してさえ、彼女は嫉妬を、かくそうとはしなかった。

「恵美子さまは、ほんとにお幸せですわ。だって、いつも、マスターのおそばに、いらっしやるんですもの」

百合子が、こんな話し方をするのを奇異に思っては、いけない。この国で位人臣をきわめた金位準后が、どんな権力を持っているか読者は、すでに御承知の筈だが、当の百合子には全く知らされていなかったからである。

第一、百合子が控え目ながらも、これだけ言ったことさえ、大変な変わり方だった。

苦笑しながら、星が答えた。

「そうねえ。わたくしは本当に幸せですね。でも、あなたにも、すぐその時が来ますわ。しっかり、頑張ってね」

昼間だったから、二人とも美事な和服姿だった。星は自分の好みというより、有明が好んでいる高価な薩摩を、やや、くずれた副で

着こなしていた。それは丁度、花柳の名妓がプライベートな、ひと時を、くつろいでいるといったような姿だった。これに対して百合子の方は、つい先、自分で選んで仕立ててもらった手書き更紗の上布をキチンと着付けて、深窓の令嬢といった気品を遺憾なく表現した。

こうしたコントラストにも拘らず、静かに茶を楽しむ二人の美女は、その類稀^{たぐいまれ}な美しさの故に一幅の名画を見るような調和を示していたのである。

「あなたは人を縛ったことが、ありませんか」

星がポツンと、たずねた。

まるで京都あたりの、由緒正しい茶室にいるような、雰囲気だった。

星は百合子の点前した抹茶を美味しそうに喫したあと、もう一服と所望したあとで、唐突に、言い出したのである。一瞬、百合子の袂紗^{ふくさ}さばきが乱れた。



R.K.

「おや、手順が少し違っておりませんこと」
さりげない星の皮肉が、一層、百合子の胸に、こたえた。茶道は大好きだった。それに自信もあった。資格も、ととのっていた。今

まで、どんなに大きな茶会であっても、しくじった記憶がなかった。総理大臣にもなるだろうといわれている父の関係で内外の貴顕賓客を前に点前した経験も多い。それなのに今は、もろくも手順を狂わせてしまった。

茶の心は静心であるという。禅の境地にも通じるような精神修養が前提として求められている。いかなるものにも、心を動かされてはならない。それなのに——と百合子は口惜しかった。

「もちろん、そんなことを考えてみたこともありませんわ」

吐き出すように言って、彼女は袂紗を、とり直すのであった。

三人の「お三」が呼ばれて広縁に平伏していた。四品といえば、少佐相当の官位である。しかし、奥と、

この東館は五品のお末以下が入れない聖域なので、「お三」が最下級の女官ということになる。

「ご苦勞ですが、着ているものを全部とって

庭に下りて下さい」

命令は絶対だった。そして、躊躇することすら、許されない。三人は口々に、

「かしこまりました」

といって帯を解きはじめた。全部ということとは、素裸になることを意味する。そのため折角、結いあげた高髷さえ、バラバラに、こわして、櫛や笄まで、とってしまふ。

数分のうちに、黒髪を長々と垂らせた美女三人は、茶室前の芝生に、一糸まとわぬ白い肌を曝して、うずくまった。

杉下駄をつっかけて、星と百合子は、その前に歩み寄った。練絹を柔らかく絢った純白の縄の幾束かが、三人の前にバサッと投げ出される。

袂の端を西陣の丸帯にはさんだ星恵美子は美しい二の腕をあらわにして、キュッと一本の縄をシゴいた。

「縛るということは人間の最も原始的な行動の一つです。自分の獲物を逃げないように、あるいは屈服させる手段として、これは人間の歴史とともにあります」

百合子に向かって、やさしく説明しながら動作は正反対に荒々しく、ヒューッと縄を大

きく振った。すると、これが合図でもあるかのように三人の裸女は、

「ありがとうございます。お縄を頂戴いたします」

異口同音、神妙に平伏した。

その一人の黒髪をギュッと掴んで顔を上げさせた星は、

「最初に早縄、つまり捕縛術を、ごらんに入れましょう」

と百合子に声をかけたかと思うと、女の腰を蹴とばして

「逃げなさいッ」

と叫んだ。

パッと裸身が挑躍した。

だが、その時、早くも右手首に手練の縄がからみついていた。それを強く引かれた女はたたらを踏んで、星の手元にタグリ寄せられる。そして、右手首を前から首際に引きつけて、縄を首に一巻きする。それを同時に背中に、ねじりあげた左手首に結び合わせる。

殆ど一瞬の動作であった。裸女がバランスを失って、ドテツと芝生の上に転がったときその両手は、もう完全に緊縛されてしまっていたのである。

「これは早縄の一種で、昔は『早猿結び』と呼んでいました」

手の自由を喪失した女は、起き直ろうとして、もがくけれども、いたずらに足をバタバタさせただけに終わった。星は再び、芝生の上に散らばっている女の髪を、大づかみに握って、エイとばかりに引き起こした。

「ア、ありがとうございます」

あわてて正座した女は額を芝生に、すりつけて礼を言った。背中に、殆ど首のつけ根まで、ねじ上げられた左手首が痛々しかった。

「この右手首を、こうして上から首の後に回しますと、俗にテッポウという縛り方になります」

「ウッ……」

女が齒を、くいしばって、のけぞった。首を巻いていた縄を外されて一旦は楽になった右手首が、今度は肘を振り上げた恰好で背中に折り曲げられ、左手首の方へ、ギュウギュウと引っぱられたからである。

「わたくしたちは、これを『ニオベの娘』とっています。背中に刺さった矢を抜こうとして苦心しているギリシア彫刻を、ご存知ですか」

まるでファッションを解説しているように

冷静な星、エミー司令だった。ところが犠牲にされた、お三の方は、もう息使いも荒く、辛うじて声を立てまいと唇を噛んで、痛みと斗っていたのである。

「この国では両手を前に縛る方式は原則として採用しておりません。そのわけは、前で縛りますと乳房などを隠す効果が出て、屈服感が幾分、薄くなるからです」

といいながら、星は二番目の女の肩に手をかけた。覚悟はしているのだろうが、それでも女はギクリと慄えた。まだ幾分、あどけなさを残した可愛い丸顔に、肉づきのよい肢体が、何か、新鮮な果物のように感じられ

「伝言板」○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会は一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。

○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。

○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

た。特に日本人離れのしたバストの揺れが印象的だった。

「次は乳を縛る方法です」

呆然と突っ立っている山本百合子の前で第二の女は、たちまち、くくられていた。

後から上膊を巻いて、乳の間でアヤをとって脊中で結ぶ。更に二本、夫々左右の肩から前に出して胸縄に、ひっかけて上に絞り上げ再び脊中に戻す。胸縄の一本がブラジャーのように三角に左右の乳房上縁に喰い込むようになる。脊中で一度、結んだ縄は今度は細腰を、ひと回りして、そのついでに、もう一本の胸縄を今度は下へ、引き下げる。豊かな乳房が菱型になった縄目の間にプクンと飛び出してきた。胴脇で両手首がからげられる。最後に双の乳をギリギリと脊中に絞り合やす。

「クウッ」

こらえかねたように女が叫んだ。

「有明本陽蟹横菱」

星が縛り方の名前を呪文のように称えた。

三番目の女は定法通り、「有明本陽三重菱縄」で嚴重に緊縛された。(第27回参照)

鉄砲を脊負った一番目の女は、苦痛のため全身に膏汗を浮かべて喘いでいる。

三人各様の被縛見本を並べて、星は細かに

その要点や効果を説明していった。

「おわかりですか。この国では凡そ三〇種の縛り方が制式化されております。今日のは、手拘束だけですけれど、これに足、その他の部分とのコンビネーションが考えられるわけです」

といいながら、一番目の女に手をかけた。すると、魔法にでもかかったように縄が解けハジかれたように、その右手が跳ねた。

すでに肩のつけ根から痺れて、知覚を喪っているらしい右手を、幾分、楽だったらしい左手でおさえて、その女はガバとばかり平伏した。

「お縄、あ、ありがとうございました」

幽かな声が聞こえた。こんな場合でも、お礼を申し上げるのが作法だった。

ほどこいたばかりの紐の束を百合子の方に差し出しながら、星がいった。

「いかがですか。今度は、あなたの番です。ご自分で、縛ってご覧あそばせ」

やさしい言葉使いだったが、嫌とはいわせない重圧感があった。

百合子は、オドオドと紐を受け取った。それは女の膏汗でベタベタになり、紐とは思えない程の重さだった。

(未完)



カット・マエダヒオミ

——セ・ミ・ド・キ・ュ・メ・ン・ト——

あたしの演じた

LIVE・SHOW

長谷田真知子

車の止まる音がして、玄関のブザーが鳴ったとたん、あたし、どきっとしちゃったんです。朝、出勤する主人に「今夜だぜ。ちゃんと準備しておくんだ。いまさら嫌とは、いわせないぜ」

何度も念を押されたんです。とっても、いやらしくって、最高に恥かしいこと。主人が連れてくる二人のお客に、一年がかりで仕込まれたライブ・ショーを、ご披露しなきゃならないんです。

でも、本場の北欧やアメリカのようにメイキャラブするわけじゃないんです。それなら

主人も一緒だから、あたし、むしろ気が楽なんです。今夜、あたしがやってみせるライブ・ショーはプレイの珍芸——つまりわかりやすくいうと、あの「花電車」のことなんです。「フッフッフ。プロ顔負けの「花電車」も、俺一人では、もったいないからな。今夜は真知子の初舞台。ご熱演を期待してますぜ」

主人は、こんなひどい捨台詞を残して出勤しちゃったんです。露悪趣味もいいところ。あたし、その神経が、わかんないんです。

「なぜ、こんなことを承知したんだろう」

一日中、悩んだんです。いっそ実家へ避難

しちゃおうと、外出の支度までしたんです。でも主人が、どんなに怒るかと思うと……とうとう、あきらめて、いいつけどおり、する決心をしたんです。あたしって、やっぱり相당한「M」なんです。

美容室でセットしてもらってるときも、メーキャップしてもらってるときも、恥かしいシーンが、つぎつぎと、浮かんできて、一人でに上気してしまっんです。

「真知子さん、変ね。とっても興奮してるみたい……」

美容院の先生に、顔をのぞき込まれたとき

は、心の中を見通されたような気がして、真っ赤になっちゃったんです。

あたし、結婚するまでモデルをしてたんです。下着専門……あまり自慢できないけれども、いまでもフェイスとプロポーションは自信があるんです。165センチで51キロ。B92、W60、H95。体の線は、まだ、ちっとも崩れてないんです。新婚当時、主人はネコをかぶってたみたいで、ごく平凡なノーマルなセックスだったのに、そのうちに本性を現わしたんです。あたし、オーラルを強いられ、アナルまで使われて……。それに一年ばかり前からは、毎日のように「花電車」のけいこまでやらされるようになったんです。今じゃ、あたしたち、まるでセックス・アニマルみたい……やっとな一人前になったと思ったら、「待ってました……」

とばかり、今夜のような大変な約束、させられちゃったんです。

でも、始めて話を持ち出されたとき、あたし、はっきり断わったんです。そしたら、「ああ、そうか。それじゃOKするまで、俺ストライキするぜ」

主人たら、あたしのウィークポイントを、

ちゃんとして知っていて、こんな憎たらしいこと、いうんです。一週間もシャット・オフされちゃうと、あたし堪まんなくなるんです。

「ねえ、お願い。ねえ、ねえったら……」

鼻を鳴らしてブラウジョブ（尺八）攻撃でも思っても、

「俺、別に女には不自由してないんだ」

ぬけぬけと、こんなことって、あたしを突きのけるんです。こんな毎日が二週間も、続いたんです。あたし、ピリオド（メンス）が近づくと、すごく昂まるんです。それでとうとう降参しちゃったんです。

「あたしの知ってる人、絶対いやよ。とっても恥かしいもの」

こんな、いきさつがあって玄関のブザーが鳴ったんです。

「お帰りなさい」

ドアを開けたとたん、あまりひどい主人の仕打ちに、目の前が真っ暗になったんです。あから顔の背の高い外人と、あたしの一番きらいな洪さんが立ってたんです。

「真知子、こちらアメリカからいらっしゃってるエリクソンさん。洪さんの親友なんだ」
あたし、オコリにかかったように体が、ぶ

るぶる震え、主人が、なにをいってるのか、さっぱり、わからなかったんです。

洪さんは主人のポルノ友達で、二度ばかり遊びにきたことがある台湾籍の人なんです。神戸の三宮で大きな中華料理店やモータープールを経営してる、お金持ちなんです。まるで精力のかたまりみたいに脂ぎってて、水商売の女の人を食い散らしてるんです。コックにはめ込んでる三箇の真珠が、たいそうな自慢で、

「わたしとやる女人、みな『忘れられない』いうね。奥さん、一度、試す、どうか？」

なんてエッチなことばかり、いうんです。「奥さん今夜、特別、大変大変、美しいね。わたし楽しみ。もうハード・オンね。ハッハッハ……」

いやらしい目付きで、あたしの全身をなめ回すんです。

「選りに選って、こんな助平、連れてくるなんて……」

あたし、すっかり頭にきちゃったんです。あたしの準備ができるまで、主人たち、スコッチの水割りを飲みながら時間つぶしに外国産のポルノ・フィルムを映写してるんです。

「わたし、やっぱり実物の方、いいね。しかし奥さん、本当やるか？ もし、やらない。わたし、エリクソンさんに面子ないよ」

「大丈夫ですよ。そう、あわてなさんな。ちゃんと因果を含めてあるから……」

主人と洪さんのやりとりが、ふすま越しに聞こえるんです。

あたし、大急ぎでゴム製のデイルド（張り型）やバナナ、ゆで卵やビー玉、ビールのあきびんなどの小道具を用意したんです。あたし、昔、バナナ好きだったんです。でも今は憎らしくって憎らしくって、踏みつぶしてやりたいくらいなんです。最初のころ、バナナ、どうしても切れなかったんです。辛くて悲しい思い出が、あるんです。主人は

「こんな、やわらかいものが切れないのか。不器用にも、ほどがある。いやでも切れるようにしてやる」

バナナに苦しめられて汗びっしょりになってる、あたしにお灸、すえたんです。それも一番、敏感なところに……

「アツ…… アー、アツ……」

あたし、絶叫したんです。もう、無我夢中……。思わずピス（尿）が、噴き出したんで

す。でも体中の力が無意識の間に、一箇所に集中したんです。曲がりなりにも、やっと切れたんです。

「そのコツ、そのコツ。忘れたら、また、お灸だ」

お灸は、言葉では現わせないくらい熱いんです。どんなに歯を食いしばって、がまんしようと思っても、体中から脂汗が流れ、泣き叫んでしまうんです。だから、あたし、お灸すえられるときは、口にガーゼを押し込まれその上から手拭いで、しっかり猿ぐつわ、はめられるんです。そんな、みじめな姿で毎日、バナナと格闘したんです。何度もお灸すえられて……

あたしの場合「バナナ切り」は実を10センチくらいに、ちぎったのを使い、そして3センチくらいのところを、押しつぶすように切って、しぼり出します。いろいろ、人によって違う、やり方があるそうですが、あたしは、3センチくらいのところが一番、強い力が働くんです。でも、ものすごい努力が、いるんです。終わると、ぐちゃぐちゃにつぶれたあたしの匂いの、しみ込んだバナナを、「もったいないから食べる」

と、残らず食べさせるんです。いつも、そうなんです。だから、あたし、バナナ、見るのも、いやになったんです。

「バナナ切り」はピスをもらすので、いつも始める前に、カテーテルで一滴、残さず、しぼり取られるんです。始めは細い5号だったのに主人はだんだん太くして、9号や10号でも使えるようになったんです。でも、やはり灼けるような一種独得の激しい痛みが、体中をジーンと突き抜けるんです。

「もっと細いので、やって……」

「こんなものを痛がってて、一人前になれるか。何事も辛抱、辛抱」

あたしの希望は何一つ、聞いてもらえず、総て主人の思うまま。悲しいけれど、そのくせ、ちょっぴり、うれしい気持ちも、するんです。

無理やり太いカテーテルを使ったのは、やはり、わけがあったんです。ある程度、広かったのを見はからって、タバコを吸う、けいこをさせられたんです。でもホープやハイライトはフィルターの部分が堅いので、涙がこぼれるくらい痛いんです。どんなに責められても、あたし、これだけは、できなかったん

です。でもゴールデンバットや、しんせいなどの両切りタバコは、やわらかくって、いくらかは苦痛が助かるんです。それに煙もよく通るので、火が消えない程度には吸うことができるんです。大きく腹式呼吸をすると、中の空気？　が出たり入ったりするのか「フワッ、フワッ」と煙が出るから不思議なんです。

「花電車」で、あたし、一番、難しかったのは、やっぱり「バナナ切り」と「ビールびん釣り」なんです。この二つが、こなせると、あとは、たいていの珍芸は大丈夫なんです。ゆで卵をすごい力で、はね飛ばして、2メートルほど前に置かれた、お人形を倒す「射的遊び」や、タコ糸を使った「リング割り」あたし、いろいろ、やれるんです。

「俺、ヒモになって真知子の実演で食っていいか」

主人は、こんな悪い冗談を、いうんです。

「いやーん。あたし、こんな恥かしいこと人にみせるくらいなら、死んじゃう」

「だけど、真知子、素質があったんだ。もともと名器だったし……」

おだてられたり、叱られたり。一年がかり

で調教され、あたし、プロフェッショナルにも負けない珍芸ができるようになったんです。

あたし、この日は主人にいわれたとおり、美容院でヘア・スタイルを、ぐっと若向きに変えたし、わざわざ濃厚なメイクアップまでしてもらったんです。万一そうしては……と朝から2度も流暢したんです。そして全裸になり、太ももに、ぴったりと食い込む黒い網ストッキングを、はいたんです。これが主人の一番、感じるスタイルなんです。鏡をみると、濃いメイクアップのせいで、まるで20歳そこそこ。モデルをしたころの、あたしと、そっくりに見えたんです。なんだか自信もできてきたし、度胸をつけるために飲んだスコッチのストレートも効いて気持ち、ぐっと楽になったんです。

でも胸のどきどきが納まると、2週間もシヤット・オフされてたんですもの、恥かしい珍芸のこと考えると、自然にヘンな気分になってきたんです。いきなり最初から、こんな気分のあたしの裸をオープンするのは、死ぬほど恥かしいんです。ニンフォマニア（女子淫乱症）と思われるんじゃないかって……。あたし、ティッシュできれいにし、ついでに

カテーテルも使ったんです。ゲラン社の香水「夜間飛行」も、たっぷり全身に吹きつけたんです。

主人の合図で、小道具の入ったバッグで、うまく隠して、あたし部屋へ入ったんです。

「花電車」を演じる恥かしい姿を、あたし自身にも見せるため、モデルのころのあたしが使っていた等身大の鏡を、わざわざ納屋から運んできて、正面に立てかけてるんです。その左右に500ワットのフラッド・ランプが一灯ずつ。おまけに洪さんたら、8ミリカメラまで持ち込んでるんです。あたし覚悟は決めたけれど、想像以上に残酷な舞台装置だったんです。あたし、金輪際、してやるものかと思ったんです。

「真知子、どうしたんだ。立て！　立って、よく見てもらうんだ」

さすがに主人もエキサイトして、声が上ずってるんです。

「いや。絶対、いやよ。洪さん、ひどいわ。カメラ、止めてちょうだい」

あたしの顔、いまにも泣き出しそうだったと思うんです。洪さん、案外あっさりと、あきらめたんです。それでも、あたし、絶壁か

ら飛び降りるような気持で、立ち上がったんです。

「オウ、ビュティフル！」

「パイパン、とても可愛いね」

エリクソンさんと洪さん、素頓興な声を、上げたんです。あたし、すっかりシェービングされてるんです。それも1本1本、丹念に抜き取られたんです。もう永久に不毛なんです。

「ねえ、お願い。剃るだけにしてよ。抜かれるの、とっても痛いし、もう生えないと思うと、悲しいわ」

あたし、頼んだんです。でも主人は、自分の思いどおりにならないと口をきかないんです。あたしが痛がるので、一度に抜いてしまふのだけは許してくれたんだけど、調教のたびに数本ずつ、一カ月以上もかかって結局はきれいにされちゃったんです。

あたし、変にもじもじしてると、よけい、みじめになると思ったんです。だから床に腰をつけると、一思いにパツと足を大の字に開いたんです。もう破れかぶれの心境。

「それほど見たいのなら、幾らでも見せてあげるわ」

イメージギャラリー

『華やかでショー』

須坂

旭



っていう気持だったんです。すると不思議に落ちついて、人差し指と中指を逆Vの字にして使うのも、そんなに苦にならなかったんです。でも、ちょっと恥かしかったのは、立って後ろ向きになり、お尻を思いきり突き出す挑発的なポーズを、とらされたときなんです。

「プリーズ、ワイド・オープン！（いっぱい
に開け）」

エリクソンさんが命じたので、あたし、そ

のままのポーズで両手を後ろへ回して、お尻を左右へ、スプリットしたんです。

「奥さん、顔と体、まだ若い若いね。しかしひとところ、年寄りね。よく使っているのと、すぐわかる。わたし、専門家、婦人科ドクターと同じね」

洪さんは、あたしの一番、恥かしいことをズバリ指摘するんです。主人も調子を合わせて、あたしのアヌスを、どんな方法で使いやすくしたか、その調教のプロセスを、得々と説明してるんです。

前後からのオープンが終わると、大きなゴム製のデイルドという手順なんです。

「ちょっと待った。この薬、塗るといいね。これ香港製、値段、高い。大変、大変、効くね。女人、みな泣いて喜ぶ」

洪さんはポケットから「房中宝」と書かれた小さな、びんを出してきたんです。なんでも阿片が主成分で刺激が強すぎるので直接、女性には用いず男性が使用するんだそうです。が、体温で薬がとけ、少しずつ相手に浸透していくんだそうです。

「そうなる女人、狂人になるね。もう、どうにも止まらない」ね。目を回して、腰、抜

ける女人あるよ」

あたし、そんな正体不明の恐ろしい薬、いやなんです。洪さん、しつこく勧めたけれど断わったんです。

他のことは何も考えず、いやらしいことだけ考えて、あたし、夢中でデイルドと格闘したんです。そのあたしの姿が正面の鏡に、よく写ってるんです。それを見てみると、わけなく興奮してきちゃったんです。だからビールびんの上に積み上げた20枚ほどの10円銅貨も、すーっと一息に片づけることができちゃったんです。

「そのお金、べつのところから出すのことできるか？ もし、できる、100万円でも、あげる。アッハッハッハ……」

洪さん、ことごとくにひどいヤジを飛ばしてからかうんです。

「そんな器用な事、できるはずないでしょ」あたし、すっかり頭にきて、お金、全部パツと吐き出したんです。本当はオープンして1枚、1枚、ゆっくりと見せなきゃ、いけないんです。

「射的遊び」に移ったとき、洪さんの鼻をねらって、思いつき、ゆで卵をシュートして

やったんです。そのとき自然に、そそうをした、ふりをしてピスも飛ばしてやろうと思ったけれど、カテーテルで、しぼり取ってるので、残念ながら出ないんです。それに卵の弾丸も2メートルほど離れていたし、洪さん、用心してたので、

「パシッ」

と両手で掴み捕りされちゃったんです。

「オウ！ ナイス・キャッチ」

主人、あたしの気持も知らないで、エリクソンさんと、いっしょになって、拍手喝采するんです。

それから、あたし、ティッシュを使って、いったん、きれいにしたんです。滑ると、どんなに力を入れてもビールのあきびんの「びん釣り」ができません。バナナ切り「も、そうなんです。でも「射的遊び」や「硬貨拾い」はこの反対で、きれいにしないほうが、うまく運ぶんです。

「びん釣り」は単純で、やさしそうに見えても本当は大変な力があるんです。まず両足を左右へ大きく開き、大腿部が水平になるような極端なポーズを、とるんです。そして腰を沈めて、びんの口の少し出張った栓の、はま

る部分を狙うんです。手をにぎりしめ、足の拇指を折れるほど曲げて、体中の力を集中しながら、そろそろと腰を浮かすんです。無理なポーズをとらされてるから、大ももの筋肉がひきつって、ぶるぶる痙攣するときもあるんです。

あたし、最初は、びんの口に美濃紙を巻きつけ、滑らないようにして練習させられたんです。時間にして、たった10秒ほど釣り上げるだけなんです。バナナは練習を重ね、コツがわかると、ほとんど一瞬の力でちぎることができるようです。でも「びん釣り」は、コツよりも、ものをいうのは力なんです。

正面の鏡には息をつめ、こわいほど真剣なあたしの顔と、その顔からは、とても想像できないような、卑猥なポーズが写ってるんです。ようやく務め上げ、汗びっしょりで、肩で荒い息をしている、あたしに、主人は冷たい、おしぼりを渡してくれたんです。エッチな洪さんも、あたしの気迫に押されて、今度ばかりはカタズをのんで見守ってたんです。

このあと、首尾よく「バナナ切り」や「タバコ」を、すませ、「ビー玉拾い」を、やっただけです。床に、ばらまかれたビー玉を手を

使わず、床運動をやる女子体操選手や、アクロバットのダンサーのようなポーズで、片づけていくんです。洪さんは、また意地悪して後ろに回り、のぞき込むんです。

「この眺め、一番いい。最高、最高。奥さん恥かしがって、赤くなる。わたし、そのことで、大変、興奮するね」

すっかり悦に入って、わざと卑猥な言葉を機関銃のように連発するんです。そればかりか、

「この掃除器なかなか上等ね。奥は千畳敷ね」

次から次へと、まいていくんです。あたしせいぜい10箇所くらいで切り上げるつもりだったのに、もう、ズシリと感じるくらい拾わされたんです。

「奥さん、掃除器、振る、振るね。音するとまだ大丈夫ね」

あたしの、すぐそばへ耳を寄せてくるんです。

あたし、わざと洪さんを無視して、

「一つ、二つ、三つ……」

と数えながら手を使わず、戻し出したんです。全部で21箇所……エリクソンさんも、

「オウ。トエニイワン、イツツ・ア・ワンダ

フル・スーパー・カント」

目を丸くして驚いてるんです。

「リング割り」も、やったんです。タコ糸の一方の先にサニタリイ・タンポンを、くくりつけたのが、ナイフ代りになるんです、伸ばした糸でリングの真ん中を、ぐるりと一巻きして、糸の端を主人に持ってもらうんです。

あたし中腰になって綱引きのように両方で引っ張り合いをやるんです。ピンと張った糸がだんだんリングに喰い込んで

「ポカッ」と真っ二つに割れるんです。

フィナーレは「お習字」で飾ったんです。

もちろん、手は使わずに、太い筆で、お尻を振って思いきりエッチなことを書いて……。

あたし、意外におとなしいエリクソンさんを挑発してやろうと英語で

「SUCK・ME&FUCK・ME」（あた

しを、しゃぶって！ あたしを、やって！）

と書いたんです。こんなエッチなこと、日

本語では、とても書けないけれど、英語だったら、あまり抵抗感、ないんです。エリクソン、ものすごくエキサイトして、いきなりスラックスのファスナーを降ろすと、

「キス・マイ・コック」

ですって……。あたし、びっくりしちゃったんです。主人あわてて「ジャスト・ア・ミニッツ・プリーズ」

すっかり、うろたえてるんです。

総てが終わってしまうと、あたし、さすがに、がっくりきたんです。「花電車」って、見てる男の人たちは、最高に楽しいと思うんです。でも、やってる女性にとっては、本当に苛酷な重労働なんです。それに女性の人格人間性を、めっちゃめっちゃにしまわうんですもの……。暴力団の食いのものにされて、一日何回も、こんな、みじめなショーを強いられる人って、本当に可哀そう……。一人前になるまでには、ずいぶん、いじめ抜かれてるだろうし、ピリオドのときだって休ませてもらえないんじゃないか？　なんて、あたしをそんな境遇の女性に置きかえ、いろんな恥かしいエマジネーションにふけることもあるんです。主人のお仕込みで、あたし、すっかり「M」にされちゃったみたい……。

あたし、バスを使って汗を洗い流し、やっと人心地がついたんです。改めて、お化粧している、隣の部屋の主人たち、勝手なことを、いい合って、また飲み始めてるんです。

エリクソンさんは、あたしを「グレート・エンターティナー」

だと、ベタほめ。そして

「ショーも、すばらしかったが、あれだけのフェイスと、プロポーションを持ったセックス・ショーの女は、いないだろう」

なんてオーバーな、お世辞をいってるんです。主人も調子にのせられて、

「もっともっと、仕込み上げますよ。今度は基石の選別を、やらせたいんです。白といえ白、黒といえ黒。こちらの命令どおりの石が出せるように……。なあに、黒石と白石は材質が全然ちがうから、その感触を体で覚えさせるんです」

新しいアイデアを披露してるんです。とにかく、主人たら

「会社での仕事中は、むろんのこと、夜、熟睡するときでもセックスのことだけを考えてるんだ」

なんて平気で豪語する人で、あたしもうどうしようもないんです。きっと明日から、さっそく「基石の選別」という新しいレパートリーと取り組まされるにちがいないんです。「カンが悪い！　白を出せといったろう。白

を……何度いったら、わかるんだ」

あたしの耳には、はや主人の叱声まで聞こえてくるんです。

いままで沈黙していた洪さんが、急に上ずった声で、しゃべり始めたんです。

「あなた、妻のアスホール広げた。いつも使った声で、三人であそぶのこと、どうだ？」

あたし、きつと誰かが、いい出すんじゃないかしら……と考えてたんです。その予感があまり、ぴったり当たったので、びっくりしたんです。一人の女性を三人の男性が同時に楽しむ……。『トリプル・スクール』とか『フーサム・ウェイ』とか、いわれ、欧米の売春婦でさえ、よほどペイしないと応じないというハレンチなセックスなんです。

「どう？　あなたの妻、あまり、喜びすぎ、目を回す。このこと心配か？」

洪さん、いきり立って主人を、けしかけてるんです。あたしは主人がどう答えるか……ハラハラしちゃって……もう気が気じゃなかったんです。そして、たとえ、どういわれようと、こればかりは絶対、断わろうと決心したんです。あんまり、あたしが、みじめなものですもの……。

(おわり)

と〔ペン〕のルポルタージュ

だ眸^{ひとみ}の奥^{おく}にあるもの

生からOLへ、前田真知子の巻

つか
塚

もと
本

てつ
鉄

ぞう
三

私が始めて、女子大生だという前田真知子に逢ったときは、この口かずの少ないポーカ―フェイスの女性がマゾの性癖を持っているなどとは考えられなかった。

清^{せい}純^{じゆん}
なる女^{ひと}

白いシャツの襟をだして紺のスーツを、すらりとした長身に着こなしているスタイルはまさしく、彼女の言う通り、女子大生そのものであった。

ぱっちりとした明眸^{めいぼう}の澄みきっていることは、まことに、微塵の汚れも知らぬげで、世の中をさけての学園育ちということが、その





—〔カメラ〕—

す
澄ん

＜女子大＞

容貌やら言葉遣いから十分、窺えた。

ストリップパーやピンク女優を、俄仕立の女学生や女子大生に、でっち上げるのは、当世流行しているのだが、この前田真知子こそは真正銘の学生であった。

東京から京都へ見物に来た、その暇を利用しての撮影ということで、本当にあわただしい日課ではあったが、それだけに、私も、その限られた時間を最高に活用すべく、短時間の間に、S的意欲を十分に満足させた。

嘗て、万国博見物にきた米国女性のシーラケニーにしたって、在日期间が制約されているところへもってきて、スケジュールが、ぎっしり詰まっていたので、正味の撮影時間といったら極めて短かった。それだけに、その与えられた時間を、最大限に活用して、充分に効果を挙げたと思うが只、惜しむらくは、日や時間をかけて、心や身体の動

きを、その変化と共に、十分、観察出来ないことであった。

前田真知子にしても、彼女が東京在住の女子大生であるということからして、一回限りの入緊縛と撮影Vのチャンスだと考えていたので、そのつもりで、縄とカメラを持って立ち向かったのだった。

洋服を脱いだ彼女の裸身を見たとき、その抜けるような白い肌に、私は、まぶしい程の感激を覚えたものである。

立たしてみたときのプロポーションも抜群に素晴らしく、目を奪うものがあったが、先ず第一に、裸身全体から受ける印象が、清純そのものといったムードが溢れていた。

ピンク女優なんかから受ける、あの爛熟しきって脂ぎった女の感じは、いささかもなかった。むしろ稚さすぎるといった未開拓の魅力が、縛りというジャンルの中で、むしろ何か場違いのような感じさえ与えたのだった。

それに、容貌や全体のプロポーションばかりではない。手、足、乳房、お臍、お尻、膝小僧——と、身体各部のどれ一つをとってみても、整いすぎているようで、非の打ちどころが、いささかもないのである。

私は、これれ物でも扱うような気持で、慎

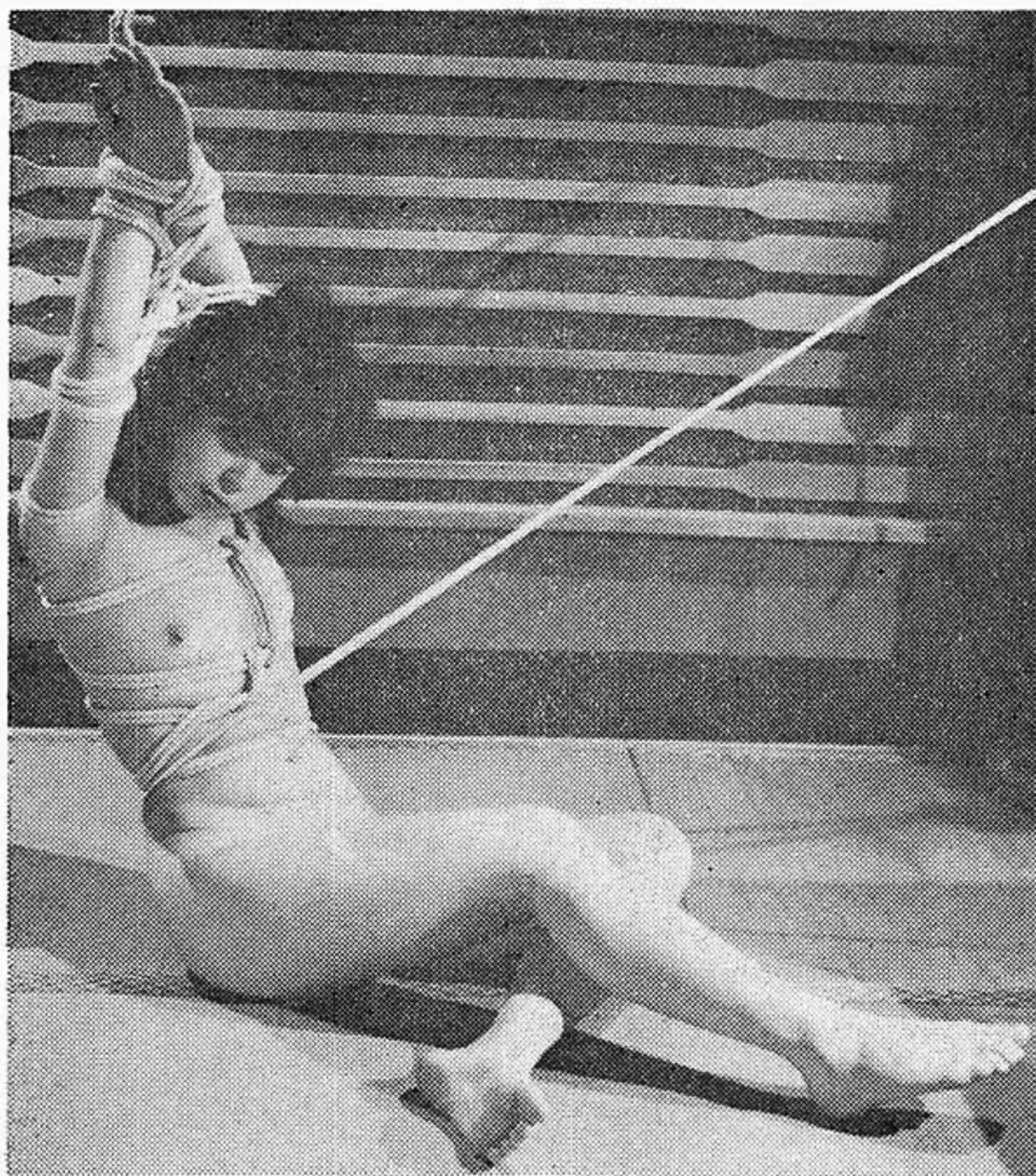
重に縄を掛けていった。

必要なことだけを、ハキハキと答える前田真知子の上品な標準語は、無駄口を叩くというようなことは少しもなく、その洗練された物腰と共に、彼女の育ちがよいことが一目で知れた。

縄は柔らかい肌に、締めすぎくらい、

よく締まった。縛られるということに初めから承知し、それを期待してきている被写体ではあったが、私はなんとなく、うしろめたい気持で、縄目を結ぶ手も、知らず知らず手加減しそうになり勝ちだった。

私のすることを、その澄んだ、ぱっちりとした眸で、じっと見つめられると、いつもだったら、傍若無人に縄を操っている筈の私の手もとも、控え目になり勝ちだった。



美しいもの、清純なもの、高貴なものを汚

し、いじめたいというサジスチックな気持が心の底に淀んでいながら、私は前田真知子に對しては、縄捌きが、もう一つ、活発に運ばなかった。というのも、今日一日、依頼されたまま、緊縛写真を撮ればよい——という安易な気持が、彼女へ肉迫しなかったのかも知

れない。

それが、昭和四十六年一月号のトップに掲載された彼女の「告白」『白い陣痛』を読むに及んで、私の気持も大きく前田真知子へと傾斜されていった。「あれッ、あの彼女が、こんな文章を書くのかな」という軽い驚きの気持と、こんな素晴らしい告白の文章を書く女性だったら、きっと繊細なSMの心を持っているだろうという気持が燃え上がってきた。こんな女性だったら、もう一度、縛ってみたいという好奇心が勃然と湧いてきた。

彼女が、京都という街について、並々ならぬ関心を抱いているということは、私にとっては余り関係のないことではあったが、昭和四十七年四月号に発表になった前田真知子の告白「京都慕情」を読んでみると、縄で緊縛されたいと願うMの心情とは別に、古都を憧れる乙女のペンのリリースズムに、うたれた。

只、単に、縄で縛られたい——とばかり願う女性よりも、このような抒情的で詩情あふれる文章を書ける女性に、やはり何となく、ひかれるのは、人間的な深味を感じるからだろうか。その頃から、誌上にも、清純なM女とも称すべき前田真知子を賛美する文章を、散見するようになった。

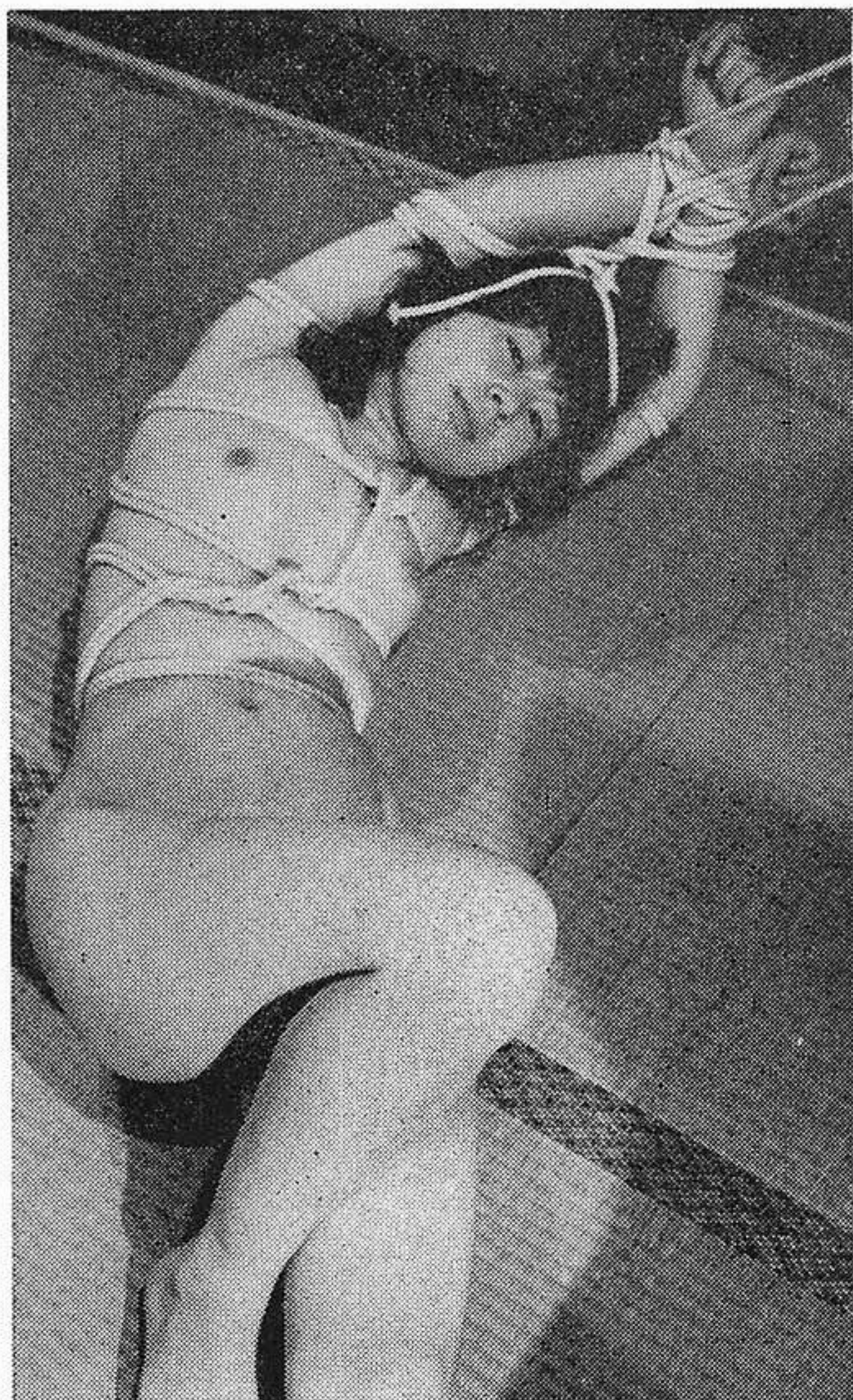
京都を訪ねるという名目で、二回、三回と彼女が上洛する都度、私は、その真白い裸身を縛ってカメラに納め、そのフォトを編集部へ届けるという作業を忠実に守っていた。

何カ月かの間隔を置いて、私の目の前に現われる前田真知子は、服装とか髪型が変わってゆくと同じように裸身の成熟度も、そして、そのM度も徐々に変化してきているのははっきりとわかった。

ただ変わらないのは、始め逢った時から、お化粧一つ、していない端麗な顔が、清純さを失っていないことと、その明るい澄みきった眸に、いささかも曇りのないことだった。生まれて始めて、自分の裸身を縛られるという恐れに、おののき、おどおどとした堅さがとれて、二回、三回と緊縛の回を重ねるに従って次第次第に縄に慣れてはきたが、ストリップとかピンク女優の見せるあのオーバーな、あくどいまでの演技は、いささかも見ることは出来なかった。

それは、彼女が学校を卒業して社会人となつてからでも同じであった。

控え目で恥かしがり屋の彼女が、縄に対する激しい反応を見せはじめたのは、一体、いつ頃からだったろうか。



すらりと長く伸びて格好のよい彼女の足の拇指が、裸身に強く縄が掛かるたびに、ピンと反りかえるのが、私の目に、はつきりと映じた。それは演技つける人が要求したポーズでは決してなかった。自然に、彼女が縄に対する反応として、そうなったのである。

太い縄が、二の腕から胸にかけて、緩みばなしで、がたがたに身にまといながら、口を開いて首をのけぞらして、あたかも喘いでい

るような、わざとらしいオーバーな演技の緊縛写真を他誌で見たことがあるが、そうした作り物の写真には、食傷気味だった私の目には、前田真知子は如何にも新鮮に見えた。

前田真知子は、昭和四十七年八月号に三たび、△夢遠き日頃▽という告白を書いた。

私は彼女を縛る回を重ねるに従って、変化してゆくM度について、非常に興味を持っていたが、彼女がこのように、自らの告白とし

て、見事な文章を書くのであれば——と、敢て、「カメラ・ルポ」としてペンを執る気には、なれなかった。

それどころか、もっともっと、撮影する度毎にでも、あの抒情的な文章で書いてほしいと思った。彼女を撮影した当事者として、私は前田真知子の告白の熱心な愛読者でもあった。私の書くルポに対して、それに登場するモデルが、非常に興味を持って読むように、私もまた、彼女の文章を多大の関心を持って、むさぼり読んだ。

私が次第に、手加減せずに思いつき縛り上げるようになってから、彼女の裸身の縄に対する反応も、徐々に顕著になってきた。それがまた、彼女の告白の文章にも、よく現われているので、私は素晴らしいと思った。

そして、それが、昭和四十七年十一月号に載った、告白『清閑寺みちの独り歩き』によって、彼女の懐古的な旅情と被虐の想念とが、一点に凝縮されて、この文章に開花したのだと思った。

『夢遠き日頃』の載った昭和四十七年八月号の口絵写真のトップに、△美しき縛しめ▽と題して、前田真知子の緊縛フオ

トを発表しているが、これは私としても、シッター・チャンスを適確に掴まえることが出来た会心の作品だと思っている。雑誌の口絵写真では、足の指のデテールなんか、印刷の関係でとんでしまっているが、長身の彼女の臀部以下の下半身が頭の上よりも遥かに高く二つ折れに曲がっているあたりは、彼女の美しさと被虐味を最高度に発揮していると思う。

その翌月号の△カメラ・ルポ▽に於いて私は、『霖雨余情』という文章を書いたが、これは、勿論、前田真知子のことばかりを主題にしたのではなくて、笠井奈保子や座間明子や、中河恵子、それに川路むら子などにも言及したのであった。そのために、この雑誌が発売されてすぐ、期せずして、中河恵子と川路むら子の兩人から、私になつかしがつて電話があったくらいである。



私が、前田真知子のことをルポの主題にしないまでも、△霖雨余情▽で何故、大幅に誌面を費やしたかという、九月号の文章でも書いたように六月号の『思う様の記』で、提崎昭人氏が、「前田真知子嬢自身の告白ばかりでなく、撮影した人のルポも知りたいものである。なぜなら彼女の告白からでは、撮影の様子が、どんなものであったのか全然、見

当がつかない。彼女の態度やなんかでも、やはり撮る側からでは受け取り方が違う点もあるだろうし、ぜひ知りたい。撮影されたのがどなたか知らないが、あるいは、塚本鉄三氏ではないかと思われる。ルポを書いて撮影の雰囲気を克明に伝えて欲しいものである」と書いておられたからである。

と言っても、私が、

この九月号のルポの文章で提崎氏の期待しておられるような撮影の雰囲気を克明に描写し得たかという、それは甚だ、心もとなかった。前田真知子の飾り気のない流れるような告白を目にしていると私のペンを持つ手も萎縮しがちだった。

それにも拘らず、彼女は十一月号の『清閑寺みちの独り歩き』では、「それに、私のことは、九月号で塚本鉄三さんが『霖雨余情』

の適確な文章で、決るように詳しく書いておられるので、私としては、そのことについては、出る幕ではないと思っていた」と、書いている。私の拙いルポの文章が、いささかでも、彼女の執筆意欲を鈍らせたとしたら、これは大変申し訳ないことだと思う。

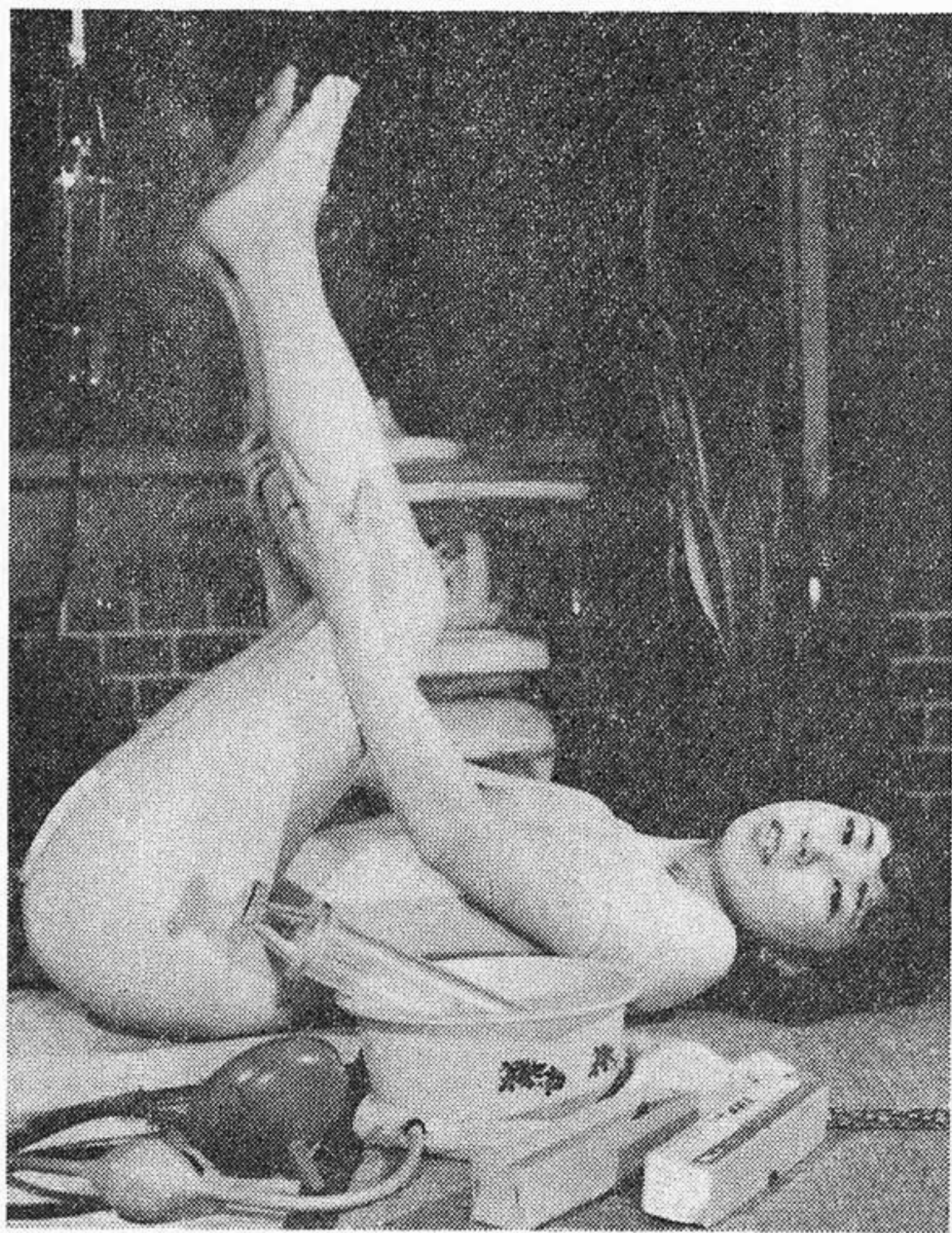
私は、彼女には、もっともっと、回数も増

やし、枚数も多くして執筆してほしいと思っている一人である。八書きますわよV式の発表意欲のある女性が、最近では増えたといっても、やはり男性と比較して、若き女性のライターというものは貴重な存在である。ましてや、SMという特異なジャンルに関心を持つ女性としては貴重価値が高い。

彼女の環境や境遇が、今後どのように変化しようとも、続けて告白を書いてもらいたいものだと思う。嘗て、中河恵子が近代的な文章で八告白Vを書いて誌上に発表していたことがあるが、そのときも、私は愛読者の側に回り、ペンを執ることはなかった。いや、執る気持が湧かなかったという方が実のところ本当かもしれない。

前田真知子についても、私は同じことが言えると思う。私が意欲をもって書けなかったのも、余りにも彼女の文章が素晴しくて、流暢であり、私をして書く余地をなくさせていたからに外ならない。

昭和四十七年十一月号の『清閑寺みちの独り歩き』によって、彼



女のリリースズムが最高調のしらべを奏でたとするならば、昭和四十八年四月号の『二の腕の縄痕に想う』の告白は、彼女の被虐の心情を、この一文にぶっつけて吐露したのではなにかと思った。書かれた文章の一字一字をとってみれば、とりたてて煽情的な文句はないのに、こうして、一つのテーマとして組立てられてみると、哀しいまでのMへの求道が、脈々と息づいているように受けとれて、私は心を搏たれた。

いみじくも、去年の四月号に『京都慕情』という大胆な文章を発表して、数多くの真知子ファンを獲得した彼女が、丁度一年後の本年の四月号に、『二の腕の縄痕に想う』という珠玉の告白を発表されたということは、私はその息の長さに驚くと共に、その努力に対して大いに敬意を表したのである。

桜の花の下にて

四月八日(日) 晴。



この日の近畿地方は、二、三日前からの異常なまでの高温に誘われて、一斉に桜の花が蕾を聞き、今や満開であった。

何の前ぶれもなく、前田真知子が京都へ来たという連絡に接し、私は京都へ向けて名神

高速道路を走っていた。桜見物のマイカーで道路は、きつと混雑するだろうと覚悟していたのだが、案外すいていて、一時間足らずで、待合わせの京都駅八条口に着いた。

私は今まで、何回か待ち合わせて、前田真知子と逢ったのだが、まだ一度だって待たされたことがなかった。いつも彼女の方が先に来ていた。約束の時間より何分前に来ていたのか知らないが、いつも、私より先に来て待っているという、そんなところに、彼女の試実さが、にじみ出ているように思った。

この前に逢った時から数えて百日余りにもなろうか。私は人混みの中に、長身の彼女を見つけた時は、やはり懐かしさが先に立ち、思わず手を振って言葉をかけていた。

京都滞在中の彼女のスケジュールは私は一切、知らない。只、与えられた時間を最高に活用し、この美女を責めてMの昂進度を確かめるのが自分の役目だと考えていた。

そうかといって、今回の話が余りにも、急だったので、細かい「責めのコンテ」などは

書いている暇は、なかった。だが、この前に彼女に施した浣腸責めの折の、あの消えいりたげな顔面の表情。頬を真赤に染めての羞恥には、嗜虐心を思いきりかり立てられたので今回もまた、あのような羞恥責めをしてみたと思っていた。

前田真知子が、浣腸とか、排泄とかについて、特に関心があるということとは聞かなかった。高村浩子や深田菊子、それに鈴木千鶴子なんかは自分から「浣腸が好きだ」という意志表示をした。それを読者通信に書いてきたり（深田菊子）私宛の私信で訴えてきたり（高村浩子）SMPレイの最中に、それを口に出して求めたり（鈴木千鶴子）したものだ。

そして、いずれも私の施した浣腸に対して激しい反応を示した。それは「浣腸」に強い関心を持っているがための強い羞恥と欲喜の入り混じった女性特有の媚態であった。

正直なところ、私は浣腸そのものには、取り立てて興味は持っていなかった。殊に一部の読者の方が指摘してられるように、排泄なんかは

汚らしさが先に立つように思えて仕方がなかったが、なんといっても若い女性がそれによって、羞恥心を爆発させることには大いに嗜虐心が満足させられた。

だから、△羞恥責め▽の一つの方便として「浣腸」と、それに伴う「排泄」とを考えて

いた。だが、単に排泄を誘発させるだけだったら、イチジク浣腸を二個なり三個なりを施した方が、至って軽便である。

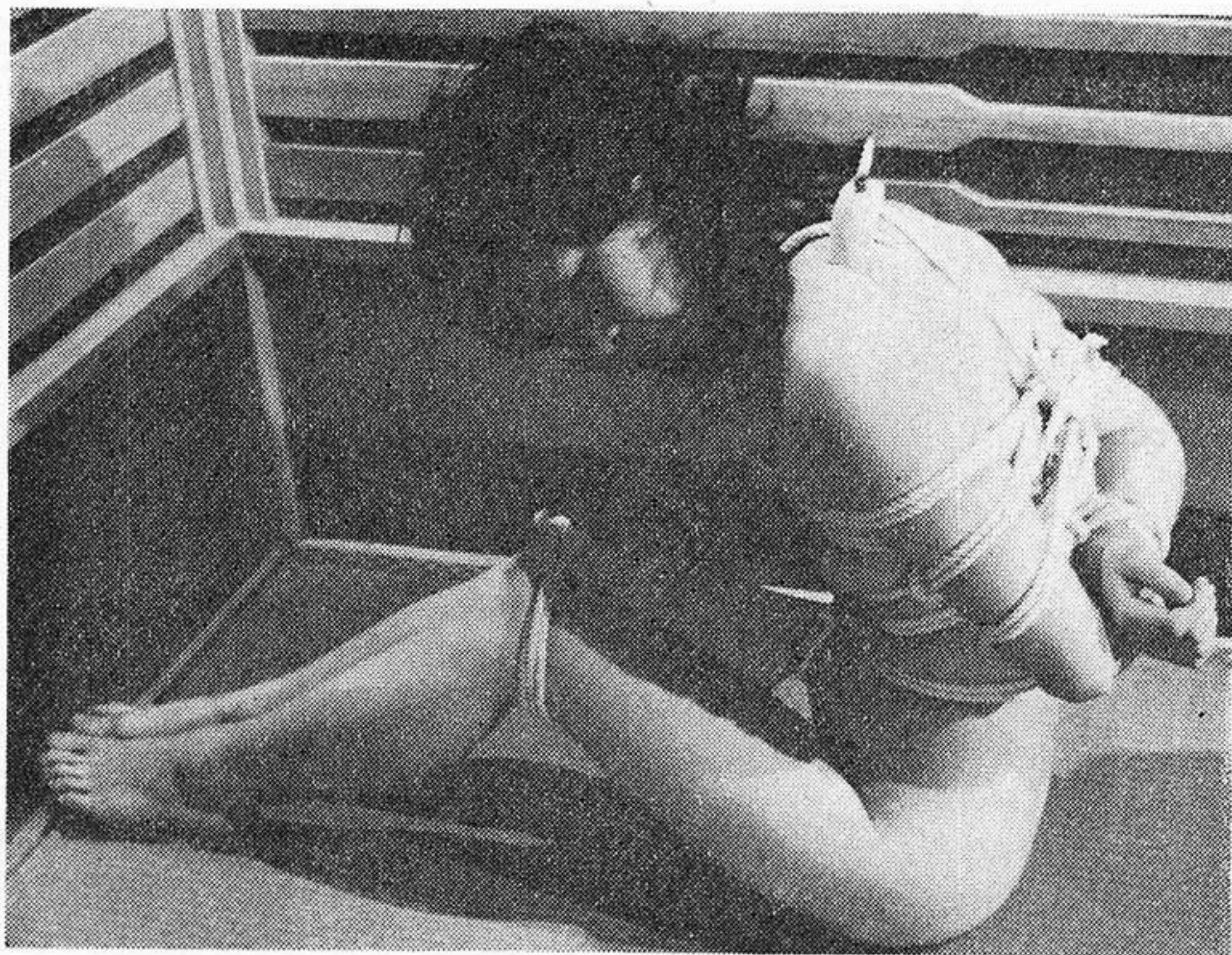
なにも、エネマシリンジとか、イルリガートルとか、二〇〇CCのガラス製浣腸器とかいった道具立ては必要としないかに見える。

そんな大袈裟な小道具を用いる効果は一体なんだろうか。読者ファンの代弁者として、彼女達を相手に、△SMPレイ▽を展開して、それを、カメラとペンとで記録することを役目としている私の立場としては、やはり、その期待を担って、道具立ては必要だと考えていた。

自分だけが、羞恥責めを楽しむのだったら只、単に、イチジク浣腸を二、三個、ポケットに忍ばせれば事足りるのだ。なにも、あのカサ張る浣腸道具なんか必要ないと思っていたが、前田真知子への浣腸を経験して、やはりそれは間違っていたことに気がついた。「さあ、今日は一つ、浣腸をやってみるか」

私は、前田真知子に対して、浣腸のことは何も話していなかった。だから





そのきっかけを掴むためにも、彼女に対して道具を見せておかなければと考え、破れ物な

ので、それだけを別のバッグにしまっていたイルリガートル、エネマシリンジ、二〇〇

一〇〇〇Cのポンプ式流腸器漏斗、グリセリンの入った瓶などを、やおら取り出した。

「まあ、それ、何なの？」

それを見た前田真知子の恐怖と驚きの表情は、明らかに「流腸」を嫌悪し、拒否している眼であった。

「私、縛られるんだったら、どんなに、きつくても辛抱できますけど、流腸なんて、とても出来ませんわ」

言葉は極めて丁寧であったが、その言葉の口調には、断乎として拒否するという強い意志表示が見られた。若い女性として、誰にも見せたことのない、そんな個所をむき出しにされて、こんな巨大な流腸器具を使って流腸されるなんて、思っただけでも、ぞっとするに違いない。

そう言われても、一旦「流

腸をやる」と言って、諸々の流腸用具を並べ立てた私としては、引込みがなくなっていた。その時、私の目に浮かんだのは、道具立てを見て恐怖心かられた彼女の表情の中に、一沫の好奇心のようなものが、あったことだ。

縛りの好きな前田真知子のことだから、緊縛しておいて、掌の内に忍ばせておいたイチジク流腸を、何かのハズミのようにして、するりと流腸することは出来ないこともないだろうが、こうして正面きって、道具を並べてその反応を見るところも、なかなか楽しいものである。

こんな大きな器具で流腸される——と、考えただけで、胸が騒ぎ、羞かしさで全身が真赤になっていることだろう。でも、いやだ、いやだと口では言いながらも、秘かに好奇心も持っているに違いないのだ。

誰にも見せたことのない場所を、むき出しにされた上、特別に大きな流腸器の嘴管をズブリと挿入されて、悪夢のような恐怖の流腸液を、ドクドクと体内へ送り込まれる。

それは、何とも言いようのない、身体中がトリ肌立ってゾクゾクとする悪魔的な戦慄だろう。SMについては人一倍、強い関心を持

ち、奇クの愛読者でもある前田真知子のことだから、「浣腸」についての知識も、きっと豊富に違いない。

「そう、それだったら、今日は浣腸は、やめにしておこう。その代り、貴女のは、人一倍濃いようだから、この鉄で奇麗に刈り取っておいて、あとから剃ってあげよう」

私は冷酷に、そう言いながら一丁の鉄を取り出して彼女の前に示した。

「駄目よ、駄目よ。そんなことしたら、お風呂へも行けなくなるわ」

「この鉄でチョコキン、チョコキンと刈り取っておいてから、あとは、この安全剃刀で、石鹸を、たっぷりつけておいて、ツルツル坊主に剃ってあげるよ。貴女も知ってるだろうが、これは、^{ていもう}剃毛責め」といって今、流行しているんだよ」

「知らない、知らない。私は、そんな責めは受けたくないわ」

「剃毛がいけないとすれば、それじゃ浣腸責めということになるが、私はどちらでもいいんだよ。貴女の好きな方を選んでごらん」
「あの、浣腸、どうしても、しなきゃいけませんの」

前田真知子は、世にも情けない顔をして、

私の方へ澄んだ眸を向けている。

「そうだよ。だから、私は剃毛されると困りますから、代りに浣腸して下さい。そしてお腹の中の汚いものを、すっかり出して下さい」と言っごらん」

彼女は無言のまま、顔を真赤にして、もじもじしている。色が白いので、赤面すると白い頬は、パツと紅葉が散るのがよく分かる。

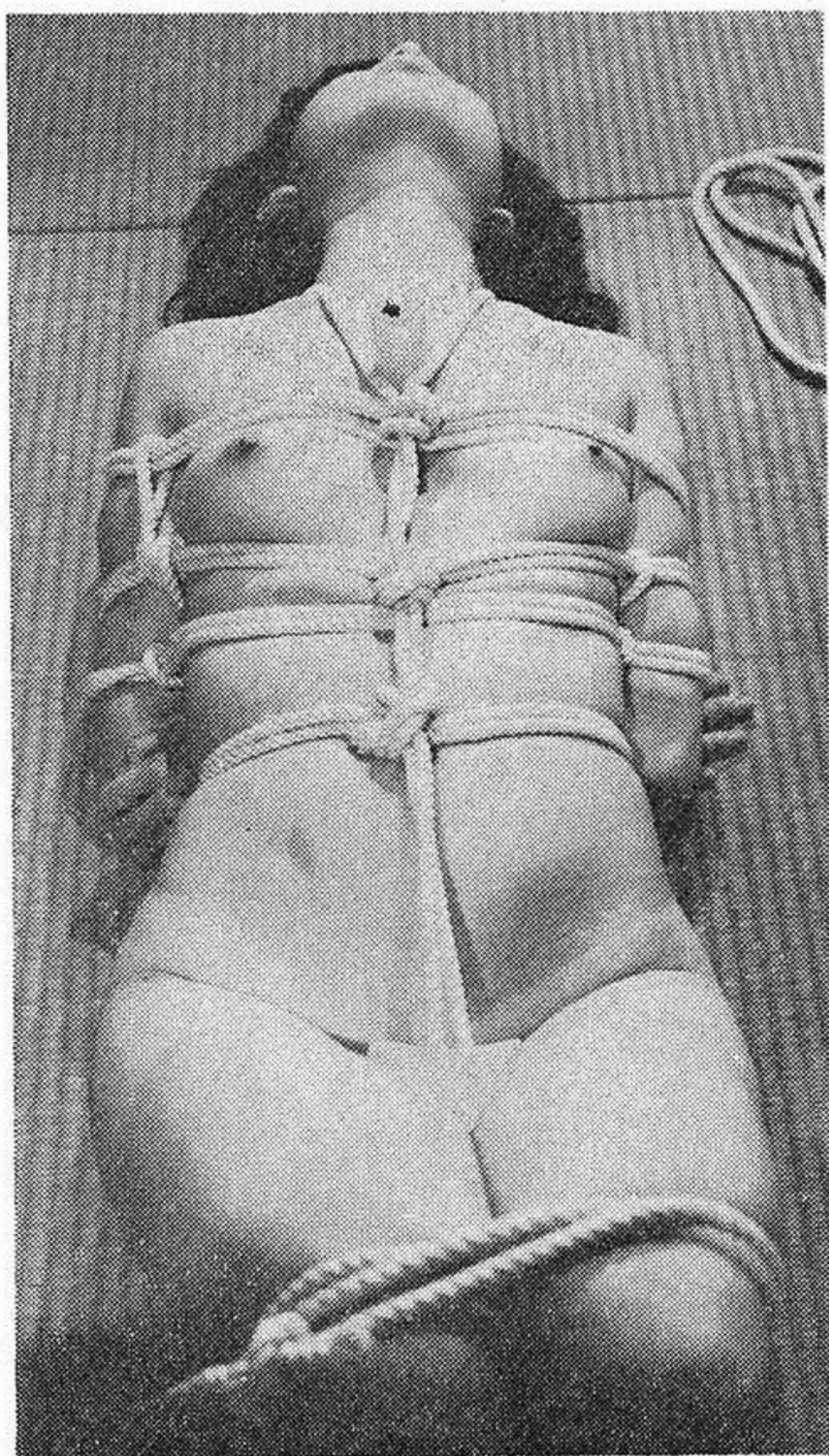
「さあ、早く言わないかッ」

私は彼女に対しては、今まで出したことの

ない怒声を浴びせていた。

その時の前田真知子の狼狽ぶりと、しどろもどろの台詞の喋りようは、いたく私の嗜虐心を満足させた。上品で乙にすましたベールを驚づかみにして剥いでしまったような気持になった。美しいものの脆弱なものを、さんざんに土足で踏みにじって、とことんまで、汚し去ってしまいたいという、嗜虐心が快くうずいた。

「はい、私は、私は、剃毛されるのが困りま



「すから、困りますから……」
「困りますから、何だと言うんだッ」
「あの、代りに、浣腸をして下さい」

「浣腸してからは、どうなんだッ」
「浣腸してから、お腹の中の汚いものを、すっかり出して下さいませ」

「よし、よし、それでよい。そんなに浣腸がしてほしいんだったら、これから、この太い浣腸器でたっぷりとしてやるからナ」

それから、もう、完全に私の意志のままに動くOLの前田真知子に対して、全裸のまま、いろんな浣腸ポーズをとらして、羞恥地獄の中に、のたうちまわらせた。

持参した浣腸器具のあらゆるものを駆使したのは勿論であるが、お尻を高く突き立てるような格好にさせておいて、アヌスに漏斗を挿して薄めた石鹼液を、注いだりもした。

秘められたピンク色の

可愛いアヌスが、いやでも、私の眼前に露呈して、紡すい型のたっぷりとした膨らみを見せる二〇〇CC浣腸器の嘴管を受け入れている有様は、まことに見事な光景であった。

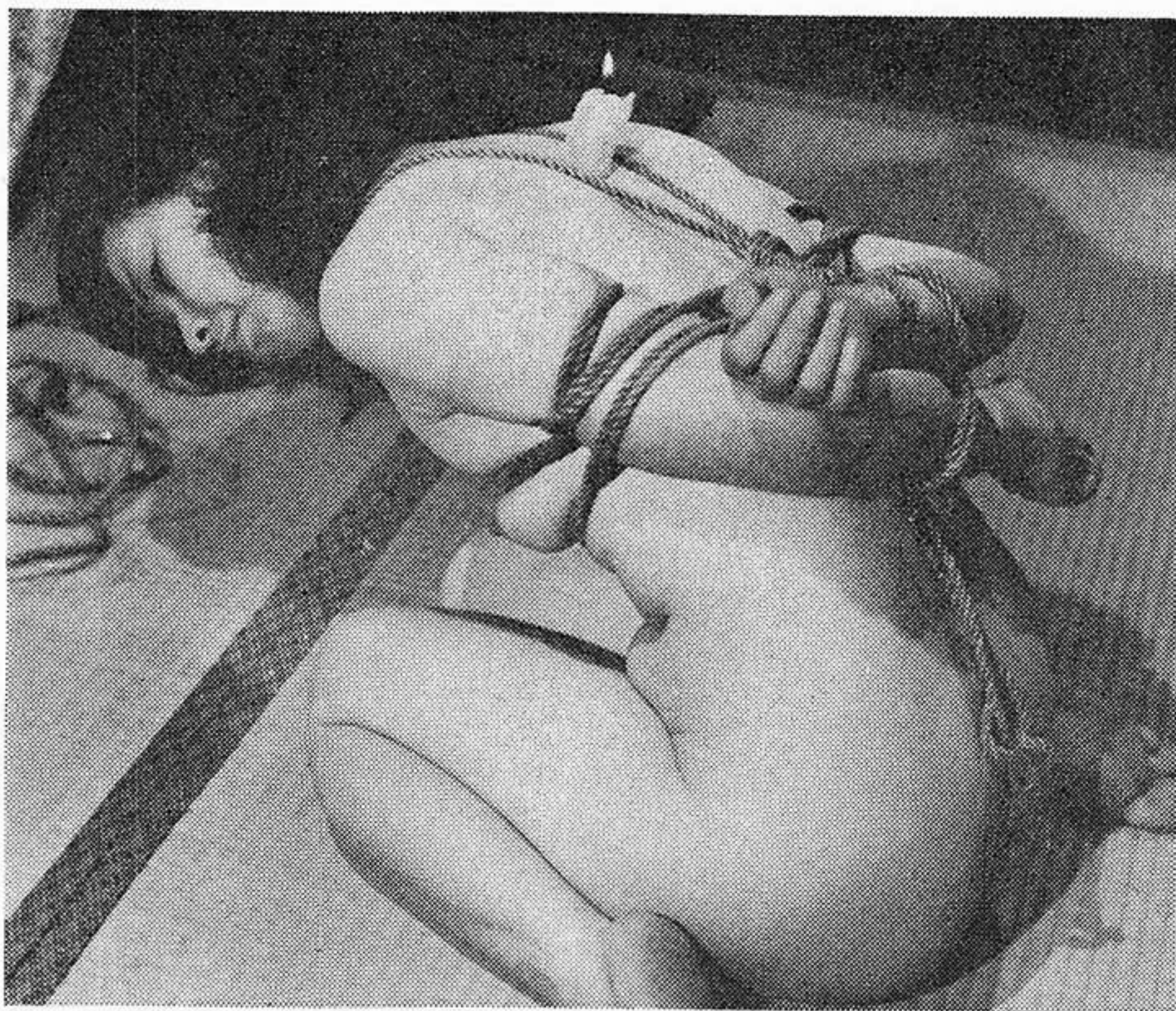
全身を波のようにうねらせて、初めて体内にドクドクと注入される浣腸液に対して、全身を小刻みにふるわせながら、激しく反応する彼女の様子を、私は冷酷な目で、じっと眺めながら、刻明にカメラに記録していった。

あのときの、息づまるような凄い感激は、今でも、忘れようとしても到底、忘れることは出来ない。

浣腸に対しては、いささかの嗜好も持っていない前田真知子が、その体内に潜む好奇心だけで、強制されて、やむなく受ける浣腸そのものについての反応は、まことに目を瞠るような、めざましいものがあつた。

美しい女が、浣腸されているのを見ていると、そこに、女の哀しさといふものが、全身から、にじみ出ているように思える。

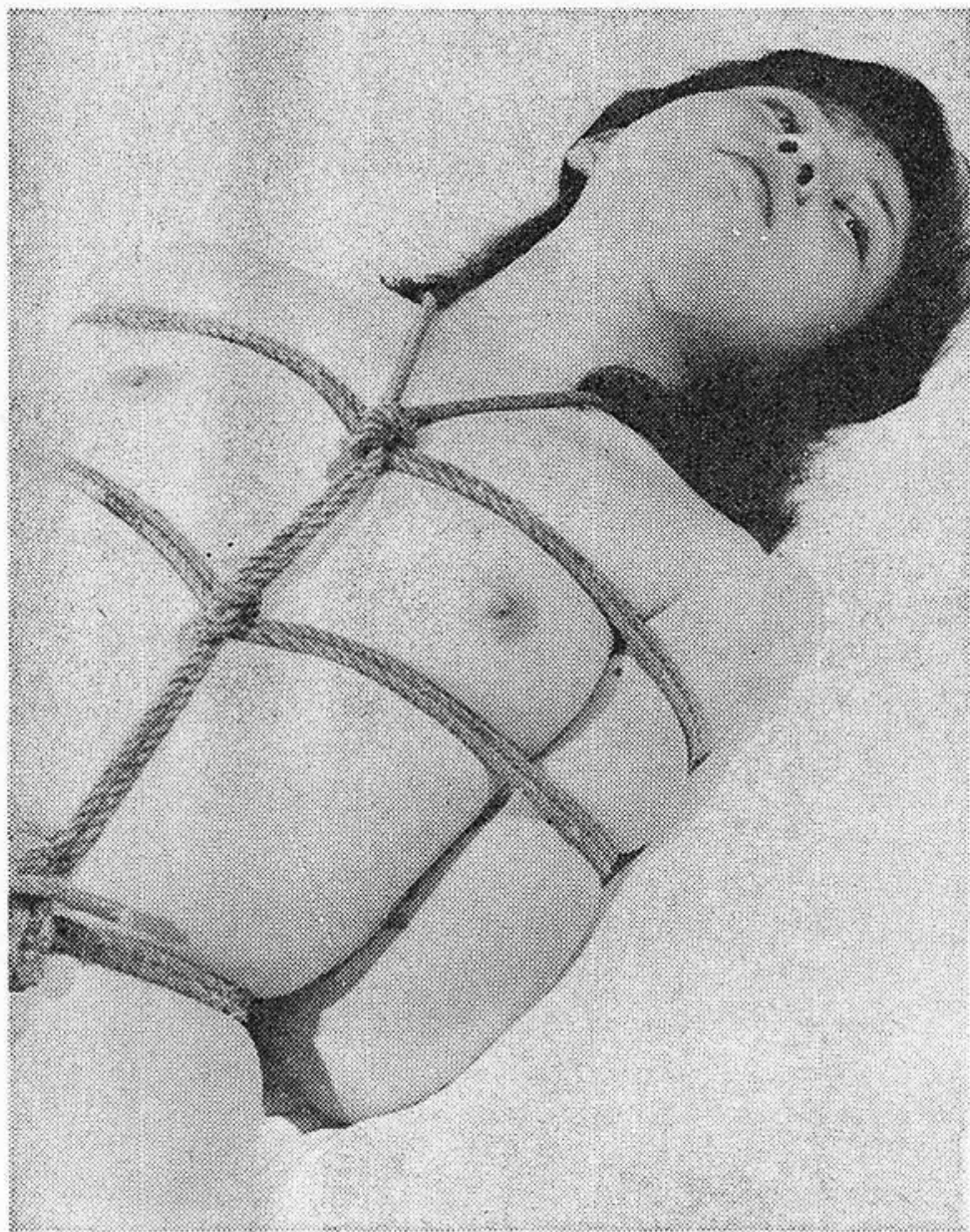
羞かしさと襲ってくる激しい便意に、なよなよと、白いお尻を振って悶える前田真知子の、そのときの発声を聞いていて、私は一つの羞恥責めのアイデアのようなものを、考えた。ついていた。



くすぐり 操り責めの魅力みりょく

今日は、あの浣腸責めをやった日のように仰々しい浣腸器具は、一つも持ってきていない。その代り、私は秘かにソニーの携帯用テープレコーダーをバッグの底に忍ばせてきていた。嘗て、中河恵子を責めたとき、彼女の悲鳴や諸々の物音を録音すべく、ワンタッチでテープの送りを作動できるような仕掛けしておいたことがあったが、マダム芙美代と福井桃子の際は、最初から器具やマイクを表面に出して録音していた。

前田真知子に対する責めでは、やはり私は隠しマイク式の方が、よりナマの音を集録できるような気がしたので、彼女が入浴している間に一切の仕掛けを完了しておいた。マイクも最も感度のよい雑音の入り難い場所に位置させておいたし、ワンタッチのスイ



ッチで、直ちに録音が、ONされるように準備しておいた。私が、いつスイッチを入れたか、切ったかさえも、彼女には全然わからない筈であった。

女子大生だった頃の稚さわか、固さ、が次第にとれて、OL生活一年になる今では、清純さの中にも、そこはかとない色気が漂いだして

きた前田真知子のSM的生長度を、この際、確かめてみたい気持が、しきりにした。あらゆる羞恥責めの成果を、カメラばかりかテープにも残しておきたいと思った。そのため、少々カメラの活躍が犠牲になるのも、また、やむを得ないと考えていた。私の好きな責めの一つに操り責めがある。

操ったさに耐えて、縄も切れんばかりに、もがきまわる全身のうねりも、なんとも言えない魅力のあるものだが、それに伴って発する女性の悲鳴や口説くぜつもまた、私達の心をかきむしるように刺戟的なのだ。

手による触覚、目による視覚、それに女の喘ぎや悲鳴は聴覚をも満足させてくれる。更にまた、操り責め地獄の中で、汗みどろとなってもがきその汗が湯気となって立ちこめるとき、えも言われぬ若い女の肌の香りが、馥郁ふいくとして匂ってきて、嗅覚をも快く、くすぐってくれるのだ。



五官の中のあとの残り、味覚については、目の前に若く美しく、新鮮な女体が転がっているということになれば、そのグミのような朱い唇に接吻するもよし、もっと直接的な女体の各部分の甘酸っぱい初恋の味を満喫するのもよい。本来、単味であるべき筈の女体はその折々の条件によって、種々雑多な複雑微

妙な味合いがするのは何故だろうか。

さて、擦り責めの第一着手として、両手を揃えて頭上に差しださせて手首を縛った。こんな縛り方は、今まで彼女には一度もなかったのであるが、擦りの一番のポイント、腋の下を完全に露出させるために選んだものである。いつもは腕の下にかくれて空気に触れ

ることがなく、また、それだけに、他からの刺戟に対しては最も敏感な個所である。

前田真知子の腋の下は、きれいに脱毛されていて、白い肌が、まぶしいように輝いているが、陽の目を見ない隠された肌は、明るい電光の下では、恥らいに、はにかんでいるように思えた。彼女もまた、平常は出していない肌を白日の下に晒して、場違いのように両手を高く挙げて縛られたまま、身体をくねくねと、くねらせている。

思いつきり伸びきった腋の下へ、サッと私は指を伸ばして軽くタッチをする。

「あ、あ、ああ、やめて、やめて！」

その部分の皮膚が鋭敏に反応して、ヒクヒク、ヒクと痙攣している。私の指は、腋の下から脇腹へと這いまわってゆく。

「くすぐったいッ、くすぐったいッ」

坐っていた彼女は悲鳴と共に、ころりと、

そこへ転がってしまった。私の指は脇腹から再び腋の下へ戻り、そして腋から腕に接続した部分の柔らかい肌に、もぞもぞと、触手を伸ばしていった。

「ヒャー、許して、許して……」

彼女は転がりながら、脚をばたばたさせて私の指を逃がれようとした。

既にテープのスイッチは入れられている。彼女の悲鳴は、余すところなく録音されている筈である。

私は、唇をきゅっと噛んで、暴れまわる彼女を押さえつけながら、指を再び脇腹へと下げ、腰部、臀部へと伸ばしていった。

ころり、ころり、右へ左へと、彼女は転がりまわっても、なにしろ、両手を揃えて伸ばしたまま、頭の上の方で縛られているのだから、襲いかかってくる私の指を積極的に防ぐ手立てはない。只、指先を少しでも遠ざけようと、転げまわるばかりである。

そこで私は、彼女の動きを制すべく、どっかりと馬乗りに跨った。

「そら、そら、擦ったいか。ほら、今度はこちらだ。ここは何と言うのだ」

私はお臍のまわりに指先を這わした上で、形のよい臍窩に突っ込んだ。

「ああ、あ、カンニンして。たまらないわ」

「さあ、言わんか、言わんか。この名前を言わんと、いくらでも擦るゾ」

「あ、言います。おへソ……」

喘ぎと共に、蚊の鳴くような声がした。

私のお尻が、どっかりと彼女の胸の上に乗っているの、もう転がりまわることも出来

ない。私の指は更に下の方へ這いずり、擦りの悪戯を、やめようとはしない。

「さあ、ここは、何と呼ぶんだ」

「ああ、許して、許して。そんなこと言えな

いわ。苦しいから、降りて下さい」

「言え、言うんだ。言わないと、のいてやらないぞ。何と言うんだい」

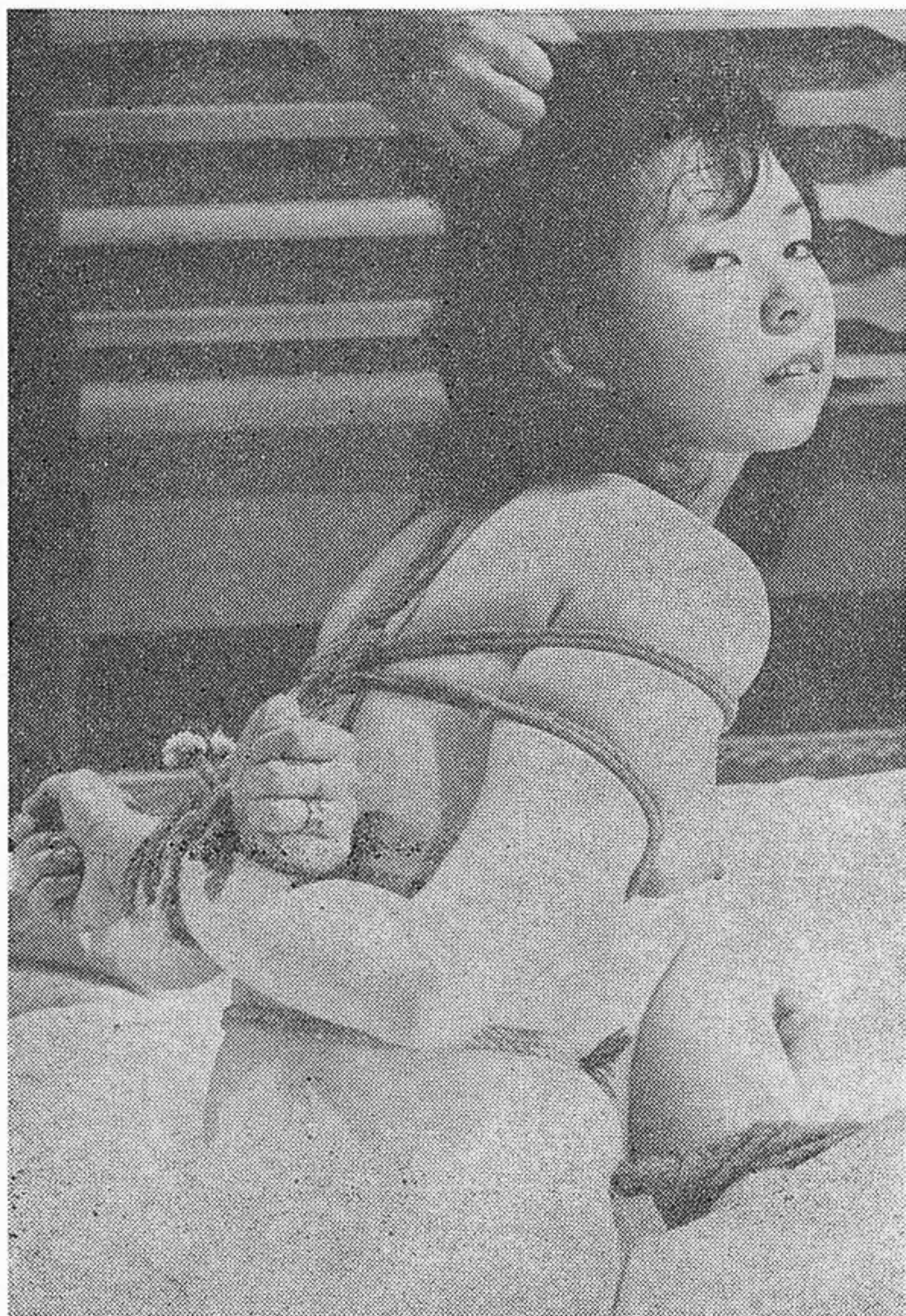
「あの、あの、毛です」

「何の毛だ、はっきりと言ってしろ」

「ああ、あああ、擦ったいわ。許して、許して。言います、言いますから、許して」

「だったら、早く言わないか」

私の指は、その間中も、休みなく、執拗であくどい、動きを続けている。



すらりと長く伸びた脚を縄のように縛り合
わして、悶えている彼女の下半身の動きを、
私は涎のたれそうな気持で眺めていた。

お尻の下で、もぞもぞと妖しく動く、ふく
よかな双丘の感触を楽しみながら、私は下唇
を上下の歯で、きゅっと噛みしめていた。

「それは、それは……」

「それは、何だ。何と呼ぶん
だッ」

「ああ、それは、××の×で
す」

消え入りそうな口調で彼女
が、その言葉を口にしたとき
私は約束通り、双丘の上から
腰を上げて彼女を抱き起し
た。だが、これで擦り責めが
終わりになったのでは決して
なかった。私の唇は、その美
しく脱毛された腋の下へ、あ
たかも、その匂いを嗅ぐかの
様に吸い寄せられていった。

「いやーッ、そんなことする
の、いや」

彼女のそんな悲鳴を物とも
せず、私は彼女の胴体を抱き

しめておいて、白い肌に、むさぼるように舌
を這わせていった。

熱 蠟 地 獄

擦り責めのときの手挙げ縛りを解くと、い
つときの休みも与えずに、直ちに次の縛りに

とりかかった。

あるM女が、私に言ったことがある。

「せっかく縛ったのに、またすぐ解くのね。
私は縛ったままで、長くほっておいて、ネチ
ネチと、いじめてほしいと思っていたのに、
写真をとったら、すぐ解いてしまうなんて、
つまらないわ」

そうした不満は、も
っともなことである。

いろんな縛り方の写真
を沢山、撮影しようと
思うから、勢い、△縛
っては解き、縛っては
解き▽の、繰り返しに
なってしまう。

「SMプレイ」そのも
のに、最重点を置けば
自然と写真は、そう沢
山、撮れなくなる。こ
れは当然のなりゆきで
ある。

そうは言っても、私
はやはり、ここで縛り
方を変えた。それは後
手の高手小手縛り、そ



して、背中の両手首が下がらないように縄尻を肩越しに吊り上げておいた。前田真知子の両手首は、水平よりも高く上がっているからどちらかと言えば柔軟な方である。

擦り責めの余熱で、ほてった身体の、まだ冷めやらぬ彼女に、手早く縄を掛けておいて私は百奴蠟燭に火をつけた。ジジジと灯心が

燃えて、忽ち溶けた透明なローが、たらたらと、周囲に溢れてきた。

心配そうに、私の手元を眺めている前田真知子の肌の上に、火のついた蠟燭を置いた。

「あッ、熱、熱い、熱い。とって、とって」

溶けた熱ローが白い肌に流れる。

「動いたら、余計、熱いゾ。じっと、じっと

して、動くんじゃないぞ」

そう言っておいて、私は更に、もう一本の百奴蠟燭に火をつけた。充分に熱しておいてそのローソクを、彼女の肌の上にかざして、横にした。熱いローが、雨のように降って、肌にちらばった。

「あッ、あつ、あつ、熱いったら。よして、ローが流れてくるじゃないの。ねえ、取ってったら、お願い」

もう、こうなったら、いつものように、上品にしているわけにはいかない。流石の前田真知子も、あられもない悲鳴を挙げ始めた。

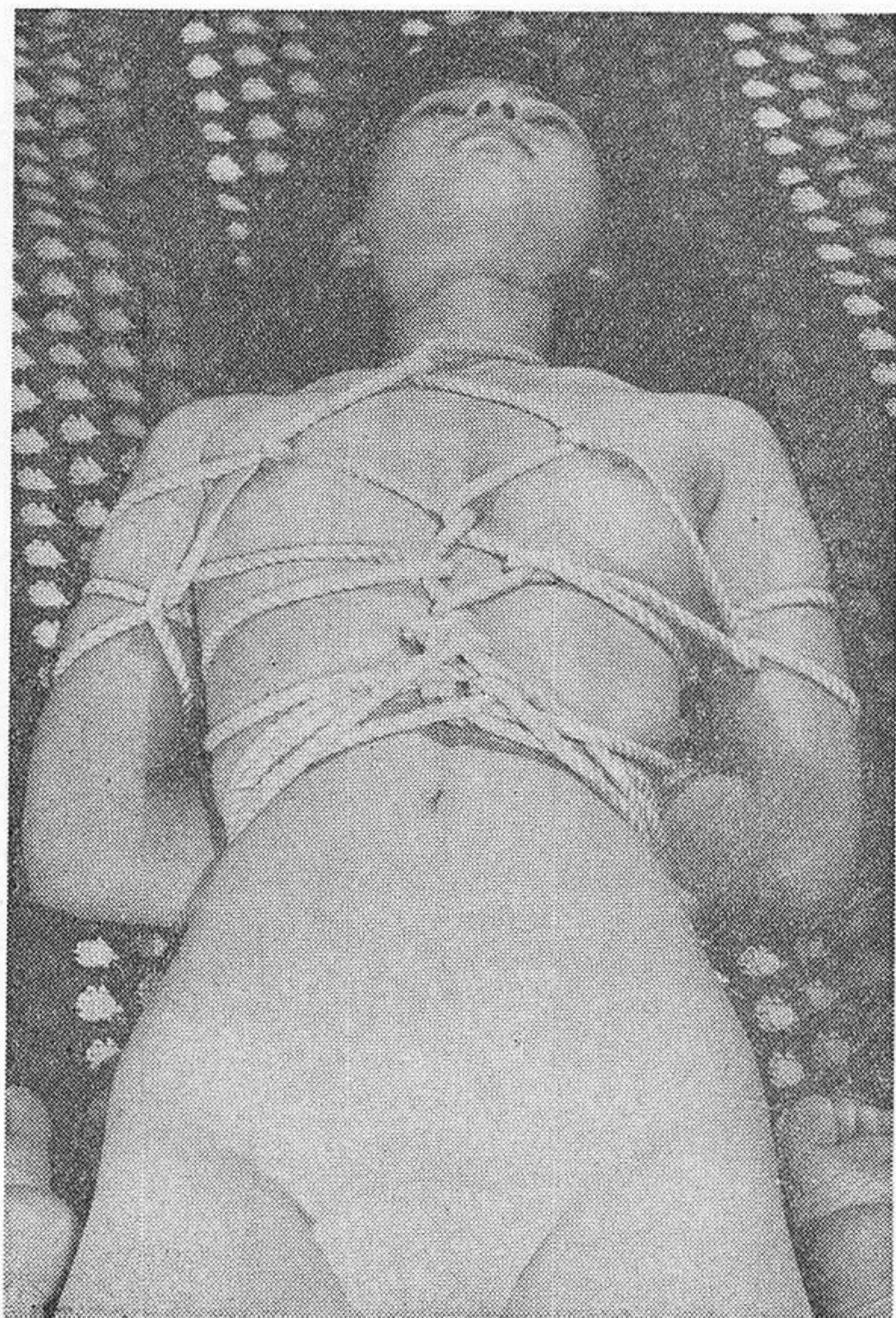
テレコが回転しだしたのは勿論である。

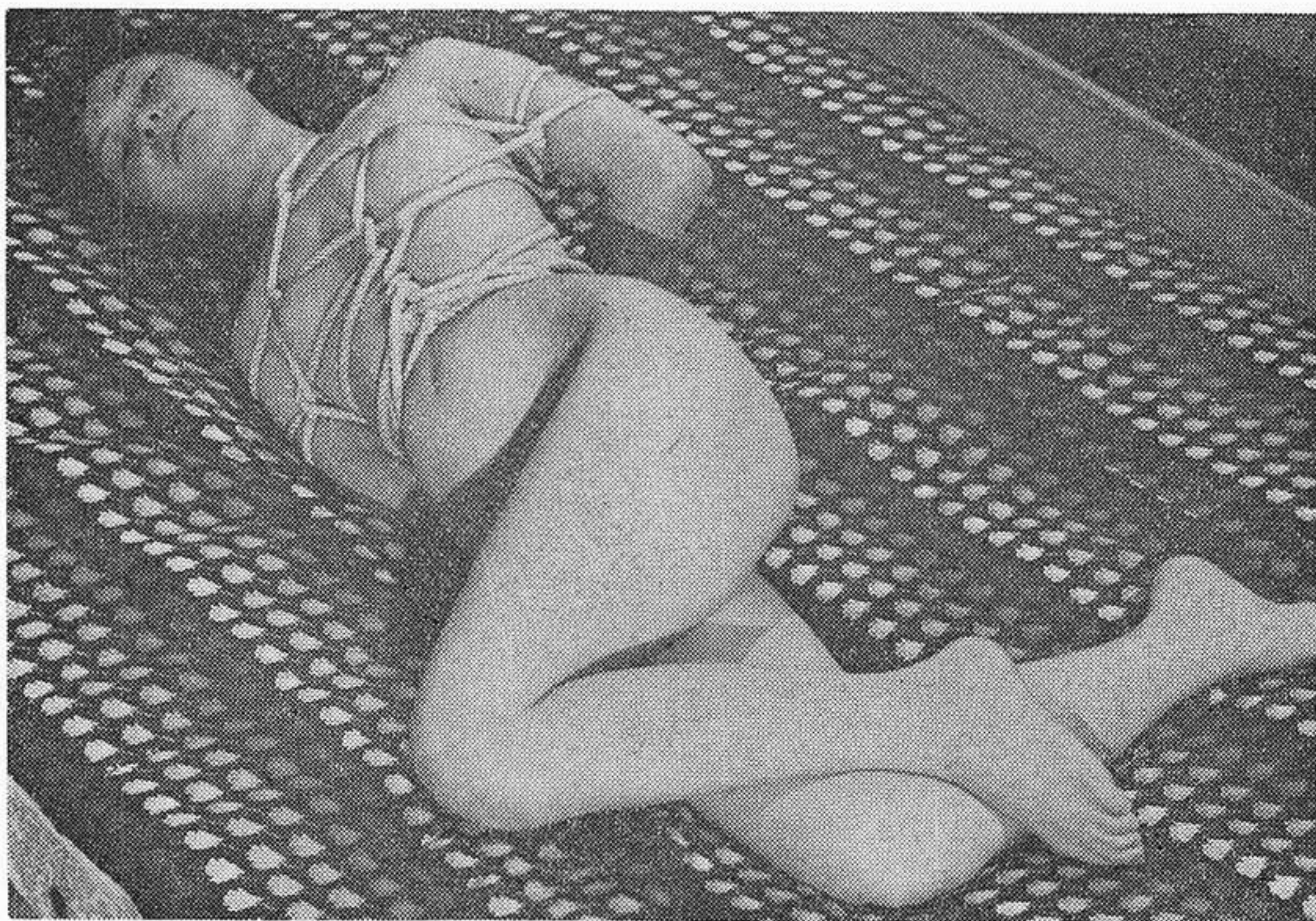
私は彼女の艶^{えん}なる悲鳴を聞きたくて、白い肌の上に熱ローを、たらし続けた。彼女は、なんとか、その熱いローの雨から逃がれようとして、転げまわるので、私は縄尻を掴んで引っ張り、それを柱に縛りつけた。

カサブタのように、肌にへばりついていたらローが剥がれると、そのあとは白い肌が赤く火照ったように変色している。

「どうだ。蠟責めの感じは？ 万更、悪くもないだろう。この前の流腸責めと比較して、どう思う？」

「そりゃ、この方が……」





「この方が、いいって言うのかい？　どうなんだ。はっきり言ってみなさい」

「いいって言うわけじゃないんですけど、流腸は、お腹が痛くって、あとの気持が悪かったですわ」

「だって、全部、出してしまった後は、気持がよかったんだろう？」

「ええ、そりゃそうですけどこのローの方がスリルがあって、面白いですわ」

「そうか。それだったら、もう少し、熱いのを思いっきりたらしてやるか」

「いやいや、もう、いいんです。これで、結構ですわ。それより、こんなにローが、ちらばってしまってる……」

そこで私は白いロープを解いて、休息がてら、ローの後始末をした上で、今度は麻縄に変えて縛り直した。彼女が何度も転げまわったので、背

中、二の腕、胸などに、赤く血の、にじんだような縄の痕が、くっきりと白い肌に残っている。

それを見て、私は四月号に彼女が書いていた、△二の腕の縄痕に想う△という文章を、ふと思い出していた。

二の腕に残った縄の痕をさすりながら書いたであろう、この告白は、彼女一流の古都京都を憧れる心情と織りなしたマゾ心が、揉情的な美しい文章で書かれているものだった。

あの上品で流暢な告白の文章の背後にかくされている、彼女の真のM心を、白日の下に抉剔してみたくなった。

「凄く縄の痕がついていますよ。色が白いから、特によく目立つんですね。血がにじんだようになっていきます。痛くないですか」

普通、私は縄の痕については、相手の女性には喋らないことにしている。肌に、そんなアトが残ることを極度に嫌がる女性もいるからである。しかし、前田真知子は、自分からあんな題の告白の文章を書いているから、私には何か、露悪的な気持で口にしていた。

「ええ、痛くはありませんわ。それに、縄の痕は、すぐとれてしまいますから、少しぐらいついていても構いませんわ」

彼女は一向に気にしていない風である。若し、何も知らない人が、真白い肌に、こんなに血が、にじんだように幾筋もついている傷を見たら、どんなヒドイことをしたかと思うに違いない。それほど、その皮下溢血は、私の目には鮮かに映った。

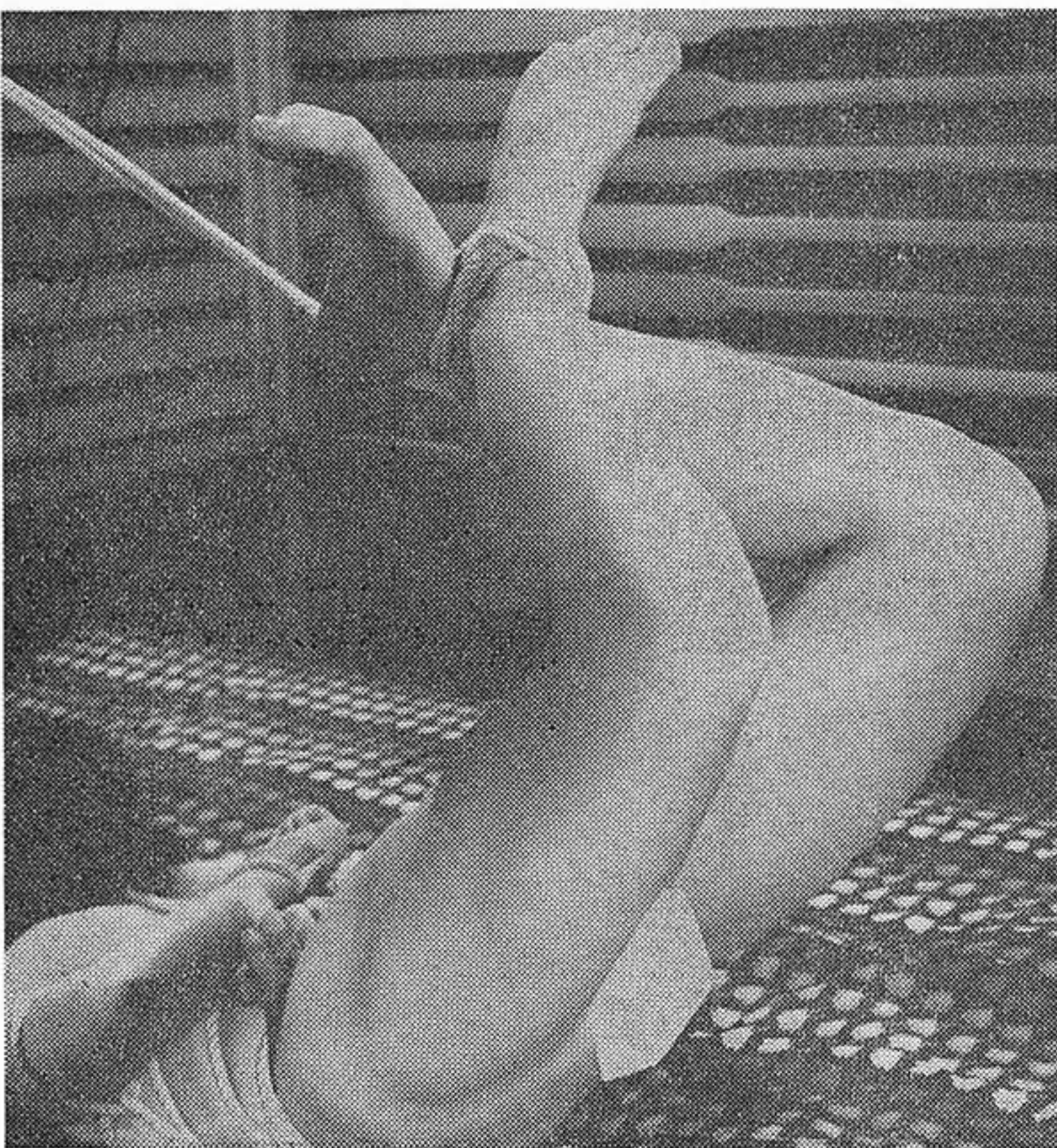
だが、彼女のさりげない返事で私は勇気を得て、ざらざらとした手ざわりの麻縄を操って、一入、柔軟さを増した女体に、しゅっ、しゅっと縄を掛けていた。

「貴女は、一体、どんな責め方をされるのが好きなんだい？ 自分の好みを言ってごらん」

「どんなって、そんなこと、まだ自分では、よくわかりませんわ」
「だって、雑誌は読んでるんだらう。只、単に、縛られるって言うだけじゃなしに、雑誌に載っている中で、こんな責め方だったら、されてみたいって、いうのがあるだらう」

「あら、そんなの、私、知りません」

「ホラ、何月号だったかに、貴女



が書いていた、何だったかな、めくるめく思いに……って、書いてあっただらう。あんなのが、好きなんだらう。言ってごらんよ」
「知りません、知りませんわ」
前田真知子の頬が紅葉を散らしたように、真赤になった。だが、両手を縛られているので顔を手で、かくすことも出来ない。

「今日は、これから、貴女の一番、好きな責めをして上げよう。蒲団の上だから、いくらもがいて暴れたって下が軟らかいから縄目が痛くないだらう。思いつきり、派手に転げて呻いたり声を挙げて構わないよ」
「ええ？ なにをしようって言うの？ ひどいことは、しないで頂戴ね」

「うん、ひどいことはしないから、自分で好きな責められ方を言っごらん。さあ、どんな風に責められたいんだ。言っごらん」

蒲団の所へ連れて来られた彼女はためらい勝ちに無言のままである。私は、いらだって髪の毛を鷲づかみにして、ぐいと捻じた。

「さあ、言わないか。自分の好きな責めの趣向を言っごらん」

「そんなこと、別にありませんわ。それに、自分の口から言うなんて、とても恥かしくて言えませんわ」
「だって、文章では、いつも書いてあるんだらう。口に出して言えないなんてことは、ない筈だ。さあ、言ってみろ。どうだ、こんな責め方かこんな責めか？」

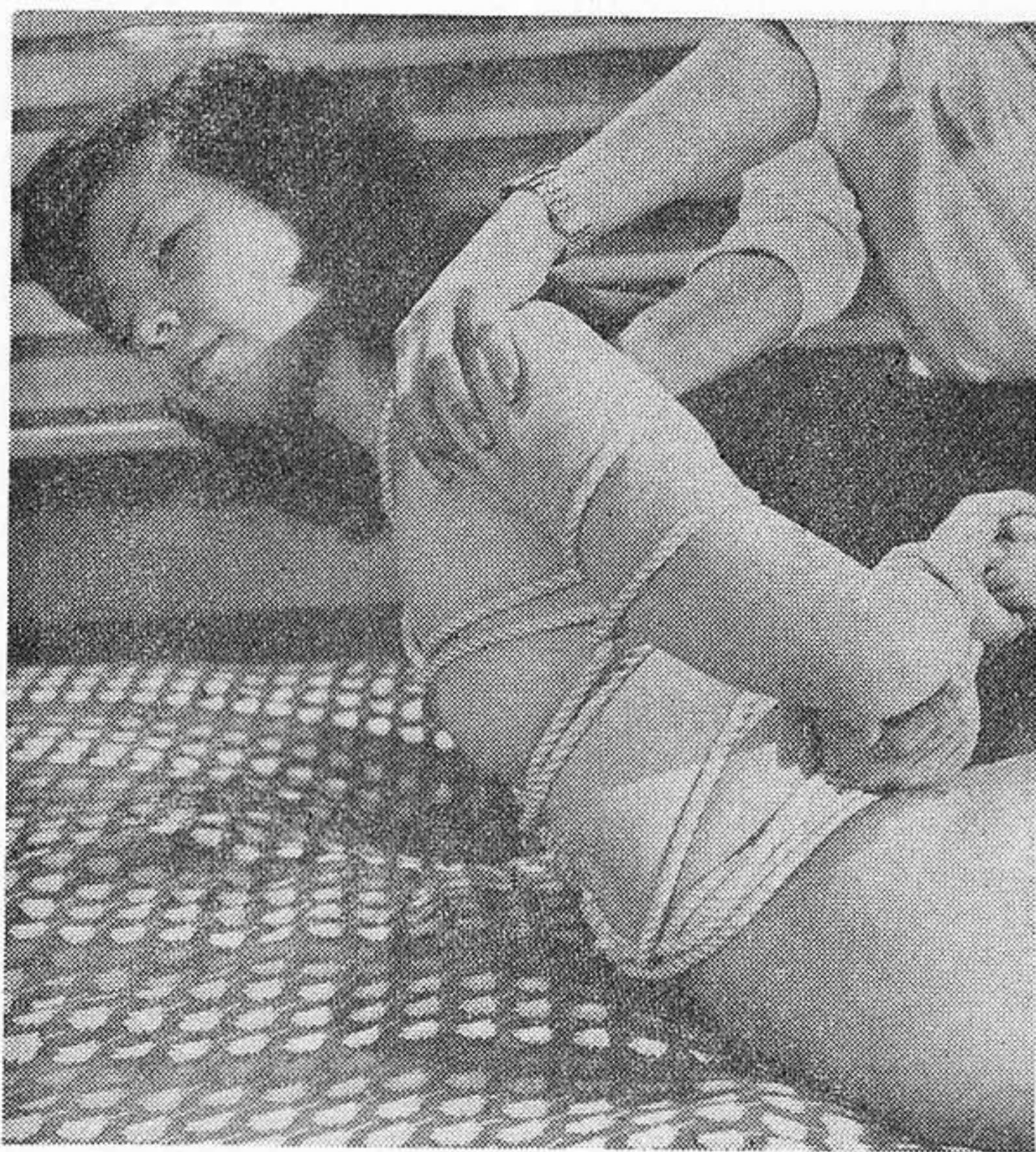
私は彼女の髪の毛を掴んだままふり回して、蒲団の上へ、転がした。長い脚が一瞬、宙に舞って、あられもない姿態が展開したが、私は毛髪を、そのまま引きずりまわして、身体の安定を保たしめなかった。

「ああ、あ、あ、いや。いや、そんなに髪の毛を引っばっちゃ、いや」

彼女の口から悲鳴が洩れた。私は、やっと毛髪を掴んでいた手を離した。長くて細く、やわらかい毛が、三本ばかり、私の指の間からまっっている。

敷布の上に向かっている前田真知子の緊縛肢体を眺めた。黒ずんだ麻縄に拘束された女体は、極めて美しく私の目に映じた。とにかく、カメラのシャッターを切っておいてから、彼女の側に戻り、これから、どのような羞恥責めをしてやろうかと、舌なめずりする思いで、じっと、乳房からお臍のあたりへと視線を這わしていった。

彼女は、自分の身体が、私の執拗な視線に



追われていることに気づくと、身をすくめるようにして、明るい眸を私の方へ向けた。

「ねえ、一体、これから、どのような責め方をしようって言うの？」

女性特有の危惧が、なんなく兆^{きざ}してきたのだろう。ひとときから比べると、彼女も、大分、私に親近感を覚えてきているらしい。

敬語ばかり使って喋っていたのが、今日あたりでは、相当親しみの籠った言葉つきに変わってきている。

「だから、貴女の好きな責め方をしようって言うてるだろう。きれいな貴女の身体の、あらゆるところを、ネチネチと責めて、それをアップで、撮ろうと思ってるんだよ。責められたときの身体表情は、どんな個所でも、三脚にすえたカメラ二台で、鮮明に写してみたいな。ホラ、ここんともね」「いやですわ、そんなとこ。恥かしくって、私どうしようかしら」「そんなに恥かしがることはないよ。貴女の身体って、どこもかしこも、飛び切りきれいだから、アップで撮っても、みんな写真になるね。恥かしがらずに見せなさいナ」

「あらあら、どうしよう」

私は他愛のない会話で、彼女をリラックスさせておいて、一方では、すべすべとした柔肌の上へ指を滑らせてゆき、他方ではエヤレリーズのゴム球を握っては、カメラのシャッ

ターを切っていった。

噛んで歯型を印したいような瑞々しい臀部の筋肉が、微妙に躍動して、私の鼻先に、香ぐわしい若い女体の匂いが漂ってきた。

私は彼女の羞恥の一点が、出来るだけ露出するように、露出するようにと、胡坐縛りにした女体を、こねくり回すように、あちらへ向けたり、こちらへ転がしたりした。幸いにして、下が蒲団なために、肘が下敷きになったりしても苦痛を訴えずにすんだ。

逆エビ縛りにして、両足首に掛けた縄を引き寄せて、シャチホコ起ちの芸者踊りの格好にさせたりした。なにしろ、全裸のままなので、そんな極端なポーズを縄に依って強制すると、もう、どうにもならない、あられもない姿態が、私の目の前に展開した。

『坐禅ころがし』という責め方をしているという私信を、以前に高村浩子が私に寄せてきたことがあったが、そんな文句を一体、どこで聞き知ったのであ

ろうか、私は不思議に思っていた。それでは、前田真知子に対して尋ねてみた。

「貴女は、『坐禅ころがし』って責め方を知っていますか。この責め方をやると、そりゃ面白いんだよ。是非やってみたいなア」
「存じませんが、その『坐禅ころがし』というのは、そんなに変わっていますの」

「変わっているわけじゃないけど、このようにね、足を坐禅のように組んでね。前へ倒したり、引っくり返したりしても、足が坐禅を組んでいるので、背後から、どんな責めをされても逃げられないんだよ」

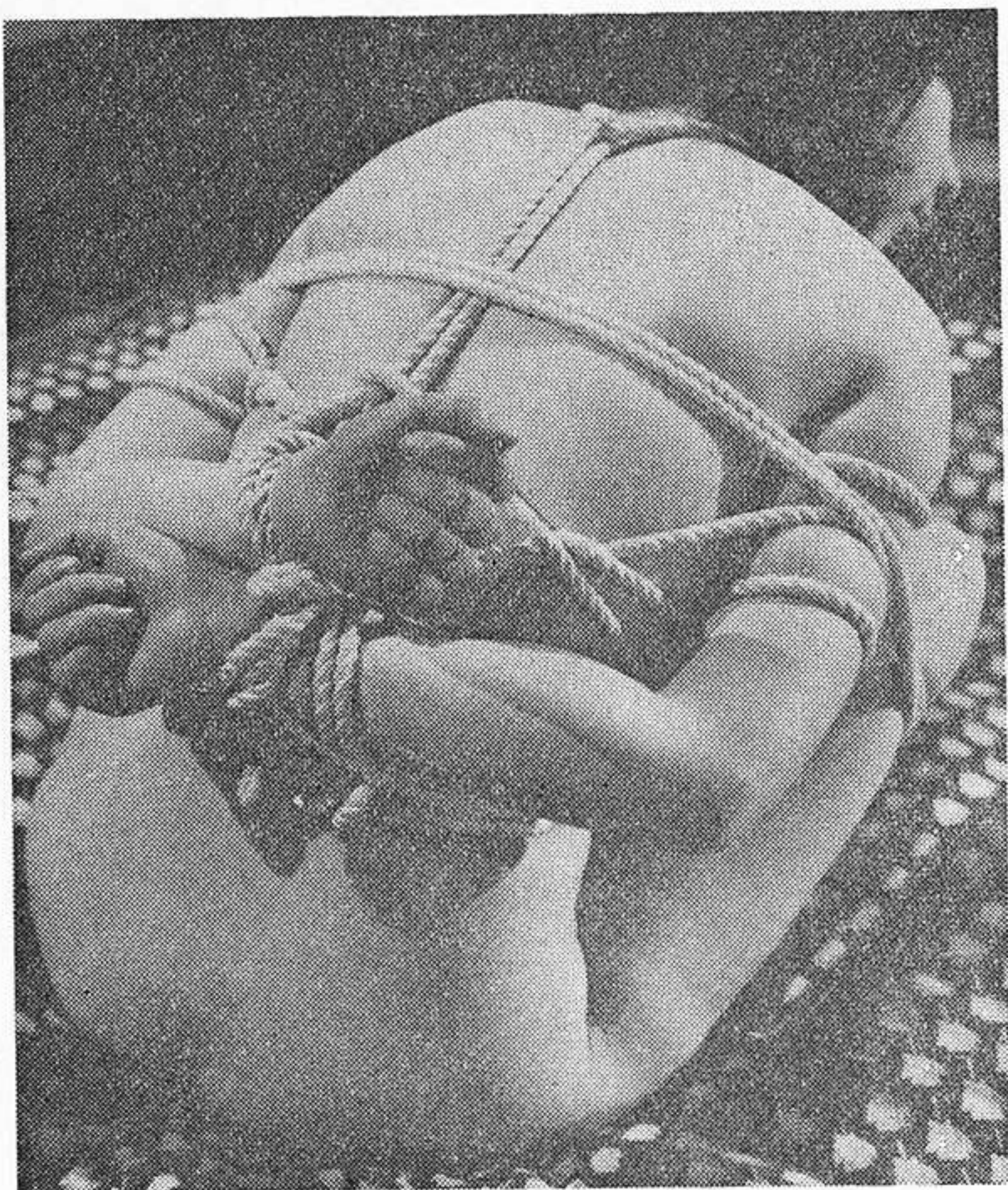
「まあ、いやだわ。うしろから、まる見えじゃないの。恥かしいわ」

「貴女だったら、身体が軟らかいから、ホラ、こんなに足が組めるだろう。どうだい、やってみようか」

「いや、いいんです、いいんです。そんなことしたら、私、どんなになるか知れませんわ」

私は前田真知子を敷布を剥いだ敷布団の上に転がしておいて言葉を交した。縛られたままの彼女は、その厳しい自分の肌の縄目を楽しむかのように、私に答えている。

思えば、最初、彼女を縛った頃から比べると、SMの感度は格段に生長しているといった感じがする。私は、このSM好みの女性、前田真知子が益々好き





になってきた。

あさなわ かんしば 麻縄の股間縛り

「あの、トイレへ行きたいんですけど、ちょっと、縄を解いて下さる？」

控え目な、彼女の懇願である。そういえば、こちらへ来てから、まだ一度も用足しはしていない。それに、一回も休憩らしい休憩も、していないのだ。ここらあたりで、小休止してもいいと思っていたのだが、私は意地悪く、一つの策略を、めぐらしていた。

「トイレへ行きたいって言うのかい。折角だが、今、縛り直したばかりだから、辛抱できなかつたら僕の見ている前で、この蒲団の上に、やってごらん。初めから終わりまでゆっくりと見ていてあげるから、安心して、やってみなさい。蒲団の上へするのも一風

変わっていて凄く気持ちのいいものだよ」

「いいや、いいんです。辛抱しますから」

彼女は私の言葉を真に受けている。

以前に、深田菊子や二、三の女性に、蒲団の上へ排尿させたことがあった。女性は辛抱づよいから、ぎりぎりのところまで我慢することは我慢するが、男性と違って、尿道そのものが短いから、一旦、出だしたとなると、あとは爆発的に迸り出て、もう止めようとしても止まらない。結局は泣きながら、出るだけのものを蒲団に、しみ込ませてしまうことになるのだ。

本来、排泄すべき個所ではない蒲団の上でトイレのように使用するということは、余程のことでないとは出来ないものだ。しかも、男性が好奇心に燃える目で見ている眼前においてということになれば尚更である。

「だって、オシッコしたいんだらう。無理に辛抱してたら、身体に悪いよ。遠慮しないでもいいから、ここでしてみたら？」

「そんなこと、出来ません」

「出来ないことはないだらう。蒲団の上がいやだったら、お風呂から洗面器を持ってきてあげるから、その中へ、しなさい」

「いやです。そんなこと——」

「どうしても、やらないんだナ」

私は彼女の左足にとりついて、いきなり足の裏に指を這わしていた。

「イイイ、イヤ、イヤ、やめてエ」

私の背中を右足で蹴って逃がれ様とする。

私は足首をしっかりとして左手で掴んで、右手の指を蹴へ、そろりそろりと触れるか触れないか、微妙なタッチを繰り返す。

「さあさあ、蒲団の上か、洗面器の中か、どちらが希望なんだ。どちらでも、お望み通りに、させてやるからナ」

「いやア、くすぐりたい、やめてエ」

とても、たまらない程くすぐりたいのだろう。足の指がピクピクと上下運動を、くり返していたのが、忙しそうに、ふるえ出した。

「よし、そんなにくすぐりたいか。それだったら、ここの名前を言ってごらん。そうしたら、縄を解いてトイレへ行かせてやる」

「ああ、それは、それは……。ああ、早く、早く、トイレへ行かせて——」

「それは、何と、呼ぶんだ。言ったら、すぐトイレへ行かせてやる。言わないナ。言わないんだったら、ホラ、こんなに……」

私の指は足の拇指の裏から、指と指の間へと執拗に這いずり回る。もう、さっきから尿

意は刻々と高まりつつあるのだろう。きつと満タンになっているのに違いはない。

「ヒエヤー、辛抱できないわ。もう勘忍、許して、許して。ねえ、許して、——」

私のS心は、いやが上にも昂^{たかぶ}ってきた。足の裏や指のマタばかりか、指の表面にも、そろそろと軽いタッチを繰り返していた。

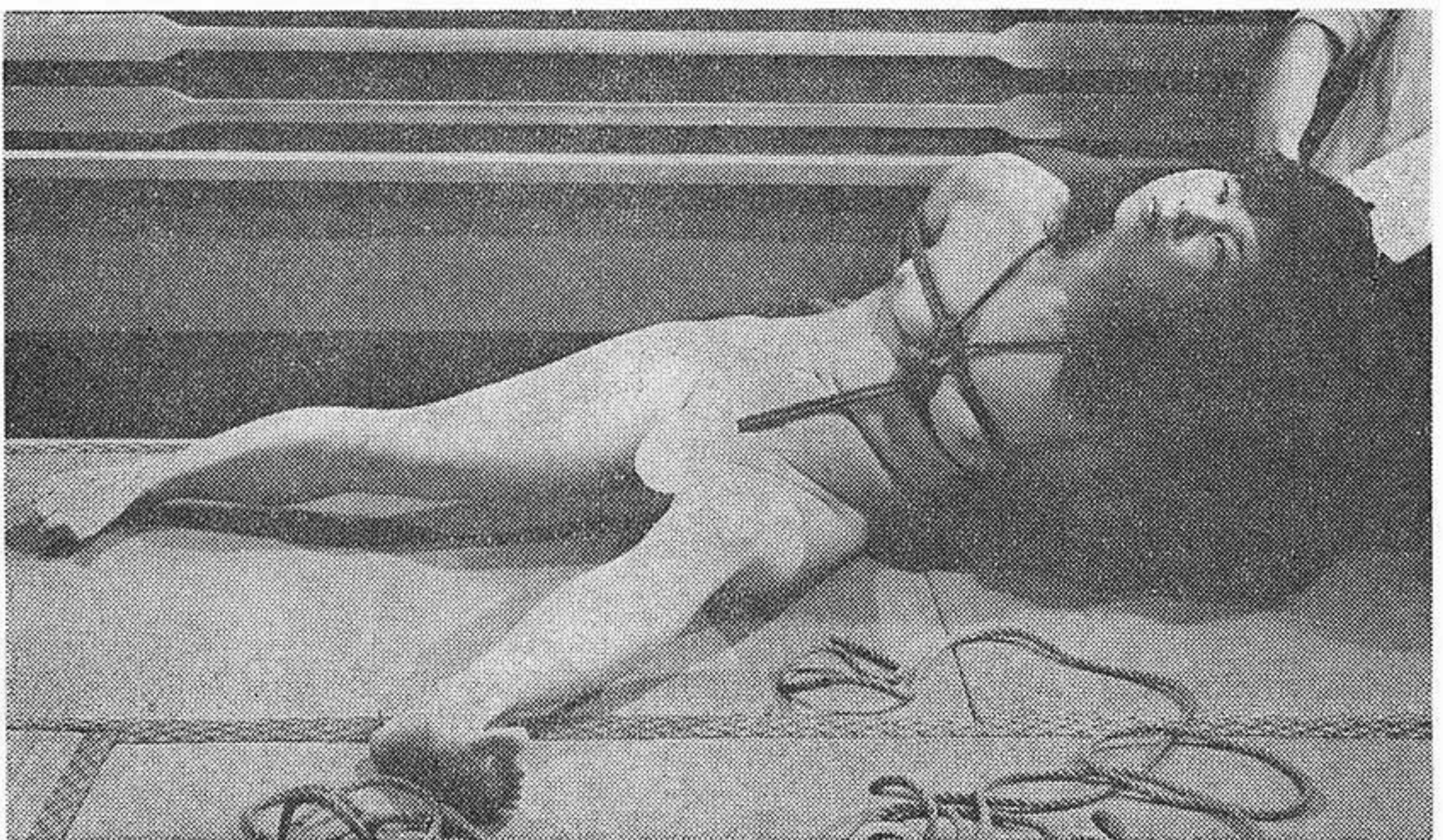
「だったら、ここの名前を言ってごらん。はっきり、言葉に出して言ったらすぐに許してやる。言ってごらん」

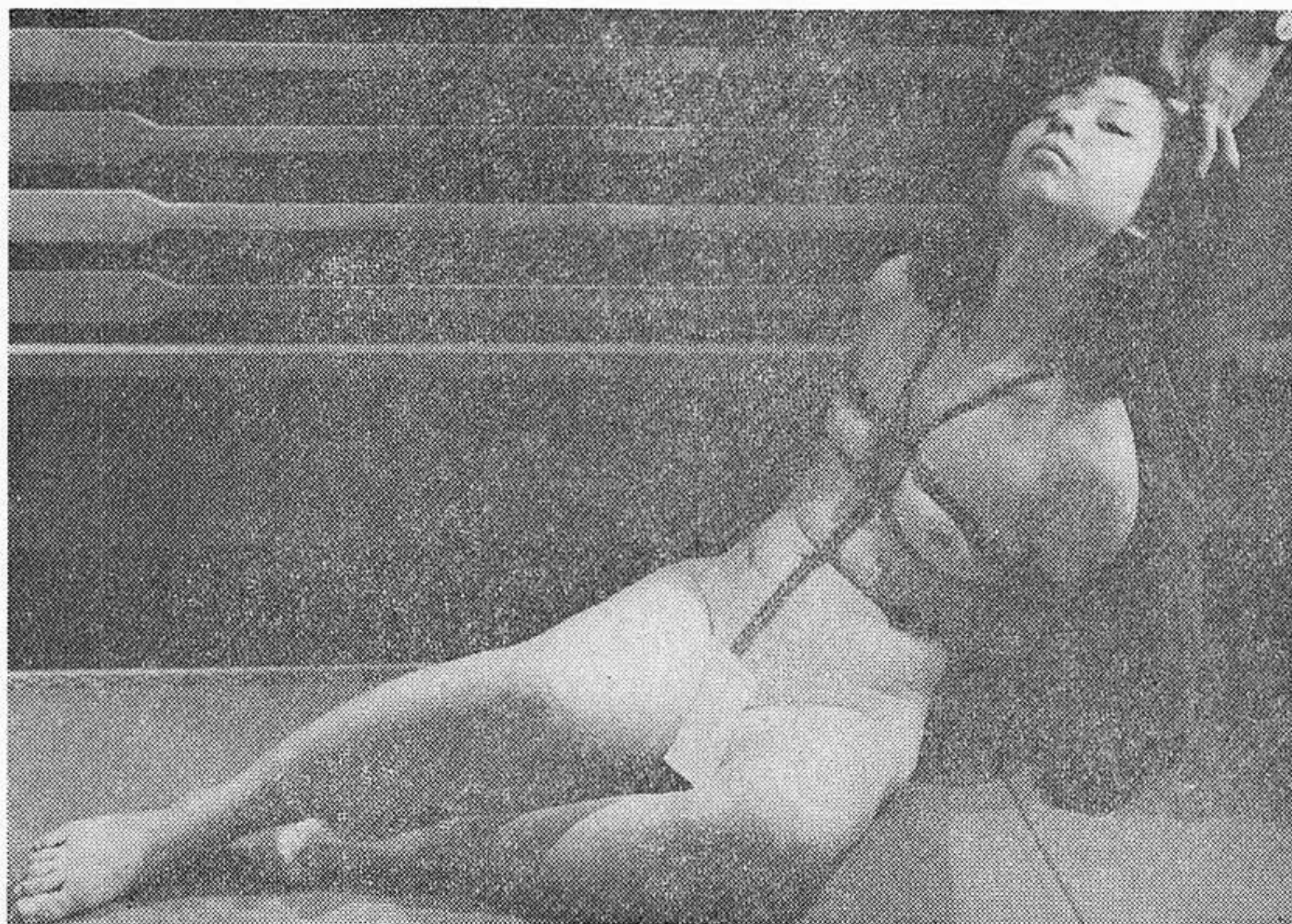
「そこは、そこは、×××です」

彼女は、やっと、その身体の部分の名前を言った。全身、汗みどろになりながら。

私は約束通り、縄を解いた。彼女は全部、解き終わるのを、待ちきれないようにして、縄をひきずりながらトイレへ駆け込んでいった。余程、辛抱していたのだろう。

排尿が終わって帰ってきた彼女のホツとした表情。その両方の手首には深く喰い込んだような縄目のあとが、ま





ことに痛々しい。

羽織っている浴衣を剥ぐと、乳房の上下、二の腕、背中、胴には、幾筋もの縄のアトが血をにじませて、くっきりと残っている。

蒲団の上へ排尿しなかって、私もやはりホッとした気持だった。だが、私は、ここで彼女を休ますことはしなかった。すぐに麻縄を手にするなり柔肌をぎゅうぎゅう締めつけて縄を操り「股間縛り」に仕上げた。

彼女が、さっき名前を口にした部分へ、トゲトゲしい麻縄が、埋没するようにむごたらしく、喰い込んでいる。

この「股間縛り」という責めの呼び名は、本誌でももう十数年も以前に、吾妻新氏が「感情教育」の中で羞恥責め的一种として提唱されたように思う。あれ以

来、私も幾人の女性に、この「股間縛り」という縛り方を用いてきたことだろうか。

縄の中途に、結び目とか瘤を作るとかいった新しい方法も試みられたことが、誌上に載っていたことも記憶にある。

荒尾慶子のように、好きな責め方の中に、「剃毛責め」と「股間縛り」という風に、特に、この縛り方を好む女性も少なくない。

前田真知子にしても、この縛り方が嫌いでないことは、私の縄の捌きを見ている彼女の目を見ていると、よくわかる。こんな、ゴツゴツとしたトゲのある麻縄を直接、柔肌に受けつけるということは、余程、縄に対しての許容性がないことには無理である。

彼女に対しては、私は現在では、いささかも手加減するところはなく、思いきり締めつけ、縄を喰い込ませて容赦しない。

彼女の美しい身体はどこに、このように、縄に対する免疫性があるのだろうか。

痛くて痛くて、たまらない程に厳しく緊縛して、縦半分、真っ二つに縄で割られた女体を、右に、左に、ゆさぶって弄んでみても彼女の口からは、悲鳴の一つも挙がらない。たしかに、前田真知子は、縄に対しては、滅法強いのだ。この抵抗力は、一体どこから

来たものだろうか。私は彼女のペンで、誌上に発表してほしいと切に願う。

「どうだい、痛くはないか」

私は強烈な麻縄の股間縛りを施した前田真知子の身体を、思いのままに、立たせたり、坐らせたり、押えついたりして、さんざん、ゆさぶり続けた。タテ縄がピンと緊張して、中腰にならないければ起てない程である。私は痛々しさを通り越して、少し不安になった。「いいんです。かまいません。少しぐらいの痛さだったら、辛抱しますから、続けてやって頂戴」

苦痛の表情よりも、苦痛のなかに潜在する快感の方に、うっとりとしている表情が、その清らかなフェイスの裏に窺えた。

ああ、それは、なんとという美しくも、あえかな表情であろうか。

「貴女は、縛りには中々強いですナ。感心しましたよ。もっと凄い縛り方じゃないと、満足しないんじゃないですか」

「そんなことはありませんわ。でも、この前にやられた吊りは好きでした。次には、いろんな吊り責めばかりして下さったら？」

「吊り責め、いいですナ。次は、是非、吊りばかり、やりたいですナ。今度は何月頃、来

られる予定ですか？」

「来月は駄目なんですけど、六月か七月には来れると思いますわ。そのときは、吊り責めをやって下さいます？」

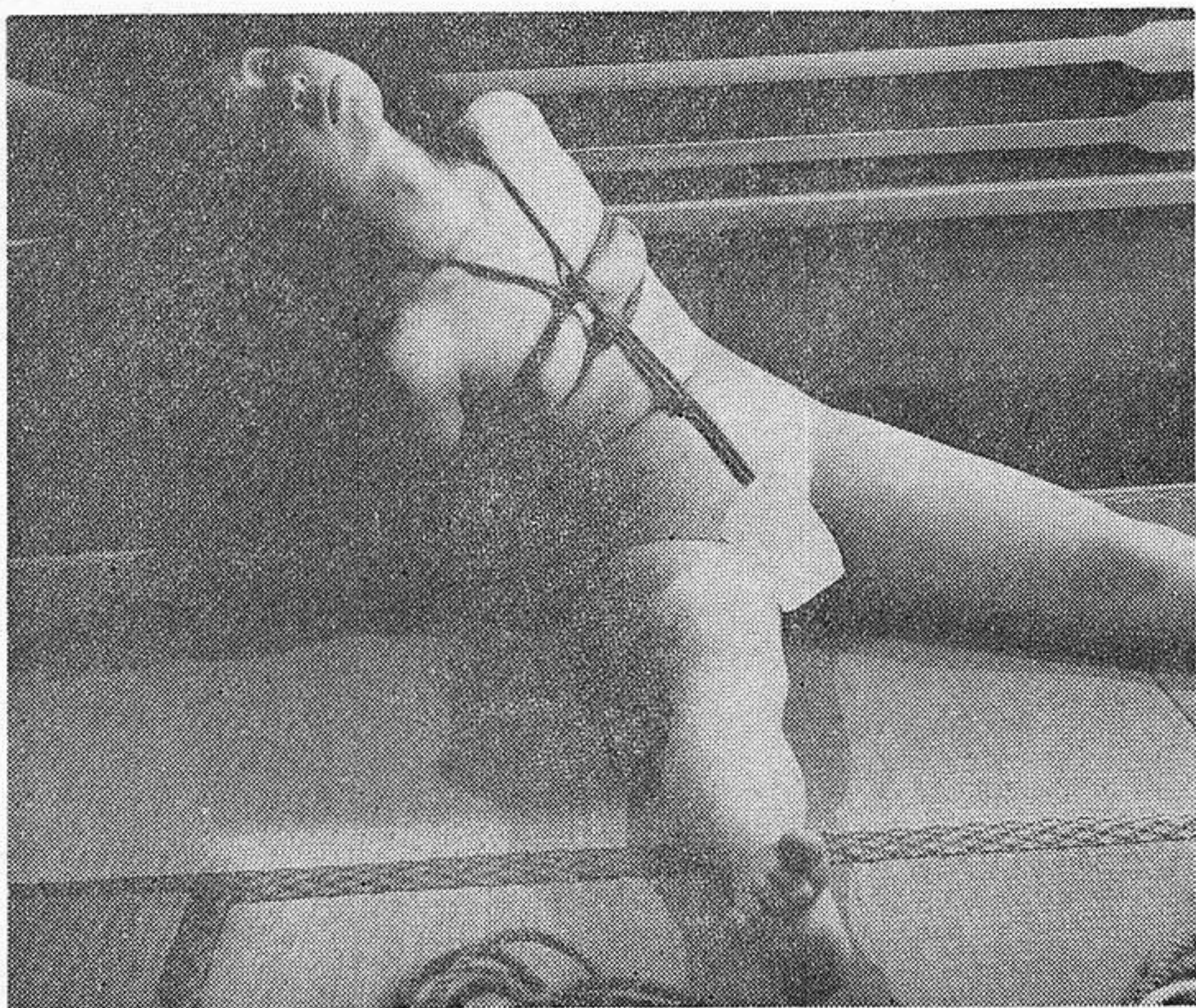
「ああ、きっとやりましょう。助手の人にも心当たりの人がありますから、いろんな吊り責めばかりやってみましょう。面白いですよ」

「楽しみに、していますわ」

彼女は、こうして縛られてるのが、如何にも嬉しそうである。

私は彼女の後手首を見た。麻縄が喰い込んで指先が、ドス赤く充血している。

その指に自分の左手の指をからませながら私は右腕で彼女の首を抱いていた。白く輝く肩口に唇を寄せて歯を当てていた。



軽く歯で噛みながら、肩から胸へ、胸から腹へと、唇を下ろしていった。

「ムムム、ムム、……」

彼女の口から、軽い呻き声が洩れたが、拒否の言葉は出なかった。

平安神宮の東側にあるこの樹立の中は至って静かで、車の警笛一つ聞こえなかった。

浴室での痴戯よくしつ ちぎ

「さっきは、蒲団の上でやらなかったから、今度は風呂場のタイルの上でどうだい？」

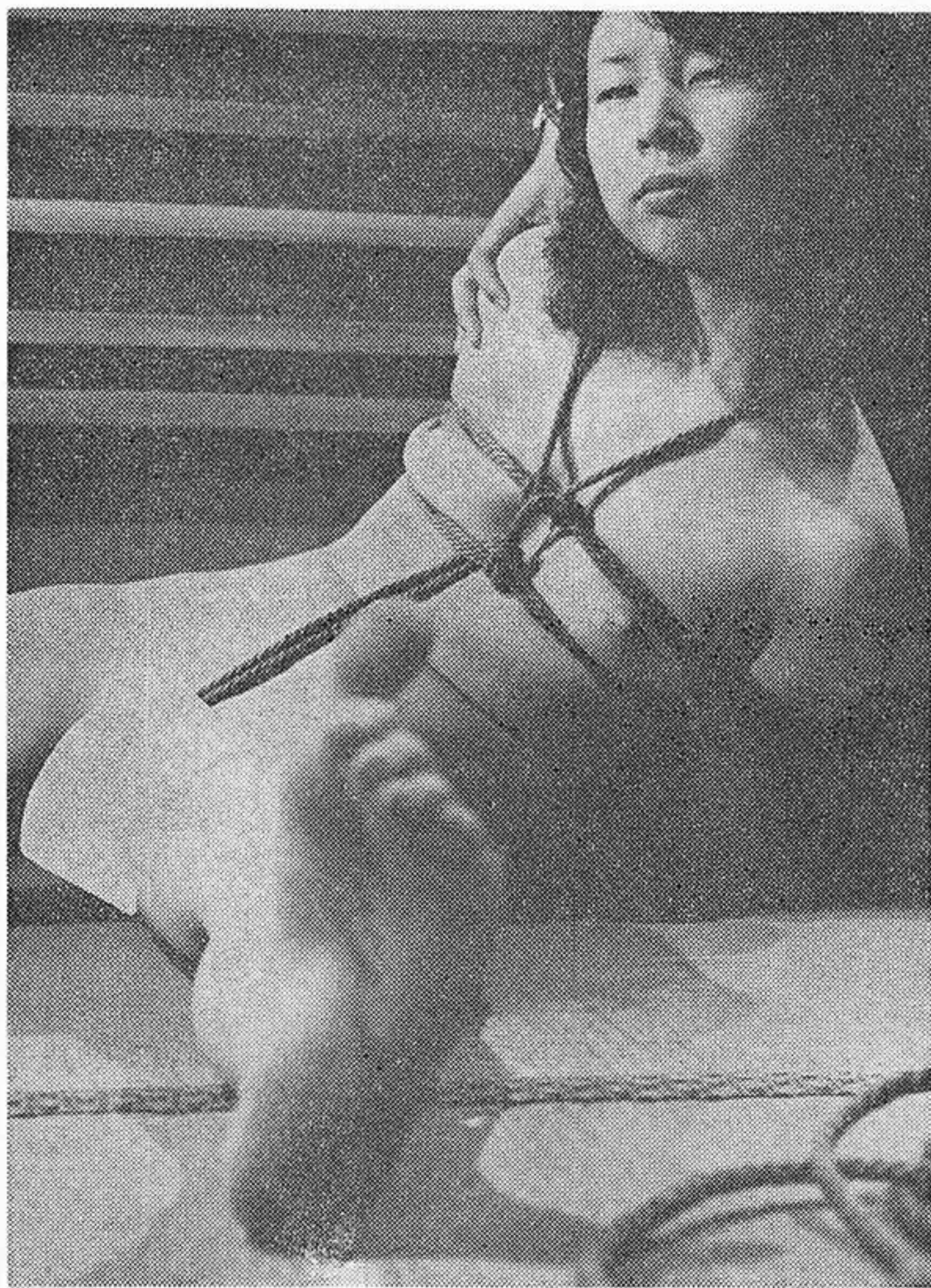
私が手で真似をすると、彼女は、さっと顔を赤らめて、生真面目に答える。

「もう、そんなに出ませんわよ。今、トイレへ行ってきたばかりですもの」

「そりゃ冗談だけど、少しぐらいだったら、出るだろう。タイルの上でやるのも、いいもんだよ。貴女さえよけりゃ、僕がこちらから見えてあげてもいいよ」

「いやいや、そんなこと。見ていられると思ったら、出ませんわよ」

「やはり、お茶かビールでも飲めますか。淡い



食塩水を沢山、飲ましてもいいらしいね」

「そんな、悪いことばかり、考えていらっしやるのね。いけない方だわ」

「それじゃ、出なけりゃ、出なくても仕方がないから、排泄のポーズだけでもするか」

「縛ったままですの、それ」

「ああ。貴女は、縛った方がいいんですよ。

さあ、こっちへ、いらっしやい」

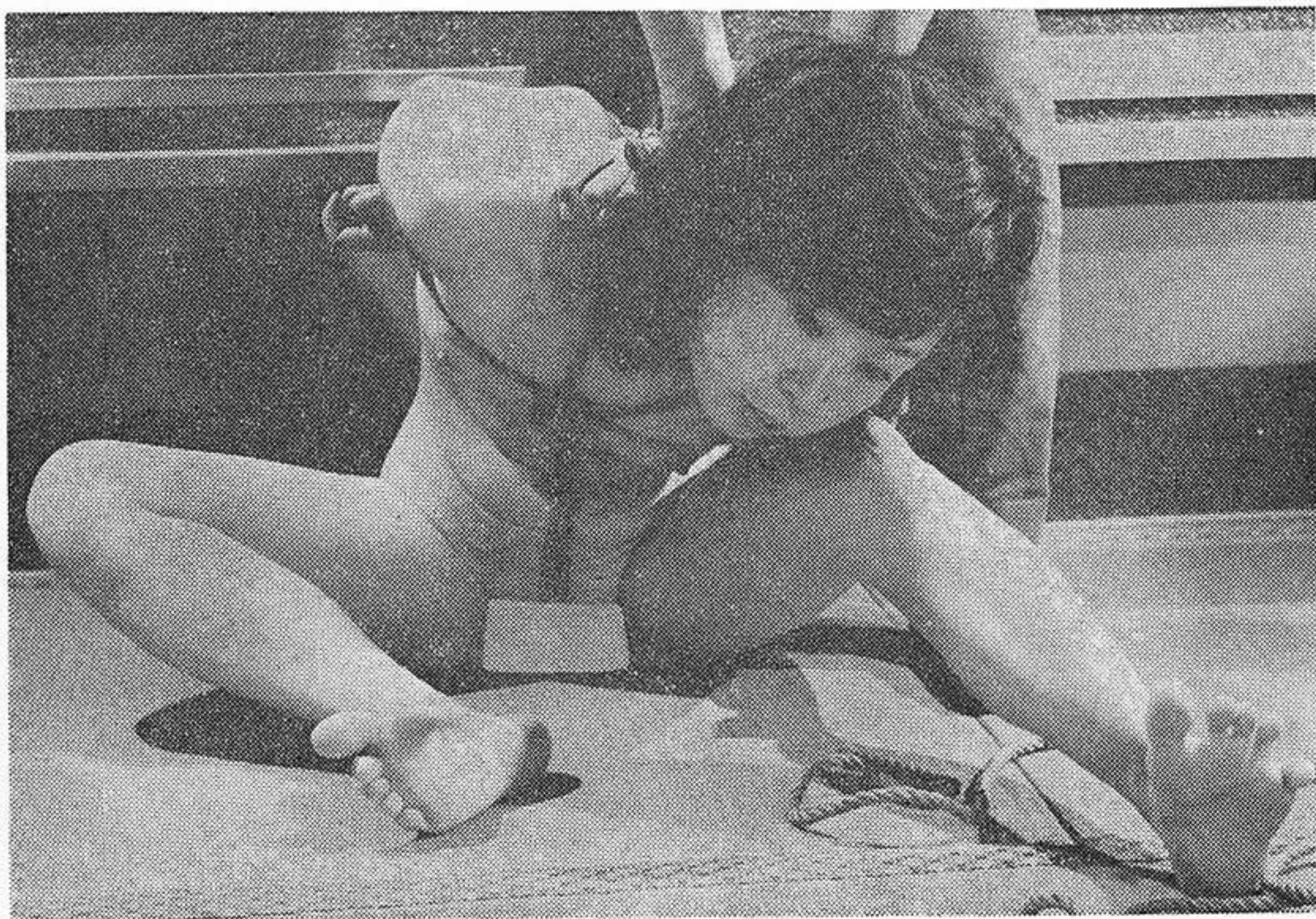
浴槽の湯は、もう殆ど微温湯に近いまでに冷えている。湯気もこもっていないので、カメラのレンズが曇らなくて助かる。昨年のも月、鈴木千鶴子を浴室で縛ったときは、外気温が低いところへもってきて、浴槽の湯が熱くて湯気が立ちこめ、レンズの曇りをハンカチで拭き拭き、撮ったことがあった。

縄を掛けられた前田真知子は、いそいそと

私について浴室へ入った。縛られると、俄然イキイキと生気が蘇ってくる彼女である。

△憎いから責めるのではない。食べてしまいたいくらい可愛いから責めるのだ△と、よく言われるが、なんだか、温い心と心との触れ合うような、なごやかな気持がしてくる。

この狭い浴室の中に、どのような悪魔が潜



んでいるかも知れないのに、全裸のまま縛られた前田真知子は、そっと素足をタイルの上へ印したのである。

このタイルに囲まれた密室が悦虐の園になるのか地獄の部屋になるのか、果たして彼女は知っているのだろうか。

私は型通りに、縛ったままの全裸の女体にポーズをとらして、シャッターを切っていた。それはオーソドックスなポーズであったが、私はそれだけでは満足しなかった。

彼女は動くたびに縄が柔肌に、めり込んでくるのも、いとわずに、私の命ずるポーズを、浴室のタイルの冷たい感触の中で、喜々として、とっていた。だが、そのうちにも私の体に巣くっていた悪魔の心は徐々に、その横しまな企みてを表面に出してきた。「そのままで正面を向いて、もっと脚を開いて見せる。も

っと、もっとだ」

「こうですよ」

「そうだ。その調子で、もっと開くんだ。遠慮しなくてもいいゾ」

私がカメラを構えた途端、彼女は、そこで動作を停めて、呻きだした。

「だって、だって、こんな……」

私の惨酷な意図を知った彼女は、自分のそのポーズに、耐えられない恥かしさを感じてよろよろとよろめいた。それは、そうである。私に言われたままとっていたポーズが、いつの間にやら正面に向かってトイレに入っているのと同じような格好になってしまっていたからである。

緊縛した太腿の稜線に、窓から洩れてくる鈍い光が当たって真珠のように光っている。

私はあわてて近寄り、よろめく彼女の身体を支えた。まだ稚さを秘めた乳房が、私の掌に、すっぽりと、はまっていた。情容赦なくぐんぐん締めつけた縄目は厳しかったが、彼女の身体の方は、クラゲのように柔軟であった。どんな極端なポーズでも、とれそうに思えた。私は彼女の背後から私をまわして、太股を思いきり開かせながら、正面へ向けさせた。全身の力を抜いた女体が、ともすれば、

後へ倒れかかろうとするのを前へ押し出すようにして、シャッターを切った。

一度シャッターを切ってしまうと、フィルム巻き上げとシャッターのセットをしなればならないが、私は暫く、そのままの姿勢で、じっと動かないでいる前田真知子を観察していた。ポーズをとるまでの抵抗が終わってしまい、一旦、そんなあられもない格好にされてしまうと、あとは、眺められることを楽しむかのように放心状態であった。

私は、自分の目で、じかに、ゆっくりと舐めまわすように眺めていた。

表面に現われているところが美しいように隠された個所もまた、極めて美しかった。

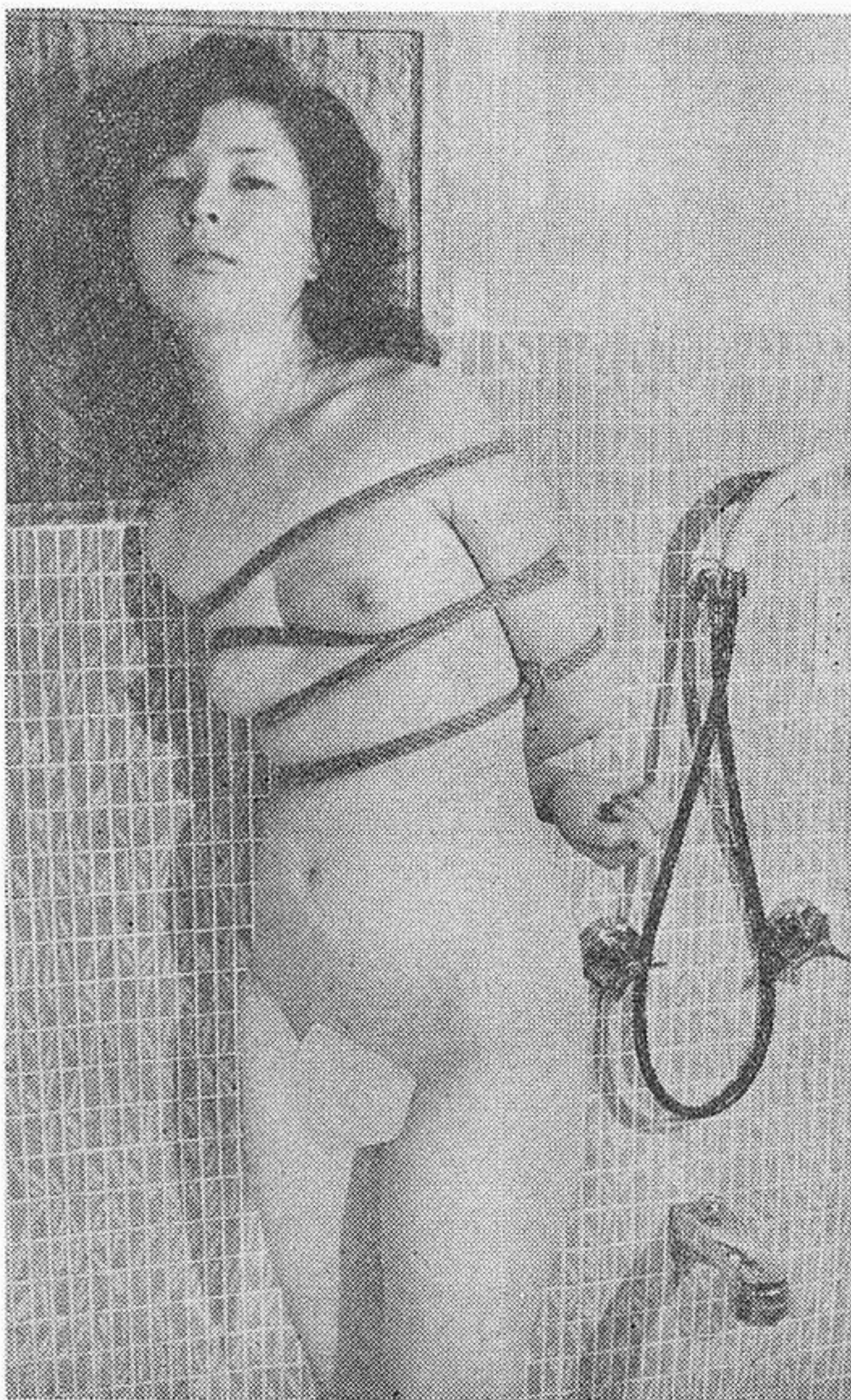
女子大生だった頃には見られなかった、成熟した女の臭いが、ムンムンと私の鼻先に匂ってきた。四面タイルで囲まれた、本来冷やかであるべき、この四角い密室には、えも言われぬ熱気が立ちこめていた。

「あの、もういいんですの？」

私に、見られるだけ見られてしまうと、放心からさめたように彼女は甘い声を出した。

「うん、カメラの方は、いいんだが、どうだこのままで出してみないかい？」

「ああ、今は出ないって言ったでしょ。そ



りゃ、蒲団の上じゃないですから、ここだったら、出たけりゃ出してもいいわ」

「そうか、だったら、出なくなるまで待つとしようか。僕は、なんとしても、目の前で、貴女が排尿するところを見たくってネ」

「あらあら、見て下さるの。だったら、思いつきり派手にしなきゃいけないのに、残念ながら、今は尿意はないのヨ」

「だったら、少しでも、いいから、出してご

らん。目の前で出るところが見たいんだ」

「悪趣味なのね。そりゃ、私も見られたいけど、出ないものは仕方ないわ」

「そうか、それだったら、さっきのように、擦り責めでもやって、ゆっくり待つとしようか。あれは面白かったからナ。そのうち、タイルで冷えて、したくなるだろう」

「いやですわ、擦られるのって、たまらないんですもの、辛抱できないわ。擦らなくても



出します出しますから——」

「そんなに物わかりがよいんだったら、別に擦りをしなくたって、いいんだよ」

「それでしたら、この縄を解いて下さる？ そうしたら、私、思いきって、正面から見て頂くわ。出しているところを——」

私は、あわてて彼女の縄を解いた。

カメラのセットをしてからピントを合わせ直して、撮影の準備はOK。

さて、彼女の方は、と、見れば、徒らに、もじもじしているばかりで、その気配は、さらさらない。

「おい、どうしたんだ。まだなんか？」

「それが出ないのよ。やっぱり、こんなところじゃ駄目ですわ。お風呂場ですもの、トイレじゃないから、無理ですよ。トイレでだったら、少

しでも出るんですけど……」

「それを出すのが、SMプレイじゃないか。それだったら、腋の下でも擦ってやろうか」

「いやいや、それだけは、やめて。なんとか努力してみますから、少しだけ待って——」

私はカメラのレリーズを握んだまま、じっと、息をのんで、その一点を凝視している。彼女は、きばっているが、中々出ない。

「さあ、早くせんか。もう待てないゾ」

私の叱咤が効を奏したのか、彼女の口から「ああ、あああ、ああ……」

吐息が洩れると共に、前面のタイルに、琥珀色の水流が激しく迸出した。

その水流が、みるみるうちに、タイルの上に溢れ出てくると、ジュジュジュ、ジュ……と間歇的に音を立て、あとから、あとから、ほのかな湯気の中に、ほんわかとした、えも言えぬ香気を伴って、私の鼻をくすぐった。それはそれは、奇麗な口にしたいような液体の流れであった。

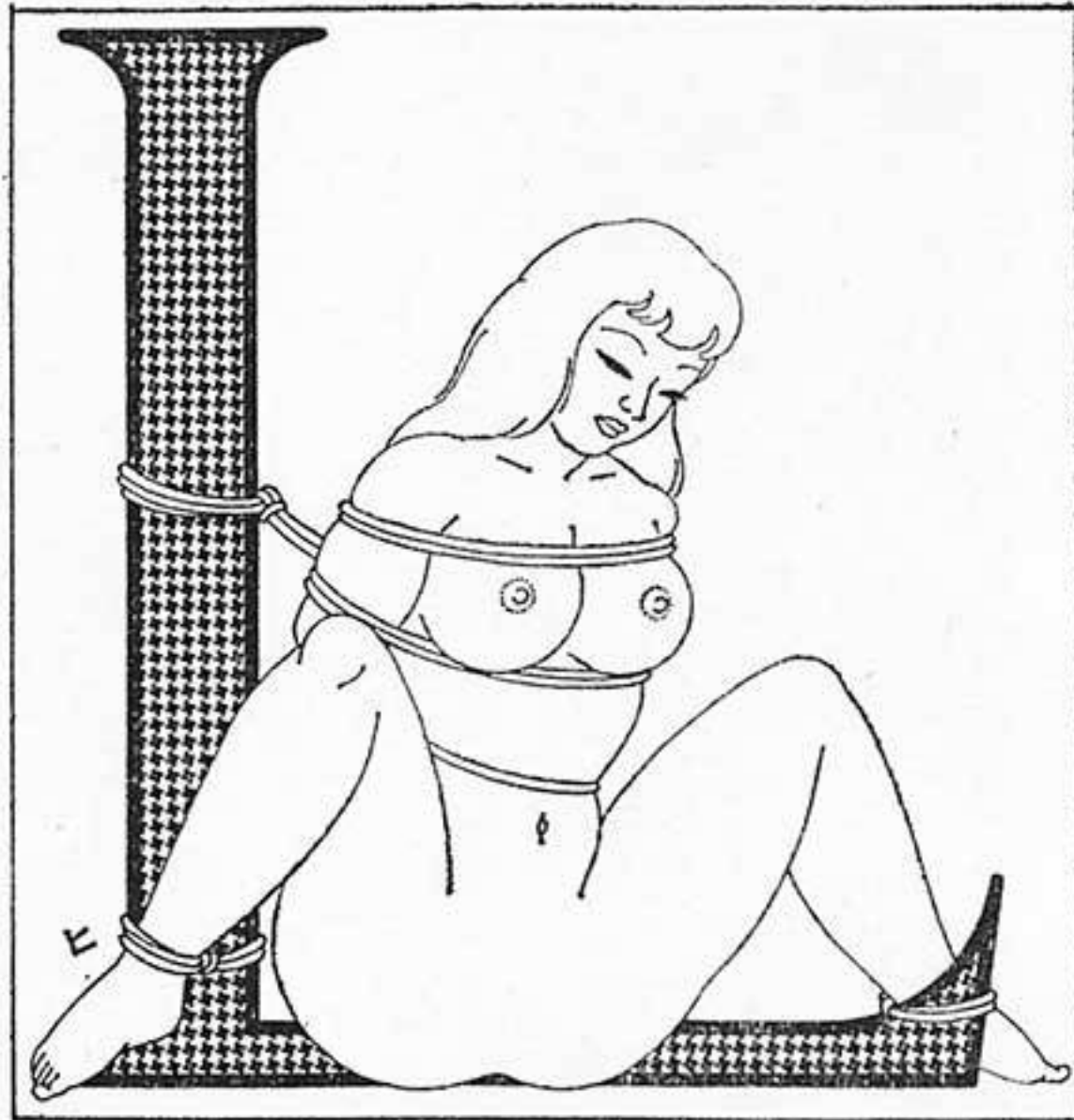
密室の中にストロボの閃光がきらめくと、あたりは一瞬、暗黒にとざされてしまった。ほのかな湯気の薫りの中で、私は夢心地のまま、暫く忘我の境地で突っ立っていた。

(おわり)

人獣交婚『犬と人との性』

小 杉 千 恵

カット・マエダヒオミ



..... [パロディ<花と蛇>雑感]

『パロディ花と蛇』毎号たのしく拝見しております。今年になってから、二月号から五月号まで、美しい京子、美津子の姉妹

つけられ、私は胸を、わくわくさせて読んだものでした。静子夫人と香港犬のお話が、しばらく、立ち消えになっておりま

が、法界や清次、それに五郎、三郎などの荒くれ男たちに、いたぶられておりますが、今年の十月号から、今年の一月号までは、静子夫人と小夜子が、いために

した折も折、十月号の八パロディ花と蛇Vにては、邪悪な好事家三人の要求によって、静子夫人対香港犬の妖艶きわまりない華麗なシヨの前奏曲ともいうべき、小夜子対南洋犬の羞恥場面が展開されそうな状況描写があり、私の胸をドキドキさせました。

女性というものは、たとえば、それが羞恥責めの一手段であったとしても、男性とのシヨを演ずることは、心のやすらぎを感じ、相手の存在に、より救いを感じるのです。

衆人環視の中での恥ずかしい姿に、もだえながらも、ぶ厚い男の胸の中で、自分と同じようにあえぐ男を意識した際、それは浣腸な

どでは味わえない女性としての感激を、本能として感じてしまうのです。

私たちM女性が一番に願望しますのは、救いも安らぎも許されない、恥かしくて恥かしくてたまらない、体中がうずいてしびれるような、羞恥責めなのです。裸にされるだけでなく、縄が、ぐるぐると体にまきつき、完全に自由を奪われてしまうことを望むのも、そのためだと思います。

生まれたままの姿で縛られ、巨犬と対峙させられて、好事家たちのみだらな目で鑑賞されながら、カラーの長尺8ミリフィルムに納められてゆくときの気持には、人間相手のときの安らぎも救いありません。犬という獣は、生来エッチな生物なのでしうか。鼻先にしゃがんでやるだけで、何も教えていない雑種犬でも、大喜びで、臭いの

強い個所をペロペロと舐めにくるものです。

小夜子が両脚を開かされて、お尻をまるだしにさえすれば、たったそれだけで、羞恥地獄につき落とされるのは、目に見える思いがします。まして、その方の調教済みの西洋犬でしたらその舌先だけで翻弄されること受けあいでしょう。

でも、小夜子と巨犬とのショ―ともなれば、私でなくても、多少の疑問を感じるのではないのでしょうか。それで私は、いろいろと、文献をあさってみました。お笑いになるかも知れませんが、大真面なのです。

『今昔物語』『南総里見八犬伝』『色縮緬百人後家』『婦人養草』『松屋筆記』『諸国奇談北遊記』など説話のたぐいも沢山、読んでみました。しかし、私はそのような固くらしいお話を、ここでご披露しようという気持はあ

りません。現在のお話の中で、犬と女性との関係の可能性のお話を、かいつまんで挙げハバロディ花と蛇Vの、小夜子対西洋犬のショ―の具

体性を、空想してみたいと思います。

そして、獣である犬に犯されるという羞恥に悶えながらも被虐にあえぐ小夜子を思い、私もまた、

そんな小夜子になったと仮想して悶えぬきたいと思うのです。

文献によりますと、大型犬ともなれば、概して人間より巨大らしく、一八九二年、ロッセという人の話では、未婚の女性がマスコフ種の巨犬と結合の最中に、物に驚いた犬が逃げだし重傷を負ったという事です。さらに一九〇三年、ミズリー州の一少女が、産婦



人科医に診療された記録に、局部の裂傷は犬から受けたものであった、と書かれていたということです。

我が国でも、ある雑誌（しごく真面目な固い月刊雑誌）に、次のような文章が載っておりまして、参考までに引用させていただきます。

「ある病院の婦人科へ、夜おそく

男の声で、電話がかかってきた。今、帰宅してみると、家内が犬ととんでもないことになって困っているから、すぐに某駅まで来て頂きたいというのだ。そこで宿直の医師がさっそく指定の駅まで出向いたが、どうしたのか、男はとうとう姿を見せなかったという。

たちの悪い、いたずらにしては念が入っている。しかしそうではないらしい。というのは、その時の電話の声は、非常に、真剣だったというからだ。では、なぜ男は、わざわざ自分で指定した駅で待っていないかったのだろうか。これに対する推測は、こうだ。

ご承知の通り、犬は亀頭球の膨脹により、一定時間、しっかりと固定したまま離れない。つまり、主人が深夜帰宅して見たときの状態はそれであったのであ

る。そこで、びっくり仰天して大急ぎで婦人科医の往診を求めたものの、やがて彼等は無事解放されたので、ホッと胸をなでおろし、かくて医者が必要はなくなつたというわけではあるまいか。

往診先に駅を指定したのは、近所への外聞をはばかったのではなからうか。この話は同病院のS博士から私が直接聞いた話である」

要するに、これから見ますと、受け入れ側に、その気さえあれば、多少の介添えで、女性は、犬を相手にできるということです。

雑種の中型犬ぐらいの大きさなら、完全無欠とまではいかないにしても、抱き上げただけで、その温かさや蠢きである程度の満足は、得られます。

西洋犬の巨犬ともなれば、



体重九十キロに及ぶものや、背高は七十六センチを越えるものも多く、犬類の習性に従えば当然、四つ這いでしょうし、その羞恥責めは最高と想像できます。

サンフランシスコやパリでは、娼婦が観覧料をとって、特殊な客に見せるものが出て、ニューファウンドランド犬や、ブルドッグが利用される場合が多いということ

が、文献に出ておりました。日本でも、戦後の混乱期には、俗にいう『シロ・ワン』が流行したそうですが、明治時代においても、長崎で一外人が日本の娘を捉えて猟犬と交わらせ、物議をかもしたことがあったと文献に記されておりました。

さて、八花と蛇Vの小夜子のお話に戻りますが、大きな宝石商のお嬢さんとして、蝶よ花よと育てあげられた、世間知らずの無垢な娘であった彼女が『シロ・ワン』なんて、全くご存知ないのは当然です。

今日は、森田組縁故の客人をお招きしたのでの催しなのですから、特別に精を出してお務めするのですよ、と千代から駄目を押されて、いつ

ものように、何もかも丸出しの恥かしい姿で後手に縛られ、曳き出された大広間の中央に、自分自身と対峙して、ずっしりとお尻をすえている巨犬を見ても小夜子は、これから加えられる羞かしめを予期できないかもしれません。

とはいっても、いつも以上の広間の熱っぽい雰囲気と、無気味な巨犬の存在から、おどましい予感を感じてふるえているに違いありません。いつ、その事実を、彼女は知らされるのか興味がつきません。そして、その時の彼女の心情と様子を想像して、私は燃えるのです。

出来るだけ高価な作品が生まれるよう、工夫をこらされるカメラ・アングル。それに好事家達に涎をたらさせるようなポーズ。そんな中で悶える小夜子の羞恥は、考えただけでも素晴らしいかぎりです。

よく調教され、すでに人間の女との経験豊富な巨大な西洋犬は、命ぜられるままに縛られて身動きもとれずに、すすり泣く小夜子のオッパイを舐め、生のままの美肌を嗅ぎまわりながら乳白色のお腹に舌を這わせ、お臍をくすぐり、スベスベとした下腹部へと、移ってゆくでしょう。

そして、やがては、普通の刺戟では飽き足らなくなった変態男達の息をのむ中で、プリンプリンと躍動する双丘の玩弄を、甘受することになりました。

中国の古書のなかには、女性が犬を相手にした場合の注意が

細々と誌されているのがございまして、驚きです。

先ず、「山を隔てて火に対す」（すなわち背向位）と、その姿態を、叙すことに始まって、最後に「人、犬と姦する時は、強いて解くなかれ、必ず災有り、淫終りて自然に離脱せん」（無理に離そうとすれば、必ず怪我をする。すめば、ひとりでに離れるものだ）と記されており、実に巧妙な言いまわしだと思いました。

長くて、よく動く、ざらざらした巨大の舌端で、すでに恥かしい喘ぎさえ、あらわに見られてしまった小夜子が、見物人の哄笑の渦の中で、死んでしまいたいような

をするかと考えただけでも、もう私は体中が、しびれて頭が、くらします。

小夜子にとって、もうこれ以上の屈辱と羞恥は外にはありませんでしょう。

手馴れた調教師の介添えで、拒否する、ひまもなく、好奇の生贄にされた小夜子は、泣くことも忘れて、只、羞かしさに悶えることでしょう。年若いお嬢さんとしてその心境はいかばかりでしょう。

好奇心とサジスチックな興奮の渦中であって、身悶えても身悶えても、絶対に逃げ出すことは不可能なのです。

毛の密生した尾のある巨大の尻と、むっちりと白く輝く可愛らしい小夜子の臀部とに真っ向から強烈なライトが照射され、8ミリが廻り、更に、徐々に心に反して歓喜のうめきをもらして、表情をくずしてゆく小夜子の美しい顔にストロボが閃くのです。

見事な美女凌辱シーンを撮影するために、強引に白い片足を挙げさせられても、また、路上で悲鳴をあげて曳きあう雌雄の駄犬のように、惨めな真似をさせられても、小夜子の意志ではどうすることも出来ずに、淫靡な、いたぶりのままに、見物人の見守る中で、のたうちまわるのです。

果ては、このおぞましい責めに悶え、結局は歓喜のあられない姿を露呈してしまう小夜子のことを想像しますと、被虐願望の妖火に身を焦がす私は、思わず胸をドキドキさせてしまうのです。

山光純さま。

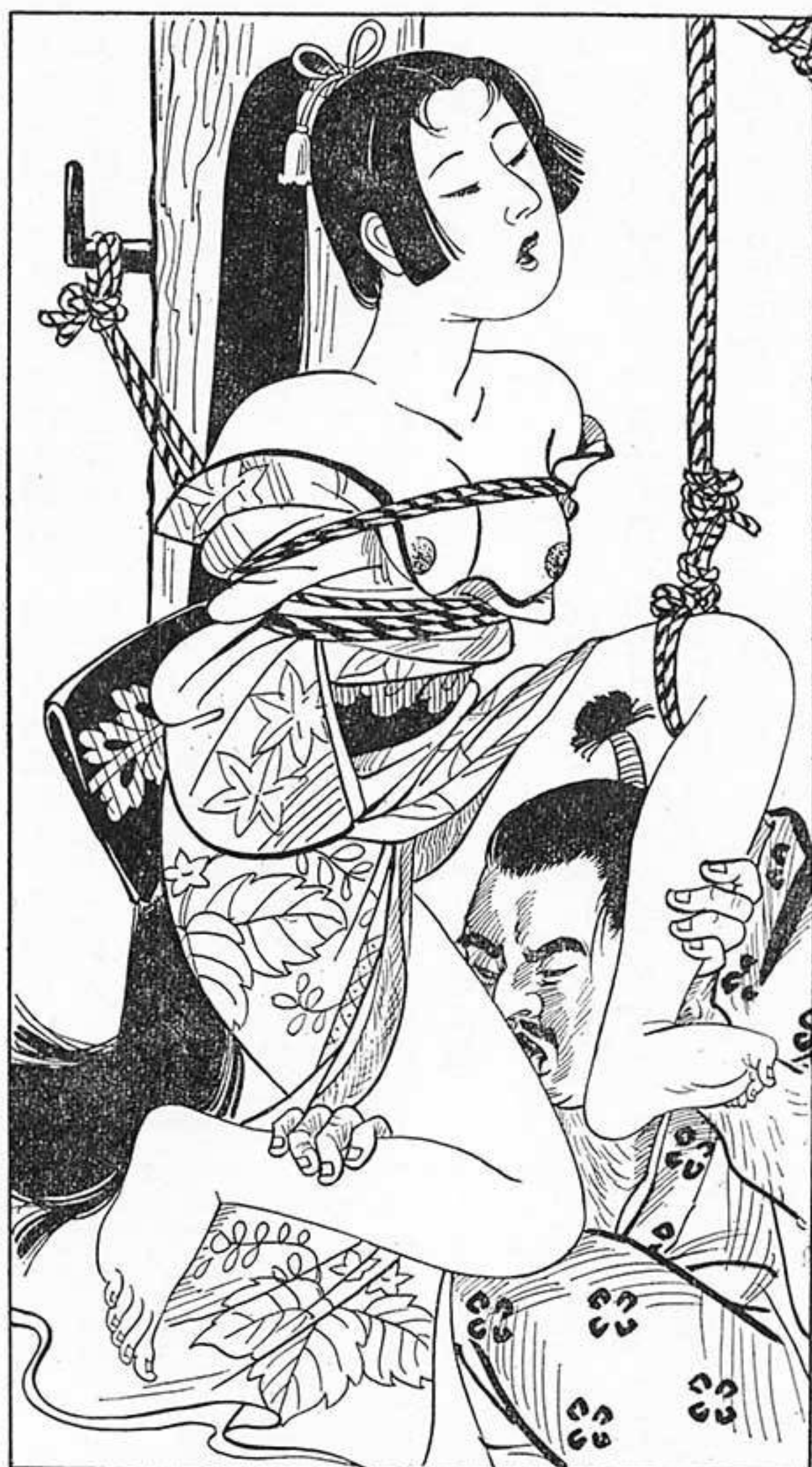
できるだけ、甘く、切なく、M女に生長してゆくであろう小夜子の羞恥責めにあう姿を描いて頂きたいと念じております。どうか、よろしく、お願い致します。

四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る 団鬼六作『花と蛇』特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した集大成ですが、重版刊行は致しません。只今、若干在庫があり、是非蔵書の一部にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号 暁出版株式会社へ。

略号「花」

定価五〇〇円（送共）



カッ ト ・ 岡 たかし

連載・時代S小説

紫

蘭

の

門

(23)

風 流 極

道 軒

酒ものまずに女を抱くのは

よほどの馬鹿か……

または古今無双の英雄かの

どちらかではなからうか？

へのへのもへの

日本橋から南に一里十一町——、
麻生六本木にある元禄屋の別邸の宏壮な庭
では、しっとりと朝露を宿したリンドウの花
が、どこから侵入してきたのか数匹の野犬に
踏みあらされて、みるも無残な、ありさまで
あった。

「ヒ、ヒイイ……」

庭の一角、こんもりと楓や樺の老樹にかこ
まれた幾棟か並ぶ土蔵のひとつから、かすか
に女の悲鳴が、きこえてきた。

ぴったりと、格子窓が閉ざされてはいるも

の、どうやら、何人かの男たちの蠢く気配が、二階のほうでする。

「お景姐御。穴沢流四つ搦み——いよいよ、始めることに、いたしやしょうぜ」

二階は、八畳ほどの拷問部屋であった。その中央に、一糸まとわぬ赤裸に剥きあげられてひきすえられている小紫のお景に、蒼白い顔をひきつらせて青蛇が、よびかけていた。

斑猿もいる、白豚もいる。

そして、親分の羅卒の鞭兵衛も、七尺豊かな巨軀を、裸頭燭のあかりに不気味に、うかびあがらせていた。

お景は、「甘美な惨めさ」のなかに、たゆたっていた。

四つ搦みの拷問をうけると誓い、手とり足とり「淫紋」を巻紙に捺印させられた、いま

前号まで——豊太閤が埋蔵した黄金の謎を秘める五夜のロザリオをめぐって、元禄屋の手におちている菊亭貴子が、淫ら責めに哭く。一方、麻布六本木の別邸では、怪盗・徳夜叉の情婦である小紫のお景が、羅卒の鞭兵衛たちに、穴沢流緊縛術の淫虐な拷問をうけ、貞操を蹂躪され、はては、官能の喜悦をひきずり出されて、「四つ搦み」の責めを甘受することを誓約させられて「淫紋」を押す。

となつては、ましてや、四人の男たちの惣嫁になつてしまつた後とあつては、どのような抵抗の姿勢が残されているというのだろうか。

「どうともするがよいさ」

ほかならぬ自分の伊達巻きで後手に縛りあげられた裸身をくねらせて、捨てばちでいうお景に、

「フッフッフ、じゃあ、姐さん。おとなしく、ここに乗ってもらいましようか」

白豚が、ぶよぶよに太った軀を、ドタツと畳のうえに大の字に、よこたえた。

「そ、その上にかえ」

「そうですとも。ヘッヘッヘへ、もちろん姐さんは下を向いてですよ」

「チッ、い、いけすかないったら、ありやあしないよ、まったく……」

唇を噛みしめたものの、云われるままになるほかはない。

チラツと青蛇たちの方を見上げて、ためらいの色を美しい顔にうかべたものの、「四つ搦み」から逃げるすべはないと、あきらめたのであろう。右膝から立ちあがると、白豚の傍へ、にじり寄るのであった。

「そうそう。その調子だ。だが、もっと、頭を右に出しな。胸もとにくっついていちゃあ

俺の場所がなくなるから」

白豚の胸に、顔を埋めているお景の髪をつかんで、ななめにずらせた青蛇は、

「次は、斑猿だ。お二人さんの上に腰をかける。尻の上じゃあいけねえ、くびれた腰の上だ。わかつているな」

「合点でさあ、兄貴。なにも、これが始めてじゃあ、あるめえし」

手足が異常に長いわりに小柄な斑猿は、その名に似て猿のような身軽さで、俯向きになつているお景の腰の上に、きものの裾をさばいて飛び乗った。

「お、おもしろいじゃあないのさ！」

いくら小柄といつても、そこは男。体重をのせられたお景は思わずそう叫んだが、重いのは、お景よりも、その下にいる白豚のほうであろう。が、お景と斑猿の二人を腹の上にのせて、少しは顔色をかえるかとみると、そうではなかった。これまた斑猿と同じように狂れているのであろう。ニヤニヤしながら二人分の体重をうけとめて、

「準備はいいですよ、親分」

と鞭兵衛を見上げて催促さえして見せた。

「フッフッフ。じゃあ、青蛇、俺が、まずさきに……」

鞭兵衛が、毛むくじゃらの向こう脛もあらわに、白豚とお景の四本の足が絡まりあっている方向から、にじり寄っていくと、

「親分。いっしょに、やりやしようよ、いっしょに」と青蛇も博多の角帯を解き、藍染めの裾を、さばくと、白豚の右脇から、よこにはみ出ているお景の顔の下に、膝を押し入れていくのであった。

穴沢流・四つ搦みとは、どうやら四人で責め廻ることであるらしいが、裸蠟燭の光の中に、うかびあがったお景の姿態を、もすこし仔細に眺めてみよう。

まず仰向けに「大」の字になった白豚の上に、俯伏している姿は、両手を縛られていることを別にすれば、何の変哲もないポーズと云えた。下にいる白豚が、両足をお景の脚にからませているところも、ごく平凡である。違っているところは、この二人の上に斑猿が乗っていることであつた。当然、お景の顔には、嫌悪の情がうかんでいるが、それを避ける方法は、もちろんない。

次いでお景の顔のすぐ前に、あぐらを組んだ青蛇が迫っており、そして、いまひとり、鞭兵衛が、お景の燦めく双臀に向かって座を占めているのである。

裸蠟燭が、大きく、またたき、五人の身動きが、ひとしきり、つづく。

「姐御。じゃあ、参りやすぜ。みなも、いいな。親分、どうです！」

と青蛇の声が、お景の頭上で、する。

「よかろうぜ、青蛇。だが、お景のほうは大丈夫かな」

「姐御、どうです。親分も、ああおっしゃってるんだが……拷問を始めさせて頂いてようござんすかい」

よいも悪いも、あるはずがなかった。

ムウーッとする男たちの体臭に、息苦しくなるのを覚えながら、お景は、

「勝、勝手におしよ！」

と叫んだが、なおも、あちこちを撫で廻す男たちの態度に、

「早く……早く始めたら、どうなのだろう！いつまでも、じらさないでさ！」

泣き声に近かった。

「フッフッフッ、お言葉に甘えて……文句云いっこなしですぜ、姐御」

毛むくじゃらの掌で、双臀をポンと、ひとたたきした鞭兵衛は、

「いいか、みんな。音頭は儂がとる。一……二！」

どこをどうされるのか、想像がつくだけにお景は、勝手におしよ——と云ったものの、気が気ではなく、一……二！という懸声をきいた、とたん、

「待、待って！ やめておくれよう！」

かなきり声をあげたが、ときは、すでにおそかった。

いっせいに——、四方からお景を包みこむように、容赦のない攻撃が、開始されたのである。

「一、二、三！」と、鞭兵衛が数をよみあげた瞬間、お景は、息がとまるばかりの激痛に襲われ、フラフラッと失心しそうになった。

「ム、ム……ムウ……」

あとは、とうてい言葉にはならなかった。怒濤にもてあそばされる小舟のように、お景は波頭たかく、もちあげられ、つづいて千仞の波の底へと突き落とされる、おもい——。

男たちが、なにやら、しきりに叫びあっているのも耳には入らず、もう、何がどうなったのかも、わからないままに、どのくらいのときが経過したであろうか。

どろっとした、鉛の塊りのようなものが胸の奥からこみあげてきて、思わず、背中に縛られたままの、両手を握りしめると、

「痛！ いたい！」

斑猿の、スットン狂な声があがり、つづいて鞭兵衛たちの笑いが、はつきりと耳にひびいてきた。

「ち、畜生！ けだものッ！」と、叫んだつもりの声は、「うッうッ……」と空しく喉にこもるだけである。

必死の力を振りしぼってみても、四方からの圧迫は、お景に身じろぎすらも許さない。

（あッ、ああ。と、徳夜叉さまあ……）

わが身のアマリの惨めさに、思わず念じる

お景に、絶え間なく加えられる苦痛の嵐。

苦痛は、いつのまにか疼痛に変わり、やがてそれが、悦虐の炎をともし。

（女って、なぜ、なぜ！ こうも……）

『綱渡り』のときにも、そして隣の部屋で、交替に責められたときにも——お景は、そう思い、自己嫌悪に陥ったものであったが、それが、その、あさましいほどの喜悦が、またぞろ、なさけ容赦なく、お景の裸身を押しつぶんでくるのであった。

早くも、それを察した鞭兵衛が、

「お景姐御。遠慮するこたあねえぜ」

と、にやりとした。わが意を得たといわんばかりの笑いである。

「姐御、それ。へのへの……へッへッへッ。もう一度、それ、へのへの……」

巷間、流布されているこの「へのへのもへの」という一見、何の意味も持たない語句の由来は、ここにある。男でもよろしい、女なら、なお、よろしい。「への」の字に、「の」の字に、続いて「へのもへ」という字を描くように双臀を揺り、最後に「の」の字を書くときすべての雑念は霧散するという。

もはや、お景には何も感じられなかった。自分がいま、どんな惨めな罵られかたをしているのか、そんなこともどうでもよかった。背後にねじあげられている両手が、何を激しく擱んでいるのかも、どうでもよかった。ともかく、お景は、うつこ、色に輝く裸身を、そのまま炬火と化して、産毛の一筋一筋にいたるまでを悦虐の焰のなかに投げこんでいたのであった。

しゃぶしゃぶ騷り

お景が、われに返ったときには、格子窓の隙間から、朝日が、一条の矢のように射しこ

んでいた。

「どうでい、四ツ搦み拷問は。よい責められ気分だったじゃあないかい、お景」

鞭兵衛が、盃を口に運びながら云うと、
「よい気分もなにもあったものじゃありませんや。姐御のすさまじさには、もう感心するばかりで」

と斑猿が、膝をすすめて、お景の柔肌を縛めていた真紅の伊達巻を解きはじめる。

「まったくですぜ、姐さん。姐さんのような女を責めていたのでは、拷問役のほうで、身がもちませんや」

白豚は、すこぶるの上機嫌で、斑猿に縄解かれていく、お景の裸身を、眩そうに眺めるのであった。

お景は、何ひとつ、云わなかった。

それでも自由になると、縄目の厳しさを示すように赤くそまっている手首の縄痕を撫でていたが、すぐ、ハッと気付いて、前をかくそうと両手を持っていく。

「ハッハッハッ、もう、隠したって始まるめえよ、お景。さあ、こちらへきて、めしでも喰いねえ。せいぜい、精のつくものを揃えておいたから」

並べられた据え膳の上には、各種の肴が乗

っていた。

責められつづけて、たしかに空腹ではあった。だが、食膳を見た、とたんに、なにやらむかつくような臭いが、胸の底から、こみあげてきた。

(そ、そうだわ。これはきつと青蛇の……)

こみあげてくるものを、ペェツと吐き出そうとしたが、そこは、やはり女の身。青蛇に吹きかけることもできず、かとして、青畳に向かつて唾することもできない。

その困惑した顔を眺めた白豚が、

「姐御。これに吐いたらどうだい」

と、取りあげたのは、とき色の湯文字であった。

ここに連れこまれたのが、昨日の四つ(十時)頃だったから、もうおっつけ、まる一日がたつことになる。見廻すと、あちこちに真岡つむぎのきものを始め、江戸小紋の細帯、縦しぼりの腰紐、長襦袢と、無理矢理に脱がされた小物類が、さむざむと、ちらばっている。いま白豚が、拾いあげたのも、自分自身の腰のものであった。

「かまうこたあねえだろう。俺があとで洗ってやるからさ」

(いやなことだよ!)と眉をひそめたものの

考えてみれば、それよりほかに適当な方法もない。つきつけられるまま、唾をしたものほんのりと自分の体臭がただようその湯文字に、お景は、いうに云われない羞恥をおぼえるのであった。

(これが妾の匂いなよ。それなのに、いまの妾ったら!) たしかに、いまのお景からは桜鯛と蜂蜜の香いと白豚が形容した得難い香りは、ただよってはいなかった。その代りに男たちの体臭が、むんむんするほど肌にしみこみ、湯に入って何度も何度も洗いおとさないかぎり、消えようとは思われない。

(恥かしい……) 思わず、うつむいた、お景の顔を、のぞきこむようにした白豚が、

「ちょっとくらい見せてくれたっていいじゃないかい、ええ、姐御」

しっかりと押えている腕を、払われて、

「アッ、な、なにをするのさ!」

お景が、あわてた。

「いいてことよ。そこらここいらにあるような代物じゃあねえ。古今無双の逸品だ。隠しておくにゃあ、もってえねえ話だぜ」

颯るようにいうと強引にお景の腕を掴んで揺りうごかしたから、お景は、いっそう顔を赫くそめ、上体を曲げて、

「か、かんにんしておくれよう。もう、これ以上、颯らなくても、よさそうなものじゃないのかえ……」

あまりにも、しつこい攻撃に、つい、われ知らず右手が動いて白豚の頬を打った。

「い、いて、ててて……」

おおげさな声だけで痛がってみせた白豚は打たれたあとを押えもせず、

「斑猿の兄貴、すまねえが、うしろから押えてやっておくんせえ。こいつを少し、温ためてみてえから」

と、小鉢のなかの刺身を指さす。

「フッフッフ。そうか、よからう。〃しゃぶしゃぶ〃というのもおつな料理だ」

白く、脂ののったその刺身は、鯛、それも桜鯛のおつくりとみえた。

それを〃しゃぶしゃぶ〃にするといい。

「面白いじゃあねえか、俺も手伝うぜ」

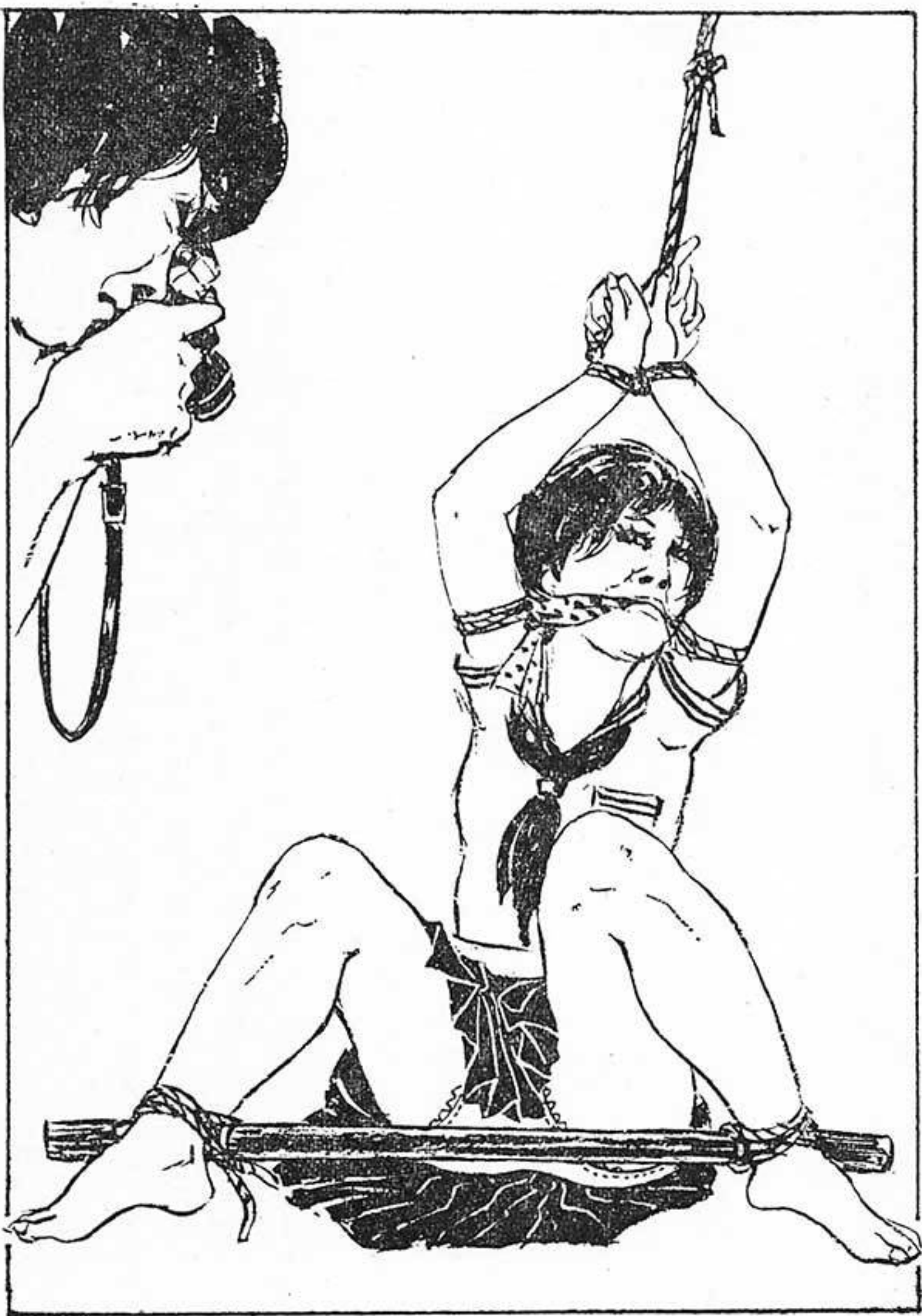
青蛇までが、そういうと、斑猿に、お景の左手をとるように目配せして、自分は、お景の右手首を、がっちりと掴み、

「じたばたするんじゃねえぜ、姐御」

左右の手を、青蛇と斑猿に、同時に逆手にとられて背後にねじりあげられたお景の膝が崩れ、双臀がもろくも畳にべったりとつく。

「痛、痛いじゃあないのさ！」
ちぎれるように痛む腕のつけねをかばおう
として、思わず、膝がひらく。その左の太腿
に、グイッと軀をあずけた白豚は、
「姐さん。動いちゃあいけねえぜ」

といいながら、箸で刺身のひときれを、は
さむと、それを、なんのためらいもなく、押
えた太腿に沿わせて運んでいくのであった。
「い、いやだよう、そんな……」
フワ、フワッと触れるおぞましい刺身の感



イメージギャラリー

『青春の羞悦記録』

志 羽 利 也

触に、烈しく身を悶えさせるものの、なんの
役にもたたず、かえって逆手にとられている
腕が痛むだけ。

「や、やめて。やめておくれよう！」

昂まった悲鳴が、プツンときれると、あと
は、大きくのけぞろうとした裸身が、ピクピ
クッと痙攣して、全身の力が萎える。

と――

新しいおぞましが襲いかかってくる。つ
づいて、もう一回、さらに、一回。あわせて
四切れもの刺身。それぞれ一片ずつを試食し
ようという魂胆からであろうか。

『しゃぶしゃぶ』という料理は、十数年前の
文化年間に、当時、江戸で十八大通の一人に
数えられた暁雨の名で知られる大口屋治兵衛
が食べ始めたという。

普通のおつくりでよいものを、そこは「通
人」とよばれ、変わった趣向を凝らすことに
生甲斐を感じる大口屋。魚の肉を「生」で喰
うのは処女を喰うに同じ。新鮮ではあろうが
味もそっけもない。かとして煮たり焼いたりし
て喰うのは姥桜、大年増の味覚だというので
沸かした湯に、おつくりを浸し、適度に熟し
たところで喰うのをもって最上とした。

箸でつまんで、湯に浸して動かすとき、しゃぶ、しゃぶという音がするところから、名付けられたものだというが、これが、いつのまにか吉原を中心に流行し、やがて江戸中にひろまっていった。

要は、処女のように未熟でも、大年増の爛熟・成熟でもなく、男を知りそめた頃の二十代後半から三十代前半にかけての女の「味」というところであろうが、それをいま白豚たちは、お湯ではなく、お景の体温で、ためし喰いを試みようというのである。

「どのくらいの時間がかかるものですかね、親分」

自分で言いだしながら白豚にも、てんで見当が、つかない。

ぐったりとなつて、長い睫毛を伏せているお景の紅珊瑚のような乳首が、斑猿の掌のなかで転んでいる、あやしい光景を眺めながらものの五、六回も鞭兵衛たちが、大盃を次々と廻したときであつたらうか、

「もうおっつけ、いいのじゃあねえかな。なにさま、ほれ、こんなに、あつたけえ駄だ」ふっくらとした乳房に、毛むくじらの手をあてて、その重さを楽しみながら鞭兵衛が

酒くさい息を、お景の横顔に吹っかけた。

「そうですね。じゃあ、ぼちぼちと……」

長い紅色の箸を取りあげる白豚。

「姐さん。よいですね、動かないように」

やきものの名人が、心血を注いだ茶碗を窯（かま）出しするときは、このようであろうかと思われるほどの真剣な顔付きである。

「ア、アウ……な、なにをするのさ！」

お景の唇から悲鳴が洩れた。

「このままじゃあ困るだろうと、白豚が親切心でやっていることさ。騒ぐんじゃあねえ」

右手を逆手にとっている青蛇が、桜貝のうにほてっている、お景の耳元で、いう。

「ア、アッ！ ひ、ひどい。ひどいじゃあないかい！ ア、アレッ！」

——シャブ、シャブ……という音は、しなかった。

「ヒ、ヨオ！」

白豚の奇声があがって、思わずお景の、瞳も、ひらいた。

「姐さん、ほれほれ！ よくごらんせえ。」

上出来、上出来！ “太閤”も顔負けだね」

“太閤”というのは、深川にある“しゃぶしゃぶ”では名の、とおった料亭である。

どこで知ったか白豚は、得意そうにその名

をあげたが、お景にも、いや、鞭兵衛たちにも、そんな言葉は耳には入らない。お景は恥かしさのために、そして鞭兵衛たちは、好奇心から——。

長い紅色の箸のさきには、桜鯛の刺身の一片があつた。

ついさきほどまで脂ののった白さに輝いていた、それは、乳白色から淡紅色に色づいて食べられるのを待っているように見える。

「ゆ、ゆ、湯気がたってますぜ、親分！ ヘッヘ……。まずは、お毒味を！」

ポイツと白豚は、口のなかに抛りこむ。

そして、まんじりともせずに眺める斑猿たちの視線のなかで、ゆっくりと噛みしめ噛みしめて味わうのである。

——ゴクン——と咽喉が鳴って、

「う、うめえ、うめえのなんのって、これほど、うめえものを俺、喰ったことがねえ！」

と、——

「い、いけすかないったら、ありやあしないよ！ ど、どこまで妾をいじめたら気が、すむのだえ！」

お景が、せいっぱいの抗議の声をあげたが、男たちにきこえるはずがなかった。

二片目は、鞭兵衛に献じられ、つづいて青

蛇、斑猿が、三片、四片と口に入れる。

旨そうに男たちは食べる。ニヤニヤしながら、舌のさきで味わっているのだ。

「お、お前さんたち……ほ、ほんとに、ひ、非道い……ひどい、ひどい！」

喰べおわると、今度は鞭兵衛自身が、更に箸をとりあげる。

女にとって、それはあまりにも、おぞましい拷問であった。

泣き声をあげて暴れ廻るのを、押えつけ、「恥、恥知らず……畜生……鬼！」

泣き声の合間に投げつける罵りも、そしてぬ顔で鞭兵衛たちは、この「しゃぶしゃぶ」遊びをいつまでもやめようとはしなかった。

やがて、格子窓からさしこむ朝の光が、裸蠟燭の明るさを凌いだころであつたらうか。

「姐御も、どうだい、喰ってみちゃあ」

白豚は、その一片をお景の鼻のさきにつけさせした。そして——、もう、左右に振る気力もなくなった鼻をつまみあげられ、唇の中に、おとしこまれた。

かるい吐気がして、五体が震える。

「どうだ、美味えだろう、お景」

酒のせいで赤鬼のようになった顔を、ひきつけて鞭兵衛が笑う。

「な、なにがさ、こ、こんなもの！」

やっとこれだけ言ったお景の額には、玉のような汗が、うかんでいた。

「フッフッフ、一宿一飯の恩義ということもあらあ。こうしてめしを喰わせてもらった以上は、恩を返してもらうぜ、その躰でな」

鞭兵衛は、もう、この「可愛い女」を手離すつもりはなかった。

いつまでも、ここに閉じこめて、好きなときに、自分も抱き、子分たちにも抱かせ、はては、訪ねてくる客たちにも勝手に賜らせるのが面白かうと思っていた。

元禄屋もそれを許してくれるに違いない。

「まあ、しばらくは、ここで暮してもらうことにするさ。フッフッフ……、豊香も、千登世も、あそこにいることだし、こいつは、まったく楽しみだぜ」

鞭兵衛が立ち上がって、格子窓を開いた。

その向こうに、櫓や檜の老樹の梢越しに、いくつもの土蔵が並んでいる。そのひとつに豊香も千登世も、幽閉されているはずである。

すでに、高くのぼった太陽の光が、眩いばかりに拷問部屋に流れこむ。

その光線の束を、一糸まとわぬ裸身に受けて、お景は、ひたすら慕しいひとの名を呼び

続けるのであった。

襲撃！ 麻布別邸

小紫のお景の思いが、徳夜叉に伝わらぬはずはなかった。

虹の陣兵と洗い髪のお妻の急報をすでに受けていた徳夜叉は、図書の六孫王を始めとする四天王の面々と相談、青梅街道を八王子から南にそれた隠れ家から指示をとばして、五百を越える配下のなかから屈強の二十余人を集めると、二日後の夜、麻布六本木の元禄屋の別邸を急襲したのであった。

ときの將軍家斉の御落胤と噂される白哲端正な貴公子・徳夜叉の練りに練った計画は、小紫のお景を、無事、淫虐な土蔵のなかから救出するはずであった。

が——、

そこには強力な敵がたちふさがっていた。

十五等身くらいであろうか、やけに小さい頭に、猿のミイラのような顔、立身出世のためであれば水魚の交わりを結んだ親友でさえ密告しかねない男——幕府探索方・間宮林蔵の存在であった。

たまたま、九州は薩摩藩の沖縄との密貿易

の調査を終わり、江戸に帰ってきていた彼は老中領田下野の内命をうけて徳夜叉の身辺を洗っていたのである。

狡猾、辣腕をもって鳴るその捜査は、忽然として二十余人の男たちが江戸の町々から姿を隠した事実をつきとめ、その裏に、徳夜叉の存在を予想し、北町奉行所の鬼与力・工頭監物の耳に入れた。元禄屋とは昵懇であり、一度、徳夜叉を郊外の分倍川原八幡宮の境内で取り逃がしている工頭は、今度こそ一世の怪盗を捕える好機と勇みたち、日本橋の本宅はもちろん、雑司ヶ谷と麻布の二カ所にある元禄屋の別邸を蟻の這いでるすきまもないほど、かためたのであった。

なかでもお景を捕えてある麻布の別邸には領田下野のはからいで、百挺をこえる火縄銃を用意して、いつでもござれ——と準備万端を整えて待っていた。

その鉄桶の陣のなかへ、徳夜叉たち二十余名は、強襲をかけたのである。杖舎の茶々丸の内偵で、敵の警戒が頗る厳しいことは察していたが、いざとなれば、飛香の小式部の種ヶ島が火を噴くと、おりから十六夜の月も密雲に閉ざされた丑の下刻、人みなが寝静まったころに行動を開始した。

先ず茶々丸が、塀をのりこえ、つづいて裏木戸をあけ、一同がそれぞれ、広壮な庭の植込みや燈籠、林のなかに身をひそめたときには、邸内に何の変化も認められなかった。

ところが、目指す土蔵に忍びより、大力無双の大蔵の越中松が、銅張りの扉の南京錠をひきちぎったとき——

一斉に、暗闇のなかから火縄銃が火を吐いたのである。

百挺対一挺では小式部がいかにも稲富流砲術の名手であっても、かなうはずはなかった。

たちまちに徳夜叉は太股を射抜かれ、杖舎の茶々丸も深手を負い、

「頭領！」「頭領！」

と徳夜叉をよぶ子分たちの声が阿修羅と化した庭にひびかったが、事は終わった。再挙を期すはかはないと判断した図書の六孫王は采配を振って脱出することに決めた。

暗闇が、それを助けてくれた。

それぞれ手負いのものをかばいながらの敗残行であってみれば、あちらこちらで、捕吏に追いつがられ、自刃したものも少なくはなかったであろう。

もはや、八王子の隠れ家へは帰れないと思つた六孫王は、道を南にとると多摩川を渡り

鶴見川沿いに多摩丘陵の南麓を、二日後の夕暮れには甲斐・相模の国境・丹沢山塊の第二の隠れ家へと、傷ついた徳夜叉を連れもどつたのであった。

無事、あとに従うもの十余人。残りの十余人のものは、いずれも斬死したと判断するはかばかかった。

まさしく、これは惨敗であった。火のような高熱に呻吟しながら徳夜叉は子分たちに詫び、最初から最後まで、みごとな働きを示してくれた虹の陣兵・お妻夫婦に感謝した。

そして、せめてお妻が、敵手に陥らなかつたことを天に感謝することで、わずかな慰めを見出すのであった。

もしも、お妻が、捕えられたとしたならば——それは、肌に粟立つ思いであった。

肌に粟立つ思い——徳夜叉は、お景の顔を臉に描いた。

お妻は、さいわい無事だったが、お景奪回の企図は、みじんに砕けた。

(徳、徳夜叉……徳夜叉さまア！)

土蔵のなかでお景が悲痛な叫びをあげるのを確かに耳にしたと徳夜叉は、信じた。それだけに、なお、その身が案じられる。別邸が強襲されたことで元禄屋たちは、いっそう猛

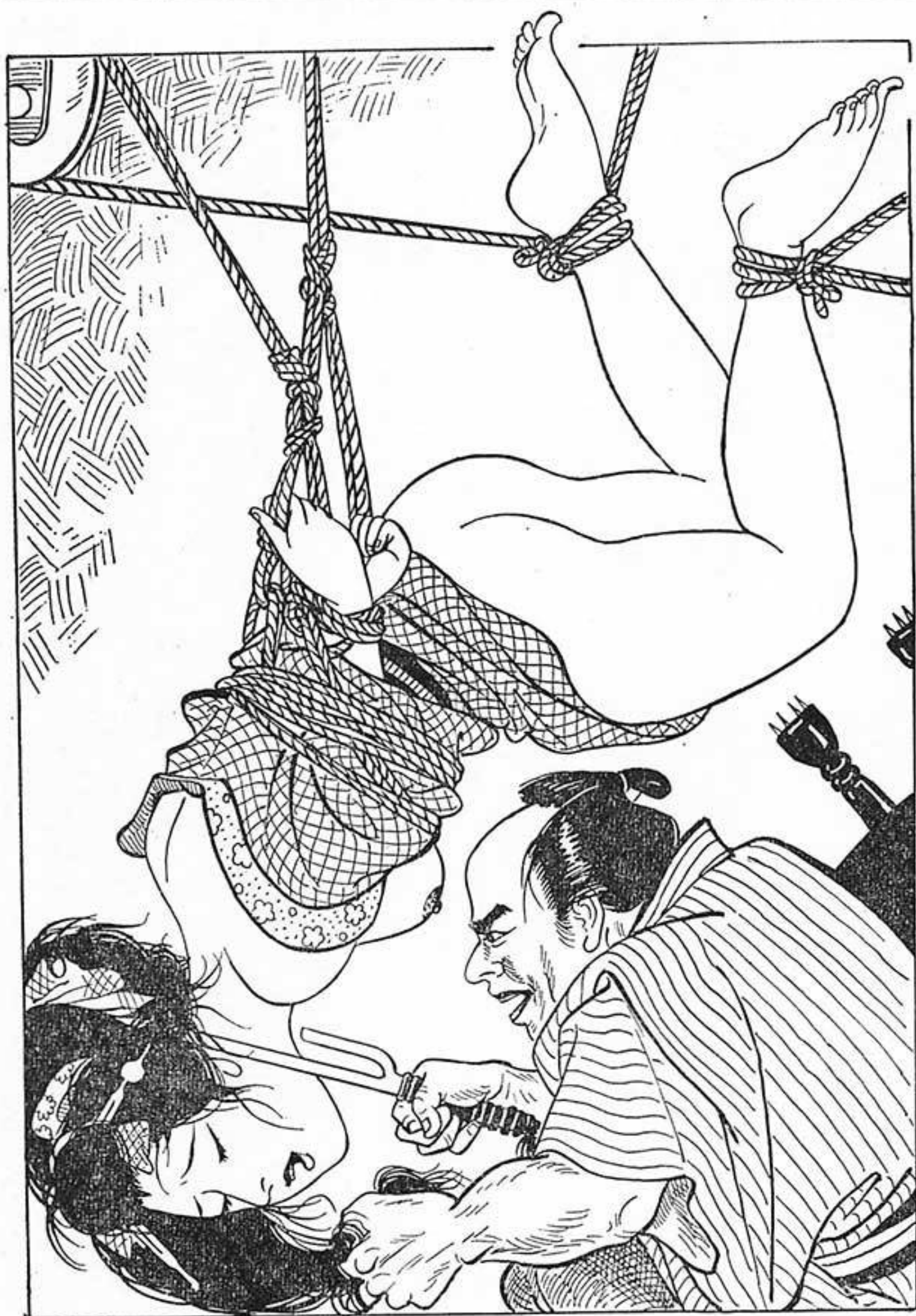
り狂って、お景を、責めたてるのではなからうか。

「お、……お景……。すまぬ！ ゆ、ゆるしくてくれい！」

高熱と疲労のため、どすぐろくそまった徳

夜叉の顔に、涙が、一条、ながれおちた。見るに忍びない気持で、虹の陣兵たちは席を立てて外へ出た。

峨々として聳える山塊のふもとを、白銀の帯のように川がなかれ、居待の月が、雲ひと



イメージギャラリー 『女囚吟味役優等生』 岡 たかし

つない夜空にかかっていた。

あて馬遊び

一方――。

凱歌をあげた麻布の元禄屋の別邸では、工頭監物や羅卒の鞭兵衛たちが、勝利の美酒に酔っていた。徳夜叉を取り逃がしたとは云え遺棄された死体が九つ。逃走の途次、自刃したものの四。そして、深手を負うた四天王の一人・杖舎の茶々丸を、ほかの二人の男とともに捕えたのである。

「フッフッフ、飛んで火に入る夏の虫か。みごとな働きであったぞ、鞭兵衛」

監物が、上機嫌でよびかけると、

「工頭さまこそ、さすがは北町きっての鬼与力と云われるほどのお腕前。茶々丸を縛りあげられました方円流捕縄術のお腕前、感服いたしました」

互いにほめそやす酒席に、主人の元禄屋も第一の手柄を立てた間宮林蔵もいなかった。

林蔵は、あらたな使命をおびて探索行へと旅立ったのかも知れないが、元禄屋は、どこへ行ったのであろうか。

それはともかく、酒宴に女はつきもの。ま

して勝利の盃をあげるのに、女なくては、かなうまい。

「工頭さま。誰になされます」

鞭兵衛の訊ねが、なにを意味するか、わからぬ監物ではなかった。

誰にするといいってもこの別邸の土蔵には、春田和泉・豊香夫婦と養女の千登世。それに徳夜叉に奪われずにすんだ小紫のお景の三人がいるだけ。菊亭貴子と久我雅子は日本橋の本宅だし、安房東条藩士・衣笠内記とその妻の美和は、領田下野の中屋敷の地下牢に幽閉されている。

「小紫のお景という女、見てみたいの」

その名がでるのを予想していたように鞭兵衛は、よどみなく答えた。

「今夜はおやめなされませ。徳夜叉の襲撃もあったこと、気がたかぶっておりますし、うしろ、舌でも噛まれましたは、元禄屋の旦那への申し開きができません」

お景を工頭に提供するのには、まだ惜しいという気持もあったが、反面、鞭兵衛は、お景が、愛する夫が、斬り死にしたのでは———と思ひこんで、自害するのではないかと、真実心配もしていたのである。

「すると、豊香か千登世ということになる」

「いかにも」

「なにが、いかにも——だ。誰でも、ご指名なされ、といま、云ったばかりではないか」

工頭を、じらすように含み笑いを、うかべる鞭兵衛に、

「豊香にいたそう、豊香に！ ひさしぶりに大年増の味を試しとうなつたわ」

「和泉のほうは、どういたしましたよう。いっしょに、ひきずり出しましょうか。それとも女だけを」

「馬鹿！ 亭主も、いっしょだ。亭主の見ているところではなくて、何の面白さがある！」

「もっともで！」

斑猿と赤狐の二人に、夫婦をひきずり出すことを命じておいて鞭兵衛は、

「ときに、工頭さま。お気づきになられましたか」

「何をじゃ」

「今夜の襲撃のなかに、女が混じっておったのを」

「存じておるわ。洗い髪のお妻といってな、名負ての毛利流手裏剣の達人、亭主は虹の陣兵といつて甲賀の抜忍という噂じゃ」

「へえっ……」と、今度は鞭兵衛が驚いた。

「さすがは、鬼与力さま。そこまでお調べが

ついているとは」

盃を返した鞭兵衛は、

「何をしているかは存じませぬが、不埒な野郎どもでございまするな。どうです、しよっぴいて痛めつけなすっては」

「そのつもりよ。いつか、必ず、あのお妻とかいう女をスッ裸にひんむいて逆さ吊りにかけてやる！」

与力としては、まことに下品な言葉であったが、陣兵・お妻と名乗る二人連れが、最近大阪町奉行所の与力・大塩平八郎中斎のもとに、しきりに出入りし、なにごとかを企んでいるということを知っており、いや、そんなことよりも女房のお妻が、滅法に美しい女であることを聞いており、女にかけては目のない工頭の好き心の虫が騒いでいた所である。

「がんどろ 籠灯の光のさきでチラッとみただけでござんしたが、洗い髪に紅珊瑚の平打ちかんざしをして、キリリッと唇を結んだ姿には、思わずゾクッと、いたしやした」

「フッフッフ、拙者もみたさ。それに、裏木戸から外に身をひるがえすとき、明石縮緬の長襦袢の裾から、こぼれた足首の美しさ。ひとつ明日からでも厳しい詮議にのり出すといたそうか」

「ぜひにも、そうお願いいたしたいもので、なあ、みんな」

鞭兵衛が、子分どもを見渡して、またひとしきり、お妻の話がはずんだころであった。襖の向こうで「親分、連れて参りやした」という斑猿の弾んだ声がした。

「遅かったじゃあねえか」

「ヘッヘッヘッ、準備に手間どりやしてね、白豚、襖を開けてくれ」

合点！ とたち上がった白豚が襖を開くと斑猿がニタニタッと笑っていた。

「豊香は、どうしたい」

と訊ねた鞭兵衛は、斑猿のうしろをみるとこれまたニヤツと相好を崩して、

「穴沢流・狸縛……か。フッフッフッ、こいつは、いい。豊香には似合いの縛りだぜ」

一座の視線がいつせいに、斑猿と赤狐が、もっこをかつぐような姿で、運び入れてきた女体に注がれた。もっこをかつぐ——いや、それは、畏にかかった女狸の手足をひとつにして括りあげ棒におおして帰ってきた二人の狸師というほうが、よりよい形容であろう。

ただ、女狸と異なり、豊香の肉体は、白くふくよかで、しかも伊勢お白粉の匂いが、プーンと漂っている。

「工頭の旦那。ほれ、いつでも、どこからでも、お参りくださいませと、このとおりに」

「裸身お改め」のつもりであろう、斑猿たちは、ゆっくりと工頭の目のまえで三回転してさて、どこがよかろうかというように、あたりを見廻していたが、拷問部屋と違って天井に梁もなければ滑車もない。

かとして、このまま担ぎっぱなしというわけにもいかぬ。

「あそこが、よかろう。白豚、それに、その文机を、たてにしな」

斑猿が、あそこといったのは床の間の違い棚であった。そこへ、棒の片端をのせ、もう一方の端を、白豚が縦にした文机の上にのせると、豊香の体が、ぶらりぶらりと宙で揺れた。棒の高さは六尺であろうか。その高さでひとつに括られた手足が廻り——その手首足首には白い布が巻かれてあったが、それは長時間にわたることを予想しての、せめてもの斑猿の思いやりであろう——むっちり脂肪の乗った太股が、胸が、結び灯台のあかりをうけて、なまめかしく映えた。

「久しぶりだなあ、豊香」

ひとひざ乗り出した工頭は、ちょうど目の高さのところ逆さになっている顔に酒くさ

い息を吐きかけた。

「工、工頭さま」

濡れた唇が、わななく。豊香は、すべてに天平彫刻のように、おおがらな女であった。眉、鼻、頬、そして瞳と、顔のつくりも、おおらかなら、いまにも食べられるのを待っているふうな熟れた双つの乳房も双臀も、二の腕も、その名のように豊かで、爛熟きった女体であった。

「工、工頭さま……」

豊香にとって工頭監物は、初めての男ではなかった。夫とともにここに拉致されてからというものの、いったい何十人の男たちに嬲られた身であろう。その間に、この監物にも、たしか二度ほど抱かれたことがある。たしか——というのは、この頃、豊香は、男の数をかぞえることを止めてしまっていた。吉原に売られていった女が、三カ月もたてば、接した男の数を忘れてしまうように——。

かといって、羞恥まで忘れてしまったわけではない。

泥沼に咲く女ほど、美しいもの、純なるものへの思慕は、ひとしお、強いと云う。

また、云う。ある種の女——即ち、よほどの先天的莫蓮女でないかぎり、女は、いつま

でも羞恥心を失うことはないものだ——。

耳のあたりまで赤く染めた豊香は、狸縛にされて、のけぞっている顔で、工頭を見上げ、

「工、工頭さま……妾、こ、このような姿で……申し、申し訳ありません」

公儀御用櫛師の妻という誇りが、云わせる言葉であった。

「なんの、御内儀。着飾っているよりも遥かに拙者にとっては嬉しいこと。フッフッフ」
工頭の手が、脇腹を押すと、女体が半回転して下半身が、こちらに向く。

垂直に、二本の脚が、双臀から上へと伸びているさまは、壮観であった。

かかとから、ふくらはぎ、膝の内側、そして内股のつけね……肌の香りにまじる留伽羅の香りが、いっそう、その妖艶さをひきたてていた。

「さて、工頭さま」鞭兵衛がニヤツと笑い、
「これからちょっと、『あて馬』遊びをやら
かしてよろしゅうございまするか」

「あて馬……」

さてっと小首をかしげた工頭は、すぐ、破
顔一笑すると、

「フッフッフ、鞭兵衛。おぬしという男は
こと女にかけては、悪知恵が次々とうかぶら

しいのう」

「ヘッヘッヘッへ。では、お許しで」

「やってみるが、よからう。ときに、亭主は
どうした。和泉のほうは」

「いま、斑猿が連れにいつて居りますゆえに
おっつけ」

と云いながらも鞭兵衛は、白豚に、「始め
ろ」とばかりに目配せをする。

「親分。あて馬遊びは、黒馬の兄貴のほう
がよかあございせんか。あて馬に黒馬……ヘ
ッヘッヘッ、こいつは語呂合わせになってま
すぜ。ねえ、黒馬の兄貴」

「そう云われりゃあそうだろうなあ、親分。
その役、たしかに、このあっしが、ひきうけ
やしょう」

長いあごを左手で、ひとひねりした黒縄の
黒馬は、

「豊香。聞いてのとおりだ。俺が、まず与力
の旦那の露払いをさ、せて頂くぜ」

「兄貴、露払いじゃあ、いけねえ。そこは、
露集めとでも云わなくっちゃあ」

「違いねえ……フッフッフ……」

六尺の高さに豊香を吊ったのは、責め役が
立ち上がって颯るのに、ちょうど、よくなる
ようにとの斑猿の配慮であった。

「黒馬さん……」

自分の腕ごしに豊香は、仁王立ちになった
黒馬に、呼びかけた。

工頭に抱かれることは覚悟してきたのであ
ったが、そのまえに、あて馬をあてがわれよ
うとは思ひもなかった。

あて馬というのは、発情の確かめ役ではな
いのか！

女の身で、牝馬にみたてられることは、屈
辱この上ないことであろう。

が、それをこばむことは到底できない相談
——豊香は、羞恥とも屈辱ともつかぬ複雑な
心境で黒馬を見上げるのであった。

「御内儀さん。ようござんすか、ようござん
すね」

とは、これまた賭博師が、壺をふるときの
ような台詞であり、それが、いっそう豊香の
屈辱感を、あおりたてる。

結び灯台のひとつがジ、ジジイ……と、か
すかな音を立てて消えたが、誰も油をつぎた
そうとするものはなく、さすがに皆が興奮し
た顔つきである。

男たちの十幾つの視線がいま、自分のどこ
に注がれているのかが、はっきりとわかる。
そして、この瞬間は、女にとって、たとえ

何歳になっても、そして、いつどこであつても変わることはない「恍惚の一瞬」ともいえる瞬間なのだ。

「ア、アア……黒、黒馬さん……」

毎月確実に入手されるために 本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

| | | |
|-----|-----|------------|
| 一月分 | 1冊 | 四〇〇円 (送共) |
| 三月分 | 3冊 | 一二〇〇円 (送共) |
| 半年分 | 6冊 | 二四〇〇円 (送共) |
| 一年分 | 12冊 | 四八〇〇円 (送共) |

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れた方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○六月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分三十二円の御負担を願います。

○御送金下される場合は、「現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

賜られ抜かれようとしているのに、いや、いま、女として耐えられそうにもない、死にもまさる屈辱をうけているというのに、豊香の唇から洩れる言葉には、媚めいたものが窺

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず「現金書留」にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料四三二円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致します。継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

われた。

「あて馬などいらないのじゃあないのかい、豊香さん」

「そ、そんなこと……」

「そ、そんなこと——だって、ということはやっぱり、あて馬が必要だ、あて馬が欲しいというのかい」

「そ、そ、そんなこと……」

豊香の答は、同じであった。

第一、こんな場合に、ほかに豊香が答え得られる、どのような言葉があるというのだろうか。

長い睫毛が、しばたたかれて、瞳が、うっすらと開いた。

と、そのとき、

「ア、アッ、アッ、アアア……」

激しい喘ぎとともに、ふわりと女体が揺れたかと思えたが、それも、たちまち黒馬の両腕で、ガッチリと抱えられて、ピタッと虚空に停止した。

「親分。亭主の野郎を、しよっぴいて来やしたぜ」

という斑猿の声が襖のそとでしたのが、ちようど、そのときであった。

——(つづく)——

カット・岡
たかし

連載・M派交友録 (40)

グラマーな猛女

植座たき子の巻 (3)

鬼 山 絢 策

老人の恋

中央生命の常務、橋本宇吉は、はりきって
いた。

「ぼくは六十七才の今日から新しい第二の人生をスタートするのだ」

と、会う人ごとに言う。人々は彼が、また何か新しい仕事を見つけたのだ、と思う。事実、彼は、「生命保険にも新しいシステムをつくって、もっと家庭に、とけこむべきだ」と、仕事の方も積極的に動いているが、彼の言う第二の人生とは、植座たき子を得て、青春時代に果たせなかった夢を実現しようと言うのだ。彼の六十年の人生は、ただ仕事々に追われてきた。それも張りのある楽しいことではあったが、人並みにロマンチックな夢を追う気がないではなかった。

セックス処理についても彼の理想は、彼と同じ階級の連中のやることとは違っていた。

普通、彼ぐらいの人物になると、女はセックスの道具としか、見ない。芸者とかホステスとかバーのマダムなどを金で射落として妾にし、行く先々で適当に遊んでいる。

そこには恋もなければロマンもない。彼等

は、あまりにも仕事に没頭しすぎるのだ。

橋本宇吉も、そうしたことをしないではなかったが、大して好きでもない女と、一夜のちぎりを結んで見たところで、さっぱり味気ない。快樂のあとに、やりきれない虚無と懶惰が残るばかりだ。

他の連中は、それで満足しているらしいが宇吉から見れば、くだらない事だと思った。

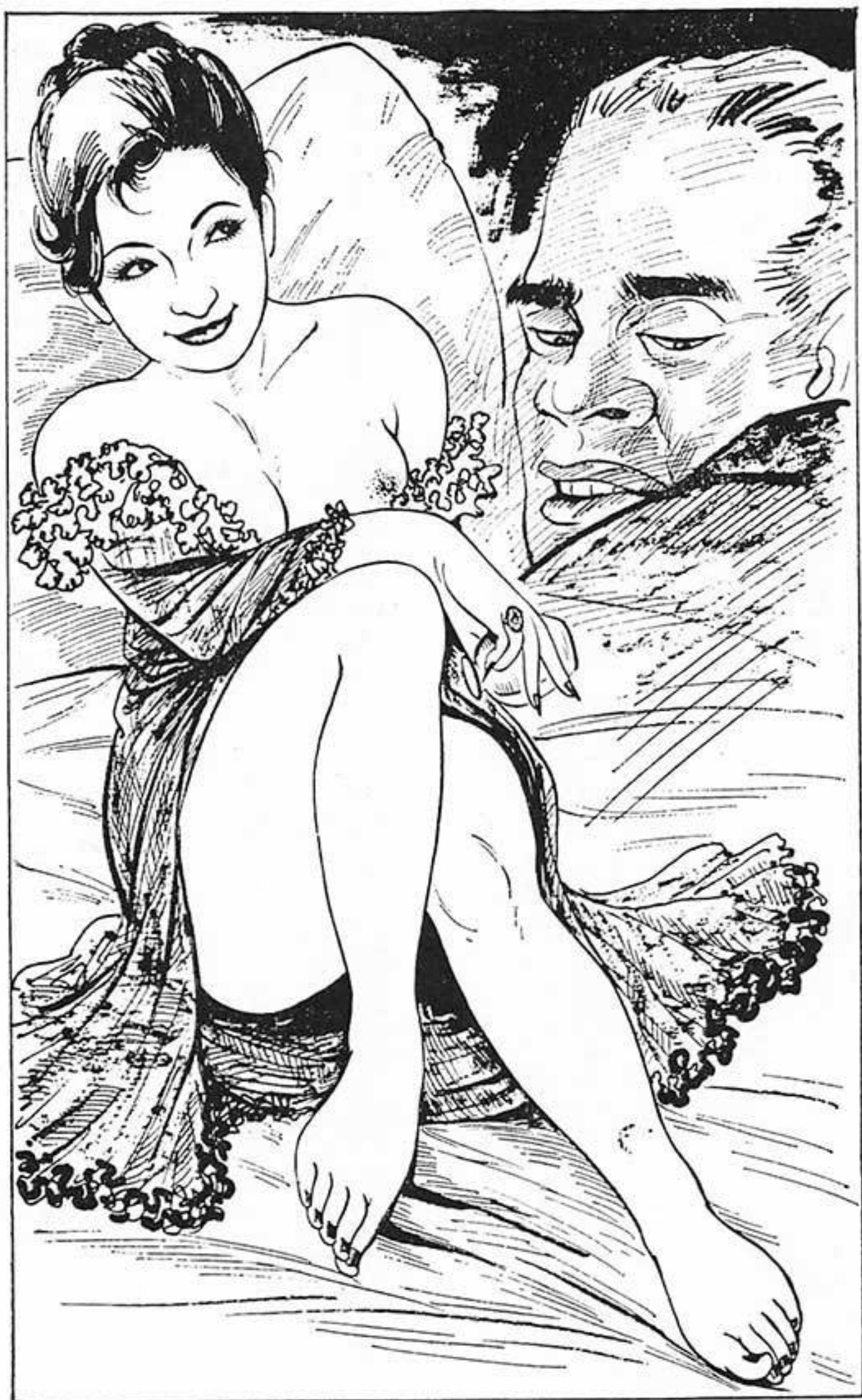
要するに、理想が高かったのだ。

橋本宇吉には初恋の女性があった。シカゴ大学に留学していた当時、下宿していた家の娘のサリーである。かなわぬ恋と最初から、あきらめていたものの、夢にまで見るほどの片想いの恋だった。サリーの方は彼の好意を感じていたものの、もとより貧乏学生 of ジャップなど相手にするはずもなく、間もなく他に恋人をつくり、婚約してしまった。そして卒業と同時に彼は、彼女ともアメリカとも、離れて行かねばならなかった。

爾来、彼の理想の女性はサリーであった。

そのサリーと瓜二つの女性が居た。しかも日本人で。それが植座たき子だった。

百七十二センチ、六十七キロの大柄な、たき子は、日本人ばなれした容貌で、顔も背恰好もサリーと、そっくりだったのだ。



だが、すでに宇吉は老いている。到底、たき子を恋人にするなど、思いもよらないと思っていた。

ところが意外にも、たき子は自分を好きになってくれた。好きというよりも、愛してくれているとあってよいほど、彼につくしてくれた。

彼には、もう一つ、恋人としての資格がないと諦めていたものがあった。それは男の機

能の喪失である。すでに妻の良子とは、二ぐらい前から交わりがない。六十の声を聞いてからも月に二回位は交わったことがあるがそれが、月一回になり、三月に一回、半年に一回と疎遠になって、二年ほど前から全く途絶えたのだ。良子も五十七才だから、もうあがっている。

だから、だめだと思っていたのが、何と立派に果たせたのだ。それは、たき子の奉仕に

よるせいかもしれない。しかし彼は、たき子の愛情によって蘇ったのだと信じた。彼は歓喜した。「第二の人生の出発」を口にするのも、その故だった。

橋本宇吉は、植座たき子を溺愛した。

彼は、たき子を連れて街を歩くのが好きだった。銀座、新宿、赤坂、六本木などを、たき子を連れて歩くと街行く人は、みな、たき子を振り返って見た。

宇吉は、たき子を日本人ばなれした女性に仕立てた。欲しいものは、どんどん買ってやったし、身につけるものや化粧品などは、すべて外国製品を買い与え、メーカーシップも外人風なものを喜んだ。

宇吉は誰にも、たき子を隠そうとしなかった。会社にさえ、時には呼びつけて昼の食事を共にしたり、ちょっとした届け物ぐらいの用を命じて秘書がわりに使うこともあった。

わしも欲しい

橋本宇吉と、三石銀行頭取の鈴木利三郎は先輩後輩の仲で親友だった。最近仕事の関係で会う機会が多くなった。

宇吉は、たき子を連れて頭取室に現われる

こともあった。若返ったところを見せびらかすためだった。

「あれが、君を若返らすファクターかい。それにしても、すばらしいグラマーだな。あいのこかね」

「うん、サリーウエザーと言うんだ」

宇吉は、たき子をサリーと呼んでいたが、人に紹介する時は、いつもそう言っていた。

「羨ましいな。ぼくも、あんなの欲しくなったな。誰か、いい子を紹介してくれないか」

謹厳な鈴木頭取も宇吉にはザックバラに何でも話し合う。セックスについても平気で話し合えるのは橋本宇吉しか居なかった。

「あんな若いの持って、あの方は役に立つのかい」

と失礼な質問も平気で、できる仲だった。

「それが君、正直言っても、あの子によって蘇ったんだよ。君だって若いのと、つき合えば元気になるよ」

「いや、今だって元気だよ。家内は、もうダメだから、もてあましてるんだ」

橋本宇吉は、たき子との寝物語に鈴木頭取のことを話した。

「君の友達で誰か、いい子は居ないかね」

「それなら、ゆう子さんなんかどうかしら」

たき子は、ゆう子から頼まれていたことを思いだした。

たき子は、ゆう子に話してみると、ゆう子は乗り気になってきた。

たき子と宇吉は、一夜、鈴木頭取をレストラン「コルベール」に招待した。

たき子の姿を見ると、ボーイ達はニッコリ笑って姿を消した。

カウンターの傍にマネージャーがタキシードで、おつに澄まして立っていた。

たき子のバニーガールの頃とは見違えるような豪華な服装に、ちょっと眉を寄せたが、知らぬ顔をして立っていた。なるべく、たき子と視線を合わせぬようにして……

たき子は入口に立ったままである。ボーイの案内を待っているのは明らかだが、ボーイが一人も現われない。

やむを得ずに、マネージャーが、しぶしぶ寄ってきた。

「いらっしゃいませ」

それでも丁寧に一礼して、三人を席に案内した。メニューを差し出して、もう一度、深く一礼して去ろうとすると、

「あ、ちょっと待って」

たき子が呼びとめた。去りかけたマネー

ジャーは仕方なく引き返して、姿勢を正しく、注文を待った。

「なかなか、いい店じゃないか。なるほどねえ、此処が君の、ロマン発生之地というわけか。アッハハハ」

三人のバニーガールが、忙しそうにテーブルの間を縫っていて、たき子の席の傍を通るたびに笑顔で会釈した。

「どの子だね」

鈴木頭取は待ちかねるように、宇吉に顔を寄せて囁いた。

「ホラ、こちらを向いて笑ってる子さ」

「ホウ、こりゃ凄い美人だ」

「いい子でしょ」

三人は面を寄せるようにしてヒソヒソ話を始めた。

「あの……御注文は……」

待ちくたびれたマネージャーが、恐る恐る声をかけた。

「あ、そうだ。何にする」

「でもね、あの子は、ちょっと気性の激しいところが、ありますわよ」

「ホウ、そうですか。激しいというと、例えば、どんな風に……」

また注文のほうはお預けで、ヒソヒソ話が

はじまる。話しながら、たき子は煙草を悠然と、くわえた。マネージャーは、いらいらして横柄な、たき子の態度を睨んだ。

橋本宇吉が気がついて、ライターをとり出して火を点けようとした。たき子は、その手をおさえて、

「マネージャー。あんた、お客さんに火をつけさすつもり？」

「ハッ、申し訳ありません」

マネージャーが、あわてて一礼し、マッチをすった。

「でもね、勝ち気だけど根は、あけっぴろげな正直な子なんですよ。それとね……」

たき子は鈴木頭取の耳に口を寄せて何か囁いた。火をつけたマッチに、たき子が煙草を持って行かない。マネージャーは、しかたなく二本目のマッチを、すった。

こんなことでマネージャーは十五分もテーブルに釘づけにされた。

宇吉が見かねて、メニューをひろげて料理を、きめた。

か た き う ち

たき子は、早口に料理の注文をつけた。マ

ネージャーは聞き返そうとしたが、たき子はもう鈴木頭取と、さかんに、ほかの話をはじめている。

「あの、お飲みものは？」

「スカッチ」

「サーロインの焼き方は？」

「あとは委せるわよ」

「ハ……」

マネージャーは、やっと解放されてホッとしたように引き下がった。すると入れ替りにボーイたちが次々と顔を出し、たき子のテーブルに水を注いだり煙草の火をつけに来たりして挨拶した。

「ゆう子さん」

たき子は花井ゆう子と呼んだ。ゆう子は期待していたように艶やかに笑って、鈴木頭取を見つめながら、やって来た。

「煙草を頂戴」

宇吉が千円札を出した。

「お釣りは、いいわよ」

「あ、ぼくにも、ひとつ、くれたまえ」

鈴木頭取も千円札を出した。

「有難うございます」

「花井ゆう子さんだね」

「ハイ。どうぞよろしくお願いいたします」

花井ゆう子に媚を含んだ目でジッと見つめられた時、鈴木頭取は年甲斐もなく、ポツと赤くなった。

ほかのバニーガールも次々に来て、愛嬌を振りまいた。たき子のテーブルは、大モテだった。

やがて料理が運ばれて来た。

たき子はステーキを、ひと切れ、口に入れると、

「あら！ これ、違うわよ。マネージャーを呼んで頂戴」

ボーイがニヤツと笑いながらマネージャーを呼びに行った。

「何でございましょう」

「焼き方が違うわ。こんなの食べられないわよ」

「ハッ、でも、お委せ下さったのでは……」

「お黙りッ！ 御年寄の方にミデムなんかが召し上がれると思って！ すぐ焼き直していらっしゃい！」

「ハッ！ 申し訳ありません」

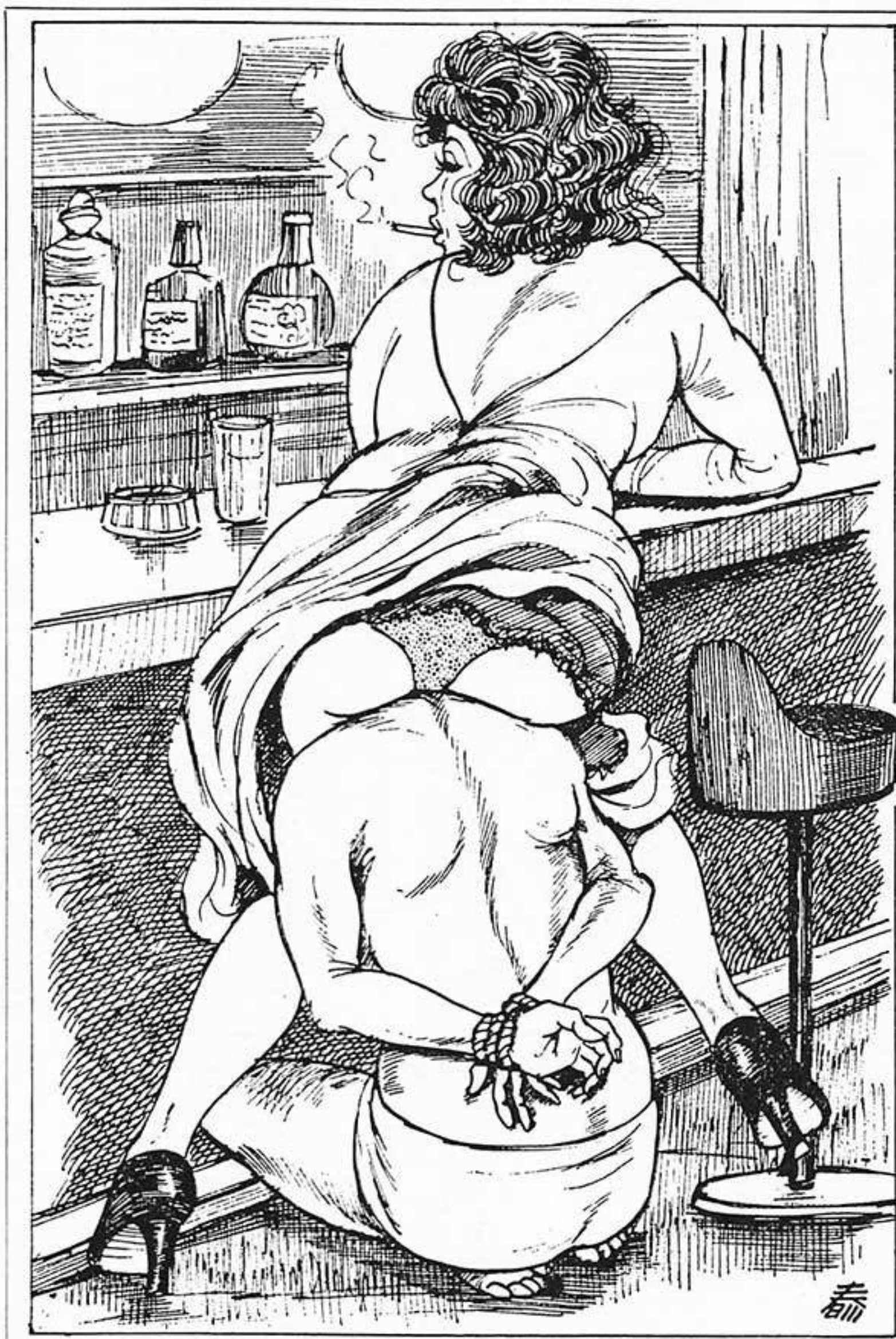
マネージャーは頭を下げながら、うわ目使いに、たき子を睨んだ。かつては毎日、叱りつけていた、たき子だったのだ。

“このアマめ、お客でなかったら……”

ナミオM画廊

『新型トマリ木』

春川ナミオ



「何よ、その目。自分が悪いのに、お客さまに文句をつける気なの」

「いや、決して……これでも、やわらかく焼いてございますが、何とか御辛抱、頂けませんか」

マネージャーは宇吉と鈴木氏の方に嘆願の

目を向けた。

「だめよッ。新しく焼いていらっしやい。このお店は、お客さまの食べられないものを押しつける気なの。何よ、こんな堅い肉」

たき子はステーキの皿を手荒く押した。前に並べられてあるステーキの皿が押し出され

て、テーブルから落ち、けたたましい音を立てた。

マネージャーのタキシードにソースの器がひっくり返って、ベタベタに汚された。

「社長さん、呼んでらっしゃい。結城さんを呼んでらっしゃい」

マネージャーは、ドロドロになったタキシードのまま直立して、泣き出しそうな、ひきつった顔をしていた。

「不愉快だわ。もう料理は要りません。ね、出ましようよ。こんな気の利かないマネージャーの居る店にお誘いして、申し訳ありませんでした。ごめんなさい」

たき子は立ち上がった。二人の紳士は苦笑しながら、仕方なく立ち上がった。

「あとで結城社長に注意しますからね。今後もあることだから、気をつけなさいよ」マネージャーは蒼い顔をして、ひくひくと頬をひきつらせながら最敬礼した。

バニーガールやボーイ達が総出で、三人を見送った。スコッチを何杯か飲んだので、宇吉が勘定を払おうとすると、

「いいのよ。マネージャーが持つと言ってるから」

と、どうしても払わず、店を出て行って

しまった。ボーイ達は店の外まで出て来て、
「どうも有難うございます。こんな痛快なこ
とはありません」

と、たき子に礼を言った。

努力と奉仕

三石銀行の頭取室。

「どうかね。あの子は……」

「イヤ驚いたね、活潑な子でね。しかしまあ
お蔭で、ぼくも若返ることができたよ」

「あの方は、うまくできたかね」

「失敬な。だから若返ったと言っとるじゃな
いか。アッハハ、イヤあの子が寝かさんので
ね、参ったよ。アッハハハ」

鈴木頭取は元気に笑った。

「気に入ってくれて何よりだった」

「感謝するよ」

麻布の、たき子のマンション。

「どう？ あの子は……」

「フフン、べつに、どうってことないわよ。
ケチね」

ゆう子は煙草を輪に吹いて唇をゆがめた。
たき子は、ゆう子の前途に、暗いものを感じ

た。

「月に十万円しか、くれないもん。マンシ
ン買ってくれるわけじゃないしさ」

「あら、あたしは月五万円よ」

「ヘエ、でも洋服や、いろんなもの、買って
くれるじゃない。橋本さんは、いいわよ。う
ちの爺いとは大違いだわ」

「そんなことより、あの子を、あんた、ど
う思ってるの。好き？」

「冗談じゃないわよ。いくら何でも、あんな
助平爺を、好きになれるわけがないじゃない
の。あんたは橋本さん、好き？」

「好きよ、大好き。尊敬もしているの」

「フーン、あんたも、変わったわね。もっと
も、このくらい、よくしてくれれば、好きに
なれるわね」

「ウン、経済的に援助してくれるのが、好き
になった原因ではあるけど、仮に金銭を離れ
ても、男性として好きだわ。今まで、つき合
った男達などとはケタ違いに偉大だわ。男ら
しいわ」

「フーン、じゃセックスの方も、うまく行っ
てるのね」

「もちろんよ。その点も、立派だわ。それに
あたしを心から愛してくれてるもん。もしも

よ、これは、あたしの夢なんだけど、あの子
とが奥さんにでも先立たれて、あたしに結婚
を申し込んできたなら、あたしOKするつもり
でいるわよ」

「ヘーエ、大したもんね。あんた幸せだわ」
ゆう子は、たき子を軽べつしたような目で
見すえた。

「あの子のセックスは、どうなの？」

「フフ、爺いは爺い並みよ。気ばかりあせっ
ても、どうにもならないってやつよ。アッハ
ハハ、まあ、こっちは金のために、つきあっ
てるんだから、どうってことないけどさ。で
も、あんまり冷たい素振りじゃ可哀想だから
一応、燃えた振りは、してやるけどさ。ねえ
あんただって、そうでしょ」

たき子は黙って微笑した。自分とは大違い
だ。あたしは、しんから燃えるのに……。

「いい手を考えたんだ。年寄りって、なめる
の好きでしょ。だから、あつけない時はすね
てやるのよ。折角こっちが燃えてきたのに、
どうしてくれるのよ、ってね。だからって、
なめさしてやんのよ。あんな爺いにや、その
位のこと、してやらなきゃね。あんたも、や
ってる？」

ゆう子の話は、あけっぴろげで、露骨だっ

た。

「あの爺い、不承々々舐めたわ。そして、わしも舐めてくれだって。冗談じゃない。誰があんな白髪まじりの舐められるもんですか。フフフ」

「でも、可愛がってくれてるんでしょ」

「有難迷惑よ。金さえよければ、いいのよ」

たき子は鈴木頭取と、ゆう子の関係は、永続きしないのではないかという気がした。

橋本宇吉が、その夜、来た時、ゆう子の話を、そのまま、伝えた。宇吉は笑って、

「そうかね。いや、実は今日、ぼくも鈴木のところまで聞いたのだけど、だいぶ、話が違くな。ハハハハ。まあ、そんなものさ。セックスの強がりと言うようになったら、もうお終まいだよ。それは年寄りの証拠さ」

「ゆう子さんが、あんな気持ちで頭取さんを迎えていたのでは、今に気に入られなくなっちゃうんじゃないかしら」

「サア、それは当人同志の感情の問題だから我々には分からないな」

「でも、すぐ別かれたなんてことになる、あたし、わるいひとを、お世話したことになってパパにも悪いような気がして……」

「そこまで気を廻さなくてもいいさ」

宇吉は一生懸命、自分につくし、細かいところまで気を使う、たき子が、いとしくてならなかった。

ながらく途絶えていた男の機能が、たき子によって、みごとに復活した。それは、たき子の若さであり、たき子の愛情であり、たき子の努力の、たまものと宇吉は信じた。

愛には愛を――

愛をもって酬ゆるその方法は、老人としては物質面でしか報いられないのが世間一般の常識だが、それだけでは若い女性を、つなぎとめることはできない。やはり、セックスの面でも愛を立証しなければならぬ。

鈴木頭取を嗤ったてまえからも宇吉は、たき子に対して「男」のあかしを見せなければならぬ。

宇吉は、その立証のために、あらゆる努力を、はらった。

ドイツ製の精力剤や朝鮮人参なども飲んで見た。中国に古くから伝えられる三参丸という秘薬を手に入れて、それも飲んだし、しばらくやめていた金鈴法も、風呂へ入るたびに欠かさず、やるようになった。しかし、何と言っても年令には、勝てなかった。

最初の一カ月ぐらいは、何ともなかったの

が、たき子とベッドを共にした翌朝は、ひどく疲労を覚えるようになったし、持続力が少し宛、短くなっていた。

セックスは微妙なものである。その場になって努力すると却って萎縮する。所詮は本能であり自然に発露するものだから、そこに人為的な意志が加えられると、却って機能が、とまる場合が多いのである。

今夜も何とか、たき子を満足させることはできたが、はじめて接した頃からみると、衰えてきているのが目に見えて、わかった。

そこで宇吉は、老人としてのテクニクにたよることにした。

「君はオナニーをしたことがあるかね」

「ないわ。フフフ、ほんとよ。あたし、あんなの、好きじゃないもの。そのうち男には不自由しなくなったし……」

たき子は過去を、いつわらずに言った。

宇吉は、それを聞いてからは指は一切、使わないことにし、もっぱら舌で、たき子を喜ばせることに努力した。

たき子も宇吉の心根は直ぐ察しがついた。若い男と同じようには行かないのだと。それはそれで満足していたのだ。

「ゆう子と言っていたっけ。年寄り舐める

のが好きだって。ほんとだわ。でも、それは好きではなくて仕方のないことなんだわ。あたしを喜ばせるための奉仕なんだわ”

そこまでの思いやりを理解していた。

重 大 な 情 報

村中二郎は、しつこく、たき子に電話してきた。

この前は怒って「ばか野郎」と言っていて電話を切ってしまったが、その後は下手に出て、「とにかく一度でいいから会ってくれ。重要な要件があるから」と呼び出しをかけた。

たき子も、しまいには面倒くさくなって、ともかく話だけ聞こうと、いう気になって、有楽町の喫茶店で会った。

四時という約束に、四十分ばかり遅れて行った。

村中はジリジリしていたらしく、煙草が五本も灰皿に、たまっていた。

「ますます、綺麗になったね」

「なによ、重要な用件で言うの」

「そう事務的になるなよ、どう？ おやさ

んとは、うまく行ってる？」

「そんなこと、どうでもいいでしょ。用件を

言ってよ」

「ハハハハ。こりゃ愚問だったな。うまく行ってるに決まってる。うまく行かなければ、ぼくの誘いに応ずるはずだもん」

「何を、くだらないこと、言ってるのよ。早く用件を言ってよ」

「まあ、そうせくなよ。これから、ぼくが言うことは、というより、君に教えてあげることは、君にとって大きなプラスとなることなんだ。それをタダで教えるのは、ちょっと惜しいよ」

「何よ、それ。変に持って廻った言い方、するじゃない？」

「情報というものはタダでは得られないものなんだ。まして、ぼくが君に知らせようというのは百万や二百万じゃ、きかない。君にとって大きなプラスになるか、ならないかという情報なんだからな」

村中は、たき子の心が動くのを見逃がさなかった。

「それが、どうしたのよ」

「情報は、しゃべってしまえば、それで終わりさ。だから、その前に謝礼が欲しい」

「フン、御免だわ。あたし今、パパとの間は最高に、うまく行ってるのよ。この上、望む

ものなんて、ないわ」

「謝礼と言っても、金じゃないよ」

たき子は狼が獲物を狙う目のような村中の顔を見て、ひと目で謝礼の内容が分かった。

「アハハハ。あんた、相当、かっかしてるわね。あんた、奥さんあるんでしょ」

「セックスには不自由してない。男の意地を出ているんだ。僕は、どうしても君を抱きたいんだ」

「それにしちゃ、ずい分、えげつない手で来たわね、もう少し、ましな方法はなかったの。

例えば、あたしの前に土下座して、どうかお恵みを、お与え下さいとか。ウフフ」

「ああ、それなら、お安い御用だ。しかし君は、そんなことで言うこと、きいてくれるほど安っぽい女でなくなつたろう、現在は」

「で、なによ、その情報とか言うの」

「それは、ぼくを信用してもらおうほかない。

ぼくの情報が価値のないものと君が判断すれば、このまま別れるより仕方がない。しかしぼくは、それを知っていても、ぼく自身には何のプラスにもならないことなんだ。惜しいよ全く」

「それなら、言ったら、いいじゃないの」

「同じことを堂々めぐりするのよ、よそう。」

イメージギャラリー

『靴ムレ清拭』

岡 かし



さあ、きめるのは、あんただ」

たき子は村中の卑劣なやり方に、ジッと睨みつけた。

「ぼくは橋本と君の仲を、とりもった仲人だ

よ。あのマンションも、ぼくが見つけた。君

の新しい生活の全部を、ぼくが書き替えてあげたんだよ。しかし、そのことを君に恩にさせるつもりはない。君が、いつか言ったよう

に、それはそれなりに、ぼくは報酬を得ているんだからね。だが、それだけ面倒を見た、ぼくの言う情報を君は信じないのかね。確かに、ぼくは君が欲しい。だが、そのために価値のないもので釣って君を、だまそうなんてケチな男じゃないつもりだ」

村中の目が、真剣に燃えていた。

「分かったわ。で、どうすりゃ、いいの？」

「月に二回、会ってくれ。それが条件だ」

「断わるわ。そんなことして、パパに分かったら何もかも、おしまいだわ」

「君が、まだよく分からないのも、無理はない。じゃ今日ともかく、つき合ってくれよ」

「それで、情報とやらを言ってくれるの？」

「ああ、言うよ。それから君のおぼしめしでいいよ。大まけだ。アッハハハハ」

銀座裏の、ちっぽけな目立たぬ旅館「よし田」に、三時間と、たき子は時間をきって、村中のあとから入った。

女の武器

たき子はシュミーズ一枚の裸で、全裸の村中二郎を床に仰向けにおさえつけ、その首根っこに跨がっていた。

ホテルへ入るなり、村中は洋服も下着も脱ぎ捨てて、乱暴に挑んできた。「なによ、そんなに、せっかちにしないで」と言ったが「君は立派になった。前より数段、きれいになった。そんな君を、ぼくは犯してやりたいのだ。橋本から盗んでやりたいのだ」と手荒く、たき子の服を脱がせ、パンティにまで手をかけて荒っぽく引きずり下ろした。あんまり乱暴な、やり口に、たき子も腹を立てて格闘となった。

力づくの格闘となると、たき子の方が強かった。背丈も体重も腕力も、たき子の方が、はるかに強かったからだ。そして今、組み伏せて、その上に跨がったところだった。

「ああ、やっぱり、だめだ。ぼくは君を犯してやりたかったんだが……やっぱり君には、かなわない」

「フッフ、何言ってやがんだい。お前は前にも、あたしの奴隷になったじゃないか。奴隷の分際で生意気だよ、そんな了簡おこすの」上から村中の顔を見下ろしていると、たき子はムラムラとサジステイックになってくるのだった。第一、恩を受けた橋本専務を呼びつけにするのが、気に入らない。

「約束は約束だから、望みは、かなえさせて

やるよ。だけど暴力で犯そうなんて、大それたことをやる奴は許せない」

「分かった、分かった。俺は所詮、君の奴隷だよ」

村中は口をあげ、舌をのばした。目の前の女の武器の魔力に、まけたのだった。

「お待ち。その前に情報を吐いておしまい」

「それは、あとでという約束だろう」

「うるさい。あたしを信用しないのかい。それなら、このまま帰るよ」

「ひと口では言えないよ」

「いいから、お言い。どんなことさ」

「君が今、住んでるマンションのことだ」

「それが、どうしたのさ」

「君は、あれを橋本から、もったものと思ってるんだろう」

「……」

「フン、大間違いだ。君は、あのマンションの権利書を見たか。見たこともないだろう。あの持主の名義は君のものではない」

「パパの名義だろ。知ってるよ」

「アハハハ、違う。君は何も知らない」

膝小僧で二の腕をギュギュ踏みつけられながらも村中は、たき子の無知を嗤った。

「この野郎っ！」

たき子は、うむを言わせず村中の口を、ふさいだ。奴隷に嗤われて頭にきたのだ。

「そんなこと、あたしにとっては、どっちでもいいことだよ。フン、何だい。大げさに重要な情報だなんて。こうしてやるから、ホラ勝手に、しゃべりやがれっ」

巨大な太腿が両脇から頬を、ぴったりとはさみ、グイグイと締めつけた。その上から六十七⁺の体重が、のしかかってくる。村中は、見る見る顔を真赤にし、苦しうに、たき子を見上げて、許しを乞うように、手の平をバタバタさせた。

「どうだ、苦しいか。ざまあ見ろっ」

たき子はスツと腰を持ち上げて、呼吸を許した。フーッと大きな息が、たき子の肌を吹きあげた。

「君のでも、橋本のでもない。誰の名義かということに興味はないのかね。手続きをしたのは、ぼくなんだからね」

「誰よ」

「サア、それが知りたかったら、ぼくの条件も入れてくれ給え」

「この野郎っ。また、大それたこと吐かしやがって！」

「それではマンションの名義は村中なのかし

ら？……”

たき子は一瞬そう思ったが、それを反撥する憎悪が、こみあげてきた。再び大きな肉塊がドスンと面上に落下した。

「そんな風な言い方は、きらいだよ。大きい。言うことだけ皆、言って、あとは、あたしのご機嫌次第という風にした手に出れば、そりゃ慈悲深い、あたしのことだから、情けの少しもかけてやらないものでもないのに、恐喝がましく出て来やがるから、こっちもカッとか来ちゃうのさ。お前、あたしに、こうされて苦しんだこと、何べんもあるのに、すぐ忘れちゃうんだね。ホラ、どうだ苦しいか。窒息させてやろうか、この小汚い犬め」

ムーンと、むせかえる甘美な匂いの立ちこめる中で村中は心身ともに完敗を自覚した。どうしても俺は、この女にかなわない！

村中は、たき子に三度、接触した時のことを想い出した。最初は彼女がモデルで会社の絵画部に来ていた時だ。会社の同僚の見ている前で、思いもよらない羞かしめを受けたのは、今、やられているのと同じことだった。「たかがモデルふぜい」とナメてかかって、逆にひどいめにあったのだ。だが、ふしぎなもので、あの醜態が、どういうわけか、会社

内の人気を呼んで係長に昇進した。

二度目は最近のことだ。橋本宇吉に紹介し恩を売った。この時は、たき子もやさしく身を委せてくれたのだが、男としての目的は果たせず失敗した。その時の心のこりが、今日まで尾を引いているのだ。

あの時も、こうだった。そして今も……。会うたびに、たき子は、えらくなって段々自分の手の届かぬところに、せり上がって行ってしまう気がする。

「俺が、この女をものにしようというのは、ほんとに大ソレたことなんだろう。俺では役不足なのだろうか」

そう考えたときから、彼は激しいたかまりを感じた。狂ったような、たき子の巨大な下半身の囲みの中で、苦しめば苦しむほど、それが刺激となるのだ。

「また、この前と同じ失敗をしてしまった」急速に、たかまりのさめる中で、村中は後悔した。

岩間から洩れる清水を口にただけだ。

たき子と会う前までは「俺が、たき子を盗んでやる。たき子に注いだものを、あの好色爺いに舐めさせてやるんだ」と考えていたことが、まるで逆になってしまったのだ。

「お前の情報ってのは、あたしにプラスになるどころかマイナスになることじゃないの。そんなことで、あたしを、ものにするつもりだったの。虫がいいのに呆れるわ」

たき子も、波が、静まった、いつときだった。ふと後を振り向いて、村中のみじめにも果て終えていることを知った、たき子は腰をあげてバスルームへ入った。

ハイ、時間です

「あんた、パパを呼びつけにしないでよ、失礼よ。で、その名儀は誰になっているの」

「専務の奥さんだよ」

たき子は、聞かない方がよかったかと思っただが、やはり聞かずに居られなかった。

「な、これで専務のほんとうの心のうちが分かったろう。君を可愛がってくれてるかもしれないが、肝心なところは、まだ気を許さない証拠さ」

「その情報が、どうして、あたしにプラスになるの。あたしとパパの間に、水をさすようなことだと思うけど」

バスから上がって二人はソファに腰かけていた。村中はウィスキーをとり寄せてチビリ

チビリやっていた。たき子は昼間から酔っぱらってパパでも来たら、まずいからと言って口にしなかった。たき子は橋本専務が心から愛してくれていることを、村中に話したあとだった。

「サ、そこだよ。君が知らずに、このまま過ぎていて、もしもだよ、二人の仲にひびが入ったり、奥さんが知ってトラブルが起きた時とか、また専務が亡くなることだってありえないことではない。その時、君は、また元のもくあみになってしまふんだ。だから、今のうちに、自分のものに、しておくことだよ。それで大きなプラスになるわけじゃないか。専務が君を熱愛している間に、そういう大切なことは完了しておくべきだ。その知恵を、ぼくが、さづけようと思っていたのだがね」

「フン、よけいな、お世話だわ。何も、あんなんかに知恵を借りなくたって、私は私のいいようにするよ。何だよ、あんたの卑しい心根が、むき出しになってるじゃないの」

たき子の目は怒っていた。村中は、その目に射すくめられて、とまどった。

「あんたは、あの年寄から、ふんだくれるだけ、ふんだくってやれという考えでしょ。あ

たしが、そういう女だと思ってるんでしょ。違うわ。そう思うのは、あんたなのよ。あんと、あたしは、まるっきり違う。あたしはあの人を愛してるのよ。さっきから何度も言ってるのに、あんたは理解できない。もし、あんたが心から愛する女性ができたとして、その女のひとから、ふんだくれるだけ、ふんだくる気がおきる？」

「驚いたなあ。あんな年寄を君は、ほんとに愛してしまったのか。年寄は大嫌いだと言ったくせに」

「同じ年寄でも、あの方は、違うわ。千人に一人、百人に一人の男よ。あんたみたいな凡人とはケタが違うわ。あんた、蔭に廻って、あの方の悪口を言うけど卑怯よ。悪口を言うなら、めんと向かって、あの方に言ったら、どうなの。あんたには、それだけの貫禄も勇気もないでしょう」

「そうか。この美しい女は、そんなにも橋本を愛してしまったのか」

村中は、またしても、たき子を見くびっていた失敗に気がついた。世の中の普通の若い女なら、年寄と同棲するのは金のため以外は何もない。それしか考えられない、と思ったのが間違いだったのだ。言われて見れば橋本

は、確かに偉大な人物だ。そこに女というものが一枚、加わると、阿呆に見えることがあっても、それで橋本宇吉を見下げることは誤りなのだ。

「あら、もう約束の時間に十分しか、なかったわね」

たき子はパツと着ていた宿屋の浴衣を、かなぐり捨てると全裸になってベッドの上に仰向けに寝た。

「サ、いらっしやい。大した情報じゃなかったけど、約束は約束だわ。フフフ、思いを叶えさせてあげる。ただし一度だけよ。サ、早く！」

「ぼくが橋本専務の悪口を言ったことは、専務に黙っててくれよね」

「いいわよ。あたし、口は堅いわよ」

「ありがとう」

村中は恐る恐る、たき子に触れた。何という弾力のある、すばらしい肉体なんだろう。こんな、すばらしい女性を、あんな年寄が毎晩、自由にしているのか——と思うと嫉妬に似た感情が、はしった。

「サ、あと六分よ。早く、しなさい」

たき子は腕時計を見ながら言った。

しかし、またしても、この前の時と同じ結

ナミオM画廊 『新型ブランコ』 春川ナミオ



果を、繰り返してしまった村中だった。

村中は、たき子の唇にキスしようとした。

「あ、キスは、だめよ」

唇を拒絶され、首筋から胸と唇を這わし背中を海老のように曲げて乳房に吸いついた。

「此処なら、いいかな?」

と恐る恐る、たき子の御機嫌を伺うようになった。

「何してるのよ、あと三分よ。あたしは、どうでもいいけどさ」

村中二郎にとって、このときが最高の屈辱であった。顔の上に乗っかられたときには、あまり屈辱を感じなかったが、今は羞恥に顔を真っ赤にし、ひざ頭や、ひじや、不必要と思われるところに、むやみに力を入れた。

「あと三十秒……二十秒……五、四、三、二、一、ハイ、おわり! お時間です」

たき子は軽べつしきった、まなざしで村中を見すえ、敗北感に、すぐごとと退く村中を押しのけて洋服を着はじめた。

舌へ垂らす時

たき子が、麻布のマンションに移ってから早くも一年近い歳月が、瞬く間に流れた。

たき子にとっては、今までのうちで、一番短く感じた一年間であった。結局、今までの人生で一番、楽しい時期だったのであろう。

その間、橋本宇吉は、ますます愛情を濃密に面倒も、よく見てくれたし、事件らしい事件も、おきなかった。

村中は諦めたのか、その後、一度も電話してこなかった。ゆう子が鈴木頭取と別れたがそれが事件と言えば事件だった。

「わるいけど部屋を探すまで少しの間、置い

てくれない。仕事も探さなきゃなんないし」

橋本に諒解を得て、二、三日、同居したがその短い間に、たき子はウンザリした。

ゆう子は鈴木頭取の悪口ばかり言うのである。鈴木氏を通じて観た老人全体を嫌悪した悪口でもあった。

しかし、たき子が橋本老人を、いそいそと出迎えるのを目の前に見せつけられて、

「あんた、えらいわ。あの人を、ほんとに、あたたかく、もてなしてるもん。そこへ行く、あたしは、このくそ爺い、来やがったかって具合だったもんね。別れるのも当然だね」

と反省もしていた。

「でもね、イザ別れるという時、あのおやじさん、涙をポロポロこぼしてたわ」

「あんたが、好きだったのよ」

「フフフ、そりゃ、そうかもね」

「それなのに、どうして別れたのかしらね。」

「あんたの浮気が、ひどかったんじゃない？」

「そりゃ当たり前よ、若いんだもん。あんな年寄、一人に貞操を守る義務なんてないでしょ。浮気は、いけない、なんて契約にも入ってないしね。あの人、浮気してもいいよ、って言ってたもん」

「じゃ、どうして別れたのかしらね」

「フフフ、そりゃ知ってたんだ」

ゆう子は自嘲気味に笑って、

「いつか此処でパーティやったわね。楽しかったわ。あれから、ああいふパーティ、一度もやってないわ。それがコルベールのボーイ達と久し振りに飲んでさ、浩ちゃんとトシの二人で遊んだのさ」

「二人連れて？ ホテルで？」

「そうよ。あたしは若さに餓えていたもん。そんな時は十分、満足したわ。そいでさ、家へ帰って来たらおやじが来て待ってたのよ。こんなに遅く酔っぱらって、どこへ行ってたんだって言うから、どこへ行こうと勝手じゃないかってさ。あたし酔っぱらってたでしょ。酔うと、あたしサジスチックになるんだ。あんたも知ってるわね。でさ、あの爺いの、顔へ乗っかったちゃったのよ。それが別れのもとよ。アッハハハ」

ゆう子は、やけくそに煙草を、ふかした。

「ちょっと、ひどくない？ それ」

「だってさ、あいつは、いつも君の若さを吸収したいって口癖に言ってたもん。だから、その若さをタッピー吸収させてやろうと思ったんだよ。いやがったけど、その時は。だ

から、こっちは、なお、癪にさわって無理やり抑えつけてやっちゃったんだよ」

「ウワー凄い！」

「フフフ、お前、浮気してきたらうって言ってたわよ。そうさ、浮気してきたばかりだよ。それが、どうしたのさってね。ちょっと荒れちゃったんだ。あいつ怒ったわ。年寄の怒るのって意外と冷静なもんなのね。ねえ、お酒一ぱい頂戴よ」

口では強いことを言っても、ゆう子は鈴木頭取と別れたことを後悔してるのだと、たき子は思った。

「でも、面白かった、泣きっ面を虐めてやるのも。舌へ垂らしてやるときの気持、いいわよ。あんた、やったことない？」

たき子は、この女は危険な女だと思った。

たき子も内心、そうしたサジスチックな行為に昂奮を感じるのだ。もちろん、橋本宇吉に対して、そういうことをする気はなかったが、村中二郎を責める時、えもいわれぬ快感が背筋をはしるのを知っていたからだ。

この女も、村中と同じような考えをもっていて、自分に悪知恵をつけに来たようなものだと思った。

絵の仕事

たき子は絵の学校を卒業してしまうと、急に退屈な日々が続いた。橋本の来ない時は、好きな絵を描くことに没頭した。

ある日、近所の絵の材料店で絵の具を買っていた時、その店にいた男を、どっかで見た男だと思っていた。

「この絵の具、どうも、のりが悪いわ」

「ああ、それなら、これがいいですよ」

その男が別の絵の具を教えてくれた。

「あなたが、絵を描くとは、知りませんでしたよ」

と、男は笑っている。

「ぼく、あなたの前の部屋にいる安井です」
そうして、安井安芸雄と知り合った。

彼は雑誌の挿絵やカットや、商品の外箱やマッチのデザインなどを、描いているのだった。マンションの廊下で時折、見かけていたのが記憶のはしに残っていたのだった。

二人で絵の具や、その他の買い物の包みを抱えながらマンションへ戻ってくると「ぼくの部屋を、ちょっと覗きますか」と誘われるままに、彼の部屋へ入った。たき子の筋向か

いの部屋だった。

「散らかしていて、汚いですよ」

なるほど、たき子の部屋とは比べものにならないくらい汚く、家具も古い粗末なものだったし、ソファも角が、すりきれて白い生地がはみ出していたりした。

だが入って、すぐ目につく窓側に、しつらえた仕事場は、上からフリーライトが、いくつも、ついていて、全部、ライトが、つけっ放しになっていた。絵筆やペンや烏口やら、定規なども、いくつも、すぐ手に、とれるようになって、坐れば、すぐ絵が描けるようになっていた。

右側が本棚になっていて、そこには婦人雑誌やファッションモードの本、皿や食器の美術雑誌、アメリカのデザインの本、古美術の全集本のうちの仏像に関する本とかが、雑然と放り込まれていた。

たき子は部屋の中を、もの珍し気に見回していたが、その中に女物の衣類などが、ないところから、安井安芸雄が、まだ一人者であることを知った。

安井はキッチンの方へ行ってインスタントコーヒーを、いれながら、
「あなたは油絵専門ですか」

「いえ、いたずらに何でも、やりますわ」

答えながら扉の方を振り返ると、そこに十号ほどのキャンバスに裸婦が、みごとなタッチで描かれていた。

「これは、あなたの作品ですよ」

「えっ？ ああそれ、若い頃、描いたんですよ。今は、もう暇がなくてね」

並々ならぬ力量の持ち主であることを知った。たき子よりは、はるかに、うまい。

仕事場の机の上の電話が鳴った。

安井が出ると仕事の話で電話が長びいたので、たき子が立って行ってコーヒーを入れ、戸棚をあけてコーヒーカップや皿を出して、テーブルへ運んできた。

「あ、どうもすみません。えっ、イヤこっちのことです。エエと左右が七センチ、上下が三、四センチでしたね。網目は何号にしますか？ そんなに細くちゃ、あの紙じゃ出ないでしょう。お宅の紙は悪いからなあ、奮発して、もっと上質の紙を使えませんか？」

電話は、いつまでも続いている。

「この人、相当、忙しい人だわ。雑誌社や広告取次店などからカットの注文が来ている。そういう仕事をするのも面白いわ」

と思っていた。卓上のライターは、ある大

きな広告取次社の社名が入っている。所在なさに、それで煙草の火をつけた。

電話が終わって二言三言、話をする、すぐまた、電話が、かかってきて、また仕事の話である。

そこへ扉をノックして来客があった。

四十年輩の、ちょっと目の鋭い男だった。

安井は、その男を見るなり、電話で話しながら、片手で、ちょっと拝む、まねをして見せた。

安井は、やっと電話を切り上げたので、

「どうも。また、寄らせて頂きます」

たき子は挨拶して椅子を立った。

「まだ、いいじゃありませんか」

そう言われ、たき子はまた椅子に坐った。

彼の仕事に対して興味がわいてきていたので、引きとめられれば立ち去りたくないままに、また腰をおちつけたのである。

安井は客に向かって、

「すみません。もう一日、待って下さい」

「困ったなあ、もう締切り過ぎてるんでね」

「ちょっと見て下さい。下絵は、できてるんです。あとは色づけするだけですから」

安井は仕事机の上から一枚のケント紙を持ってきた。

「ここへ題字を入れて、此処が著者の名前、こんなところで、いいですか」

「結構ですね。じゃあ、明日のお昼までに必ず仕上げて下さい」

「大丈夫です」

何か単行本の表紙らしい。たき子は興味深く覗き込んだ。

「どうです。あなたも描いて見ませんか」

安井は、たき子に言った。

「あたしに、描けるかしら」

「カットぐらいは描けるでしょう」

「こちらのお嬢さんも絵描きさんですか」

「ああ、御紹介しましょう。こちらはサリーウエザーさん。そうでしたね」

「フフフ。植座たき子です」

「ああ、日本名は、そう言うんですか。こちらは、ある雑誌の編集長の、鬼山さん。そうだ。お宅の雑誌のカットなんか、手はじめてやって見たら、どうですか。少しは描いたかと、あるんでしょう」

「ええ、学校時代に同人雑誌の表紙やカットぐらいは描いたことがあります」

「ちょっと、このところ忙しいもんですからね。少し手伝ってもらいたいと思って」

そこへ、また電話が、かかってくる。

「学校は、どちらですか」

「東亜美術学院です」

「ああ、東亜ですか。それなら松岡先生、御存知ですか」

「ええ、習ったこと、あります」

「あの先生に描いて頂いた事も、何度かあるんですよ」

「それじゃ、あたしなんか、とても……」

「レタリングは、おやりですか」

「少しは、やりました」

「此処にいと、電話がうるさくて仕様がな。外へ出ましょうか」

「そうね、ああ、そろそろ飯時ですね。どうです、あなたも御一緒に」

鬼山に誘われて、たき子は安井をチラと見た。

「行きましょう、行きましょう」

たき子は橋本が来ると、まずいと思い、自室へ戻って橋本の会社へ電話して今夜来るかどうかを確かめた。今夜は行かないという返事を聞いて、ホッとした気持で、スケッチブックや、自分が描いた同人雑誌などを持って、安井の部屋へ引き返した。

カット・マエダヒオミ



◇夢かうつつか◇

あけみは、夢をみていた。まっ黒な空間に星のような光、それもダイダイ色の火花が点在していた。火花というには、あまりに淡い火の粉だった。それがぐるぐる廻っている。ヘルマン・ハッセは花火の美しさを短篇「詩人」の中で歌い、わが国では「線香花火」という美しい文章を書いた科学者もいたが、あけみの頭にうかんだ花火は、もっときたない

もっと、はかないものであった。それがぐるぐる廻り、無数のうずをなして襲ってきた。

一方、身体は泥の海の中に浮かんでいた。

首まで、とっぷりつかり、ブラマンクの絵のように重たくて、くらいこの泥の海は、あけみを果てしなく責めつづけた。あけみは、この泥の海に少しずつ沈んでいた。あと少しで沈んでしまう。そうすれば死ぬ。死にたくはないと必死にあがくのだが、からだは動かなかった。にもかかわらず身体は沈んでいく。

「アーツ」

S 小説三部作

残酷・スター誕生

第三部 新生への道（屈せざるもの）

久留木

栄

と、あけみは悲鳴をあげた。

その悲鳴の鋭さで目が覚めた。

×

×

×

あけみが目を覚ましたとき、さゆりも、おまつさんも、もうベッドの上には、いなく、縛られた自身だけがかった。

女同士の一夜のたわむれが、にわかによみがえってきた。にこった意識をはらい、不自由なからだをいたわるようにしながら、あけみは、むくむくと寝台の上におきあがった。

「おじょうさん」

と、さゆりを呼んだ。

それが、飼いならされた少女の最初の朝のあいさつだった。

「あーら、お目醒め？ 私のペットちゃん」

さゆりは化粧台の前から顔をふりむけて、あけみを見た。

「いらっしやい、洗面するのよ」

と笑う。仕方なく、あけみは不自由な身をくねらせて寝台をおり、兎とびみたいになかった。傍に行った。「せわがやけるのネ」と言いつつ、さゆりは、あけみの足だけをほどこき、後ろ手の縄で、しりをたたきながら、洗面所に案内した。鏡にうつる、裸の天使をみながら、あけみは、まだ夢がさめていないのではないかと錯覚するのだった。それと同時に、これから毎日、こんな生活が続くのかとうんざりもした。

だが、日課は実行される。ヒタイでスイッチを押して洋式便所のドアをあけ、さゆりの目の前で用をたす。ボタンを押して、しりを洗う。タオルをまたいで拭く。それからトイレを出てドアを足でしめ、洗面所のスイッチを押して洗面器に水をため、顔を浸して洗う。さらに小さな噴水のスイッチを入れ、口をすすぐ。そうして、カベにかけたタオルに顔を

こすりつけて拭く——何一つ、さゆりに世話はかけずに、しかも手を使わずに行なう——いつしか、あけみは、そう訓練されていた。それを眺めながら、さゆりは、優越感を感じるので。

それから朝のラジオ体操、美容体操が始まるのだ。部屋中を走らせられたり、汗びっしょりにさせられたあと、シャワーにかかり、バスタオルに、水を吸いとらす。それから朝食。食事にも手は使えないのだ。茶わんから犬みたいにたべる、あけみの姿を楽しそうにみながら、さゆりは、これ見よがしにパンにクリームをつけ、コーヒーをのむ。あけみが全裸で、高手小手であるのにたいし、さゆりは豪華なナイト・ガウンを、はおっている。まさに対照的だ、おまつさんは、そのときはもう寸分すきのない和服姿にかわっていた。

食事が終わると化粧。大きな鏡台の前に、しゃがみこんだ恰好で、あられもなくマタを広げた姿に固定するよう工夫されたイスに縛りつけられ、あけみは頭のとっぺんから足の先に至る、隅々までを、おまつさんの手で化粧される。念入りに、さゆりそっくりのホクロまで同じように、かきこまれて、はじめて着物を着せられるのだ。

——第二部までのあらすじ——
清純スター大島さゆりの残酷・ポルノ映画出演で、その残酷・ポルノシーンの吹き替え専門として出演を承諾したホステス諸岡あけみには撮影に入ると同時に地獄の生活が襲いかかってきた。それは彼女にとって、まさに文字通りの「どこまで続くぬかるみぞ」だったのだ。

この日の着物は千代姫の舞台衣裳だったのだ。化粧と着付けは、さらに念を入れられ、終わると、前夜つれてこられた姿そのままに縛りなおされ、トランク詰めにされた。別室で専門の美容師から化粧されていた、さゆりが入ってきてトランクのふたをしめ、岩村ら

の手で車につまれ、さゆりと、いっしょにあけみは撮影所に送られるのだった。
家庭でもこんなぐあいだから、それと申し合わせたように撮影も激しく、きびしく、あけみを責めつづけた。

◆あけみの抵抗◆

次の撮影は、雑兵たちが、あけみに襲いかかるシーンである。佐藤監督はリアルにやるため、あけみに全力で抵抗するよう命じた。

千代姫の衣裳も、わざと、ところどころ破れたようにし、顔も汚れたメーキャップにされ後ろ手だけで土間にころがされている。そこに雑兵がしのび込むという想定で、大村定方という若い俳優が、よろいをつけて、いかにも戦陣の雑兵に紛して現われた。大村は、はじめな男だった。気がすまなかったが、ともかく役が役なので、悪い気はしなかった。

「さ、いくぞ」

という潮助監督の合図で撮影は始まった。大村が扉をあけ、あけみの収容されている部屋に入ってくるところからである。

演劇好きで、高校一年のときに家をとび出して上京したというだけあって、大村の演技は、うまかった。きよろきよろと中を探し、千代姫を見て息をのむあたりは、あけみも思わず、ふき出したいほどの、雑兵らしい、いかにも間のぬけた、しぐさであった。

その雑兵が千代姫をみて、一匹狼にかわるそぶりも、うまかった。大村は小柄なからだを大きくはずませてあけみに襲いかかった。

無意識でころがって難をのがれたあけみにやっと演技が始まったのだという緊張感がおとずれた。部屋のすみに逃げ、中腰になって餓狼にそなえた。再び大村がとびかかった。

逃げ場を失ったあけみの足が、一せんした。全くそれは激しい一瞬だった。あけみの足がもろにつっこんできた大村の向こうずねを払ったので、大村は大きな音をたてて板壁にぶつかり、そのまま、うずくまってしまった。

これは、全く予期せぬハプニングだったのだ。もともと、あけみは冷たい世間を、ひとりぼっちで生きてきた娘である。したがって護身の必要も感じ、火の弓の小川等志社長にひろわれたときには既に、から手の道場に三年も通い、ゆうに二段の腕前に達していた。しかし、女性ということ段もとらず、わざを使うことも、さけていたのだった。

全力で抵抗してよい——といわれたとき、無意識に、そのわざが、でてきたのだ。

大村は坐りこみ、呻き声をあげている。

「だらしないぞ、定」

と助監督に叱られたものの、大村は戦意を失っていた。

かわって村田力男という俳優が雑兵に扮しておそいかかってきた。村田は体操をやっていたという身軽い男だったが、あけみは、この攻撃も巧みに、かわした。後ろ手に縛られながらも、はるかにあけみの方が、すばやい動きをするのである。そのあけく、あけみの

大きなまわしげりが頭にきまりダウンした。

これには佐藤監督も驚いたが、撮影陣は全くの大喜びである。グロッキーになった二人の若手を尻目に第三の男が登場した。この男は藤井進という柔道初段のモサだった。

藤井とあけみは、睨みあったまま、五分ほども動かなかった。あけみは肩で息をしていた。藤井が隙をみて迫ってきた。あけみの前がりが見事にきまったが、運悪く、それは雑兵のつけていた、よろいの胴に当たったため藤井は、あけみの肩の近くを、むんずとつかむことができた。いま一方の手で、縛られた手首からたれているナワジリをつかんだ藤井は肩ごしに、そのナワジリを、ぐいと、ひきしめたので、あけみの両手は首の方にひきしぼられ、痛みが脳天をつらぬいた。そのため力がぬけたところを藤井は大外刈りで大きくあけみの体を床に、たたきつけた。

それでも、あけみは抵抗した。床をころげ回りながら、右に左に藤井の攻撃をさけ、くみしかれまいとした。しかし、こうなっては抵抗も時間の問題だった。千代姫の衣裳がまくれ、体にまきついたのも不利だった。藤井は上四方固めに攻め、ナワジリを首に巻いてあけみの抵抗を抑圧した。そしてキスしよう

と、ねらってくる。それを、あけみは首を左右にふって、にげる。

藤井は勝ったと思った。これでいけると思い、ナワジリを放し、カミを、つかもうとした。その一瞬、あけみは強じんな腰のバネにものをいわせ、一気に藤井をハネ返し、あつと驚く藤井のうしろから、くるぶしを力一ぱい、けた。藤井は悲鳴をあげて横転した。

そこへ最初の雑兵大村が、襲いかかってきた。大村は痛む足をひきずりながら、あけみのうしろから、だきつき、二人目の村田もこれに加わった。やがて藤井も攻撃に加わる。三人がかりの落花狼藉となり、村田と大村がロープで、あけみの足首をしばりあげ、左右に力いっぱい引っぱって柱に固定した。このため、さしもの、あけみの抵抗も抑圧され、藤井たちは、かちどきをあげて、あけみの衣裳を、はぎにかかった。

美しい乳房がさらされ、腰巻一枚の姿にされたあけみは、衣裳を頭からかけられ、その上に大村が腰をおろすかたちになった。藤井は腰の上にすわり、村田があけみの左側にうずくまって、六本の手があけみの体をくすぐりだした。乳房をもむもの、わきの下をくすぐるもの、首すじをくすぐるもの。あけみに

とっては、まさに地獄の苦しみとなった。

そのとき、大将の東竜之助が入ってきて雑兵らを、けたおす——そこでチョン。

このシーンは、全く思いもかけぬ迫力のあつたものになって、佐藤監督も驚きだったにちがいない。

撮影が終わり、からだを洗い、さっぱりしたワンピース姿の近代娘にかえったあけみに佐藤監督が「このサユリちゃんは強い人だなあ——」と、びっくりして話しかけた。

「こんなにできるとは思わなかった。まるでおとなしいと聞いていたんだが——。これじゃさゆりなど、一ころじゃないかね」

「でも、お嬢さんには抵抗できませんわ」

「どうして」

「だって御主人様ですもの」

「そうか、そんなものかな」

「お嬢さんのようになりたいと憧れていたんですワ。一緒に暮してみても、ずい分イメージは変わりましたけど、それでも憧れは憧れなんです。だから無抵抗で——」

「それにしても、よく我慢できるネ」

「やっぱりマゾ気があるのでしょうか。同性の気安さからなんでしょうか、あの目でにらまされると、ポーツとして」

「ハ、ハ、ハ、ハ……うまいこと言っとる。

きみがこんなにできるのなら、ひとつ代役専門でなく本格的に売り出すことを考えるか。

縛られるのも楽じゃないだろう。なにしろこの映画はそれが売り物だからネ——あとで君の主演映画をつくったときは、あれは本物のサユリが責められたといっておけば誰にもわからんよ。映画というのは、その点、詐欺のまた詐欺のようなものだ。君も、天井から吊られて、それがわかっただろう。もっとも、これからのシーンは、君にとっては、さらに不幸だが、それも、あと一週間だ。ともかく一気にとらないと、責め場つづきで気が変になりそうだ。こちらの方が狂ってくる——」

と真顔になった。SM映画を作ることに、

佐藤監督も抵抗があるらしい。

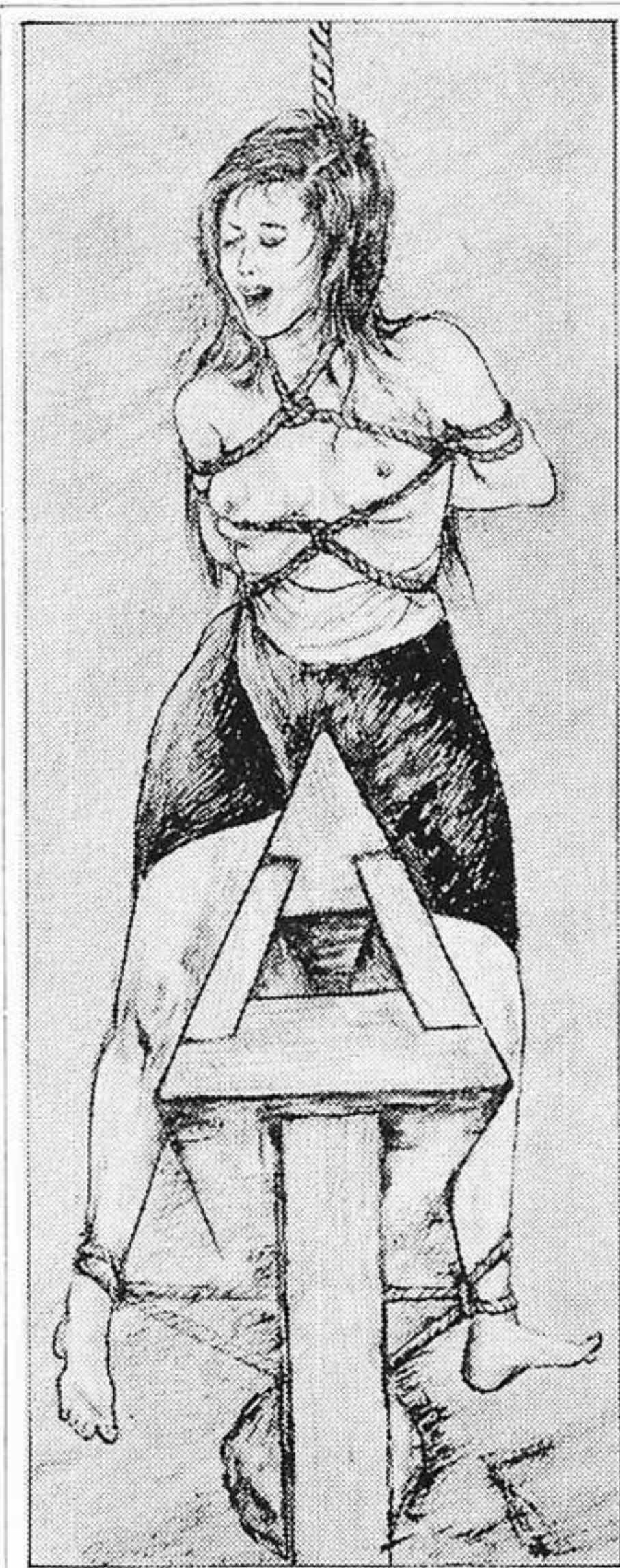
「男の人って、本質的に女性をいじめて喜ぶものなんでしょう？」

「そうだな。ボクは大好きだ。だが、こうもつめ込みではネ、味がないよ。映画に完成して見れば、フィルムのつぎ合わせで間をもたせることができる。だからアクションや対話いろんなシーンをまぜ、一つの興奮を作らせることができる。だが撮影は程遠い。アクションや対話のようなシーンは、そればかり、

イメージギャラリー

『こだまする悲鳴』

市原幸三郎



まとめてとり、責めは責めで一気にとるのが常識になっている。だから、どうしてもスタジオの空気が異常になって、自分もおかしくなる。だが、そんなもののつぎ合わせでないと結果的に、演技が甘くなるから、おかしいものだよ」

今日の佐藤監督は雄弁だ。コーヒーをとりよせ、あけみにのませながら話すことが楽しいらしい。そこへ大村らが入ってきた。

「どうだった？」

「いや、もうびっくりしました。もうすこしで骨が折れるところでしたよ。こんなに紫のあざが——すごいすね、あの膝蹴りは」

と大村が青血のよったスネを見せた。

「何かやってたのですか、ユリさんは」

と村田がいう。

「別に——そういえば護身用に唐手を少々、カワラの二、三枚なら、楽に割れるかもしれない」

「ひえー。それを知っていたら、最初から足も縛っておいてもらうんだった」

と藤井。

「バカ」

すかさず大村らがいい、大笑いになった。個人になってみれば、俳優らは人のいい、気楽な稼業の人たちだった。あけみはそれを知

って、大きく救われたという気がした。

「監督さん、ユリの会でも作ろうかと話してるんですよ。この人は大物になりますよ、本物どころじゃありません」

と急に村田が真顔になった。

「ボクも、そう思います」

と大村。

「よし、わかった。作りたければ作れよ。オレは会員というわけにはいかないから、スポンサーぐらいには、なろう」

と佐藤監督は笑う。

「ワーツ、これは、ありがたい。監督、ごっつあんです。ユリさん、あなたも了解して下さるでしょうね」

「ありがとう。親衛隊第一号というわけネ」

「親衛隊？ それ以上です」

求められた握手をしながら、同じ稼業に生きる者の熱い血が体中に通うような気がしてきたあけみは、撮影所にきて、初めて生き甲斐のある生活になれたと思った。

このことは、その後のあけみの生活に大きな影響を与えた。私には味方がいる。さゆりの奴隷のような生活を、しいられながらも希望を失わず、いつでも脱出できるという自信を、あけみの心にやきつけたのだった。会の

名前は、藤井の提案で「雑兵会」とつけられた。

◇ 雑 兵 会 ◇

「さっそく、第一回の会合を開こうではないか。金がないから、オレの下宿でどうだ」

「下宿か、ムサイなあー」

「ムサくてもへんな料理屋よりいいだろう。」

人目につかないぜ」

「人目についても、いいのじゃないか」

「そうだな。それじゃ——佐藤監督、いいところを捜して下さいよ。結成大会です。酒がのみたいんです」

そんな、やりとりを聞きながら、あけみはこの男たちの友情に、胸がジーンとなってきた。女同士なら、こうはいくまいと思った。

「じゃ、映画会館の離れにしろ。オレから事務局に話しておく。だが深酒するのではないぞ！ いいか。まて、あとでオレも出ようかな。何となく、のみたいな」

佐藤監督は、後半を人に聞こえるか聞かえないくらいの小声で言っただけでなく、仕事にかけた人生の片鱗があると思った。

× × ×

あけみは「きょうは帰りが遅れます。多分監督か、同じ出演の人に送ってもらうようになるでしょうから」と、その日は家にいた、さゆりに電話をかけ、映画会館へ向かった。

監督は、あとで行くということで、大村、村田、藤井の最初の雑兵会のメンバー、大男で美男子の雑兵たちが、あけみをかこむようにして、歩き出した。

「いてーや。まだ、いたい」

と大村も村田も、ちんばをひいていた。

「お前たちは将来の二枚目だからな。おれは三枚目だから」

そういう藤井も顔にあざをつくっていた。

あけみは、そういう若者たちを、明るい日ざしの中で、いいなあと思って眺めていた。

あけみが、これまで過ごして来たホステスの世界には、なかった世界である。それと同時に、あけみの人生で、これまで出あわしたところのない男たちのイメージだった。いやらしくて、利己的で、ケチでというのが、これまでの男たちの、すべてと違ってよかった。この人たちには何かがあると思った。それは同じ演劇に志す若手というだけでなく、仕事にかけた人生の片鱗があると思った。

そんな、あけみに

「ユリさん、素顔で道中していいの？」
と大村が、ひやかした。

「あら」

と、あけみは気がついた。そういえば、撮影所のセットから出るときは一切、トランク詰め、素顔はみせないという契約だった。それを、すっかり忘れ、あけみは、くったくなく撮影所の中を歩いていったのだ。

「そら、トランクはあるぜ」

と村田と藤井が二人がかりでジュラルミンのあけみ専用のトランクを持ってきた。

「あら、いまさら、入れというの？」

「入れといったら入る？」

「そう皆が言うのなら、言うことを聞くワ」

「入ってしまったらつまらないじゃないか」

皆は異口同音に言った。

あけみは愁眉をひらいた思いだった。そこに、向こうから撮影所を見学にきたらしい若い女学生の一団が、やってきた。

「あ、大島さゆりよ……さゆりさん」

と五、六人の女たちがかけよってくるのを見ると、村田たちは急に、あわてだした。それに比べ、あけみは落ちついていて、普通の足どりで、ゆっくり歩いていた。小

声で二人に、逆に「びくびくしないのよ」と

たしなめる余裕をもっていた。

「サインしてえ！」

と、その一人が手帳を出した。

「私、知ってるのよ。愛の泪、大好きなの」

と声を、はずます少女もいた。

「そう、ありがとう。村田さん、こしかけがわりに、そのトランクを道において、そう、そこにこしかけてサインしてあげるの」

と、あけみは気持よく、いかにも本物らしく、サイン帳を、とり出した。

そのポーズは、どこからどうみても大島さゆりだった。手帳を持つしぐさも、そっくりなら、サインした字も、そっくりだった。これには雑兵会のメンバーも、あきれていた。

「ありがとう」

と少女たちは、うれしそうだった。

「これから、この人たちと、まだお仕事があるの。こんどの役は時代劇のヒロインだけどできたら見てね」

という、子供たちは「うん」と、口々にうなずき、歓声をあげて去って行った。

× × ×

「驚いた？」

「驚いたなんてもんじゃないよ。ボクにもサインしてくださいな」

ひょうきんな大村が、皆を笑わせた。

「いいわ。大村さんには諸岡さゆりってサインしてやるから。それとも、大島あけみがいいかしら」

この名前で四人はまた笑った。リラックスしてしまえば花が咲き、虫がとんでも、おかしい年頃の青年たちだったのだ。

× × ×

会館につくと、小母さんの池田とよが待っていた。この撮影所にもう40年以上も住み込んで、いろんな人のめんどろを見てきたおばさんだった。無声映画の俳優さんの娘だとかで、足が悪かったために西映の前身の映画社時代から総務課に席を置いていた。西映に移ってからは、もっぱら会館の世話で余生を送っていたが、佐藤監督も頭のアがらない一人である。そのとよは、だから、さゆりの父の山村元右衛門とも親しかった。

あけみが顔を出すと

「あら、お嬢さん、いらっしやい」

と、なつかしそうな表情をみせた。

「どうも、おばさん」

と、あけみは思わず板についた、さゆりのアクセントで答え、改めて、

「すみません。実は私、諸岡あけみですの。」

さゆりさんの、そっくりさんなんですワ」

と、小さくなった。

池田とよは太ったからだを、これまた、ちぢめるようにして、あけみをみていたが、

「まあ」

といったまま、しばらくは口もきけない様子だった。大村らは二人のやりとりを興味深そうに見ていた。

「驚いた。ほんとに、そっくりなのネエ。顔から洋服から声まで……こんなに驚いたことはないワ」

と、また、しみじみと眺めた。

「どうして、そう感心しているんだね」

と藤井が落着いた声できいた。

「それが、私は、お嬢さんが小学校にいく頃から、ずっと知っているのよ。その私が、だまされるなんて——」

「へえ。それじゃ女学生が、だまされるのも当然だな。高校生じゃわかるまい」

と村田が、あいづちを打った。

「そのそっくりさんが、さゆりさんの吹き替えで、いまの映画の残酷、ポルノシーンの出演をしているんだ。だから、つらかうと実は皆で慰労会を持ったんだよ。もっともこれは秘密なんだ。撮影が終わるまで、いや終わ

っても吹きかえの秘密をバラしてはいけないと、監督や会社からも決められているんだが……こうなりや仕方がないや。あとで監督さんもくるから頼むよ」

と大村が才人らしく器用に説明した。

「そうなの。ハイ、ハイ、それはバッチリ約束しますよ。なにしろ、佐藤監督から、お嬢さんが来るから頼むよ、おしのびだから。といわれていますからね。でも、あの人も人が悪い。吹き替えさんとは、いわなかったわ」「そりゃそうだよ。おばさん、監督さんの口からは、いえないよ」

と藤井。

そこで皆は、顔を見合わせて、からからと笑った。

×

×

×

雑兵会は楽しかった。

池田とよの心づくしの料理もよかったし、酒が少々あった。その少々がほんのりまわったところで、佐藤監督も顔を出した。仕事から離れ、プライベートで会うと、佐藤監督はなんとなく親友らしい風貌のある、したしみやすい人柄だった。

それやこれやで話が、はずんだ。

あけみは、そこで少女の頃からのできごと

を、すっかり話させられた。そういう点について村田は、またとない聞き上手だった。

あけみは、筑豊炭田の、ボタ山の中で育った。両親の死は、いまでは有名な水浸事故としてこの地方に知られているが、あけみは知るよしもなかった。そんな中で育てられ、子供のときからチビと呼ばれて遊び仲間にはバカにされていた。炭鉱の子供はあらくれで、単純素朴だったため「ドロボーごっこ」では滅茶苦茶に縛られた経験があった。そんな話までさせられたのだった。

それに比べると大村は同じ九州の産でも、両親は健在で、いまでも博多で大きな店をもっているという。極道息子で何度も勘当されたそう。村田は東北の出で、両親は大百姓。いまでも東京の農大に進学していると思っているハズだという。それに比べると藤井は東京都の出身だが、父はサラリーマンで母はもういないという。三人が三人とも家庭の反対を押し切ってこの道に入ったことまで共通していた。そんな紹介がワイワイガヤガヤの中でなごやかに進み、乾杯また乾杯となって盃が重なった。

あけみは、この花やいだ空気の中で、何とか自分も今の逆境からぬけ出せるのではない

かという僅かな光を、つかみかけていた。

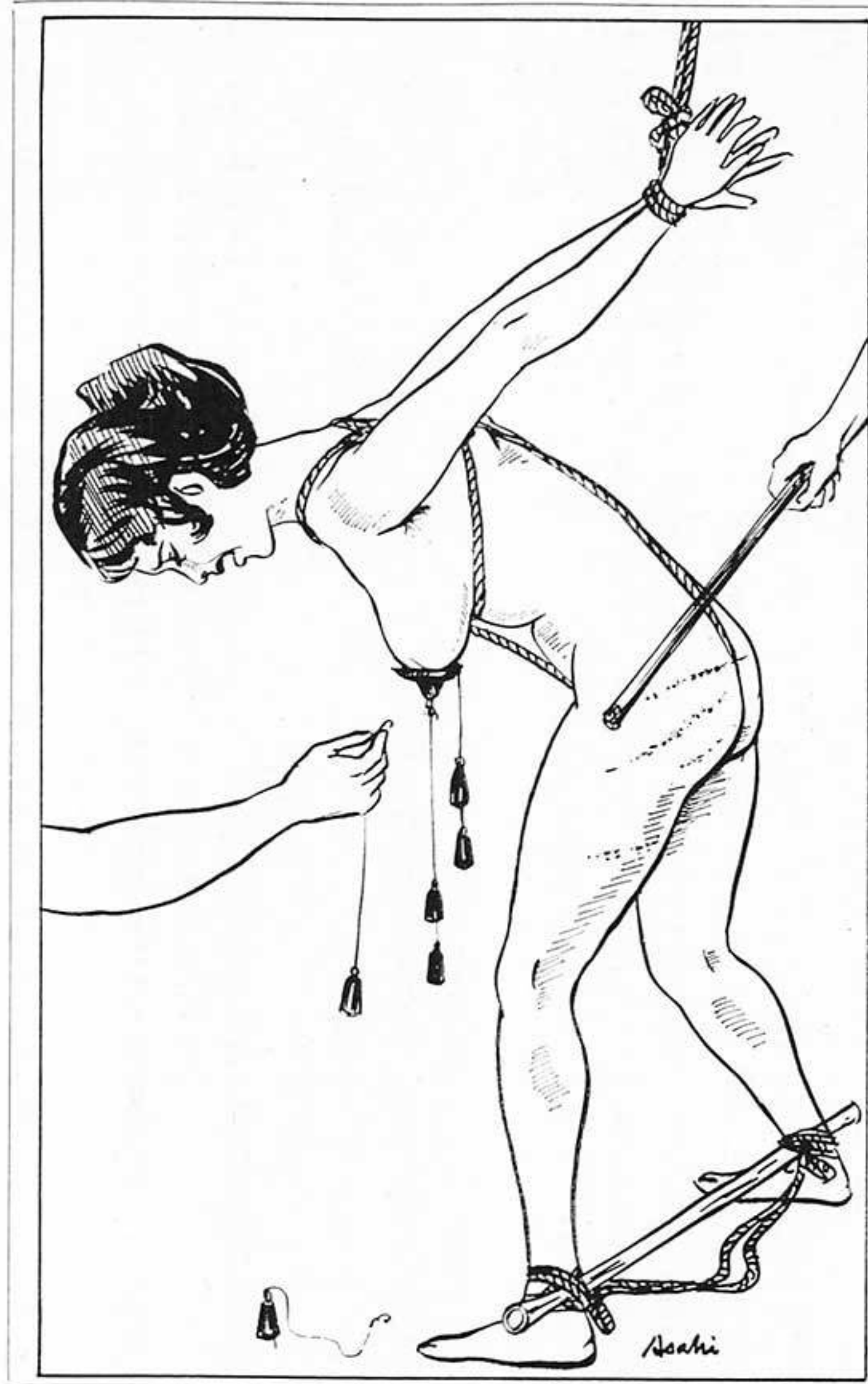
◇千代姫受難完成◇

だが、いつもこんなよいことばかりではない。撮影は本当につらかった。とくにつらかったのは、なんといってもエビ責めの撮影である。初めは逆さえび縛り、ついで本物のえび縛りをやられたが、逆さえびは乳房をアップしてとるのがねらい、えび縛りは残酷さがねらいというので、本格的に強く縛られた。このため、えび縛りでは失神手前にまで追い込まれてしまった。

逆さえびのときは、まず口にサルグツワをされ、下半身に肉色のうすいタイツをはかされた。高手小手に縛られた後、下半身を、たてしばりにされ、さらに足をくまされて縛られ、その手足を背中にとめられたので、弓なりにそり、体中の骨が鳴るほどしなった。たて縛りというのものはじめての体験であり、驚くほど強烈な印象を覚えた。それに、とまどったのも束の間、寸分身動きもできないように縛られては、その印象も、かすんでしまいうくらいである。

そうして縛りあげた体にドロをぬり、腰巻

イメージギャラリー 『重い乳房』 須坂 旭



を適当にきせて、映倫の目をのがれるように
 工作し、撮影にかかるのである。雑兵に足蹴
 にされ、ふみつけられて、いじめられる。そ
 の挙句、そのままの拾好で、おかされるとい
 う想定になっており、ほぼリアルな型で撮影
 された。本番でおかすわけにはいかないの
 のしかかって行くところでチョンである。あ

けみは、うつむきにしめあげられている時ま
 では我慢ができたが、あおむけにされると、
 からだがち切れるように、うずいた。その上
 ふまれ、押えられるのである。痛みと苦しみ
 とで、何度も何度も大声をあげてわめいたが
 嚴重なさるぐつわで、泣き声は消され、泪だ
 けが流れた。責められるたびに首をふるだけ

が、せい一ぱいの抵抗で、全く、でくの棒と
 同じだった。

『ああ、もうダメ』と思っても体は消滅する
 わけではないから、苦しみは続くのである。
 同じことは、えび縛りでもいえた。尻が天井
 をむかされ、薄いタイツをはいているとはい
 え、恥かしさにかわりないはずだが、羞恥心
 を感じるなどの余裕は、さらになかった。ま
 るでラグビーのボールのようにひき回される
 だけである。カチンコの音も佐藤監督のドナ
 リ声も、俳優たちのセリフも消え、体がもえ
 るように、うずき出す。血が泡立ち、吹き出
 るような嵐が、つきぬける。そういう情感に
 実際にあけみの膚は色づき、やがて青白く沈
 潜してくる。同時に意識も遠のきはじめる。

ハタ……と全体の動きが突然、停止してし
 まう。その瞬間、あけみは気を失っているの
 である。その次の瞬間、あけみは肉体の一部
 に加えられる激痛で意識をとりもどす。わめ
 く。だが、意識はにぎり、声は出ない、そし
 てまた、深い淵に沈んだように時がとまる。

こんなくり返しが、二度も三度もきて、や
 がて意識は、さらに薄く、かすかになり、痛
 みはひいて、すべてが別世界のできごとのよ
 うになる。

あけみは解放されたが、床に長々とのびていた。たちあがる気力も残っていなかった。肩で息をつきながら——無心に人を求めている。良子が、腰元に扮して、しきりに介抱してくれ、カメラは回っていたが——それすら気付かず、視線も、さだかでなかった。

そんな、あけみを現実にはきもどしたのは一杯の水である。

雑兵の村田が、頭からタライ一杯の井戸水を、ざーっとかけた。その冷たさ——突然、あけみの中に、現実が生々しく帰ってきた。あけみは金切り声をあげて、とびあがった。そして、わけもわからず雑兵に立ち向かって行った。それが合図かのように、再び男と女の格闘が、くりかえされる。そのあげく、はじめな姿にされ、いじめられるのは、あけみであり、千代姫であり、女であった。

男たちは武器をもっていた。棒あり、太刀あり、さすまたあり、縄ありだった。あけみは常に素手だった。だから体当りでやればやるほど膚に傷がつく。そんな膚を、いとむむことも、手を入れることも忘れていた。一つの興奮があった。その興奮を求めて、カベを一つずつ突き破って行く。体中に青血がよってもいい、血を流してもいい。新たな人生に

賭けた生命をすべて燃焼させて燃えつきたいというのか、一つの執念がそこにあった。

だから、あれから一週間の、あけみの姿はまさしく鬼気迫るもので、演技する女優というより、すべてをすてて突っ走る激しい一匹の動物の本能が、あらわに、むき出されていた。

その演技も、その激しさも、やがて終わった。——撮影が終了し、まるで、ぬけがらになったような、あけみをみて、佐藤監督も後悔が、いくぶん胸をついた。撮影所にたのんで、伊豆海岸の別荘を一月ほど借りきり、つぎの役ができるまで、あけみを静養させることにし、さゆりと良子の二人で、あけみを運んで行った。

あけみは、こうして失踪後四カ月目で、やっと、さゆり邸から解放され、しばらくの間メス犬の生活から人間社会に戻るようになったのである。

◇人間復活◇

さゆりも去った。

静かな別荘での生活は、良子との二人きりの暮しだった。

あけみの激しい性格、撮影にたいする執念とその迫力に良子は圧倒され、この別荘でのあけみの世話を買って出た。それだけに尊敬の念があり、まごころがこもっていた。

あけみは、こんこんと眠った。そして始めの一週間、まるで放心状態の生活だった。

そのあけみが活力をとりもどしたのは、映画ができたので見てみないかと佐藤監督が誘いに来てからだだった。

「また、トランク入りですか？」

「ばか。もうこの代役は、すんだよ。君らしい化粧を、してこいよ」

そういう冗談のあとで、あけみは初めて良子をつれて別荘を出た。黒いスーツに黒い手袋と地味な服装を身につけ、めだたない装いで、あけみはグリーンの車に乗った。運転は佐藤監督。あけみは助手席に、良子が客席におさまった。

「だいぶ、元気が出たようだね」

「良子さんのおかげですワ」

「そうかな、体力が回復したからだろう。いまなら言えるかもしれないな、責め方と出演の感想は？」

「無我夢中でしたのよ。だから燃えつきちゃって——」

「ア、ハ、ハ、ハ、ハ、そうか、それはいいことだ。最初の仕事が代役で気の毒だとは思ったが、もし千代姫が好評だったら、それは皆、君のせいだ。こんどは、同じSM路線に出演するとしても、君自身のものを作らんといかんな。やる意志はあるのか——」

「どんな役かしれませんが、監督さんがやれといわれれば……。いまの私は体当りで行くよりほか、生きる道がありませんもの」

「裸にでもなるか」

「生まれたときは皆、裸というじゃありませんか。今さら、珍しくもないでしょう」

「いや、珍しいネ。さゆりもそうだが、女優であっても、責めとか裸とかいうものは、皆いやがるものだよ」

「いやがっていても結局は承知せねばならなくなるのが、さいきんの傾向ではないのですか。それならドライに……」

「なるほど——」

「私が、すれているからでしょう」

「いや、そうは思わん。最初はホステスあたりだからと思わんでもなかったが、いま認識を改めているよ。まだわからんが、君には何かがある。そう思っている。代役専用契約があと七カ月、残ってはいるが、それがすむ頃

には君も、もっといいものを手に入れていることだろう。環境にまけないことだね。そのうち、本気で口説くから覚悟しておけよ」

「まあ——」

あけみは、底抜けに明朗な佐藤監督が好きだった。映画そのものが陰湿なものであるからかもしれない。監督が陰気だったら救いがない。監督が陽気だから、たすかる——と思った。ホステス時代には男が常に傍にいた。いまは、いない。その差が、あけみを考える輩に変えたのか——

あけみは、だまり込んだ。

車が撮影所の試写室についた。

「さあ、ついたぞ。千代姫さま、じゃない、ユリちゃん、いや、あけみ君だ——」

と、佐藤監督は先に降り、ドアをあけた。

あけみは、ゆっくりと降り、

「よっちゃん、さあ行こう」と、年下の良子の手をひいて試写室に入っていた。「いらっしやい」というスタッフの声を久々に聞きながら、この五カ月、ここに生活の場があったんだ、と、身のひきしまるのを覚えた。

そして、よい映画であるようにと、画面に祈るような気で、腰かけ、試写の始まるのを待った。

フィルムが廻りだしたのは、それから十分後である。まず、けんらんたる城内の大奥の優雅な生活が、うつしだされる。幸福そうなさゆり千代姫の登場である。絵にかいた美しさ、将来を誓う恋のささやき。そういうものから一転、合戦へ。落城、逃亡、逮捕とハプニングは、つづく。それと同時に、あけみ千代姫の登場となるが、その切りかえは巧みで流れるような画面は代役の本人にも、いつ変わったか、それ自体が、判別しかねるほど手際がよかった。

雑兵との格闘、訊問と、千代姫の変転は、つづく。そこに体当たりする、あけみの姿はたしかに迫真の演技であり、脇役の腰元楓と比較にならなかった。改めて眺めながら、あけみは身のすくむ思いであった。新城主はやがて追放され、旧家臣との恋、新大名になった叔父の横恋慕と、場面は転開し、合戦につく合戦で、いつしか女げんに売られ、その手で責められ泥にまみれて行き、その中から再び旧家臣に迎えられ再起、決戦から破滅へと突き進む。アクションをとらせては第一人者といわれるだけあって、巧妙な城づくり、激しい野試合とロケも豊富に織りこんで、物語は、千代姫を悲劇の主人公に追いあげ、押

し殺してしまうのだった。

その物語を見て、あけみ自身が、よくも、この激しい責めに耐えられたものと驚くばかりだった。体の芯が、きーんとしまり、胸が、うずいた。なんとなく、せつなく、じつとして映画をみる事ができず、横にすわった良子の手を、にぎっていた。

その手の上に、細い別の手が、重ねられていた。気づくと、さゆりだった。さゆりも興奮しているらしい。あけみの手をにぎり、ふるえていた。いつ来て、横にすわったのか、あけみは、それを、いままで気付かなかったうかつさに、ハッとする心を押さえかねた。

映画は終わった。

「きていたの、さゆりさん」

「そうよ。気に入らなかったら、ブチのめしてやろうと思って」

「で……？」

「まあ合格ネ。わたし、汗びっしょり、かいちゃったわ。興奮したのかしらネ。ああ、いやだ。私も、こんどは自分で志願して責められてみようかしら——でも、とても我慢できないだろうなあ——」

さゆりは、そうこぼした。

「ガラにもないことは、よしといった方がいい

ですよ」

と、潮助監督が、いつの間にか、うしろに立っていて、皮肉たっぷりなニヒルな笑いを浮かべていた。

「雑兵会が、完成祝いをやろうといっているんだが、出席するんだろう？ さゆりちゃんも、ぜひにといっているんだが」

と二人に話しかけた。

さゆりが、それをうけて

「そう、うれしいワネ。あけみを千代姫に仕立てて、縛りあげて出席させましょうよ」という。

あけみには、その言葉の裏が、わかっていた。さゆりはさゆりなりに喜んでいてくれたのだ。だが六平には、その事はわからない。

「困った人だな、さゆりちゃん……。あけみ君は、きょうは主役だよ。縛るんなら。君を縛りあげて、お祝の引出ものに、ひきすえたいくらいだ」

「どうぞ、そうしたら？」

さゆりはわざと手を後ろに回してみせる。

「ハハハハ。それができるなら、もうしているよ。きょうのゲストは監督にクツ。岩村君もOKといったんだよ。もちろん、よっちゃんも池田のおばさんも、いっしょだ。さゆり

姫も、いいだろう」

と潮六平は押しつぶせるように言う。さゆりは、それにうんざりしたように、

「いいわ」

といい、あけみの方をみてウィンクした。それはあけみ以外、誰にも意味のわからないウィンクだった。

× × ×

その夜、近くの料亭をかり切って雑兵会が花やかに開かれた。それは、にぎやかなものになった。

ワイワイと、さわぎながら酒をのみ、あけみの責め姿をさかなにしながら、宴は夜おそくまで続いた。

酒を、したたか、のまされ、足が立たなくなった、あけみを、大村や村田や藤井らが、かついで回った。そして最後に、良子と二人をまた別荘まで送ってきてくれたのだ。

そこには真実、暖い心のこもった交流があった。岩村やさゆり、クツは宴会の途中から姿を消し、飲みすぎた佐藤監督が調子はすれの民謡を歌ったのを、あけみは、かすかに記憶していた。

——(了)——



奇クに恥かしい告白「とき子の自縛教室」
を載せていただいた山口とき子です。一度投稿すると変な勇気が出来て、また書いてみました。この一年余りの間の日記の抜粋です。これをお読みになって、私が毎日自分を縛り変な空想にふけてばかりいる女だとは思わないでください。一年間の日記のうちで、やっと拾いあげたものですから……。

告白

とき子の自縛日記

山口とき子

〇月×日

今日は日曜日。このところ毎日、雨で、うっとおしい日が続く。気晴しにデパートでもものぞこうと思い、家を出る。

そろそろ夏物の布地を買ってワンピースでも作らねばならない。

夏物はバーゲンで既製のものを買った方が安いという人がいるが、私はどうも自分で作った方が気がすむ。いろいろと変わったデザインを考えるのは楽しいことだ。それにデザインによっては私のマゾ気を満足させるものも作れる。

ワンピースのそでぐりを、わざと細くして二の腕を締めつけたり真夏のワンピースの襟を極端にハイネックにしたり、胸から下だけ

のワンピースにして、吊紐を何本か、つけて肩から首、腕とその吊紐を巻くようなデザインのものを考えたり……。でも、そのようなものを作っても現実には、それを着て、外出する勇気などないことは自分が、よく知っている。

夏のサンダル靴にしても、靴紐の長い、ギリシャ神話に出てくる狩人のような太ももまで巻き上げるような靴をはいてみたくて昨年買ってみたけれど、矢張りそれで外へ出る勇気がなく、例の自縛の際に家の中でサンダルをはき、革紐で両足もろとも縛ったりしただけだ。紐とか縄とかの類をあまりに意識しすぎるので、かえって気軽に使えないのかも知れない。

Mデパートで布地と帽子を買った。帽子は白で、前から海へ行くときなどに欲しいと思っていたものだ。帰りがけに日用品の売場に寄ってみた。欲しい物が沢山ある。しかし、一つ一つを考えてみると私のような独身女には縁のないものが多い。日用品を見て廻るなんて、私も結婚を意識し出したのかも知れない。

日用品の隣に日曜大工などの材料置場がある。さすがに若い女の姿は、まばらだ。でも私は、ここに来ると、変に胸が、ときどきする。太目細目のロープや鎖、冷たく光っている錠前、などを見ると何かいけないものを見たように、胸が締めつけられるのだ。私ってどうしてこんな性癖に、生まれついてしまったのだろう。いままで（「とき子の自縛教室」で書いたように）いろいろな自縛用具を考えたけれど、それがいつも頭の中にあって、そんな材料を見ると、すぐそこに結びついてしまう。先程は結婚を意識しているなんて言っていたけれど、これでは幸福な結婚などできそうもない。こんなことを考えながらも、とうとう変な物を買ってしまった。

それはゴムの紐で、自転車の荷台に取り付けるような黒く平べったいバンドのようなものだ。メーターで売っていたので「一〇米ぐらいください」と言ったら、若い女子店員に「何にお使いでしょうか」と開かれた。私は顔が赤くなったが「自動車の屋根に荷物を乗せたいの」と、ごまかしたけれど、まさか自分を縛るためとは誰も思わないだろう。

これで裸になった自分を縛ったら、どんな気持ちだろう。冷たいゴムの感触とその締め方、普通の紐や縄などとは違った感じだろう。あまり強く締めると、全身の血が止まってしまうかもしれないかも、なんて思うと、店員がそのゴムバンドを包む手元を見ながら

変な気持ちになった。

▽……………△

〇月×日

暑い！ 今が一番暑い季節なのだろう。昨夜は久し振りに自縛してみたが、汗をびっしょりかいてしまった。扇風機を強にして、その前でブラジャーとパンティだけの姿で縛ったけれど、縛り終えた時には、もう胸と腋の下から汗が流れ出し、それをふこうとしても両手が使えないので、ただそのまま坐っているだけ。特に、鼻と口を覆う猿轡をしたために額から汗が吹き出し、まるで蒸し風呂に入ったよう。

真夏には、口に噛む猿轡のように最小限のものでなければ駄目だと思うが、なにぶん私は鼻口を覆う式のものが好きなので、どうしてもそれをしてしまう。全身を厳しく縛るには相当の力があるので縛り終わると、ぐったりしてしまう。暑い時期は、なおさらだ。そのうちに汗が縄にしみ込んできて、ますます苦しくなる。背中に合わさった手首の縄にも汗がにじむと、そこが締まってほどけなくなるので、危険が一ぱい。

丸太ン棒のようになった身体で部屋中ごろごろ転がって、やっと解いたのが朝の二時。とても、疲れた。矢張り、縛られるのも多少涼しい季節の方が楽なようだ。

最近ではもう、完全に自分を高手小手に縛り上げる自信？ ができた。自分で自分の手を縛るなんて、とても不可能だと思っていたけれど……。それが段々とエスカレートしてきて、それにも物足りなくなつて何か変わった縛り方がないかと考える自分が怖ろしい。

出来そうで出来ないのが、両手を開けて別々に縛る礫はりつけのような型

だ。足は簡単だが、いざ手となると、むづかしい。片方だけは縛れても、もう一方の手は縛れない。あらかじめ縄の輪を作っておいてその中に両手首を別々に差し込むと、それなりの型は出来るが、どうも満足するまでには、いかな^{はりつけ}い。磔のような型は腕に縄がかからないので緊縛感に乏しく、あまり好きではないのだけれど、できないと思うと、なおさら、やってみたくなる。

▽……………△

○月×日

勤めの帰りに、公園で縁日のようなものをやっていたのでお友達のK子さん、Nさんと一緒に見て歩いた。おでん屋や金魚すくいの店もあって、三人で結構、楽しんだ。

玩具の店で自転車に乗っている猿のおもちゃを見てみると、K子さんが「ちょっと！ あれ、本物かしら」と言うので、見ると店の奥の方にテレビで見えるような、手錠が吊ってある。一瞬どきっとした。N子さんが「お・も・ち・や・屋・さんで売っているのだからお・も・ち・や・でしよう」と、変な結論を言ったので三人で笑ったが、私は急に落着きがなくなった。何も意識していないらしいK子さんが、なおも珍しそうに眺めているので、N子さんをつっついてそこを離れたが、それからは、白く光る手錠が眼に浮かんできて、困った。

私は自縛のための道具を、いろいろ考案し、その中の「縄手錠」（「自縛教室」で紹介した）などは毎日のように使っているが、金属製の手錠は持っていない。冷たい金属の感触に多分の魅力を感じていたけれど、普通には買えないので、半ば、あきらめていた。それが、たとえ玩具でも眼の前に現物を見たので、また欲しくってむずむずし始め、それをはめた自分を空想することになった。

手錠は、どんな構造に、なっているものなのだろう。よく腕けば腕くほど締まってくる、なんていう話を聞くが、私のような女の手首でも、ぴっちりとはまるものなのかしら。多分、おもちゃでも「かぎ」を掛けるようになっていと思うけれど、もし「かぎ」が無くなったら、どうするのだろう。特に後手錠などに自分ではめたらなかなかはずれないのではないかしら。

もし買ったなら、まず両足首から前手錠にと練習してから、充分に背後で掛ける練習をしなければ、危険なような気がする。今日ちらっと見た値段は千五百円としてあったけれど、明日、思い切って買ってこよう。でも若い女が「その手錠を下さい」なんて、とても言えないし……。誰かに頼むわけにもいかないし……。どこかで通信販売でもしていればいいのだけれど……。

いろいろ考えているうちに眠くなった。どうも「手錠」の夢を見そうだ。

▽……………△

○月×日

残暑が、きびしい。寝苦しいせいか、おそくなっても、人通りがある。夏は開放的になるようで、男女の刺激的な場面に出合うことが多い。私には、とうてい出来そうもない。その方面には意気地がない私だけれど「悦虐」の方では何か思い切ったことをしたいという気持が強くなって困る。自分でも危険な傾向と思うのだが、もっとスリルのあるものはないかと考える。

といって、男性に縛って貰う勇氣など、とてもないし、私自身はそのことに、むしろ抵抗を感じる。強いていえば私の変な趣味に同調してくれる女の人がいればと、思うこともあるが、K子もN子も

正常だし、そんなことは口が裂けても言えない。でも一方では、自分ひとりの自縛プレイだけでは、なんだか物足りない感じがして仕方なくなっていることも事実だ。

私が今までにしてきた、ささやかなスリルは、夜、自縛してからそっとカーテンを開け（後手で）外を見ることだ。たいして広くない庭の向こうに道路があり、そこを時たま人が通るのだが、その人達を後手、猿轡の姿で、しばらく見ている。部屋の電灯は消している。外からは見えないと思うけれども、何かの拍子に歩いている人がこちらに顔を向けたりすると、胸がときどきする。よくよく注

意して見れば、縛られた女が立っているのが分かるとも思うが、そこまで気が付かないで通り過ぎて行く。自分の哀れな姿を人前に晒しているということがスリルを呼んで興奮するのだ。

縛られること自体は自縛で十分満足できるけれど、プラスアルファのスリルが欲しい。冬では何とか考えることもできるが、夏は外出にも限度があって、冬のように洋服の下に縄を巻いて外出することもできない。

なんとかスリルを！ と考えに考え抜いて、とうとう思い切った。あることを実行してみることにした。

この際、一番のスリルは、縛られた自分を人前に晒すことだ。そうは思っても身動きできない程、縛られた身体を、変な男にでも発見されて乱暴されても困る。だから発見するであろう人が女の人なら一番、無難だし、またその確率が高くなければならない。さらに、発見した女の人が、たった一人だと、驚いて解く前にお巡りさんと呼びに行ったりしたら困る。

いろいろ考えた末、私のところから五、六分離れたところに総合病院があって、その隣に、その病院に勤めている、看護婦さんの宿舎がある。看護婦さんは一日三交替とのことで、夜十二時頃になると交替の人が三々五々、病院と宿舎の間を往復する。私はその看護婦宿舎の敷地の中の、ちょっとした茂みのある場所を目的地に定めた。



イメージギャラリー

『記録ヘチャレンジ』

志羽利也

うっそうとした木立があつて、その少し前の道を、交替のための看護婦さんが往来する。其処ならば男子禁制の場所であり、荒くれ男に発見される恐れもないし、若い女性ばかりで、しかも一人ではなく、二、三人が組になつて歩いてくるので安心だ。

夜の十一時を待つて外出の仕度をした。ハンドバッグの他に買物袋を持ち、その中に婦人雑誌と一緒にロープを三束と手ぬぐいを入れて家を出た。さすがに夜中ともなると看護婦宿舎も静まりかえっている。あらかじめ目をつけていた草むらに入り、ハンドバッグと紙袋をわざと乱暴に投げ出し、草の上に腰を下ろした。奇妙な興奮に胸がどきどきしてくる。腕時計を見ると十一時半になっている。私は得意？ の自縛にとりかかった。

まず、一本の細引きで足首とももを縛り、口にハンケチを咥え、その上を手ぬぐいで覆つて首の後ろで結んだ。次に、もう一本の縄で胸から腕にかけてぐるぐる巻きに縛り、さらに最後の一本を首に結びつけ、それで背後に回した自分の両手を縛った。どうせ今夜は誰かにほどいて貰うのだと思うと、妙な安心感が出て自然に力が入り、指の届く限りの横縄に後手の縄を通したりして引っ張り、縛り終えた時は身動きも出来なくなっていた。

なおも周りは深閑としている。そのままの姿でしばらく草の上に坐っていたけれど、そのうちにヤブ蚊が来てブーンブーンと気持の悪い音をたてて顔のあたりにまつわる。追い払うにも両手が利かない。裸の腕と足の方に群がってくる様で、少し身体を動かして追うのだが、なんとも駄目で、とうとう数カ所を刺されたらしく、猛然とかゆくなってきた。猿ぐつわから出ている顔の上半分も刺されたようで、近くの草や木に顔をこすりつけてもみたが、どうにも我慢

ができない。とんだところに来てしまったと後悔したが今となっては、どうすることもできない。

私の身体は草むらに、すっぱり埋まっているので、前を通っただけでは姿は見えないと思われる。しかし誰もいない草むらの中で、手足を縛られて身動きも出来ずに坐っている時の不安感、怖ろしさを、しみじみ味わった。それがまた、マゾヒスティックな快感にもつながり、想像を絶したスリル。

十二時も廻った頃、計算どおりの白い衣服を着けた人が遠くに見える、段々に私の方に近づいてくる。蚊に刺されたかゆさを我慢しながら私は、じっと待った。もう話し声が聞こえる。まさか、すぐ傍の草の中に、縛られた女がいるとは、つゆ知らず、白衣の人たちはゆっくりと歩いて来る。私が家で考えていたように、縛られた身体を、ごろごろと転がして呻き声をあげれば、すぐ気がつく距離だ。どんなに、びっくりすることだろう。

今だ！ と思うが、身体が、いうことをきかない。何も縛られてゐるために自由がきかないからではなくて、なんとも恥かしくて、その勇気が出ないのだ。最初の組が通り過ぎると、すぐ次の組が眼の前に来る。せっかくここまでやったのだからと思い、勇気を出して転がろうとするのだけれど、反対にちよつとでも、ごそごそすると発見されそうで、息をつめて、じっとしていなければならぬと思う気持も強く、どうしても動けない。次から次へと白衣の組が前に来るが私は、じっと坐ったまま。これが本当に他人に縛られたのなら、なんとしても助けて貰いたいと一生懸命になるのだけれど。

三十分ぐらい、じっと坐ったままの私の眼の前を何組かの白衣の人の群れが通り過ぎた後は、またもとの静寂がきて、何もなかった

ように風が、そよいでいる。なんだか損をしたという思いと、ああよかったという思いとが複雑にからみあって、とてもおかしい気持ちだった。他人に解いて貰うつもりで、後手などは、どうにもならない程の縛り方をしていたので、それから解くのが大変。小一時間もかかって全身にまつわりついた手足の縄を解き、また紙袋に入れてふらふらしながら家に帰った。何かがっかりしたような、それでも草むらに、坐っていたときのスリルを、また味わいたいような気持ちだった。

▽……………△

○月×日

セーターとオーバーの季節がやってきた。これからは日ごとに寒さが増してくるのは辛いけれど、別の意味で私には秘かな楽しみがある。自縛したまま外を歩けるからだ。もちろん洋服の上から縄を掛けるわけにはいかないが、セーターの下ならばオーバーを着ていれば分らない。セーターだけの時期にもやってみたが、結び目などがセーターを通して外から分かってしまう。

朝、下着をつけてから、その上を縄で縛る。首縄をしてから身体を縦に縛り、さらにブラジャーの上下から太股あたりまで横に、ぎっしり、縄を巻く。腕に縄を掛けるわけにはいかないなので手足は全く自由だけれど、股間縛りの縄目が、歩くと余計に意識されるし、乳房の上下を強く縛っているの、それだけ胸のふくらみが強調される。首縄はハイネックの時でないと、やらないようにしている。太股は、あまり下まで縛ると歩きにくくなるし、ミニスカートだと見えてしまうので適当に加減をしているが、いずれにしても、その時々^々の服装によって、縛り方も変えるようにしている。

そのまま街を歩いたり、時にはお役所に出勤する。電車で隣に坐っている人も、勤め先の人も、まさか私がセーターの下で、ぎっしりと縄で巻かれているなんて思わないだろう。縄のすれる痛さと、そのような心理的なスリルとで、とても興奮する。

ただ一番、困ることはトイレだ。何分、下着の上から縛っているので用が足せない。全裸で縛っておけば、ある程度はよいが、それでも縦縛りの縄は、はずさねばならないので大変。だから、そのようなときは、なるべく飲むものを制限することになっている。

いつだったか、風邪気味だったのに、この恰好をして出勤したがどうも具合悪くなり、皆が診療所に行った方がよいと言う。自分でも注射でも打って貰うつもりだったけれど、なにしろ診察を受けるにも裸にならなければならない。あわててトイレに行って全部の縄を解いたのはよいけれど、あっちこちに縄目の跡がくっきり付いているので、お医者さんに見せるわけにはいかない。とうとう早退して家で寝てしまったことがあった。

だから、外出中に何かが起こって、病院などに担ぎこまれた場合は困るなあーと考えることもある。

▽……………△

○月×日

今日は、ちょっと思い切ったことをした。電車で二駅のところにあるKストアまで買物に出かけたのだが、オーバーのかわりにマントを着れば、ある程度は縛って歩いても、分らないだろうと思いつき、実行してみた。

自縛したままの外出は、オーバーを着ても勿論できるけど、腕も一緒に縛ることはできないし、それでは完全に縛られたとは言えな

いし、何か物足りない。その点、マントは上にはおるだけなので、腕も胴に緊縛しておいても外見からは分からない。

いつものように、ハイネックのセーターに、パンタロンをはいてその上から縄を掛けた。首はマントから出てしまうので、首縄はやめて直接、腕と胴を乳房の上下で亀甲型ができるように縄をかけ、要所要所を堅く結び、パンタロンの上から股間縛りにして、最後は腰に結んだ。短いマントだと、股間縄は見えてしまうけど、長目のマントだと、お尻は覆われるので大丈夫。

二の腕からひじにかけても縄を掛け、胴に締めつけるとひじから先しか自由がきかなくなり、それから上へは上がらなくなる。そこまですたら猿ぐつわもしてみたくなって、外から分からない方法はないものかと考えた。まず口の中にガーゼを丸めて突っ込み、その上を抑えるために古いナイロンストッキングで口唇を割るようにして強く縛り、髪の上から縛ったのでは見えてしまうので、髪の下を通して首の後で結ぶ。それから大型のマスクで鼻と口を覆い、さらにストッキングの猿ぐつわが隠れるまで髪の手を頬の方へ寄せてなでつけた。

鏡を見ると、猿ぐつわはマスクと髪の手にかくれて見えない。でも、これだけでは風でも吹くと不安なので、念のためにネッカチーフをする。ネッカチーフにマスクの顔は、冬ならば何も、めずらしいことではない。

手首だけを自由にして、ここまでやってからマントを着る。ひじも縛ってあるので、この着るときが一苦労だったが、着終わって姿見で、いろいろな角度から写してみたが全く外見では分からない。これなら大丈夫と思い、さらにエスカレーターして後手に縛ってみよ

うかとも思ったが、背中の方がふくらんで見えるし、不自然なのでそれはやめて、別な紐で手首を前に縛った。

もう一度、鏡で観察してOKと考えたので、前手にハンドバッグを持って家を出ようとしたが、前手縛りのままで靴をはくのが、また一苦労。

胸を、どきどきさせながら歩いたけれど、駅までの間に三人ほど知った人に逢った。猿ぐつわをしているので挨拶もできない。なんとか頭を下げただけで、ごまかしたが、冷汗をかいてしまった。

今までのように、セーターの下で胴だけを縛ったのとは違い、マントさえとれば上半身を完全に縛られているのだから、すごいスリル。その上、口もきけないので、お友達にでも、会ったらどうしよう。お友達でなくとも、誰かに道でも聞かれたら答えることもできない。「うう……」と言ったのでは……。まして暗ければ、なんともかなるけれど、真昼間の十時頃なので、ごまかせない。

駅につき、改札口で定期を見せるときにどうしようかと迷ったがえい！　と思い、マントの中でハンドバッグを開け、定期を出してそれを指先でつまみ、マントのポケットから、ちょっと覗かせて改札を通過した。これらを前手縛りのままやるので大変だ。

電車の中は大分、混んでいた。何分、吊革を掴むことができないので、入口で手すりに凭れかかっていたけれど、混んできてマントの上からでも私の身体に触れたら、ごつごつした縄の感触は分かっってしまうだろう。もっとも、この世の中に縛られた女が白昼、電車に乗っているなんて夢想だにされないことなので、ごつごつの感じが分かったとしても、そこまで想像されないとは思わけれど。ただ電車に事故でもあったら……と思うと、心配になる。

イメージギャラリー 『情緒』 岡 たかし



なんとか無事、電車を降りてKストアに入ったが、ここでは手首を縛っておくわけにはいかない。少々惜しかったけれど、トイレに入って前手縛りだけ解き、顔を直して、猿ぐつわが外から見えないことを確認してから売場に行き、買物をした。最初の計画どおりデパートとは違って、ストアの場合は自分で品物を取り、黙ってレジのところを持っていけば買物ができるし、いっさい、口を聞くことも必要がないので、その点、安心していられる。

ストアの中は非常に混んでいて、レジの前など長い行列ができている。そこに並びながら、ふと見ると、周りに張りめぐらされた鏡に他の客に混じって自分が写っている。外見上は全く変わらない。マントにパンタロン。ネッカチーフに白マスクの女が品物を入れたかごを下げて立っている。一皮剥けば、このストア中の人の視線が集中するようないじめな変態的な恰好で立っているのに……。

無事に買物を済ませて、ほっとしたのか、むしろに咽が乾く。なにしろ口の中にガーゼを押し込んでいたので唾液は吸われるし、ストッキングで縛っているのをそれを飲み込む事もできない。あやうく口端からよだれが垂れそうになる。でもジュースを飲むわけにもいかないのです、とうとう我慢して再び電車に乗ってしまった。今度は荷物を持っていてるので手首を縛るわけにはいかず、そのまま、家に帰った。帰ってから全身の縄や猿ぐつわを解いたら、今度は、後手に縛って映画館にでも入ってみようかしらと考へたりして、欲深さに自分ながらあきれた。

——（おわり）——

（後記Ⅱ）昨年の一月中旬ごろ、もし、Kストアで十一時頃に、煉瓦色のパンタロンに黒のマント、大きなマスクにネッカチーフという恰好の女を見かけた方があったら……それは私でした。もっとも、今後たとえ、そのような姿の女の人を見ても私であるかどうかは分かりません。変な想像をされると、その方が迷惑されるでしょうから、念のため——）

〃耽 奇 房〃 我 楽 多 控

△第四回▽

逆

吊

漫

考

— その一 —

辻 村

隆

緊縛に吊りが加わると、忽ち責めの様相を呈してくる。だから、緊縛モデルであるからといっても、誰しも可能というわけにはゆかない。M女性の中にも、吊りに対して、恐怖感を抱く女性もあり、ぶよぶよの肥満体女性も、どちらかというと、も一つ、ふさわしくない。

小柄で、ほっそりしていて、マゾ性の強い女性が矢張り、吊りには最もふさわしいようである。

その忍耐度も又、各人各様で、吊った刹那から、すでに最大限の苦痛を訴える人もいる

かと思えば、悦虐の陶醉を浮かべている人もいて、それぞれの女性のマゾ性の強弱によって、同様の吊りをしていても忍耐度は、さまざまである。

勿論、吊りの場合、その縛り方によることも、苦痛に比例することが多く、みかけは同じようにみえても、我慢出来る縛り方、もう寸秒も我慢出来ぬ縛り方と、緊縛法が、吊りの場合、大いに左右されてくる。

過去、数十人の女性を吊ってきて、そのすべてを、ここに発表するとなると、相当のフットを要するので、今回は、吊りのうちでも

最も強烈を極める、逆吊りに絞って、考えてみたい。

逆吊りの醍醐味といえば、大きく開股させて、悠々觀賞しつつ、ローソクでも添景すれば最高というところだが、仲々、言うは易く行なうは難しで、一対一のプレイの場合など中年男の私にとっては、一寸、不可能にも近いポーズである。

逆吊りにされる方もエライが、する方も並大抵の努力ではなく、やはり、こういう最高のポーズをとらせようと思えば、二人から三人ぐらい、いないことには、た易くは、ゆか

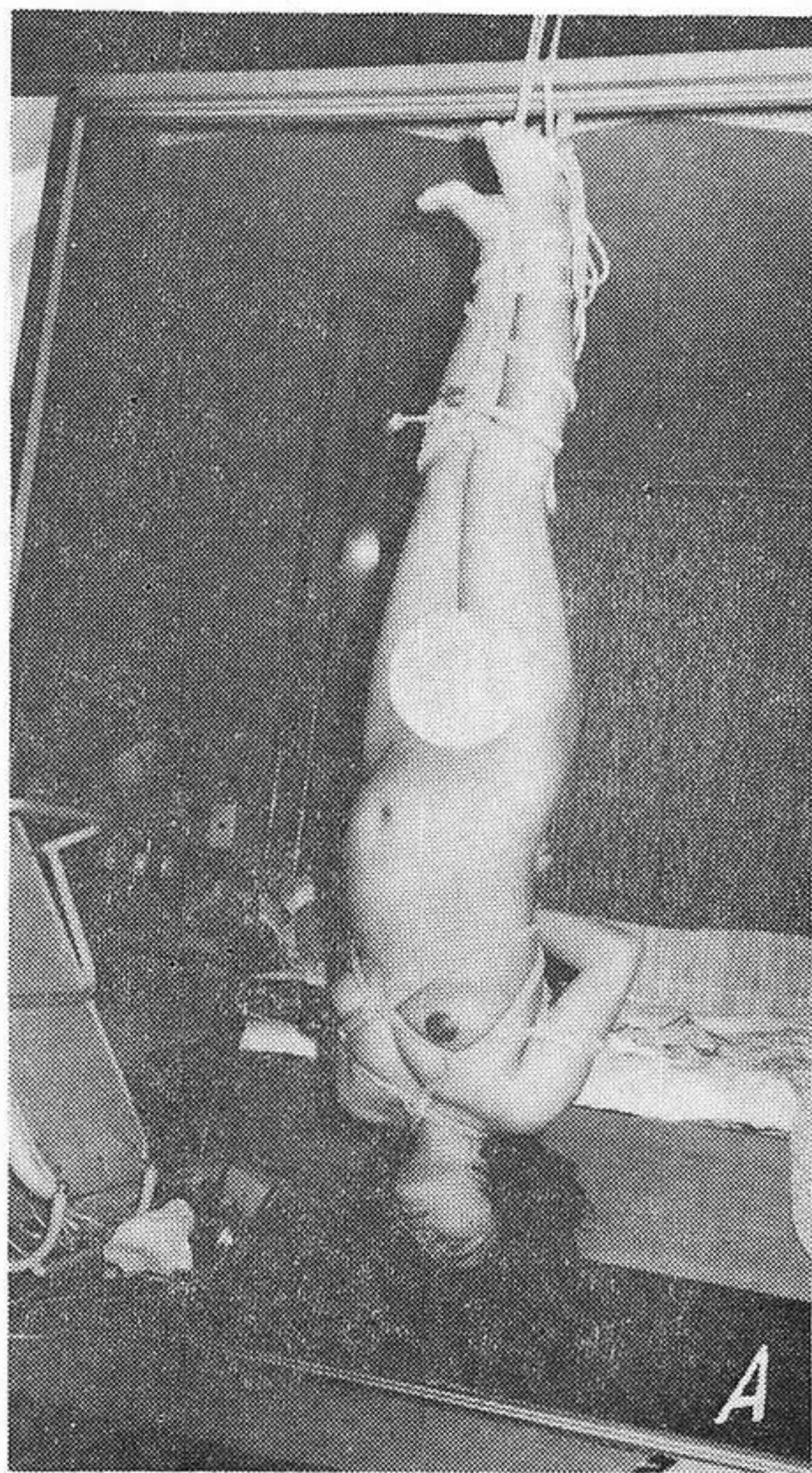
ない。

同じ逆吊りをするにしても、逆さになった頭部が、地上すれすれとか、頭が地についているようでは、やはり見た眼にも、嗜虐度は乏しく、やはり、高々と吊り下げてみたいがおいそれとはゆかず、ホテルなど利用した場合、高々と吊り下げられるような部屋は、ごく稀である。

――妊婦の逆吊り――

私にとって、逆吊りで、最も強烈な印象を残しているのは、妊娠九カ月の、金原奈加子の、垂直逆さ吊りであろうか。

SMカメラ・ハントでも、『童女受胎譜』（昭和四十四年八月号）で、その時の模様を發表したのであるが、一対一での完全逆吊りで、しかも、間もなく臨月を控えての、彼女の逆さ吊りに対しては、胎内の嬰兒のことも考慮して、やはり、一抹の不安と危惧を感じ



たのであった。

しかし、身長一五〇センチ前後の、小柄で童女めいた金原奈加子なら、鴨居から垂直に吊り下げても、頭が鴨居につく懼れはなく、絶好の女体であった。

私が逆さ吊りを申し出ると果たして奈加子は、胎内の子に不安を感じたらしく、

「流産しないかしら」

と、その不安を口にした。

そこで私は、伊藤晴雨氏の愛妻が、臨月で逆吊りされた故事を引例し、無事、出産した

ことを話した。

加奈子の場合、すでに二人目の胎児で、しかも横暴な夫に強要された恰好で、モデルとして、大きな腹をかかえて出てきたので、さしせまって、是非うまなければという気持ちにもなっておらず、中絶しそくなって大きくなってきただけに、幾分は、それによって流産の節は、それもまたよしという、生活苦の、さし迫った思いを抱えてもいた。それに、二児の母親としては、加奈子は、あまりにも幼なく若過ぎたようでもある。

だが、いくら私の食指が動いていても、あの時、彼女が敢然と拒否したら、懼らく私としても、それを押してまでも決行し得なかったことであろう。

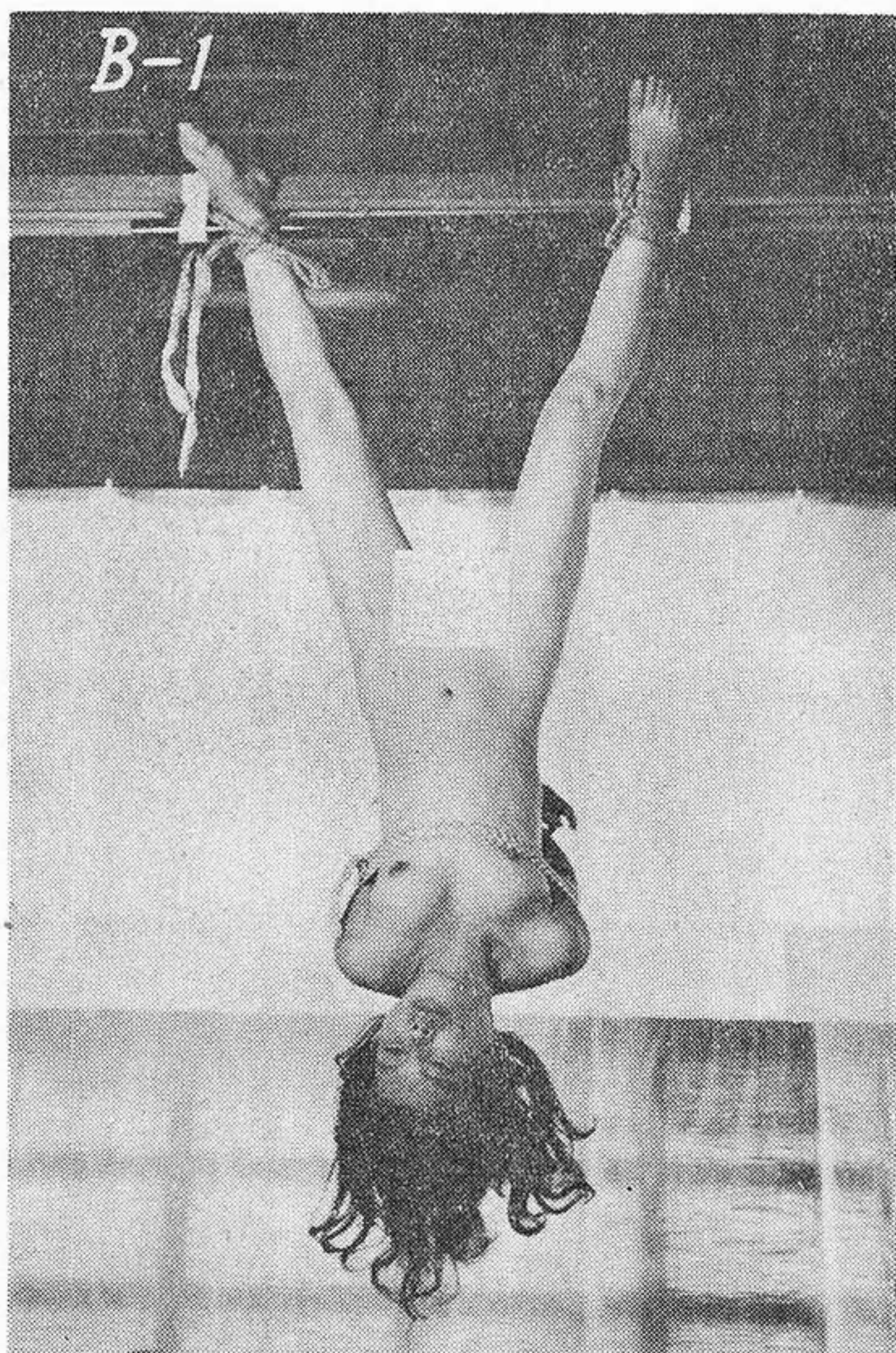
夫や、私達嗜虐者との、数回の緊縛プレイによって、加奈子は、かなりのマゾ性に飼育されていて、案外たやすく、それを許容したのであった。

占めたとばかり、気の変わらぬうちに、私にとっても、恐らく空前絶後になると思われる、妊娠九カ月の妊婦の逆吊りに、いよいよ取り掛かることになる。

上半身を緊縛し、立ったまま、両足首を縛ったが、これだけで吊ると、かなり苦痛であろうと思われたので、さらに膝下を、しっかりと結んで、それに縄を結びつけ、全身の力はこの膝下の縄にかかるようにして、いよいよ逆吊りの手段である。

膝下の縄が、吊った重味でズレると、全身はズルズルと下がって、縄は、両足首を縛った縄でとまるが、頭が床上についてしまうことは必定である。しかも吊り下げるプレイヤ―は私一人ときている。これは確かに至難な技であった。

脚の長い机でもあればラクであるが、ホテ



ルでは生憎とそんな都合のいいものはない。この時の状況を、私のカメラ・ハント昭和四十四年八月号『童女受胎譜』緊張の一節で紹介した方が手っ取り早い。

『私にとって、世紀の瞬間が、刻々と迫りつつあった。机を鴨居の下へ運び、その上に腰掛をおく。足縄に繋ぐ縄を鴨居にかけ、足首だけに力のかからぬよう、膝下から、かなり

強く縄を巻いて足首で留め、別の縄で、しっかりと両足首を縛り上げた。……中略……

彼女を抱き上げると、腰掛から落下せぬ様に、腰骨のやや上あたりを中心にして腰掛に仰向けに寝かしつける。上半身がそって、頭が机上すれすれに垂れ下がっている。片手で体を押え片手で足首に吊縄をとりつける。体を逆さに抱え上げるようにしながら、一方の手で吊縄を引きしぼってゆく。脚部は、かなり上が

って、奈加子の肩胛骨の辺りが、腰掛で支えられていた。もう一息……。さらに、ぐっと引くと、肩が腰掛につく。首が直角に屈曲し彼女は、かなり苦しうであった。私は、もう必死であった。机上に足をかけて上がるとメリメリと音をたてて、きしんだ。そんな事は、もう構ってはおられない。両脚を大きく開いて、奈加子の体を内腿のあたりで挟みこ

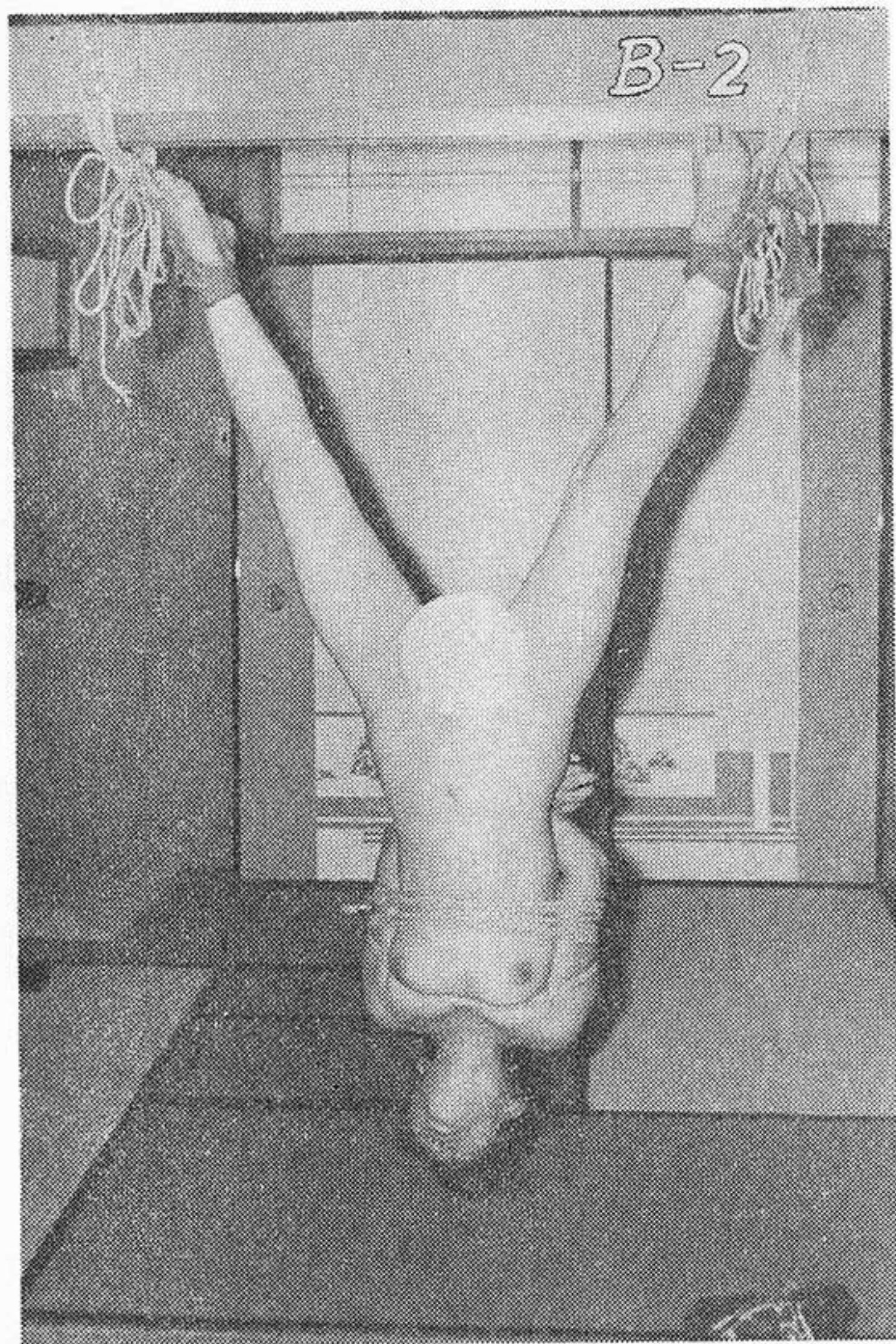
むようにして更に、ぐいといつ揺りあげて、
 とる手ももどかしく、吊縄を、とめた。彼女
 の首筋が、かろうじて腰掛で、支えられてい
 た。

「どこも痛くない？」

「両足首がしまって、少し痛いですが、我慢
 します。早く撮って下さい、早く……」

奈加子も必死にこらえているようである。
 首を抱えて腰掛を外

すと、ゆらりと髪が逆
 さに拡散して、彼女の
 体は宙に揺れた。机を
 立てる時間さえ、もど
 かしく、私はこのSの
 窮極ともいえる妊婦逆
 吊りの、最高のポーズ
 に、あわただしくピン
 トを合わせ、続けさま
 に十数枚、撮りまくっ
 た。逆吊りによって、
 確かに膨らみの位置は
 胸の方に、下がってい
 た。……中略……よく
 ぞやってくれたと、褒
 めて褒めて、ほめ千切



りたい気持であった。あれだけSMに徹した
 増田喜代司、みゆき夫妻でさえ、逆吊りには
 二の足踏んで躊躇したのである。それを果た
 し得た喜びは、この世界に足を踏み入れた者
 のみにしか分からぬ、感激と喜びの極みであ
 った。伊藤老以来、なし得なかった、この壮
 挙に、あえて挑んで、成功した欲びは、私の
 長いS歴にとって、新しい一つのエポックと

なるに違いなかった』

と、最大限の感激で書きしるしている。誌
 上の妊婦逆吊りフォトは、当時の状況から、
 白布で前を蔽ったものだった。今ここに発表
 する赤裸々なフォトは、ナマは、おみせ出来
 なくて残念だが、臨月間近くなって、かなり
 の弛緩が明らかに窺えた。

(A)

金原奈加子のために書かなかったが、逆吊
 りから降ろす時、私は彼
 女からオシッコをかけら
 れ、カッターシャツの胸
 を濡らしたが、それも妊
 婦を印象づける記憶とし
 て、今もありありと思い
 出の中に残っている。

子宮の膨大にともない
 膀胱が圧迫されて頻尿状
 態になる。一寸のショッ
 クにも洩らすのは、出産
 近い妊婦としては当然の
 ことで、その上、彼女の
 場合、逆吊りというショ
 ックに耐えていただけに
 それは、むしろ当然過ぎ
 る結果であった。

「御免なさい、粗相しちゃって……」

顔赤らめて謝る奈加子が、その時、一入、いとおしくなり、思わず抱きしめた私が、その手を、そっとすべらせた時、意外にも、この童女に、かなりの悦虐の兆しを認め、改めてマゾ性を確認する愛撫責めを試みてみても童女は私の胸に顔を埋めた俛であったことをしみじみと思い出すのであった。

逆吊り最初の経験

私が、初めて逆吊りを行なった女性は、典型的なマゾ女性、木村洋子であった。

この時は箕田氏と一緒にであったが、緊縛や構成は、一切、私に任せ、この逆吊りの時だけ、彼は手を貸してくれた。

当時の彼女は、怪しげな陋巷に住み、放浪中の頃であったという。

昭和二十八年の梅雨時分だったが、自ら虐められることを切望してきた、強烈なM女性ときいていただけに、私もそのつもりでハナから、かなり粗々しく扱った。

彼女は自らを名乗らなかつた。謂わば、身元不詳の、釜が崎近くの今池の安宿に住んでいる、超マゾ女性ということだけしか分からず、私のこの時のネガには（ドヤのマゾ女）

とだけメモしてある。

椅子に、頭を下にして、双臂を高々とあげさせ、もっとも観察し易い極端なポーズをとらせ、淫らな墨の落書きをし、太いローソクを責め具としてポトポトと蠟涙を流し込み、女がヒーヒーと被虐に吸りなくのを、疼くような思いで眺めて快感を覚え、その挙句、開股逆吊りという、当時としては、夢でしかなかった壮挙に敢えて挑んだのであった。

逆吊りの女に、私はまるで狂ったように縄ムチを振り、果ては、蠟の燭台をかかげて快哉を叫んでいた。（B-1）

当時の木村洋子は、懼らく二十才前後であったと思うが、蒼丘はうすく、爛れたような感じが、自慰の激しさを、まざまざと示していた。

マゾの願望に堪能した女は、私に小声で囁いた。M字型に吊るされ、落書きした絵筆を立てた、そのポーズで――。

（ねえ、ウチを犯してえ……ねえ、犯して）

私は、嚙言めいていう女の願いに、耳を疑ったが、確かに（犯してくれ）と願望している。最高に悦虐した女体は、性の欲びを求めて狂奔していたようであった。

この頃の彼女の生活や感懷は、確か半年許

り前だったかの、自叙伝めいた告白の中にもしるされている。

箕田氏の手前、逸り立つ心を抑えて躊躇していると、粹に捌けた彼は、カメラをおいてどっかと坐り、

（飲ばしてやったらどう、功德だぜ）

と、ニヤリと笑うのであった。

（いいの？）

（ああ、本人が願っているんだもの、いいじゃないか。何なら、その決定的瞬間を撮っておいてやろうか）

私は慌てて、手を振った。その頃は、流石に今程は心臓も強くなく、若干の羞恥心は存在していたらしかった。

箕田氏と二人掛かりで、猪吊りに吊るし直した位置は、私の腰の辺りの高さだった。立ちはだかる私――。両脚を吊るして、垂直に閉じた太腿に、私の両手がかかる。

如何にも、超マゾ女に、ふさわしいプレイであった。

ミシミシと鴨居をききませて、女体が大きく揺れ、私の嗜虐性は昇天し、箕田氏は平然と見上げていた。

太腿や、胫のあたりに、斑々と点在する虫刺されの痕や、痒さに、かきむしった傷あと

が女のその時の生態を
如実に物語っていた。

それから六年――。

この女は見違える様に、みなりも姿態も美しくなって、木村洋子として、さながら別人の如く登場する。

私は、その時、あの今池ドヤのマゾの女と同一女性とは全然、思いもしなかった。本人も六年前の、あの狂ったようなプレイのひとときのことを、毛振りにも口にせず、澄ましていた。

緊縛一時間ぐらい、私も箕田氏も正直いつて気付かなかった。オヤ？ と思ったのは強烈な羞恥縛りを始めた時、その特徴ある形態を、この眼でみとめたからであった。不思議なアザ――。その小指先ほどのアザが、まるで刺青でも施したかのように見えるのを発見した時は、私は判っきり同一人であることをさとした。



こうしたヘンシンも珍しい。服装、容貌、言葉つきは変わっても、烙印されたかのような秘かな位置のアザは、どうしようもなかったものであった。

眼にみえぬ糸にあやつられて、巡り会った謎の女めいた奇遇を覚えたが、私も箕田氏も過去の、あの狂ったような嗜虐の生態には触れなかった。別人を粧おうなら、その気持を

付度して、別人のように振舞ってやった方が、木村洋子の矜持も保たれるであろうと考えついたからであった。

私は、逆吊りを提唱した。彼女は易々と許容する。開股は前回に比してさらに幅広かったし、逆吊りの時間も長かった。

(B-2)

この二枚の逆吊りフォトを比較すると、六年経って、爛熟した女体は、ふっくらとし、乳房のふくらみも豊かになり、肌も美しい。

そして腰の辺りは、さらに遅しく發育し、蒼丘も、かたちよく、ととのっていた。

これを契機に、私と木村洋子は一年に一度天神祭の宵に出会い、私は彼女を、七夕の女タナバタと呼んだりした。索牛織女のように、一年一度のプレイが、そんな思いを私に抱かせたのであった。

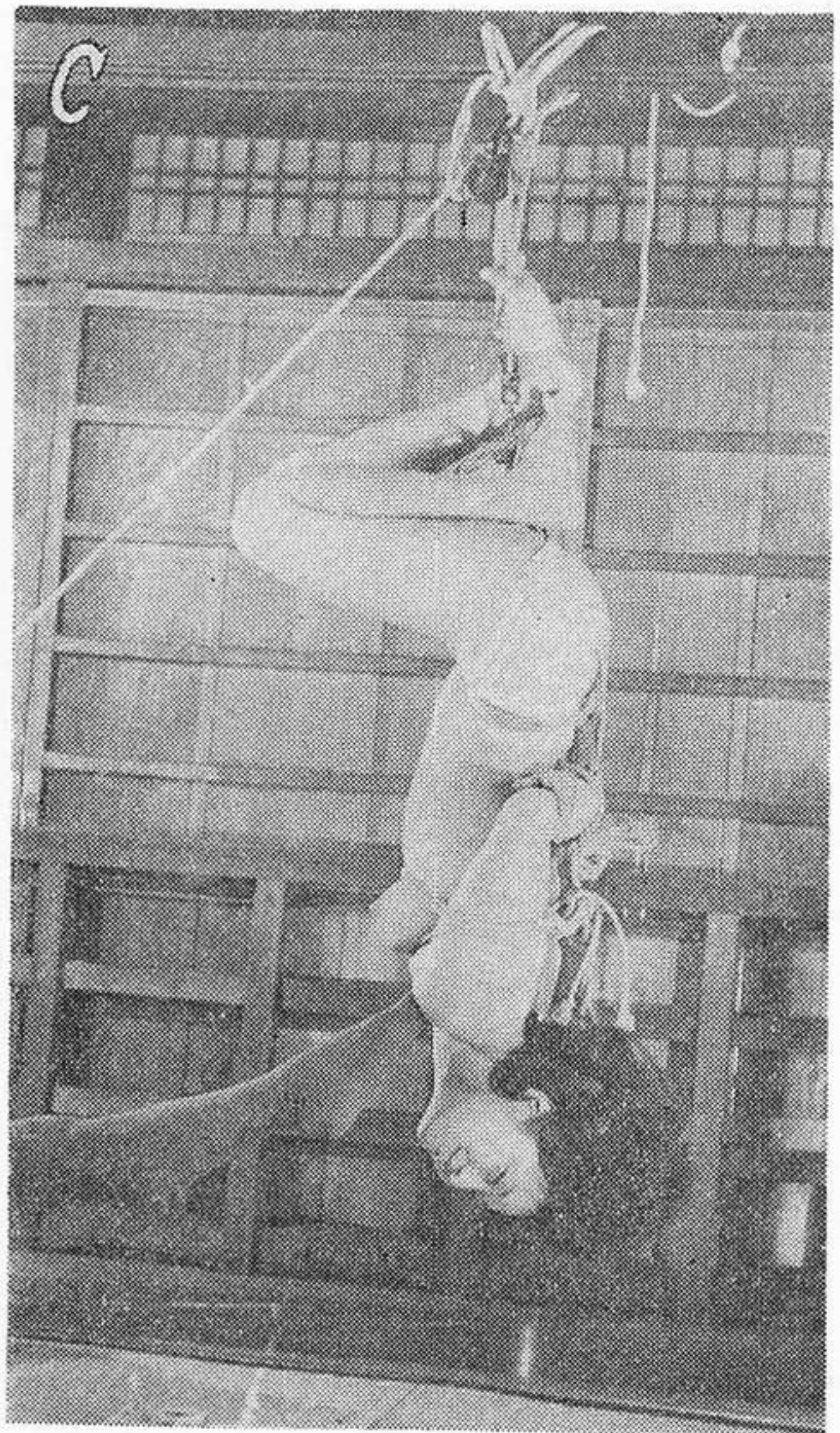
木村洋子とのプレイは、いつも苛酷な、強

烈きわまる嗜虐に走り
彼女は、のたうち、呻
きつづけ、半ば失神し
たようになって歓喜し
私は、そんな彼女と果
てるのが恒例で、数年
続いた。

『三十九夜物語』の団
円を記念して、同好者
が一堂に会した時、私
は懇談のあとの座興に
と、箕田氏と計って二
人のマゾ女性を招き、
その一人が木村洋子で
あった。

広大な庭園での、数々の緊縛のあと、太々
しい桐の大樹に、上半身を剥き、切り裂かれ
たストラックスを穿かせた彼女を、高々と逆吊
りにした。全裸でやりたかったが、参会者も
六、七人いては、万一を慮っての、半着衣で
あったが、彼女は、長い逆吊りの間、まるで
陶醉したように瞼を閉じ、そうされることが
もう嬉しくて堪まらぬかのように、逆さに吊
り下がっていた(B-3)

まるで、物体のように、この女体を代わる



梨花悠紀子の

逆吊り

梨花悠紀子の、この逆
吊りのフォトは、今や古
典的ですからある。(C)

私が、彼女を箕田氏に
紹介するまでは、彼女に
対して逆吊りは試みたこ
とはなかった。

何かこの、たおやかな
娘の協力振りが、いとお
しくて、奇妙にフェミニ
スト振りを発揮しては、
柔らかに、優しく、いた

わり勝ちになるのであった。

全然M気のなかった彼女が、私の要請に応
じて、緊縛に協力するようになり、徐々にM
に目ざめてゆくのが嬉しく、言葉では凄いと

とをやるようにいうくせ、いざやるとなると
いつも可憐さに負けて、お手柔らかになり、
カメラを半ばで放り出して、この柔肌に、う
たかたのひとつきを過す時間の方が多かつ
たようである。

彼女には、こんなエピソードがある。いつ

代わる、大きく揺する。洋子の体は前後左右
に、ブランコのように、人間振子のように往復
する。突出した双房に、私は荒縄をムチ代り
に振りそそいで、打擲する。
呻きに愉悅が混じり、うっすらと開いた眼
が私の、羅刹の如き形相をみて、満足そうに
またたいていた。昭和三九年の初夏の頃――
マゾ性の昂進した木村洋子は、Sの男性を
求めては、快楽に酔っていたが、今はどうし
ていることだろう。

かのプレイの時、始めて白磁の女体に蠟涙を垂らすと、驚愕か、熱かったのか、こちらがビックリする様な悲鳴をあげ、慌てて中止したことがあった。

マゾ女性なら、こんな程度の蠟責めは、むしろ歓迎とするのだよと、私が懇々と説明するのを、うなだれたままで、じっとその言葉をきいていたが、この次には、きっとこらえるからと可憐にいう。

その日はやめて、それから二カ月位後に会った時、彼女は自ら進んで、私に蠟燭を使うことを求めた。

仰向けにして、両足を屈曲させて両手と共に胸で縛り、双臀が剥き出しになるように縛り上げると、私の眼を眩しく射る辺りに向かって、かなり高いめの位置から蠟涙を垂らしてゆく。

最初の数滴は、フンフーンと、鼻を鳴らし

て、眉をしかめていた彼女だったが、もうあの折のような声は立てず、じっとりと脂汗をひたいに浮かべて耐えるのであった。

(よく辛抱出来たね)と声をかけてやり、蠟骸を落とし乍ら抱きしめると、あの透きとおるような声で、

(おうちで寝る前に、少しずつ蠟を体に垂らして、自分で試してみたの。熱いと感じるの

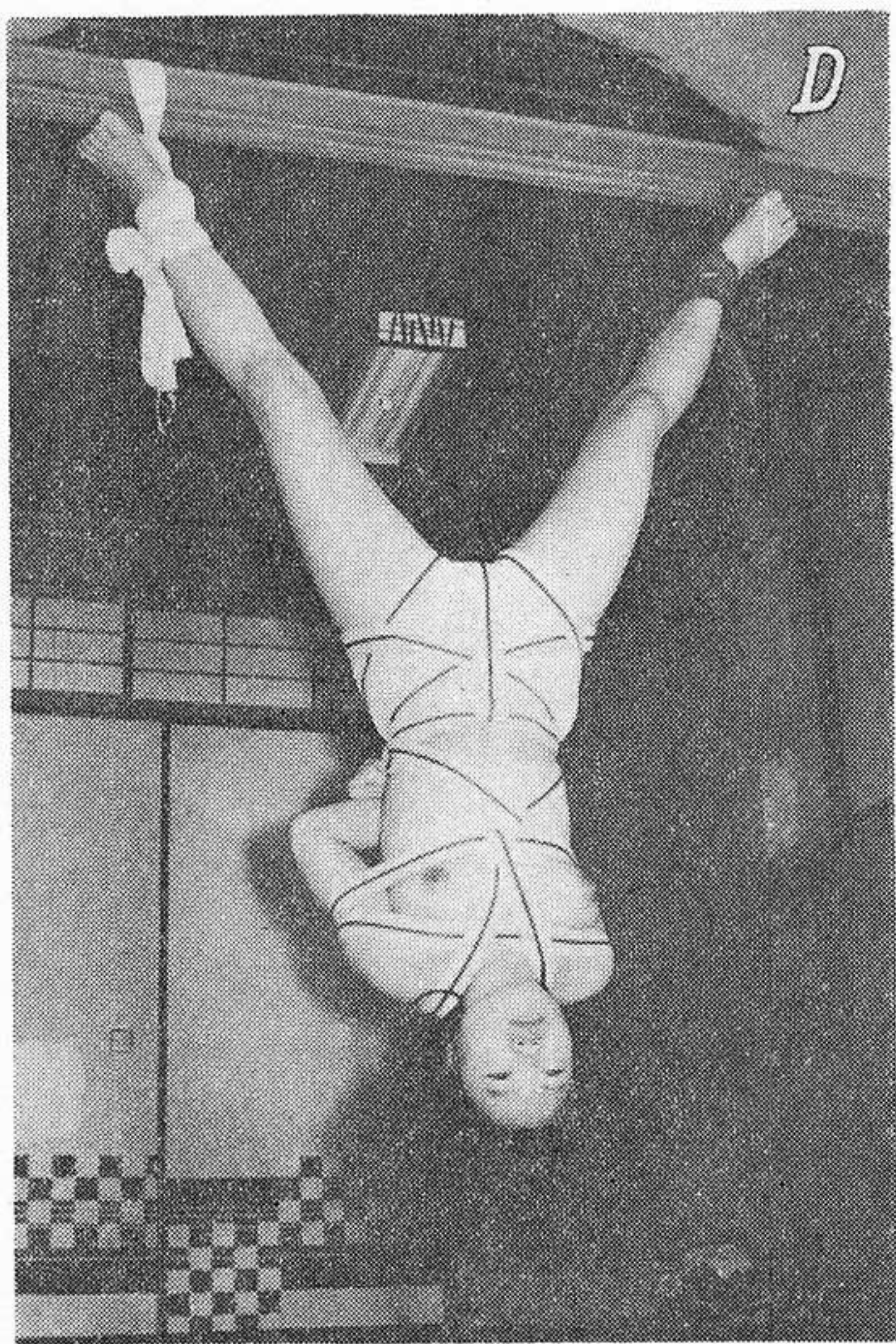
は、むしろ感覚的で、馴れてくると、かなり近づけても我慢出来るようになりましたわ。褒めて下さる?)

と、可愛い顔が、私を仰ぎみる。私はジーンと胸が熱くなった。こんなにまで協力をする子も珍しい。

始めて梨花悠紀子に、オーラル・インタコースを強要した夜、彼女は泣きべそを掻きつつ、それでも拒否はしなかったが、ホテル備えつけの歯ブラシで、何度も何度も、口腔をすすいでいた。

その次には、私と一緒に入浴し、自分の気の済むまで、何度も石鹸をこすりつけて、よく洗ってくれたあと、ベッドに戻ると、積極的に悠紀子の方から、口を近づけてきたが、そんな彼女が私にしては、可愛くてならなかったのである。

独占しておきたい気持ちを抑えて、日頃、幾多の



モデル女性の構成を任せてくれる箕田氏に、私は遂に梨花を紹介する。果たして、箕田氏は、堰を切ったように、彼女を、撮りまくった。その間にも私は、悠紀子撮影の日に、彼と行動を一緒にしたこともあったが、日数からいえば、箕田氏と彼女との、一対一のプレイの日が遥かに多かったようであった。

堺郊外Y温泉の庭園の吊りの種々相は、早春のせいもあって、脱がせがたく、襦袢を着せて撮り、引き続き数日後、私の家の古い内庭や、井戸のあたりでも半裸程度で、吊りをとった。

その挙句、もう相当にマゾ性に飼育して、某日、逆吊りを敢行し、彼女は、むしろ欣然と協力してくれて、数々の傑作が永久に残ったのであった。

よくみれば分かるが、この逆吊りの縄は、股間を通して、腰からで、サポーターで蔽ったようにして、当時のことゆえ、隠して撮っているが、その実、吊縄は、梨花の柔肌に喰い込み、蒼丘を圧迫しているのである。

しかも彼女は、長々とした吊り時間に耐え尚、嬉しげに微笑みすら浮かべ、苦痛めいたかげらいも見せない。

しなやかなマゾの女体は、吊られて、さま

ざまに躍動し、私達の眼を存分に楽しませてくれたのであった。

私は箕田氏と別れてから、梨花を伴い、アベノ界隈のホテルへ消えたのだが、この夜、梨花悠紀子は始めて、欲びの声を激しく洩らした。

いつも一方的だった私と彼女の交渉が、この夜を境にして、お互いを愉しいものにしていった。

(まだ帰らないで……もう少し、あたしを抱いて……)

求めてきた彼女に、私は疼くような喜びを覚えずには、いらなかった。

その時、梨花には、既に恋人がいたようである。悪意ある仲間の中傷で、恋人に、緊縛モデルのことが知れ、梨花は失意と悲嘆で、私達の前から姿を消し、しばらくは沓として行方が知れなかった。

昭和四十三年九月再会——『徳川女刑罰史』のPRをかねたイレブンPMに出演した私を、偶然にもみたという彼女は、懐かしさの余り電話してくる。

課長夫人の一児の母として、人妻は窈窕の艶然たる麗姿を私の前に現わした。

そして、耽溺の幾度かのSMプレイ。そこ

にはもう大人のムードが醸し出され、梨花の女体は円熟し切っていた。

課長の夫の転勤と共に梨花は私の手の届かぬところへ去る。うたかたの、ひとときの逢瀬を愉しむには余りにも遠い——。

窈窕の美女は、今どこでどうしていることだろうか——。私にとって、梨花はいつ迄も永遠の恋人。いつか、今ひとたび会ってみたい女性である。

——みゆきの逆吊り——

この時は、夫の増田喜代司同伴で、増田みゆき、緊縛プレイの第二回目の時であった。

SMにあれ程、耽溺し、双胎妊婦を妊娠五カ月目ぐらいから、記録的に、臨月間近までとりつづけた彼も、その時は、夫婦プレイのハシリでもあり、愛妻の緊縛には、些か出し惜しみの感があった。

全裸を曝させず、そうしたい私の欲望に、傍からコチヨコチヨ、口出しして、私は内心大いに不満であった。それならば、せめて、緊縛でも強烈にしてやろうと、珍しく真田紐を使って、逆吊り態勢をとる。みゆき自身にしてみても、今のような薄いパンティではなく、過渡期の、ズロースとパンティの合の子

ぐらいの、たつぷりと下腹部を隠すものをつけている。箕田氏にしてみても、誌上フォトや分譲にする手前、身につけていても痛痒を感じないが、私にとっ

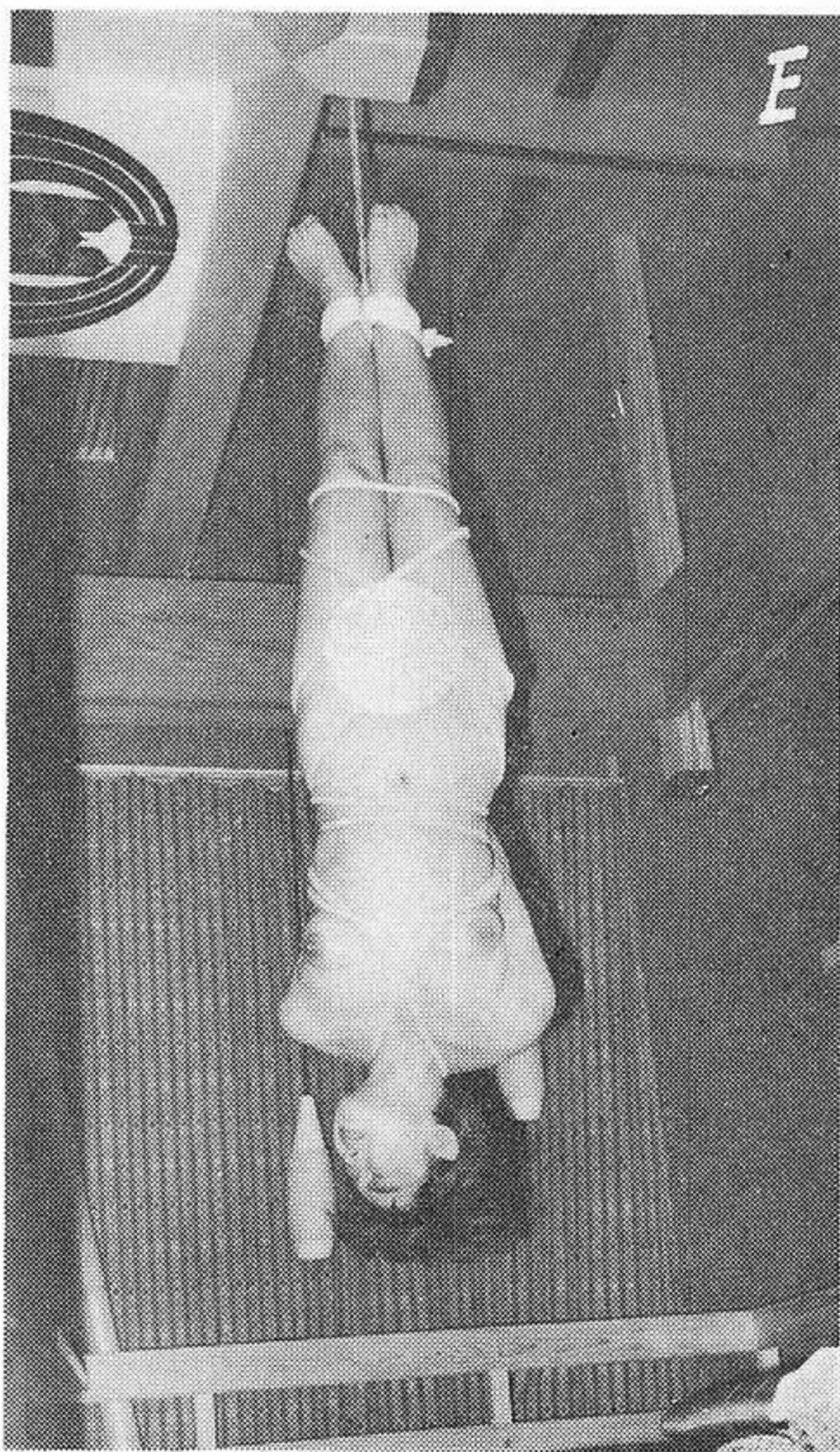
ては、この下ばき、邪魔で仕方がない。夫が折れなければ、己むを得ず、その上から股縄がけ、縄で足首縛りかけたら、痛いだろうかと、布にしてくれというが、生憎一本しかない。片足は、そんなわけで、旅館の腰帶で間に合わす始末であった。

小柄な、みゆき夫人だから、関股逆吊りすれば、頭部は完全に床から離れる。

今にしてみれば、物足りなくても、昭和四十年春の時点では、この逆吊りでも結構、満足したものであった(D)

その後、間もなく、みゆき夫人は妊娠し、夫は、せっせと妊娠の記録を、とり始めた。

私も何度か、彼の団地のアパートを訪れて



は、妊婦をとったが、臨月逆吊りを提唱すると、始めての大切な子供だったのか、とんでもないという風に首を振り、万一、胎児に影響があつてはと、頑じなかった。

大体が、鼻責めマニアで、彼自身、大きく穿孔している上、みゆき夫人の鼻障子をも、一度は貫通させた程で、緊縛より鼻責めの方に重点をおくため、そのプレイは、何処かで私の嗜好とは喰い違っていた。

どの様な緊縛も、責めも、鼻責めが伴わな

ければ、彼にとっては、興味索漠で、面白くも、なんともないらしい。

この逆吊りが、全然ハナに関係のない、オーソドックスな逆吊りだけにそれが彼にとっては不満なのかも知れない。

とあれ、双生児を生み引き続き三人目を生んだが、この嬰兒は夭逝し、みゆき夫人は、しばらくの間、放心状態になっていた。気をとり直して日夜、精を出し、再び三人目の子供を得てからは、最早、みゆき夫人は三児の母として、子供の世話に追われて、プレイから遠ざかってゆく。

一旦は、大阪から東京へ転勤した彼も、大都会の煩瑣^{はんさ}に堪えかねて勤め先を変え、故郷の四国の海浜の地に親子五人、隠棲する。偶に気が向けば、四国からヒョコリ電話がかかる程度で、増田夫妻は、我々同好者の前から、すっかり姿を消していった。

——妖艶、左近麻理子——

結婚を数句後に控えて、京都、平安神宮のほとりで出会った彼女は、妖艶であった。

サウナ風呂もある、この近くのホテル平安の、程よい吊り梁のある平安の間に、しげこみ、彼女はこの日、かなり心を乱していた。

もう自分の被虐の願望を果たす機会には、恵まれぬかも知れぬという焦燥が、彼女をいっになく奔放にさせていた。

触れなば落ちん風情とは、この日の彼女の態度を指すのであろうか。緊縛の合いの間に、しなだれかかり、私がその気なれば、その場でも、ところ構わず濡れた事だろう。

懼らく最後になるかも知れぬと思うから、私も心を鬼にして、根よく緊縛の手を変え、品を変えては撮りまくる。

最後は、この豊満な五十三キロの全裸を、何とか逆さ吊りして、結着をつけたい欲望に燃えていた。

この爛熟の女性、一人で逆さ吊りするにはかなりの労力と、重労働を要する。

(逆吊りするよ)といったら、熱いまなざしで私を、じっと見据え、(いいわ。その代りそれが終わったら、可愛いがってね)と、ダ

メを押した。

緊縛、緊縛で、甘い露の、はかしどころもなく、麻里子は、かなり頭にきている様であった。うなずくと、(嬉しい、早く縛って、吊してエ)と、せがむ。

逆吊りのあとの、甘い愛撫と、快樂の吐け口が、彼女にとっては、待ち遠しくて、ならない様であった。

一人で行なった逆吊りの苦心談は、例によって、SMカメラ・ハント入昭和四十四年六月号、『女の肌の燃えるとき』Vより抜萃させていただこう。

『「いいことを思いついたのだ。麻里ちゃん例の『徳川女刑罰史』みたでしょう。あの第三話の外人女を責めるシーンで二人の女を、井戸用の木車で、吊り上げ、吊り下げする、アップダウン式の責めをやったんだけど、体重が似たりよったりだから、下働きが、体を引っ張って、上げ下げしたんだ。この原理を一度、応用してみよう。試しに、あの梁に縄をかけて二人で、ぶら下がってみようよ。もし梁がドサリと落ちたら大変だからね。ね、協力してくれるだろう。これが、最後だからさ。あとは麻里ちゃん、ゆっくり……』

彼女は仕方ないという表情でうなずいた。

私の執念に根負けしたようである。

縄を二本にして梁に放り投げ、両端を握って、徐々に力を籠めてゆく。ミシリと音かしたが、梁はビクともしない。かなり本式に、丈夫に出来上がっていた。力を一杯にこめたところで、足をそっと浮かせて、ぶら下がってみる。

彼女も私と同じ動作をして裸身の脚を、かがめて挙げた。しばらくそうして二人は両脚をあげ、縄を握んで、ぶら下がっていたが、梁はビクともしなかった。安全を確かめて、次に私は、アップダウンの可能性を確かめることにした。私は現在七十五キロ。五十三キロの彼女との差、二十二キロであるから、私の全体重をかければ、彼女は吊り上がる筈である。唯、四角の角材の突出した組み合わせの梁だけに、その摩擦は、大きいに違いなかった。

両手を、うんと伸ばして麻里子は、縄の尖端を、ぐるぐる巻きに手首に巻きつける。縄をピンと張り、机上にのった私は、縄を体に巻きつけて、体重のすべてを、縄にかける。縄にしがみついて、足を浮かせて、机上からすべり落ちたが、角材のせい、その俣、止まって、麻里子の体は浮き上がらない。

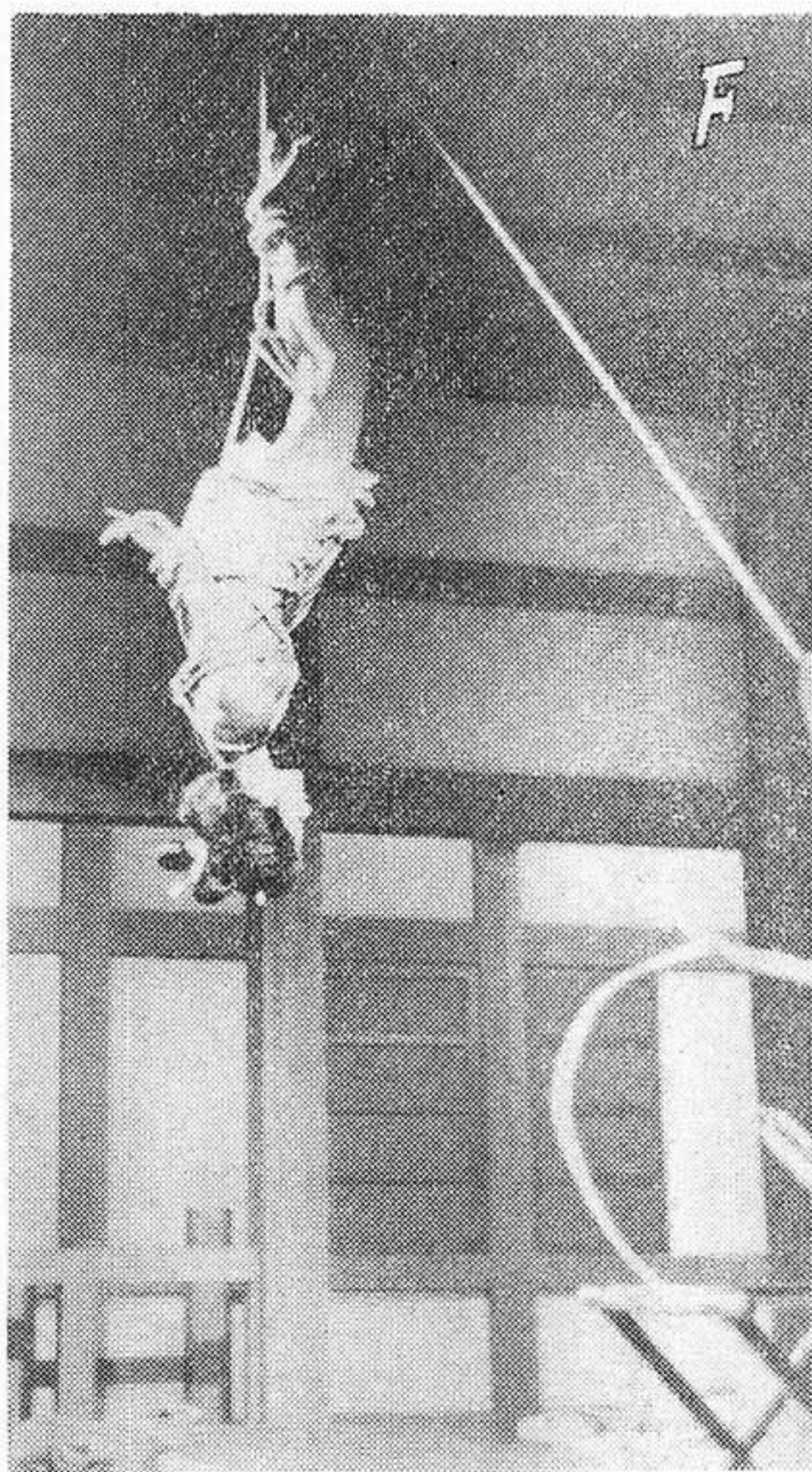
もう一度やり直し。

一杯に引き絞った縄を体に巻いて、両手で対面の彼女の体を引き上げるようにしたら、ズルッと上がって、私はたたみに腰が落ち、麻里子の両脚が、十センチばかり宙に浮いて、たたみから離れた。

縄がかなり要るから縛り方は長い縄一本を使って一筋縄で、首縄

から乳房掛けして、胴から腰、そして太腿へ交叉させて、膝のあたりで結んだ。別のんだら紐で両手を後ろに縛ると、吊り下げに痛くないよう足首に厚い晒布を巻きつけ、それに吊り縄を通した。縄を二本にして三条の縄をつなぐと、かなり長くなる。その縄を握って私は長押に登っていった。長押を伝って梁に這い上がる。

天井との幅は、体一杯はいる程度でギリギリである。やっと目的の梁まで達して、狭いところで私は、縄を腰から股へ、そして体へと、締まらないように巻きつけ、下の麻里子



に、両脚を上にあげるよう合図する。自分の体に巻きつけた縄を伝って落下するのであった。しかも途中、麻里子の体を、押し上げるよう介添えしなくてはならない。逆吊りになった彼女の位置を計算して、縄をつなぎとめる柱に、別の縄をしっかりと結んでおき、私の吊り下がる縄に、三カ所ばかり結び目をつくっておいた。ずるずる落下して、この結び目に、柱の縄をつなぐ算段であった。

成功を信じて、私は両手を梁にかけた俥、足から降ろしてゆく。そして両手を離れた。ずるずると、彼女の体は肩のあたりまで、

雑作なく上がった。彼女の体重は肩胛骨にすべて、かかっていた。両手を伸ばして、彼女の両脚を握ると、ぐっと引き上げるようになる。

私の体は少し落ち、足のかかとは、たたみに二十センチ近くまで下降した。肩が上がり、首が、やっと逆さに垂直になる。

ウーンと苦悶の呻きが彼女の口から洩れ、髪がタタミを離れた瞬間、彼女は、ぐっと首を、そらした。腰のあたりを持ち上げるよう

にして引き揚げた時、私の足はタタミを踏んでいた。ねじれた縄のヨリが戻って、彼女の体は宙で旋回する。体をけんめいに、ずらせ乍ら、やっと柱の縄を掴むと、結び目の玉の上につないで、手早く縛った。じりつと数センチ、女体は下がったが、見事な逆吊りが、ここに成功したのであった』

と、まったく涙ぐましい努力の末、左近麻里子を逆吊りにしたのである(E)

受け止めてくれる第三者がいないので、降ろすのが又、一苦勞であった。ゆるゆる降下しないと、下手すると、頸筋を捻挫する場合

がある。

禪身の力をこめて、この五十三キロの女体を、タタミの上に降ろし終わった時は、たしかに精魂使い果たして、疲れ切ってしまったていた。正直いって、セックスどころか、この俣へナへナとくずれおれそうであった。

しかし、人間とは奇妙な動物で、そんなに疲労していても、麻里子と枕を並べると、肉体の疲労とは関係なくファルスしてくる。

麻里子も変わった女であった。もう来月、結婚するというのに、激しく燃えて、まるで挑みかかるように、いつまでも、今ひとたびの欲びを求めるのであった。

あの日、激情を燃やし切って別れて以来、沓として麻里子との連絡は、途絶えてしまった。今のダンナに満足しているのかも知れない。

東映映画『元禄女系図』と

『責め地獄』の逆さ吊り

私が緊縛指導した『徳川女刑罰史』『元禄女系図』『責め地獄』の三作の劇映画のうち完全な逆吊りシーンは、『元禄女系図』における尾花ミキと『責め地獄』の由美てる子、それに代役の片山由美子とであった。

尾花ミキも由美てる子も、ニューフェイス

の女優さんであるが、やはりスターはスターであるし、M女性なみには扱えない。それに映画というやつは、一つのシーンを撮るのにやけに、時間を費やすもので、映写時間なら精々、二、三分程度のシーンでも、時によっては半日以上かかるから、リハーサルやらカット、カットを加えたら、こうした強烈なシーンを、ナマでやった

ら、とてもじゃなく女優さんの体が、いくつあっても足りない。

おのずから、こんな逆吊りシーンでも長持ちする方法を考案しなければならなかった。

尾花ミキは、坊主になって、もう滅多矢鱈に、縛られ役、虐められ役ばかりで、かなり精神的には、緊縛に狎れても来ていたし、ファイトのある子だったから、苦しくても、痛くても、割合よく耐えてくれた。



悪殿様の小池朝雄さんに、着物を刃で割かれ、半裸で、天守閣へ逆吊りに吊られ、齧で胸や乳房を切り裂かれて、鮮血が滴りおちるシーンである。凝り性の石井輝男カントクは何とか、小池さんに手早く縛って、スルスルと天守閣の上梁高く、吊るさせようとするがそうおいそれとウマくはゆかない。

トリックをばらすと、吊縄は、全裸に近い尾花ミキの、腰に纏いついている湯文字の中の、通称落下傘という吊具である。

太いベルトを、両腿から回して腰で締め、腰の背後に、茄子環がとりつけられてある。この中心の縄で吊るとしても、天守閣の梁にとりつけた、一個の滑車だけでは、尾花ミキが比較的、体重の軽い女優でも、小池さんの力一人では一寸、無理であった。

いろいろ考えた挙句、天井の梁にもう一個滑車をつけて、縄を這わせ、うつらないところで、裏方さん数人が、よいしょ、よいしょと彼女を吊りあげ、小池朝雄は、吊り下げる滑車に、もう一本、別の縄を通して、これも滑車で天井を這わし、裏方さん一人が、縄を握っていて、小池さんの、引っ張る手に応じて、縄を徐々に離してゆくという手法であった。

映画では、悪殿が尾花ミキの足首を、手早く縛ってゆく。上半身は、既に私が縛っておき、足首の早縄も、小池さんに、いろいろ伝授したものであった。そのシーンはクローズアップ。

そして、足首を縛った縄を、小池さんが引っばる。尾花ミキの体は徐々に逆さに吊り上がってゆく（実は裏方さん、数人が、小池さんの引っ張る動作に合わせて、ヨイショ、ヨイショと、やっているのだが――）

しかし、出来上がった映画は、まぎれもなく、悪殿が、力をこめて引き上げて行くようにうつっているのだから、映画とは魔術師である。『元禄女系図』中でも、数少ない、強烈なシーンなので、私もかなり真剣に考え、協力したが、尾花ミキも、実によく堪え、逆吊りされ、降ろされ、又逆吊りと、縛り直されること、数回に及び、延時間にすれば、逆吊りは一時間近くにも及んでいた。流石に顔面が鬱血してしまつて、終わった時フラフラと倒れかかり、慌てて助監さんが体を受け止めたが、その際、二、三人のスタッフに、抱かれるようにして戻っていった。

フォト（F）をみれば、一目瞭然で、吊縄は腰から伸び、両足は膝で折れている。しか

し、こんな手段でも使わない事には、映画での長丁場には、到底たえられない。（いずれ後に述べる、ドキュメント映画の、谷山、渡部二人の逆吊りの場合は別であるが……）

これが第三作の『責め地獄』となると、緊縛、責め、嗜虐は、更に又一段とエスカレートして、余りのモーレッツさに、助監督が造反を起こし、主演に起用した、ニューフェイスの由美てる子は逃げ出してしまう始末であった。

由美てる子が、おそれをなして逃げ出す、一つの要因となったのが、このフォト（G）の逆吊りである。

地下と天井裏がガラス貼りになっていて、上と下から、粋客が、緊縛師の責める、美女の、のたうち苦悶するシーンを眺めるという段取りである。私としても、大いに腕を発揮するところで、考えた挙句、片脚の逆さ吊りでやりましようといったものだ。

緊縛師に扮した、林真一郎さんは大いに喜ぶが、さて、それが可能なものかどうか。

吊り下がる部屋の中央が、二メートル平方の吹き抜きで、若し誤って転落したら、怪我どころでは済まない。

大部屋やエキストラの、粋人に扮した連中

は、映画シーンそのもので、この見世物をみるべく、早くから、天井裏と地下に潜って、好奇の眼で私達の一举一動をみつめている。

新人、由美てる子のオッパイは、見事に大きく、十九才という年令が、裸身をピチピチと張り切らせている。

ここでも赤い湯文字の下は、薄いスケスケ

の、それこそ蒼丘も透けるパンティ一枚に落下傘をとりつけ、青く染めた太縄を、しっかりと縛りつけ、これを吊縄にして、片脚を、その縄に添わせて縛りつける方法をとった。乳房を強調すべく、八の字に太縄で縛り、両手は別の、柔らかい縄で犇と縛って、部屋中央の四角に切り抜いた、吹きぬけのふち

に立たせる。吊縄を裏方さんが、中央のさし渡した太い材木の滑車に梯子で通す。

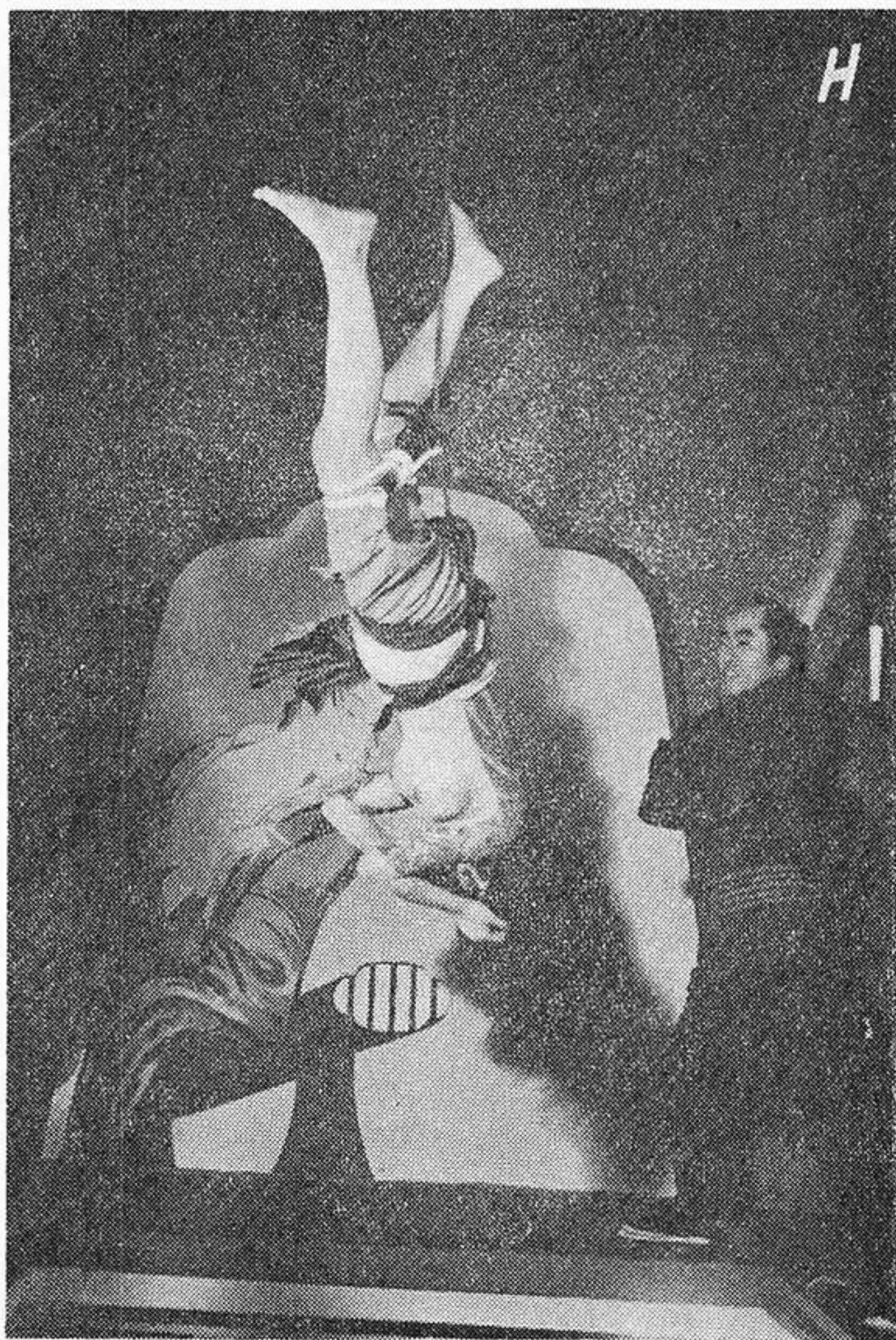
逆さ吊りにされて、緊縛師の太いささら竹で、滅多打ちされるのだと、カントクさんにきかされた由美てる子は、真っ青になってブルブル慄え出し、大きいオッパイが、可哀そうな程、震えて揺れている。

地下のガラスから覗く、その面までは、約七、八米もあろうか。

裏方さんに体を押してもらって、下を覗き込み、彼女は、いよいよ、はげしく震えた。急にオシッコしたいと、いい出す。恐怖感からであろうが、長い時間かけて準備し、折角縛ったのに、又とくのかとウンザリしたら、石井カントクさんは心得たもので、(じゃあ一寸テストしてみて、すぐ行かせたげるからね)と、由美をなだめ、本番テストの声をかけ、私に近づくと、(怖がっています。ゴテゴテいうと、うるさいから、撮っちゃいますよ。よろしくネ)と囁いた。

裏方さん数人が、由美てる子の体を抱きかかえる。縄が引っ張られる。彼女の体は浮き上がり倒立して、逆さに上がってゆく。

(こわい、こわい、おろして……) そんな小さな哀願の声も、スタッフの、かしましさに



揺き消され、ライトが昼間の様に輝くと裏方さん等は合図と共に手を離れた。ズーンと揺れて、逆さ一本足吊りの女体が、ふきぬきの中央で左右に揺れる。

その女体の双臀に、林真一郎さんの容赦なきササラ竹が飛び、由美てる子は、演技ではない苦痛と恐怖の悲鳴をあげて、眼をひきつけていた。

ササラ竹で尻を突くと、女体は反動で戻ってくる。緊縛師は女体に手をかけ、力一杯、押し放す。

大きく揺れる女体を、地下と天井と、正面の三台のカメラが、苛責なく、この嗜虐の実態を撮りまくっていた。

由美てる子の悲鳴は叫喚と変わり、緊縛師の振るう、ささら竹は、真剣に演技を超えて女体を叩きのめしていた。

長い長い三分間――。

カントクさんのカットの声で、バラバラと裏方さんが、かけより、手を伸ばして、由美てる子を受けとめ、別の仲間が、吊り縄を解いて下げてゆく。

真っ青になって失神したように、由美てる子は床に伸び、かなり長い時間、起き上がらなかった。

赤い湯文字ごと縛った太腿の辺りがはつきりと濡れているのが、この娘の、恐怖と苦痛の挙句、意志を沮喪させて洩らしたことを如実に示していた。

その翌日、彼女は失踪し、三日間、撮影所に姿をみせなかった。結果、由美てる子は、この初の主演起用の大役からオロされ、急転ニューフェイスの片山由美子が起用されることとなった。

カントクさんは、片山由美子に対しての縛りでは、由美てる子と同じ緊縛を私に求めなかった。何か変わった趣好でやろうというのである。

片山由美子の根性を試してみたいから、遠慮せずに、強烈なものをやって欲しいという仰せに、しからばと、ひねり出したのが開股逆吊り、しかもこれは落下傘なしで両腿と、腰をしっかりと縛り、太腿を青竹で拡げて、それに吊縄を結び、念の為、腰縄にも結びつけての大開股逆吊りであった。(H)

現在、テレビの『プレイガール』で活躍するだけあって、片山由美子は、このいきなりの恐るべき役を、必死に齒を喰い縛ってこらえ、それ以後の数々の緊縛をも甘受したが、私が縄を握って立っているとゾツとしたと、

あとで、沁々述懐したのであった。

この娘のオッパイも、よかった。

片山由美子の場合、由美てる子以上に激しかったが、よく堪え、猪吊りや、両手で吊つての、緊縛ショーで、小柄な体が、ふきぬけの中央を、前後左右に激しくゆさぶられ、ササラ竹の打擲で、オシリを真赤にさせていたが、眼をうるませながらも、愚痴はこぼさなかった。

映画の封切り版には、由美てる子の逆吊りは勿論であるが、片山由美子のこの逆吊りシーンも、余り刺激が強過ぎるという理由でカットされ、一般公開では、残念ながら陽の目をみなかった。

一番いい目をしたのは、この間、天井裏と地下で、覗き役になって、一部始終を愉しくみていた、大部屋さんや、エキストラの人達であったかも知れない。

由美てる子はその後、許されて、一、二度東映で起用されたが、所詮は根性の問題、それっきり消えてしまって、今は彼女の消息もしらない。片山由美子は代役を機会に、うまくチャンスを掴んだのであった。

橋房由氏の提言を追及す

竹 迫 誠 也

六月号巻頭提言「SMブームの退潮と奇クについて」の橋氏の意見について一言。

貴殿のSMブームの退潮への憂え、その中にある奇クの在り方等もつともな点もある。だが、貴殿がSMブームの冷却を、憂うる根拠はどこにあるのか。二、三のSM雑誌が店頭から消えた為か、それともSM誌の売れ行きが悪くなったからか或は貴殿の主観によるものか。

小生、今日のSMブームは決して退潮してはいないとみている。それどころか、ある部分においては益々隆盛を、たどると、思っている。まず最近のSMに関心を持つ層がかなり変わりつつある事だ。確かに、三、四年前迄はセックス



三鷹 I・O 画

にあき足りない中年以上の層が、圧倒的に多かった。(今でもなお主流には、なっているが)

ところが、ここ一、二年の層をみると、かなり若返って来た事が見える。ただ、SMというものはたしかに多様化している。例えば流腸好きは、フェチや男ドレイなど毛虫みたいに嫌い、その逆として流腸なんて、全くいやらしいとみている向きもあって、SMの中に、それぞれ孤立した城をつくりあげている。だから、フェチ好きや男ドレイ好きの者からみれば、CM誌にこういった記事が少なかったり、同志間で、これ等族が少ない事が話題になれば、たしかにSM衰退と思うであろう。

この点、流腸分野が今やブームになっているのは否めない。ホモ切腹、男ドレイ等が退潮しているのではないか。SMにしても、時代の流れに伴う変革に橋氏は気づいているだろう。また橋氏はSM映画がすたれた事を、SMの退

潮と結びつけているが、SM映画自体、ポルノ女優の単なる演技なのだから、当初は物珍しさも手伝って喜ばれたろうが、所詮、演技は演技にしか過ぎないのだから飽くのは当然だ。谷ナオミやポルノ女優を緊縛して、恰も記念写真のような写真を作っても、見向きもされないのが、今の現実なのだ。

小生は今後益々SMは盛んになると思う。しかもSMの中心は、中年向きの男ドレイ、フェチといったものではなく、若者向きのナウな如何にも現代的な流腸モノ・アヌス責め中心で隆盛を、たどるものと思う。また橋氏は奇クに対して六つの提案をしているが、すべて新鮮さがなく、他のSM誌の目玉のフォトストーリーと組写真をとり入れる事だが、前にも述べた様に演技されたフォトストーリーが、どうして読者の胸を打とう。また着物姿、セミヌードがよいという事だが、これこそ、中年以上の人生の、たそがれ時を迎えた好みの最たるもので、何の新鮮さがあるろう。

SM写真は、塚本鉄三氏のようにピチピチと生きた女性を裸にしエビ責めにしたり、流腸したりし

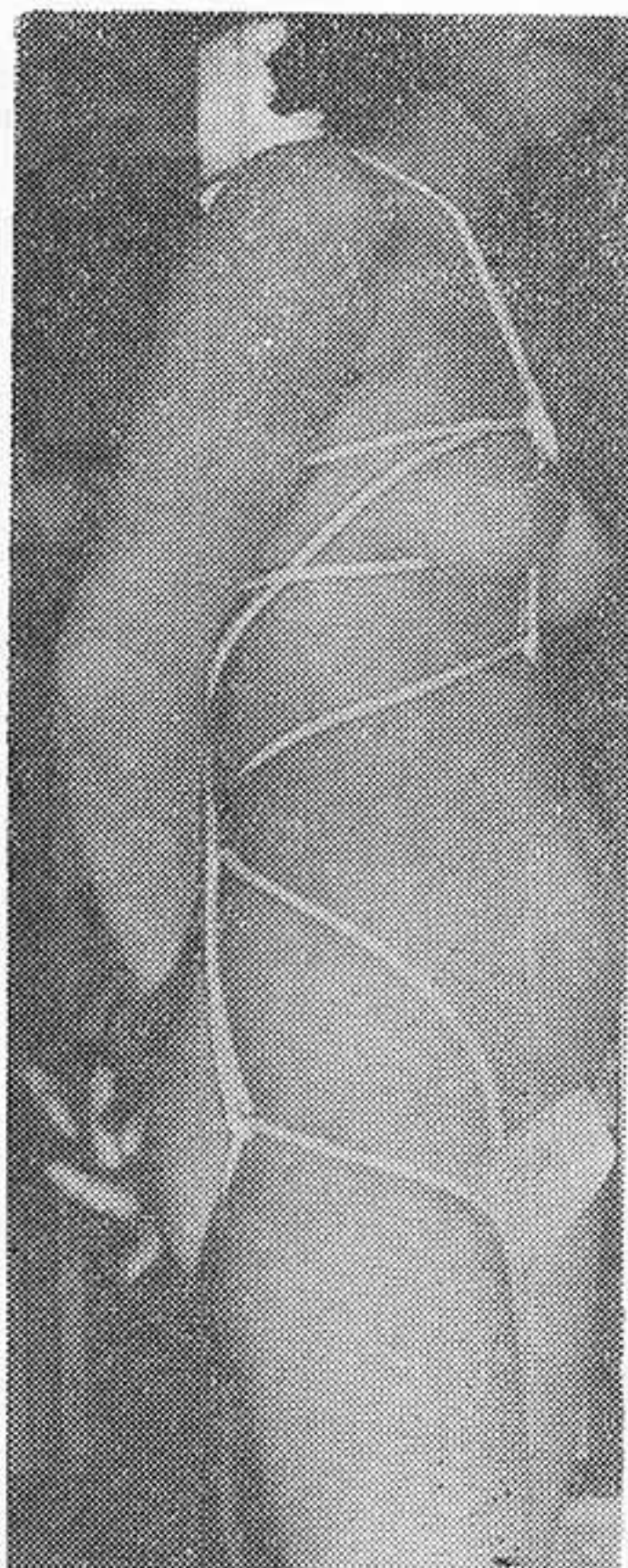
て、その時の情景が、どうであつたかをキメ細やかに描写してこそ魅力がある。(三項にしては、M的写真、切腹云々というが、これは論外である。またイラストや、さし絵を沢山というが、死んだイラストあたりが、どうしても必要なのか、わからない。

奇クの良さは、読者と奇クとスタッフが三位一体となっている連帯感にあると思う。しかも流腸という現代SMの主流を、あくまでも忘れず未知の女性を飼育し、なれさせてゆく処にある。

西条紀代、然り。深田菊子、高村皓子、鈴木千鶴子、その他、過去二十年来、奇ク誌上に登場した女性の殆どは無名の女性、人妻という新鮮さが、今日の奇クを盛りあげたと思う。

特に流腸のカメラ・ルポは、読者をして、心をおどらせ血を沸かせたという事はいうまでもない。今後も、新鮮な無名の女性を、どしどし登場させ、流腸で責めぬきアヌスを責めまくって、吾々読者の血沸き肉おどる素晴らしいSM誌にして欲しい。

4月21日、午後二時三十分
東京駅八重洲地下街
喫茶「バリ」にて 竹迫誠也

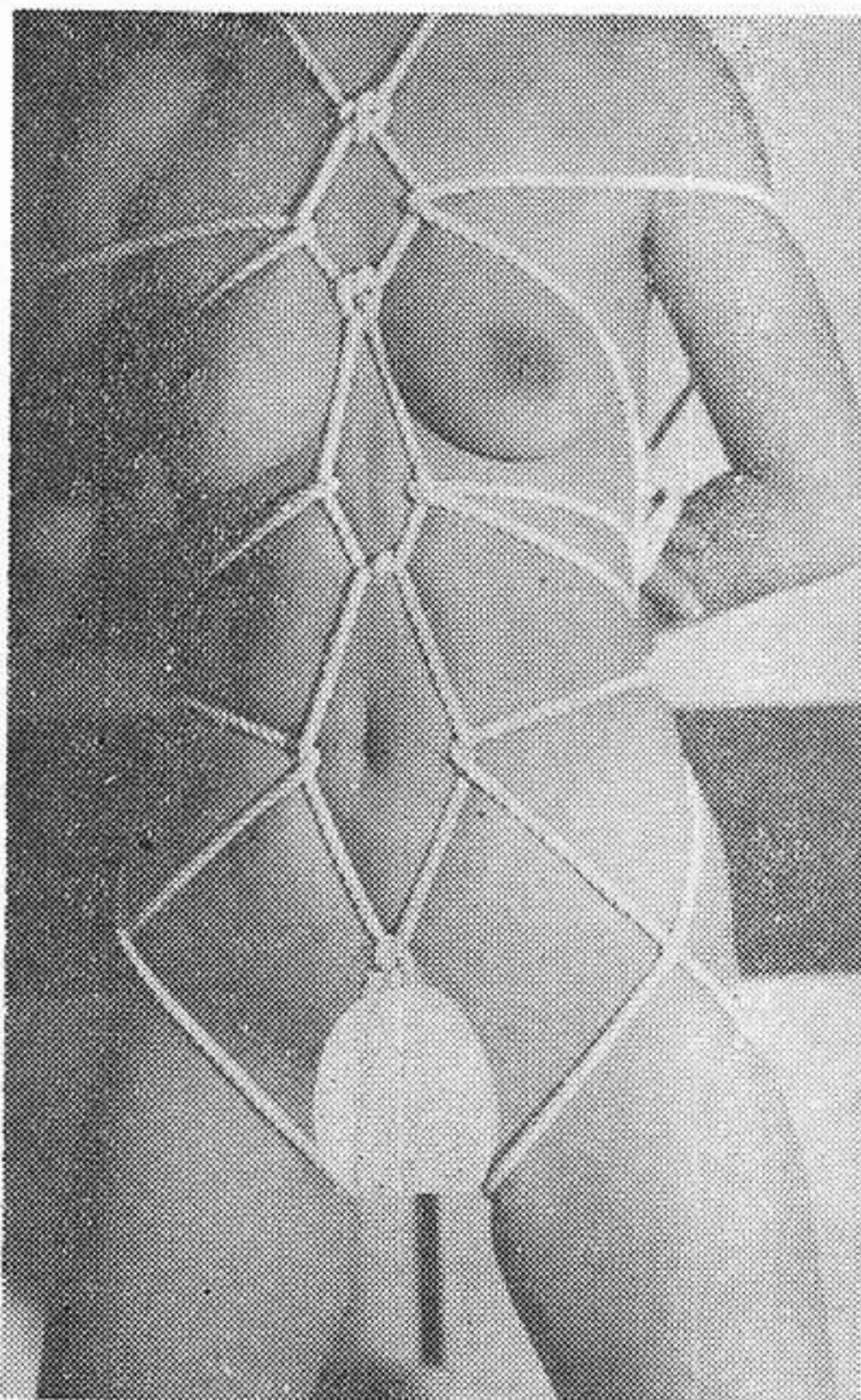


貴誌を初めて見たのが昨年の十二月、友人宅にてでした。その友人に貴誌を見せられてSMの面白さを聞かされました。おかしな

舟橋一郎

(妻) 初縛りの記

「フ」オト通信



ので、それまで嫌悪さえしていたSMに対して、なんとなく興味を持ちました。

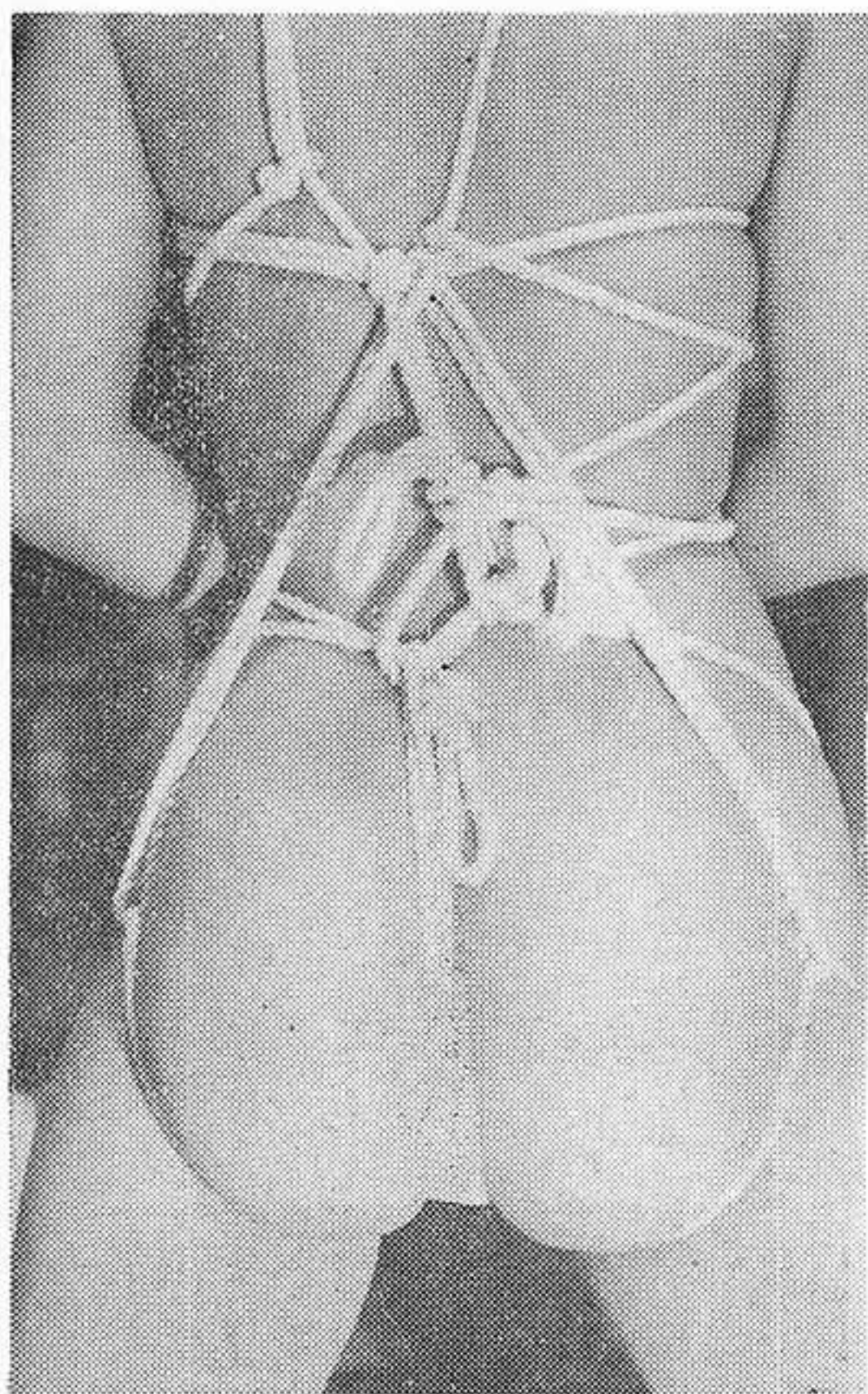
そうなる、なんとかして女を縛ってみたいくなり、それから数日ばかりで、ようやく妻を説得して縛りました。次には浣腸もしてみました。妻は、まだ特別にこれといった興味を言動では示しませんが、殊更、嫌がりませんので、逐次、これから飼育してみたいと思っています。

少しばかり、夫婦仲が倦怠気味だった私は、友人から教えられたSMには、次第次第に関心を持ちはじめ、妻を試験台に、貴誌を教

科書にして、これから、研究してみたいと思います。

出来はよくありませんが、撮影した妻の写真を同封しますので、よろしければ掲載して下さい。ただし、妻には内緒ですので、よろしく。

見様見真似で、縛ってみました。が、初めてにしては、なんとか格好になっていませんか。これからは、もっと勉強して、もう一寸見れるような写真にして、お送りします。私がSMに関心を持つようになってから、夫婦生活も濃厚になりましたので、妻も驚いたり、喜んだりしているようです。

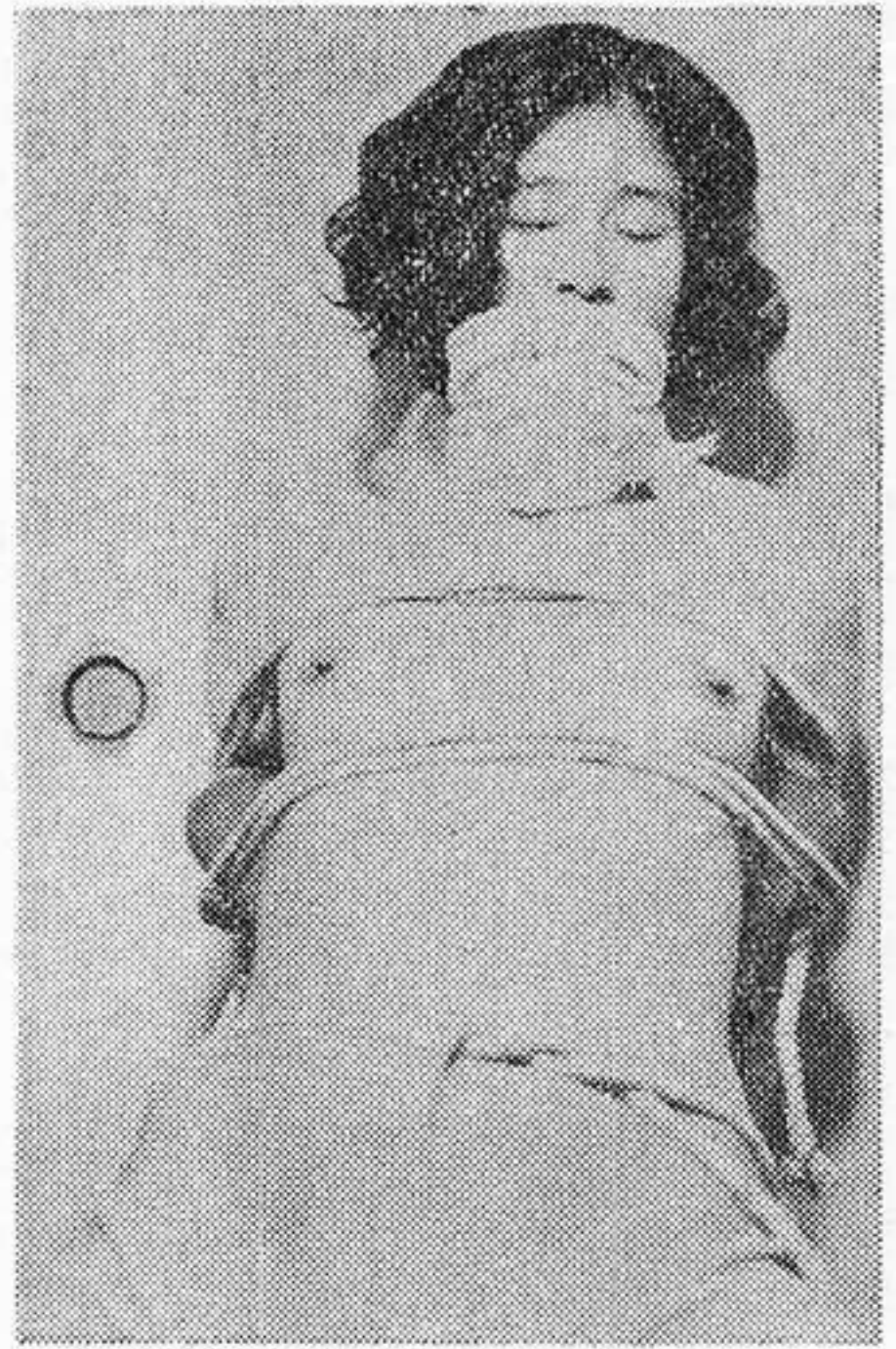


親愛なる同好者の皆さまへ……
拙作をお見せします

伊 勢 国 男

三月号に投稿致しました、伊勢国男です。今月は、この欄をお借りして、五月号でお便りをいただいた、皆さんに御返事致します。

頁の順に、ロマン派生様、早速の写真撮影方法の御教授、有難うございました。専門誌にないような解説は、読者の皆様にも大変、参考になった事と思います。写真も大変すばらしく、グラビアのように鮮明なれば尚更より立派になるのにと、編集部の方々に一言、おこごとを申し上げたいほ



どです。貴重なプリントでしょうがなんとか手に入れたいですね。次に長谷田亀治様、並びに、御愛妻真知子様へ。小生の駄文に、『昔の自分達と同じような経過に親しみを覚え』ていただくとか、

この一言に小生達がどれだけ、感激と、希望を得たことか。小生もカラー現像まで進んだものの、やはり貴殿と同様に、動きのないの

に困っています。愚妻も大変、ポルノ写真が好きなので、なんとか変わったものを手に入れるようにと、せがむのですが、なかなか手に入らず、やっと、最近、複写物（外人ばかり）なら買える所を知ったのですが、カラーのものは少なく、又、粒子が悪く、とても見られたものでありませんが、ないよりはと手に入れています。

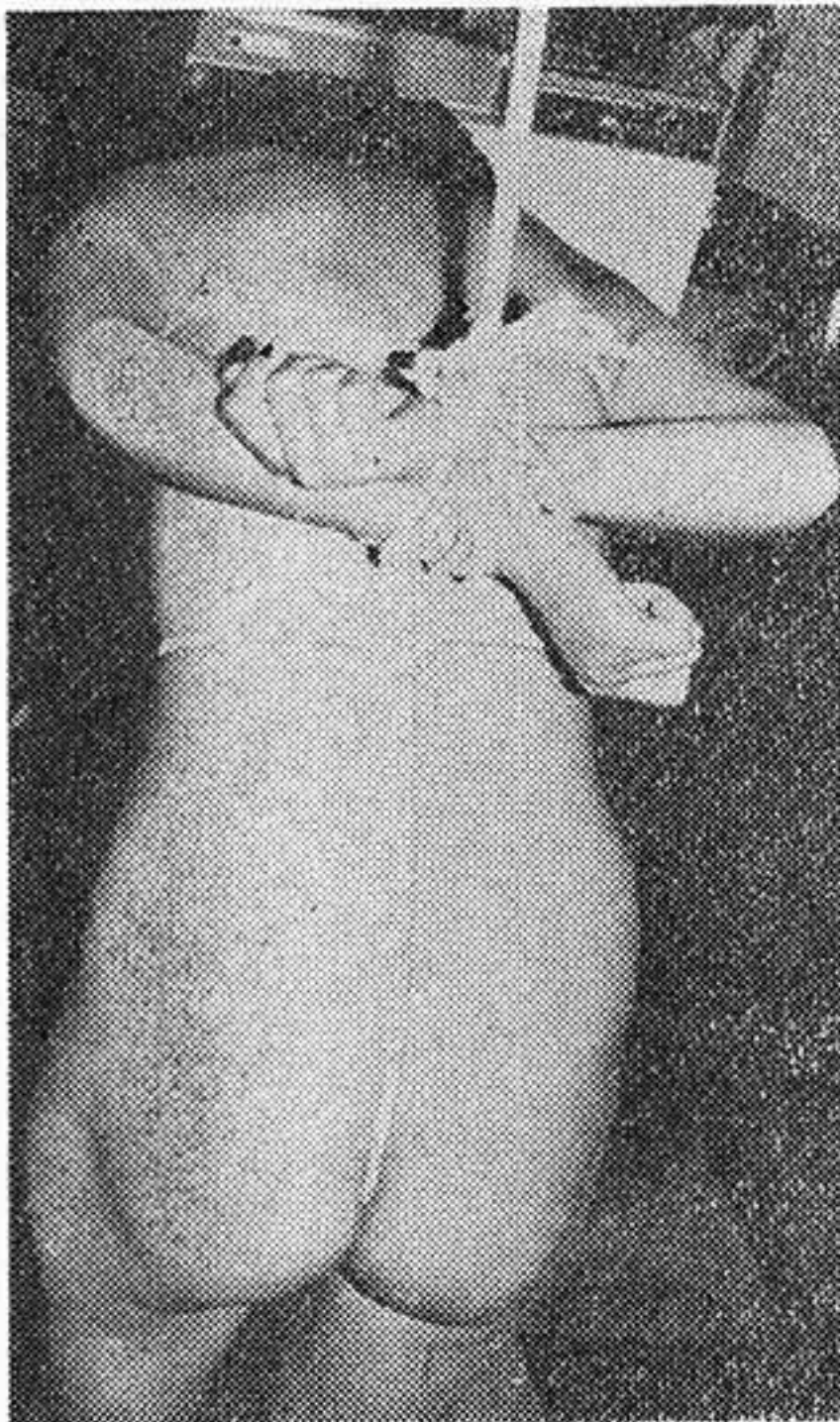
小生もポルノフィルムを作成しよう、かねがね思っておりませんが、フィルムは8%いかんせん、8%フィルムの現像処



理プロセスがあっても、現像方法と機械が判らず、未だに着手致しておりません。長谷田様は自家現像されておられるようですので、その方法、機械等についてご教授いただけませんか。早速、ホームポルノムービーを撮影致したいと思ひます。

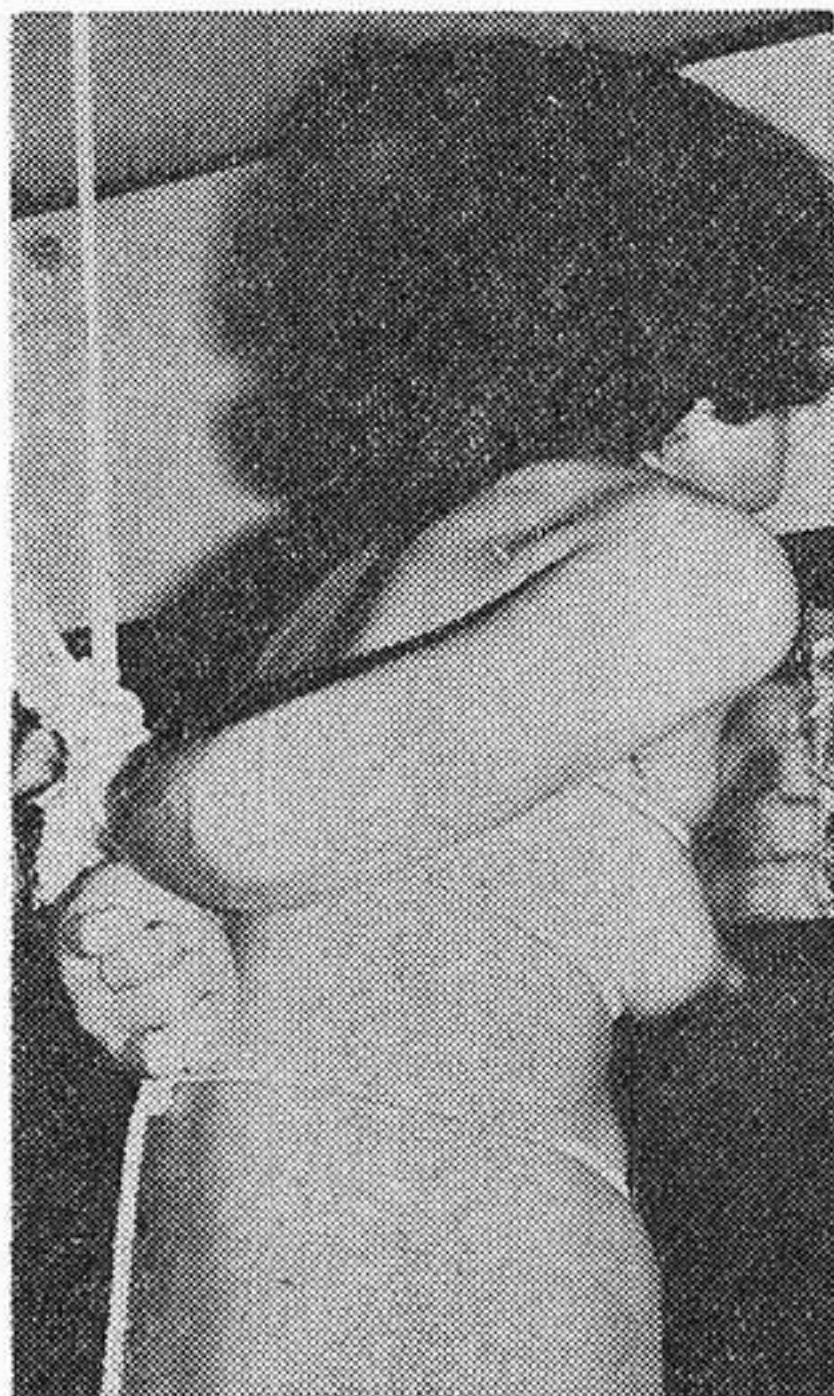
勿論、長谷田様の作成された物には遠く及ばないと思ひますが、真知子様のされる事は、すべて真似てみたいと、愚妻も積極的です。で、なんとかなると思ひます。小生も種々のスタイルを夢みてプランを、ねっておりますので、とにかく、自家現像法を御教授下さいませんでしょうか。

今までは最近、使われたVTRを、いつか購入しようと、そ



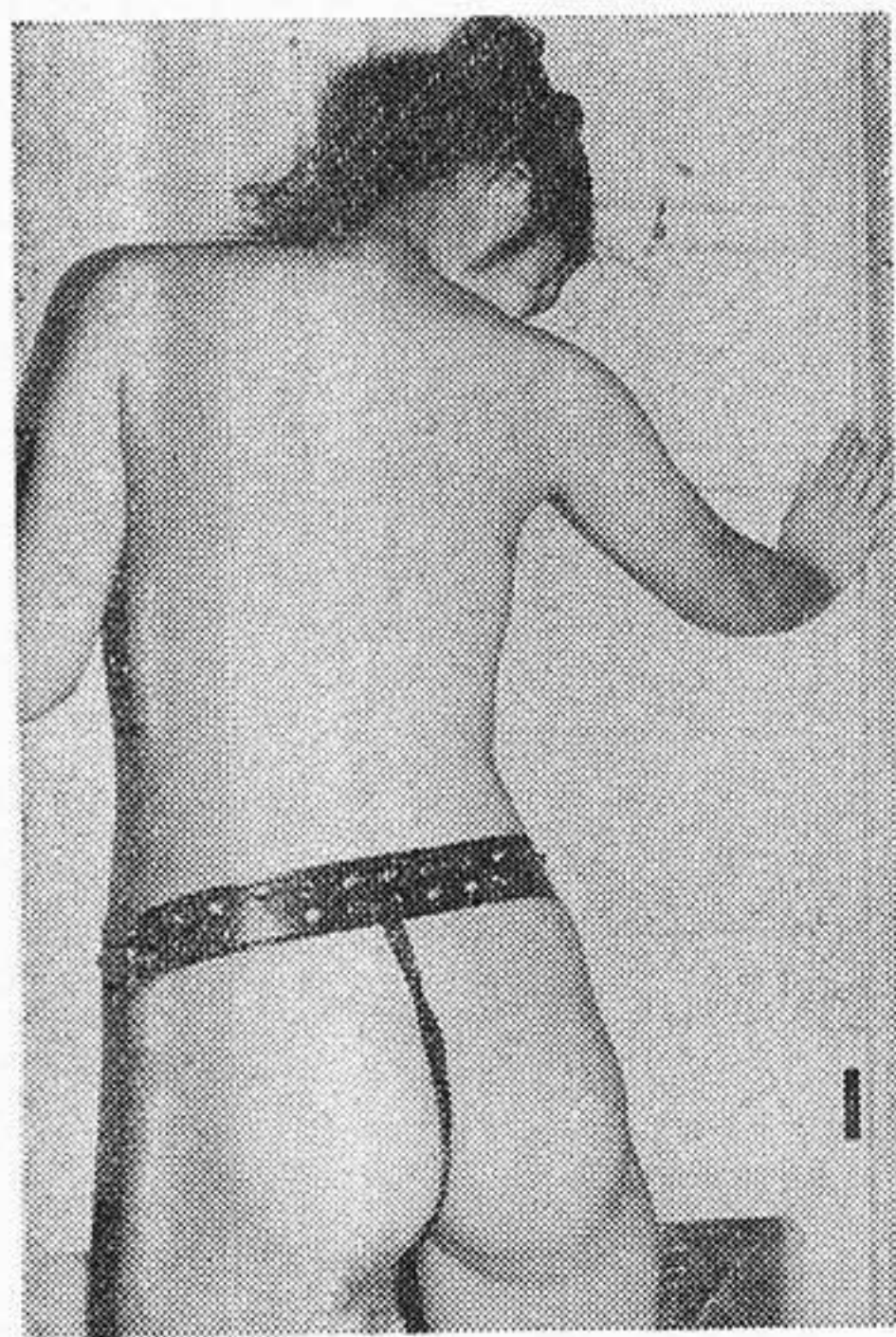
れを夢みていましたが、幸いにして自家現像出来れば、それ以上のものはないと思います。又、撮影機の良いものも知らせていただけませんか。出来れば、長谷田様の傑作を一目、拝見出来ればと分を過ぎた希望も持っております。「編集部だより」にも絶賛のお言葉がありますので、尚更、その望みを持ってあります。お言葉の通り、小生の愚作等についても御批評、御教授いただけるのであれば、千里の道を、いとわず御訪ねたいと思います。

その結果として、お互いに信頼出来ますれば、誠に厚顔な願いで恐縮ですが、小生達の出演するムービー等を、撮影していただけたら、などと考えています。それには、まず作品の交換、批評などによって信頼を、たかめたいと思います。又、穴をあける事についてですが、小生のコックには貴殿の場所と同じ所に、約2.5%ぐらいの穴を既に明けてあります。これは自分で木綿針とナイロンテグス、ステンレスワイヤ等によって約二年



前に、いたしましたが、今もそのまま、穴があいています。妻にも同じ方法で二月に一度、実施しましたが、穴の位置が悪く、二週間余りで断念し、再度、位置を変えて実施すべく計画中です。

もし必要であれば、小生の行なった方法などお知らせ致します。妻も小生のものをみて、自分も絶対、穿孔するのだと言っておりますので、いつの機会にか、御笑覧願えるものと思います。最後に御夫妻の御健康と御多幸を祈りつつ、一日も早く、お近づきになれる日を、楽しみにしております。



一番、最後になって誠に申し訳ありませんが、佐野正様へ一言、御返事と御礼を申し上げます。早速の呼びかけ、有難うございます。

推察された通り 関西の者です。仕事の関係で東京へも時々参りますし又、妹夫婦が東京に在住しております遊びにも行きますが、自分の家ではありませんので、プレイは出来ないのが残念です。お申し越しの件、誠に結構で早速、実行致します。

貴殿の偉大な男性が愚妻を、どのように喜ばせ、又、妻の喜悅にのたうつ姿を想像すると胸が一段と高鳴ります。妻はフェラチオが大好きで、夜寝る前には一度は含んでみないと寝られないと言います。一時間ぐらいは平気でやっておりますが、みさ子様は如何ですか。

小生の大好きな花電車をしていただけるでしょうか。妻も奇巧を愛読しておりますので、貴殿の偉大な男性が羨ましい等と話し、空想しております。しかし、何分にも、お互いのことが判りませんので、今少し、お互いの事を知り合った結果、信頼と誠意のある方と判りますれば、是非共、当方へ御家族連れで御来遊され、名所見物などされ、当方にて宿泊されればと思います。

尚、当方の長女が小さいので、妻一人を解放してやれませんか。その点あしからず御了承下さい。

長谷田様や佐野様に心ばかりのお礼に拙い作品ですがフォトを御笑覧下さい。

奇ク愛読者のメモ

石 菌 順 吉

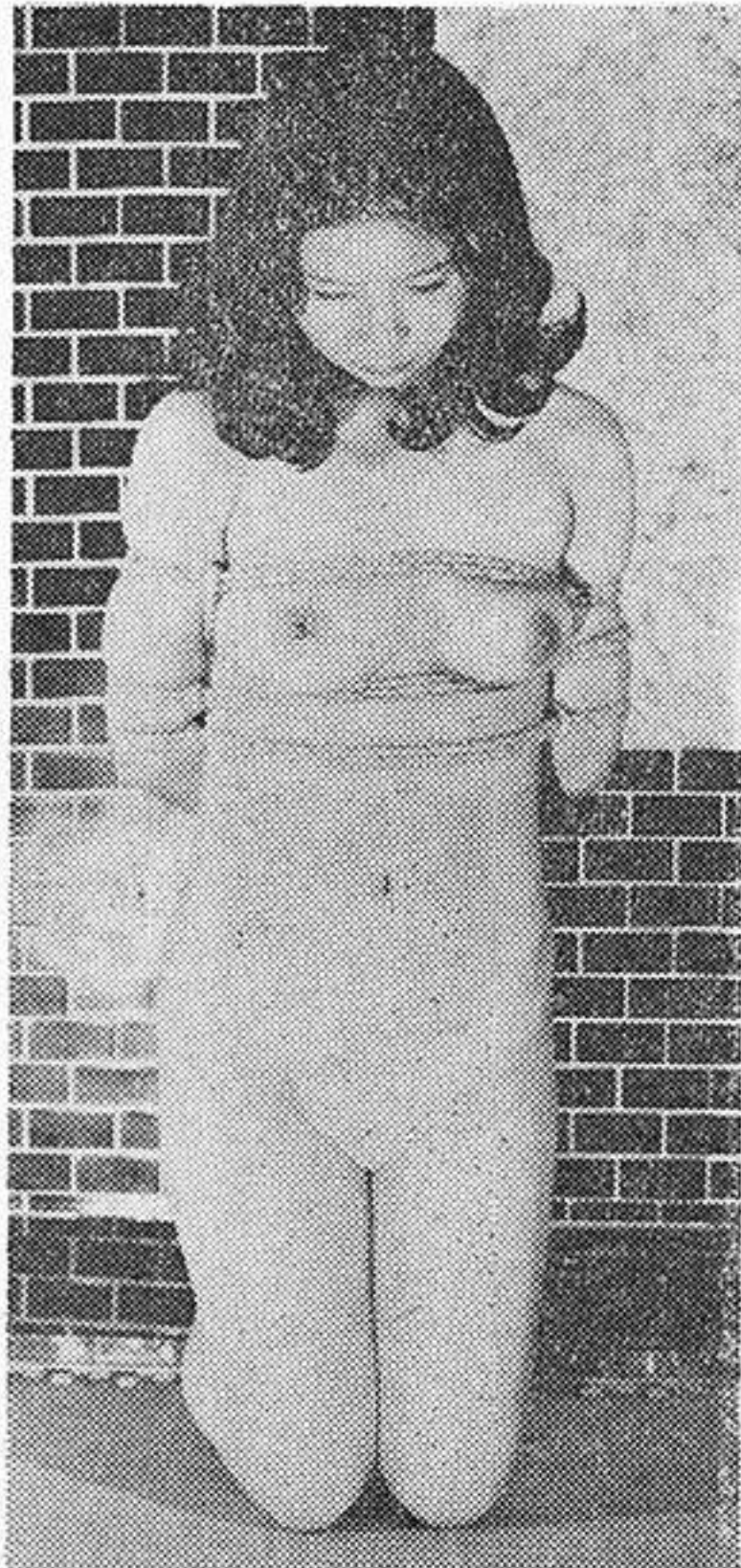
奇ク六月号は、最近にたく充実
していて、とても面白く拝見。春
の夜を心ゆくまで楽しませてもら
いました。まず、緊縛写真の充実
していることが第一で、これなく
では、当世、SM雑誌の氾濫する
中であって、いくら歴史のある
奇クとはいえ魅力がうすれます。

グラビアは、沢山のモデルが出
てきて、これなど、豊富なネガを
持つ奇クでなければ出来ないこと
で、それぞれに、はじめて、その
裸体を見た過去を思い出して、そ
の時の興奮を新鮮によりみえらせ
ました。

座間明子さんなど、沖縄へ帰っ

たと聞いていますが、今頃は、ど
うしているでしょうか、などと考
えるごとに、なんとはなしに感傷
的にもなります。今回で一番よか
ったのは、シーラー・ケニー嬢の
立ち姿で、さすがに外人だけあっ
て、スタイルのいいこと。惚れ惚
れといたしましたが、これからも
彼女の緊縛写真、ネガがまだまだ
あると思いますので、どんどんと
掲載してもらいたいものだと思い
ます。

巻頭に、橘房由氏が論文を載せ
ていますが、私としては納得の行
かないところがあります。それは
SMブームの退潮という点で、た



—笠井奈保子—

しかにSMが論ぜられることは、
少なくなっておりませんが、いまだ
にSM雑誌が氾濫していることは
書店を見ていただければ明らかで
べつにSMが退潮しているのでは
ありません。

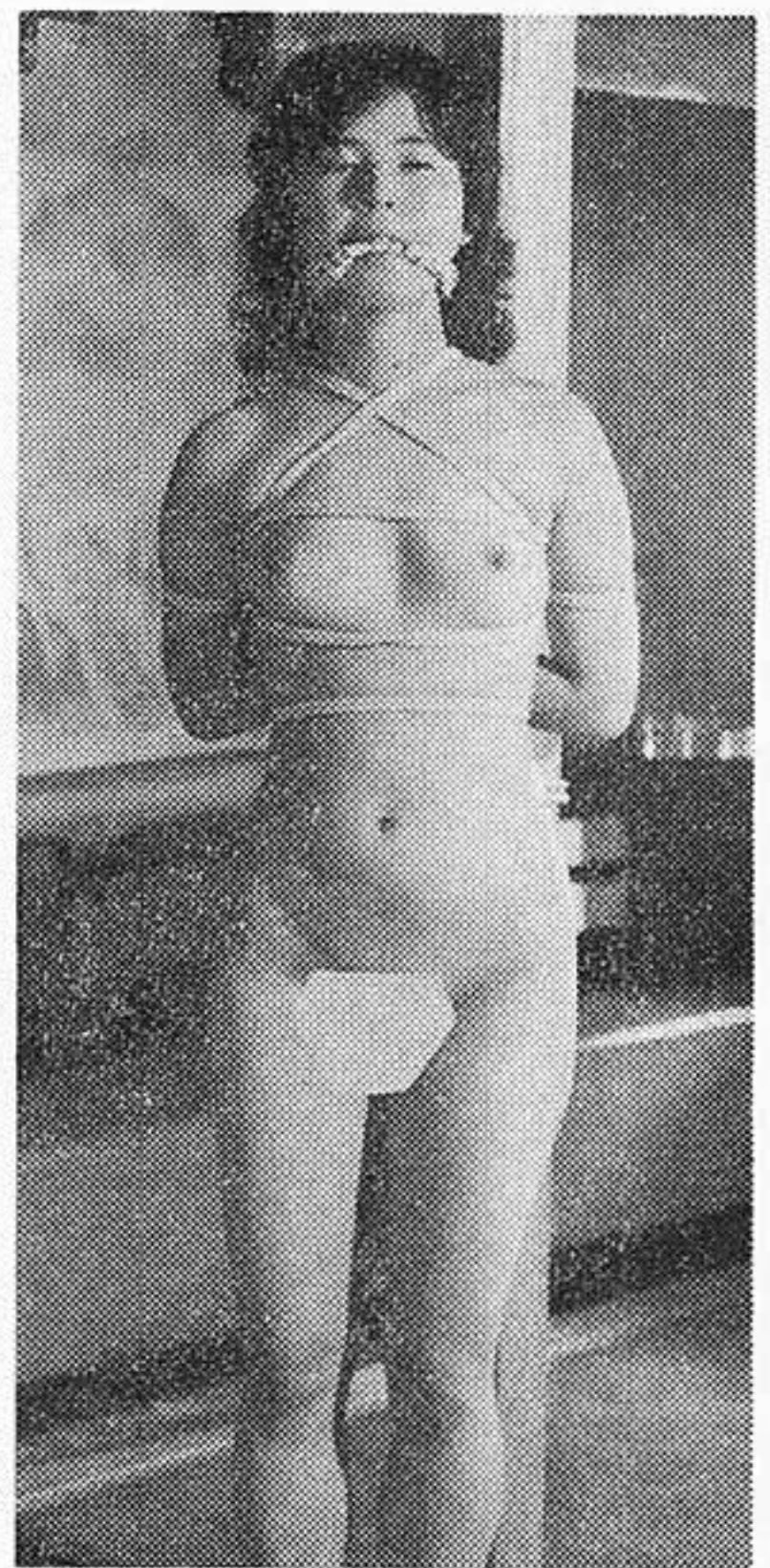
SMが、いわば日陰から陽の当
たる場所へ出て来て良識ある人々
や一般の方に衝撃を与えた当時と
較べれば今のSMの持つ衝撃力は
おとろえていきます。しかし、それ
はSMが退潮したのではなくて、
SMが一般化し風土化して、人々
が（そして我々が）よほど強烈な
ものでない限り、それをSMとし
て、意識できなくなったからだと
思います。

SMが、かりに退潮するとすれ
ば、それは、政治的、社会的な緊
迫が高まって、何か日本の進路を

揺り動かすような重大事態になっ
た時で、そのようなことが起こら
ない以上、SM風土は、より深く
より広くなって行くものと思われ
ます。

橘氏の視点は、古き良き時代を
なつかしむという所にあると思わ
れます。絹川文代、梨花悠紀子、
大塚啓子など、今から十年以上も
前に活躍された方々のリバイバル
が、事実、最近の奇クに目立つよ
うです。

小雅田勇氏が、絹川文代さんに
ついて、その魅力を述べておられ
ますが、私のように、最近、とい
っても数年になります、読みは
じめた者にとっては、白線入りで
はあっても、刺戟的なスタイルを
とるポーズの写真の方が魅力的な
のです。



—前田真知子—



前田真知子、深田菊子、笠井奈保子の各嬢の写真など、よし、それが情緒など感じさせない、露骨一点張りの写真であるとしても、現代の、この頹廢した社会の中にあっては、より多く、訴えるものを持つてゐるのです。

小雅田勇氏の魅力ある文章にもかかわらず、私には、絹川文代さんの写真は、伊藤晴雨の絵のよう

に、遠き時代のことのようになつてしまつた。私は何も、そういうリバイバルムードを批判してゐるのではなく、奇クが長い歴史を持つて、その読者各々が、もっとも熱心に読みふけり、愛読した時期というものに強い愛着を持つものだということを、いろいろの事です。私にしてみたとこで、あと十

年もすれば前田真知子や深田菊子それに鈴木千鶴子が、なつかしいといひ出すかもしれないのです。深田菊子嬢は、塚本鉄三氏のルポに登場して、その美しい肢体を存分に楽しませてくれたのは、これが、もっとも、私としては良かった。塚本鉄三氏は、さらに、別に、『SM談義』を書いておられるが、これが同一人物の文章かと

雑誌写真

「春の嵐」

中津 浩

一夜の嵐によつて、満開の桜の花が、いっぺんに散つてしまふように可憐な乙女も、あくなき暴虐の手によつて、はかなくも散つてゆくといふ、そのあえかな美しさを表現しようと思つて、春の夜のひととき、物した一枚の写真。

思うような、かしまつた書き方で、はじめは、とまどい気味にさせられました。しかし内容は我々ファンの琴線に触れる、興味あるもので、これから、ハントされた数々の女性について、『SM談義』で語つてほしいと思わずにはいられません。

塚本鉄三氏の流暢なる文章と、マニアの心底を揺さぶるような写真とは、まことに素晴らしいものがあり、いつも心躍らせて拝見しています。

それから、少し気になつたのは笠井奈保子嬢の告白で、日記などに較べると、心境の変化は、いちじるしいものがあり、読者としては気がかりです。前田真知子嬢の告白が、期間をおいても、一貫したものであるのと異なり、何か迷つてゐるように見えるのは、私の思い過ごしでしょうか。何かあったのか、それとも飽きてしまつたのか、塚本鉄三氏が面倒を見なくなつたので、いささかSMばなれを起したのではないかと、色々憶測ができます。

塚本鉄三氏よ、笠井奈保子に冷たくしないで、もっと彼女のルポも載せてやって下さい。ここに、熱烈なファンがゐるのです。

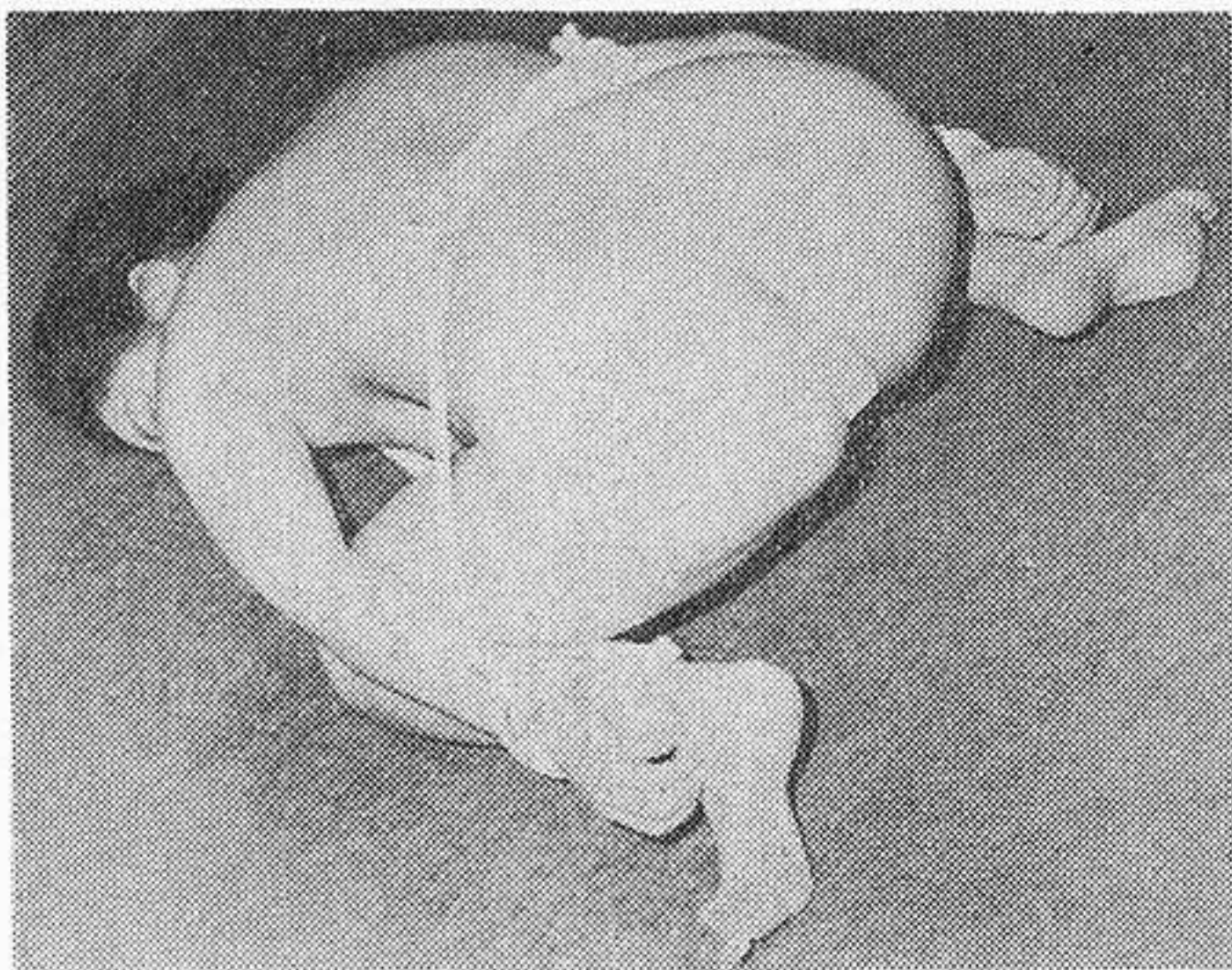
夫婦交換プレイを願って

早坂 信 治

私の拙いSMフォトや告白に対して、奇く愛読者の方々から、多くのお呼びかけを頂き、いつも妻と二人で楽しく拝見しています。

私が、始めて、ハ奇クサロンVに、ためらいつつも告白を書いたのが、昨年の三月、早くも一年が過ぎました。その間にも、新しく多くのSM愛好のご夫婦が出現し、私にとっては心強く、頼もしい限りでした。

最近では三月号に『見せたい妻の寝乱れ姿』と題して、フォトと告白を寄せられた沢田路夫様や五月号で「無料花電車ショー」の体験告白を、発表された後藤執生様。また、私達夫婦にとっては、先輩でいらっしゃる田尻長州様。いずれもの諸兄が「妻の羞かしい姿を人様の前に……」と、考えておられるお気持ちには全く同感で、今の私の気持そのままと言えます。



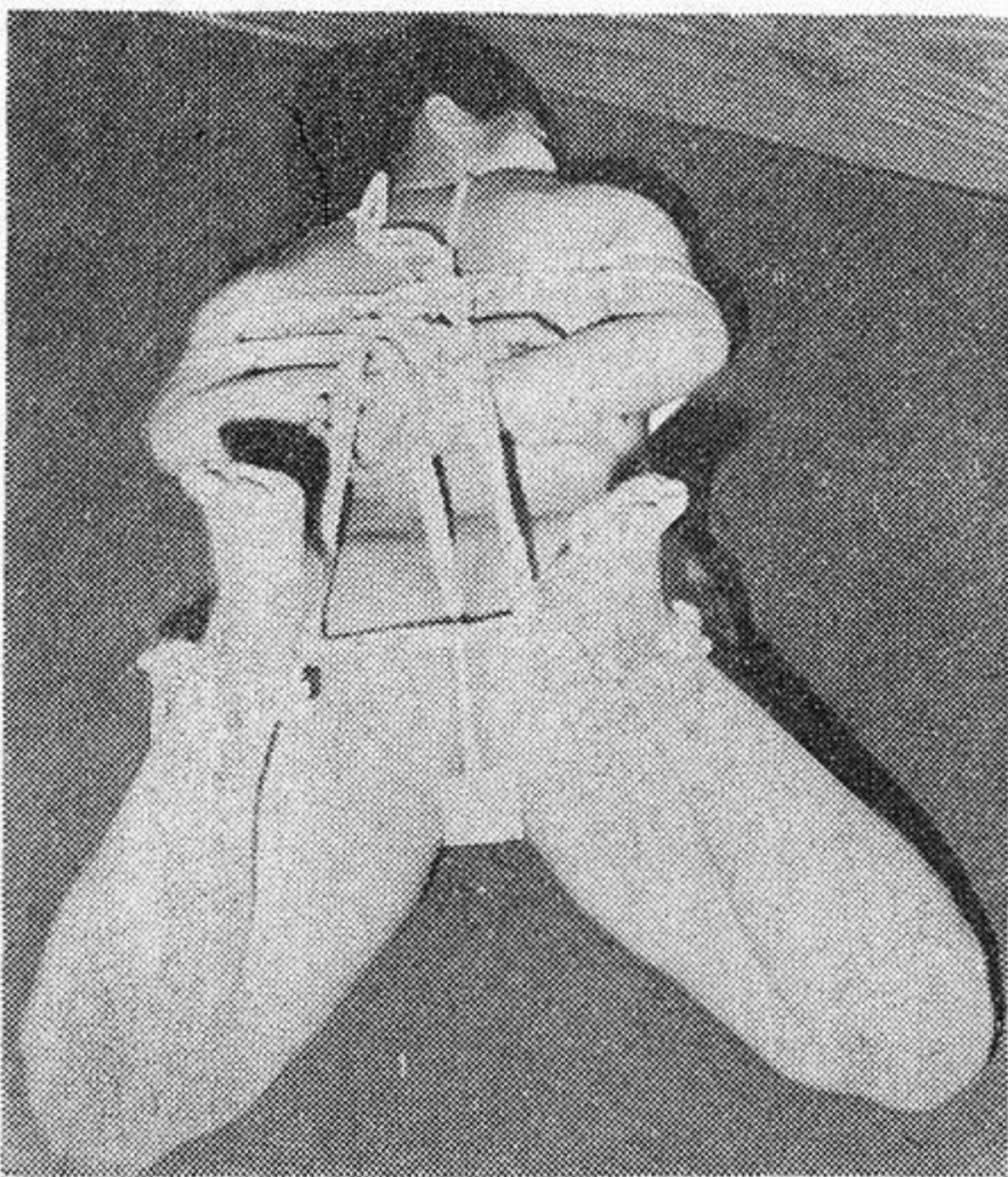
私自身、勤めを終えて帰宅する時、フト、書店の片隅に並んだ奇譚クラブの表紙を見つけたとき、「そうだ、今月号には、妻のあられもない責められ姿が掲載されているんだ」と思い浮かべると、えもいえぬ不思議な欲情が身体中を襲います。一日中の勤めの疲れも

忘れたように足が速まり、帰宅を急がせるのでした。

それから、夕食もそこそこに早速、妻に全裸になることを命じ妖しいSMプレイに没入してゆきます。丁度一年前、なんとか新しい嗜虐のマンネリに救いを求めようと、かすかな願いをかけて、奇譚クラブに明かした告白が、私達夫婦に、革命的とも云える成果を作り出しました。

そして今、幾万の奇く誌友の方の前に、妻のあられもない姿を晒し、多くのファンのお呼びかけがますます私の嗜虐癖を高めてしまっています。燃え上がるような自己のSMの陶醉境に浸りながらも、飽くこともなく妻に苛酷な責めを加え、しびれる様な甘美な夜を送っています。

また、妻

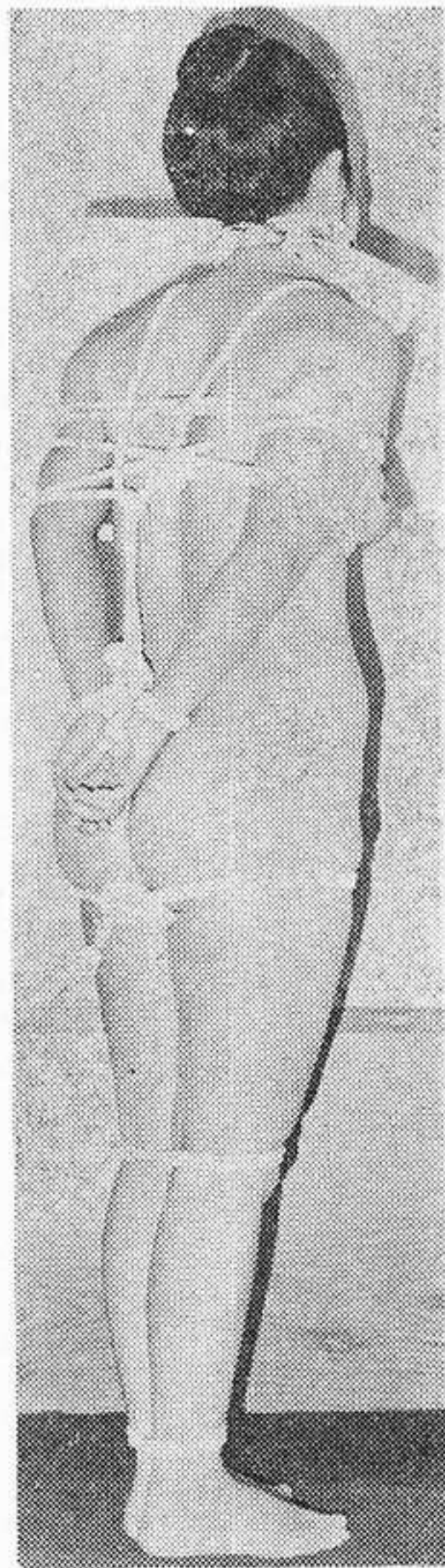


にとっても、あられもない羞かしい姿を、主人である私ばかりか、沢山の人の前に晒した羞恥の高まりが、まるで、衆人環視の中で羞恥責めを受けているにも似た悦虐を覚えるのか、一種言うに言われぬ妖しい倒錯の欲びとなって満喫しているようです。

五月号で、田尻長州様が述べておられたように、私も妻の羞恥に溢れた写真を———とって撮影に努力するのですが、どうしても正面からの開股撮影は顔がとり入れられ、そんなことから、激しい責

めに必死に耐える妻の悦虐の表情も、つい、ためらい勝ちになってしまいます。

私が、常々、提唱してきました



『夫婦交換プレイ』につきましては、田尻長州様共々、その実現に努力したいと思っております。奇ク編集部の御好意により、成功致

しましたら、後刻、その成果を御報告したいと思います。

目下、私達はゴールデン・ウィークの休日を利用して、これまで

の特訓プレイの成果が、どれほどかを、試してみようと計画しております。

浣腸、投げ針クリップ、蠟涙バイブ、ETCあらゆる責めで

妻の調教度、悦虐度などを、この目で、しっかりと得心するまで見届けるつもりです。

いずれ拙いフォトですが、近々奇ク誌友の前に妻の恥かしい姿を晒させて頂くことを、お約束しておきます。

ここに同封しました数葉の写真は、最近に行なったプレイの一駒でして、私が妻を責めたときに撮影したものです。御笑覧の上、ご批評でも頂ければ幸いに存じます。

△果報のひとつとき▽

やさしい拷問

早木夢二

この頃、責められたい心が、しきりである。といっても、素っ裸になって、しっかりと菱縄股間縛りをかけてもらい、慶子の前に引きすえられて、責め問いを受けるだけで、いいのだ。

拷問台で石を抱かせてもらったり、海老縛りにかけてもらったりしなくとも、ただ、菱縄縛りで、慶子お役人さまに見詰めていただくというだけで、もうもう私は、たまらなく幸福なのである。

ひと頃に比べると、それだけ情

熱も気力も衰えているということかもしれないので、ちょっと淋しい気がしないでもないが、お互い何もかも通じ合った気持ちに甘えて二人だけの遊びを楽しむのも、なかなかオツなものだと、うぬづけたりもする。

そんな責めをねだると、それだけ彼女の楽しみ分に喰い込むことになり、慶子は慶子なりに心おだやかではないようだが、そのかわり慶子が縛られる番には、私はお返しに心で一生懸命にはげみ、ご気嫌を、とり結ぶのだ。

慶子は、前の席に引きすえられた私を、しげしげと眺める。

「夢二、嬉しそうだね」

「ハイ、とても嬉しくて……」私は、菱縄の締めまり具合を味わいながら、お答えする。

「そうだろうね。こんな縛り姿はお前の憧れだったんだから」

「ハイ、子供のときからの、長い長い願望でした。それが、こんな風になんてえられるなんて、本当に夢のようでございます」

「よく、わかるよ、その気持ち！」

「ありがとうございます。それもこれも皆、慶子お役人さまの、おかげでございます。厚く厚く、お礼申し上げます」

私は心からお礼を申し上げます。慶子なればこそ……。ふっと湧

く、宝くじでも引き当てたような、しみじみとした幸福感。

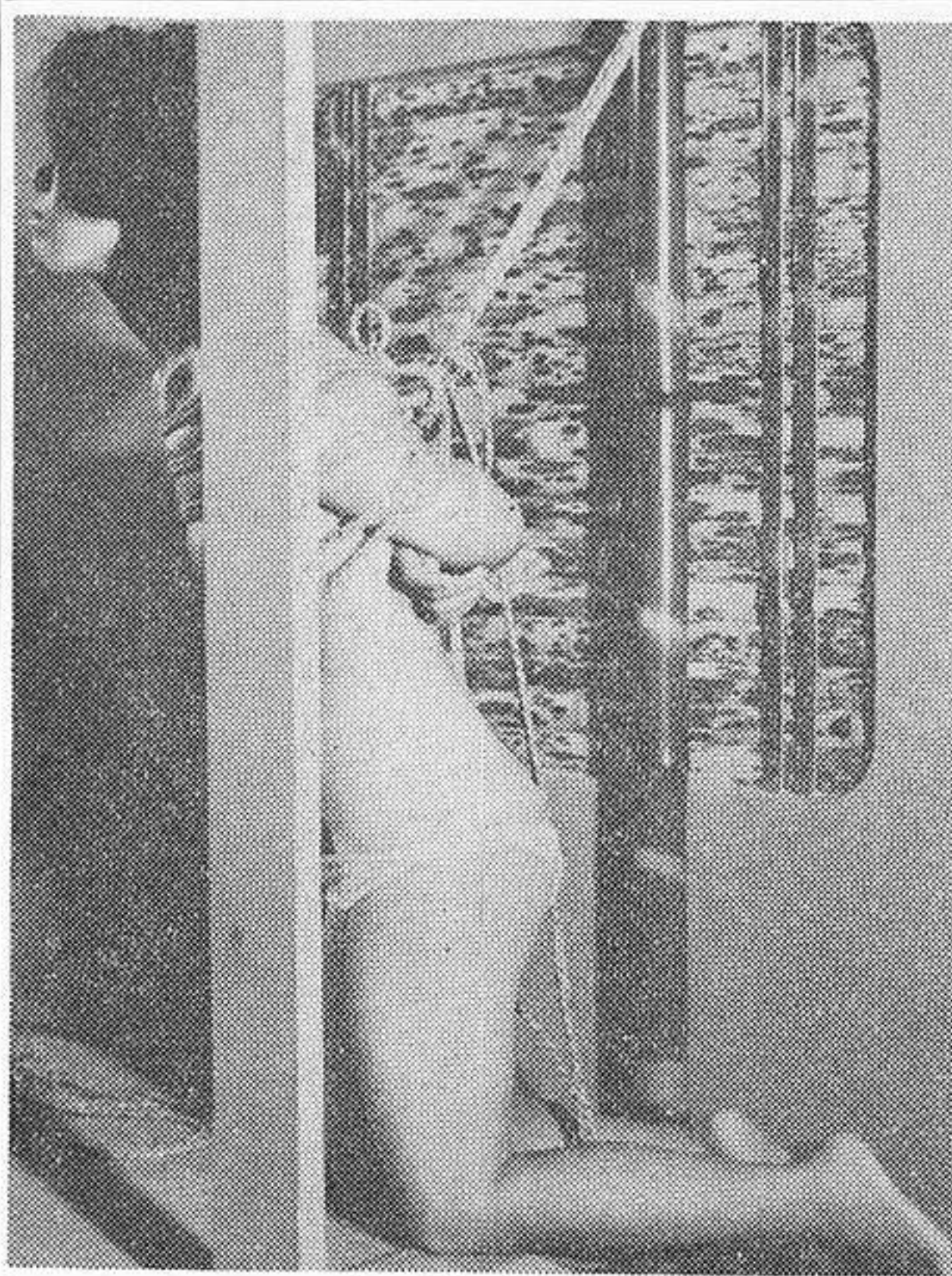
もう、すべてを知りつくしているのに、縄打たれた裸身にはまた新しい感興を催すらしく、慶子が手を伸ばしてきて、じわじわと責めなぶってくれる。

「やさしい拷問」

慶子が、ふと、そう呟いた。私は、慶子の指先に酔いながら、いつまでも、と願うのだ。

やさしい拷問の次には、やさしいお引き回しだ。

私は、四つ這いの慶子の裸の背中を胸をはって、菱縄股間縛りの裸身を、誇らかに江戸市中の人々にお見せするのである。



—大塚啓子—

サロン落穂抄 (四)
街で拾ったSM

塚本鉄三

辻村隆氏の「サロン楽我記」を引きついで、この「落穂抄」を書きはじめ、早いもので今月で第四回になる。最初のうちは「なあに、十枚位の雑文だったら、居眠りしながらでも、五分間あれば書いて見せる」と思っていたのだが、いざ書いてみると、毎月となると、やはり重荷になってくる。

百回以上も休みなく毎月、続けて「楽我記」を執筆された辻村氏の粘り強さに、改めて感服する次第である。

とはいっても、苦あれば楽ありで、短いながらも、毎月執筆し発表出来る場があるということは、奇巧という雑誌と共に後世まで残ってゆくものだから、一面楽しいも

のだ。それに、読者からの反響も知らせて貰えるし、同好の士との交わりも自ら増えてくる。

素足の季節

野に山に新緑が萌えてくると、街々にも若い女性の明るい花やいだ服装が目立ってくる。私は、以前に、あるスポンサーから、街に行く若い女性の素足をポイントにスナップしてくれないかと注文されたことがある。

今のように超ミニ流行の時代ではなかったが、それでも結構、美しい女性の素足に接することが出来た。余りの色の白さに、まぶしくて、思わず目がくらくらとするような場面に遭遇したことがあった。

バスの停留所の前に、望遠レンズ付きのカメラを構えて、辛抱よく、妙齡の美女を待っていて、さて、今こそシャッターチャンスだと、リリースに力をこめた瞬間その前を、さっと通行人が通って失敗したこともあった。カメラは勿論、特別な箱に入れて、レンズの先だけを出して、風呂敷包の荷物のようにカムフラージュして、ポケットにかくしたリリースのゴム球を握るようにしていた。

この仕掛けは、釜ヶ崎の風景を撮影する時にも利用して、大いに効果を挙げたことがある。カメラを意識されては困る、見つけれれば、いけない——という時には威力を発揮するものの、レンズは広角を使つての距離は目測だから狙った被写体が、うまく入っていない時だってある。

あるモデル嬢のことだが、裸になると、太腿の丁度つけ根あたりから、急に肌の色が変わっているの、どうしたのか？ と尋ねてみたが、本人も原因がわからないと言う。しかし、よく考えてみると、夏の間中、ホットパンツを愛用していたというのだから、結局パンツから露出している部分が陽に灼けていたのだった。夏の若い女性の服装は実に大胆である。腕と脚は、完全に露出していて足はサンダルシューズというのだから、隠っているのは胴体だけというのだが、その胴体の方も、なんとか工夫して露出度を高めようとしているのだから、男性の目は知らず知らずに注目せざるを得ない。

概して肉体に自信のある女性にこうした露出気味の服装が多いのだが、街を行く女性のすべてがそうでないところを見ると、やはり

私が指定された時間、指定された料亭を訪ねたところ、彼は食べちらかした料理を前にして独酌で酒をチビリチビリ飲んでいるところだった。差し出す盃を断わって「女は、どこだ」と尋ねると、無言で襖を、さっと開いた。真赤な派手な模様の掛布団の上に色白の若い女が縛られて、ころがっていた。

二十才を、いくつも出ていないような若い肌であったが、相当、飼育されたらしく、細い縄は肌に喰い込む程、きつく縛ってあった。

手渡されたのが三ミリ判の大衆カメラ。EEがやとと作動するくらい電球が点灯された。そこで展開されたポルノ的SM絵巻の様子よりも、カメラを持って現われた見知らぬ第三者に対する、その細面の女の羞恥の有様の方が、私には大いに興味が



—江口淑子—

あった。

男の腕の中に赤く染まった顔をかくし、恥らいを顔面いっぱいに見せながらも、所詮、女というものは受動的な立場から抜け切れないらしく、次第次第にSMの境地に没入してゆく様が、私によくわ

かった。

「人が見ているから、イヤ」と軽く拒否していた女も、やがて、いろんなポーズを強いられて、傍に人なきが如き状態になったところでカメラのフィルムは予定数が、なくなり、私の役目は一応、終わった。

光線の加減で、よくは撮れてはいないと思うがそのフィルムは、どうなったか、私は知らない。

偶然のチャンス

日本橋二丁目のマンションに一人、暮している南のキャバレーに通うホステス。昨年の夏、転寝しているところを戸締りを忘れていたので居直り強盗に入られてスタンドのコードで後手に縛られた。

ストッキングで猿ぐつわを噛まされた。被害は有り合わせの小銭を盗られた程度だったが、それ以来、その時の恐怖とスリルが忘れられなくなつて、誰か男性に縛ってほしかったという話を聞いた。新聞

にも小さく載ったから見てみたらと言われたので、縮刷版を繰って見たら、マンションの名前やホステスの本名などが被害者として出ていた。

私は早速、電話帳を調べて電話を試してみた。そしたら「そんなことはないけど、もし、お客として遊びに来てくれるんなら、歓迎するわ」という返事だったので、彼女の言うキャバレーへ行行って指名してみた。

二十七才という年令相応の貫禄を見せた風貌は、水商売にとっぴりと浸りきったという、かなりのチャームینگさで、取りまきの女数人と一緒に颯爽と現われて、私の正面にぴたりと坐って、客の品定めをする様子である。例の、『縛られてみたい』といていたという話を切り出すヒマもなく、新手の客寄せ宣伝の一手かと思っただが、一対一で落着いて話し合えば、案外、面白いSM談義が聞かれるかもしれない。

物は試しで、アタックしてみようと思われる方には、彼女の勤務先と、店での名前を、お知らせしてもよい。マンションの方は彼女に直接、聞いてほしい。

「夫婦プレイ通信」 愛妻縛り初撮影の弁

浜

野 恵

次

奇ク愛読者の皆様、今日は。

私は創刊以来の熱心な愛読者で毎月二十四日になると書店に飛んで行きます。最近号を追う毎に充実して、辻村先生のカメラハントがなくなったのは残念ですが、それにも増して、塚本先生がカメラポで頑張ってくれていますので、心強い限りです。

それと共に、読者の方々のご夫婦のSMプレイが誌上を賑わしており、その文章を読み写真を見ますと、私の心が妖しくさわぎ血が躍ります。殊に渡部様御夫妻と早坂様御夫妻には、全く感激と尊敬のきわみです。

殊に御自分の愛妻を他人に提供して、SMセックスプレイを楽しませておられると思うと、驚嘆と羨望が入りまじった複雑な気持ちになります。手記を拝見して、渡部様のお気持ちが痛いほど、よくわかります。

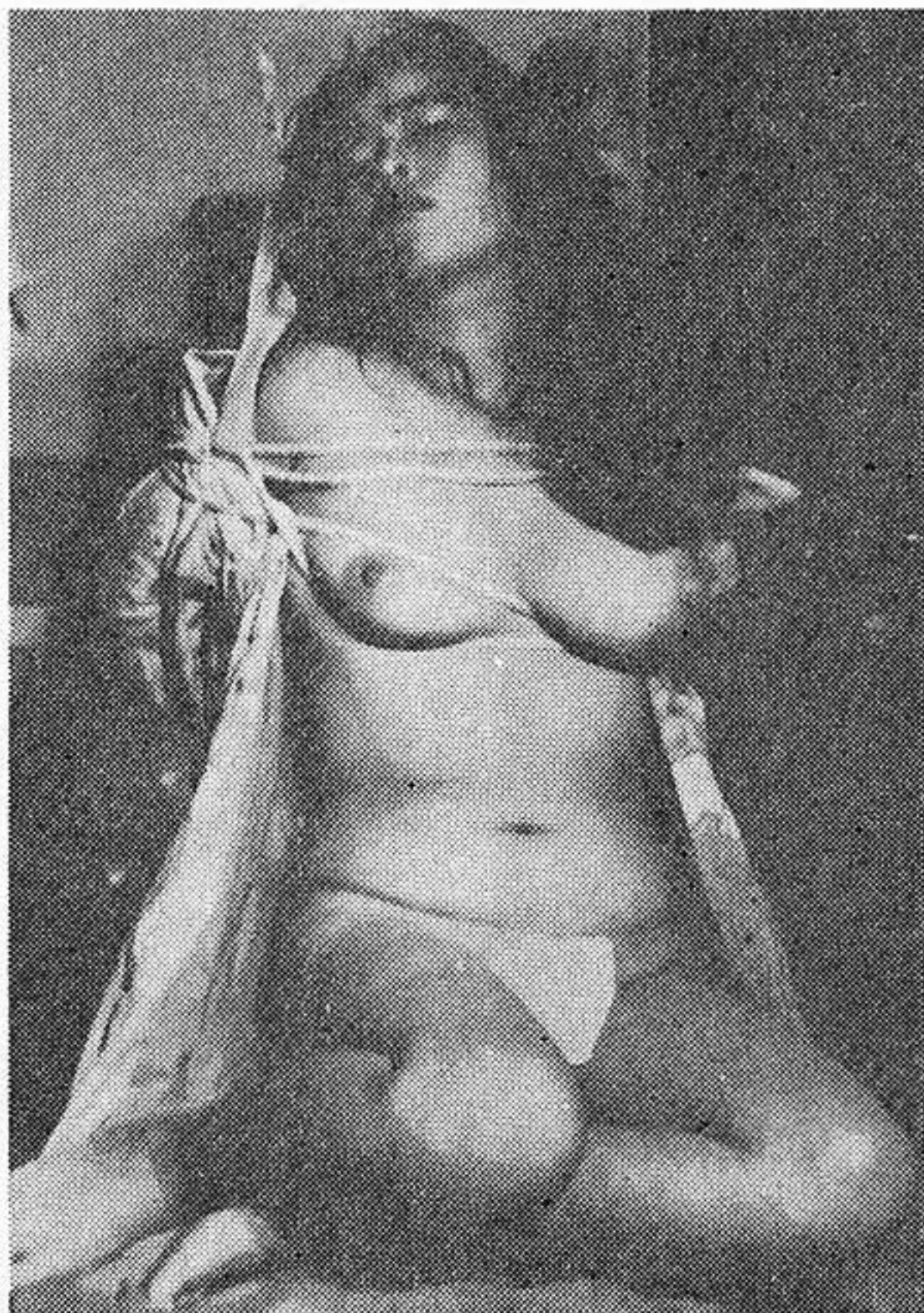
私も一度、渡部様の

様にしてみたい、夫婦交換SMプレイをしてみたい、と心が、はやります。妻に奇クを見せて、

「俺以外の男性と一度セックスプレイをしてみたくないか」と申しましたら、

「してみたくない、なんて言ったら嘘になるでしょう」と返事してニヤニヤしています。

妻は強度のMではございませんが、軽く縛るぐらいならOKすると思います。でも、妻は本年三十五才と年もとっていますし、渡部好美様や早坂夫人はじめ、各位の奥様方の様に美しい女でないのので恥かしい極みですが、こんな女で



よろしければ、気の合った方々と夫婦交換SMプレイをしてみたいと思っています。

今迄、投稿しようと常々思っていました。勇気がなくて尻込みしていましたが、最近の誌上で、早坂信治様が、その美しい奥様を縛って誌上で大活躍をされているのを見て、羨ましくなり、意を決して投稿しました。

同封しました写真四

枚は、自分で現像と焼付をしまったもので、何しろ始めてのことでしたので、うまく出来ませんでした。が、誌上に掲載して頂きますれば幸甚です。

もし、これが掲載されまして、多くの同好者の方々の目に、妻の緊縛姿態が入りましたら、大変うれしいと思います。

妻は比較的、肉づきがよく、特に乳房は大きい方ですので、乳房を中心に責めていただいても面白いです。

(貝塚市・浜野恵次)



人願望の詩 ヴィクトル・ユーゴー 杉本弘志

アーヌスの君への囁き

可憐な、くるぶしに連なる優美なふくらはぎ。そして量感に富む二本の「艶柱」太ももが、それぞれ支える、まろやかなる丘。「美」なり、「麗」なり。造神の傑作、黄金のプロポーション。

そして、その双丘が麓を接するところこそが、わが憧れの御身、アーヌスの君の宮殿なのだ。

尊きなるが故に、容易に近寄り難い宮殿。神秘なるが故に、容易に拝顔し難い御身。

なれど、察し給え。美麗なる御身、アーヌスの君に接するを夢見て、日夜、悶々とする者の、このやるせない想いを……。

願わくばアーヌスの君よ、御身の美しいお姿を拝ませ給え。

もちろん、お許しさえ賜れば、その宮殿を守護する柔らかな双丘とのトラブルは、我が掌中にて解決することを誓約しよう。

そして、お許しさえ賜れば、御身の「神秘的な美」にふさわしい、豪奢な紅いベッドでも、凝った造りのクリーム色のソファでも、お望みどおりに設けることを誓う。

そして更にお許しさえ賜れば、

初めて、しげしげと見詰められる羞かしさに、つい隠れようとされるであろうアーヌスの君の為に白でも紅でも黒でも、お好みどおりのロープを用意して、その神秘的な美の展示をさえぎる総ての動きを

封ずることを約束しよう。我が掌に抵抗するであろう双つの丘を始め、量感豊かな二本の艶柱も、ともすれば上から降りてきて覆わんとするであろう二本のスナリとした手も、このロープによって幾つかの深いクビレを見せて固定されることになるのだ。

だからアーヌスの君は、安心して外気に、その美麗なる全容姿を触れさせることが出来るに違いない。そして我が熱望は、その神秘的な、たたずまいを、そのままに、ほんの数時間、委ねてくれるだけで満ち足りることだろう。

もちろん、膝に押し潰された乳房や、全身に残るロープ跡を揉みほぐすことも固く約束しよう。

＜寸評＞ 玉木章子礼賛 金沢十三

女性も26

才ともなれば、柿が熟れるが如く

実り始め、肩から胸、

そして下半身にかけて、まろ味を

帯び、本当に女らしさを感じさせるものである。それが正に玉木章



子嬢である。

この女らしさをムンムンさせる彼女が、厳しい緊縛と、両足を大

きく開かされる羞恥責めを加えられ、髪の毛を掻き乱し、そして目を逸らしてまでも恥かしさに耐えている姿には、何ともいえないものがある。実にスバライ……。

今迄も、相当飼育されて来たようであるが、これから、ますますM女として成長されるよう、心から楽しみにしている。

「懐かしい梨花悠紀子嬢へ」

5月号を開くと懐かしい梨花嬢のフォトがグラビアに4枚、P 56に1枚、そしてP 178からP 187にかけて10枚と、合計15枚もの多くが掲載されている。

我々オールドファンにとって彼女が今なおM女として活躍している様な錯覚に落ち入ってしまう位である。次々と新しいM女が出現するにもかかわらず、

SMファンタジア

この詩のモデルに 捧げる詩

南原 赤秋

しがない場末にある小さなクラブのホステスの私。

しかし今は、まるで女王様のような気持なんだ。なぜって、昨夜おそく彼が来た。

彼ったら、私の部屋へ入ってくるなり、言った。

ひろみちゃん、今夜は、うんと遊ぼうね。

どうしたの。何するの。

僕、今日、すてきな事、覚えたんだよ。だまって、僕のいう通りにするんだよ。

どうするの。何だか、気味悪いわね。

ランニングシャツとブリーフだけになった彼。筋肉質の彼。男性美の彼。

プーンと、におう男らしいワキガの香り。

私のワキガは、すえた様な、におい。

彼のは、まるで香水のよう。

たまらない。

私も、あわててネグリジェ一枚

いつまでも非常にフレッシュな感じを与えてくれる彼女である。

彼女は単なるデパートのOLか

ら、貴誌の努力によって、M女として飼育された代表格といっても

よからう。その彼女は今は平凡な家庭婦人とか。

しかし、あれほどまでも飼育され、完全にM女として自覚された彼女が、貴誌から消息をたてて久しいことあまりある。

本当にM女としての自分を、たち切ってしまったのだろうか。

いや、決してM女としての性格は、今なお変わっていないものになる。

きつと、いい事があると信じて彼と二人、ベッドに上がる。

彼。しかし、彼の指は私のアヌスへ。

びっくりした私は叫んだ。しかし、彼の力と彼の香りは、私を逃げさせない。

と思う。

多分、貴誌を愛読されていることと思うが、ファンの気持を汲んで、ぜひ一度、近況を知らせてほしいものである。

色々と家庭の事情もあることと思う。

カメラハントは望むべきは無理としても、せめて、彼女の心の中を告白なり手記に記して、オールドファンのみならず凡べての愛好家に披露してほしい。

かつて、あれほどでも貴誌をわかせた彼女が、どのようにに変化されたか知りたいと思うのは、私一人ではないと思う。

くどいようだが、近況を誌上に報告して下さるよう、心から期待している。



やがて私は、アヌスの快感に酔ってしまった。

何個かのイチジク浣腸が、私のアヌスを、せめた。こらえこらえた後の、ただ、うっとりした排泄の快感と、めくるめくセックスと

すばらしい男の香りに、私はただむせび泣いた。

彼の舌は私の腋の下を、なめまわしている。

そして、彼は叫んだ。

このすばらしい香り、いつまでも大切に。

私は、とび上がるほど驚いた。彼のためにも、私のためにも、大切にしよう。すばらしさに満足しきった私は、男の香りに、むせびながら、眠りこけた。



「マゾについてのお話」

私は

ストリッパー

なの

青空まゆみ

ねえ、男の人って、どうして、あんなに女性自身を見たがるの。それも良いけどさ。中には、君のをなめたいなんていうのが、結構いるんだもの、驚きね。

あんな汚い所をなめて、どうするっていうの。およそエッチね。男性って、大概あんなものなのかしら。

この間、私のボーイフレンドがサ、君のなら、オシッコでも飲みたいって言うのよ。こんなのがマゾって言うのかしら。余り真剣な顔つきで頼むので、私も最初はびっくりしたけどサ、なんだか可哀そうになって、「あんた、それホ

ント？」って聞いたんよ。「ホントだよ。嘘なんて言わんよ」って言うからサ、彼を、おお向けに寝かせて「さあ、大きくお口をお開け」って、けしかけたら、彼はブルブルふるえながら

私の言う通りになるじゃないの。どうせトイレに捨てるものだし、彼の顔の上に跨がって、いきなり口の中へ飛ばしてやったらサ、彼ノドをゴクゴクさせながら飲むんだもの。私も何だか優越感に浸って、とっても良い気持ちだったわ。

それが、とうとう癖になって彼が遊びに来る度に、ビールを一本飲んで、必ず飲ましてやったわ。ウッフッフ、女の幸福って、どこにあるのか、わからないものね。むしろ、男にヘイヘイしているより、この方が、どのくらい楽しいか知れないわ。

ところが、その彼が、友達だという男にしゃべったとみえ、また別の男が来てサ、是非飲まして呉

れって言うのよ。そのたびにまたビール一本でしょ。

痛くもかゆくもなし、こんなことで満足して帰る男たちなんて、なんとなく哀れだと思うわ。中には、お医者だの、芸術家だのってよそでは相当な紳士達がサ、私の前に来ると、まるでドレイみたいよ。おかしいじゃないの。そいで私も、だんだん大胆になってサ、男の口を見ると、便器に見えてくるのよ。

私、エミ子。年は二十三。一六五センチ、六〇キロ。かなり大柄の方よ。肉もバストやヒップにはむちむち、ついてんの。

ところが、男達の言うことにサ小柄の人より大柄の女性の方が、グラマーだし物量があって良いというのよ。変わってるじゃない。

そのうち、一人の男がね、今度は、大の方が喰べたいって言うのよ。「いくらなんでも、小の方と違って、汚いじゃないの」って言ったら、「とんでもない。君のよ

うな美しいヒトのだったら、汚いどころかノドから手が出るほど、おいしい食物だ」って言うのよ。

でも、こればかりは、小と違ってビールを一本飲んでと

いうわけにはいかないのよ。私は朝は大抵、十時すぎまで寝てるでしょ。起きた時に、きまってトイレへ行くの。だから大の方は一日に一回きりなのね。

そのことを話したら「その時間に、きつと行くから是非、頼む」って手を合わせて拝むようにするのよ。どう思う？ こんな話。

まさかと思ってたら、ほんとに翌日の十時頃、私のアパートのドアをノックする者があるのよ。私も丁度、目がさめたところ。あわてて飛び起きてドアをあけたら、その男が、立ってるじゃないの。

「約束の君の御馳走、たのむよ」だって。エーイままよと、私も度胸をきめて中へ入れてやったわ。「ホントにいいの。その場でイヤだなんて、言わさないわ」って念を押したら、「たのむ、たのむ」

って言うの。パンティを脱いで、いきなり大きなお尻を男の顔の上に持ってゆき、最初の空砲を口の中へ一発、放ってやったの。アツという間もなく、次は本物をベタベタと出してやったら、食べるのと食べることに、おかしい位よ。まるで豚そっくりね。

私も内心おどろいたわ。いくらなんでも、よくまあ、大の方まで



食べるなんて。臭いし胸が悪くな
ったわ。でもネ、それでこりたか
と思うと、その男の奴、一週間ほ



どして、またやって来て、「先日
は御馳走様」だって。呆れてしま
うじゃないのサ。考えてみれば、
どうせ大の方だって、トイレへ

流してしまうものだし、その日
も食べさせてやったけどサ。そ
の男にしたら、私のこの大きな
尻から、ジカにっていうのが、
いいらしいのネ。

こうなったら、私、興味がわ
いてきて、もっと、いろんな男
に自分の排泄物を食べさせてや



りたいって、いう気持がしてきた
のよ。

私って、地方回りが、多いでし

よ。このアパートも月の内
の三分の二は留守なの。だ
からサ、衣裳の荷物を運ん
だり、私の下着を洗濯した
り、そんな男を一人ぐらい
養っていても、いいと思う
のよ。朝、目がさめたとき
は大の方も食べさせてやれ
るしね。

そのうち、また面白い話があつ
たら、お話するわ。じゃあ、バイ
バイ。またね。

感想

SMの中での「浣腸」と「排泄」の位置

赤沢真彦

私は二十五才の真面目で温厚
な一独身男性で、奇巧は毎月、
熱心に愛読しております。

私は深田菊子さんの大ファン
です。六月号のカメラ・ルポで
塚本鉄三氏が、私の大好きな深
田菊子さんを取り上げて下さっ
て、大変うれしかったです。

深田さんの責められている写
真が何枚も何枚も載っているに
めくるめく思いがしました。塚
本氏が書いておられるように、
『虚構のSMプレイ』が、深田
菊子さんに加えられているのに

私は、虚構と現実との区別がつか
ないくらいに、このカメラ・ルポ
『足の裏の温かい女』に酔ってし
まっています。

大きな、うるんだような瞳の深
田さんが麻縄で、ぐるぐると厳し
く縛られているのを見ると、私の
身体が思わずしびれてしまって、
ルポの文章の中に、没入していっ
てしまうのです。まるで、自分が
その主人公のようになって、菊子
さんを責めてしまっているのに気
づいて、はっとしてしまいます。

深田菊子さんに、私のような熱

烈なファンのいることを、どうか
お伝え下さい。それから、彼女の
はき古したパンティがほしいので
すが、なんとかお願いしてもらえ
ないでしょうか。せめて、自分の
手で菊子さんが責められないの
ら、下着にくるまって、その体臭
に、むせびたいと思います。

辻村隆氏の『幻の少女』は、ま
さに言葉の真正銘の意味で、私
にとって感動的な読物でした。私
は女性の排泄儀式に、この世の至
高の美を感じるものです。

筆者の悪魔のように正確で豊か
な表現力は、私の空想を限りなく
ひろげてくれました。一読し終わ
った時、ノドが、からからだった

のを覚えています。そして小西
氏という自己の欲求に忠実な、
そして徹底した生き方をする人
物のプロフィールに接し、畏敬の
念と多少の妬ましさを感じた次
第です。いずれにせよ『幻の少
女』前後篇は、私にとっては、
SMの聖書となるでしょう。

深田菊子さんの次に好きな
のは鈴木千鶴子さんですが、これ
は多分に、私がSMの中でも浣
腸とか排泄に関心があるからで
しょう。その意味で五月号のル
ポに登場した西条紀代さんなん
かも、極めて身近な女性に感じ
ています。再度の登場を塚本氏
に、お願いする次第です。



わびしい夜明け

今比徒里

「美しいッ！」と、彼は思わず叫んだ。そしてすぐ「お世辞じゃないよ」と、つけ足した。

目の前の、後手に縛り上げられた裸女が、せつなげに、苦しげに歪めていた美貌をチラッと彼の方に向け、一瞬、ニッコリと笑ってみせたかと思うと、すぐまた、せつなげな表情に戻った。

確かに見たことのある美女だ。縛り縄が埋まりこんでいる豊かな艶肌は、いかにもピチピチした柔らかさが感じられる。このスナリとした、しかも肉感的な肢体は……？ 奇く往年のピカ一モデル絹川嬢？ いや、大塚嬢？ いや花嬢のようでもあるし、笠井嬢か前田嬢……いや深田嬢にも高村嬢

「S M 誌上通信」のラブレター

野村 造

伊田恭子様

読者通信、拝見致しました。

私は27才のS男性です。私は理容師ですが、貴女の仕事の内容と類似している点で、貴女が婚期を逸したと言っておられる事が良く分かります。私共の仕事には、休みといっても、あちらの講習、こちらの講習と、いくつもの会を走り回り、とても異性と逢っている時間が作れません。

このような仕事には、やはり時間が、とてもいるから、私も今はやっと落ちつくかと言っても、それならという異性の相手もなくただ毎日を無為に暮しているに過ぎないのです。サラリーマンの方の様に、時間的余裕もなく、まるで伝書鳩の様に、通勤圏を行き来しているに過ぎません。

貴女も何か空虚な毎日に、自分の性癖に埋没されている様に感じています。私の思い過ごしでしょうか。もしそうなら、とても損をしておられると思います。もっと自分を大切に一度しかない人生を、もっと楽しく過ごすのも人

の生きる道ではないでしょうか？

いや、貴女は分かっておられるのです。貴女は、それ故に通信欄に投書されているのですから。通信欄を読ませていただきますと、まだ未熟なMなのでしょうね。自縛なんかより、やはり他人の手によって縛られる方が、もっともつと貴女のM性が磨かれ、この世界の幸せ、M性の女としての幸せを掴まれるのではないのでしょうか？ オナニーより、やはり異性によってと言われる所似ではないでしょうか？

もし私が貴女のパートナーになれるなら（もし、お望みなればの話ですが）丁度、休みも同じです。で、貴女の心の安らぎを与え、満足させるだけの自信は持つておるつもりですが、どうでしょうか？ プレイが出来たときのプランを一つ二つ、上げてみます。

(一)、貴女を素裸にし、菱縄にかけ、股間縛りにもって行き、後手にして、つなぎます。そして、まず奴隷の宣言をして宣言書を作成します。それには、おしゃぶりを

奉仕して、形で奴隷の身分を示します。

(二)、股間の縄をはずし、両足首を別々に大の字に縛って開股させ剃毛をします。（この方は本職ですから御安心下さい）

(三)、剃毛した後、仰向けに寝かせて、足は開股し、上から吊るし浣腸をしてから、赤チャンのように、おムツをしてあげましょう。

(四)、数分後、後始末をして、貴女の性感度のテストをします。それによって、貴女の心を夢の世界へと導いてあげましょう。

その他、貴女のM性にあったものを、与えてあげたいと思うのですが、いかがなものでしょうか。私は貴女の身体に傷をつける様な事は、大嫌いです。どちらかと言えば羞恥責めの方が好きなのです。それに、もしよろしければ私は写真のDPEも出来ますからお望みでしたら枚数に限らず撮ってあげたいと願っておる次第です。

一度、お手紙でもいただければ幸いに存じますが、いかがなものでしょうか。どこそで逢いたいとおっしゃるなら、どこへでも、行きたいと思っております。良き御返事お待ち申しております。

(滋賀県・野村造二)



にも思えてくる。
 “だ、だれなんだ？ キミは”と
 彼は、クラクラしてきた頭を振ってから、その緊縛女体にとびかかりながら訊いた。
 弾きかえすような、それでいて溶けてしまうような、粘りつく柔らかなさを彼の腕の中でウネらせながら、縄で歪められた乳房を喘がせて、縛られた美女が囁いた。
 “私はだれでしょう。当ててちょうだいナ。賞品は、プレイよ”
 “わからんから訊いてんだ！”
 “じゃあ、賞品は要らない？”
 “そ、そりゃ欲しいけど……”
 “じゃあ当てて。さあ、だれ？”
 “ウーン。意地悪、云うなよう”
 “さあさあ……ハイ時間です。たいへん残念でした。ジャアネ”
 “マ、待ってくれ！”
 自分の声で彼は目覚めた。抱いていた枕が湿っぽかった。

前田真知子嬢、雑感——田村毅志



四月号を開くと、素晴らしい口絵写真が目に入ってきた。
 しかもその中に、私の大好きな前田真知子嬢の恥かしい浣腸姿が出ているではありませんか。その瞬間、私の脳裡を一本のイナズマが、さっと走り過ぎた。
 実に素晴らしい——と。
 だが、その反面、私の心の中にひそんでいたドン欲なハイドが持ち上がり、凡べてを満足感に浸してはくれなかった。

そこで、この口絵写真を見ての雑感を、感ずるままに述べてみたいと思う。
 一、理知的な美貌とヒョウの様にしなやかな肢体を持ち、SMマニアの理想とするタイプの前田嬢が、こともあろうに、一糸まとわぬ生まれたままの姿で、恥かしい姿をカメラの前に開花させられ、しかも、羞恥責めの極致とも云われる浣腸をほどこされ、悶え、苦しんでいるM女として飼育されて

いる姿を見るにつけ、心から喜ばしく思った。
 一、しかし、彼女に対する浣腸責めを、もっと強烈で効果的なものにする為には、緊縛をほどこし自由を奪った状態で浣腸すべきである。
 情容赦なく、両手を後手にギョウギウ縛り上げ、両足も、これ以上、開くことが出来ない位に開かせ、お尻を高く上げさせた最も恥かしい姿でエネマ、イルリ、ポンプと執拗に、せまり、いたぶり抜くことが、彼女の羞恥心を最もたかぶらせることになる。
 一、さらに、最も恥かしい責苦を受けている彼女の表情であるがほとんどどいっていい程、無表情に近いものである。人間の感受性は人それぞれであるが、やはり、顔面や態度に、苦しさ、切なさ、恥かしさを表わすことが我々のみならず彼女自身を、より深い悦楽の境地へ導くものと思う。彼女自身、告白に書いていたが、心の中にしまい込むのではなく、泣き叫び、身体をねじり、あえぎ、恥じらうものを、素直に態度に表わすことが、彼女自身に火をつけ、より素晴らしいM女として成長することになる。

〔同好者通信〕
私のペット

尻崎市・南政子様へ

(五月号二七〇頁)

私のペットは、チョコという可愛い犬です。私のチョコ訓練方法をお教えします。チョコは私に、とても、よくなついてくれました。一日も、はなせません。

一、私の左手人サシ指と中指の股のつけ根に手甲側に薄くバターをつけます。

二、手掌側をチョコに甜めさせます。犬は嗅覚が強いのでバターを甜めようと舌さぐります。指股を開けるようにして舌をつき込んでくるまで訓練しました。ウロウロしている間は頭を叩いて叱り、うまく舌頭を両指の間に突込んでくると、お菓子を与えて可愛がりました。手指を使いますのは、犬の舌の動かし方や突込む力加減がよく判り上手にやった時にウンとほめてやるのに効果があります。

三、舌先で押し開ける訓練が一番大切です。次に右人サシ指先にバターをつけて左手で筒を握るようにして、筒の中に右人サシ指のバターをついた指を入れた形にしてチョコにバターを求めさせます。

甲斐千恵子
ト飼育法

四、少しずつ右人サシ指を引き孔深くチョコが舌を突込んでバターを求める訓練をします。口全体で押しつけず、舌の動作でバターをなめにくるように、少しずつ長い日をかけて訓練します。上手にやった時には、ほめてやるのが大切です。

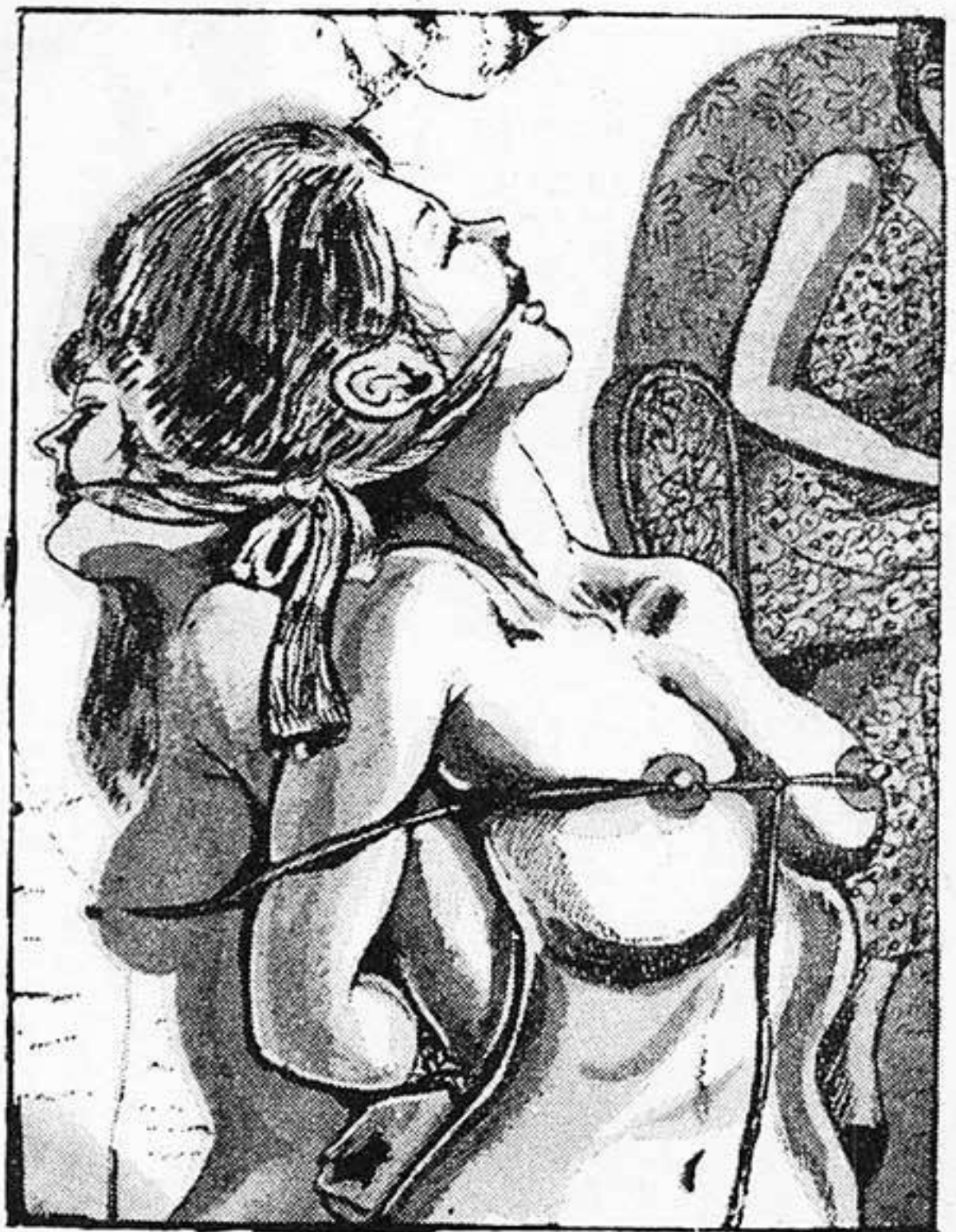
五、鼻先を使ってバターに接近させる訓練を重ねます。基礎的な訓練は以上ですが、舌頭の働きと鼻面の使い方には色々と微妙なものがあり、おやりになったら次々に色々飼育したくなってきて、いつまで限りがありません。

六、大口淫の時は、手で下腹をさすってやって下さい。

七、私は、寝そべってコタツに片脚をあげ、くの字形にして開き横向きになりますと、もうチョコは心得るようになっていきます。

八、反対側を向いているチョコの方の壁側に大きな姿見を置いて、私はチョコの激しい動作を体と目で浴びております。

九、チョコが激しい叫び声を出さぬように訓練することは、叱ったり口ぐつわを時折、はめたりして



『セットでどうぞ』 三鷹I・O

短信往来

女奴隷の……

……いじめ方

若木一夫

山下悠子様
貴女のお便り、大変楽しく拝見いたしました。私の事も書いてありましたので、うれしく、すぐ返

事を書くかと思いましたが、一向に筆が進まず、書いては破りの連続で、自分の文才のなさが情けなくなります。

さて、奴隷志願の貴女の文では肉体的な苦痛、それもみじめな労働等により奴隷の気分を味わいたい様ですね。奴隷の身分で、ああしてほしい、こうしてほしいとは生意気なと言いたいところですがまだ貴女は一人の人間で、私の奴隷ではないので、仕方がありません。私の考えている奴隷は、

『連繫縛り』 黒田 縛



やさしく教えねばなりません。怖れさせないように、しつければ、次第に唸るような低い声しか出さないようになりました。

十、私が絶頂を極めたら、乳首を舌頭サービスさせます。乳首をあとにするのは、私が再度の絶頂をより昂めることに効果があります。チョコもそうではないかと思えます。チョコが落ついて乳舐めの余猶をもつようになるのには訓練がいります。叱ったりなだめたりして。今では順序があると思って、あわてることがなくなりました。

十一、アヌスの中のチーズを舌で求めさせるのは相当な時間がかかる必要があります。

十二、アヌスでのドッキングは

ここまで飼育されれば容易に誘導出来ます。

十三、全身舐めを含めて色々な行為を組合わせ、織りまぜて訓練と交歓を重ねて日を送っているとチョコは毎日、時間を待っているようです。シーズン中の激しさは言語に絶します。満足させるために私も意識的に栄養をとる程です。物言わないペット、情欲一途の私にだけチョコ。他人には噛みつき、私にだけ優しく求める猛ペット。人には、たとえようのない愛情と愛欲の世界でございます。そのうち、政子様の飼育過程を誌上に公開して頂くよう、是非、お願いして、私のお返事と致します。(東京・甲斐千恵子)

①、自由は全くありません。その為、クサリ、縄等で自由を制限し、 unnecessary 場合、檻の中へ入れておきます。

②、主人に忠実で意のままに動かなければなりません。ムチ、鼻ネジ等で意のままに動かします。

③、奴隷を飼うのに、お金がかかっては何にもなりません。ですから、人間の着る衣類はナシ、奴隷の身につけるものは、縄かクサリのフンドシ、首輪、鼻ネジ、足クサリ、手錠等で、エサは主人の食べ残しの残パン、ドッグフード等をソマツな食器に入れ、後手錠のまま食べさせます。

④、奴隷は主人に利益をもたらさなければなりません。その為、命令されるまま、いろいろな労働をさせます。

⑤、いつも自分の奴隷の身分をわきまえて、いなければなりません。呼ばれたら、すぐ返事をして御主人の足許にひれ伏し、その足に口づけをし、それから、体の上から下まで改めてもらわねばなりません。

今迄、私が映画やテレビ、小説等で見ていた奴隷は、男奴隷は力仕事、女奴隷は召使いかセックスの道具と、大体決まっている様に

思います。しかし貴女のお便りでは、貴女は男奴隷の様に力仕事をするとこの事。貴女は女馬になって主人である私を乗せ、口輪をとられながら、尻にムチを受けて走らなければなりません。また、背に重い荷物を背負い、後手錠のまま鼻クサリを引かれて部屋の中を、何回もまわります。

屋外では、田舎の道を粗末な服装で荷物を積んだ荷車を引っぱり人の見えている所では私も一緒に押している様に見せて、人がいない所では、私は荷車に乗り、貴女はより重くなった車を一人で必死になって曳っぱらなくてはなりません。そして少しでも休むと、私のムチが容赦なく、とびます。またこれは実際に出来るかどうか、わかりませんが、貴女を金ガ崎につれてゆき、男の労務者に変装させて、一日、貴女を男仲間に入れて肉体労働を強制するのも大変面白と思います。

その他、悠子を主人公にして、いろいろ空想して居ります。貴女は、こんな奴隷生活を、どう思いますか。連絡をお待ちして居ります。

神戸市・若木一夫
女奴隷・山下悠子へ

猿轡通信に寄せて

青木順



前略、編集者殿。突然、突飛な
題にて一筆差し上げますことを、
お許し下さい。

小生は、今迄青木順一のペンネ
ームにて、三度ばかり投稿させて
頂いたオールドファンです。此の
ペンネームにて、或は小生の少し
変わった傾向について想い出して
頂けたかも知れませんが、読者
通信にても同じ傾向の一、二のフ
ァンから、お呼びかけ頂いた事も
ございます。

一言にして言えば、猿ぐつわに
始まり猿ぐつわに終わる、真底か
らの猿ぐつわマニアで、それもゴ

ムチューブや皮の突起物のついた
本格的な猿ぐつわを噛ませてのS
EX責め、羞恥責め——。それに
依る、声にならぬ呻き声や、恥か
しいセリフを強要して、無理に明
確に答えさせて、その声を聞き、
また苦悶し厭がり、挙句の果ては
喜悅する表情と、その姿態を眺め
ることが今の小生の生甲斐です。

と申しまして、〔縛り〕も大
好きで、ロマン派生氏の如き縛り
に共感を持ちます。その自由を奪
われ、あらぬ羞かしい姿を強要さ
れ、そのまま無理矢理、SEX責
めされるのを見る楽しみも、大き

な要素にはなっています。

唯、何分にも小生が至って
無器用で、縄さばきが下手な
のと、責められる本人が本来
責め、そのものを自ら求める
といった、完全な意味でのM
ではないので、緊縛そのもの
は、観賞用には適しいと思
います。(SEX時は猿ぐつ
わと緊縛を邪魔にならぬ程度
に、自ら求めますが——)

主人の好みに従う事に依り
SEX責めの挙句に、もとも
と厭である可き色々な責め、
殊に無理矢理に施される息苦
しい程のゴムの臭気に満ちた
サルグツワやシャクハ責め、あぐ
ら縛りのさらしもの、引き回し等
の羞恥責めに、今迄の長い経験か
らの条件反射として自ら好むと好
まざるとに拘らず、感度を昂めら
れ、遂には、自らも責めを求めて
うめき、もだえ、狂い出すといっ
た工合です。

ですから、余り最初からゴタゴ
タと縛りに時間をとりますと、本
人をそのムードに酔わすことが出
来ず、感度の昂まり方が悪いので
中々うまく併用出来ません。

此処に、小生の好みの一端をの
ぞかせて、しかも誌上に発表して

編集部だより

○度々、本誌の読者通信を寄せら
れた玉木章子さん。その念願がか
なつて、その緊縛の麗姿が誌上を
飾ったのが、本年の二月号。

○『美しい八責めVの記録』で文
字通り、爛熟した二十六才の美し
い肢体をムンムンするSMムード
の中で開陳したので、予想した通
りにファンの通信が殺到。数回の
プレイを経験した結果、前回のル
ポの時より、もっともっと凄責
め方で、フォト撮影してほしいと
いう便りがあった。

○章子さんが、四月号に書いた告
白「日陰の女から日向の女に」の
続きの文章を書いてほしいと依頼
しているが、目下のところ、激し
い責めと写真撮影を希望している
とのこと。飼育済み数年のベテラ
ンの成果を見せてほしいものだ。
○三カ月に亘って、カメラ・ルポ
の取材を独占した西条紀代嬢は、
一段と化粧ぶりもうまくなり、色
気も増してきたというマダム美美
代からの連絡があった。浣腸責め
の次には、吊り責めでもやるのが
彼女には似合いの趣向だろう。

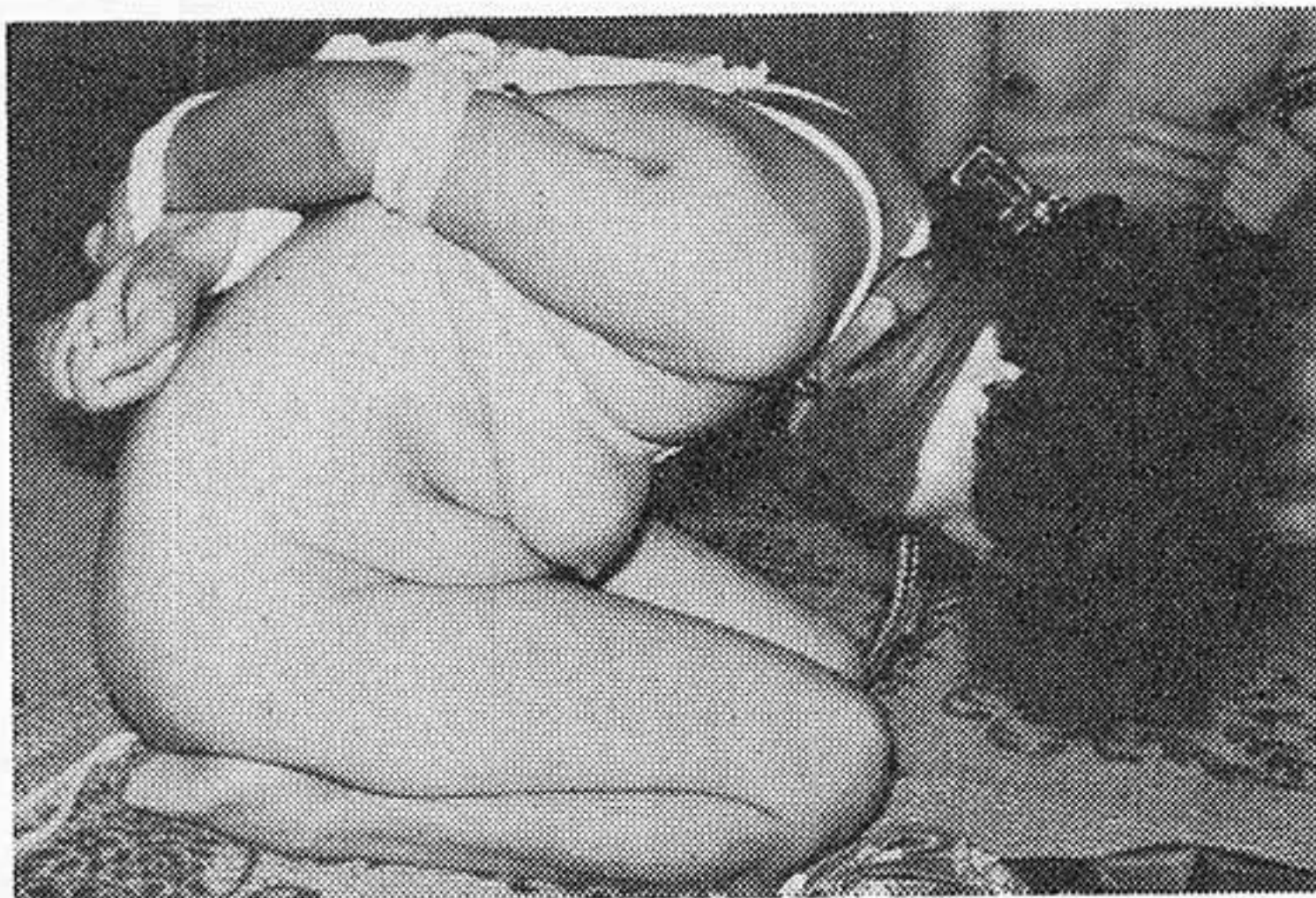
頂けそうな写真二葉を同封致します故よろしければ御掲載下さい。もっとも、表現豊かな姿態や今にも呻き声の聞こえて来そうな苦悶と悦楽の表情の写真も沢山ございますが、何分、猿ぐつわマニアの事とて、表情が余りにも、はっきりと出て居りますので、公表致しかねます。

若し、どこの誰とも分からぬまで、お支障なければ編集長や同好の方々にも是非見て頂きたいものと考えて居ります。また小生はその長い経歴から奇くとお附合ひも深く（但し今迄は表面に現われる事も比較的少なく深く静かに潜航致して居りました）そんな関係からも、貴誌に關係の深いお方の知遇をも得ましたし、また第三者に依る羞恥SEX責めも、小生の安心出来る交際範囲内では、五人ばかり経験致して居り、その幾らかは現在も続いて居ります。

然し、何事に依らず同一条件の繰り返しは、（殊に羞恥感を第一とする責めに於いて）馴れるという事に依って、その一番大切な羞恥度が減じて来て、見る方としても、マンネリとなつて、その楽しみが、少なくなり

ます。従って常に新しき、更に羞かしがり厭がる責めを求めながらも、そこには社会的な立場や家庭に對する後日の不安といった、誰もが直面する壁に当たっているのが現状です。

今迄、幾度ともなく貴誌の『女性モデル募集』の欄を読ませて頂き、その文中の「プレイは介添えのみにても可」なる個処にひかれ



何度、読み返してみたか分かりません。然し、此れとて仮令、当方が何らその報酬を求めないにしても写真掲載は勿論、撮影も不可。而も住所姓名御容赦では、話にも何もならぬ事が分かっていますので、あきらめていきます。

これから成可く、貴誌に掲載して頂けそうな（露出度の過度ならぬもの、また表情の余り、はつきりせぬもの）ものを撮影して投稿しロマン派生氏+猿ぐつわマニア+ゴムマニア傾向の同志の御参考に供したいと存じて居ります。

吾々素人、而も自ら求め過ぎる程に成熟し過ぎていないMを相手のSMプレイは、ある意味では却ってS的要素が強く表現されて、また一風変わった作品になると自負致して居ります。

二対一、或は三対一のSMプレイ旅行も二回ばかり経験しましたので、これをまとめてと思いましたが乱筆の上、叙事（経過をのべること）が余り得手ではなく、残念乍ら、よう発表致しません。無理に書くと、きつと小学生の遠足の作文のようになるだろうと思います。

四月十八日 青木順一

○吊り責めといえば、四月に上洛した前田真知子嬢が、次回に来た時は、八吊り責めVにしてほしいと言ひ残して帰京した由。いろんな趣向の吊り責めを、大胆に敢行してもらいたいものである。

○嘗て、可憐なフェイスでカメラハントに登場した金原加奈子さんは、妊娠中の吊りでも鳴らした女性である。その時、お腹にあったお子さんが、ヨチヨチ歩きの中交通事故に遭われたそうである。地方版の社会面に出ていたことを聞き心からお悼み申し上げる。

○交通事故にて目下、自宅療養中の鈴木千鶴子さんは、なにしろ編集部とは遠方のため、以前のよう東名神をぶっ飛ばして来訪して貰うというわけにもゆかず、ここ当分、ルポに登場して頂けないのが残念。速かに快癒を祈るや切。

○嘗て一世を風靡したサジスチン春日ルミ女史から本当に久しぶりに便りに接した。彼女の豊富な経験は是非ともマゾファンのために語ってほしいと依頼しておいたもので、いづれ何分の返事があるものと思う。彼女の信奉者のマゾ人士が本誌の熱心な永年の愛読者であるところから、懐かしくなったということである。

「極最新版」新人M女性羞恥責め写真集

V 組 百態 大手札印画紙 (9×13 寸) 極鮮明焼付写真

各組 一組一枚 (送料共)

| | |
|--------|-------|
| 五組五枚 | 八〇〇円 |
| 十組十枚 | 一五〇〇円 |
| 二十組二十枚 | 二八〇〇円 |
| 五十組五十枚 | 五〇〇〇円 |
| 百組百枚 | 八〇〇〇円 |

(郵便番号545-91) 天星社
大阪市阿倍野局私書箱14号

複写による不鮮明な緊縛写真が出回っているようですが、これは全部特殊マニアの蒐集用として一粒選りのネガから直接印画紙に焼付した極めて鮮明な逸品揃いばかりです。きつとファンのアльバムを最高に充実させると信じます。大阪市阿倍野局私書箱14号天星社へ前金にてお申込み願います。

☆

| | | | | | | | | |
|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 蠟燭責後手縛り(富田由美子) | ネどうでもして(高村 浩子) | 全裸縛玄関晒し(三浦 純子) | 荒縄柔肌いじめ(前田真知子) | 超強烈エビ責め(三浦 純子) | 逆エビ凄絶苦悶(前田真知子) | 完全二つ折締め(三浦 純子) | トイレ排泄強要(三浦 純子) | 足挙げ羞恥責め(深田 菊子) |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 36 | 35 | 34 | 33 | 32 | 31 | 30 | 29 | 28 | 27 | 26 | 25 | 24 | 23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 |
| 海老開脚強制責(深田 菊子) | 淫虐蠟燭の挿入(福井 桃子) | 足挙げ責の羞恥(江口 淑子) | 雁字搦目の女体(江口 淑子) | 大の字片足挙げ(高村 浩子) | 開股強制棒責め(前田真知子) | マダム責の哀愁(江口 淑子) | 恍惚バイブ責め(江口 淑子) | 豊満な女体開陳(福井 桃子) | 店での全裸縛り(福井 桃子) | 両足吊りの苦悶(江口 淑子) | 正面股間縛晒し(高村 浩子) | 強烈麻縄の緊縛(前田真知子) | 本格的な麻縄責(前田真知子) | 鮮烈股間縛の縄(深田 菊子) | 柱縛り開股強要(福井 桃子) | 菱縄股間縛前面(深田 菊子) | ゴム人形の恐怖(江口 淑子) | 胡坐縛りの羞恥(江口 淑子) | 後手吊上げ猿轡(高村 浩子) | 強烈浣腸ポーズ(高村 浩子) | 両手挙前面晒し(福井 桃子) | 麗しのマドンナ(荒尾 慶子) | 正面の妊婦縛り(富田由美子) | 菱縄縛正面開放(江口 淑子) | 妊婦縛りの庄巻(富田由美子) | 羞恥の源を抉る(江口 淑子) |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 68 | 67 | 66 | 65 | 64 | 63 | 62 | 61 | 60 | 59 | 58 | 57 | 56 | 55 | 54 | 53 | 52 | 51 | 50 | 49 | 48 | 47 | 46 | 45 | 44 | 43 | 42 | 41 | 40 | 39 | 38 | 37 |
| 羞恥責を待つ女(深田 菊子) | 尻立蠟燭悦虐責(福井 桃子) | 引回される全裸(江口 淑子) | M女を責め尽す(前田真知子) | 片足挙げ開股縛(江口 淑子) | 菱縄悲し泣く(江口 淑子) | 菱縄縛し女泣く(江口 淑子) | 責めに呻くM女(高村 浩子) | 喰込む股間縄責(江口 淑子) | スナックで縛る(福井 桃子) | 黒髪前に垂れる(福井 桃子) | 股間に喰込む麻(深田 菊子) | 浴室での浣腸責(江口 淑子) | 人の字型羞恥縛(江口 淑子) | 剃毛責めの結果(荒尾 慶子) | 両手両足開責め(三浦 純子) | 美肌に映える縄(荒尾 慶子) | 料理される女体(高村 浩子) | 猿轡に呻く麻縄(高村 浩子) | エビ責めの序曲(江口 淑子) | 美しき緊縛女体(荒尾 慶子) | 苛酷の宴果てて(高村 浩子) | 菱縄股間縛猿轡(前田真知子) | 太鼓腹全裸正面(富田由美子) | 猿轡に悶える女(高村 浩子) | 高々と後手緊縛(福井 桃子) | 女体美を晒して(深田 菊子) | 後手錠吊上げ責(江口 淑子) | マダム全裸開陳(江口 淑子) | 美女の全裸縛り(荒尾 慶子) | 麻縄逆エビ惨酷(前田真知子) | 全裸立像後手縛(富田由美子) |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 100 | 99 | 98 | 97 | 96 | 95 | 94 | 93 | 92 | 91 | 90 | 89 | 88 | 87 | 86 | 85 | 84 | 83 | 82 | 81 | 80 | 79 | 78 | 77 | 76 | 75 | 74 | 73 | 72 | 71 | 70 | 69 |
| 椅子開股羞恥責(前田真知子) | 荒縄後手二つ折(前田真知子) | 正座する股間縛(荒尾 慶子) | 股間縛の引回し(江口 淑子) | 強烈麻菱縄掛け(前田真知子) | 引回される妊婦(富田由美子) | 開脚を強要せよ(富田由美子) | 妊婦大の字縛り(富田由美子) | 無惨白肌の縄痕(前田真知子) | がっちり後手縛(深田 菊子) | マダム開股の図(福井 桃子) | 淫虐に晒す女体(高村 浩子) | 柔肌に喰込む縄(荒尾 慶子) | 羞恥責臀部露出(三浦 純子) | 後手吊上げ責め(三浦 純子) | 猿轡咽喉輪縛り(三浦 純子) | 海老責の耐久度(荒尾 慶子) | 足挙げ強制開陳(高村 浩子) | 大の字縛り正面(高村 浩子) | 強烈海老責地獄(江口 淑子) | 後手胴締股間縛(深田 菊子) | 豆絞りの猿轡縛(深田 菊子) | 裏門を開放する(深田 菊子) | 全裸一直線開股(福井 桃子) | 白肌に喰込む縄(荒尾 慶子) | 両手両足吊り責(江口 淑子) | 嚴重菱縄緊縛責(江口 淑子) | 強制足挙臀部晒(高村 浩子) | 縄の山と浣腸器(福井 桃子) | 被縛者のマダム(江口 淑子) | 剃毛の女体展開(荒尾 慶子) | 凌辱に捧げる体(高村 浩子) |

〔女相撲と禪関連資料〕

御要望により再分譲開始します

裸女レスリング熱戦譜

大手札40枚一組 五〇〇〇円
山原・大塚 略号△れす▽

好取組女相撲三番勝負

大手札10枚一組 一五〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△うむ▽

迫力実戦好取組女相撲

大手札10枚一組 一五〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△うめ▽

取組む女相撲三人娘

大手札七枚一組 一〇〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△うゆ▽

マワシを締める三人娘

大手札五枚一組 八〇〇円
東浦・大塚・木村 略号△うや▽

二女真迫格闘場面

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚・玉田 略号△のか▽

女子全裸斗争場面

大手札三枚一組 五〇〇円
玉田・大塚 略号△のわ▽

裸女相搏つ取り組み

大手札八枚一組 一二〇〇円
大塚・啓子 略号△えく▽

禪裸女の寝業乱斗

大手札五枚一組 一〇〇〇円
木村・大塚 略号△めき▽

禪裸女の真剣な争斗

大手札五枚一組 一〇〇〇円
大塚・木村 略号△めん▽

女相撲連続写真(四つ相撲)

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・大塚 略号△めれ▽

女相撲連続写真(投げ業)

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・大塚 略号△めよ▽

女相撲連続写真(投げ合い)

大手札12枚一組 二四〇〇円
山原・大塚 略号△めわ▽

女斗美立業大立回り

大手札10枚一組 二〇〇〇円
大塚・山原 略号△めた▽

女斗美寝わざ妖艶攻合い

大手札10枚一組 二〇〇〇円
大塚・山原 略号△めな▽

女斗美妖蛇の固め業

大手札12枚一組 二四〇〇円
大塚・山原 略号△めそ▽

女と女の争い髪の掴み合い

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・大塚 略号△めか▽

女同士の争い押さえ込み

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・大塚 略号△めね▽

女子レスリング首絞め業

大手札12枚一組 二四〇〇円
山原・大塚 略号△めつ▽

女子レスリング押え込み

大手札12枚一組 二四〇〇円
大塚・山原 略号△めお▽

白晒六尺禪姿(背面)

大手札四枚一組 六〇〇円
遠藤百合子 略号△しろ▽

白晒六尺禪姿(正面)

大手札四枚一組 六〇〇円
遠藤百合子 略号△しは▽

六尺禪を着用し終るまで

大手札20枚一組 三〇〇〇円
山原・清子 略号△ひは▽

砂浜での真剣裸女格闘

大手札12枚一組 二四〇〇円
東浦・大塚 略号△すえ▽

草原で止どめをさす格闘

大手札12枚一組 二四〇〇円
東浦・大塚 略号△すう▽

松林の中での裸女死斗

大手札12枚一組 二四〇〇円
大塚・東浦 略号△すき▽

琵琶湖畔での女相撲

大手札20枚一組 四〇〇〇円
大塚・東浦 略号△すよ▽

女相撲真迫連続スナップ

大手札10枚一組 二〇〇〇円
大塚・東浦 略号△すな▽

室内女相撲熱戦模様

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦 略号△すも▽

相撲着用連続フォト

大手札11枚一組 二〇〇〇円
大塚・啓子 略号△すま▽

相撲禪を締ゆ込む

大手札四枚一組 六〇〇円
遠藤百合子 略号△すい▽

女相撲激しい投げ業

大手札八枚一組 一五〇〇円
大塚・木村 略号△すね▽

女相撲組打ちの美体

大手札八枚一組 一五〇〇円
木村・大塚 略号△すか▽

女斗立術の応酬

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・木村 略号△すち▽

寝業の女レスリング

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・木村 略号△すほ▽

女斗の連続場面展開

大手札九枚一組 一八〇〇円
木村・大塚 略号△すく▽

女斗立術の攻撃場面展開

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・木村 略号△すた▽

室内女相撲好取組み

大手札六枚一組 一二〇〇円
東浦・大塚 略号△すみ▽

湖畔女相撲連続スナップ

大手札10枚一組 二〇〇〇円
大塚・東浦 略号△すふ▽

女相撲四十八手の内六手

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・木村 略号△すは▽

女相撲四十八手の内六手

大手札六枚一組 一二〇〇円
木村・大塚 略号△すむ▽

湖畔女相撲迫力場面展開

大手札20枚一組 四〇〇〇円
大塚・東浦 略号△すや▽

湖畔女相撲熱戦場面点景

大手札20枚一組 四〇〇〇円
東浦・大塚 略号△すゆ▽

実戦女相撲業の応酬

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦 略号△すに▽

実戦ながら女相撲図絵

大手札六枚一組 一二〇〇円
東浦・大塚 略号△すぬ▽

雪崎京人指導女相撲実戦

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦 略号△すの▽

迫力抜群実戦女相撲

大手札六枚一組 一二〇〇円
東浦・大塚 略号△すつ▽

Mフォト決定版と画集

思わずMファンをワクワクさせる迫力溢れたマゾの素晴らしい写真と絵とを特集しました。お申込み次第即刻焼付けてお送りします。

二人の女の餌食になる男

大手札36枚一組 六〇〇〇円
山原清子外 略号△ほや▽

M男が屈伏するまで

大手札12枚一組 三〇〇〇円
山原清子外 略号△ふそ▽

女の臀の下に呻吟する男

大手札12枚一組 三〇〇〇円
山原清子外 略号△ふれ▽

二人の女になぶられる男

大手札12枚一組 三〇〇〇円
山原清子外 略号△ふた▽

二女の股責地獄に泣く男

大手札12枚一組 三〇〇〇円
山原清子外 略号△ふぬ▽

逆エビとムチ打ちで責める女

大手札12枚一組 三〇〇〇円
山原清子外 略号△ふち▽

鞭の強打で男を責める女

大手札10枚一組 二五〇〇円
山原清子外 略号△ふよ▽

口中の汚水処理器(唾吐き)

大手札9枚一組 二三〇〇円
山原清子外 略号△ふり▽

M男の顔を玩弄する美女

大手札8枚一組 二〇〇〇円
山原清子外 略号△ふわ▽

二人の女の馬になるM男

大手札7枚一組 一八〇〇円
山原清子外 略号△ふる▽

女の臀臭をかかされる男

大手札6枚一組 一六〇〇円
山原清子外 略号△ふお▽

男の口中に痰唾を吐く女

大手札6枚一組 一六〇〇円
山原清子外 略号△ふね▽

縛り人形を踏むサジスチン

大手札5枚一組 一四〇〇円
山原清子外 略号△ふつ▽

男の顔を踏みつけるS女

大手札3枚一組 一〇〇〇円
山原清子外 略号△ふあ▽

股責め地獄に狂う女

大手札4枚一組 八〇〇円
大塚啓子 略号△まそ▽

牛男をのりこなす女

大手札10枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号△はま▽

夫を責める新妻

大手札10枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号△はや▽

肩車の下にうごめく男

大手札5枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号△らと▽

奴隷の誓いを契る男の生態

大手札5枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号△らき▽

ハイヒールの足下に呻く男

大手札5枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号△らろ▽

女に縛られるM青年

大手札5枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号△らに▽

M青年をいたぶる女王様

大手札5枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号△らへ▽

女が女に責められるまで

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・鈴木 略号△さる▽

女が女を縛りあげる

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・鈴木 略号△さあ▽

女が屈伏させられるまで

大手札20枚一組 三〇〇〇円
鈴木・山原 略号△さや▽

啓子をいじめ抜く清子

大手札8枚一組 一八〇〇円
山原・大塚 略号△うの▽

啓子を厳しく縛る清子

大手札8枚一組 一八〇〇円
山原・大塚 略号△うな▽

清子を責める華麗なプレイ

大手札8枚一組 一八〇〇円
大塚・山原 略号△うね▽

二女の馬にされるM青年

大手札8枚一組 一八〇〇円
清子・啓子 略号△うま▽

二女のなぶりものになる男

大手札3枚一組 八〇〇円
清子・啓子 略号△うろ▽

女を縛り上げて責める女

大手札12枚一組 二〇〇〇円
大塚・東浦 略号△えの▽

強烈くすぐり責め

大手札4枚一組 六〇〇円
大塚・東浦 略号△えぬ▽

くすぐり責め地獄の女

大手札3枚一組 五〇〇円
大塚・東浦 略号△えな▽

手吊り股間縛り責め

大手札5枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△えお▽

豊臀の下に喘ぐ(マゾ画)

大中判五枚一組 一五〇〇円
春川ナミオ 略号△こね▽

女体下敷力作M画決定版

大中判七枚一組 二〇〇〇円
春川ナミオ 略号△ぬけ▽

女学生の浣腸悦虐姿態

大中判二枚一組 六〇〇円
四馬孝画 略号△せか2▽

女体浣腸美の媚態

大中判三枚一組 一〇〇〇円
四馬孝画 略号△のゆ▽

全裸妊婦の媚態画集

大中判三枚一組 九〇〇円
四馬孝画 略号△にん3▽

強制浣腸に泣く責め図絵

大中判五枚一組 一五〇〇円
四馬孝画 略号△しき▽

緊縛女体の浣腸責め図絵

大中判五枚一組 一五〇〇円
四馬孝画 略号△しえ▽

凄絶妊婦の切腹図絵

大中判四枚一組 一二〇〇円
四馬孝画 略号△せつ4▽

女体浣腸と排泄画集

大中判五枚一組 一五〇〇円
四馬孝画 略号△えい▽

女体吊り責め特集画録

大中判五枚一組 一五〇〇円
四馬孝画 略号△えほ▽

女性の鼻責めと美貌汚辱

大中判五枚一組 一五〇〇円
四馬孝画 略号△えは▽

女体浣腸嗜虐場面図絵

大中判八枚一組 二〇〇〇円
四馬孝画 略号△かき8▽

妊婦資料と妊婦責資料

妊婦のヌードと妊婦の責め写真

未婚の妊婦の両手吊り

大手札 四枚 一組 六〇〇円
中河 恵子 略号△わさ△

突き出た若妻妊孕美の腹部

大手札 四枚 一組 六〇〇円
中河 恵子 略号△わし△

麗わしの妊婦責めの魅力

大手札 四枚 一組 六〇〇円
中河 恵子 略号△おひ△

身籠った美しき裸身縛り

大手札 四枚 一組 六〇〇円
中河 恵子 略号△おも△

裸身縛り恵子の妊孕美

大手札 四枚 一組 六〇〇円
中河 恵子 略号△おす△

初妊娠の裸身を羞らう

大手札 四枚 一組 六〇〇円
中河 恵子 略号△おぬ△

妊婦全裸の羞恥フォト

大手札 三枚 一組 四〇〇円
安原さゆり 略号△やま△

妊婦全裸縛りフォト

大手札 三枚 一組 四〇〇円
安原さゆり 略号△やむ△

妊婦の九カ月腹フォト

大手札 三枚 一組 四〇〇円
安原さゆり 略号△にみ△

妊娠六カ月のヌード

大手札 三枚 一組 四〇〇円
安原さゆり 略号△にそ△

双胎妊婦腹全裸の鑑賞

大手札 二枚 一組 四〇〇円
増田みゆき 略号△にえ△

膨満双胎の腹部強調縛り

大手札 四枚 一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△にく△

妊婦の豊かな乳房と腹部

大手札 四枚 一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△にま△

羞らしいの妊婦媚態をさらす

大手札 四枚 一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△ほこ△

便々たる腹を突き出す妊婦

大手札 四枚 一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△ほろ△

双胎臨月腹の威容を誇る

大手札 四枚 一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りて△

見事に垂れた太鼓腹開陳

大手札 四枚 一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りな△

臨月の蛙腹のアップ写真

大手札 四枚 一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りに△

仰臥する臨月の蛙腹

大手札 四枚 一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りね△

双胎の臨月の剝玉子腹

大手札 四枚 一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りふ△

堂々と誇示する双生児腹

大手札 四枚 一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りま△

素晴しく巨大な臨月の蛙腹

大手札 四枚 一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りは△

豆絞り猿轡をされた妊婦

大手札 四枚 一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りの△

蛙腹に腹帯をする妊婦

大手札 四枚 一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りへ△

臨月妊婦を革具で責める

大手札 四枚 一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りむ△

全裸の見事な臨月腹を鑑賞

大手札 四枚 一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りす△

出産間際の垂れた太鼓腹

大手札 三枚 一組 五〇〇円
安原さゆり 略号△りみ△

臨月妊婦腹のヌードフォト

大手札 二枚 一組 三〇〇円
安原さゆり 略号△りく△

臨月腹の背面ヌードフォト

大手札 二枚 一組 三〇〇円
安原さゆり 略号△りも△

膨隆七カ月妊娠腹を見る

大手札 五枚 一組 七〇〇円
増田みゆき 略号△にひ△

妊娠七カ月の妊娠線

大手札 五枚 一組 七〇〇円
増田みゆき 略号△にほ△

七カ月の妊娠腹大写真

大手札 四枚 一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△にも△

孕んだ若妻裸身に羞らう

カラー 四枚 一組 二〇〇円
中河 恵子 略号△ぬね△

孕んだ美女の妊婦腹観賞

カラー 四枚 一組 二〇〇円
中河 恵子 略号△ぬめ△

羞恥を晒す女体棒縛り

カラー 三枚 一組 一〇〇円
前田真知子 略号△すそ△

柔軟肢体二つ折り緊縛

大手札 三枚 一組 五〇〇円
美木乃々子 略号△ぬに△

全裸正面の縄掛け艶姿

大手札 三枚 一組 五〇〇円
小池 美喜 略号△れろ△

柔肌の高手小手縛り

大手札 三枚 一組 五〇〇円
小池 美喜 略号△れほ△

後手首を縛られた全裸体

大手札 三枚 一組 五〇〇円
小池 美喜 略号△れへ△

飼育された可憐な美少女

大手札 三枚 一組 五〇〇円
小池 美喜 略号△れと△

猿ぐつわ着用全裸縛り

大手札 五枚 一組 七〇〇円
美木乃々子 略号△ぬへ△

真紅の腰巻着用縛り

大手札 三枚 一組 五〇〇円
美木乃々子 略号△ぬち△

可憐な表情の全裸縛り

大手札 四枚 一組 六〇〇円
金原奈加子 略号△ゆめ△

股間縛りの柔肌いじめ

大手札 四枚 一組 六〇〇円
金原奈加子 略号△ゆも△

雁字搦目の後手縛り

大手札 四枚 一組 六〇〇円
金原奈加子 略号△ゆあ△

浴室での全裸刺青さらし

大手札 五枚 一組 七〇〇円
山原 清子 略号△よな△

全裸の高手小手童女縛り

大手札 三枚 一組 五〇〇円
長井葉津子 略号△よの△

二人のマダムのハイライト

△印画紙直接焼付極鮮明写真▽

開股縛りの強烈な肢体

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△ちお▽

逆エビ責めに喘ぐマダム

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△ちと▽

一直線の開脚羞恥縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△ちう▽

菱縄縛りの種々相

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△ちま▽

縛って抜きとられるズロース

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△ちむ▽

遅ましき臀部強調縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△ちも▽

後手縛りの全裸を見せる

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△ちめ▽

赤裸な剣貝の羞恥責め

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△ちろ▽

悦虐涕泣のMポーズ

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△ちえ▽

柔肌に喰い込む縄目

大手札三枚一組 五〇〇円
福井 桃子 略号△ちほ▽

高手小手縛り女の哀感

大手札三枚一組 五〇〇円
江口 淑子 略号△ちよ▽

苦悶するエビ縛りの神秘

大手札三枚一組 五〇〇円
江口 淑子 略号△ちん▽

翻弄されるマダムの法悦境

大手札三枚一組 五〇〇円
江口 淑子 略号△ちひ▽

愁いある目と猿ぐつわ

大手札三枚一組 五〇〇円
江口 淑子 略号△ちゆ▽

悦虐天国への階段

大手札三枚一組 五〇〇円
江口 淑子 略号△ちそ▽

いたぶられて燃える媚態

大手札三枚一組 五〇〇円
江口 淑子 略号△ちわ▽

紅閨へのいざないに濡れる

大手札三枚一組 五〇〇円
江口 淑子 略号△ちは▽

後手高手小手縛り三態

大手札三枚一組 五〇〇円
江口 淑子 略号△ちい▽

開股縛りの醍醐味披露

大手札三枚一組 五〇〇円
江口 淑子 略号△ちし▽

強烈股間縛りの点描

大手札三枚一組 五〇〇円
江口 淑子 略号△ちへ▽

強烈足吊り縛りの苦痛

大手札三枚一組 五〇〇円
江口 淑子 略号△ちせ▽

T字型生理帯着用フォト

大手札三枚一組 二〇〇円
深田 菊子 略号△ちあ▽

前開型バンド着用フォト

大手札三枚一組 二〇〇円
深田 菊子 略号△ちか▽

最新版分譲フォト

うら若き美女を緊縛する

△印画紙直接焼付極鮮明写真▽

逆エビ縛り吊り上げ

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号△ろて▽

縄付きで愛してネ

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号△ろせ▽

棒責め開股縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号△ろひ▽

可愛い牝犬の珍芸披露

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号△ろり▽

開股責めの種々相

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号△ろみ▽

柔肌に喰い込む麻縄

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号△ろし▽

海老責めで虐める女

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号△ろめ▽

責め抜かれた結末

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号△ろに▽

股間縛りにあえぐ女

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号△ろち▽

高手小手縛り首縄悦楽

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号△ろと▽

脚吊り柱強烈縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号△ろも▽

白ロープの亀甲縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号△ろへ▽

逆エビ縛りで晒す美形

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号△ろす▽

開股開陳羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号△ろは▽

白縄の強烈縛り地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号△ろそ▽

牢舎へ引き回す囚女

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号△ろい▽

菱縄縛りで責める

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号△ろふ▽

M女荒尾慶子のすべて

大手札三枚一組 四〇〇円
荒尾 慶子 略号△ろふに▽

浣腸溶液受入態勢充分

大手札三枚一組 四〇〇円
荒尾 慶子 略号△ろふし▽

剃毛の美女を縛る

大手札三枚一組 四〇〇円
荒尾 慶子 略号△ろふん▽

私をよく観賞してね

大手札三枚一組 四〇〇円
荒尾 慶子 略号△ろふな▽

ベッド上での狂態を縛る

大手札三枚一組 四〇〇円
荒尾 慶子 略号△ろふは▽

強烈菱縄股間縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
荒尾 慶子 略号△ろふい▽

血紅女体切腹絶命ポーズ

大手札四枚一組 略号△せん 六〇〇円
梨花悠紀子

女体切腹シリーズ

大手札12枚一組 略号△せい12 一八〇円
大塚 啓子

血紅切腹祭壇に果てる女体

大手札三枚一組 略号△せぬ 五〇〇円
大塚 啓子

首桶に落ちる女の首

大手札三枚一組 略号△せへ 五〇〇円
水野加代子

愛妻の切腹を介添えする

大手札三枚一組 略号△せほ 五〇〇円
水野加代子

切腹する女体を介錯する

大手札三枚一組 略号△せは 五〇〇円
水野加代子

血紅使用介添え切腹

大手札五枚一組 略号△きつ 八〇〇円
大塚・東浦

介添え切腹の女

大手札四枚一組 略号△あか 六〇〇円
甘木 春子

自刃した血まみれ屍体

大手札10枚一組 略号△えし 一五〇円
山原 清子

自らの腹を切り裂く女

大手札三枚一組 略号△やい 五〇〇円
大塚 啓子

自ら柔肌を切り裂く場面

大手札三枚一組 略号△やえ 五〇〇円
大塚 啓子

自らの下腹に突き刺す刃

大手札三枚一組 略号△やお 五〇〇円
大塚 啓子

血紅女体切腹苦悶悦楽表情

大手札五枚一組 略号△くえ 七〇〇円
大塚 啓子

哀婉美女の血紅切腹

大手札五枚一組 略号△るな 七〇〇円
大塚 啓子

絞首刑に果てる女体

大手札二枚一組 略号△るく 四〇〇円
新宮夫人

引回しと晒の処刑

大手札二枚一組 略号△るに 四〇〇円
新宮夫人

血紅使用血まみれ切腹

大手札五枚一組 略号△わい 七〇〇円
大塚 啓子

殿中の自決女体切腹

大手札三枚一組 略号△わこ 五〇〇円
大塚 啓子

切腹美態から絶命ポーズへ

大手札五枚一組 略号△わは 七〇〇円
大塚 啓子

女体自刃の美態

大手札三枚一組 略号△ねに 五〇〇円
細川アヤ子

女体切腹媚態

大手札二枚一組 略号△ねは 四〇〇円
細川アヤ子

肉体美少女全裸切腹

大手札五枚一組 略号△なせ 七〇〇円
長野 良子

禪裸女血斗凄惨場面

大手札五枚一組 略号△らは 七〇〇円
絹川・大塚

和洋争斗場面展開

大手札六枚一組 略号△らり 八〇〇円
田中・愛川

血紅使用斬られる美女

大手札七枚一組 略号△らふ 一〇〇〇円
絹川 文代

鎌腹を切られる女

大手札二枚一組 略号△らく 四〇〇円
愛川・田中

咽喉笛を刺される女

大手札二枚一組 略号△らみ 四〇〇円
愛川・田中

斬首の瞬間

大手札三枚一組 略号△のき 五〇〇円
新宮夫人

晒台の女の生首

大手札三枚一組 略号△のく 五〇〇円
新宮夫人

全裸正面切腹姿態

大手札三枚一組 略号△のみ 五〇〇円
大塚 啓子

切腹に悶える悦虐裸身

大手札三枚一組 略号△のそ 五〇〇円
大塚 啓子

切腹した裸女の屍体

大手札12枚一組 略号△のい 二〇〇円
大塚 啓子

美しき裸女の屍体

大手札12枚一組 略号△のり 二〇〇円
大塚 啓子

屠腹される女体

大手札12枚一組 略号△のる 二〇〇円
大塚 啓子

立腹切腹に悶える女体

大手札10枚一組 略号△のさ 一八〇円
大塚 啓子

切腹に苦悶する裸女

大手札10枚一組 略号△のむ 一八〇円
大塚 啓子

絞首された女体

大手札六枚一組 略号△のひ 一二〇〇円
大塚 啓子

斬首処刑場面

大手札二枚一組 略号△くし 四〇〇円
新宮夫人

絞首刑にされる女

大手札三枚一組 略号△こけ 五〇〇円
新宮夫人

血まみれ血斗場面

大手札12枚一組 略号△えみ 二〇〇円
山原清子外

ゴムフエチの美体

大手札四枚一組 略号△こま 六〇〇円
梨花悠紀子

ゴム包みの束縛女体

大手札四枚一組 略号△こは 六〇〇円
東浦ひかる

メンスバンド只今着用

大手札三枚一組 略号△もか 五〇〇円
東浦ひかる

白禪刺青女体脇差切腹

大手札10枚一組 略号△ひに 一八〇円
山原 清子

白禪刺青女体短刀切腹

大手札10枚一組 略号△ひぬ 一八〇円
山原 清子

ゴム衣着用緊縛

大手札三枚一組 略号△みす 五〇〇円
水本 茂美

メンスバンドを脱ぐ女

大手札三枚一組 略号△ゆお 五〇〇円
遠藤百合子

月経帯を着けた緊縛

大手札三枚一組 略号△ゆす 五〇〇円
遠藤百合子

両足首括り逆さ吊り

大手札五枚一組 略号八〇〇円

手足逆さ宙吊り

梨花悠紀子 略号八〇〇円

逆さ吊りの女体を析檻

梨花悠紀子 略号八〇〇円

メンスバンド着用替ゴム見せ

梨花悠紀子 略号八〇〇円

股に喰い込む黒フンドシ

東浦ひかる 略号八〇〇円

股を開いた黒フンドシ姿

東浦ひかる 略号八〇〇円

開股逆さ吊り姿態

東浦ひかる 略号八〇〇円

強烈責め被虐の果て

梨花悠紀子 略号八〇〇円

踊り子の美しき緊縛

梨花悠紀子 略号八〇〇円

股間縛りの法悦境

梨花悠紀子 略号八〇〇円

相撲着用艶姿

梨花悠紀子 略号八〇〇円

美木乃々子

梨花悠紀子 略号八〇〇円

六尺裄着用の艶姿

大手札七枚一組 略号一〇〇〇円

パリスマスバンド着用

東浦ひかる 略号八〇〇円

サカエメンスバンド着用

東浦ひかる 略号八〇〇円

サカエ軽便型バンド着用

東浦ひかる 略号八〇〇円

パリスマスバンド前開き

東浦ひかる 略号八〇〇円

携帯用白色メンスバンド着用

東浦ひかる 略号八〇〇円

パリスマスバンド着用縛り

東浦ひかる 略号八〇〇円

パビアメンスバンド着用

東浦ひかる 略号八〇〇円

相撲着用締めた女

東浦ひかる 略号八〇〇円

メンスバンド着用開股ポーズ

東浦ひかる 略号八〇〇円

黒ゴム衣後手縛り

東浦ひかる 略号八〇〇円

ゴム衣緊縛悶悦姿態

東浦ひかる 略号八〇〇円

ゴム衣とゴムの猿ぐつわ

大手札三枚一組 略号五〇〇円

甘美なる椅子プレイ

中河 恵子 略号六〇〇円

開股拷問椅子の正面責め

中河 恵子 略号六〇〇円

オムツ着用の股間縛り

東浦ひかる 略号六〇〇円

オムツ着用フェチフォト

東浦ひかる 略号六〇〇円

オシメをつける二人プレイ

東浦ひかる 略号六〇〇円

ゴムのオムツカバー強制着用

東浦ひかる 略号六〇〇円

生ゴムの猿ぐつわ責め

東浦ひかる 略号六〇〇円

オシメ着用と女学生

東浦ひかる 略号六〇〇円

六尺フンドシの女性像

東浦ひかる 略号六〇〇円

黒フンドシを着用した女

東浦ひかる 略号六〇〇円

黒フンドシの女(背面)

東浦ひかる 略号六〇〇円

黒フンドシの女(正面)

遠藤百合子 略号八〇〇円

黒フンドシを誇る姿

遠藤百合子 略号八〇〇円

黒フンドシ背面刺青模様

遠藤百合子 略号八〇〇円

黒フンドシ入墨姿

遠藤百合子 略号八〇〇円

黒ふんどし媚態の魅力

遠藤百合子 略号八〇〇円

白晒六尺フンドシの姿態

遠藤百合子 略号八〇〇円

黒六尺フンドシを締めた女

遠藤百合子 略号八〇〇円

フンドシ姿の羞らい

遠藤百合子 略号八〇〇円

フンドシ姿の女の魅力

遠藤百合子 略号八〇〇円

六尺裄の羞じらい

遠藤百合子 略号八〇〇円

双臀に喰い込む裄

遠藤百合子 略号八〇〇円

裄美に羞じらう女

遠藤百合子 略号八〇〇円

最近撮影の新人新趣向緊縛責め写真集

SM組百態

大手札印画紙

(9×13 糎)

極鮮明焼付写真

各組 一組一枚 (送料共)

五組五枚

八〇〇〇円

十組十枚

一五〇〇〇円

二十組二十枚

二八〇〇〇円

五十組五十枚

五〇〇〇〇円

百組全部百枚

八〇〇〇〇円

(郵便番号 545-91) 天星社
大阪市阿倍野局 私書箱14号

奇クの誌上を賑わしている新しいマゾ女性の方が、清纯に或は妖艶に、それぞれその個性にマッチした縛られ方責められ方をされて甘い吐息を洩しています。マニアの方の蒐集帖の一頁に更に新鮮な資料を加えて頂きたく、ここにSMの香ぐわしい魅力に溢れるニューフォトを提供いたします。

☆

1 片足吊りに喘ぐ(玉木 章子)
2 柱に晒す全裸女(玉木 章子)
3 猿轡に呻く縛女(玉木 章子)
4 開股縛りの片足(玉木 章子)
5 菱縄縛りに泣く(玉木 章子)
6 右足挙げ柱縛り(玉木 章子)
7 日陰の女の羞恥(玉木 章子)
8 開股責めの正面(玉木 章子)
9 ハの字開脚責め(玉木 章子)

10 乳房縛り真正面(玉木 章子)
11 開股縛りの強要(玉木 章子)
12 正座正面晒縛り(玉木 章子)
13 バイブ責め姿態(玉木 章子)
14 絶叫！開脚責め(玉木 章子)
15 手吊り足吊り責(玉木 章子)
16 臀部からの苛虐(玉木 章子)
17 正面で足を開く(玉木 章子)
18 卓上の開股痴態(玉木 章子)
19 縄は女を泣かす(玉木 章子)
20 強烈縛りに開脚(玉木 章子)
21 強烈海老責縛り(江口 淑子)
22 鞭打ちにもがく(江口 淑子)
23 強制する開股責(江口 淑子)
24 辱恥をさらける(江口 淑子)
25 奴隷の誓を開陳(江口 淑子)
26 排泄姿態の強制(江口 淑子)
27 耐久力ガシ責め(江口 淑子)
28 排便姿態で縛る(江口 淑子)
29 欄間に晒す開股(江口 淑子)
30 答で強要の汚辱(江口 淑子)
31 縄の痛さに泣く(鈴木千鶴子)
32 浣腸にのけぞる(鈴木千鶴子)
33 凄絶海老なぶり(鈴木千鶴子)
34 大の字開脚晒し(鈴木千鶴子)
35 棒責め裸女失神(鈴木千鶴子)
36 両足首開脚吊り(鈴木千鶴子)

37 全裸手吊り正面(鈴木千鶴子)
38 エビ責にあえぐ(鈴木千鶴子)
39 艶美椅子に悶ゆ(鈴木千鶴子)
40 全裸緊縛浣腸責(鈴木千鶴子)
41 足の裏の温い女(深田 菊子)
42 亀甲縛乳房責め(深田 菊子)
43 足を吊るのは嫌(深田 菊子)
44 強制開股椅子責(深田 菊子)
45 交叉した手首結(深田 菊子)
46 伸びやかな肢体(深田 菊子)
47 のけぞる両の足(深田 菊子)
48 開股で見ないで(深田 菊子)
49 縄猿轡海老責め(三浦 純子)
50 令夫人緊縛横顔(三浦 純子)
51 引回された裸女(福井 桃子)
52 色気発散の脚線(福井 桃子)
53 さあどうするの(福井 桃子)
54 寝乱れたマダム(福井 桃子)
55 臀部晒し柱縛り(福井 桃子)
56 高手小手臀部晒(福井 桃子)
57 長髪的美女緊縛(福井 桃子)
58 縛られてお喋り(福井 桃子)
59 縄が痛いんだよ(福井 桃子)
60 高々と上る手首(福井 桃子)
61 ポリウムを括る(笠井奈保子)
62 逞ましき臀部責(笠井奈保子)
63 太股に喰込む縄(笠井奈保子)
64 飛出す乳房責め(笠井奈保子)
65 柔肌に喰込む縄(笠井奈保子)
66 豊満臀部鞭打ち(笠井奈保子)
67 首縄高手小手縛(笠井奈保子)
68 縄の束に埋れる(笠井奈保子)

69 開股強制を拒む(笠井奈保子)
70 喰い込む股間責(笠井奈保子)
71 美少女逆エビ責(前田真知子)
72 足吊りくの字指(前田真知子)
73 股間縛りで開脚(前田真知子)
74 交差した後手首(前田真知子)
75 強烈股間縄涕泣(三浦 純子)
76 バイブ責で悶絶(松本 たえ)
77 高々と後手縛り(松本 たえ)
78 強烈海老開股責(松本 たえ)
79 柱縛り正面晒し(松本 たえ)
80 後手両手逆吊り(松本 たえ)
81 責められた乱髪(大塚 啓子)
82 後手縛り足吊り(大塚 啓子)
83 全裸柱抱き縛り(大塚 啓子)
84 太ロープ首縄責(大塚 啓子)
85 麻縄亀甲絞縛り(荒尾 慶子)
86 喰込む縄股間縛(荒尾 慶子)
87 首縄縦縛り正面(荒尾 慶子)
88 強烈緊縛で絶頂(荒尾 慶子)
89 美体乳房強調縛(荒尾 慶子)
90 股間縛りの麗姿(荒尾 慶子)
91 海老責浣腸地獄(長井葉津子)
92 後手吊りの全裸晒(長井葉津子)
93 迫るイルリ嘴管(長井葉津子)
94 素人娘緊縛全裸(長井葉津子)
95 浣腸責めの恐怖(長井葉津子)
96 半減した浣腸液(長井葉津子)
97 稚き臀部を開く(長井葉津子)
98 麻縄縛りの正面(長井葉津子)
99 注ぎ込まれる液(長井葉津子)
100 洋裁生のM姿態(長井葉津子)

〔秘蔵版写真一掃分譲品〕

昭和四十年頃より四十二年頃にかけて天星社に於て分譲して、おりましたSM資料写真は、その後に譲り止になつておりました。最近になって再開を強く要望され、増をいたします。御注文の方に、五日間の予定で、作成の上、早速御送付申し上げます。

△Mフォト▽

馬乗り女王様行状記

大手札四枚一組 略号△〇〇〇円
花田沙登子

両足の首絞め責め

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
花田沙登子

肩車の臀部に喘ぐ

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
花田沙登子

女王様の臀臭をかかす

大手札二枚一組 略号△六〇〇円
花田沙登子

足舐めの強制

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
花田沙登子

女王様の牡犬調教

大手札八枚一組 略号△一五〇〇円
花田沙登子

△入墨女賊拷問刑罰集▽

女賊仰向け木馬責め 略号△五〇〇円
山原 清子

全裸の入墨女賊折檻

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
山原 清子

入墨女答打ち白洲糾問

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
山原 清子

ハリツケ女賊拷問

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
山原 清子

凄絶エビ責め拷問

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
山原 清子

全裸の四つ遣い木馬責

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
山原 清子

逆さ吊りのお仕置

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
山原 清子

大の字磔女賊処刑

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
山原 清子

△日本女性拷問刑罰集▽

三角木馬責め 略号△五〇〇円
美木乃々子

石抱き算盤責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
美木乃々子

凄惨女囚海老責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
美木乃々子

女囚竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
美木乃々子

白洲答打ち折檻

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
美木乃々子

非情の囚女開股責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
美木乃々子

美木乃々子 略号△もぬ▽

土壇で胴斬りの仕置 略号△五〇〇円
美木乃々子

白洲調べに悶える囚女

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
美木乃々子

△M写真M場面決定版▽

裸女二人の尻の下にうごめく 略号△三〇〇〇円
大塚・山原

二女にいじめられるM男

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円
山原・大塚

美女二人から縛られる男

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円
大塚・山原

男馬を乗り潰す裸女二人

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円
山原・大塚

痛烈、ムチ打ちのこ馳走

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円
大塚・山原

首絞めでM男に止どめを刺す

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円
山原・大塚

汚臭と足舐めの強要

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円
大塚・山原

二女の臀臭にむせび泣く男

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円
山原・大塚

パンプスの下に喘ぐM男

大手札十枚一組 略号△二〇〇〇円
大塚 啓子

豊満な太股で首を股責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
長野 良子

大手札十枚一組 略号△二〇〇〇円

大塚 啓子

男奴隷緊縛虐待への過程

大手札十枚一組 略号△二〇〇〇円
大塚 啓子

顔面騎乗の女王様

大手札五枚一組 略号△一〇〇〇円
大塚 啓子

△女体切腹フォト▽

腸露出無念腹切腹 略号△一五〇〇円
大塚 啓子

全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 略号△七〇〇円
大塚 啓子

全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 略号△七〇〇円
大塚 啓子

マニヤの切腹

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
甘木 春子

血紅切腹決定版

大手札十枚一組 略号△一五〇〇円
大塚 啓子

血紅切腹凄惨姿態

大手札十枚一組 略号△一五〇〇円
大塚 啓子

血紅切腹連続写真

大手札十二枚一組 略号△二〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
絹川 文代

豊満腹を切り裂く女

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
長野 良子

明瞭な臨月腹の妊娠線

大手札四枚一組 略号△りき 六〇〇円

双胎の臨月腹を鑑賞する

大手札四枚一組 略号△りけ 六〇〇円

妊婦の乳房を縛り弄ぶ

大手札四枚一組 略号△りさ 六〇〇円

妊婦後手縛り引き回し

大手札四枚一組 略号△りし 六〇〇円

亀甲縛りの臨月妊孕美

大手札四枚一組 略号△りた 六〇〇円

乳房緊縛の双胎臨月腹

大手札四枚一組 略号△りち 六〇〇円

臨月双胎蛙腹の股間縛り

大手札四枚一組 略号△りぬ 六〇〇円

浣腸される妊産婦

大手札三枚一組 略号△りひ 五〇〇円

臨月妊婦の全身像

大手札二枚一組 略号△りせ 四〇〇円

臨月妊婦腹の側面

大手札三枚一組 略号△りそ 五〇〇円

妊婦臨月腹のアップ

大手札二枚一組 略号△りと 四〇〇円

恵子の妊孕美緊縛

大手札四枚一組 略号△おに 六〇〇円

膨満の妊娠腹の緊縛

大手札四枚一組 略号△おみ 六〇〇円

妊婦開股縛り哀歎

大手札四枚一組 略号△わう 六〇〇円

八力月の妊婦開股責め

大手札四枚一組 略号△わの 六〇〇円

妊婦腹誇張の開股縛り

大手札四枚一組 略号△わえ 六〇〇円

妊孕美人の媚態立像

大手札四枚一組 略号△わお 六〇〇円

妊孕美人の媚態坐像

大手札四枚一組 略号△わき 六〇〇円

両手吊り片足挙げの妊婦

大手札四枚一組 略号△わく 六〇〇円

両手吊り妊婦の正面

大手札四枚一組 略号△わす 六〇〇円

縛られた妊婦の艶姿

大手札四枚一組 略号△わせ 六〇〇円

両手一本吊りの妊婦

大手札四枚一組 略号△わち 六〇〇円

臨月の妊婦三態

大手札三枚一組 略号△よむ 五〇〇円

動物的な臨月妊婦の腹

大手札三枚一組 略号△よみ 五〇〇円

産み月の膨大な腹

大手札三枚一組 略号△よま 五〇〇円

麻縄でくびった妊婦腹

大手札四枚一組 略号△よは 六〇〇円

ころがされた緊縛の妊婦

大手札四枚一組 略号△よほ 六〇〇円

臨月妊婦の革紐縛り

大手札四枚一組 略号△よに 六〇〇円

見事に美しい臨月腹妊婦

大手札四枚一組 略号△よち 六〇〇円

臨月の妊婦麻縄縛り

大手札四枚一組 略号△よら 六〇〇円

臨月の妊婦全裸鑑賞

大手札四枚一組 略号△よへ 六〇〇円

九力月妊婦全裸正面立像

大手札三枚一組 略号△のま 五〇〇円

羞らう妊婦の裸身前向立像

大手札三枚一組 略号△のめ 五〇〇円

九力月の妊婦腹を晒す

大手札三枚一組 略号△のや 五〇〇円

九力月の妊娠腹を縛る

大手札三枚一組 略号△のこ 五〇〇円

便々たる太鼓腹に縄掛け

大手札三枚一組 略号△のし 五〇〇円

膨満腹も露わな両手挙げ縛り

大手札三枚一組 略号△のろ 五〇〇円

竹棒責めに喘ぐ九力月妊婦

大手札三枚一組 略号△のは 五〇〇円

十文字縛りの妊婦腹

大手札三枚一組 略号△のに 五〇〇円

柱縛りに苦しむ九力月の妊婦

大手札三枚一組 略号△のほ 五〇〇円

開股責めと椅子縛りの妊婦

大手札三枚一組 略号△のへ 五〇〇円

脈打つ全裸の臨月腹

大手札三枚一組 略号△こふ 五〇〇円

猿轡にうめく臨月妊婦腹

大手札三枚一組 略号△この 五〇〇円

革紐による臨月腹股間縛り

大手札三枚一組 略号△こや 五〇〇円

逆さ吊りの臨月妊婦

大手札三枚一組 略号△さめ 五〇〇円

両手吊りの臨月妊婦

大手札三枚一組 略号△さる 五〇〇円

強烈縛り妊婦責め

金原奈加子 略号△さる 五〇〇円

妊婦全裸縛りの全身

金原奈加子 略号△さに 五〇〇円



柏木真佐男画

伊田恭子様、貴女はまだ半分の楽しみしか味わってないようですね。でも貴女の便りを拝見し本当の緊縛に耐えうる貴重な女性を発見したと思います。最近では自縛を表現している方も多いようですが、やはり他人の手による緊縛のスリルに勝るものはないと思います。たしかに自縛は何処でも自分の好みの型に、強さも思いのままでしょうが、被縛の醍醐味は人の手により一切の自由を奪われていくことにあると考えます。自縛はどんなにきびしくとも、まだどこか自分で解きうると云う最後の安心感があるのと違いますか。それを全く剥奪された時の恐怖と絶望の緊縛を味わってみて下さい。それこ

そSMの真髓かと思えます。荒縄、細引、鎖皮紐、ベルト、ゴム、等々。やや肥り気味と云われる貴女。さぞかし素敵な抱い込みをみせてくれるでしょう。足首に手錠ははまるかな？ 細身の女性ならなんなくですが無理にでもはめましよう。太股、ひざの上下、キツチリキツチリしめ上げます。貴女のチャームポイントの一つ、可愛いひざ小僧も針金で真二つ。坐らされて緊張した肌にこれは強烈ですよ。いかがですか。こうして書いていくうち、この私もだんだん熱くなってきました。私は貴女より十才の年長。でもSMの熱気だけは貴女にまけません。その気のない女性は、ちょっとした縄でも悲鳴を上げ味気のないもの。貴女でしたら縄目に棒を入れこじり上げて耐える女性と思います。貴女の意志に全然関係なく、一つ一つ強奪されていく貴女の自由。さまざまの思いを歯と歯をわっがかまされた猿ぐつわと一緒にかみしめているだけの貴女。きびしくしめ上げられて赤く青く紫に変化

していく肌の色……。そんな貴女の姿を私のカンバスに残したいと切に願って居ります。

(静岡・志羽利也)

私はサドマゾ、そして奇ク愛好者の一人です。でも残念ながらSMプレイの経験はまだ皆無で、いつも一人空想の中でSMプレイの世界に酔いしれています。奇クはその私の空想に大きな幅を加えてくれています。しかし空想は空想でしかなく、私の内にあるSMに対する欲望は日々大きくなるばかりです。毎号健筆をふるっておられる風流極道軒氏の「紫蘭の門」今月で20回を越しています。私はいつも、この小説の中に出てくるような責め場面をしたいものだと考えています。題字の下毎月変わった諺？ を書いていられますが、この文章を自分の心境にたらし合わせて興味をもって読んでいます。四月号の前田真知子さんの告白「二の腕の縄痕に想う」は文章もフォトもよかったです。一九二頁の上の写真は非のうちどころのない素晴らしい作品でした。こんな美女を一生のうちで一度でいいから思いのままに責めてみたいというのが私の願いです。五月

号の福井桃子さんの長髪の縛りフォトは、大変美人に写っていますね。(本当に美人なのでしょう、失礼)二一四頁の太股までたれた黒髪の間からのぞいた顔は、ふるいつきたい位です。脂ぎっていて私は貴女を縛りたいです。

(栃木県・君原タケシ)

突然お便りを差し上げごめん下さい。はからずも貴誌を手にする機会があつて、お便りを書く気になりました。私は普通の女の子と少し変わっているところがある様な気がします。でも、それは私の考えすぎで本当は変わっていないのかもしれない。それは他の人に聞いたことがありませんので私にもわかりません。貴誌におききしたらと思つて、下手な字ですがお便りしました。私は今年二十二年才の会社員ですが、十六、七の頃から妙なくせがありました。それは自分の手や足や、膝とかおへそとかを見るのが好きなことです。そのうち、学校を出て、お化粧をするようになってからは、自分で直接見えないところも鏡にうつして見るのが好きになりました。鏡にうつしてみますと、なんだか自分の身体の一部を見ているような

気がせず、まるで他のものを見て
いるような気がして、そして美し
いなあと思うのです。自分で自分
の身体を愛するなんて、ほんとう
に変でしょ。二十才頃までは、そ
んな傾向が強かったのです。それ
がここ一年半ばかり前からは、自
分が美しいと思うそんな部分を、
どなたか力強い異性の目によって
めでてほしいという気持ちに変わっ
てまいりました。といっても貴誌
にのっけていますように縛ってほし
いというような気は今のところあ
りません。只、見てほしいという
事だけの気持ちです。でも、その方
が縛ったり軽い責めをしたとい
われるのでしたら、されてみたい
好奇心もあります。こんな私って
普通の人と変わっているでしょう
か。身長は一五八センチで体重五
二キロですから、少し肥っている

〓御送金についてのお願〓
現金を普通郵便物に封入する
ことは、郵便法によって禁止さ
れています。現金での御送金の
場合には必ず「現金書留」でお
願ひ致します。他に、振替、定
額小為替、普通小為替等の方法
もありますのでご利用下さい。
便宜上「切手代用」にても結構
ですが、その場合は必ず「割増
にてお願い致します」。

ように見えます。お勤めは平凡で
真面目で通っている私ですが、こ
んな気持ちを持っているなんて、誰
も知っていません。同じ気持ちの人
とお友達になれたら幸せです。

(名古屋・武井綾子)

〇

送ってもらいました奇ク五月号
を読みました。私の写真、口絵に
も出ていず淋しく思いました。で
も本文や奇クサロンなど、たんの
うするほどのSM記事でうれしか
ったです。読者通信で福井市の鶴
見広次さんのお呼びかけ有難うご
ざいます。私も数年にわたる飼育
で少しは馴れています。それで
も塚本様からの縛りと責めは少々
最初にしては、きつく、大分こた
えました。縄目も痛くて三日ほど
痕が残っていました。私が鶴見様
の責めに耐えられるかどうか不安で
す。お逢いしてお話するくらいで
したら、私は暇をもて余しており
ますから、いつでも結構です。い
ろんなことを話し合えたら楽しい
と思います。強烈な開股縛りに耐
えたと書いておられました。あ
れは塚本様が無理にされたので、
平常のプレイでは、あんなにまで
はしていません。うれしいか、
うれしくないかは、ごらん下さっ

たら、おわかりと思います。

(箕面市・玉木章子)

〇

4月号の奇クサロンで真鍋五十
三氏が書かれた「鼻責めモデル撮
影会の提唱」は大賛成だ。こうし
た会合が持たれるようだったら、
私は何ものをおいても是非参加し
たい。載っていた三枚のフォトも
素晴しかった。かつて四馬孝氏が
よく鼻責めの画を描いていたが女
性の鼻に生きている私にとって、
鼻の記事や資料は見逃がす事は出
来ない。真鍋さま、どうか鼻マニ
アのために音頭をとって下さるよ
う、頼む。(滋賀県・田中周治)

〇

小生提案の鼻マニアの会結成に
早速、久保房夫氏より賛意を寄せ
られ、なお、会則(案)までも考
えて下さり感謝しています。おお
むね賛成です。ただ会の名前は、
ちょっとコリ過ぎの感じがします。
私は、「NCL」ではどうかと思
います。Nはノーズ(鼻)Cはク
レージー(狂おしいほど)Lはラ
イク又はラブ(好きだ、愛してい
る)の意味です。その方がスッキ
リしていいと思います。奇クを読
んでいて女性の鼻マニアがごく少
ないのを残念に思います。会員に

は女性も多数参加されてモデルに
なっていたければ嬉しいと思ひ
ます。投稿は必ず致します。同好
の男性女性よ、こぞって会に参加
して下さい。

(横浜市・斉藤香根雄)

〇

よくもまあ、次から次へとモデ
ル志願者が出て来るものだ、あ
きれるやら嬉しいやら、とに角S
Mファンにはありがたい事です。
若い女性を緊縛してSMプレイに
浸る文章は、塚原鉄三様、辻村隆
様はじめ山本一章様ETC。特に
鈴木千鶴子さんなんかのヌード縛
りは、たまらない魅力で、踊りで
きたえた肢体を眺めた私のS性は
思わず身ぶるいさえ覚えたもので
す。聞けば交通事故で入院中とか
少しも早く直られて再び誌上に、
あの魅力的な緊縛姿を晒して下
さい。私は、ねっからのSファン
の独身の男性。オナペットの存在
の貴誌の各モデル嬢には他人でな
いような親近感をおぼえます。毎
月二、三冊のSM雑誌を求めます
が、貴誌だけは内容も見ずになん
か、買います。内容がすばらしく充実
しているのとローカルカラーがあ
るからです。東京から出ているの
は皆同じような内容なので、その

中でよかったものを一、二冊買うことにしています。私は東京に住んでいるので、大阪発行の貴誌に特に興味を持っています。一層の発展を祈っています。

(東京都・川井和文)

○ 四月号で「私の花電車」を書かれた大林小夜子さん。貴女は佐野みさ子さんの告白を読まれて、あの文章を書かれたそうですが、五月号では、長谷田亀治さんが「北欧のポルノより見たSM随想」の中で、奥さまを飼育されて、花電車ショーの珍芸を撮影された話のっています。みんな、誰にも話したがりないですが、世の中にはこんな家庭的なショーをしている人が案外多いのではないのでしょうか。私も、主人がそんなことが好きなので数年前から、ひそかに訓練させられて、今ではいろんな珍芸プレイが出来るといなりまし。少し上達してくると、主人以外の人にも見せたくなり、主人の悪友の某郵便局長と会社の顧問弁護士のお二人にお見せしたこともあります。大林小夜子様は、どこにお住居が存じませんが、お近くでしたら、綱引きなんか出来たら面白いですわね。皆様の文章を拝

見して、私もこれから、もう少し仕込み直して頂こうかと思っています。

(敦賀市・瀬川睦子)

○ 私はMの性向を持っている男性です。奇クは毎号たのしみに愛読しております。私は女性のMの文章や写真でも、それを自分に置き換えて、自分がその女になったつもりで楽しんでいきます。でも女装したり又女性として取扱われることはイヤです。それで、毎月誌上を飾っておられる千葉青鬼先生の「大噴火」を愛読していますが、あのストーリーは全く素晴らしいです。ああいった構想で、妖艶な女性に男性が責められ私刑にかけられるのでしたら、本当に素晴らしいと思います。そうしたテーマのM小説を是非お願いします。

(和歌山市・根来山人)

○ 奇ク、ますますの充実、まことに満足しております。なんととても奇クの良さは、その読者に密着した真面目にあるといつてよくリアルなりポートや誌友の告白、読者投稿など、いきいきとした読物が多く迫力があって結構です。身近な気のおけないところが自分の雑誌のようで、奇クの右に出る

☆OLとなった美女の悦虐を探求する

カラー・プリントの部

女子大生の時に、奇クの緊縛モデルを志して、その華麗な告白の文章と共に、優美きわまりない緊縛の姿態を誌上に晒して、多くのフアンを獲得した前田真知子嬢は、大学を卒業してOLとなった最近、更に一層成熟度を加え、艶麗さを増してききました。

胡坐縛りで悶える

真知子嬢の全裸の緊縛肢体を、総天然色のカラーフォトによって、フアンの方々のコレクションの一端に加えて頂くため撮影しました。

操り責めに呻めく

前田真知子 三枚一組 略号八〇〇〇円
あからさまに、さらけ出された

SM誌はありません。出たり消えたりすることの多い雑誌界ですが

どうか益々の御発展と絶対消え去らぬよう心から祈ります。奇クは私の人生の活力源として毎号楽しく欠かさず拝見しています。特に中年になった私の性生活には欠

悦虐の裸身を晒す

裸身の最も鋭敏な個所に、執拗な触手が襲いかかれば美女は忽ちにして全裸の肢体をのけぞらす。

成熟した女体の謎

前田真知子 三枚一組 略号八〇〇〇円
ヌメヌメとした臀部の肌の女臭を、ふんだんにふりまきながら縛られた美女のマゾの謎は、その色っぽい肢体の中に充滿している。

明眸を汚す縄目

前田真知子 三枚一組 略号八〇〇〇円
澄んだ明るい眸でじっと、こちらを眺める美女のどこに、こんな妖しい悦虐の魔物を秘めているのかとムゴイ縄目を見て考える。

くべからざるものとして、大いに参考に供しております。毎月の発行を少年時代に少年倶楽部を待ったと同じ気持で、待っています。小生の永年の願いはSMプレイを一度やりたいことです。どなたかそうしたプレイ希望の女性の方、

お便り下さい。

(東京都・北川吟生)

○

奇ク愛読者の皆さま、ごきげん如何ですか。お伺いします。ごぶさたしました。私南加津子です。相変わらず奇クは毎月愛読いたしておりますが加津子の身の上は大分変わりました。あれから一人の男性とお知り合いになり、今、妊娠しております。でも私のヘンな性格は今でも少しも変わっていません。TVなどで、若い女の人が暴漢におそわれるシーンを見るとすごく興奮します。身体ががたがたふるえるのが自分でもわかるくらいです。彼にも私をおそってくれとセックスの最中に頼みます。最初の頃は、今、そんなことをしなくても、いい顔をしませんでしたが此の頃では熱心にやってくれます。私がそうすると興奮するのがわかってきたらしいのです。私はとてもエッチな女の子です。あとで彼は、その時こうするなどと、私のハレンチな様子をいいますが、そんな時は、とても恥ずかしくて、平静なときに、そんなことを言われるのは、とても嫌なのです。それでいて、いつもいじめられたり、おそわれたりすること

を夢みています。私って本当にヘンな女の子でしょう。縛られるのでしたら、どんなにきつくでも縛られて責められてみたいと思ってます。そんなことを考えるだけでも楽しいのです。そうされてみたいと、いつも思っています。普通のセックスだけだったら、とても満足できないのです。ヘンな女の子でしょう。お腹は一日と大きくなくなってきています。どのくらい大きくなるものやら、自分でも不思議に思っております。今はダメですが、身一つになりましたらモデルになっても縛っていたきたいと願っております。今は彼が出来て、たくさんお便りをいただいた、お友達にご無沙汰してしまっています。誌上でお詫び致します。

(西宮市・南加津子)

○

先日の奇譚クラブで、おまえの寄稿を読み便りを出した次第。文面より察し、おまえの心がけは大へん立派なのだが、少々私のサディスチンとしての素因を甘くみているのじゃないかしら。私がおまえに心配するのは「死ぬほど苦しい目」に合うかもしれない私のプレイについてゆけれるかどうかという点よ。詳しいことは省くけど

五十数キロある私の身体を肩車しての兎跳びと厳しい足蹴など、おまえの想像以上のものがあると思ふんだけど。おまえの体格はなかなか立派だけど、体さえよければ奴隷になれるとは限らない。顔も知らないおまえを安易に信用できないというのが、私の本心なの。でも何カ月かの間接的な考察で、おまえの性格が奴隷として適格だとわかれれば、おまえのMの欲求を百二十%充たしてやるわ。今の私は、もう我慢できぬほどS度が昂っているの。奴隷の顔を股で挟み思っきり臭いをかがせ、舐めさせ性液や小便を飲ませてやりたいという願いも日ごとに増しているのよ。私がまず第一に、おまえへ与える奴隷としての仕事は待つことのみね。おまえが奴隷としての身分をわきまえれば、いつか、きつと私と会う日が来るだろう。尚、おまえが、この文を読んだら早速奇ク編集部へ私宛の返事を出しなさい。次の私の手紙は奇ク次号の通信欄のおまえの文次第ということになるわけよ。

(大阪市・高橋千寿代)

○

五月号に投稿された南政子さんへ。自分は貴女の投稿を読んで自

分と同じように獣性に興味のあると言うより好きな方がいるとは、しかも異性の間でいる事を知ってこれはぜひともお会いしなければ気がおさまらないと思ひペンを取りました。しかし、今までの奇クの読通欄を見ても、女性の方は用心して、なかなか良い返事をくれないそうですね。実を言いますと僕は一介の大学生で、政子さんの知りたがっておられた獣性については、かなりの知識も経験を持っています。かなりの知識も経験を持っています。ぜひ、誌上でお返事お寄せ下さい。

(大阪府高槻市・太田五郎)

○

神戸市の小杉千恵様へ。私は三十才になる独身の男性です。奇クを毎月愛読しております。いつも誌上に寄せられる貴女様の記事を読み感激しております。一月号の読通では浣腸オナニーのことを書いておられますが勇敢に実行に移される勇氣には感心致しました。私はSMに大変興味は持っておりますが、ただ空想の世界にとどまらず、一度も体験がございません。貴女様の十二月号に出ていたあのふくよかな肉体に縄を打ち、浣腸を施して、お小水を流さし、恥かしさ、苦しさ涙を流して耐える

模様を眺めたいです。一度、この様なプレイを貴女様としてみたいと思います。

(京都市・草川幸一)

小生、学生時代には写真部のキヤプテンをしており、最近国産乗用車中、もっともマニヤ的(車の)と云われるものを乗り回して居ります。道具立てには事欠かないのですが、御多分にもれずパトナーがありません。一つには若い頃、ソドムの樂園にふみ迷ったせいか、女心と云うものを今一つしかねるせいかもしれません。其れかあらぬか、とりためた裸童の写真は、とうとう二千枚を超えました。特にモデルとして頼むのではなく、文字通りカメラハンティングで、夏の水辺で行き合った少年の以前ならば輝美(最近では、そのうもならないので、話の合った子には持参の輝美をしめさせて)を撮影したものです。貴誌を愛読して以来、自分こそは、と、多種のシチュエーションやポーズを設定したり、あちこちロケハンをしたりして見るものの、所詮モデルがなければ妄想の域を出ず、世の常のS的男子の一人でしかありません。貴誌向きではないかもしれませんが

作六鬼団



決定版

● 瞠目のサティズム小説総集篇遂に成る!!

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サティズム小説は、現在尚「奇譚クラブ」誌上に連載中でありましたが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発行となつた訳であります。八十年の集積を味読して下さい。

● 番号「花決定版」● 定価一、〇〇〇円(送200円)●

――内容主要見出し一覽――

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|---|-------|---|
| 第一章 | 発 | 第二章 | 恐 | 第三章 | 美 | 第四章 | 華 | 第五章 | 救 | 第六章 | 救 | 第七章 | 狼 | 第八章 | 魔 | 第九章 | 怖 | 第十章 | 弄 | 第十一章 | 淫 | 第十二章 | 美 | 第十三章 | 色 | 第十四章 | 美 | 第十五章 | 落 | 第十六章 | 密 | 第十七章 | 脱 | 第十八章 | 華 | 第十九章 | 地 | 第二十章 | 翻 | 第二十一章 | 一 |
| 第一章 | 発 | 第二章 | 恐 | 第三章 | 美 | 第四章 | 華 | 第五章 | 救 | 第六章 | 救 | 第七章 | 狼 | 第八章 | 魔 | 第九章 | 怖 | 第十章 | 弄 | 第十一章 | 淫 | 第十二章 | 美 | 第十三章 | 色 | 第十四章 | 美 | 第十五章 | 落 | 第十六章 | 密 | 第十七章 | 脱 | 第十八章 | 華 | 第十九章 | 地 | 第二十章 | 翻 | 第二十一章 | 一 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|
| 第二十二章 | 身 | 第二十三章 | 涙 | 第二十四章 | 連 | 第二十五章 | 奇 | 第二十六章 | 飼 | 第二十七章 | 屈 | 第二十八章 | 屈 | 第二十九章 | 逃 | 第三十章 | 惡 | 第三十一章 | 淫 | 第三十二章 | 淫 | 第三十三章 | 汚 | 第三十四章 | 華 | 第三十五章 | 華 | 第三十六章 | 對 | 第三十七章 | あ | 第三十八章 | 羞 | 第三十九章 | 清 | 第四十章 | 人 | 第四十一章 | 深 | 第四十二章 | 小 | 第四十三章 | 交 | 第四十四章 | 交 |
| 第二十二章 | 身 | 第二十三章 | 涙 | 第二十四章 | 連 | 第二十五章 | 奇 | 第二十六章 | 飼 | 第二十七章 | 屈 | 第二十八章 | 屈 | 第二十九章 | 逃 | 第三十章 | 惡 | 第三十一章 | 淫 | 第三十二章 | 淫 | 第三十三章 | 汚 | 第三十四章 | 華 | 第三十五章 | 華 | 第三十六章 | 對 | 第三十七章 | あ | 第三十八章 | 羞 | 第三十九章 | 清 | 第四十章 | 人 | 第四十一章 | 深 | 第四十二章 | 小 | 第四十三章 | 交 | 第四十四章 | 交 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|
| 第四十四章 | 生 | 第四十五章 | 激 | 第四十六章 | 低 | 第四十七章 | 愛 | 第四十八章 | 羞 | 第四十九章 | 惡 | 第五十章 | 珍 | 第五十一章 | 淫 | 第五十二章 | 淫 | 第五十三章 | 華 | 第五十四章 | 野 | 第五十五章 | ズ | 第五十六章 | 屈 | 第五十七章 | 惡 | 第五十八章 | 文 | 第五十九章 | 勝 | 第六十章 | 中 | 第六十一章 | 緊 | 第六十二章 | 新 | 第六十三章 | 苦 | 第六十四章 | 恐 | 第六十五章 | 結 | 第六十六章 | 甘 | 第六十七章 | あ | 第六十八章 | ニ | 第六十九章 | 肉 | 第七十章 | 熱 | 第七十一章 | 女 | 第七十二章 | 優 | 第七十三章 | 美 | 第七十四章 | 美 |
| 第四十四章 | 生 | 第四十五章 | 激 | 第四十六章 | 低 | 第四十七章 | 愛 | 第四十八章 | 羞 | 第四十九章 | 惡 | 第五十章 | 珍 | 第五十一章 | 淫 | 第五十二章 | 淫 | 第五十三章 | 華 | 第五十四章 | 野 | 第五十五章 | ズ | 第五十六章 | 屈 | 第五十七章 | 惡 | 第五十八章 | 文 | 第五十九章 | 勝 | 第六十章 | 中 | 第六十一章 | 緊 | 第六十二章 | 新 | 第六十三章 | 苦 | 第六十四章 | 恐 | 第六十五章 | 結 | 第六十六章 | 甘 | 第六十七章 | あ | 第六十八章 | ニ | 第六十九章 | 肉 | 第七十章 | 熱 | 第七十一章 | 女 | 第七十二章 | 優 | 第七十三章 | 美 | 第七十四章 | 美 |

お申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号。T5558 暁出版株式会社宛

ませんが、手許に余分にあります近作を同封しますので御笑覧下さい。(東京都・谷田君夫)

六月号の「幻の少女」は流石、辻村氏のペン未だおとろえずで女子大生をスカトロから浣腸迄、実にたくみなタッチ、しかも彼女の

二二二頁の四つ這いのグツと盛り上がった臀部、小便の排泄場面、すべての写真が顔はうつらないが二三〇頁一段目六行で辻村氏も描写しているように、「丸々として豊かな臀部が眩しく……」と誠にいちじく浣腸では勿体ないネチツとした描写と辻村氏ならではの

胆にして新鮮なカメラ角度は正に数多くあるSM誌の写真の中でもピカ一であろう。できたら彼女の臀のかたち、イメージからみると二百CC浣腸器を丸筒のままのみこみそうな豊かな尻をしており是非二百CC浣腸器だけで徹底的に浣腸で責めて欲しい。しかも浣腸

後はアヌス栓で暫く排泄を辛抱させ、「ヒイヒイ」泣き始めて排泄を許すという具合にもって欲しい。なんといつても浣腸ルポからペンをおりた辻村氏で、辻村ファンをガツカリさせたが、せめてこういったかたちで、辻村氏の浣腸文がみられる事は吾々として非常に喜ばしい。つらつら思うに辻村氏は、矢張り「奇ク」の辻村氏ではなからうか。辻村氏の健筆を更に期待したい。

(東京都千代田区・浣腸キチ生)

○ 瞳浩太郎様。あなたと御連絡をとり、私と妻の愛にもうひとつ大きな高まりを得たい、と思いつつ日頃の多忙に追われて、はや二カ月余りたちました。あなたの「恋の処方箋」による内容に共感をおぼえるものです。妻を愛奴としてそれ故に、よりみずみずしい情感を得る生活を私は知っています。妻も愛奴のよろこびを経験して居ります。しかし今まで、その多くは「理解ある夫婦」としての私達に対してカップルでない男性であり、女性であり私達と同じ様な夫婦の方との御交友はありません。あなたと同様、妻を愛して二十年たらず、多少社会的なものもあり

生活も安定して居ります。ただ私には軍人の経歴はないので妻も私も、あなたより若い普通の男と女です。あなたが神戸にお住居がある様ですが私達もそうです。これが私達の何かのチャンスであるかもしれません。自営でありますから日時は自由です。御返信をお願いします。

(神戸・瞳次郎)

○ 小生本年二十八才になります奇クファンであります。職業は学校の教師であります。妻と娘一人の三大家族です。奇ク愛読して早や十年になりますが、その良心的というか、SM本来の姿を常に失わない姿は、いつも感謝しております。今日始めて筆を取らせて頂いた訳は、時々奇クに登場致しますハロマン派生様Vに文通させて頂けたら本当に幸いかと思ひ、ここにお願ひ申しあげた次第です。ハロマン派生様Vのファンになったのは、去る、昭和46年11月号の「マゾヒスチック・レディ」石原道代さんのルポを発表されて以来でありまして、私は自称ロマン派と自称しておる関係上、ハロマン派先生Vと尊敬致しております。私のロマン派等とえらぶてはみ

ありませんが、それだけに夢は止まることなく、果てしなく拡がる楽しみに充実した日々を送らせて頂いております。これも奇クのお蔭であると感じ感謝すると共に御発展を心から、お祈り申し上げます。余談ではありますが本当に奇クを理解するには最低五年以上の才月が必要であり、又凡べてにわたって苦悩多き人でした、その本意は解せないのであると今つくづく思っております。小生、とりえはありませんが真面目さと誠実さとは人には負けないと自負しております。ロマン派生様からのお便り頂ければ幸いです。

(東京都・保田忠)

○ よい気候になってきました。私は今春、短大を卒業して或銀行に勤務している一女性です。俄雨にあい、雨宿りのつもりで入った書店で、ふと貴誌を手にして以来、妙にひかれるものを感じ、それから、ずっと拝見しています。女性の方も作品を書かれたり、読者通信に時おり出したりしていられますので、私も勇気をだしてペンをもちました。最近は人生雑誌なんか割合売れているようですが、貴誌の内容の真面目さに、一番心

がひかれました。私の心の底にも共感される何物かがあると思ひ愛読しています。五月号では中河恵子さまの「Mに、耽溺した頃のこと」を心うたれて読みました。自分と少し境遇が似ているからかもしれませぬ。自分のしてみたいことを、この恵子さんが勇敢にやっを、心ではそう願ひながら実際は平凡に生活している私です。奇クサロンの沢山の記事も私には大変参考になりました。「私の浣腸結婚観」を書かれた竹迫誠也さんの御意見に、これから結婚しようと考えている私としては興味がありました。それから貴誌にお願いしたいことは、私達が手にし易いように、口絵は余り多くなくて一枚か二枚位にしておいて、もっと文章の方を多くしてほしいと思ひます。早坂信治さんが四月号に書かれていました「愛妻への特訓プレイ」なんか夫婦愛が最高にまで高められていて、非常に良かったと思ひます。それから、大塚啓子さんの「実験動物としての私」こんな文章を自分も書いてみたいと思ひました。これからも、どうか充実した貴誌になりますことを心から祈っております。

奇譚クラブ臨時増刊
〓女体緊縛写真集〓 定價一〇〇〇円(送50円)



天然色写真

柔肌に喰い込む麻縄 前田真知子
首縄横臥二態 前田真知子
典型的後手縛り 前田真知子
自由な肢のもたえ 前田真知子
麻縄と統肌の明暗 前田真知子
厳しい縄目を味う 前田真知子
準備態勢OK 前田真知子
股間縛りの表情 前田真知子

女体緊縛の華

金髪碧眼の美女 シーラ・ケニー
答打ちの態勢 関谷富子
鞭撻の痛さ 関谷富子
流腸の痛さ 関谷富子
亀甲縛りの美態 長井葉津子
麻縄と白肌の対照 左近麻里子
陽を浴びた柔肌 中河恵子
狼ぐつわに喘ぐ 中河恵子
緊縛裸身の露り 中河恵子
責め疲れの放心 中河恵子
痛打の末の悦 中河恵子
沖縄美人の緊縛 関谷富子
剣玉子の縛り 佐々木真弓
狂変する裸女 川路好美
責めくたびれて 佐々木真弓
紅毛碧眼の白人を責める シーラ・ケニー
海老責の狂態 川路好美
ボリウムに挑戦 関谷富子
鞭打の下に挑戦 関谷富子
祭壇の人身御供 渡部好美
稚妻は縄を知りぬ 金原奈加子
開股の正面と背面 中河恵子
華麗な開股責め 中河恵子
イルリガートルを前に 長井葉津子
非情な責めの終末 長井葉津子
両手吊りの晒し 中河恵子
柱縛りの完了 川路好美
処女縛りとまどう 三浦恵子
麻縄に身をゆだね 中河恵子
盗視するSMの目 佐々木真弓

緊縛女体の光と影

両手挙げ縛責め 川路好美
柱縛りに浮く 長井葉津子
後手縛りに苦しむ 中河恵子
どこでも責めて 佐々木真弓
鞭の法悦境 関谷富子
ムチが痛い、許して 関谷富子
柱を挟んだ連縛 関谷富子
花と蛇の静子です 中河恵子
針責めをして頂戴 渡部好美
二つ折りの女体 中河恵子
狼ぐつわの哀飲 中河恵子
日本式縛りの白人 関谷富子
マソの女王に答 関谷富子
柱縛りに恥らう 金原奈加子
夫婦プレイの慈味 花坂道子
長襦袢の艶姿 渡部好美
豊満ボインを誇る 愛川悦子
美女今縛られる 関谷富子
折檻にも汚れず 前田真知子
責めてみたい碧眼の女 佐々木真弓
日本式高小手縛 シーラ・ケニー
猫の目のような女 綿川文代
足吊りの風景 中河恵子
亀甲縛りの媚態 中河恵子
M女二輪の花 渡部好美
奇責に乱れた黒髪 中河恵子
開股縛りの幻想 中河恵子
鏡の前での放恣 前田真知子
愉悅のひととき 左近麻里子
ハリツケ晒し 左近麻里子

これから、どうするの？
美しき吊り 長井葉津子
苦痛か悦楽か 前田真知子
一筋の縄の魔術 関谷富子
逆エビ縛りに入る 三浦恵子
愛撫の責め 中河恵子
黒縄と白肌 前田真知子
身動きできぬ境地 中河恵子
ボリウムを縛る 中河恵子
浮上した女体 中河恵子
麗しき背面 中河恵子
汚辱の縄 金原奈加子
高小手縛り 佐々木真弓
責めの陶酔境 関谷富子
失神したマソ女 関谷富子
前手縛り悦 関谷富子
柱の彼方の天国 中河恵子
荒縄の海老責 三浦恵子
美と縛の女神 前田真知子
はげしい狼狽 長井葉津子
可憐な置物 長井葉津子
ながし目の天使 佐々木真弓
酒の肴になる 川路好美
妖蛇の洗礼 関谷富子
奔弄されるままに 前田真知子
海老縛りの妙味 川路好美
柱につなかれた女 長井葉津子
痛さをこらえる異国の女 前田真知子
責の果の諦観 シーラ・ケニー
痛打の一瞬 関谷富子
ホステス裸人生 佐々木真弓

カメラ・ハント楽我記 辻村 隆
女体緊縛の醍醐味を語る 塚本 鉄三

(東京都文京区・溝口英子)

小生、県庁所在地に住む一地方公務員で本年43才になる奇クの愛読者です。SMプレイには非常な関心は持っておりますが、他の女性とのプレイの経験は一回もなく只妻に対してアヌスを中心とした

羞恥責め、バイブ責め、流腸のあとの排泄責めなどを軽く試みた程度です。六月号で、塚本鉄三氏が「足の裏の温かい女」で深田菊子嬢を股間縛りの散歩に連れ出された記事がのっていましたが、全く素晴らしいです。私も是非こんな責め方を妻にやってみたいと兼々思

っていた矢先ですので嬉しく拝見しました。それにバイブを使っての街頭歩きとは本当に大胆な事をしたものです。我々SMマニアの夫婦者のために、これから、こ

うした変わったアイデアを登場させて下さい。最近の塚本鉄三氏の活躍には目をみはるものがあり

ます。辻村氏のハントの穴埋めどころか三倍ぐらいも迫力があり特に緊縛写真の見事さは抜群です。カメラとペンは益々冴えてきた感があり毎月が楽しみです。幸いにして塚本氏は辻村氏と違って体力には自信があまりのようですので三月号から五月号までの三月間、西条紀代嬢に対して連続で見せたような執念を、これからの誌上に咲かせて下さい。

(前橋市・知足審二)

芦屋市の高千穂順子様、六月号の読者通信読ませていただきまし

た。あなたのS性は多分に精神的なものかと判断致します。文章よりそのように感じ取れます。私も奇クを愛読し始めてまだ三カ月足らず、自分自身、精神的なM性だと最近つくづく思わずにはいられ

せん。勿論この世界を知ってから日の浅い私はプレイの経験もなく日に一度奇クを愛読する事で、現在自分の夢とM性をみだして

おります。私は普通の正常な交りでも十分満足はあります。しかし、やはりふと割り切れない気持ちを感じざるを得ない今日この頃です。このような私です。で強度なS性の女性との交際にはまだまだついて

いけませんし、また満足させる事は不能です。順子様が精神的なS性の方と思われますのでペンを取ったしだいです。しかし、やがて私も強いM性の人間に変わってゆくでしょう。それが順子さまによってなどと今空想しております。プレイなど何一つ経験のない私ですが順子さまのS性を満足させるべく努力致します。又、順子さまのいいつけ通り、ついていけるよう教育お願い致します。

(四日市市・東町一郎)

○ 最近の御誌の浣腸記事の充実ぶりはマニヤとして誠に喜ばしく思います。殊に三月号の藤野陽子さんの告白や五月号の望月百合子さんの記事など読んで、ゾクゾクするような気がします。写真の方も三月号の佐野みさ子さんのもの、四月号のグラビアの前田真知子さんのもの、五月号の西条紀代さんのものなど、以前でしたら、中々誌上に載せられないようなものが載るようになって、うれしく思います。殊に西条紀代さんの浣腸されているときの可愛いらしい表情は、見ていても何ともいえない、いとおしさを、おぼえます。私のようにSMの気は、あまりなく、

ただ浣腸やアヌスのみのマニヤにとっては、こういう記事や写真が素晴らしい、これも奇ク独得のものだと思います。浣腸の写真では昨年秋の鈴木千鶴子さんや、鬼頭達世さんのように、浣腸器の先がアヌスに入っているところを、お尻の後方からアップで写したのが一番見ごたえのある角度ではないでしょうか。この二人のものは、惜しくも白ぬきのカットの部分が大きく、残念でした。その点、五月号の一〇八頁や一一三頁の写真はカットも小さく、お尻の間も見えてよかったと思います。現在では、前の十センチ平方が隠れていればいいそうですから、カメラのアングルをギリギリまで撮って、大胆なポーズのものを、どしどし載せて下さい。なお、分譲写真の方でしたら一層、思いきったポーズがとれるはずですから、そのようなものを発売して下さい。

(山田悠介)

○ 小生、奇クを愛読して早や十年近くになります。いつも奇クは、小生には手離せない貴重な宝物です。奇クを毎月、購入して先ず目を通すページは、何といっても夫婦プレイのところですね。そのとき

の気持は、色々心と心を、かりたてますね。それというのも、今月号は、どんな夫婦が登場するか、興味がいって、こうふんします。がねがね小生は独身女性よりも結婚している女性の方が好きです。それは小生一人の考えでしょうか結婚している女性は、身体つきからいっても、たとえば乳房、豊満なお尻。このような熟した身体は独身の人にはないと思います。小生は人妻の豊満なお尻が大好きでたまりません。特に町など歩いていて一三十才―四十七、八才ぐらいの中年の、はちきれんばかりのお尻を、みかけると、思わずびついてしまいます。同時に、そういうお尻を責めたり、愛撫したり、小生のお尻専門の責めを、やってみないと、いつも思っている尻願望の男です。どうか奇ク愛読者の奥様、また御夫婦の方、ぜひ大きいお尻を小生にお借し下さい。絶対に御迷惑は、おかけしません。お尻責めには多少、経験があります。

(東京都・岩尾浩生)

○ 五月号の大阪旭区の高橋千寿代さんに一言。千寿代さんとやら、一つ、このぼくと勝負をしません

か。あなたは水泳と合気道で体を鍛えたらしく、その足で思いきり男の顔を蹴とばしたいらしいが、よくから言わせれば、逆にあなたを、よくのキックボクシングと柔道(四段)空手で鍛えた、この足で蹴とばして、M性を目覚めさせてやりたいと思っています。あなたと武道で勝負をし、もし、ぼくが負けたなら、奴隷となりましょう。しかし、もしぼくが勝ったなら、そのとき奴隷となるのは、あなたです。どうです、この挑戦、受けますか? 本来、女性の心深く宿るM性に気づいていない、あなたをSの女王から、いつきにMの奴隷へと、たたきおとしてやりたく思い、ペンをとりました。挑戦を受けるのでしたら、誌上にてお返事下さい。心より、お待ち申しております。

(東京都・斉藤美範)

○ 矢部雅三様へ。当方も貴方様と同年の同好者です。そして永年にわたり本誌を心より愛し、その願望を、まじめにINGするものです。もし御諒解いただけたら奥様とのプレイ、いかなるプレイの実技をも、こなせます。小肥り容姿のバランスは関係なく、貞操

次号(八月号)は六月二十二日に発売いたします

帯プレイなどSMプレイへの美徳を保存されましたら如何ですか。信頼と末長い交友を求め合います。よう。渡辺様との直接の交際は、ございませんが、お話は存じ上げております。東京までは当方より参ります。よきプレイを、お祈りします。

(大阪市東住吉区・山本浩)

○

ああ遂に待望の鼻マニア会結成の提唱が誌上に発表されました。真鍋氏、久保氏、いずれにしても淋しい極みです。今まで本誌上の鼻責め記事は、まことに微々たるもので、我々鼻マニアは物足りぬこと、おびただしく残念に思っていました。今回の壮挙が具体化して、その道の方々の会が結束されれば、ぜひ参加をさせていただきたいと思ひます。そして皆様のフット・ハント報告を楽しむとともに、小生も過去二十年間、対象女性二十数人の成果も諸兄の御高覧に供して弄鼻天国の陶醉にひたりたいと思ひます。ハミリなどの観賞会も熱望いたします。なにしろ対象とする女性の美貌を、ある程

度まで前提条件とするだけに、皆さんも弄鼻のフォト獲得には御苦心なさったことでしょう。今度はバックに編集部がついていられれば、絹川、前田、大塚諸嬢の御協力も得られるかも……と、胸のはずむ思いです。では、鼻マニアの会結成の一日も早からんことを祈り、本誌の御支援をお願いする次第です。

(東京都・楠墨堤)

○

高橋千寿代女王様。私は今年で二十七才になる、女性の奴隷となることを希望している者です。最近、男奴隷を求める女王様の便りが少なく、がっかりしていた折千寿代女王様のお便りを拝見いたし、ぜひ千寿代女王様の奴隷にと思ひ、お便りしました。私が自分のM性に気がついてより数年になります。この間、女王様には、めぐり合うことができず、何回かもう忘れようと努めてみましたが女王様にあこがれる気持は、つるばかりで、やりきれない毎日を送ってまいりました。千寿代女王様は奴隷の調教には、すべて女王様の大切なお身体を使ってなさる

とのこと。私のような奴隷にとって、こんなありがたいことはなにもと思つています。私は身長百六十、体重五十二キロと小柄ですが体力には自信があるつもりです。女王様のお気に召すまで容赦なく責めて下さい。そして私が女王様の奴隷として合格した時には、女王様の人間トイレットペーパー、人間便器の奉仕を許して下さい。奴隷となり女王様の排泄物をいただくことは、私のささやかな夢なのです。私も、この夢をかなえてもらえるよう、千寿代女王様のために一生懸命に奉仕いたす覚悟でいます。

(東京都・石田一郎)

○

千葉県の水島並子様。私は二十七才のS男性です。同じ千葉に貴女のようなM女性がおられることを知り、大変うれしく思っています。貴女が奇巧のモデルを希望しておられるのは知っていますが、できれば私のプレイメイトになって下さい。私の好きな責めは縛り乳房責め、バイブ責め、剃毛、浣腸責め、その他の羞恥責めです。お気に召しましたら、お便り下さい。

(千葉市・吉野秀夫)

東京都の山下悠子さん。大阪の

北田様の奴隷に志願されるのとことですが、現在はどうのような状況に置かれているのでしょうか。すでに、その奴隷の生活にお入りになつていらっしゃるのでしょうか。私の心の中は、とても動揺して、こうしてじつと部屋の中に坐っておられない気持です。何かとても大切な宝を、私の求める理想の人を奪われてしまったような心境です。心配な気持、焦燥感、無念さでいっぱい。私は、この一年、非常に仕事が多忙で、毎月、奇巧は購入してありますが、通信欄は見る余裕がありませんでした。やっと最近余裕ができましたので詳細を読み貴女のお便りの中に御希望があることを知りましたが、少し時期を失した感があり、残念に思っています。私は貴女のような方を長年待ち望んでいました。私は、まだSM的な緊縛の経験がありませんが、私の身体の中に流れる燃えるような抑えきれない高まりと情熱で、貴女の御希望をかなえて上げることができると思っています。どうか私にも、一生に一度の機会を、与えて下さるよう、お願いいたします。私は二十九才、独身で少し疲れていますが、身心とともに健在な男性です。きっと貴女の心を

燃焼させ、奴隷制度の悲しみも、
みじめさも、喜びも知ってもらえ
ると思います。

(東京都・芥川生)

奇クの二月号と三月号を楽しく
拝見いたしました。特に山口とき
子さんの「とき子の自縛教室」が
女性の告白文として大変、興味を
そそられました。いままでも、女
性が他人に縛られる悦虐告白も多
くありましたが、とき子さんのよ
うに完全に自縛をしている告白は
初めてだと思います。とき子さん

の勇氣に感謝しています。特に、
とき子さん自身のお写真は真実味
があつて、大変よかったと思いま
す。女の方の全裸写真は、よくあ
りますが、とき子さんのように洋
服姿の縛り写真は、自然で本当に
親しめます。告白文と写真とで、
とき子さんが自縛されてもだえて
いる姿が、目に浮かび、ぜひ、お
逢いしたくなりました。とき子さ
んは私と同年輩のようですが、女
同志でおつき合いしたいと思いま
す。私は水商売の女ですので、と
き子さんのような堅いお仕事の人

とはおつき合いできないかも知れ
ませんけど、私もとき子さんの告
白文を読みながら「自縛」の練習
をしています。そして、とき子さ
んに教わりながら、もっともっと
じょうずになりたいと思います。
ちゃんとした自縛が出来るようにな
って、とき子さんに「自縛くら
べ」を申し込めたらどんなに楽し
いでしょう。とき子さんの告白文
をお待ちしています。

(東京都・山田雄子)

小生は能登半島に住む三十二才

になる一青年です。小生は奇クを
愛読して八年になり、心ひそかに
楽しんでおります。田舎のせいも
あり未だにM女性との交際はあり
ません。一度、交際していた女性
を無理に縛り上げましたとたん、
別かれる羽目になり、以後M女性
との結婚を望み、未だに一人でお
ります。四月号の伊田恭子さん、
ぜひ交際していただきたく存じま
す。私はM女性と一生、過ごせたら、
どんなに幸せかと思ひます。
御返事お待ちしております。

(石川県・宇出津左渡義)

☆奇譚クラブ既刊号在庫一覧表☆

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通
り在庫しておりますので、お申込
み次第、折返し急送致します。
○送料は総べて当社にて負担致し
ますから、誌代のみ前金にてお送
り願います。六冊以上まとめて御
注文の際は、一括して、△小包▽
にて発送申し上げます。

☆既刊雑誌在庫案内☆

| | |
|-----------|------------|
| 昭和41年7月号 | (送共三〇〇〇〇円) |
| 昭和41年8月号 | (送共三〇〇〇〇円) |
| 昭和41年10月号 | (送共三〇〇〇〇円) |
| 昭和41年11月号 | (送共三〇〇〇〇円) |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|--|
| 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|--|

△編集後記

☆衣替えの季節（ナンテエのは古い、制服替えとでも云え！）にお届けします本号（オレは書店まで買いに行くんだ！）でも、本文中にズラリと並べ得ました手記・告白・体験記（小説を挟んで……と正確に云え！）を有難く（寄稿者に最敬礼！）思いますと共に、風呂場のナニヤラ（知らぬなら書くナ！）でユウばかり（ふるーいシャレ！）の、さっぱりイクジのない当欄担当者（そうだ！）と致しましては、改めて、その果敢な実行力に舌を巻く思い（なにを今更！）が、するのであります。（おまえはどうでもいいんだ！）

☆SMという名のつく男女の愛戯（同性じゃあ名ナシかあ！）が、なし得べくしてなし難

い遊びで（なし得てるじゃないかよ！）あ
ることを知っています担当者（なんだ、おま
えのことか！）は、これらのプレイ享樂者諸
氏に対し、羨望を通り越して畏敬の念をすら
覚える（妬けると云え！）のであります。
☆と云いますのは、本誌にレポをお寄せ下さ
るプレイヤー各位が、SM両者共悦の絶対条
件を尊重され（アツタリまえだ！）て、あく
までも、一方的S行為（つまり暴力ってこと
だろ？）を戒めた“愛戯ワク”を堅持した
陶醉境を創り出しておられる（二人だけの世
界と云え！）ことは、万事に通じる一種の才
能（そう！ 但しおまえには無いぜ！）のよ
うな気がしまして、その実践力と共に、なし
得ない者（私と書けよ！）としては、正に畏
敬に価すると思う（事実だ！）からです。

〔懸賞原稿募集〕

△體驗、告白、手記▽

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけは、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千元以上の賞金を贈呈します。

△創作、小説、物語▽

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

発表作品に限ります。これら
 と思う作品は必ず誌上に取り
 上げます。腕試しの意味で奮
 って御投稿願います。採用篇
 には賞金十万円迄贈呈。

△感想、論評、批判▽

本誌に關連したものでした
ら話題の内容は問いません。
忌弾なき皆さまの御意見をお
待ちします。採用篇には二千
円以上の賞金を贈呈します。

△(映画、雑誌)通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞

單行本或はその他見聞などで
特に興味をお持ちになった事
項の通信をお待ちします。出

処は詳しく明記願います。採用篇には本誌三月分以上又は二千円以上の賞金贈呈。

◎御送付下さいました原稿は原則として返却の求めに応じ

ないことになっております故

◎本文記事中に各種の「懸賞原稿募集」を致しております故、御応募の方は項目を御明記の上御送稿下さい。

△讀者通信原稿▽

卷末の通信欄は読

ま方のための公共の広場として開放しています。御遠慮なくお寄せ下さい。

☆ 本誌御購読の栞 ☆

| | |
|---------|-----------|
| 一月分(1冊) | 四〇〇円△送共▽ |
| 三月分(3冊) | 一二〇〇円△送共▽ |
| 半年分(6冊) | 二四〇〇円△送共▽ |

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。ば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 四〇〇円

七月号

（第二十七卷第七号）
（通刊第三百五十五号）

昭和四十八年六月二十日
昭和四十八年七月一日
印刷
発行

印刷發行

編纂人 杉原 虹児
発行人 吉田 俊夫
印刷人 北村

郵便番号558

発行所 暁出版株式会社

△振替口座大阪四二七八三番
 (昭和三年四月二〇日 第三種郵便物認可)
 (昭和四年四月二一日
 国鉄大局特別扱承認雜誌第二一〇号)

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の検討、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に注意する各条例に指定されないうち、充分に注意して編集いたしておりますが、本来成人向として発行を企図しており、すなわち、関係上、十八才未満の方には絶対販売できませんよう、特にくれぐれもお願ひ申し上げます。